

# 奇譚クラス

◆ 新しい風俗文獻誌

# 5



成人向  
NO. 1

昭和四十六年四月二十日印刷 昭和四十六年五月一日発行 五月号(第二十五巻五月号)毎月一回(日発行) 昭和二十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十七年四月二十一日原紙大局特別紙承認第210号



奇譚クラブ 臨時増刊

〽女体緊縛写真集〽 定價一〇〇〇円(送30円)



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子  
首縄横臥二態 前田真知子  
典型的後手縛り 前田真知子  
自由な肢のもたえ 前田真知子  
麻縄と続肌の明暗 前田真知子  
厳しい縄目を味う 前田真知子  
準備態勢OK 前田真知子  
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シーラ・ケイ
答打ちの態勢	関谷富佐子
鞭撻の痛苦	関谷富佐子
洗腸責の序曲	長井葉津子
亀甲縛りの美態	左近麻里子
麻縄と白肌の対照	中河恵子
陽を浴びた柔肌	左近麻里子
猿ぐつわに喘ぐ	中河恵子
緊縛裸身の露り	中河恵子
責め疲れの放心	梨花悠恵子
没我の心境	中河恵子
痛打の末の悦	関谷富佐子
沖縄美人の緊縛	座間富明子
剃玉子の縛り	佐々木真弓
狂変する裸女	川路叢子
責めくたびれて	佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める	シーラ・ケイ
海老責の狂態	川路叢子
ボリウムの挑戦	座間富明子
鞭打の下に挑戦	関谷富佐子
祭壇の人身御供	渡部好美子
稚妻は縄を知りぬ	金原加奈子
開股の正面と背面	中河恵子
華麗な開股責め	中河恵子
イルリガートルを前に	長井葉津子
非情な責めの終末	長井葉津子
両手吊りの晒し	中河恵子
柱縛りの完了	川路叢子
処女縛りとまどう	三浦純子
麻縄に身をゆだね	中河恵子
盗視するSMの目	佐々木真弓

緊縛女体の光と影

編集部構成

両手挙げ棒責め	川路叢子
柱宙縛りに浮く	長井葉津子
後手吊りに苦しむ	中河恵子
どこでも責めて	佐々木真弓
鞭の法悦境	関谷富佐子
ムチが痛い、許して	関谷富佐子
柱を挟んだ連縛	関谷富佐子
花と蛇の静子です	中河恵子
針責めをして頂戴	渡部好美子
二つ折りの女体	長井葉津子
猿ぐつわの哀飲	中河恵子
日本式縛りの白人	シーラ・ケイ
マゾの女王に答	関谷富佐子
柱しばりの恥らう	金原加奈子
夫婦の淫姿	渡部好美子
長襦袢の艶	花坂道子
豊満ボインを誇る	愛川悦子
美女今縛られる	梨花悠恵子
受入態勢に充てる	関谷富佐子
折檻にも汚れず	前田真知子
責めてみたい碧眼の女	佐々木真弓
日本式高小手縛	シーラ・ケイ
猫の目のような女	絹川文代
足吊りの風景	中河恵子
亀甲縛りの媚態	中河恵子
M女二輪の花	渡部好美子
苛責に乱れた黒髪	中河恵子
開股縛りの幻想	中河恵子
鏡の前での放恣	前田真知子
愉悅のひととき	川路叢子
ハリツケ晒し	左近麻里子
これからの、どうするの?	長井葉津子
美しき吊り	前田真知子
苦痛か悦楽か	関谷富佐子
一筋の縄の魔術	中河恵子
逆エビ縛りに入る	三浦純子
愛撫の責め	渡部好美子
俯瞰撮影	前田真知子
黒縄と白肌	中河恵子
身動きできぬ境地	座間富明子
ボリウムを縛る	中河恵子
浮上した女体	中河恵子
麗しき背面	金原加奈子
汚辱の縄	佐々木真弓
高小手本縛り	川路叢子
責めの陶酔境	関谷富佐子
失神したマゾ女	関谷富佐子
前手縛りの悶	中河恵子
柱の彼方の天国	三浦純子
荒縄の海老責	前田真知子
美と縛の女神	梨花悠恵子
はげなれた猿轡	長井葉津子
可憐な置物	佐々木真弓
ながし目の天使	川路叢子
酒の肴になる	関谷富佐子
妖蛇の洗礼	前田真知子
奔弄されるままに	川路叢子
海老縛りの妙味	長井葉津子
柱につながれた女	前田真知子
痛さをこらえる異国の女	シーラ・ケイ
責の果の諦観	前田真知子
痛打の一瞬	関谷富佐子
ホステス裸人生	佐々木真弓

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆  
女体緊縛の醍醐味を語る 塚本 鉄三



# 女性モデル募集

## 勇敢な女性の出現を望む

▽規定△

## して活躍を望ま

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さいさるよう願います。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号

曉出版株式會社編集部宛



奇蹟クラブ  
昭和四十六年四月二十日印刷  
昭和四十六年五月一日発行  
（第三十五巻第五号）毎月一回  
日曜刊  
昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可  
昭和四十二年四月二十日  
（日国鉄大島特例郵便物認可）第三〇号

# THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



雑誌コード 2805

5月号 ¥350



△最新撮影▽異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一枚一組 (送料共)

四組四枚	五〇〇円
十組十枚	一〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

いずれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
痛苦に耐える女(三浦純子)	喘ぐ縄猿轡め(三浦純子)	正面エビ強烈責(三浦純子)	海老縛り閨責め(三浦純子)	エビ責め縄猿轡(三浦純子)	麻縄強烈柱縛り(三浦純子)	二つ折り臀挙げ(三浦純子)	尻挙げ開脚責め(三浦純子)	開股パイプ責め(三浦純子)	台上に晒す全裸(三浦純子)

37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
全裸緊縛の愉悦(渡部好美)	閨中の股間縛り(渡部好美)	悦虐の開股縛り(渡部好美)	蜷涙責めに哭く(渡部好美)	開股責めの序曲(渡部好美)	責に諦観の美貌(前田真知子)	逆反り弓吊り責(前田真知子)	光に映える白肌(前田真知子)	裸女を押込める(前田真知子)	柔肌に喰い込む(前田真知子)	首縄菱亀甲縛り(前田真知子)	純肌を柱に晒す(前田真知子)	さらけ出した女(前田真知子)	全裸の美女に縄(前田真知子)	鏡に映るエビ責(前田真知子)	白肌をくびる縄(前田真知子)	緊縛に悶える足(座間明子)	開股縛りに諦観(座間明子)	後手縛りを誇る(座間明子)	美しき全裸縛(座間明子)	股間縛りに喘ぐ(座間明子)	高らかに笑う顔(座間明子)	沖縄美人の表情(座間明子)	豊満を縛る魔手(座間明子)	開股正面逆立責(三浦純子)	二折りの引回し(三浦純子)	驚づかみの黒髪(三浦純子)

68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38
羞恥に悶える女(叢子・好美)	連縛双丘の珍景(好美・叢子)	椅子開股の二人(好美・叢子)	高手小手を開陳(好美・叢子)	全裸の二女陳列(好美・叢子)	責め疲れた二女(好美・叢子)	柱に二女の連縛(好美・叢子)	女性自身を晒す(谷山久美子)	哀憫非情な麻縄(谷山久美子)	条痕を尻に残す(谷山久美子)	ムチ打ちに泣く(谷山久美子)	徹しき後手縛り(谷山久美子)	情容赦ない麻縄(谷山久美子)	大の字開股縛り(谷山久美子)	強縛愉悦の極み(谷山久美子)	椅子開股で晒す(谷山久美子)	苦悶の末の頂点(谷山久美子)	責めるの許して(谷山久美子)	歯で咬んだ猿轡(谷山久美子)	緊縛最高の悦楽(谷山久美子)	悦虐悶えの果て(谷山久美子)	極限の苦痛襲う(谷山久美子)	苦痛に反る足指(谷山久美子)	アニマルの表情(谷山久美子)	赤裸の尻を暴く(谷山久美子)	強烈二折り責め(谷山久美子)	海老責に喘ぐ顔(谷山久美子)	股間縛りの正面(三浦純子)	愛妻飼育の過程(三浦純子)	ムチ打ちの洗礼(三浦純子)	爛熟した女体責(三浦純子)

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69
縛った異国の女(シーラケニ)	畳の上に転がる(シーラケニ)	卓上の一輪の花(シーラケニ)	投げだした全裸(シーラケニ)	諦観白人の表情(シーラケニ)	高手小手に縛る(シーラケニ)	金髪碧眼の女性(シーラケニ)	白人の肌を縛る(シーラケニ)	碧眼に驚きの目(シーラケニ)	日本式胡坐縛り(シーラケニ)	両手挙げ美肌晒(シーラケニ)	後手縛りで開脚(シーラケニ)	金髪は縄に動く(シーラケニ)	白肌と汚れた縄(前田真知子)	美は麻縄を超越(前田真知子)	無垢の肌に麻縄(前田真知子)	Mを恋する表情(前田真知子)	灯籠の前で縛る(前田真知子)	一系まとわぬ女(前田真知子)	伸びやかな肢体(前田真知子)	麗しき首縄旅情(前田真知子)	三本の棒で拘束(川路むら子)	棒縛り羞恥責め(川路むら子)	足挙げ正面棒責(川路むら子)	点火した蠟燭責(渡部・川路)	一体にした緊縛(渡部・川路)	捕われの全裸像(渡部・川路)	尻も何も丸出し(好美・叢子)	股間縛りの併立(叢子・好美)	正面相對の連縛(叢子・好美)	羞らう美女二人(叢子・好美)	美しき床の飾り(叢子・好美)



## 徹底の自誌本

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましてグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
 めの努力はいたしません。



## 奇譚クラブ

△第二五巻 第五号・通刊第二七九号▽

(昭和四十六年) 五月号 目次

△本 文▽

扉で一言『ひとりしずか』の開花	立山のぼる (9)
告白々被虐こそ私の夢	高村 浩子 (10)
至福の境地 扱き馬 (しごきうま)	三原 寛 (18)
S M 氾濫時代に想う	大西 弘明 (20)
懸賞入選創作『変身』	内海 実 (22)
浣腸薬と アメリカ製品実験記	井上 俊彦 (37)
連載小説『大噴火』 (第三十二回)	千葉 青鬼 (40)
告白雑感々切腹への憧れ	浅川 則子 (48)
連載小説 パノラマ島秘譚 (3)	藤見 郁 (54)
雑感 女性乗馬について	佐野 寿 (68)
創作『幻想帝国』 (2)	花影 叢 (74)
臨時増刊号の感想	羽鳥 水江 (85)
「写真集」についてのたわごと	三原 葉 (86)
切腹研究夜話「女腹切雑話」	中康 弘通 (88)



# 奇クサロン

(232)

昭和元祿SM時代

備後周一郎

告白「縛られる」ということ

若山伊都子

サロン楽我記 第八十三回

辻村 隆

イメージ画「やめてったらッ」

緑 JOE

美少女無惨画秘帖「双方突き」

桐原 紫門

ある願望「フォト羞恥プレイ」

東京・Y Y

最近の縛り映画

東山 映史

責め絵を描いて「想いの譜」

市原幸三郎

鼻責めマニアの雑感

三浦 喜八

イメージ画「栄光への特訓？」

あらいかず

女囚詩「寒夜の責め」

北川まりこ

フォト「愛妻ゆう子」

新田 英雄

美しき緊縛妻女を羨む

国川 栄一

ノーマルとは？「SMの市民権」

佐渡 好夫

フォト「肥満女体バンザイ」

赤畑 修造

夫婦プレイ雪江の縛り

伊達 一也

編集部だより

編集部

憧れのメス犬「谷山久美子讃歌」

花村 次郎

要望 SM指導記事の充実を

玉出 一郎

浣腸マニアのノート

赤井 茂

イメージ画「川路叢子恥態の図」

志羽 利也

所感 映画「組長くずれ」を見て

吉沢 光利

イメージ画「鞭打ち台」

小川 茂正

告白「粘模被虐症の女」

長谷 良子

イメージ画「黒い革手套の怪」

黒田 縛

あるアナス狂の独白

佐渡 黄門

SMカメラ・ハント 富田由美子の巻

『あどけなきニンフ』

辻村 隆 (90)

鼻吊りと嵌口具「わが緊縛理想像」

花見 鬼郎 (115)

続・花の女斗美たち『熱い肌』

奮斗士好太 (116)

被虐の旅シリーズ 梅咲いて

由利美千子 (126)

告白体フェチ小説「女神」

浅羽やすし (134)

残酷ショート・ショート 首吊り綺譚

小倉 幸男 (151)

紳士たちのための人間浄瑠璃(下)

宇光 仙 (154)

水田真紀子「縛り雛人形」

水田真紀子 (166)

習作シリーズ「縛り雛人形」

水田真紀子 (166)

連載・青春の陥穽(15) 穴の上

芳野 眉美 (178)

SM写真構成家としての辻村隆

伊吹悠紀夫 (190)

連載小説『花と蛇』 続篇第七十四回

団 鬼六 (208)

新連載M小説 則天武后(1)

真砂十四郎 (214)

読切創作「半男半女菩薩」

麒麟 欧二 (223)

読者通信

編集部選 (252)

読者ギャラリー

蝶の幻想 志羽利也・「夜盗来襲」

豪城二・「腰掛け」春川ナミオ・「肌の彩り」須板旭・「M氏の日課」岡たかし

目次カット 「女海賊」 下庭麻紀子

扉カット 「孤独の夜」 札幌・SU



# M 資料分譲品一覧

## ○新人S女性出現○

- 逞ましき股に挟まる  
大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり  
大手札五枚一組 略号(あて) 二〇〇〇円
- 縛った男をムチで料理  
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる  
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 鹽涙の雨を全身に浴びる  
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男  
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女  
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神  
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽  
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香  
大手札五枚一組 略号(あこ) 二〇〇〇円
- M男性を尻に敷く  
略号(あこ) 二〇〇〇円

- 大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円
- 人間犬の芸仕込み  
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる  
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇〇円
- 足指に挟んだ菓子  
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女  
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め  
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景  
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女  
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く  
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔  
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男  
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女  
大手札五枚一組 略号(みか) 二〇〇〇円

- 人間椅子の御褒美  
大手札五枚一組 略号(みお) 二〇〇〇円
- 飼犬に餌を与える  
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女  
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇〇円
- 股で絞められる首  
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇〇円
- 芳香を嗅がす尻  
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇〇円
- 人間馬の調教ブレイ  
大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制  
大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇〇円
- 股責めにあう男の顔  
大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇〇円
- 女に縛られて弄られる  
大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇〇円
- 踏みにじられる顔面  
大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇〇円
- 肩車に奉仕する青年  
大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇〇円

- 男を縛って玩具にする  
大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇〇円
- 首を太股で絞めあげる  
大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇〇円
- 灰皿にされた男  
大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ  
大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態  
大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇〇円
- 美女の手で縛られる過程  
大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円
- 女御主人に使役される男  
大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円
- 美女のおいしい足を載く  
大手札四枚一組 略号(そめ) 一〇〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味  
大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者  
大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円
- 素足を舐める構図  
大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円





札幌・S・U・画

# 『ひとりしずか』の開花

人類がこの地球上に姿を現わして以来幾億年かの長年月、生活の向上文化の進展も遅々として、ひたすら旧態依然たる低生活の繰り返しが続けられていた。

それが約三千年程前、文明文化の曙光が世界各地に見え始めてからは、次第にその発展が進み二十世紀になって、目ざましい向上を見せるに至った。

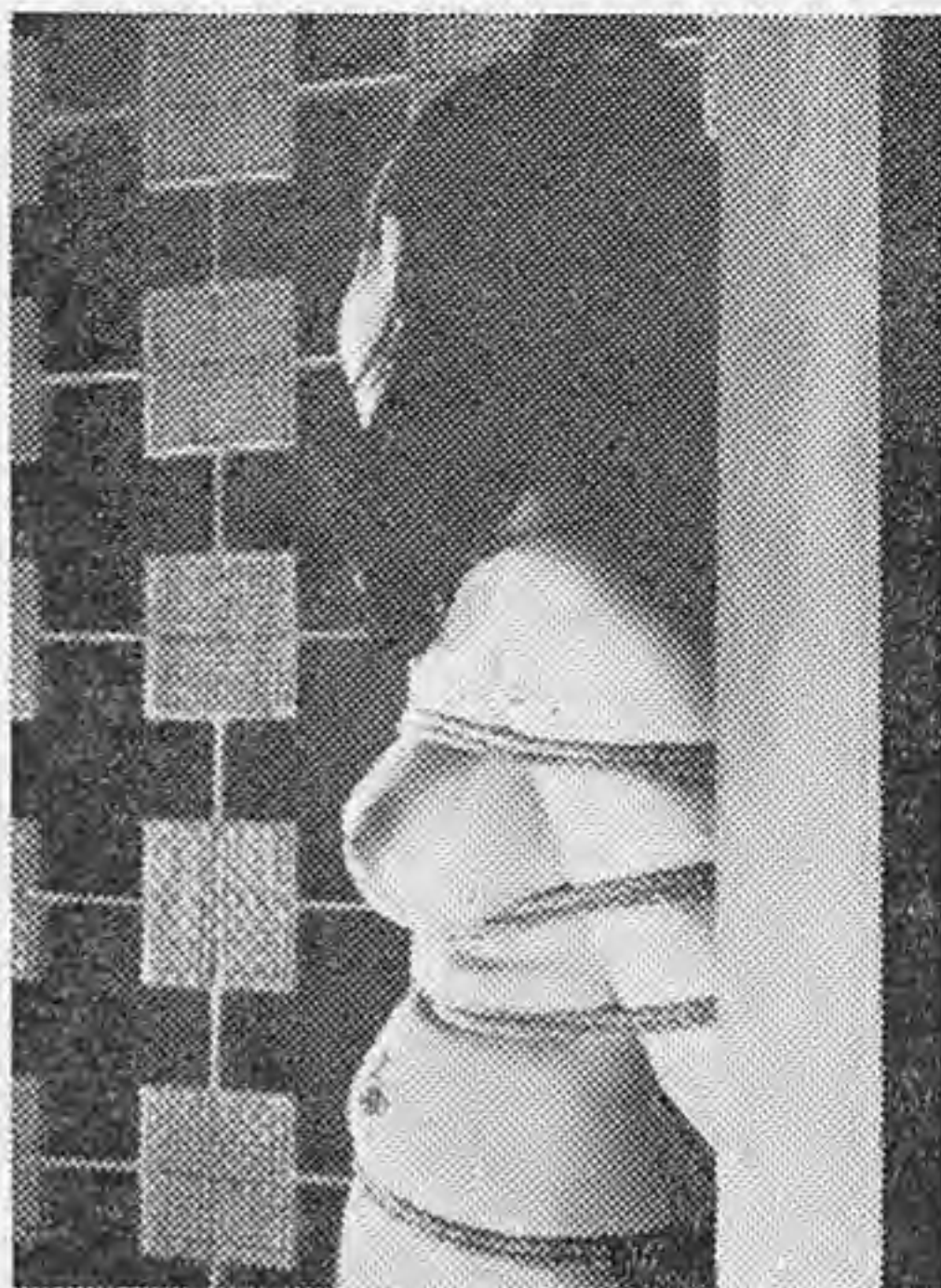
二十世紀後半の最近になっては文化向上の速さは加速度的にスピードを増し、昨日新しいものは今は古いという、誠に絢爛たる文化の華を咲かしつつある。物質文明は言うまでもないことだが、セックス文化についても世界的風潮として自由化傾向の翼を急速に拡げつつある。

我々の趣味として親しんでいるSMについても、これを取り上げなければ時代遅れでもあるかのように喧伝されつつあるのは、喜ぶべきことか悲しむべきことかは別として、も早、抑止し得ない実状になっていくことは事実である。

五年前、十年前の頃のことを考えてみても、その文化向上の速さに只々眩惑されてしまうばかりである。日陰でひっそりと咲いていた「一人静」の可憐な花が強烈な直射日光下に晒されて、余りの晴れがましさに途惑う昨今ではある。

(立山 のぼる)





# 告白

## 被<sup>マ</sup>虐<sup>ゾ</sup>こそ私<sup>わたし</sup>の夢<sup>ゆめ</sup>

高<sup>たか</sup>村<sup>むら</sup>浩<sup>ひろ</sup>子<sup>こ</sup>

私は昭和二十五年一月十八日、四国の高松からボンボン船で十五分ばかり行った女木島<sup>めきしま</sup>という離れ小島で生まれました。

今、丁度二十一才になったところです。中学校を卒業して、すぐ大阪へ出てきましたが、工場の寮などで集団生活をするのが、どうも自分のしょうに合いませんので、三年前から住込みのお手伝いをしています。

私は中学校の時は新聞部の委員をしていて文章を書くことが好きで、先生にはめられたこともあり、高校へ行きたいと思ったことも

ありましたが、家庭の事情で行くことは出来ませんでした。

家の屋根よりも高く石垣を積みあげて、海から吹きつけてくる強い風を防いでいる貧しい女木島の家並を私は忘れることが出来ません。迷路のような細い路地が、家と家の間を走っていて、少女時代の私は、一人一人がやっ通れる細い道を友達とかけっこしたりして遊んだものです。

小さな家が積木細工のように急な島の斜面に折り重なって建っていて、庭というものが

全然ありませんので、私たちには猫の額の様な山かげの空地か、そんな路地が唯一の遊び場だったのです。

島の中程には鬼ヶ島と呼ばれる洞窟があって、休みの日なんかには遊びに行ったりしましたが、物心つく頃までの、今思い出しても懐かしさがいっぱいその頃が、大阪の街へ出てきた今、しきりに思い出されるのです。

貧しくっても潮風に吹かれて育ち幸せだった少女時代、夢のような憧れだけを胸にいだいて生きていたあの頃が、ほんとうに懐かし



く思います。『山の彼方の空遠く、幸い住むと人の言う』という詩の一節を、多感な乙女心に痛いほど感じていたのです。

海に囲まれたこの離れ小島では、山の彼方という感じは少しありません。だから私は自分で『海の彼方の空遠く、幸い住むと人の言う』とくちずさんで、小高い丘の上から、遥か彼方をじっと眺めていました。

目の前には四国、対岸には高松港があります。でも、私の心はともすれば、遥か離れた小豆島、そして、その彼方にある神戸や大阪の街を思ったのです。そこには私を幸せにしてくれる人にもものゝかががあると強く信ずるようになりました。いや、最初は空想だったのです。それがいつしか現実になり変えられて私はその夢の中に酔っていたのです。

たしかに、私は空想癖の強い少女でした。米一粒とれない貧しい島の生活に慣れてしまえば、それなりに不満はないのですが、多感な少女の胸は、翼の生えた鳥となって、海の彼方へ遠く飛び去ってゆくのです。

今から思いますと、それは不思議な想念でした。学校の教科書以外、雑誌一冊とて手に入らない離れ小島に住んでいながら私の空想は一風変わったものでした。

普通だったら、力強く頼もしい男性に大切にされ可愛がられて幸福になってゆく自分を夢に描くことでしょうが、私の場合は、いつも横暴な男性にしいたげられ、いじめられ、身体的に痛めつけられている自分を空想して甘美な陶酔に耽っていたのです。

何故そんな空想が浮かぶのだろうか、ということは最初のうちは自分でも考えませんでした。只、そういった被虐の空想に思いをはせるとき、身も心も痺れるような甘くて切な

い胸をしめつけるような感覚が忘れることができず、いつしか、そんな空想に耽る習慣となっていました。

でも、そんな私の心に決定的なショックを与えたのは、今のお家へお手伝いとして勤めるようになってからです。

御主人の書斎のお掃除をしていて、三十冊ばかり机の脇に積んであった本の山をくずしてしまつて積み直しているとき、ふと手にした一冊の奇クが私の目に入ったのです。靈感





というのでしょうか、そのとき私は何かしらピンとくるものがありました。

「何んの本かしら？」

手にとってペラペラと頁をめくっているうち、私は思わず手がふるえるような衝動を覚えたのです。わなわなとおののく胸、私は奇クにすっかり引きつけられてしまったのです。この世にこんな本があったのか、これこそ自分が求めているものだという気持ちが、強くしました。

奇クを知った私は、自分のお小遣いの中から毎月買い求めるようになりました。私の心を特にゆり動かしたのは、やはり団鬼六先生の「花と蛇」でした。

中でも静子夫人がいじめられる個所は、とても興奮しました。自分がまるで静子夫人になっているように、心を燃え立たせ、何度も何度もくりかえしくりかえし読むのでした。

幸い私は鍵つきの個室を与えられていたもので、夜になると独りで奇クをゆっくり味わって読むのが楽しみでしたが、そのうち、自分で自分の身体を縛る「縛りプレイ」を覚えるようになりました。

夕食のあと片づけがすんで自室へ戻ると、もう自分の身体ですから、いろいろな空想に

耽りながら自縛を楽しみます。

デパートから買い物を送ってくるときに荷造りしてある細い紙の紐が私の用いる唯一の縛り道具ですが、私の空想の世界では、この紙の紐がトゲトゲとした荒縄になったり、恐ろしい鎖になったりします。

先ず両足首を揃えて、この紙紐で、何重にも縛ってみます。

一見、弱々しい紐ですが括ってみると案外よく肌に喰い込みます。殊にいろいろに身体を動かすと、きつく締まるのです。

次に太股、それにウエストを

締めつけて、紐が見えなくなるくらい、くびったりしますが、ここまでは、いつもやるプレイです。

胸に紐を掛けるというのは、なかなかむずかしいことでした。肘から先の両手を使って蒲団の上をごろごろ転がったり苦心して、お臍の上あたりで結んだりしました。

後手首を括るのは、とても無理です。只巻きつけて掌で握りしめるのがやっとです。こんな姿を鏡台の鏡にうつしてみます。

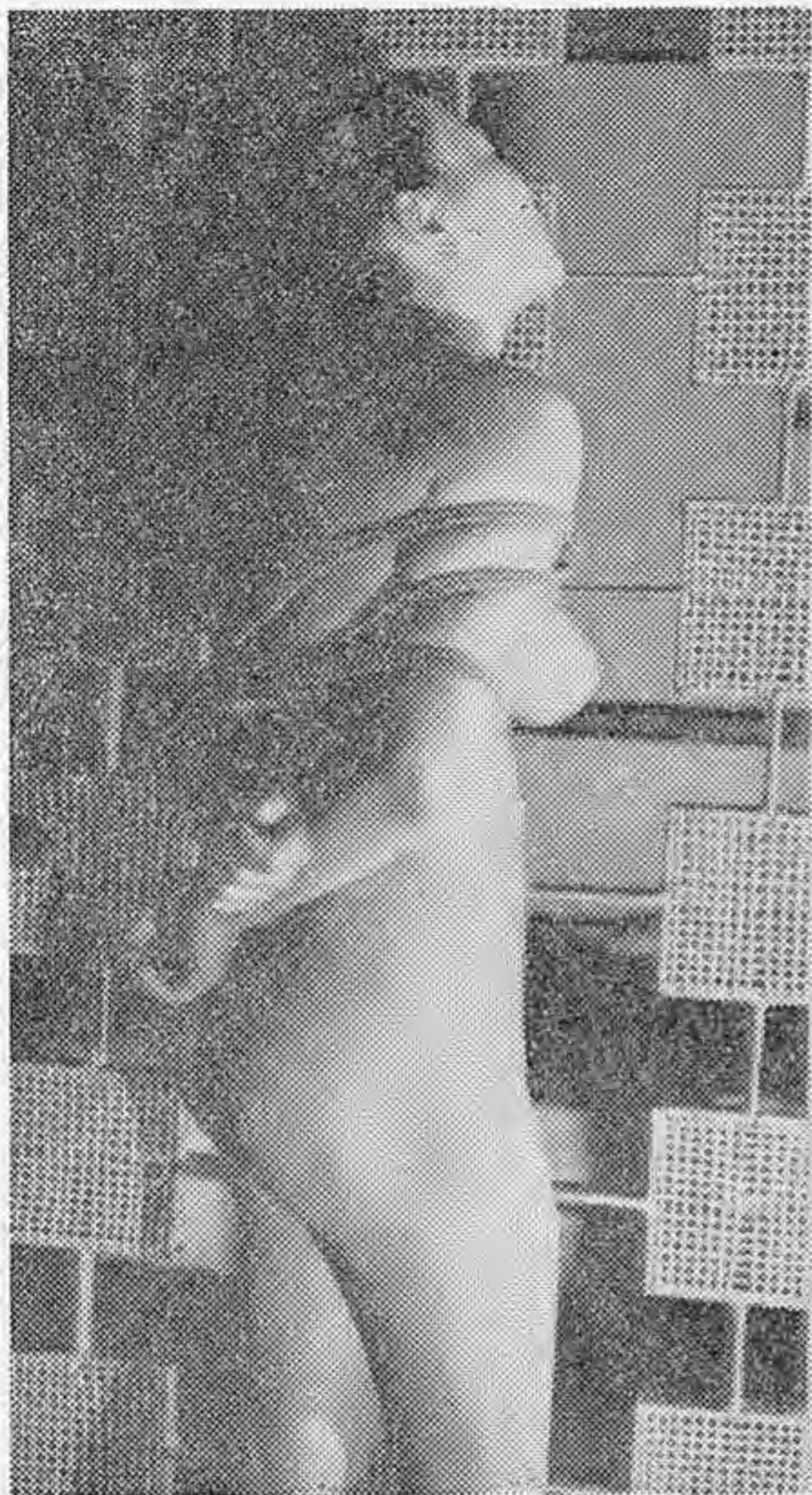


そんな自分の姿を眺めると、荒々しい異性にいじめられている自分を空想して、思わず胸の高鳴りを覚え、その次には甘く切ない思いに全身がふるえるのです。

全裸になった自分の身体を鏡にうつすだけでも、それが異性の方に強要されて裸にされた空想するだけで、私は興奮しました。

畳の上に紐をばらまいておいて、その一方の端を手握り、ごろごろと転がって、全身に紐を巻きつかせたりしたこともありまし





た。丁度、子供の頃の『ままごと遊び』で、海岸に流れついた木片や石ころなどを集めて家や台所を作ったり、草の葉や花で、ご飯やおかずを作って遊んだのと同じように、私は夜毎、そんな『自縛プレイ』に耽りながら、紙の細紐を麻縄と思ったり、畳を牢舎のコンクリートの床になぞらえたりして楽しんだのです。そんな時、いつも私は責められる可憐なヒロインであり、全裸に剥がれて、ひしひしと縛られている哀れな小羊でした。

でも決して、自縛そのものが好きだったわけではありません。

「花と蛇」のヒロインのように、荒くれ男たちに寄ってたかって責められる自分を空想する手段として、そんな縛りプレイを楽しんでいただけなのです。だから、紐をちらかした部屋の中で、全裸になって坐り込み、ただぼんやり自分の姿を鏡にうつしているときもありました。

そんなとき、私は奇巧のあの巻末に書いてある「モデル募集」の広告を見てしまったのです。自分が縛りのモデルになる——そう考えただけで、私は身体が熱くなりました。

「他人の手で一度本格的に縛られてみたい」という強い欲望が私をそそのかしました。私が溺れるほど「責められること」が好きなのに、それは空恐ろしいことでもありませんでした。でも、一度そう思ったってみると、その強い誘惑を退けることが出来ない自分でした。私は勇気を出して編集部宛、モデル志願の手紙を書きました。

私は中学校しか出ていませんが、一時は小説家になりたいと思ったこともあったくらいですから、文章を書くことには、いささか自信がありました。投稿した作品が雑誌にのったこともあるのです。

「私は今年二十才になる女性です——」という書き出しから、便箋六枚にわたって、自分の生い立ちから現在までを詳しく書き、身体の寸法、特徴まで書きました。そして最後に「特に好みといったものはありませんが、どんな責めでも、甘んじて受けるつもりです」と書いて投函しました。

編集部からは、折り返しすぐ速達で返事があり、カメラテストをするから都合のよい日を連絡してくれと、連絡先の電話番号が書いてありました。

そして、私の書いた手紙の文章を大変ほめ



てくれ、是非告白の文章を書いてくれるようにとの依頼がありました。自分の文章をほめてもらったことは非常にうれしく思いましたが、反面、あんな書き方でいいのかしら、と少し不安にもなりました。

でも、すぐ返事を手にすることが出来て、私の心は明るくはずんでいました。

マーケットへ買い物に行った帰り、公衆電話から連絡先へ電話をしました。

「いつ御都合がいいのですか？」

と問われて、つい

「いつでも構いません」

と答えてハッとしました。私の次の公休日は木曜日なのです。私はあわてて

「あの、明後日にして頂けますか？」

とお願ひして、汗びっしょりで受話器を置きました。何を話したのか、あがっていて記憶にありませんが、場所と時間だけは、メモしておきました。でも、三分間の通話時間が切れて掛け直しているのですから、きっと、いろいろのことを話したのでしょう。

一度でいいから、他人の手で縛られてみたい——。そう強く願っていた私ですから、その日の来るのが待ち遠しく、胸がわくわくして、廊下にダスキンを掛けている手も弾みが

ちでしたが、余りにも現実が身近かに迫ってきているので、いつもの空想が湧いてこないのが不思議でした。

その日——。

私は十一時に家を出ました。

「浩子さん、貴女、今日はお休みなんですか、いいですわよ」

と奥さんがおっしゃったのですが、朝、お家の中のお掃除とお洗濯だけはすましておいたのです。お洗濯といっても全自動ですからそう手間はかからないのです。洗ったものを物干しへ干しておいて、奥さんをお願いして駅へ向かいました。立春がすんだというに、スモッグに重苦しく曇った空からは白いものがチラホラと降っています。

それでも春の淡雪あわゆきというのでしょうか、手のひらにのっても、形ものこらず消えていってしまうのです。私はショールの襟をかき合わせながら、そそくさと、その郊外電車の駅へ向かってゆきました。

「午後一時に来て下さい」と電話で言われていた名指しの家へ着いたのは、指定の時間に四十分も早い十二時二十分でした。

表が締まったままで静かなので、私は少しためらっていましたが、屋号を書いた看板が

間違いないので、私は意を決して玄関の戸を開けました。名前を言うと、すぐ廊下を通った離れの部屋へ案内されました。

障子を開けると、葉蘭や竹が植込まれた可愛い庭があり、こちらの部屋から、濡れ縁が出ています。でも、障子を開け放つても寒くないように庭のまわりは塀で囲まれ、天井も全部、覆われているのです。

故郷の女木島めぎじまの、ひゅうひゅうといつも強い風の吹いている二月と、この箱庭のようなお庭と比較して、私はなんとなく、自分が漁師の子から、お姫様にでもなったような気持ちで、ぼんやりと卓にもたれて物思いに耽っていました。外を歩いてきた私には、部屋の温度は温かすぎて汗ばむ程でした。

お庭の天井まで、ふたをされているなんてなんだか自分が捕われの身でもあるかのように錯覚して、早くも心が沸きたってくるのです。ほんとうに私って、なんという娘なのでしょう。こんなに被虐にばかりつかれるなんて、と反省してみますが、泡だつ心の動きはどうしても押さえることはできません。

それでいて、今これから、どのような縛られ方をするのだろうかと考えると、不安が雲のように胸をふさぐのです。裸にされるのだ



ろうか——と、心がおののく反面、もし裸にされなかったら、物足らなく思う悪魔の心がじわじわと膝頭のあたりから、這いあがってくるのです。

そのとき——。

「いやあ、お待たせしました」

と、二人の男性が入ってきました。

私はあわてて坐りなおし、両手を膝の上に置いてかしまりました。

「ああ、今、食事がきますから、そう堅くならないで、くつろいでいて下さい」

そう言われて私はオシボリを指先で弄びながら、見るとはなしに庭の方へ目をやっていました。

やがて、揚げたての天ぷらをざるに盛って運ばれてきました。そういえば表の看板にはお座敷天ぷらと書いてあったようです。

食事が終って隣の部屋にあるお風呂へ入ってきたさいと言われて、私が顔を赤くして、もじもじしていますと、

「こちらは写真を撮る準備をするんだから、その間に入ってくるといいですよ」

と、バスタオルと浴衣を手に押しつけられました。空想癖の私は、自分がお風呂へ入っている間に着物から下着まで、みんな奪われ

てしまうというようなことを考えて、そんなときのまごまごしている自分の姿を臉の中に描いてしまうのです。たしか「花と蛇」の中にも、そんな場面があったようです。

でも、二人の男性は私には無関心のように

した。着物を脱いでいる隣の部屋へ覗

きにくる気配さえありません。

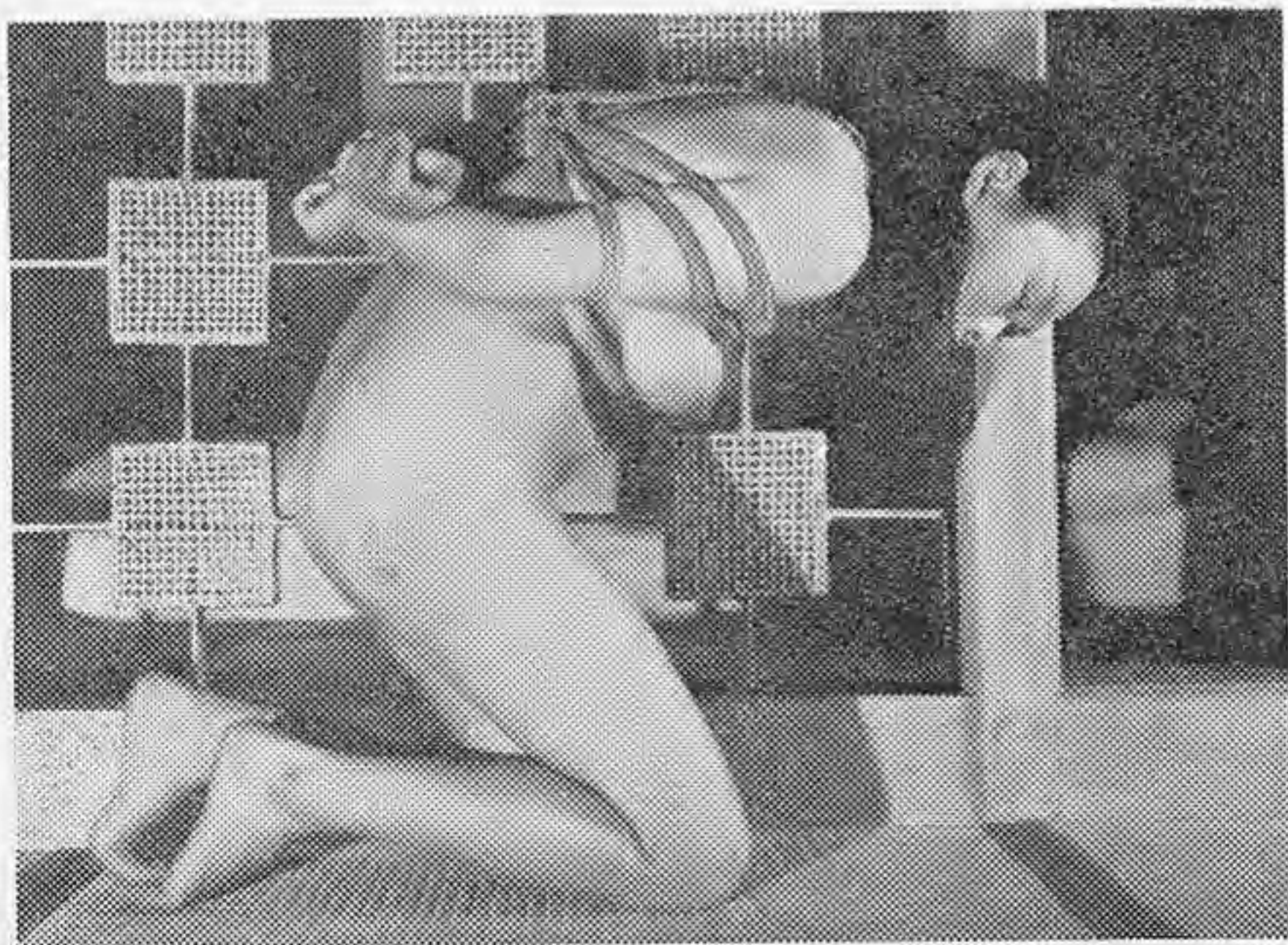
からすきようすい

鳥の行水の私は、身体を温めただけで、すぐ浴槽を出ました。

隣の部屋をのぞいてみますと、卓はすでに片づけられていて、電気のコードが部屋のあちこちにとぐろを巻いています。明るい電球が二つも照らしているので湯上りの私の頬は火照る（ほてる）ように熱くなってきました。部屋の中の温度も、さっきよりは十分、上昇しているように思えました。

私がドキドキする胸を押さえて入口で立っていますと、「こちらへ来なさい」と言われて、小さいカメラで、パッパッと光らせて、写真をとられました。一瞬、目がくらんで、まばたきしていますと、するりと肩から浴衣を脱がされました。

「あっ」と思っていますと、ズロース



一枚のままで再び、正面、横、後、と三回、閃光が走りました。私が「もう始まったのかしら」と豆鉄砲をくった鳩のように目つぶしをくって途まどっていますと、腰のあたりにさっと手がかかって、ズロースが何の抵抗も



なくするりと足首まで下げられていました。

顔が真赤になった私が、「あれッ」と両胸に手にやったとき、パツと輝く光が、正面から私を照らしました。「うわッ、恥かしい」と思って身体を動かしますと、今度は足下の方から光り、次には横から、左からと私を狙って閃光が打ち込まれてくるのです。

私の平常空想していたのとは全く違った形で全裸にされ、そして私はひらめく光の集中を浴びて不恰好に踊らされていたのです。

浴衣を渡されて休息するように言われた私は、あわてて転がっていたズロースを拾って乱れ簾に入れ、部屋の片隅で、じっとうずくまっていた。

モデルになるというのは、こんなことなのか——。私は安堵とも失望ともつかない、複雑な気持で、ただじっと、うずくまっていた。

「さあ、いよいよ、これから本格的に縛り上げるよ」

今度は三脚にすえられた大きくて重そうなカメラがとり出されました。

私が自縛しているのとは比較にならぬくらい太くて丈夫そうな麻縄がとり出されて、私の後手首にからまってきました。ぎゅっと感

ずる締め方です。二の腕にも胸にも麻縄が喰い込んできます。男性の手で捌かれる力強い麻縄が肌をくびるような迫力です。

——ああ、私は初めて異性の手で全裸にされて縛られているのだわ——

そう思っただけでも胸がわななくの、こうして現実に本式に縛られているばかりでなく、こんな私の姿をうつすカメラのレンズの目が、私の方に狙いをつけているのです。

こちこちに緊張していた私の身体は、足首から膝頭にかけて力が次第になくなり、やがて全身がなくなに、やわらかくなってゆくように感じました。

縄で縛られると、私の身体は細く細くなってくびれてしまいそうで、粘土細工のようにやわらかくなった身体は、どのような恰好にでも好きなようになってしまいそうです。

私はもう縛る男の人の意のままに、操り人形のようになって、前を向かされたり後を向かされたり、言うがままになっていました。

動くたびに益々麻縄が肌に喰い込んでくるのがよくわかります。でも私は、もう縄によって飼育された従順な牝犬なのですから、命じられるまま、どのようなポーズでも易々としてとる女になってしまっていました。

三回目の休憩まで二度縛り直され、大変な速さでシャッターが何回となく切られました。が、もうこの時になると私もすっかりカメラに慣れ、覚悟も出来て心も落ち着きました。

愈々三度目の縛り直しで嚴重に高手小手に縛り上げられました。

「いよいよ、これから本格的な責めで貴女のマゾを泣かしてあげますよ」

と冗談のように言われて、荒々しく縄尻を引っぱられると、畳の上どころがされてしまいました。両手の自由のきかない私は、右足を宙に蹴上げたあられもない恰好で、わずかに畳にすりつけた左足をくの字に曲げて全身の安定を保ちました。

しかし、その瞬間を狙って三脚からはずしたカメラを手にとってシャッターを切っていました。沢山の人に見られているのと同じカメラのレンズが、私の身体に突きささる目となって迫ってくるような気持に、なにかオシッコをちびりそうになります。

二の腕と胸を縛った縄が今までの二回くらべものにならないくらいきつかったところへ、無理にころがされたのですから、上半身がくびれてしまいそうな強い締めまりようで、私は思わず、うっとりとなっていました。





宙を蹴った自分の右足を掴まれているのさ  
え気づかない有様でした。ぐいと右足を拡げ  
させられてポーズをつけられますと、私は知  
らず知らずのうちに、左足も大きくひろげて  
恥かしい肢体をさらけだしているのです。

△どんな責めでも甘んじて受けます▽  
そう誓った私です。

もう覚悟を、すっかりきめていたのです。  
でも、私の期待に反して両肢をあぐらに組

んだポーズをとらされただけで、余りひどい  
責めはされませんでした。

静子夫人が受けたような浣腸責めをされた  
ら、一体どんな気持ちでしょうか。

△好みの責めといったものではありません▽

そう手紙に書いた私ですが、やはり羞恥責  
めを受けたい気持ちが強いのです。なんといい  
ても、経験がないので自分で自分の好みさえ  
はつきりと分からなかったのですが、身動き

できぬように縛られて縄尻をとって引き回さ  
れてみると、自分の本来望んでいたのは、こ  
んな責めだったのだということが、おぼろげ  
ながら、わかってきたような気がします。

最後に明るい電球が左右から私の全身を挟  
みつけるように照らしだったので、私はまぶ  
しくって、思わず目をつぶってしまいました  
から、背後の暗闇（私にはそのように思えま  
した）にいる二人の男性が、全裸の私をどの  
ように縛り、どんなポーズをとらしたのか、  
一向に覚えがありませんが、現実と空想とが  
入りまじって、身体の中を突き抜けるような  
最高のマゾの悦びを味わいました。

無意識のうちに自分でも何か声を立てたよ  
うに思えるのですが、それが何であったのか  
今でも、はっきり覚えておりません。とにか  
く、満ち足りた気持ちで私は、ぐったりと疲れ  
きっていました。

どのくらいの時間、そんな夢幻の境をさま  
よっていたでしょうか。気がついたとき、私  
は浴衣にくるまって畳の上で、ながながとの  
びてしまっていました。

△編集部注▽筆者のご希望により誌上掲載の  
写真は特に背面のものを選びました。





カット・岡 たかし

「さ、こうして欲しかったのか！」

彼女がそういって、どしんと、その豊かなお臀を四つん這いになった私の背中の上におとして馬乗りになったときには、私はもう天にもものぼる心地だったのである。

彼女との三度目のモーテルでのデートのときである。彼女は、まだその当時、国電の鶯谷の駅の近くのバーに勤めていて、私が最初に彼女と知り合ったのも、このバーだった。

ハイヒールをはいて並んで立つと、一メートル七〇の私よりも高いぐらい大柄で、それが引きしまった均斉のとれた体格のために、ちよっとみて、それほどの大女と感じさせない

のであったが、容貌が冷たく、また、おそろ

しく無愛想なために、お客には余り人気がないようだった。私が最初にそのバーに入ったときに彼女がついたのだが、全然お客にサービスする気などなく、私が煙草を口に咥えてもマツチに手をのばすことすらしなかった。

そして何か飲物をすすめると「あたしは日本製のウイスキーだと悪酔いするから」といって、スコッチのオンザロックを注文するのだった。私はサントリーの水割りを飲んでいたのである。彼女はアルコールに強く、そのスコッチのオンザロックを平気で何杯もお代りするのだった。一度だけ、グラスを代える前

至福の境地

扱 き 馬

しご

うま

三原 寛

に「お金、まだあるの？」と小馬鹿にしたよ

うな表情で聞かれたので「値段がわからないので、どうだかわからない」と答えると「いくら持ってきたのさ」と私の内ポケットから財布を引っ張り出して、中を調べ「これだけあったら、まだ大丈夫だね。それとも、あたしが他の席に移ってもいいんだったら、はっきり、そういったら？」と、なぶるような目で、じっと私の目の中をのぞきこむようにするのだった。その日の出費は相当の予算超過だったが、私は彼女のタイプが気に入ってそれから何度か通って昼間、デートしてもらえようになったのである。デートといって



も最初的时候は、彼女指定の池の端のホテルで一時間も待たされた挙句、結局その日は、「その気にならないから、くるのをよそうと思っただけ、待たすのも悪いから一応、来て上げた」と恩を着せられただけで、彼女は他に用事があるからと、あっさり、その場で別れてしまい、折角、会社の休暇までとって期待していた、その日を棒にふるってしまったのだ。

二度目のときは一緒にホテルに入ったものの、彼女はお腹が空いたからといって寿司をとって一緒に食べ、「お前とデートしても、ちっとも面白くないわね。今日もほんとうは忙しかったのを無理して来て上げたんだけど、時間もないし帰るわ！」という彼女に縋りつかんばかりに哀願して、約束してもらったのが、三度目のデートである。

その頃から彼女は、いつのまにか私のことを「お前」と呼び、私は彼女のことを「曜子夫人」と呼ぶようになっていたが、曜子というのは店での名で、彼女の本名は和田洋子ということは、最近知ったばかりである。

三度目のデートでは、今日はお風呂に入るというので、息もつけぬぐらい興奮したのだが、彼女一人で、さっさと更衣室に入っ

まい、仕切りの扉をピシャリとしめられてしまつて、彼女が衣服を脱ぐ衣摺れの音や、お湯に入る音、ざわつと体に湯を流す音——を聞いて、もうどうにもなくなるほどの気にさせられたのだった。すっかり衣服をつけて出てきた彼女は、湯上りにビールを飲んで「ああ、いい気持ちになった。あたしはこれで帰るけど、どう、お前もお風呂に入って帰るたら？」といわれた私は、もう完全に半狂乱になり、出て行こうとする彼女の足にとりすがつて、自分でもそのとき何を口走ったのかわからぬまま、泣き声を出して哀願したのだった。「何よ！ いやらしいわね！」と蹴はなされ、それをまた、いざり寄つて「しつこいわね。一体、どうしようっていうのさ！」と、きめつけられて「お願いです。せめて馬に乗って下さい」と、立ちはだかった彼女の前に四つん這いの背中を、さし向けたのである。

「さ、どうだ！ だけど、ただじゃあないわよ。そうね、この部屋をひとまわりしたら、千円お出し！」

そうしてその日は彼女に五千円を払ったのである。その次からは裸にされて彼女の馬になり、ホテルの部屋を這い廻ることになった

が、大柄の彼女を背にして、私には部屋を五回、廻るのが精一杯だった。どんなに叱咤されても潰れて床にのびてしまふ私に業を煮やした彼女は、次のデートのときから皮のムチを携行するようになったのである。

彼女は持参してきた大きな買物袋から、S M専門店を買ってきたといつて、黒い皮のムチやクツワ、踵のところがった乗馬靴を、とり出したのである。そして、「今日は、どうしても二万円は、このムチで扱き出してあげるから！」と宣告されたのだ。私は何とか十回だけは廻ることが出来たが、それもムチに追われて死物狂いで廻つたのである。それが限度だった。手足が棒のようになり、ボロ切れのように床に崩折れてのびている私の背中に、奇烈なムチが乱打され、あとの十回はどうやって廻り終わったか自分でも分からず、ムチを浴びて全身、灼けつくようになり、火のように熱い息を吐きながら床に倒れてしまったのである。そして気がついたときには、彼女は私の財布から二万円を抜いて帰ってしまった後だったのである。

その頃、彼女はバー勤めをやめ、私の他にも、私のように馬になる男を二、三人きめて交互に呼び出しては、ムチと乗馬靴で小遣い



を扱き出し、マンションを借りて優雅に暮してゐるらしかった。

彼女に愛人が出来た、といつても、何でも彼女のいいなりになる美少年、所謂、稚児さん好みらしかったが、彼女の余りの我儘さのために、どれも永續きはしないようだった。それでも次々に愛人をつくり、そんな時には彼女の扱きは、とりわけて苛酷だった。

「今日は、どうしても三万円、必要なんだ！それから五時半にデートの約束があるから、お前とぐずぐずしてる訳にゆかないのよ。だからだとすると、それだけ痛い目に遭うわよ」

彼女は欲しいだけのお金は、どんなことがあつてもムチと乗馬靴を使って扱き出すのだ



最近、各種の出版物によって目に触れるSM的作品は非常に多い。興味本位のものからあまりにも高度感覚的な難解なものまで、まさにSMの氾濫といつて差し支えない

った。どんなにムチで引っぱたかれても潰れてしまつて、起き上ることも出来ず、もがく私の背に、彼女は乗馬靴の片足をかけて、「ほら、意気地なし！片足だけでも乗せてやるから、這うんだ、それ！」

肘を使って一寸刻みに、半ば意識も朦朧としながら、芋虫のように、にじり進む私の背をムチ打ち、尻を蹴って、何がなんでもノルマを果たさせるのだった。一週間に一度は呼び出しがあり、死ぬほどの目に遭わされる上に、この頃では扱き出される金額も二万、三万が普通になつて、経済的にもマンションを手に入れるために営々と蓄えてきた貯金も、どんどん減る一方で、もう彼女と会ふのをや

めようと幾度も決心するのだが「……また乗ってあげるわ」「……ひと扱きしてやるわ」という彼女の電話を耳にすると、それからは仕事も手につかず、憑かれたように彼女の指定のホテルに出掛けてしまふのである。

そして、何かの都合で十日も呼び出しがないと、もう矢も楯もたまらなくなり、いつて、こちらから連絡しようにも、彼女がどこに住んでいるかすら知らされておらず、狂乱の身を独りアパートの一室で、四つん這いになつて、彼女の引き締まった太腿が腰をぐつと締めつけるのを想像し、彼女のずっしりと重い尻を背中に感じて、ぐるぐると、いつまでも這い廻り続けるのである。

## SM氾濫時代に想う

大西弘明

カット・あらいかず

いようである。

こうした一般的な現象は、私の如き愛好者にとつては、一面、表現の拡大、理解の訴求に役立って都合のよいことも無くはない。卒

直にいつて、SMの耽美性を獲得するため

の相手、すなわち緊縛女体の獲得作戦に利用するに便利で、やや陽光を覚える感が深いといえるのである。



事実、五、六年前に較べてみると、若い女性たちにもSMに関心を持つ者が増したようであるし、水商売の女性のうちには好奇心も手伝ってか、割合簡単に裸身を預けてくれる者に行き当たる率が、確かに大きくなったという実感を持ち得る私なのだが辻村隆氏のカメラ・ハントに美しいホステス嬢が登場し、彼の鼻先で岩風呂に腰かけたままオシッコをひっかけたというルポの記憶も新しいが、この調子の女性が増えたことは事実であるといえそうに思えて仕方がないのである。

しかし反面、あまり安易にSM調を演出されたり、押しつけがましいものにぶつかると厭気を覚えるのだが、これは私だけではないだろうと思う。

なにも世間一般のSMものばかりがそうであるとはいわないが、一応この種の筋書を主題としているものの、どこかで読んだような、誰かが既に発表した類型にすぎないと思えるものが極めて多いという感が拭えないし、ただ女性の裸身を縛りさえすればSMなりとするが如きものや、わざわざ不必要なほどの色っぽさを狙ったものが実に多いと思う。

小説一つにしても、真にSM愛好感覚の持主を対象とするならば少なくとも読み返して賞味するに耐える作品が望ましいのは当然であるが、私が奇クに求めるSMは、いたずらに安易なものや、大上段に振りかぶるが如き空想での、SMのためのSMといったものではなく、あくまでも日常生活の中で自然と醸成され、自然と溢れ出るが如きイメージの進展なのである。

もちろん、望むは易く成すは難きことであるのは百も承知である。ましてこの道は他の分野と異なり、主題が一般的な作品と一種違った要素を持ったために、女体を対象としての現実を、いくら現実だからといってリアルに表現すれば種々の問題が伴う。そのくせ、SMの昇華に肉迫せしめるにはどうしても剥き出しの表現を避け得ない宿命を持っている。この板挟みの故にか、現実遊離の空想的表現に逃げをうつものの多いことは、奇ク誌上にも随所に見られる現象である。

素朴で、なんのてらいもない告白文が私を捕えて離さない力を有するのは、極めて地味な事柄であっても、それが生活の中のSMであるからで、この意味で私が奇クに欲してやまないのは、生活情感を背景とするSM美意

識の発掘であり、確実なる人間の存在感、生命の強調に立脚した小説、絵画、写真等の探究なのである。

現在連載中の小説を例に挙げては、作者に対しての非礼ばかりでなく、その観点の相違や、創作目標、態度に対して盲目、近視的とのそしりを覚悟の上で、あえて対比させてもらうが、私としては、どうしても「大噴火」より「花と蛇」に軍配を挙げる読者が、圧倒的に多いに違いないと思えてならない。

その理由は、文体の巧拙は別問題として前者が、あまりにも雄大な現実離れした夢物語に立脚しているのに比して、後者が同じ夢物語りにしろ、不良ヤクザに捕えられた美しい女性のたどる道程は、かくもあろうと思われる納得点にあるのであって、私の如き愛好者の想像SM性に根拠がおかれているからではないかと思うのだ。

つまるところ、私としての切望するSMは、身近な生活感にあふれ、生命を強調しつつ、女身の甘美、耽溺の極致の中に、さまざまに変化する、気韻の生動する女性美であってほしいということに尽きるのである。

(おわり)



懸賞創作入選作品

変

(へんしん)

身

内海実



旭 坂 須・カット

私はその日どうしようかと迷いましたが、結局は思いきって、パンティを穿かないで行くことにしました。

暖かそうですし、授業は二時限目だけです。あとは映画に行くつもりだったからです。ナチの記録物がきているはずで、スカートはいつもの長めのタイトにしました。フリルのスカートは、よりスリルがありますが、あまりに危険な気がします。

「お姉さん、行かないの」

同じ部屋の明子姉さんに、境の緑色のカー

テンから首を入れて声をかけます。姉さんはまだ蒲団の中にいます。

「先に行くわよ」

「待ってよ、すぐだから」

姉さんはパツとはね起きて、ドタバタと洗面所に飛んでいきました。

今朝は一人で行く方が、私の都合は良いんですが、待てと言われたからには、待たなければ仕方がありません。実際、姉さんの準備はとても早いのです。寝床は放ったらかしですし、髪をさっとひとすきすれば終りです。

私は、姉さんと並んで歩くのは余り好きではありません。行き合う男の人は、ざっと二人を見較べた後、きまって姉さんの方をまぶしように注視するんですから。いつも私の方が、お化粧にも時間をかけて色々工夫を凝らしていますのに……。

でも、姉さんはすらりと背も高く、美人です。から仕方がありません。私はいつも、体重は今のままで、背丈がもう十センチ伸びないものかと思っています。

いつもは運動を兼ねて歩くのですが、今日はもうバスに乗らなければ間に合いません。

この時間帯のバスはすいています。余り混んでいると痴漢が出て、パンティを着けてい



ないと具合が悪いのですが……。

「なんだかうれしそうですね。何かあるの？」

私はつい、にやにやしていたようです。

突然、バスが急ブレーキをかけました。吊革を持っていなかった姉さんがふっ飛んできて私の腰にぶつかりました。危ない危ない。もう一寸で私も転ぶところでした。もし転んでスカートが捲れでもしたら大変なところでした。

学校の階段を登る時、どうしても意識してしまいましたし、授業が始まって、ふわふわした気持で身が入りませんでした。やはり私だけがしていないという気持は、大きな作用をするものです。

私はさわやかな五月の空気にも、もえ出す校庭の芝生にも、街ですれちがう人々にも、羞かしさを感じ、男性の視線には、なおさら身がすぐむようでした。

たった一枚の布の有無が、なんと私の感覚に強い作用をもたらすことでしょう。

○

映画館はかなり満員でしたが坐れないことはありませんでした。両側は中年の男性でしたが、それが私に、一年程前のA館のいやらしい中年紳士を思い出させました。

あの時、最初のかすかに太ももを触れてきた手にしだいに力が加わって、何げなくそれと今度はお尻に手を伸ばしてきました。私はびっくりして席を立ちましたが、その人は何くわぬ顔で画面を見ていました。後から考えて、一寸早まったような気がしてならなかったのですが……。

今、もしも左右の男性に両手を持たれ、前の男性に両足を持ち挙げられたらどうなるだろうかと、フト想ってしまいます。私は逆立ちの恰好になり、満員の観客にお尻を晒すことになるのです。みんなの視線が、私の羞かしい姿に集中することでしょう。私の体はそのまま空中に吊り上げられ、くるくると廻るのです。私はこんなとんでもない空想をくり返し、熱い吐息を注意深くもらいました。

○

「ただいま。入るわよ」

私がカーテンから覗くと、姉さんは寝転がって小説を読んでいました。

「はいおみやげ。ナチの映画見てきたの。すごいわよ、ひどいんだから。死骸がずらっとレンガみたいに積まれているの。みんな裸で金歯と女の髪はとられるのよ。気持が悪い位やせている人もいたわ。ユダヤ人ね、子供な

んかかわいいそうよ。ヒトラーは、かつこ良かったけど、精神分析でもやったら？」

姉さんは心理学専攻で、卒業論文のテーマを摸索中です。

「ふーん。でも、ヒトラーなんてだめよ」姉さんは、私がおみやげに買ってきたピーナツをほおりましたが、次の瞬間に、思ってもみないことが起こりました。姉さんの手が、いきなり私のお尻に触れたのです。

「やっぱりね」

私は「ひゃっ」と飛び上って、カーテンを突き破るように、自分の部屋に逃げ帰りました。

「どうしよう、どうしよう」

私は急いでパンティを穿き——それはほんの少し、しかし決定的に、遅かったのですが——普段着に着換えました。そして、とにかく、姉さんと顔を合わせるのが怖い気持で外に出ました。

姉さんはたしかに「やっぱりね」と言いました。……知っていたようです。そうです。きっと、今朝バスが急ブレーキをかけた時に知ったのに違いありません。姉さんは私の腰につかまっていました。あの時、変に感じたのでしょうか。何という失敗をしたことでしょう。



う。映画から帰ってすぐ姉さんの部屋に行かず、穿いてから行けば良かったのです。やはり今日は、一人で先に行けばよかった。……でも、あのバスさえブレーキをかけなければ……。やはり穿いていけば良かった。

私はいろいろと考えては悔みました。でも後悔先に立たず、起こってしまったことはもう消しようがありません。何かパンティを着けないでいたうまい理由はないかしら、とも考えました。しかしそんな理由はあるはずもありません。

どうしよう、死んでしまいたい。

姉さんは何と思ったかしら。まさか私に露出癖があるなんて、思いませんように。やっぱり思うかしら。姉さんは勘がいいし。

そう言えば気になることがあるのです。この冬、寮生四、五人が炬燵を囲んで、例によって男性心理について週刊誌的興味の話題に花が咲いていた時のことです。

観念派代表の姉さんが——姉さんは書物からの知識によって、こと男性とかセックスに関してはずこぶる博識で、体験派代表の君江さんと共に、私達の中の権威でした。

「男性は視覚によってひどく興奮するのよ、女性と違って」

と言った時です。私は不用心にも口に出していたのです。

「女性だって視られて興奮することがあるんじゃない？」

その場での私の発言は、格別の注意を払われたようにも思われませんでした。私は、その時の姉さんの「おやっ」というような顔を絶望的に思い出しました。

○

私の露出癖は、娘時代が始まった頃、いつとはなしに備わっていました。

私の郷里の家の風呂場には、大きな鏡がありました。私はお風呂に入る度に、日増しにふっくらと女らしくなっていく自分の体に見惚れ、誰かに見せてあげたい、見られてみたい、と思っていたものです。家の人にも雪子の風呂は長いと言われたものですが、それはお湯に入っている時間よりも、鏡の前の時間が長いためでした。

部屋に鏡を下ろし、私はほとんど毎夜、興味の尽きないままに手鏡で自分の分身を写し出して空想に耽りました。いつしか快感の住居もわかり、早い時期から我が身の不思議さに溺れたのでした。

その時に頭に描く光景は、いつもきまって

露出的なものでした。

○

市中一番の人通りの多いS通りを、私は舞妓のように、ポッコリの下駄をはき、カンザシをして、ダラリの帯を結んで、歩いているのです……。それ以外は何も身につけずに。ぞろぞろと通る男の人の目が、好奇に輝き殺到します。私のすんなりした肩に、円やかに突き出た乳房に、むっちりしたお尻に。

○

あるいは私はデパートの店員です。エスカレーターの横に立って「いらっしゃいませ」と挨拶する係です。頭を下げる以外は、どんな動きもしてはならないと厳命されます。そのうちにいたずらな子供達が私にまとわりつき始め、スカートを持ち挙げたりのぞきこんだりするのは。私が困っていると鈴木君が現われて悪童連を追いかけてくれます。

鈴木君は高校の同級生で、私の初恋の人です。勉強も良くできるのですが不良です。

私がはっと安心すると、今度は鈴木君が服を脱がせようとするのですが、動いてはいけない私は裸にされてしまいます。

「いらっしゃいませ、いらっしゃいませ」

お客様はみんな、私の裸を眺めて、満足そ



うにエスカレーターで登って行きます。

○ エレベーターガールの時もあります。鈴木君達不良仲間五人が乗りこんできました。他にお客様はいません。扉が閉まり動き始めると、もはや私は助けを求めることができせん。屋上に着いて私は裸でエレベーターを待っている人達の前につき出されるのです。

○ 生物の授業です。この前の時間はカエルの解剖でした。高橋先生が言います。——私はこの先生にあこがれていました。

「今日は、雪子さんの解剖を行ないます」  
みんなが歓声を挙げます。先生の言いつけなら仕方ありません。私は裸にされ、解剖台に載せられます。手足を金具で止め終ると先生はハサミを使って解剖を始め、順番にみんなに観察させます。それから、おへその上までチヨキチヨキと切ってしまいます。全員が争って、私の切り開かれたお腹の中をのぞきこみ、ピンセットなんかで、ひっかき廻します。

○ こういう変な願望が、私だけの特別のものであり、露出癖であると同時に私は、

もし他人に知られたら、自殺でもしなければならぬ程恥ずかしい性質のものであることも判りました。

私は極度に肌をさらすということに神経質になり、私の性癖は内攻していきました。

見せたいという願望を意識するだけに、却って、不自然な程、見せる行為をとることができないのです。水着だって、紺の野暮ったいので最近まで通していましたが、スカートの、いつも人一倍、長めでした。

それだけ警戒していましたが去年大学に入ってしまったら、都会の「他人の目を気にしない生活」に慣れたのか、私は少しずつ大胆になっていきました。そうは言ってもせいぜい、セパレーツの水着やミニスカートを身に着けるだけのことで……。

二回生になって、ようやく女ばかりの寮生活に退屈をおぼえるようになり、私は一寸した冒険を試みるようになったのです。

それが、パンティなしで一人で街に出かけることです。

もし他人に見られることがあっても、それは一瞬のことでしょうから、錯覚と思われるでしょう。そうでなくても、赤の他人ですから、まず心配はないと思ったのです。

それも、たったの三回。なしで学校に行っただのは全く初めてですのに、よりによって大好きな姉さんに気付かれるなんて……。

叔母さんの家に泊ることも考えましたが、それでは私が意識してそうしたことを証明するばかりで、かえって気まづさが増しそうです。いつもと同様に振舞う方が良く私は思い、門限の十一時ぎりぎりに部屋に帰り、灯もつけずに、そおとと寝床を敷きました。姉さんはまだ本を読んでいるようでした。

「今日は色々楽しかったのに、最後がひどくまづかったわ。起こってしまったことは仕方がない。くよくよせずに何事もなかったように接しよう。姉さんだって、きっと困っているにちがいないんだもの、きっと調子を合わせてくれるわよ」

私はそう思いましたが、それは浅はかな考えでした。頭のよい姉さんが、結果を見通すことなしに行動を起こすようなことはないし行動を始めたなら徹底的にやるということを、私はすぐに思い知らされたのです。

○ 「ユキッ」

「ドキッ」

「もう寝るの？ ねえ、一寸こっちにいらっ



「しゃいよ」

姉さんの声は変にやさしそうです。顔を合  
わせるのが気恥ずかしいんですが、合わせな  
いで済むはずありません。何事もなかつ  
たように振舞うべし。私は、のそのそとカー  
テンをくぐりました。何かしゃべった方がよ  
さそうです。

「なに読んでるの？」

姉さんが、ニヤリと意味ありそうに笑って  
みせてくれた本の表紙には『異常性心理』と  
ありました。

「ユキは、いいおっぱいしてるわね。一寸見  
せてごらん」

乳房の形だけなら、姉さんよりきれいかも  
しれないと私はひそかに思っていました。く  
すぐったいような変な気分です。

「でも……」

私がわざとぐずぐずしていると、パジャマ  
のホックがはずされ、姉さんの手が胸元から  
入ってきました。

「いやよ、姉さん、やめてよ」

もがいているうちに私は仰向けになり、姉  
さんは馬乗りの形になりました。すると姉さ  
んは急に力を入れて、私のパジャマを脱がそ  
うとし始めます。私は冗談にやっているとば

かり思っていました。ハッと気がつくときス  
リップの紐まで外され、プクリと乳房が顔を  
出しています。

「まあ、きれいなこと」

姉さんは、私の両手を左右に拡げて抑えつ  
け、ゆっくりと眺めおろします。

「やめて、いや」

私は赤くなった顔をそむけて、弱々しく頼  
みます。

「あなた、露出症でしょう。誰にでも見せた  
いんでしょう？」

姉さんはいたずらっぽい口調で言います。

「そんなことないわよ、いやよ」

「じゃ、なぜ穿いてなかったのよ」

「汚れたからよ」

「うそおっしゃい。ようし、それなら明日、

みんなに言ってやろう」

「いやッ。お願い、言わないで」

私は哀願しました。

「じゃ、認める？」

認めるわけにもいきません。

「認めるんなら、今日のことは黙っていてあ  
げるわ。秘密は守るわよ」

私は本当に困ってしまいました。でも、こ  
うなったらもう姉さんなら構わないという気

持もあって、私はかすかにうなずきました。

「よおし、じゃ、脱がすわよ」

私は頭がぼおっとして体中から力が抜けて  
しまいました。姉さんが馬乗りのまま向きを  
変えます。私は両手で顔を覆いました。お尻  
の方から一気に引降ろされた上、姉さんは残  
酷にも頭上の蛍光灯を足元の方に移します。

私は、いたたまれない気持ちに襲われました。

私は、必死に力を奮って、姉さんをはね飛  
ばしカーテンをもぐり抜けて脱出しました。  
パジャマやパンティが、敵地に残っています  
が、仕方ありません。

姉さんは追ってきませんでした。しばらく  
して明りも消えました。私の胸はなかなか静  
まらず、長い時間、寝付くことができません  
でした。

○

「ユキ、起きなさい。遅刻するわよ」

朝、姉さんがいつもと同じ口調で声をかけ  
ます。私はドキドキしてしまい、とても起き  
上がる勇氣はありませんでした。

「先に行って」

「そう。じゃね、これ忘れてたわよ」

パジャマが、乱暴に私の顔に投げつけられ  
ました。



○  
その晩も私は遅く帰り、さっと寢床にもぐりこみました。

「ユキッ」

「ドキッ」

「一寸こっちにいらっしやい」

またです。今日の声は威圧的です。私はイビキをかいてみました。すると夜襲です。姉さんが私の寢床に飛びこんでくるなり、脱がせようとするのです。私は姉さんを突き飛ばしてやりました。

「やったわね」

姉さんはまた馬乗りになろうとします。私も起き上がって防戦します。ドタバタやっていると姉さんは卑怯にもくすぐり戦法に出てきたのです。私が極端にこれに弱いことを知っています。笑い転がっている私を、姉さんは簡単に腕をねじ上げ、馬乗りになりました。

「さあ、降参か」

俯伏せにされ、両手を背中にねじ上げられ、たいした抵抗もできません。

「降参」

「おとなしく裸になるか」

「いや、いやよ」

「よおし」

姉さんはお菓子を包んであった紐で、私の両手を、縛ってしまいました。こうされてはどうしようもありません。スリッパがたくし上げられ、頭上をこえ後手で止まります。丸い乳房が目の下で弾んでいます。その上、姉さんは、パンティにも手をかけるのです。

「お姉さん、やめてよ。ひどい、いや」

仰向けにされます。固く閉じた瞼の裏をカッと熱いものが走ります。恥ずかしい。でも私は、その恥ずかしい中で言いしれぬ悦びを感じていました。

「かわいいわね」

姉さんはすねて横向いている私の顔を持ち上げキスします。私は男性よりも先に、同性にキスされたことになってしまったわと、ぼんやり思っていました。姉さんの顔がだんだん移動して、ひどくくすぐったい感じがします。

「いや、かんにん、お姉さん」

「うるさいわねえ」

姉さんは、とても乱暴です。脱がしたばかりのパンティを私の口に押しこむのです。暖かい臭いが鼻をつきます。

だんだんと滑り降りる姉さんの唇。なんと

も例えようのない感触。それは到底、独りでは到達できない境地でした。私は自分のパンティを固くかみしめたまま、不思議な天国を見出していました。

○

その日から甘美な日々が始まりました。私は姉さんに完全に屈服したのです。

姉さんはますますずばらになり、私のまったく致命的な弱点を握ったのをカサにきて、専制君主のように何でも私に言いつけるのです。蒲団の上げ下ろし、部屋の掃除、洗濯、本や新聞の整理、ノート写し、当番制の寮内掃除……。うるさいことはなんでも私の役目ということになりました。

でも私は、嫌などどころか毎日に初めて生きがいを感じ始めていたのです。真の私の、生きがいを……。

特定の日以外、私は外出する時、姉さんに許可をもらわなければなりません。許可というのはパンティをとってしまうことです。

一緒に出る時、姉さんは気が向いたら、あたりを見まわして検査し、確認するのです。その時の恥ずかしさとスリル。

一番困ったのは、フリルのスカートで無理矢理スケートにつれていかれた時です。



一緒にない時も私の意識は姉さんから離れられません。姉さんは知っており、姉さんが強制したことですから。階段をのぼる度に姉さんのいたずらっぽい目が浮かびます。

強制される喜び。強制されることによって私は気が楽になり、強制されることによって恥ずかしさと危険は一層、増すのです。

寮の中は女ばかりでつい気もゆるみがちであまりに危険ですから着用します。

私の露出癖は、二人だけの世界のことであることは姉さんも諒解してくれているはずです。「みんなに言ってみよう」などとおどかすことはしばしばありますが、その姉さんの口調は、絶対にそんなことはしないということとを私に確信させてくれるのです。

夜の姉さんの呼びかけも、だいたい寮生の行き来なくなる十二時過ぎです。それでも姉さんに縛られている最中にドアをノックされ、あわてたことが二度もあります。ですから、どちらも翌日一時限目の授業のない月曜と木曜の夜に、ほぼ決まってしまうました。

○ 「ユキ、一寸こない？」

私はこの言葉を待っているのですが、姉さんの部屋に入っていく時の表情に困ります。

姉さんが望むからしぶしぶと仕方なく、というかたちを私は、とりたいのです。

「もっと、うれしそうな顔をしなさいよ」

姉さんは意地悪く指摘します。あつさり裸にされて荷造り用の縄で後手に縛られ、乳房の上下もきっちり締め上げられます。抵抗はもうしないのですが、手が自由ですと私は何となくきまりが悪いですし、姉さんも思うように扱えないからです。

それに「縛られてしまった。もうどうしようもない」というこの意識が、私の燃え上りには欠かせません。見せたいという願望を意識することによって却って抑圧された行動が一本の縄によって解放されるのです。私の露出癖は、強制によって初めて自由な発散をすることができなのです。

私は縛られることがすっかり好きになりました。全裸のままうなだれて縄を待つとき、背に組んだ両手に縄のかかる瞬間、肌に喰い入る程に胸を締め上げられる瞬間、私の感覚は幸福に酔っているのです。

小気味良さそうな姉さん。可哀そうな私。

私は異次元を遊泳するような気持で、姉さんの視線に刺し止められた捕われの身をもがき悶えるのです。いえ、姉さん以外の、私の想

いの中に居る大勢の男性の視線の中を……。

姉さんは私をそんな姿にしてから、転がしてみたり、歩かせてみたり、押入れに閉じこめてみたり、時にはくすぐり、つねり、時にはやさしく愛撫し、時には残酷に責めつけ、あるいはもう一本の縄で椅子に縛りつけたりまたは両足を首まで引き上げて固定してみたりするのです。

私はいつも、頭の中ではあまりの恥ずかしさに頬を熱くし、身をよじらせてしまうのですが、体の方は正直に愉悅の証しを表わし、姉さんを喜ばしてしまうのです。

○

しかし、私と姉さんの間柄は同性愛というようなものでは決してなく、遊戯とでもいうような域を出ませんでした。二人一緒によく男の人達と遊びに行きましたし、姉さんは恋人らしき人がいるようです。私にも、いつか素晴らしい男性が現われるだろうと思っていた。もっとも、私の素晴らしいというのは随分、普通の人と違うようでしたが。

姉さんは私の露出癖を面白く思っていると同時に、それをいいことに、自分の女としての肉体の変化を、私に実験することによって知ろうとしている気配があります。私が燃え



上って取り乱すと喜んでいるんですから……  
だいたい姉さんは、男の人のように知的探求  
心が強く、観念的に体験できる人なのです。

○

ある夜、私は椅子にまたがった形に縛りつ  
けられました。姉さんは壁にもたれて私のす  
ぐ前に坐りこみます。

「卒論のテーマね、異常性愛の心理にしたわ  
よ。一寸恥ずかしいけどね。わかっているわ  
ね、ユキがモデルよ。協力するのよ」

いやな感じですよ。異常性愛のモデルだなん  
て……。どんなことを実験され、観察される  
のかわかりませんが、とにかく承諾しない方  
が無難なことだけはわかります。でもとても  
断われそうではありません。

「学問のため、私の卒業のためよ」

いつもの手です。

「いいわ」

どうせこんな恰好で縛られているんですか  
ら、姉さんに逆らいきすることはできませんし  
無理難題はあるでしょうが、結局、最後には  
私を悦ばすことになるんですから、大義名分  
さえあれば……。

「じゃあ、訊くことには何でも正直に答える  
のよ、わかった？」

「……」

「返事は！」

「はい」

こういうふうには、一つずつはっきりさせ、  
追いつめていって、私に恥ずかしいことをさ  
せたり言わせたりするのが姉さんのテです。

「いつ頃からなの？」

「何が？」

「露出症よ。意識したのは？」

「そんなこと、知りません」

「知らないはずはなくてよ」

姉さんは答えやすいように、「中一？ 中  
二？ 中三？」と、数え上げます。私は本当  
に、はっきりしないんですが、問いを繰り返  
されて、中二のところで、うなずいておしま  
した。

「原因はわからないの？」

うなずきます。

「よく考えてみてよ。それで、やっぱり  
男の人に見られたいんでしょうね」

私は赤くなって、かすかにうなずきます。

「ユキの初恋は、いつ？」

高一のところで、うなずきます。

「どんな人？」

「同級生で不良っぽい人」

「初潮は？」

中一です。

「あなた、勿論、知ってるでしょ。マスター  
ベーション。いつ頃から？」

「知らないッ！ もういや」

「何言ってるの、研究のためよ」

姉さんはしつこく訊きます。仕方なく中二  
のところがかすかにうなずいておきました。

こんな恥ずかしいことを訊くなんて……。

「そのとき、どんなことを想像するの？」

ああ、そんなことまで……。こんな質問は  
うなずくだけではすみません。姉さんは私の  
お腹をつねり強要します。仕方ありません。  
拷問によって告白させられる想いで一切をさ  
らけ出す決意をしました。そして一種の爽快  
さを感じながら、私は思いきって口走ってし  
まったのです。

「満員電車ですら者にとりかこまれ、むり  
やり裸にされるの。吊革に両手をつながれて  
しまった私を、みんなじろじろとみるの」

○

日曜日でした。

「ユキ、出かけるわよ」

「どこに行くの？」

「いいところよ」



それ以上は言ってくれませんか。

清華荘というマンションに、姉さんは慣れた様子で入り、『時本』と名札の出ているドアをノックします。

「おお、入れよ」

姉さんによく似た、細面の端正な男性が顔を出し、気さくに言います。

「兄貴だから、遠慮しなくていいわよ」

広告会社に勤めていると紹介されたのち、私は食堂兼応接間というような場所に腰掛けました。姉さんは気楽な調子でお菓子などを出してくれます。

ステレオと豪華なベッドと本のびっしりと詰まった本棚が目に入ります。独身にしては綺麗に住んでいます。お給料が良いのか、うらやましいほど贅沢です。

姉さんの兄さんの、一寸不愛想な物の言い方、その反対のひとなつこい笑顔、頭の良さを表わす眼、倦怠感のある身のこなしは、私にすぐ好感を持たせました。

姉さんは、口あたりの良いブドウ酒を出してきて、しきりに私に勧めます。お酒は姉さんより強いのですが、初対面の男性の前では遠慮深く振舞うのが当然だと思えます。特に相手が魅力的な場合には……。

会話はなんだかあまり弾みません。中心になるべき姉さんが、何か考えこんでいる様子で、話よりもお酒にピッチをあげています。

仕方なく私が、兄さんに仕事のことなど質問して間を持たせます。

唐突という感じで姉さんが

「で、どうお。みたい？」

と兄さんに言って、私を見ます。

「そりゃあ……」

兄さんの切長の目が、一瞬まぶしそうに私の上に走り、私は急に不安になりました。

「ユキ、こちらにいらっしゃい」

「なによ」

私は用心深く静かに立ち上り、静かに姉さんに近寄りました。スカートの下は例によって風通しが良いんですから……。

姉さんは私を次の間に引張っていき、いたずらっぽい目をして寮から提げてきた紙袋から取り出したものは、あろうことか、いつもの縄ではありませんか。

私は、目の前が暗くなるような気がしました。顔から火が出るとはこのことです。先刻までなにげなくおしゃべりしていたあの兄さんが、私の秘密を知っていたとは……。姉さんは私の信頼を裏切っていたのです。

「いやよ。絶対にいや！」

手をとられた時、やっと私は言いました。

「いいじゃないの私の兄貴なんだから。……あなただって、男の人にみられたいと言ってたじゃないのよ」

私は困りました。部屋を飛び出すわけにはいきませんし、大声を出すのもみっともない話です。もみ合っていると

「私の顔をつぶす気なの？ そんなことをしているの？ 第一、もう話しちゃったんだから一緒にじゃないの」

姉さんは勝手なことを言って、真剣な目になります。その目に会うと私は力が抜けるのを感じました。姉さんがこういうかたちで私に迫るのは、充分に検討したうえで、私が拒否しないと、また安全であると、見込みをつけたに違いないのですから……。もはや私には、拒否する機能は残されていないのです。

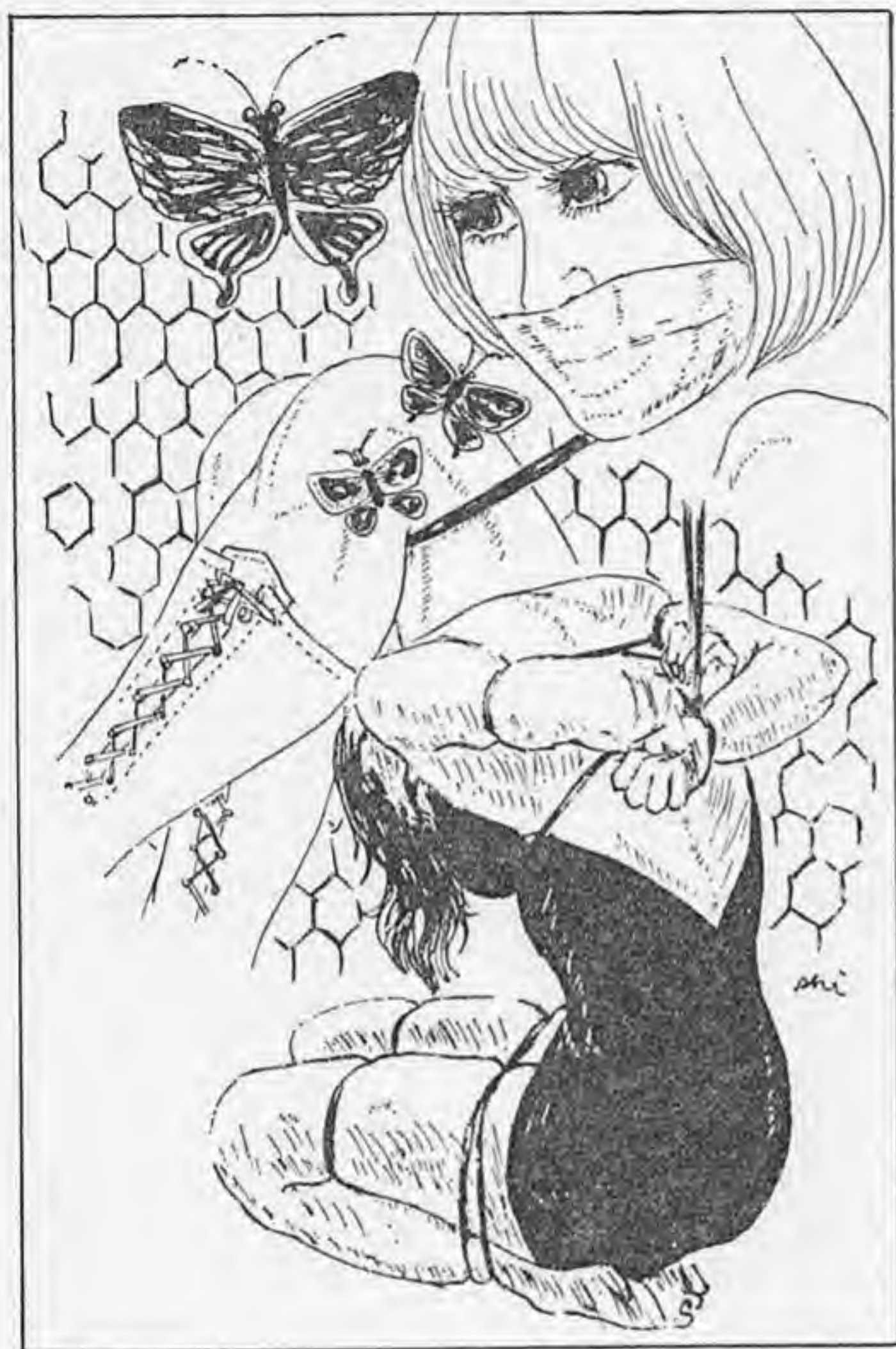
私は思い切りよく覚悟を決めました。最近ほんとに思い切りがなくなったこと。

実際、空想ではこれ以上のひどい場面を何度も経験していましたが、いつの日にかの実際に備えて、ひそかに心構えをしていたことは事実なんですから……。

あまりに突然な気もしましたが、考えてみ



## 読者ギャラリー『蝶の幻想』志羽利也



れば、こういう機会は大体突然に起きるのが私には具合の良いことですし、縛られさえすればあとは落着いて実体験の細部を楽しむことも出来そうに思えました。

私は縄をかけられながら、口先では精一杯悲鳴をあげました。

「いやよ！ 何をするの！ 絶対にいやッ！ ひどいわよ、お姉さん。やめて！ お願い」

なにしろこの件に関しては、事前に何の相談も受けていないんですから、すべては姉さんの仕組んだことであり、私は理不尽なことを不意に強制される、いい子ちゃんであることを、第三者にはつきりさせておく必要と、権利があります。

とうとう後手に縛られてしまいました。「いやだったら、お姉さん。やめてッ！」

なんとかして踏ん張ろうとするふりをする私を、姉さんはわりやりに引立てて兄さんの前に立たせます。そして、そして……。

「ほら」

フリルのスカートは簡単に引き上げられます。私はさらされた半身をくねらし、できるだけ縮まろうとします。

「見られる。とうとう男の人に、私の素肌を見られている」その意識の強烈なこと。目は固く閉じているのですが、肌が男性の視線をまざまざと感じます。

膝の力が抜けて坐りこんでしまう私を、姉さんは力を入れて引き上げます。

ずるずると引きずられるように、玄関と食堂の中間の柱の前に運ばれました。

「一寸、手伝ってよ」

男の人の手が、むずっと後手の腕を支えている間に、姉さんはスカートを外し、スリッパを引き上げて、剥き出しになったおへそのあたりを力まかせにぐるぐる巻きにしています。

「上も脱がそうよ」

「そうね、これじゃ不自然ね」

一旦後手を解かれ、セーター、スリッパ、ブラジャーと脱がされて、また柱を背負う形



に胸も二巻きされて縛りつけられました。

うなだれて、縛られた我が身をちらっと見ますと、縄に上下をはさまれた乳房がぶくぶくと強調されてかなしそうです。透明なストッキングだけが残っていましたのが、かえって恥ずかしさを煽ります。

縄を止めると二人共椅子を運んできて、哀れな捕虜の前で酒盛りを始めます。私は、ますます首を折ります。

露呈の素肌二人の視線を意識して、私の体は固くすくんでいるのですが、内面的にはしびれるような快感が充満し始めてきたのです。やっと心臓に落着きが戻ると急に酔いが廻ってきました。私は自分の心を押さえつけている何かから解放され、大胆になれるような気がしました。

いつか写真で見た銃殺寸前の、目隠しされて柱に縛りつけられていた人の姿が思い浮かびます。彼が死を運んでくる銃弾を避けることができなくされているように、私も羞恥の思いを運んでくる視線を避けることができないように、いましめられているのです。

実際、ある一面では私はそれを避けたいのです。穴の中にでも飛びこみたい位です。しかしそうすることもできず、相変わらず恥ず

かしい裸身を晒して存在しつづけていなければならぬのです。この現実と意識に、私の恍惚の秘密があるようです。

「どう？ 私の裸人形は」

「素晴らしいよ」

兄さんが、ため息と共に言います。

「ユキ、本望でしょう」

私は、無意識のうちにうなずいてしまっている自分に気づき、慌てて顔をそむけます。頬が一層、紅潮しただろうと思います。

「かわいいね」

「ほら、嬉し涙が流れてきた」

私への誘い水です。姉さんのいつものテです。私はもう抵抗する力も気も残っていません。兄さんの顔が触れんばかりに近寄るのを感じて私は呻きました。

「ああーっ」

姉さんの指が肌にちよっと触れただけでも体中に電流が走ります。

「素敵な眺めだな」

「本望よ、姉さん、どうなってもいいわ」

私は心の中で叫んでいました。

○

「この人形、譲ってくれよ」

「そうね。でも高いわよ」

「五千円でどうだ」

「十万以下では、だめね」

「兄妹の間で高いぞ」

「あら、安い買物よ。処女だし、マゾの保証付きなもの」

姉さんの冗談は怖ろしいことを言います。

「ほんじゃ手付だ。あとは分割」

「ユキ、十万で売ったわよ。いいわね」

私は吐息をもらしました。

今度は中東の女奴隷です。かわいそうな女奴隷は奴隷商人の手によって市場にさらされ買主は慎重に体中を調べて、大金を払うのです。買われた以上、煮て喰おうと焼いて食べようと主人の意のままです。

私も買主の検査に、今度こそ死にたい程の恥ずかしさを感じ、身をよじり呻きました。

○

「丁度ライトもあるし、記念写真を撮ろう」

ガタガタといろんな道具が出され、ライトがこうこうと照らし始め、私の裸身を一層、鮮かにし、羞恥をかきたてます。

「顔をちゃんとこちらに向けて、笑うんだ」

私は半泣きです。こんな記念写真って……

パシャッ

着衣の二人に囲まれて



パシヤッ

姉さんにキスされ、兄さんが片足を持ち挙げて

パシヤッ

二人に両足を持ち挙げられたままで

パシヤッ

冷たく響くシャッターの音が、引き返すことのできない私の道を刻みこむかのように、無情に響きわたります。

「明子もどうだ？ 若い内が花だぜ」

姉さんが一寸、考えて

「そうね、きれいにとってよ。こんな、みじめなのは、いやよ」

私は、そのまま放っておかれました。薄目を開けて見てみると、姉さんは裸になって、さかんに、きどったポーズをとっています。

「わりかし、いい線をしているな」

本当に姉さんの体は均整がとれていて、肌もきれいですから芸術写真になりそうです。それに比べると、私の先刻、撮られた写真は何と呼ぶべきでしょう。

「こんなのどう？」

姉さんは椅子にあぐらを組んで坐り、両手で仏様のポーズをとります。有難くも悩ましい仏様です。

次は、女キリスト受難の像です。細くくび

れた胴から白く丸く広がる腹部。キリストは断末魔の法悦に身を震わせ、見上げる数多くの殉教者の口には至福の美を讃える歌が……私は、徐々に醒めていく熱っぽさを、想像の炎でかきたてます。

神聖なるものを地に墮す、ひどくあやしい雰囲気、こうこうと明るい室内に密度を増します。

○

「レスビアンをやれよ」

私はやっと柱から解放されましたが、すぐにまた、今度は兄さんの手で後手に縛られてベッドに持ち上げられました。白く糊のきいたシートに、かすかに男性の匂いがします。私はまた、ひとしきり陶酔の呻きを抑えることができませんでした。

『男性の目』と『姉さんの攻撃』に不自由な身をくねらす度毎に、その目を意識し、私の感覚は耐え難い程に鋭敏になるのです。

いつもは冷静な姉さんも今日は裸になっているせいか、兄さんに見られているせいか、かなり燃え上っているようで、つねり上げ方一つでも、いつもより執拗です。それが時々シャッターの音と共に、一層私の陶酔を深

めるのです。

○

「交替だ」

兄さんの声に私はギクツと体をこわばらせます。姉さんも一瞬とまどった様子でした。姉さんが私の傍を離れたとき、私はベッドから飛び降りるなり転げ落ちるなりすべきだったでしょう。でも私は「いやっ」と小さく言い、拒否的に不自由な体をくねらせて背は向けたものの、その寝返った方向は逃げ場のない壁に向かっていました。脳の片隅では私は買われたのだから仕方がないなどと、ぼんやり考えていたのは確かでした。今か今かと恐れる時間が、永遠のように無量に感じられました。

固く引き締まった、逞しい腕を感じとったとき、私は救いを求めるように姉さんの姿をさがしました。姉さんは、先刻まで兄さんの坐っていた椅子に裸のまま腰を降ろし、冷たく光る観察者の目で、私を拒絶しました。

兄さんは、姉さんよりもやさしく、熱心に私に愛を語りかけてきます。私の脳裡に、お母さんの心配そうな顔がふっとよぎります。傷口を針でかきむしるような心の痛みが、何度も私を襲いました。



○  
ライトのせいばかりではなく熱かった空間が、急速に醒めていきます。夢中で転げまわったシートだけが、私の女として開花したことの痕跡をとどめています。三人共ものうく無言で、のろのろと服を着けました。

玄関口で彼は、やさしいキスをしてくれ、「ごめんね」

と言ってくれました。

外には、先に出ていた姉さんが、いわれのない非難と嫉妬の表情で立っていました。

日暮れの、かすかに熱気を残している風の中を、解き放された想いを感じながら、私はうつむき加減に歩をすすめました。

○

私は毎土曜日、叔母さんの家に行くからと言っては、定男さんの部屋に泊るようになりました。

やはり、男性にかけてもらう縄こそ本物です。遊戯だけではなく、心からの愛を感じることができます。

定男さんは素晴らしい男性でした。私が望んでいながらポーズではいやがらざるをえないことを、ちゃんとわかってくれるのです。繊細に、残酷に、おおらかに、徹底的に辱し

められ、私は心の底からマゾヒズムの悦びを自覚しました。

姉さんは毎週月曜日の夜、私の体の変化を観察するだけとなりました。

○

夏休み前の土曜日の夕方、私は後手に縛られ、両足を頭上に持ち挙げられた、苦しくもはしたない形で椅子に縛りつけられていました。定男さんは私のそんな姿を凝視しながらビールを飲んでいます。時々私にも飲ませてくれ、楽しい一刻でした。

が、私の幸福感をもぎ取るようにドアがノックされました。私はドキッとしたが、定男さんは少しもあわてず、まるで予定していたように私に眼隠しをして、ドアを開けました。誰かが入ってきて私の前に坐ったようです。別の視線が加わって私は動けない身を緊張させました。定男さんは何の説明もしてくれません。

多分姉さんだと思うのですが、確認出来る何ものもないのです。疑っては済まないことですが、いくら親しくなっても信頼していると信じていても、まだ日が浅く、定男さんが他の男の人——いや女の人かも——を無断で部屋に入れないという保証はありません。

もし、それが男の人の場合、私はきつとひどい目に会わされるでしょう。私は戦慄しました。女の人の場合だって、姉さん以外なら絶望的です。もし女の人としたら、きっと定男さんと親しい女性に違いありません。しかも、どうも物腰の気配からすれば女性のようなのです。姉さんであってくれ、私は祈りました。でも姉さんなら「ユキ、どう、素敵ないろね」などと言ってくれそうです。

二人はまったく無言でビールを飲んでる様子です。定男さんが、次々にビールを私の口に注ぎます。定男さんではない手も、時々私の肌の縄目辺りにかすかに触れます。でも、まだ判りません。

あまりに長い無言が、私に推定を与えました。姉さんに違いありません。しゃべれば姉さんであることが判るから、無言でいるのです。姉さん以外であつたら、こんなに長く二人とも無言でいる必要はないのです。誰が入ってきたのかしらと、私がオロオロしているのを楽しんでいるのに違いありません。本当に兄妹そろって意地悪です。

それをみはからったように

「卒論のテーマね」

姉さんの声です。私はなつかしい思いで聞



き、安堵しました。

「異常性愛の心理というのにしたの。サド、マゾ、露出狂と大体書けそうんだけど、獣姦とか屍姦の心理が判らないのよ」

「ふーん、そんなもの判るわけがないよ」

「ユキにやってもらおうかしら」

「なんだって？」

「獣姦よ。犬かなんかと。感想を聞くの」

いつもの冗談です。観念的挑戦的な……。

「そりゃ面白そうだな」

「シェパードなんかどう？ 血統書付きの」

姉さんの声は弾んでいます。

「どうせならブルドックがいいよ。血統書な

んか関係ないだろ、この際」

「そうかしら」

「馬もいいぞ」

「そんな。それじゃ余りかわいそうね」

「試してみようか」

ああ無情、冷たい。

「いやあね」

「いっそ、豚はどうだ」

「そうね。豚小屋に放りこんでおけば、豚も間違えるかもね」

「ユキ、どうする？ シェパード、ブルドック、馬、豚のうち、どれがいい？」

そんなこと答えられる筈がありません。それより私は、先刻から辛抱している尿意が気になって仕方ありません。でも眼隠しされたこんな恰好で口をきくのも気がひけていたのです。

「とにかく、ユキが自分で選ぶのよ」

姉さんが邪険につつつきます。姉さんは私に先に女になられたのが癪にさわってか、最近ヒステリックに私に当たることが多いです。すべて、姉さんのせいですのに。

定男さんが椅子から離してくれ、眼隠しをとってくれました。後手はそのままです。私はやっと小さな声で訴えました。

「トイレに行きたいわ」

「まだよ。これを選んでからよ」

姉さんは紙を千切って何か書いています。五つの紙片を折りたたんで、次の間の赤い絨氈の上にばらまきます。

「いいのを拾ってらっしゃい。いいわね、口でくわえるのよ。一つだけ空くじがあるわ。おっと、まだよ」

私はまた眼隠しをされました。運動会のゲームみたいです。とにかく尿意にせかされ、あるかどうかわからない空くじをたのみに探しに出かけます。

私だけが全裸で、後手に縛られ眼隠しをされて、心細くよちよちと歩いています。他の二人は、私のみっともない姿を笑い合ってはビールを飲んでいるようです。他人が見たら何と思うでしょう、かわいそうな私。

足に当たった一つを口で拾おうとします。お尻に二人の視線を感じます。ある筈の紙片がなかなか口に触れません。

「いい恰好よ、ユキ。本当に豚みたい」

柱にぶつかり椅子につまづいてやっと戻っても姉さんはなかなか受取ってくれません。

「ここよ、ここ」

そんなことを言われても、盲に判るわけがありません。尿意は募ります。私は顔中で姉さんの手を捜しました。

「あら、ブルドックよ」

姉さんはうれしそうに言い、眼隠しを外して、確認と承諾を強めます。

「手を解いて。もれちゃうわ」

「もらしてもいいわよ」

姉さんはますます意地悪さを発揮します。定男さんが立ってきましたので、解いてくれるものと思っていると、いきなり柱に縛りつけられました。

「いやん、解いてよ。だめ、トイレッ」



定男さんは下腹部を力一杯締めあげます。圧迫が加わり私は呻きました。

「女の立ちションだ」

姉さんが心得て、ビールを口移しに飲ませてきます。

「ユキ、するときは言うのよ。何かあててあげるから」

「いやよ、こんなの。絶対いや！」

「まだ飲み足りないようね」

またビールが無理に流しこまれ、私はむせかえりました。体の中と外を冷たいビールが走ります。姉さんと定男さんは楽しそうに交互にビールを私に飲ませては、椅子に坐って苦しむ私の裸身を眺めるのです。

「私、一寸行ってこよう」

姉さんがトイレに立ち、帰ってくると定男さんも

「俺も行ってこ」

「ああさっぱりした、ユキはまだいいのか」

「かんにんして。もうだめ」

私は限度を感じました。もう恥も外聞もありません。身もだえするとますます縄が下腹を圧迫します。

「ユキはこれにするのよ、上手にね」

洗面器が足元におかれます。

「ああっ。いや！ もうかんにんして、トイレに行かして。早く！」

私は体が震えるのを感じました。どうせトイレに行かせてもらえそうにはありません。

でも、生理的欲求はいつまでも我慢できるものではありません。私は覚悟しました。

洗面器を見詰めて身構えました。それでも最後の抵抗を試みます。すると、

「出ないようね」

姉さんは洗面器を引っこめるのです。私はまた我慢を重ねなくてはなりません。

「ビールが足りないんだよ」

定男さんがのんびりと言います。私はそれどころではありません。

「いやっ、もうだめ。早くっ」

「うるさいわね、何度も。……そのまましちゃいなさいよ」

姉さんは他人事だと思って、気楽そうに言います。

「洗面器がほしい？ほんとにする？」

私は必死にうなずきました。姉さんが足先で寄せた洗面器に二人の視線が集中します。でもできません。しようと思うのですが、どうしてもできないのです。

「往生際が悪いわよ」

姉さんがポンと拳で下腹を叩きます。それを機会に、私は自分自身の抵抗を克服することができました。

「フッフ。随分な勢いだこと」

二人は私の顔をのぞきこんでは嘲笑するのです。私は肩で息をしながらうなだれ、死にたいと思っていました。でも私のもう一つの感覚は、解放の虚脱感と共に、確かに悦びを感じていたのです。二人は消えいりたい思いでいる私を、そのまましばらく晒し物にして罵り、やっと風呂場に解放してくれました。

○

体を洗ってお湯に入ろうとすると、姉さんがのぞきこんで、

「ユキ、帰るからね。いいブルドック見つけてきてあげる。血統書つきのやつをね。心当たりがあるのよ。楽しみにしてらっしゃい」

まだ言っています。冗談じゃないわ。でもそんなことってできるかしら。私はお湯に、怖ろしい空想に、とっぷりと漬かりました。

お湯から上り、最近定男さんが買ってくれた大鏡に我が身を写し、白くぬめりの出てきた肌に見入り、うっとりと思いました。

「少し太ったんじゃないかしら」



—— 浣腸薬とオシメカバ ——

## アメリカ製品

## 実験記

井 上 俊 彦



## (一) 購入

「アメリカン・ファマシー」というと御存知の方はすぐお解かりと思いますが、店の名前よりも先に、その店に慣れて時々買物をしていた私は、正式にはその店が何を販売目的としているのか知りませんでした。アクセサリ、食器類、飾物からクリスマス・カード、化粧品と日用雑貨品を主とする、アメリカ製品が小綺麗に並べられ、アメリカの出店のようなもの、と今まで受け取っていたのです。

最近故あって英語に興味を持ち始め、解らない横文字、片カナは、全て辞書で調べる習慣がつき「ファマシー」もそのような言葉の一つとして調べたのですが「薬局」を意味すると解ったとき、私は「燈台もと暗し」という諺が痛いほど理解できました。私は薬局に関しては、そこで販売される品々に興味があるからです。

薬局には普通病気を治癒するための薬品を置いてありますが、奇巧の読者が薬局に興味あるという場合、それは薬局で売られている「浣腸」に興味があるということでしょう。私も勿論そうであって、日本の薬局へ時々顔を出しては、グリセリンや、大人用のオムツカバーを購入していました。そんな私ですから、ファマシーが薬局と解れば、落着いて坐っていることもできません。薬局である以上

アメリカ製の浣腸や、場合によっては大人用のオムツカバーも、その店で売っているだろうと思いました。日本の製品は大かた知っていた私が、次にアメリカ製品に気を移すのは当然のことでしょう。

三十坪もない店には、いつもと変わらず白い制服の女店員と買物客の日本人、外国人、近頃では慣れて度胸がついたのか、買う物が浣腸とオムツカバーであっても、胸が高鳴ることもなく、いつもと同じような調子で、店内をキョロキョロ見廻し、捜し歩きました。薬局なのに売り場の大半は日用雑貨品。だがこんな所にとられる場所に、そして、小さな店なのに今まで気づかなかったのが不思議に思われる所に、一連の薬品が並べられていたのです。恐らく横文字で書かれている商品ばかりなので、見落としていたのでしょう。

アメリカ製品ですから全て英字、商標も英字なら薬品名までも英字で、まだ横文字に不慣れな私には、それらが一体何のための、どのような薬品なのか、充分理解できないものばかりでした。それでも、それらの薬品を置く棚には、所々に小さく日本字で、頭痛薬とか胃腸薬とか、日本客のために書かれてあったので助かりました。しかし、さすがに「浣腸」という二文字は、捜しても捜しても見つからず、わずかにこれと思われる「緩下剤」と書かれた棚がありました。アメリカ人は体



格も立派ですし、強健そうだから、浣腸薬もさぞかし強力だろうと思ひながら、「グリセリン」の横文字を頼りに、小さなビンを手にしました。これが恐らく浣腸薬でしょう。今までその気もなく店内を見ていたので、見逃がしていたのです。

こうなれば事のついでで、オムツカバーも探すことにしました。どちらかと言えば、私は浣腸よりもオムツに興味のある方ですし、浣腸はオムツをするための付属品と考えていましたから、むしろ、オムツカバーが見つければ、との期待の方が大きかったのです。小児用のオムツカバーなら、今までも乳児用品売場のところで見かけていました。それらは大体ビニール製で、何とも味気のないまた可愛気のないオムツカバーで、日本製のと比較しようもない品物でした。子供に美しい物を着せたいという日本人の気持は、そもそもオムツカバーからして、アメリカ人よりも勝っているようです。

さて、大人用のオムツカバーは……なかなか見つかりません。大人用のオムツカバーは米語では「ダイアパー・カバー・フオ・アダルト」でしょう。しかし、そもそも棚の標示は日本語が概括的な上、それ以外は全て横文字ですから時間がかかります。「生理用ベルト」「生理用パンツ」の棚はあるのですが、オムツカバーと思われた厚手のゴム製品は、

丁字帯のようで、一時は喜ばしてくれましたが、これは脛洗滌器。折角来たのですから私は恥も外見もなく、女店員に尋ねることにしました。第一、売り場を何回もぐるぐる廻っているのは、かえって怪しまれます。

私は勇気を出して

「妻が病気で、どうしてもオムツをしなければならぬのだが、オムツカバーはあるでしょうか」

と尋ねてみました。

「オムツカバーですか？ 大人用ですね」

女店員はそう言って「生理用パンツ」の棚の所へ行き、二、三の品物を手にして見えました。私もそこで捜したはずなのに、と心の中で思っていると、女店員は「少々お待ち下さい」と言って奥へ引っ込みました。やはり、あの棚にはなかったのでしょうか。

しかし考えてみればおかしいもの。その女店員は恐らく、今まで大人がオムツをするなど聞いたことも無いでしょう。心では一体何を考えているか解りません。それでも私はその女店員が何と思おうが、お構いなし。そもそも始めて会うのだし、これから会ったとしても、お互いに住所を知ることもなく、客と店員の間柄にすぎません。しかし、こうは思わないでしょうか、

「随分優しい御主人ですこと。奥さまが病気で、オムツをあててさし上げるなんて、この

人の奥さまは幸せね。私もこんな人と結婚したいわ……」

暫くして、その女店員が小さな白い箱を持って私の前に現われました。

「これなんかがよろしいと思いますが」

そして箱から中のものを取り出して開けて見せるのです。客も多勢いるというのに。私はそれまで平気だったのに、急に頭に血が登ったようにカッカとしてしまい、

「ええ、それで結構です」

と、よく調べもせず、承諾してしまいました。

「大きさは、どの位でしょう？」

「フ……普通ですが……」

箱の絵は婦人がそれを着用している姿。やっとなと落ちてきて、日本製のオムツカバーとは違うなと感じながら「グリセリン」と「それ」を持ってレジへ行きました。

## (二) 実験

実験と、おこがましい小題をつけはしたものの、その実際は使用するものは僅かに二つしかありません。ただアメリカ製品がどのようなものか、またアメリカ製浣腸薬とオムツカバーを買うことが出来たということを書けば、私の目的は達せられるのですから、ここでは私の実験内容を、ごく簡単に述べさせていただきます。



グリセリンのビンの標題は「グリセリン・サポジタリース(米語)」で、それが坐薬であると解ったのは辞書で調べた後でのことです。ビンをあけると、細長い棒状の柔らか味のある固型物が数本はいていました。坐薬の浣腸は、フランスの製があるとかいう記事を以前読んだことがあります、見るのは始めてです。坐薬浣腸を知っただけでも一つの収穫だと思いました。これならば浣腸責めには便利です。婦人に強制浣腸する場合にグリセリン液や、イチジク浣腸を使用すると、失敗したら畳や床を汚してしまうでしょう。しかし、この坐薬浣腸は、効果はさておき、固形物ですから失敗しても汚す心配は毛頭ありません。

棒状のそれは一方が細くなっており、やはり強制浣腸用に一番だと感じました。

ところが便意を耐えるべく、説明書の英文を訳し続けましたが、便意らしき便意は、あまり感じません、ただ、ある程度の異物感だけです。食塩水のような激しい便意や、普通のイチジク浣腸の場合とは全く違いました。浣腸癖にならないようにとの配慮からでしょうか、少しもの足りません。余裕があるので悠々とオシメをあてがい、アメリカ製のオムツカバーを箱から取り出してみました。「インコンティネント・パンツ」とは、要するに失禁用のパンツです。失禁用のですから、む

ろんアメリカ人が使用する場合でも、オシメを併用するのでしょうか、これはまた何と大きなサイズ。

でも、寸法を聞かれた時、確かに「普通」と言い、箱にも「ミディアム(中庸)」と書かれています。やはりアメリカ人は大柄なのだ、改めて認識しながらオシメの上にはいてみました。すねの部分と、胴の所がゴムでぴっちりとり、成程、失禁しても大丈夫なようです。

しかし、洩れる心配は無いのはいいとしても、医療用品という域を少しもでていない品物です。日本製の大人用オムツカバーは乳児用のを大きくしたようなもの(股開き型)で単にビニール製の物でも、腰ひもがついており、オムツカバーという気がします。だがこれは全くパンツそのもので、愛らしさも幻想もありません。

便意も、失禁パンツを着けて立ち上ったとき、やっと感じました。

### (三) 後 記

アメリカ製品ということ、日本人にありがちな欧米製品に対する憧れに似た気持のまに購入しましたけれど、結果はあまり良くありませんでした。坐薬の浣腸も、強制プレイに良さそうに思ったもののその効き目が薄いのであれば、いくら便利だと言っても、施

された側が何とも感ぜず、便意に苦しむ姿を露呈して、トイレを切望する浅ましい姿を見せることもないでしょう。むしろ平然として何をされたのか解らずに、そのまま帰宅できしてしまうかも知れません。それでは折角プレイに漕ぎつけても、結局は失敗です。

オムツカバーも、ビニール製のぶかぶかしたのでは、第一、オムツカバーという気がしません。尤も、こんなことをいうのはオムツそのものに愛着を持っているからで、本当に必要とする病人の身にしてみれば、一目でそれと解るオムツカバーでは、乳児なみに扱われたようで恥かしくて、あてがわれるのを拒むかも知れません。その点から言えば、アメリカ製の「失禁パンツ」は、患者の気分を害うことなくオムツカバーの役目を果し、人間尊重という見地に立てば、すぐれたものと自慢することができでしょう。

しかし私は、いくら実際にオシメをしていても、この失禁パンツでは、オシメをしていないのだという気分にととうなれませんでした。オシメをした以上は、やはりオシメをしているのだと意識させてくれるようなオムツカバーがほしいと思ったものでした。でも、最近になって聞いたところでは、ガムになっている緩下剤があるとのことですが、まだ試してはいません。それならば、プレイに用途はありそうに思うのですが……。





第三十二回

## イーラ招喚

死の世界に殆ど半身を踏み込んでしまっていたイーラを、この世に呼び戻したのは医学の力ではなかった。

なつかしい新津謙介の声を耳もとで聞いたという一事だけで、彼女は生きる意欲を回復したのである。

愛の力が奇蹟を生んだともいえよう。

それも、たった一回きりだった。高熱にうなされ、死生の境をさまよっていた彼女。さすがのウィリー博士や佐野女医でさえ匙を投

げようとしていたイーラが、それ以来、薄紙を剥いて行くように、快方に向かったのである。

いかに新津が戦意を捨てたからといって、それを鵜呑みにするような有明ではない。彼が部下を信頼するようになるには、それなりの時とテストを経なければならぬ。又、仮に信じているからといって、裏切りの隙をあたえるような有明でもない。万事に慎重な彼が新津の取扱いに注意の上にも注意を重ねるのは極めて当然のことというべきである。何故なら、新津は未だ「男奴」ではないからである。去勢された男奴ならまだしも、今の新津

前号まで「有明はガボン共和国の「蔭の実力者」でもあり、世界の麻薬組織と対決する闘士としても知られていた。しかし彼の本当の顔は、多数の美しい裸女にとりまかれる秘密王国の独裁者だったのである。数奇な運命にもてあそばされた混血娘イーラも、その一人だった。彼女の両親が麻薬に関係していたことから、彼女も危うくそのイケニエにされるところを有明に救われたのである。彼女は又国際秘密捜査官新津謙介と愛し愛される仲だった。新津も有明に囚われている。彼女の病気が絶望的となった時、有明は新津を利用しようと決心する。



は爆薬の様なものだった。有明がタッタ一人の男性であるパレスエリアには、数千の裸女が蠢いているのだ。慢性的な欲求不満を、誰しもが抱いている。その点では秦皇の後宮より、もっと重症かも知れない。そこへ男振りがよくて教養のある新津を投げ込んだら、どんなことになるか容易に想像がつくことであろう。鉄の規律があったとしても、好ましくない影響を避けることはできない。

棺桶のような木箱に入れ、施錠、封印までしたのも、無理からぬ処置であった。木箱は嚴重な警戒の中をイーラの病室に運び込まれた。有明は佐野女医までも追い出して、自ら梱包を解いたのである。

用意してあった車椅子に胴鎖をロックすると、有明は新津の両手を自由にした。

それより早く、新津は瘦せおとろえたイーラの手を固く握りしめるのだった。

熱い泪がハラハラと、その上に落ちた。

フツと、イーラが両眼を開いた。

「イーラ、僕だよ、新津謙介だよ。シッカリするんだ。元気をお出し」

叫ぶように新津が声をかけた。

パツと、イーラの頬に血の気が差した。

「オー、オー……」

あとは言葉にならない。にじみ出る泪が彼女の気持を雄弁に語っていた。

たった、それだけだった。新津は再び木箱の中に固く封印され、木箱は秘密の抜け穴からポートエリアに搬出された。(注、ポートエリアとパレスエリアの間には正規の出入口は全くなかった。例の高い崖から投げ入れられた女囚たちは、少数のアマゾン女兵を除いて、生きてパレスエリアを出ることは出来ないのである。そのアマゾン女兵にしても、嚴重に荷造りされて崖を吊りあげられるのが仕来たりだった。したがって秘密の抜け穴は有明の専用であり、彼の声紋がなければ絶対に開かない鋼鉄扉で保護されていた)

つかの間の逢う瀬であっても、新津謙介が近くににいるということを知ったイーラは、真剣に生きることを望んだ。

佐野女医の処置が適切だったこともあずかって力があつたろうが、僅か一カ月の間に、すっかり元通りの健康体をとりのどしたのは驚いてよいことだった。

その間、イーラはひたすら新津に再会することを望んだ。煮えかえるように切ない思慕を抑えかねて、悶々の毎日を過ごした。有明

の指示を受けた佐野女医は、その希望を打ち砕きはしなかったけれども、何かの日課を与え、それが仕遂げられたらという囀を、ちらちらさせて、一日延ばしに引っぱってきたのであった。それが彼女を早く回復させるのに大いに役立ったのであろう。

そして、とうとう彼女は有明のお召しを受けることになった。

病気のため、正規のレセプションを受けていない彼女は、真白い禪とワンピースの、例の未決服を着せられて病院の玄関に立った。

迎えに来た高橋副長をイーラは知らなかったけれども、彼女が乗った馬車を見て驚愕したのも無理ではあるまい。

ギリシア・ローマ時代の戦車を模した短い車体に一本の轡がついていて、それを跨ぐような恰好で一人の女が縛りつけられていた。

その白人女が畜位の女囚であることなどは全く知らないイーラだった。

女であるイーラが見ても惚れ惚れするような美事なプロポーションを見せて、この美しい曳き馬は凝然と立ちつくしている。激しい調教に鍛え抜かれた下半身は、強靱なバネをひそめて、えも云われぬ曲線を形づくっている



た。しかし、どんなに美しいからといって、これは畜位のケダモノにすぎない。そのことをイーラはハッキリと覚らされる。

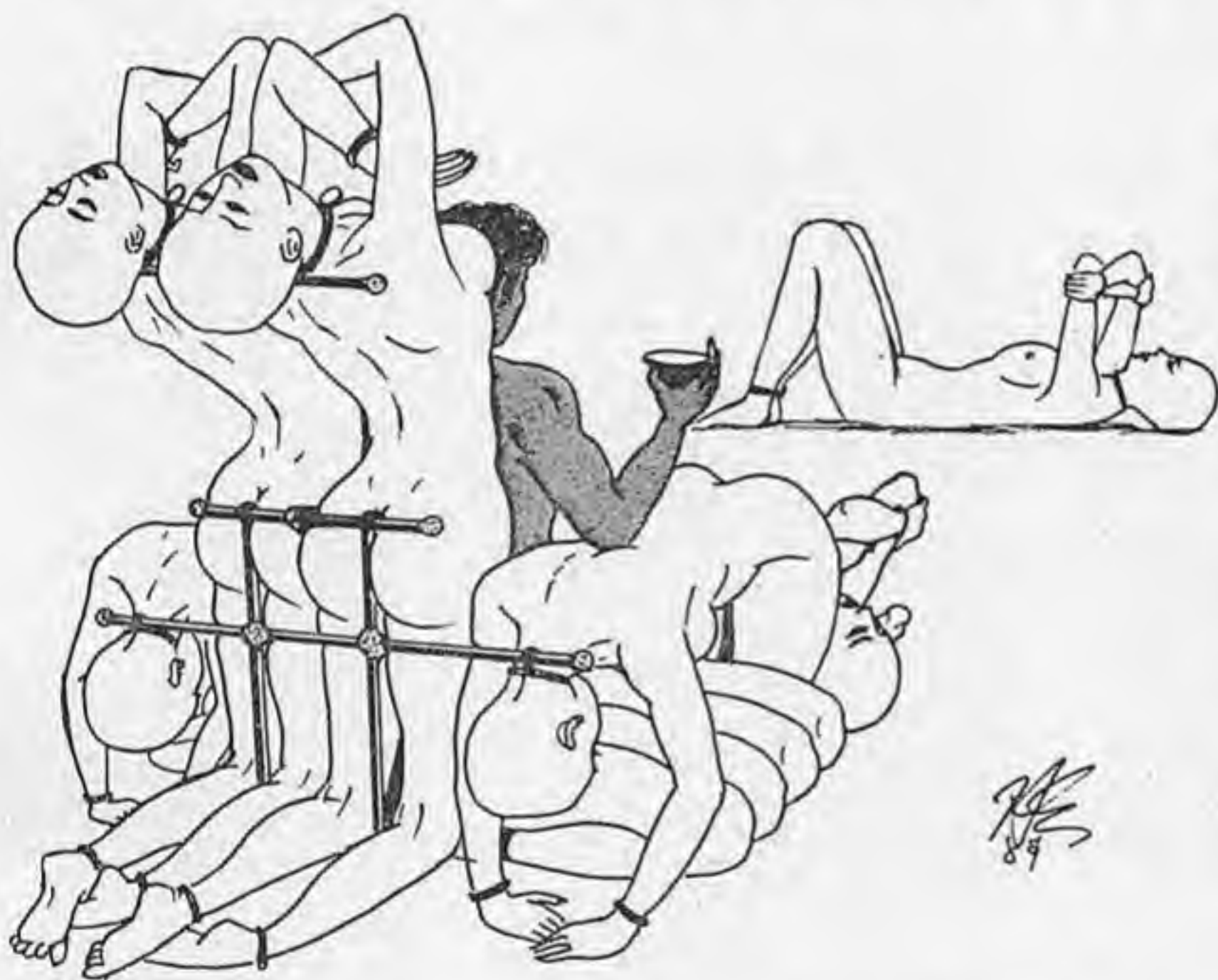
高橋副長とならんでイーラが車台の上に立ち、手摺りにつかまると、

「トウーッ」

と叫んだ副長は、いきなり手に持った鞭を振った。鞭先が美畜の体にハジけると狂った様に馬車が走り出す。イーラは振り落とされないようにシガミつくのがやっとだった。それなのに、高橋副長は又もや、掛け声を繰り返しながら、二度三度と鞭を振るった。馬車はグングンと速度を増した。必死に走る曳き馬の白い背中にウッスラと膏汗が滲んで、縦横についた赤い鞭痕を、いっそう浮き立たせている。よく調教された牝馬は鞭打たなくても結構、駈けるのに、殊更ひどい目に遭わせるのは、有明の指示があったからだ。彼はイーラに、曳き馬が理由もなく打たれる光景を見せつけようと欲したのであった。白い牝馬の方こそ、いい災難だったわけである。事実、家畜の身の上には、常に気まぐれが付きまとうのであった。

イーラは生きた心地もなく身体を硬直させていた。

有明は、懲治檻や拷問檻がある区画の中にしつらえた特別な貴賓室に来ていた。イーラ



には未だ王宮に呼ばれる資格がなかったし、有明も又、そうしたくなかったから、丁度、ここまで来たついでということで彼女を接見することにしたのである。

非公式とはいっても、この国の独裁者が呼んだのであるということをイーラに認識させる必要があった。こうすることが、今後彼女を教育するに役立つことは疑いもないからである。今まで病室の中にいて、何不自由なく甘やかされていたのと訳がちがう、有明の厳しい側面を、彼女はイヤという程、体得して行かなければならない。

貴賓室には前室があり、中へ入ると正面に黄金の扉が見える。そして、その両側に全裸の近衛将校が二人、抜き放った直剣を持って脇侍していた。

例によって、高橋副長は扉の前でイーラを跪かせると、自分も平伏して「イーラを連れてまいりました」と、うやうやしく言った。

「待っていた。すぐ通りなさい」どこかに仕掛けてあるらしいマイクから、有明の声が流れる。同時に、黄金の扉が音もなく観音開きになった。



「房（フサ）の下を平伏したまま膝行して入るのよ」

高橋副長が小声で注意をあたえた。ここにも「房門」と呼ばれる紫紐が床上五十センチのところに重々しく張られてあった。

あまりのいかめしさに気を吞まれたイーラは、易々として命じられたようにするのであった。

ベージュ色に統一された室内には家具は全くなく、足首までかくれてしまいそうな絨氈の上に十数名の裸女が様々の状態でコンポジションを作っていた。ここは家具用として調教された物位の女囚に実地訓練を与える目的で作られた部屋でもあった。

右手、やや奥まったところ、四人の女を横並びに仰臥させた上に、有明がゆったりと坐っていた。肘かけ用には、こちら側に豊かな臀部を丸見えにした女が二人、有明の両側に四っん這いになっていたし、膝立ちで上体を大きく反らせた二人の女が背もたれとなって彼の背中を支えている。それは、八人の裸女が肉体で組み立てた人間椅子に、ほかならなかつた。

有明は自然に掌が触れる「肘かけ」を楽しむかのように撫で廻しながら、

「二人とも、もっと近くに寄りなさい。ああ二人に腰かけをあげよう」

有明の背後に立っていた侍女がスツと動いて、部屋の隅に裸身をまるめて平伏したまま動かないでいるスパーの肉体家具に近づいた。唇にワイヤレス・マイクをあてて何かを指示している。二匹の肉体家具が上体を起こした。肉体家具の両耳は封鎖されていて、スピーカーを通じた声しか、聞こえないのである。

侍女は二匹の首輪を掴んで、有明の前に曳いて来ると、適当な場所に仰臥させた。二匹共、定められている通り腕を組み、両膝を揃えて立てる。もり上る胸乳と柔らかな腹部をクッションとして、来客に腰かけさせようというのである。高橋副長は馴れているのだから、もう一度、有明に向かって平伏してから立ち上がって腰を下ろした。しかしイーラには、とてもそんなことは出来ない。困って、まごまごしているところを、二人の侍女に腕をとられ、子供をアヤすようにして人間椅子に掛けさせられてしまった。坐ってみると、あたたかく、ソフトな感触が思いの他、快く覚える。イーラが、そんな風に感じたことと自体、彼女が、この異常な雰囲気嫌に嫌だ

しに巻き込まれはじめたことを意味するのかも知れない。彼女が臀で圧しつぶしている肉体家具の乳房から、この家具が生きていることを証拠立てようとするかのように心臓の鼓動が幽かに伝わって来ても、何か虐げられることを悦ぶような感情がフト去来するのを知って心ひそかに、あきれる思いのイーラだった。

侍女たちは全部で七、八人はいたかも知れない。すべて一糸もまとっていない。いや、選び抜かれた美しい肉体を誇らしげに、胸を張って往き来している。

侍女、ここではアマゾン女兵のような武官に対して文官の方を指すのだが、主として人位（銀のクラス）で構成され、一品（ボン）から五品までの階級に分類される。武官の場合は一品＝司令、二品＝大佐、三品＝中佐、四品＝少佐、五品＝大尉が夫々相当官になるが、文官には特に称号はない。しかし、侍従長のような役をする上臈から、給仕の役をする末（スエ）までの間に、役名に応じた官位階級が、ほぼ定まっている。

官位を示すには全裸の場合、ハッキリしないので頭飾りに巻く紐の色で分類している。一品＝赤、二品＝紫、三品＝緑、四品＝黄、五品＝黒が定まっている。高橋淑恵は緑の紐



を頭に巻いているので、三品相当官の中佐にあたるというわけだ。

程よい音量でクラシック音楽が流れ、イーラには真紅の葡萄酒が与えられた。

## ギ ロ チ ン

「すっかり、健康そうになった」

タッタ一杯の葡萄酒でホンノリと頬を染めたイーラの姿を、好もしそうに眺めながら有明が口を切った。イーラは、ホッと救われたような気持ちになった。何故なら、随分、長い間、有明は、ひと言もいわずに、大きなブランドー・グラスで酒の匂いを楽しんでいたからである。有明の沈黙が、彼女をひどく不安にした。高橋副長でさえ、何かモジモジした位だった。やさしく健康のことを聞く有明の声が、魔術のように作用して、イーラから違和感をとりのぞいてくれた。反射的に「ありがとうございます。いろいろお世話様になりました」

と、いつてしまう。自分を攫ってきた相手だというのに、本当に奇妙なことだと思う。不思議に恐怖感もなく、有明に対する憎悪も湧いてこない。これには、葡萄酒の中に混ぜ

られたトランキライザーの働きが関係しているのだが、こんなこととは夢にも思わないイーラは、お礼をいってしまって、改めて彼女が有明に大変な借りを作っているような思いに囚われてしまうのだった。

もう一つ、彼女に気がかりだったことは、恋しい新津のことであった。新津が苦しむのも苦しまないのも、有明に対する彼女の態度如何にかかっていることを、イーラは本能的に悟っていたといってもよいであろう。生殺与奪の権を握っている有明に対して、彼女は一身を犠牲にしても新津を護ろうと決心している。そして、病氣中、度々見舞ってくれた有明の印象から、彼がイーラのこの気持ちを理解してくれているようにも考えられたのである。

「君も随分、苦勞をしたねえ。ご両親も気の毒なことをした。麻薬シンジケートとの闘いには、私も大切な部下を喪っているのです、君のことは余計、ふびんに思われてくる」

イーラは、うつむいてしまった。新津のことで頭が、いっぱいになって、忘れるともなく忘れていた両親に対する思慕が、生々しく蘇ってきたからである。

「前にも話した通り、君は危く麻薬組織の餌

食にされるところだった。君は、ひそかに国外へ運び出され、一生パスポートのない暮らしをしなければならなくなるころだった。やがては中毒患者となり、骨までシャブリ尽されて捨てられるのだ。中近東へ行けば、かつての美女が、白痴のような老婆となって物乞いをしている風景が、いくらでも見かけられるよ。ここへ連れて来られたことも君にとって不本意かも知れないが、そこを考えれば我慢してもらえらるだろう」

たしかに麻薬シンジケートよりはマシかも知れない。すくなくともイーラに対しては、

「どうして……」

と口ごもるのに、

「どうして？」

と、はげますように催促してくれる。それに力づけられたイーラは、思い切って言う。

「わたくしにだけ、こんなにやさしくして下さるのですか。病氣のことでも、両親のことでも……」

「それには、二つの理由がある」

有明が言下に答えた。

「一つは君が美しいということ。もう一つは君が不幸だったということだ。私は、ふしあわせな女性に弱いんでね」



あとは冗談めかして、

「要するに、私は君が好きなのだよ」

三十八才、若年のてらいもなければ、中年のいやらしさもない。しかも、国を買う程の成功者である。その人間的魅力が、細められた瞳から伝わってくる。イーラは、その誘惑から逃れることが出来なくなってしまった。それでも、辛うじて恋人のことを思い起こし、ともすれば崩れてしまいそうな自分を建て直すのに渾身の努力をはらう。

「新津さん。あの、新津さんはどうしていらっしゃるのでしょうか？」

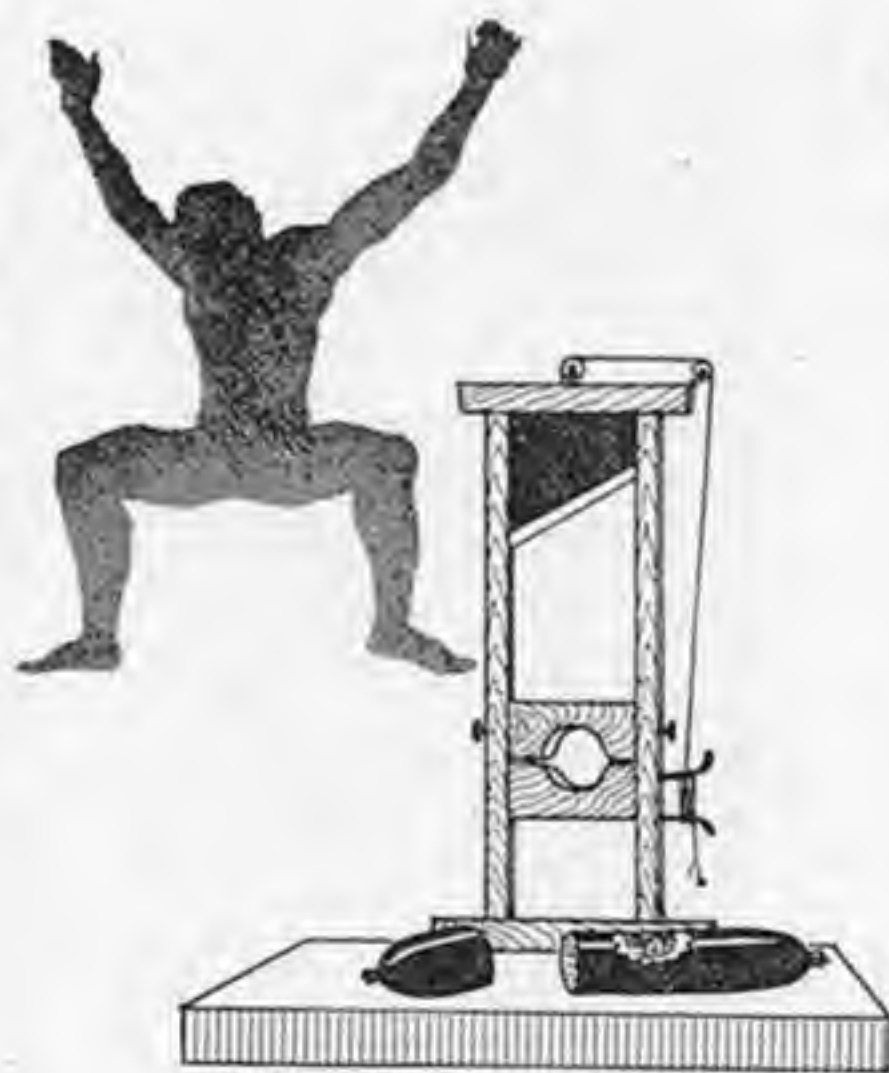
と聞いて、しまった、こんなことを聞いてはならなかったのだと真赤になる。有明の答えが怖ろしくて耳を蔽いたくなるのだった。

「この国では、私以外の男は存在を許されない。ポートエリアで使っている男奴は皆、去勢され洗脳された、生きたロボットに過ぎないのだ。新津君も、いずれは、こうした運命になると思う」

イーラは両掌を顔にあてて、身をよじって叫んだ。

「やめて、やめて下さい。どうして、そんなひどいことを……」

有明は、イーラの苦悶を冷たく見据えなが



ら、構わずに続けた。

「もう一つ、この国で男を利用する場合がある。手、足をツケ根から切離して、首と胴だけにしてしまう。これを『解体』というのだが、その上で色情だけしか考えられぬように脳も加工して、色獣と呼ばれる動物を作るのだ。色獣の用途は、アマゾン女兵など下級女

官に使用させ活動意欲の向上を図っている」

聞くまいとしても聞いてしまった。何という、おそろしい残酷なことを有明はやっているのだろうか。今の今まで、そこはかとなく漂っていた暖いものが、一遍にフツ飛んでしまった。あんなにやさしく見えた有明の瞳が悪魔のそのように冷たく変わってしまったようだ。

あまりのことに、イーラは肉体椅子からこり落ちて厚い絨氈の上に突っ伏し、さめざめと哭くのがあった。自分が酷い目に合う方が余程、楽だと思う。恋しい新津の無残な姿、生ける屍（シカバネ）を見る位なら、いつそ死んでしまった方がマシかも知れない。まてよ、いつそ死んだと思えば、どんなことでも出来る筈である。ここを一番、死んだ気になって有明に自分を捧げ、その代わりとして新津を助ける可能性はないものだろうか。健気にもイーラは、こう考える。

しかし、イーラとて、すでに有明の掌中にある。有明にしてみればイーラを煮て喰おうと焼いて喰おうと、思いのままではないか。何を今更、イーラの献身を受ける価値があるだろうか。

ややあって心を決したように、イーラは土



気色になった顔をあげ、手を合わせて有明に願った。

「わたくしには今はもう何もごさいません。わたくしのからだでさえ、自由になさることがお出来になります。それなのに、わたくしがこのからだを捧げると申し上げたら、お嗤いになるかも知れません。でも、わたくしの心と一緒に捧げするのだったら、すこしは値うちが出るのではないでしょうか。心だけは、わたくしのものでしょう。からだをもてあそばれても、心だけは奪うことが出来ないと思います。わたくしは、その心も差し上げます。ですから、どうか新津さんを酷い目に合わせないで下さい」

「心をくれるというのか」

有明の目が、急に大きくなった。

「イーラ。君は新津君への恋を捨てることが出来るのだね。私に心をくれるというのは、そういうことになるのだよ」

イーラはクシヤクシヤな顔で、心の葛藤を表現していた。どうにもならない羽目に追い込まれたことを感じる。

「新津君に向かって、君はハッキリ愛想づかしが出来るかね。私が、彼の顔にツバを吐きかけろといったら、それも出来るかね」

有明が非情にも追い打ちをかけた。

グーッとつまりながら、哀れなイーラは遂に、われとわが罫の中にとび込まざるを得ない。

「できる——と思います」

「思いますじゃ、ダメだ。誓わなくては」

有明は容赦しなかった。ますます、うろたえながらイーラは、

「は、はい。誓います」

「よかろう。おい、筆と紙を……」

肉体家具の一人が連れて来られて、有明の右手の床に臀部を振りあげたポーズで、肩と足首で身体を丸めて支える。口にくわえていた紙筒の中から、熊野牛王の起請用紙を引き出す。

サラサラと筆を走らせた有明は、紙をイー

ラの鼻先に投げつけて、

「さあ、読んでみたまえ」

暗澹とした感情を押え、ひくにひかれずに

イーラは読む。

「もっと大きい声で」

などと注意されながら。

「わたくし、イーラ・ラジャーンは新津謙介氏を男奴にも色獣にも加工しないというマスタのお許しをいただきましたからには、今

後は同氏への思慕を断念し、身も心もマスタ

ーにお捧げし、お仕えすることをお誓い申し上げます。万一、たった一回でもマスタのおいつけに背くことがあれば、このお許しを無効とされましても異議ございません。有

明の八年×月×日、右イーラ・ラジャーン」

「これでいいね」

と念を押されて。

「ハイ」

と答える。

「それでは未決服を脱いで裸になりなさい」  
「エッ」

もう仕方がない。——こんなこと、この国では皆がハダカじゃないの——と思い直してイーラは腰帯を解いた。高橋淑恵が介添えをしてくれる。

「足をのばしたまま、四つ這いになってごらん。いけない。もっとちゃんと私に見えるようにしなくっちゃ」

高橋副長が姿勢を直してくれる。唇を噛んで恥辱を忍ぶイーラだった。突然、あのデリーでの記憶が蘇ってくる。あのときは特製の椅子に縛りつけられ、生まれてはじめて羞かしい検査を受けさせられたのである。今度は縛られてもいないのに、自らの意思で羞かし



い姿を曝さなければならぬ。ぐっとこみあげてきた、くやし涙が、ポタポタと落ちた。「墨だ。……いいかねイーラ。起請文には、墨型を印章代わりに押すことになっているんだ」

紙が押しつけられ、高橋副長の指が、紙の上をなでると、こらえにこらえていたイーラも、これには

「ウーッ！」

と呻いて、崩れ落ちた。

それより早くイーラの墨型を捺した和紙を高々と捧げて、高橋副長は、それを有明に見せた。

「よし」

深くうなづく有明だった。

そして、

「イーラ。もうよい、泣くな。こんなことでヘコタレては、とても新津を助けることなんか出来ないゾ」

有明の叱咤にハッと気を取り直すイーラ。汚辱にまみれながら、いじらしくも又、可憐な自己犠牲の姿だった。

「君が新津と完全に絶縁したことを証してもらおう」

有明が嗤を含んだ、しかし、わざとらしく

厳格な調子で言いはじめた。

その声に応じたように四つん這いの裸女が一人、掌と膝でソロソロ進んでイーラの前に停まった。

背中のクボミに、長さ二〇センチばかりのソーセージをのせている。

「そのソーセージを彼だと想定するんだ。いいね。……さ、命令だよ、噛み切ってしまいなさい」

何でこんなことをさせられるのか、馬鹿馬鹿しいのを通り越した腹立たしさに、イーラは蒼白な顔を慄わせて叫んだ。

「イヤです」

「おやおやイヤだというのか？……ハッハハ見事にひっかかったもんだね。それは君のための△踏み絵▽だったんだよ。君の気持ちが悪く切れてないのを白状したようなものじゃないか。……誰か、それを、こちらへ持って来てごらん」

有明が手にしていたのは、小さなギロチンの模型だった。三角型の鋭い刃物がスプリング仕掛けで跳んで葉巻の口を切るオモチャだった。

囚人の首をはさむ丸い小穴に、四つ這いの裸女が恭々しく差し出したソーセージをはめ

て糸をひくと、ストンという音がして、いとも簡単に輪切れになってしまう。

「どうかね。うまく出来ているだろう。君が約束を守らなければ、君の目の前で彼を、こうしてチョン切ってしまうよ」

悲鳴とも哭き声ともつかぬ音がイーラの口から迸った。

絶対絶命のもだえを見せてイーラは哀願する。

「私が悪うございました。もう何でも、おっしゃる通りに致します。ですから、ですから彼だけは助けてやって下さい」

「フン、もう噛み切って貰う必要はないんだよ。第一次試験は既に済んだのだ。ただ、手数をかけさせたことについて、お仕置をしなければならぬね。エート、このソーセージの切れはしをくわえて、この部屋をグルリと犬のように這って廻れ。それが出来たら今度だけは許してやろう」

ふたたび新手の無理難題が出される。

イーラは、ただオロオロと悲歎に暮れるばかりだった。





## 告白 雑感

## 切腹への憧れ

浅川 則子

世間一般の人達にとって、三島由紀夫氏の事件は極めてショッキングな事件として受け取られたようでしたが、その中には自殺の方法が「切腹」と云う異常な方法であったことが大きな比重を占めていたのではなかったでしょうか。

でも、切腹に興味をもっている私には、そんなに異常な自殺の方法だったのだろうかとか云う疑問を抱かずにはいられませんでした。何故って、テレビの時代劇の中では度々切腹のシーンにお目にかかり、大分前の話になりますが、元童謡歌手の女性が切腹心中未遂事件を起こし大々的に報道されたことも御座い

ました。それに「奇ク」三十七年六月号の読者通信に寄せられた長野の武林様の記事によりますと実際に切腹自殺を遂げられた方がかなり沢山いらっしゃるようになります。ですから、そう云う意味では、三島事件はそれ程珍しい事件とは、少なくとも私には思えなかったので御座いました。

○ 私が何故そんな女、切腹に興味をもつ女になってしまったのか、そのいきさつを何となく御知らせしたくなりペンを執ってみたので御座います。

「奇ク」三十七年四月号の藤村陵子様のよう

に、実際に肌に傷跡の残る程のプレイをされた方のいらっしゃる中で、極くささやかな、お話にもならない程度のプレイしか経験していない私に、告白記事などを書く資格はないのかも知れません。

でも私は書き始めてしまったので御座います。それは切腹に憧れる一人の女の、単なる自慰行為なのかも知れませんがね。

○ きつと読者のみな様の失笑をかうような内容になるでしょうが、御容赦下さいませ。

花嫁の帯に差したる懐剣の

何故と問われてしばし戸惑う



○ 農家の四人姉妹の末っ子として育った私は昭和三十三年に中学を卒業して、デパートの店員として社会人の仲間入りをしましたが、デパートとは云っても田舎町のこと、都会のそれとは較べものにならない程の小さなものでした。

それでも私に合った職場だったとみえ、大して厭気を覚えることもなく年数を重ね、昭和四十二年秋に呉服売場へ配置替えになったので御座います。

呉服売場の店員は私を含めて五人、その中のSさんとは、通勤のバスが一緒と云うこともあって直ぐ仲良しになってしまいました。仲良しと云っても、Sさんはもう小学校に通ってる子供さんがいる三十代の奥様で、私にとっては大先輩でした。Sさんは呉服に関して、は新米の私に、必要な商品の知識や、この売場での特別な対応の仕方など親切に教えて下さいました。

大抵のデパートがそうですが、呉服売場の店員は和服で持場に出ております。私達の場合も勿論そうでした。お正月だけしか着たことのない私には、和服をスッキリ着こなすと云うことが仲々うまく行かず、この点も

Sさんからいろいろ教えて戴きました。

何とか一人前の呉服店員になりかけた翌年の春の初めの頃で御座いました。

「そろそろ結婚シーズンだから、マネキンに花嫁衣裳を着せなくちゃ。手伝って頂戴、則子ちゃん」

「はい、お姉さま」

すっかり親しくなったSさんを私はこう呼んでいたのです。

ひと仕事済んだ後で、

「あら、いけない。懐剣差してあげるの忘れちゃったわ」

「あら本当。私やるわ」

マネキンに懐剣を差している私に向かってお姉さまが云うのです。

「ねえ、則子ちゃん。花嫁さんて、何故懐剣を帯に差してるか知ってる?……」

「お姫さまみたいになるからじゃないの?」

「それじゃあ、お姫さまは何故、懐剣を差してるの?……」

「さあ……」

私は、何となく知ってる積りだったのですが、急には説明できず、ちょっと考え込んでしまいました。

「あれはね、若し敵に襲われたら懐剣を抜い

て勇ましく戦い、力及ばざる時は潔く自害して操を守りますっていう、花嫁さんの心意気の象徴なのよ。もっとも昔は飾りだけでなく本当に、そう云う目的があったんでしょ。……若い頃、母に聞いたんだけど、昔の女の人はお嫁に行く時にちゃんと自害の作法を教えて貰ったんですってよ」

「まあ、そうですの」

私は、お姉さまのお話の後半分に何となく心をひかれてしまったのです。頭の中には、テレビの時代劇で時々見かける、女の人の自害の場面が浮かびあがっていました。

「自害の作法って、喉を突いたり、胸を突いたりすることなんですよ」

「そうよ、それにね、勇ましい人は、男の人の切腹の作法まで覚えてたんですってよ」

「まあ、女の人が切腹を?……でも女の人で切腹して自害した人なんているのかしら。私あんまり聞いたことないわ」

「そりゃそうよ、私も聞いたことないけど。でも、ほら去年だったかしらね、元童謡歌手

だった人が男の人と心中未遂事件を起こしたでしょ。あれなんか、女の人の切腹に近いんじゃない? だって包丁でお腹を突いたとか新聞に出てたでしょ」



「そう云えばそうだったわね。それじゃ昔だったら、切腹した女の人かなり居たのかも知れないわね」

「そうかも知れないわ。それからね、これは時代物の大衆小説に出てた話だから多分作り話でしょうけど、ある武家に嫁ぐ町人の娘が武士の妻としての忠節を誓う意味で、初夜に新夫の眼の前で切腹の真似をして見せるって筋の話が載っていたわよ。確か（夫婦固めの切腹）っていう儀式だとか書いてあったわ」

「まあ、そんなお話もあるんですの。女の人が切腹するなんて凄く勇ましいお話だわね」  
「本当ね。喉とか胸を突くんだと、急所だから痛くも苦しくもなく直ぐ死ねるけど、切腹だと急所でないお腹をかなりの時間をかけて切っていくんですよ。その間中、苦痛を耐えなければいけない訳だから余程の気丈な人でなければ出来ないんですよ切腹なんか」

○  
お姉さまと私の話は、思いもかけなかった方向——切腹の話——に発展していったので御座いました。

そして、お姉さまの切腹に關したお話は、私の心の奥深くに潜んでいた、それまで全く

気のつかなかった新しい感情に、異常な刺激を与えて行ったのでした。

○  
「どう？ 則子ちゃん。若し、切腹して死になさいなんて云われらどうする？ 恐ろしくなって逃げ出しちゃうんじゃないかしら」

これまでのお姉さまとの会話はあくまでも第三者的立場でおこなわれていたのですが、この一言は私を急に当事者にしてしまったのです。「私が切腹するとしたら？」勿論仮定の話であつたのですが、この一言は、うごめき始めた私の新しい感情に大きなショックを与えてしまったのです。そしてこの新しい感情は、やがて大きく大きく成長して行ってしまうので御座います。

「平気よ、お姉さま。私だって、大和撫子の一人ですもの、切腹ぐらい立派にやり遂げてみせるわよ」

「まあ、則子ちゃんたら、生意気なこと云つて。本当に平気なのかしら？」

「本当よ、お姉さま」

何故かしら昂奮してしまつた私は自分でも驚く程、強く云いきってしまったのでした。

○  
腹切りて死せる乙女のあるを知り

何故か眠れぬ夜を過ごしつゝ

○  
その晩、私は寢床の中で、殆ど、眠られぬまま夜を明かしてしまつたので御座います。私の頭の中は昼間聴いたお姉さまのお話、切腹の話に完全に占領されていたのです。

女性の身でありながら切腹して自害した人の居たであろうこと。私にも何となく想像はつきますが、それは自害として最も苦痛を伴う方法の一つであろうこと。そして大衆小説に出ていたと云う夫婦固めの切腹儀式の話。

それはきつと、町人の娘でも一度武士の妻になればいざと云う時には潔く自害、それも最も苦痛の大きい切腹と云う方法で自害して見せますという、花嫁の決意を証明する儀式なのかも知れませんわね。それにお姉さまの冗談半分の質問、私に切腹する勇氣があるかと云う問い。そのくらい平気よ、と、これも冗談まじりの私の答え……。

でも、冗談でなく、本当に切腹して自害しなければならぬ羽目に、もし自分が追い込まれたら私はどうするだろうか？ 自分のお腹を自分の手にした懐剣で切り裂いて行く時の氣持ってどんなものなのかしら？……。

私は胸がドキドキして来ました。



切腹って、この辺をこう切るのかしら？

私は寝床の上に坐り、ネグリジェの前を開きパンティを下げると、少し爪の伸びたひとさし指を懐剣に見たてて、軽く下腹に当て、横に引いてみました。異様な感覚でした。

「ううっ」

私は思わず声をあげてしまったので御座います。痛くはありませんでしたが、爪と指先の触れた下腹に抜がったくすぐったいような感触に、私は思わず手を引っこめてしまいました。でもそれは不快な感触ではありませんでした。そしてこれが、私のささやかな切腹プレイの第一歩になり、この一晩の中に私は切腹に、興味を抱く女になってしまったのです。

○  
翌日、お姉さまにお店で会った私は

「ねえ、お姉さま。昨日、花嫁さんの懐剣の話から始まって、切腹の話になっちゃったでしょ。あの時云ってた、ほら夫婦固めの切腹の話ネ。あれが載ってる小説というのを読んてみたくなっちゃったの、貸して下さいませんかしら」

と思い切って口にしてしまいました。昨夜の中に、文字通り一夜漬けの切腹ファンにな

ってしまった私は、その小説を読んてみたいと云う気持ちが強くなっていたのです。

「あら。則子ちゃんたら、切腹が好きになったの？ 変な人ね。もっとも昨日は、いざと云う時には立派に切腹するって大きなこと云ってたから、その時のために読んで置こうっていうのかしら？」

「厭だわ。お姉さまったら、そんなこと云って……私、切腹なんかちっとも好きなんじゃないわよ。唯、面白そうな話だからちよっと興味を持っただけよ」

「まあどっちでもいいけど、残念ながらその本は、ずうっと昔に読んだんで、屑屋さんに売ってしまったわよ」

「なあんだ、そうなの」

「お気のどくさま。でも、そんなにがっかりしないでいいわよ」

「どうして？」

「小説なんかじゃなくって、もっと本格的なのが載ってる本を貸してあげるわ。則子ちゃんもそろそろ大人だから、もう読んでもかまわないでしょ」

「本格的ってどう云うことなの？」

「たとえばね、切腹の真似をした女の人の体験談とか、裸になって切腹している女の人の

写真なんか載っている本よ。明日持って来てあげるわ」

「まあ、そんな人があるんですの？」

私はすっかり驚いてしまい、お姉さまの言葉をしばらくは信じられませんでした。

女性の切腹などと云う極めて特異な事柄を扱った本があるなんて本当なのでしょうか。

○

その明くる日の晩、寝床に腹這いになるとお姉さまの貸してくれた雑誌を手にとりました。横書きの題字、交ったザデインの表紙。それは「奇ク」の昭和三十七年四月号で、私と「奇ク」の初めての対面だったのです。頁をめくって行く中に私は今まで想像さえもしなかった新しい世界の存在を知り、すっかり昂奮してしまつたのです。

勿論、私の場合、その新しい世界とは切腹の世界であつたことは云うまでもありません。グラビヤにある大塚啓子様のふんどし一丁で切腹の写真。滝れい子様の腰元切腹の絵。藤村陵子様の切腹体験記。南方純様の切腹フオート評判記。全てが私を昂奮の渦に巻き込んでしまつたので御座いました。

でも、お姉さまは何故こんな雑誌をもっていたのかしら。若しかしたら、お姉さまも私



みたいに、切腹に興味をもっているのかも知れません。いつかはそれを確かめてみたいとは思ったものの、お姉さまに尋ねるのも気がひけて、まだそのままになっています。

その後、横浜のある本屋さんで「奇ク」の新刊やバックナンバーの売られているのを知り、その度毎に顔の赤らむような辱かしさに耐えながら買い集めるようになってしまったので御座います。「奇ク」をそのまま保存したのでは家族の眼に触れた場合困りますので切腹に関係した写真や記事を切抜いてはノートに貼りつけるようになりました。最近ではそのノートの全ての頁がこの切抜で埋まってしまう、二冊目が必要な程になっています。

私は毎晩のように、寝床の中でこのノートに貼られた切抜記事を読み耽り、切腹の写真を眺めては自分が切腹する場合を想像し、恍惚感に浸るのが習慣になってしまい、またそれが私にとっては最も満ち足りた夢心地の時間になって行ったので御座います。

○  
私のノートに貼られた切抜の幾つかを御紹介致しましょう、私の感想を添えて。

お姉さまに借りてそのまま貰ってしまった

「奇ク」三十七年四月号の大塚啓子様の十文字腹の写真、三十九年八月号の同じ大塚さんの一文字腹の連続写真などは、まことに貴重な写真で御座いましょう。また私のノートには他の雑誌の切抜もあり、お臍に懐剣を突き立て抉って自害すると云う物語もありますが「奇ク」三十七年四月号での藤村陵子様のプレイではこの手法を切腹の途中に織り込んで十文字腹を切っているらしいです。このようにな変わった切り方の代表的なものは四十四年十一月号に西条夏様が投稿された「紀子との切腹プレイ」があります。ここで紀子様は乳首を切り落とした後に十文字腹、そして最後になさるプレイは、女性にしか出来ない最も壮烈な切腹のタイプではないでしょうか。

その他、直接このような切腹に触れたものではありませんが、四十三年六月号の「理恵女献身」の中に出てくる木の御串を懐剣と読みかえて、自害するイメージに酔ったもので御座いました。

○  
切腹の時の下着としては、ふんどしが最も似つかわしいのではないかしら？ と思います。切腹自身は日本古来の自害の手法ですから、その時の服装もやはり日本古来のもので

あるべきでしょう。そうすると女性の場合でしたら下着は腰巻と云うことになってしまいますが、それだけでは切腹の途中で裾が割れたりした時の恥ずかしさが気になって、充分な切腹ができないのではないのでしょうか。やはりふんどしが必要になってきます。いっそのこと三十七年四月号の大塚啓子様の写真のように、ふんどし一丁と云うのがむしろ良いのかも知れません。四十三年七月号の「紅花のよそおい」と云う物語にも、ふんどしを締め込んで切腹する場面が登場しております。

私、考えますのに、絶命した後では筋肉が弛緩し汚物が体外に洩れると聞いておりますので、そんな恥ずかしい屍を人眼に触れさせないためにも、脱脂綿でも流出予防策を講じ、その上から六尺ふんどしを思い切りきつく締め込んで置くべきではないでしょうか。

○  
唯、例外的には、たとえば「懐剣の妻となつて相果てる」ような自害を決行する場合に、むしろふんどしなどは締めずに腰巻だけが良いのかも知れませんわね。いずれにしても、パンティを穿くとか、あるいは逆に、本当の素っ裸での切腹はあまり好きになれません。やはり和服が一番でしょう。



切腹の動機としては、亡き夫の、或いは恋人の後を追うと云うのがロマンチックで大好きです。四十一年六月号の短信往来に、森田敬三様が「初夜の誓い」と題してお書きになった短文と絵は、何回読んでも私に新しい刺激を与えてくれます。ここで「結婚の夜、行ぜられた切腹の儀法をそのままに、……」という記述がありますが、これはお姉さまに聞いた「夫婦固めの切腹」と似た儀式を意味するのでしょう。

○

切腹のプレイとしては、私のノートに貼られた切抜の範囲では三十七年四月号の藤村様のが最高です。傷跡が残ったそうですが、何とすばらしいことでしょう。いずれは私も、と心には思っているのですが、今のところは四十年四月号の「花散る里」に、切腹して死んだ友を偲んでヘアピンを使って人知れず切腹プレイをする民子さんと云う女性が描かれていますでしょう。私のプレイと云ったらそんな程度なのです。

私のノートには一般の週刊誌から集めた記事も集めてあります。一般の週刊誌に女性の切腹に関連した記事があるのだろうかと思いでしょうが、今までに三件ばかり御座いま

した。

その一つは、別冊アサヒ芸能四十五年二月号に馬場のぼるさんが描いたマンガの中に、「おまえももう年頃だから、まさかの時のために切腹の仕方を教えておく」と云う説明で娘が祖父から切腹の作法を教えて貰うところがありました。

週刊平凡四十五年九月十日号に、「ソーレツ！ 藤純子が切腹を」と題して、現在も放映されている「徳川おんな絵巻」の紹介が載っていました。でも、放映されたテレビでは切腹そのものの場面は肝心なところがあまりなく、ちょっとがっかりしました。

もう一つは三島事件が起きてからのものですが、話のタネ本四十六年一月十九日号ではバーのホステスが殿方を引きつけるためのサービスとしてフォークを使った切腹プレイをして見せると云う記事が載っています。記事では、お客さんの方は強烈なイメージを与えられ連続的に溜め息を吐きながらそれを見ているとのことでした。

プレイの経験はほんの真似事にしか過ぎませんが、このような切抜を集めている私の切腹に対する憧れとでも云いましょうか、それは日増しに強くなって行くので御座います。

そして最後には人並みのプレイも出来る女に成長して行くのかも知れません。

切腹プレイで一番気になるのは、若し肌に傷跡が残ってしまったらと云う心配です。何分にも未婚の女ですから、その傷跡を未来の夫に何と云い訳をしたらいいのか、と考え込んでしまうのです。未来の夫の理解、女性の切腹プレイにはそれが一番必要なのかも知れません。私は、お姉さまの紹介して下さった男性と最近婚約致しました。私が人並みの切腹プレイをするには、先ず彼に切腹の魅力を知って貰わねばなりません。初めの中は、それとなく切腹の話題を盛り込んだ会話を、そして、最後には彼の前で、お姉さまに教えて貰った「夫婦固めの切腹」と云う形でプレイに進めたら……。これが、今の私の心の中に渦巻いている願いなので御座います。

初夜の床腹切り裂きて新妻の

誠示して契り結ばむ

本当にこうなれるかどうかは、私の願望に対する彼の反応次第でしょう。バーのホステスさんの切腹プレイ。これに対するお客さんの反応。彼が「夫婦固めの切腹」を許してくれることは、かなり期待してよいのではないでしょう。

(おわり)



## 六回完結S小説

〽その三〽

## パノラマ島秘譚

藤 見

郁

## めす犬なぶり

美香はいま、黒い部屋のなかでよちよちとうごめきまわる、一匹の白いめす犬だった。金属製の細くするどいムチが、美香の愛らしい尻を、ひゅうひゅうと追った。

その銀色のムチは、ちょうどポータブル・テレビのアンテナのように、伸縮自在の仕掛けをもっていた。先端は針のようにとがり、たたくことも、突くこともできる無気味なムチだった。

「ああ、ああ」

悲鳴とも、あえぎともつかぬ声を発しながら、全裸の美少女は黒い絨氈の上を、四つん這いのまま走りまわった。

左右の手首をつないでいる鎖が、がちがちと鳴る。足首をつないである鎖も、ふれあうたびに、非音楽的な音をかなでた。

「もっと早く走るのよ！」

シコが手ににぎっている鎖を、力いっぱいひっぱった。その鎖は、美香ののど首をがちりとしめつけている鋼鉄製の首輪までのびている。

乱暴に首輪をひかれて、美香は前のめりにのめった。顎を床にぶつけ、形のいい尻が高

く突きあがった。

「う、う、ううう……」

美香は、声を殺して泣いていた。

苦痛よりも、自分の姿のみに耐えきれないのだ。絨氈に頬をねかせ、鉄輪のはまったのどをふるわせて、美香は泣いた。

昨夜の《録音室》のように、壁に鏡の貼ってないことが、わずかに救いだった。

この哀れな、はじめな自分の姿を鏡のなかにみたら、十七歳の美香は、おそらく羞恥のために気絶するだろう。

しかし、鏡のかわりに、べつの意味で鏡よりも意地の悪い同性たちがいる。





A子、B子、C子、D子たち、美しい四人の奴隷娘が、団結した冷酷な微笑を、四方から美香にそそいでいた。

「いくじのない、めす犬ね」

「泣くのは早すぎるわ」

「お上品ぶってるのよ」

「まだ、肌に汗ひとつ浮かべてないくせに」

四人の女は、くちぐちに意地悪なことばを投げつけた。

美香に対して、ひとかけらの同情心もなかった。新しく登場したこの「夢の城」のヒロインに対する嫉妬と憎悪。

さらに彼女ら自身のたいくつのはけ口が、この黒い部屋に熱っぽく、そして湿っぽく、凝結したのである。

手につかんでいる美香の首輪の鎖を、子供の縄とび遊びのように、ぶらんぶらんさせながら、シコがいった。

「A子さん、あなたはいちばん大型のポットに塩水をたくさんつくって持ってきてちょうだい。B子さんとC子さんは、木の箱にお砂をいれて持ってきてください」

「わかったわ」

ふたりの美しい女奴隷は、たがいに顔を見合わせ、にやりとしてうなずくと、部屋を出

ていった。

そして、まもなく言われたとおりの物を用意して、ふたりはもどってきた。

塩水のはいったポットは、シコの手に渡され、砂を盛った木箱は、室内の一隅に置かれた。木箱の大きさは五十センチ四方で、底は十センチほどの浅いものである。

「さあ、美香さん。さっきから、だいぶ運動したから、のどがかわいたでしょう。お水をあげましょう」

美香は、肩で荒い息をついていたが、力なく首を横にふった。

「お口をあけなさい。お水をのませてあげましょうと言ってるのよ」

シコは、すこし強い声をだした。

「のみたくないのです。それよりも、もう、疲れました。ベッドに休ませてください」

消えいるような声で、美香は哀願した。美香の背中から腰部にかけて、こまかい汗がうかんでいた。

「いけません。あなたは、このお水をのむのです」

いいながら、シコはA子とB子に目で合図した。細い目が、カミソリの刃のように光った。

A子とB子は、察しよくうなずくと、四つん這いになっている美香の左右へ接近し、寄りそった。そして、無抵抗でおびえている哀れな、めす犬の髪の毛をつかむと、ねじりながら上へひいた。

美香の両眼が吊りあがり、顎がのけぞる。十七歳のふっくらした乳房がゆれた。

「お口をあけなさい」

美香の正面にまわったシコが、貴夫人のような、おごりかな声でいった。

「いやです」

美香は、四つん這いのまま歯をくいしばった。髪の毛を乱暴につかまれ、むりやり、あおむけにされているので、目や頬の筋肉がひきつり、ねじれた。

——どんなに上品な、かわいい目鼻だちをしていたって、ちょっとバランスがくずれればこんな醜い顔になるんだわ！

シコは、なおも指に力をこめて美香の髪の毛をねじりつづけ、しばらくのあいだ、快感を味わっていた。が、我にかえって言った。

「お口をあけて、水をのむのよ！」

「いやです、ゆるして……」

シコは、眉間に深い、たてじわをきざんで笑った。



「どうしても、このお水をのむのは、おいやなの？」

「もう、ゆるしてください……」

「これはね、塩水なのよ。きょうのトレーニングは、これからますます激しくなりますからね、前もって塩分をとっておかないと、あなたのからだは弱ってしまうわよ」

シコの声音は、細く、かんだかく、陰険で執拗だった。

美香は、顎をわずかに左右にふって、拒否を示した。

「ふん、なまいきね」

わしづかみにされている髪の毛が、いっそう強く上へひかれ、美香の顔の筋肉が痛々しく、ひきつった。

「どうしても、いやなのね？」

「いやです」

「ふうん」シコは鼻のさきで冷笑し「それじゃあ……」と、美香の耳へ口を寄せた。

そして、なにごとかを熱心にささやきはじめたのである。

シコのささやきには、ときどき手まねがはいり、そんなとき、美香の表情は極端な羞恥と恐怖を示した。

「いやです。いや、いや、かんにんして！」

美香は泣き声をあげ、乳房をふるわせた。シコは説得する口調になり、声をやや高くした。

「なんといっても、私たちは女ですものね。男のひとの、とうてい考えられないようなことだって、平気でやれるのよ。だからね、あなたのこのきれいなからだに、こんな恥ずかしいこともできるの……」

シコはまた声を低め、美香の耳にもっともらしく口を寄せてささやいた。

「ねえ、そんなことをされたら、あなた、いやでしょう？ 口紅をぬられたりチューインガムのカスを詰めこまれたりするのよ。それとも、そんなことをされてみたい？」

いいながらシコの右手がのびて、美香のまゐる尻に軽く触れた。

美香は縮みあがった。

「う、う、う……」

首輪に締めつけられたのどが、涙とともにひくひくあえいだ。

「だから、そんなことをされなくなったらこのお水をのみなさい。さあ、のむわね？」シコの指さきが、美香の感覚をおぞけ立たせる役目を果たした。

「はい……」

美香は観念し、うなずいた。

シコとA子は、顔を見合わせて微笑した。頑強に拒否していた美香が、顔色を変えて承諾したのだ。シコはよほど奇怪な、醜悪なことをささやいたにちがいない。

「さあ、お口をあけて」

ポットの水が、美香の口へ、花瓶に水をつぎたすように、そそぎこまれた。

二度、三度と、美香はむせた。かなり濃い塩水だった。

「か、からい……」

唇から水があふれ、のどの首輪をぬらし、乳房の上に流れた。

「も、もういいです……」

ぬれた顔を左右にふってうめいた。女たちはそれでも塩水をそそぐ。ごぼごぼ、ごぼごぼと、美香はのどを鳴らしてむせかえった。

「だめよ、ぜんぶのむのよ」

シコは、金属製の細いムチで、美香の尻を強くたたいた。

ひいッと悲鳴をあげて腰をひき、齒の力をゆるめたたん、塩水はまた、美香ののどをおりていった。

ポットにつめられてきた塩水のはほとんどが美香の胃のなかにおさまった。



「ホホホ」と、シコは満足をむきだしにして笑った。「だいぶ、おなががふくらんだわ。まるで妊娠した、めす犬だわね」

A子が、そばからのぞきこんでいった。

「浮気な、めす犬さん、どこのおす犬と関係して、そんなに大きなおなかになったの？」  
「おなかをゆすってごらんさい。だぶん、だぶんという波の音がするでしょう？」

といったのは、B子だった。

四つん這いになったまま、苦しい息をついている美香をみおろし、C子もD子も、それぞれのことで、なぶった。

本格的なめす犬ごっこは、それから開始されたのだ。

## ムチとよばれ

はじめは「チンチン」だった。

「さあ、めす犬さん、後足だけで立って、チンチンをしてごらんさい」

シコが命令した。

だが、美香にそんないまわしい、屈辱的な芸当ができるはずはない。

むっとした怒りの視線で、美香はシコの顔を、みあげた。

「なによ、その目は！」  
するどい金属ムチが、美香の白い肩に、ぴしりッと鳴った。

「ひいッ」

と、みじかい悲鳴をあげ、美香は横倒しになった。手首と足首の鎖が触れあい、美香のぶざまな格好を嘲笑するような音をたてた。  
「いいわね、両足は膝で立ち、両手はこういうふううに犬の格好にまげて、チンチンをするのよ。ぐずぐずしていると、またムチがとぶわよ」

シコは貧弱な胸を、せいっぱいそらし、傲然といった。

美香はムチにおののきながら両膝を床につけて腰を立たせた。両腕のひじをまげて腕を立てると、にぎりこぶしをつくった。その左右のにぎりこぶしを、犬に似せて、こくりと前にまげた。

屈辱的なポーズだった。手足に鎖、首輪まではめられて、このチンチンである。美香はシコのムチがこわかったのだ。細くするどい形をしていて、打たれると、まるで電流を浴びたような、痛烈なショックをうけるムチであった。

Qは、あんなひどいことを美香にしたけれ

ど、ムチを直接美香の肌にあてるということはしなかった。それだけ、美香の素肌をたいせつにしているとも言える。

しかし、この五人の女たちのご機嫌を損じると、なにをされるかわからない。

富豪の高官家の娘として、塵ひとつほどの不自由もなく、平和にあまやかされて育ってきた美香にとって、直接皮膚に加えられる苦痛は、感覚的な苦痛以上のものがあつた。

「さあ、立つのよ、チンチンするのよ！」

シコのムチが、また美香の尻に鳴った。

美香は、屈辱のために顔をくしゃくしゃにゆがめながら、勇気をふるいおこして、チンチンをつづけた。

五人の女は、どっと笑った。毒の花がいつせいにひらいたような、けたたましい笑い方だった。

「おじょうず、おじょうず。それじゃ、チンチンしながら、お部屋のなかをひとまわりするのよ。さあ！」

シコが、首輪の鎖を勢いよく、手前にひっぱった。

「ううッ！」

と、のどでうめきながら、美香は膝立ちのチンチン姿のまま、よちよちと歩きだしたの



だ。全身の血が逆上し、美香の顔は燃えているように熱かった。

シコは室内の中央に立って鎖をにぎり、そのシコを中心に、円を描くように美香は犬のまねをしたまま、ひとまわりした。

美香の両眼から、涙があふれでた。羞恥をこえた悲しみの涙は、ぼろぼろ、ぼろぼろとあふれでて、頬をぬらした。

頬をぬらし、のどをぬらし、乳房と乳房のあいだを生きているもののように伝わった。

四人の美しい奴隷娘は、その美しさに似ない下品な身ぶり、手をたたき、足をふみならして笑いこぼれた。

一周すると、シコが鎖をゆるめていった。

「よくできました。では、ごほうびに、このクッキーをあげましょう。床の上に投げるから手を使わないで、お口でひろってじょうずにたべるのよ。いいわね？」

ジャンパーのポケットから、小型のクッキーをひとつかみ取りだすと、黒いカーペットの上に、さあっと、ばらまいた。

「さあ、ひろいなさい。こんどは這っていくのよ！」

美香の白い尻を、金属ムチが、ぴしりツとたたいた。

哀れなめす犬は、はじかれたように前へ出た。四つん這いのまま、ころがるように走りだす。

はじめのクッキーをつかもうとして、思わず手がのびた。その手を、すかさずムチが打ちすえた。

「あなたは犬なのよ、めす犬なのよ、手を使っではいけないのよ！」

美香のやわらかい腕に、たちまち赤いムチの線が走った。

嗚咽の聲が美香の口から、ほとばしり流れた。それは、ききかたによっては、たしかにめす犬の吠える声にも似ていた。

「早く。ぐずぐずしないで！」

シコのムチが伸びて、めす犬の尻のあたりを突いた。

むせび泣きながら、美香はカーペットの上に落ちてくるクッキーを口にくわえて、たべた。室内のあちこちに散らばったクッキーをムチに追われながら、三個、四個とたべあっていた。

「ホホホ、お嬢さま育ちのあなたが、そんな器用な芸当をするとは、夢にも思わなかったわ。それじゃ、こんどは、ボールひろいをしましょう」

直径五センチほどの、ゴルフボールほどの小さなゴムボールを取りだして、シコがいった。

「ホホホ、あなた、これなんだかわかる？」

ゴムボールよ。よくはすむわ。これを私が力いっぱい投げるから一分間のうちに口にくわえてもどっていらっしゃい。一分すぎても取ってこれなかったら、お仕置きにムチ打ち五回よ。わかったわね」

シコは、左手首にはめてある腕時計で秒針をたしかめ、ゴムボールを壁にむけて投げつけた。同時に、手ににぎっていた鎖をはなした。

ボールは壁にあたって、勢いよく弾んだ。美香はボールをとらえようと、手足にまといつく鎖をひきずり、鳴らしながら、右に走り左に走った。

人間が四つん這いになって走るのだから、いくらけんめいに走ったところで、動作はにぶい。走るといふよりは、ただ這いまわるだけのことである。

めまぐるしくはずんでころげまわるボールに、美香が追いつけないのは当然だった。

しかも、ボールの勢いが弱まり、とまりそうになると、五人の女のうちのだれかがボー



ルを蹴って、またはずみをつけてしまう。

美香の額から、汗がしたたりはじめた。美しい十七歳の四ツ足は、荒い呼吸で乳房をふるわせながら、いくたびかころび、のめって黒いカーペットをなめた。

のめって這いつくばったままの格好で疲労をいやしていると、すかさずシコのムチがとんできて、美香の尻を打ちすえた。

細い金属製のムチは、やわらかい少女の尻の肉を、噛むような激しさで、たたくのだ。その苦痛にはねかえり、美香はまた両腕の関節をつっぱって這いだす。

ボールをくわえて、シコの足もとまで、もどってくるのに、一分を五秒ほど過ぎた。

「さあ、お仕置きよ。お尻をこちらへむけなさい」

シコは、勝ち誇っていった。

「ゆるして、ゆるして！」

黒い絨氈の上に額をすりつけて哀願する美香の白い愛らしい尻に、容赦なく五回のムチがふりおろされた。

「ひいーッ、ひいーッ！」

という痛切な悲鳴が、部屋の黒い天井に五度、ひびきわたった。

「オーバーね。このムチが、そんなに痛いか

しら？」

シコはもうひとつ、ぴしりッ太腿のつけねをたたいた。

美香は泣き声をあげて横倒しに倒れ、足をだらしなくひらいたままの姿でもう動かなかった。白い下腹が犬そっくりに大きな波をうち、湧くような汗でぬれていた。

ボール遊びに飽きると、つぎは「ハシゴ渡り」だった。

室内に脚立が二台運びこまれ、その上に長さ三メートルほどのハシゴが、水平に渡された。

そのハシゴの端から端を、美香に渡らせようというのだ。

「おねがいです、もう、かんにんしてください。私、もう息がとまりそうです」

青ざめた顔面に、粒になった汗を光らせながら、美香はシコの足もとにひれ伏した。

絶望的な疲労感が、少女の全神経をうちめしていた。

「だめよ、あなたは、めす犬なのよ。めす犬がそんな人間みたいな口をきいてはいけないわ」

叱りながら、シコはひゅうッと銀色のムチを宙に鳴らした。

「そうだわ。嵌口具をかませたら、どうかしら。この犬、すこしおしゃべりがすぎるようだわ」

C子が、口をとがらせていった。この提案は、ただちに採用された。

革製の嵌口具が、美香の口にはめられた。

この嵌口具は革ベルトが三重になっていて美香の可憐な舌は、上下から内側ベルトではさみつける仕掛けになっていた。

唇を割った外側ベルトは、頬の肉にくいこんで、首のうしろでとめられた。

「む、む、む……」

二、三分もたつと、美香の口から、嘘のように、よだれが流れはじめた。

舌と顎の動きを封じられるということが、これほどまでに、だらしなく、よだれを誘発するものなのか。

美香はこの新しい屈辱に、全身を蛇のようにくねらせた。目から涙が流れだした。はさみつけた革ベルトが、舌を刺激する。よだれは、とめどなく、したたり流れた。

しかし、ムチによって脚立からハシゴに追いやげられては、もう「ハシゴ渡り」の命令に服従するより仕方がなかった。わずか二メートルほどの高さだが、手枷と足枷をはめら



れているために、高さ以上の恐怖があった。

美香はハシゴの上を、四つん這いでそろそろと渡りはじめた。シコは、ムチのところが先端で、少女の白い腹部や太腿の内側を、チクチクと突いた。

「う、う、う……」

美香は、四肢を固くすくませた。ムチを避けては、ハシゴから落下するのだ。落ちることはこわい。本能的な恐怖のために、全身を凍らせてハシゴにしっかりと両手をかけ、そのまま動かずにいる。

「どうしたの、早く渡りなさい！」

叱咤されて、下からなおもムチで突きなぶられる。シコはハシゴの真下に来て笑っているのだ。見あげているシコの目のすぐ上に、十七歳の清純な処女の、追いつめられた柔肌が縮み慄えていた。その柔肌を、なんどもなんども、シコはムチの先で突きまわすのだ。

「あッ、いや、いやッ！」

口をひらいて、にぶく光るよだれをだらだらと流しながらハシゴを渡る美香の格好は、だれの目にも、めす犬を連想させた。

ふるえながら美香は、ようやくハシゴの中ほどまでできた。だが、両足の膝が痛み、また動けなくなってしまった。

四つん這いになっているために、ふたつの乳房が乳首を下にして垂れさがり、まるで二十女のような重さをみせて、それがゆれた。嵌口具が声だけでなく呼吸までふさぎ、息が苦しい。手足を縮めて動かないでいると、すぐに下から、シコのムチが意地悪く突きだされる。

「う、う、う……」

美香は、尻を高くもちあげるようにしてよじり、またそろそろと動きだす。見ている四人の女が、キヤアキヤア声をあげて笑う。新しいくやし涙が、美香の頬を流れ落ちた。

## 女たちの罠

しかし、この黒い部屋での「本番」は、美香がハシゴを渡り終えて、ホッとひと息ついたときから始まった。

ふたたび黒いカーペットの上に四つん這いになった美香の目が、悲痛な祈りをこめて、シコをみあげた。嵌口具の下から、汗ともよだれともつかない液体が、ねっとり光って流れ落ちている。

「わ、わ、わ……」

と、美香は顔をあげたまま、なにごとかを

訴える目の色であった。

シコは、その、ことばにならない訴えを、Qと同じ感度の、鋭敏な神経でうけとめた。しかし、

「なにが言いたいのかしら、このめす犬」

と、シコはとぼけた。そして、A子にふりむいていった。

「嵌口具は、もうはずしてあげてもいいんじゃないかしら。このめす犬、なにか言いたそうよ。ほら、あんなにのどを、ひくひくさせているわ」

美香の汗と唾液で、べとべとになった革製のさるぐつわを、A子は、汚らしいものを扱う手つきではずした。

美香は、ようやく解放された口で、ふかく息を吸いこんでから、すぐに、

「あの……」

といいかけて、口ごもった。その表情に、赤い羞恥が走った。

「なあに、美香さん？」

シコの口調が、急にわざとらしく、やさしくなった。

「あの……」

その願いを、うっかり口にだしかけて、このとき、この世間知らずの美少女は、ようやく



読者ギャラリー『夜盗来襲』岡 たかし



くさったのだ。つい数時間前、自分がうめき声をあげてのたうちまわった、あのおそろしい罠。

あの悪辣な罠と、まったく同じ性質の陥穽が、自分に用意されていたことを！

——どこまで私をなぶったら気がすむのだろ  
うか！

羞恥をこえた怒りが、美香の血や心臓を熱くさせた。しかし、手枷と足枷をはめられた全裸のからだである。ここで怒りをみせてはいっそうの苦痛と凌辱がのしかかってくるだけだ。

「お願いです」

美香はこみあげてくる怒りをおさえ、ここ

ろもち首を左にかしげ、シコをふり仰いだ。その動作には、追いつめられたものの必死の媚態があらわれ、まさしく、犬の性癖を連想させた。

「なあに、はっきりと言ってごらんさい。なにがいいたいの？」

シコが、見おろして言った。

「お願いです、美香をこれ以上、おなぶりに  
ならないで」

「なぶってなんかいないわ。これが、このお城の日課なの。お遊戯なのよ」

シコは、うそぶいた。

美香は、全身の血が冷えていくのを感じ、視界が暗くなった。

さっき、むりやりに塩水をのませたのは、この「本番」のためだったのだ。そして「チンチン」も、「ボールひろい」も、「ハシゴ渡り」も、この時間に至るまでの、ひまつぶしにすぎなかったのだ。

「もう、おなぶりになるのは、やめて。私をゆるしてください」

新しい涙が、美香の目からあふれた。

「いやなひとねえ。だから、なにが言いたいの。はっきりとおっしゃい」

シコの目と声がヒステリックにとがった。



「そうよ、はっきり言わなければ、なにがなんだか、わからないわ」

と、A子がいった。

「どうしたの。なんだか、おへその下あたりが、すこしふくらんできたみたいね」

と、B子がいった。

「ムチで下腹のあたりを、ぴしぴし叩いたらどうかしら」

と、C子がいった。

「このめす犬をおおむけに寝かせて、私がおの上にのって立ち、足でぎゅうぎゅう、ふんづけてみようか」

と、D子がいった。

おそろしいことばを吐く、女たちだった。

美香は思わず寒気をおぼえ、尻ごみした。

「さあ、はっきり言いなさい。はっきり言えば、なんでもさせてあげるわ」

そのシコのことばに、美香は反射的に顔をあげた。

「ほんとうですか！」

溺れるものは、わらをもつかむ、という哀れな心理が、美香の胸によぎったのだ。

「ほんとうよ」

シコは、美香の反応に期待をみせ、めがねのレンズを光らせながら、うなずいた。

「あの……」

美香は、顔面から首すじまでを真赤にそめて、その切実な、恥ずかしい欲求を訴えはじめたのだ。

「あの……オシッコを、オシッコをさせてください」

美香は頭を低くさげ、しぼりだすような声でいった。

トイレへ行かせてくれ、などと頼んだところで、この女たちは承知するはずはない。りこうな美香は、女たちの言わせたいことばをもう知っていた。

オシッコということばが美香の口から出たとき、五人の女は顔を見合わせ、あきれたという動作をして笑った。

「そう、あなた、オシッコがしたいの。あなたは上品でおきれいだから、水をのんでもオシッコなんか出ない人だと思ったわ。ふしぎねえ」

美香の顔を、わざとらしく首をまげてのぞきこみながら、A子がいった。

「こんなに清潔そうで、お肌にシミひとつない美しいお嬢さんは、きっとオシッコも、私たちとはちがって、全然べつのところから出るんじゃないかしら」

背後からB子がいった。

「ほかのところって、どこから出るの？」

C子が、とぼけてきいた。

「さあ、それは当人にきいたほうがいいわ」

D子が、にやにや笑いながらいった。

「お嬢さん、あなたのオシッコは、どこから出るの？」

A子が、調子にのってきいた。

美香は、うつむいたまま答えない。答えられるはずはなかった。

「あなたのオシッコは、どこから出るのってきいているのよ」

A子が、しつこく、またいった。そばからシコがいった。

「答えなさい、美香さん。答えないと、またムチでたたくわよ」

それでも美香は固くうつむいたまま答えなかった。すかさず、シコのムチが、美香の背中にとんだ。かなり激しい、打ち方だった。

一瞬、美香は顎をあげ背中をのけぞらした。「口で答えられなければ、指さしなさい。そ

うだわ、あなたは犬で、もともと口がきけないんだわ。それなら、オシッコの出るところを、指でさしてごらんなさいよ」

A子が、指で美香の乳房を強く突きながら



いった。

「そ、そんな……」

美香は蒼白になり、思わず尻ごみした。

「そうよ、あなたのオシッコは、どこから出るの。ねえ、指で教えてよ。そこを、さしてごらんなさい」

B子は、指で美香の鼻の頭を押しながら、いった。

「いや、いやッ。もうかんにんして。美香をいじめないで！」

美香は顔をあげ、むせび泣くような声で哀願した。こうしている間にも、尿意は刻々と限界に達しているのだ。

「だめよ、絶対にだめよ。さあ、早く指で教えなさい」

C子が大声をだしていった。

「もう、もう、かんにんして。そんなにいじめないで！」

美香は下腹を緊張させてうめき、首をさらに深く前へ折った。

「シコさん、このひと、もっとムチがほしいらしいわ」

D子が、いらいらした表情でいった。

「そうね、それじゃ、こんどは乳房をたたいてあげましょうね。その形のいい乳房が、真

赤になって醜く腫れあがるまで」

ムチをかまえて、シコは非情なことばを吐いた。

しかし、美香は深くうつむいたまま、身を縮めていた。うっかり動くと、耐えているものが、ほとばしり出そうだった。

いきなり、銀色のムチがはねて、ぴしりっとなと美香の乳房を腋の下から、たたいた。シコのムチさばきは巧妙だった。美香の愛らしい淡紅色をした乳首を、左右同時に、するどくたたいていた。

「ひいッ！」

と、美香はのけぞった。ふっくらとした白い乳房に、たちまち赤いムチのあとがきざみついた。

思わず下腹部の緊張がゆるみ、その一撃で美香はふるえあがった。

「あの、ここです、ここです」

美香は深くうつむいたまま、半ば夢中で女たちの要求に従った。

「そこが、どうしたの。もっとはっきり大きな声でいいなさい」

シコが、たたみかけるようにいった。自分も膝について美香の表情を窺っていた。

「ここから、私のオシッコがでるのです」

美香は、うめいた。

「だめよ、もっとしつかり教えてくれなきゃあ。それじゃわからないわよ！」

シコは片手で絨氈をたたきながらいった。

「う、う、う……」

美香は泣きだしていた。

美香の白い肩が、屈辱にふるえながらまるくなった。

五人の女は腹をかかえ、のどの奥までひろげて哄笑した。

「わかったわ。あなたのオシッコは、そこから出るのね。それじゃ、私たちと同じだわ。安心したわ」

ようやく笑い終えて、シコがいった。小さくうなだれている美香の背中へ、それからシコは、煮え湯を浴びせるようにいった。

「それじゃ、約束どおり、オシッコをさせてあげるわ。だけど、あなたはめす犬よ。犬には犬の習性があるわ。犬というけだものは、土の上でオシッコをするのよ。電柱なんかもよく利用するわね。だけど、ここには電柱なんかないから、そのかわり、箱のなかに砂を用意しておいたわ。あの砂を自分の両手で掘って、そのなかへするのね」

「片足をあげてね」



と、A子が自分でそのまねをしながら叫んだ。ほかの三人の奴隷娘が、どっと笑った。「もちろん、そうよ。なにもかも、犬のおりにするのよ。さあ、どうぞ、ご遠慮なく」砂をいれた木箱が、貴重な宝物のように部屋中央に運びこまれた。

シコを除く四人の女は、それぞれ木箱を中心に、ちょうど海岸で日光浴でもするような自由な、楽しげなポーズで、絨氈の上にねそべった。

木箱の上に四つん這いになった美香が、そこで片足をあげて放尿する姿を、觀賞しようというのであった。

「さあ、用意はできたわ。遠慮しないで、どうぞ！」

シコが、美香の首輪の鎖をひっぱった。美香は首をのびし、よろよるとその鎖にひきずられた。尿意はいよいよ耐えがたいものになっていた。美香の顔色は蒼白になり、手足の指のさきが、こまかくけいれんしていた。

## 羞恥のしづき

木箱のなかに盛られた乾いた砂は、無心な小山をつくって沈黙していた。

いくらか湿りけをおびていたが、その小山の頂点は、こまかい光を反射してかがやいていた。それだけを眺めれば、幼児たちが砂遊びに使う、無邪気な遊び道具だった。

白いめす犬は、しかし、はげしい羞恥とためらいを全身に示して、その砂箱から顔をそむけ、あとずさりした。

「おや、どうしたの。遠慮しないで、ここでオシッコをするのよ！」

左手に首輪の鎖、右手に細い銀色のムチを持っているシコが、そのムチで美香の尻を打ちすえた。

しかし、めす犬の手足は、黒い絨氈にすりつくような力で、反抗した。

首輪をひっぱっている鎖が、ぴいんと鳴って張り、ふるえた。哀れっぽい蒼白な表情をうかべているが、めす犬は強情だった。

シコの醜い唇が、敵意のある陰険な微笑をもらした。

「いいわ。それじゃ、そのままでいなさい。どうせ、あと五分と持ちやしないんだから。私たちはのんびりここに坐って、待たせてもらうわ」

美香のいまの状態に、それはおそろしく残忍なことばだった。

「お願いです！」

めす犬は、たまりかねて訴えた。

「こんな所ではいやです。お願いです、おトイレへ行かせてください！」

血を吐くような哀願だった。美少女は唇をひらいてあえぎ、なめらかな下腹は、異様にふくれあがっていた。

「だめよ」

低いが、意地の悪い、ぴしりとした口調でシコはいった。

「ここですませなさい。したくなければ、しなくてもいいのよ。私たちは、なにも、してはいけないとは言っていないんですからね」くやしい。美香は、のどの奥からむせび泣いた。

だが、泣くという行為も、しだいに、ぜいたくなものになっていった。膀胱はさらにふくれあがり、破裂寸前の状態になっていた。それを耐えるために、めす犬の赤い舌の奥のほうに硬直しはじめた。

二十秒、三十秒と、時間がたつにつれて、泣いている余裕すらなくなってきた。

美香は、息を吐きだすにも、腹の力をぬいて、そろそろと吐きだした。息を吸うときはいくらか力をこめられる。



みじめな姿だった。しかし、そのみじめさを自覚し、羞恥を意識する心も、刻々と麻痺していく。どんなに神経をほかへ散らしても膀胱のなかの液体は確実にたまり、緊迫度は強くなっていくのだ。下腹に鈍痛が襲っている。

「あらあら、あんなにもお尻を宙に浮かしているわ。まるでサーカスの犬ね」

と、指をさしてA子がいった。

「あんなに大きく口をあけて、だらしなくハアハア舌をだしている格好なんて、どうみても犬だわ。人間じゃないわ」

と、B子がいった。

「目に涙をうかべて……かわいそうに」

と、同情の色はすこしもなく、むしろうつとりした表情で、C子がつぶやいた。

「がまんしてふるえていないで、さっさとお砂を掘って、だしてしまえばいいのに」

D子が、待ちきれないような、いらいらした声でいった。

四人の美しい女奴隷たちは、砂箱を中心に、それぞれ自由な、奔放なポーズでねそべり、十七歳の美少女の「最後の瞬間」を待ちうけているのだった。

期待と好奇にあふれた視線が、美しい柔軟

な皮膚をもった美香の表情と姿態へ、まばたきもせず、そそがれている。まるでステージの上の華麗なショウを見物する観客たちのように……。

ついにシコは、細い金属製のムチで、まるく盛りあがっているめす犬の尻へ、かなり強い打撃をあたえたのだ。

「それッ、行くのよ！」

この苛酷な督促に、白い裸身は、電撃をうけたように、けいれんした。

そして、可憐なめす犬は、無我夢中の勢いで、砂箱めがけて突進した。もうがまんできなかつた。手足の鎖が、このドラマの伴奏音楽のように鳴った。

めす犬の視界から、五人の同性たちの姿がとび散った。羞恥をかなぐりすてていた。意識はただ一点に集中され、もうなにも見えなかつた。

美香は、砂箱のなかの砂を、手枷のついた両手で掘った。小さな砂山がたちまちくずれた。十本の白い指が、砂にまみれた。美香は唇をひらき、赤い舌をふるわせながら、砂の上にのしかかった。

あわてて、シコが叫んだ。

「手について、四つん這いのままでやらなく

ちゃだめ！ 片足をあげてするのよ！」

黄色い声をあげながら、シコはつづけざまにムチをふるった。

美香はムチに脅されて、本能的に左足をあげた。こらえにこらえていたものが、ほとんど同時に、ほとばしりだした。

待ちかねていた五人の目が、いっせいに輝いた。首をのびし、そろそろと近くまで這いついてきて、好奇の目を集中した。

めす犬は目をとじ、口をあけっぱなしだった。乳房をふるわせ、あらい呼吸だった。淡紅色の小さな乳首が固くとなり、ころよい解放感に酔っているようだった。

猛烈な勢いで、ほとばしりだした量の半分は砂にたたきつけられ、あとの半分は、木箱の外へ、しぶきとともにあふれた。

そのしぶきの激しさに、五人の女は思わず顔をそむけ、あわててとびのいた。

砂は、美少女を苦しめていた元凶を吸って黒くぬれた。小さな泡が、淡い色に光って重なった。

放射の音はつづいている。溜まりに溜まっていたのだ。とめようとしても、とまるものではない。砂からうすい湯気がたちのぼる。

五人の観客の口から、



「ひゃあ、ひゃあ！」

というような、けたたましい喚声があがった。感嘆の声である。絨氈を手でたたき、足をばたばたさせてよろこんでいるのはD子であった。

やがて、音はしだいに低くなり、しぶきも力を弱めた。

おわったのだ。新鮮な臭気が、黒い部屋のなかに、静かに充満した。めす犬は疲れ果てたように片足をおろし、そのまま、ぬれた砂の上に腹をつけてくずれた。

「ぐう、う、う、う……」

という悲哀にみちたうめき声が、めす犬ののどからもれた。終えた瞬間から、羞恥と屈辱感がこれまでの数倍のはげしさで、急激によみがえったのだ。

美香は砂箱の上からおりと、髪をふるわせ、背中をまるめて、泣きだした。のどからしぼりでるような泣き声だった。

まるくうずくまった肩と背中と尻が羞恥にくねり、白い一個のかたまりとなってふるえた。

「う、う、う……」

左右の手の指で、黒い絨氈をしっかりとつかみ、めす犬はいつまでも顔を伏せ、泣きつ

づけた。白い尻や太腿が砂にまみれていた。それは痛々しいなかに、卑猥な感じをともなった風景だった。ぬれてくずれた砂山が、排泄の量の、みごとさを示していた。

## ぬれた絨毯

「まあ、カーペットをずいぶん汚してしまっただね」

シコが、近眼鏡を光らせながらいった。

この部屋の床に敷きつめられた黒い絨氈のかなり広範囲の部分がぬれていた。

あの元気のいいしぶきと、豊富な量を、わずか五十センチ四方の木箱の砂のなかに収容できるはずはなかった。

「この黒いカーペットは、ペルシャ製の高級品なのよ。このままにしておくことはできないわ」

シコは、ムチを床に鳴らしていった。

「早くなんとかしないと、シミになってしまいうわ」

A子がいった。シコと四人の女は、目と目で、なにごとか合図をしあった。

B子が、用意してあった雑巾を、美香の顔の前に投げた。

「その雑巾で自分の汚したところをふきなさい。あとしまつを、ちゃんとしなさい」

意地の悪い目で、シコがいった。

美香はうずくまったまま、低い声で泣いていた。

「かわかないうちに、よくふきとっておくのよ！」

シコの金属ムチが、美香のまるい尻にはじけた。美香は、ぎくんと肩をふるわし、顔をおこした。

「あなたのオシッコよ。ふきなさい。自分で汚したんだから」

うす笑いをうかべながら、A子がいった。

「早くふきなさいよ、だんだん臭くなってくるわ」

B子が、嘲笑とともにいった。

美香の顔は、あとからあとから流れる屈辱の涙で、ぐっしょりとぬれていた。だが、ここでいつまでもためらっていると、彼女たちは、美香をいじめるアイデアを、またすぐに考えつくだろう。この女たちは、意地悪の天才なのだ。

美香は右手をのばすと、目の前に投げられた雑巾をとった。

その瞬間、シコの銀色のムチが、すかさず



美香の肩さきに打ちおろされた。

「あなたは、めす犬よ。めす犬が、そんなに器用に手を使えると思っているの？」

美香は痛みを耐え、無言のまま、うらみのこもった目で、シコをみあげた。

「まだあなたにはわからないのね。犬はね、そういうものは、口にくわえるのよ。口にくわえて、そしてふくのよ。やさしいことよ。さあ、ぐずぐずしていないで、やってごらんなさい」

細い金属製のムチが、ふたたび美香の白い臀部に鳴った。こんどは、かなりの激しさをもっていた。

ぴくん、と反射的に腰をふるわせ、美香は首をのばすと、あわてて雑巾に顔を寄せ、口にくわえた。

白い尻のなめらかな皮膚に、さっきからのムチあとが数本ついているのが痛々しい。その尻に、女たちの罵声が投げつけられた。

「さあ、おふきなさい。おそうじしなさい。あなたのオシッコをふくのよ、早く！」

美香は雑巾を歯と歯のあいだにしっかりとくわえ、両腕と両足に力をこめて、ようやく這い始めた。そして、ぬれた絨氈をふきはじめた。

さからうことはできないのだ。いまは、めす犬としての運命に服従するより、しかたがない。

ぬれた絨氈は、かすかに臭気を放ち、小さな水たまりになっている部分もあった。雑巾は、たちまちその液体を吸ってぬれた。

美香は、本能的に顔をしかめた。鼻孔に臭気がまみれ、そのみじめさに、ぐっ、ぐっとのどが、むせび泣いた。

しかし、中止することはできない。シコのおそろしいムチが、背後から残忍な目で監視しているのだ。美香は必死になって、雑巾をくわえたまま、顔を前後左右に動かした。

雑巾は液体を吸いあげ、臭気が鼻孔を襲い、歯にしみた。美香は目をとじ、思わず顔をしかめた。

「まあ、なによ、その顔は。自分のものを自分で始末するのに、なにもそんな顔をするとはないでしょう」

B子が、嘲笑した。

「どんなにおいがする？ あなたは上品で美しいから、きっとオシッコも、いいにおいでしょうねえ」

鼻をひくひくさせながら、C子が真顔で、いった。

「いくら上品なお嬢さんだって、同じようなところを通って、同じような出口から出るんだから、やっぱり同じにおいだわよ、ねえ」

D子はそんなことをいうと、大きな口をあけ、高い声で笑った。

美香の顔は、涙と尿がまじりあった透明な液体でぬれ光った。

「も、もう、ゆるして……」

哀願したとたんに、美香の口から雑巾が落ちた。その雑巾の上に、美香のくやし涙は、とめどもなく、したたった。

五人の女たちは、声をそろえ、腹をかかえて哄笑した。

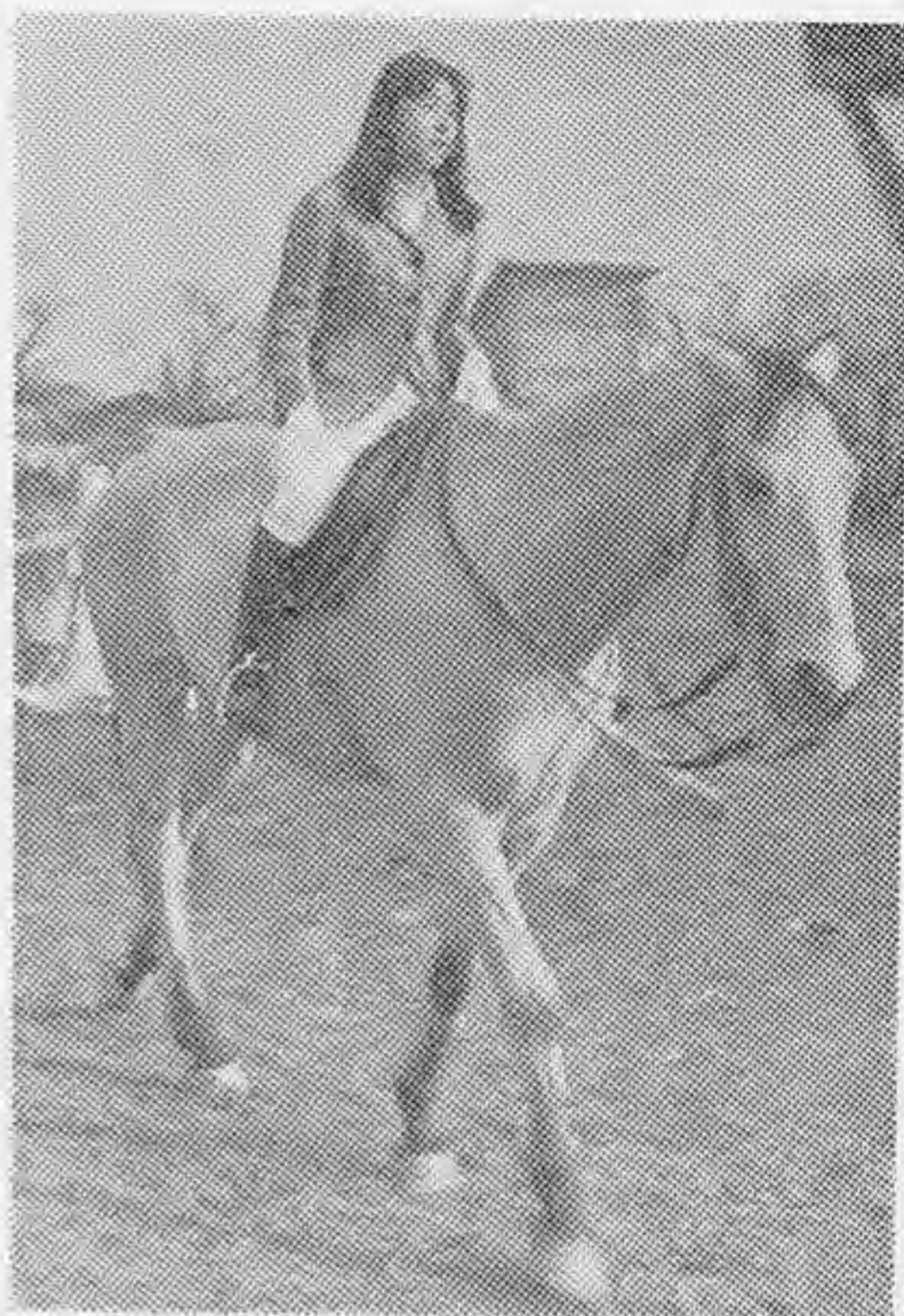
A子は指のさきで、ぬれた雑巾を、そっとつまみあげ、うつ伏して泣いている美香の頭の上にのせた。

そこで五人は、また笑いこぼれた。彼女たちの心には、勝利の快感があった。

それは、ひさしく味わったことのない優越感だった。

自分の尿を吸いこんだ雑巾を頭の上にのせたまま、美香は声を殺して、むせび泣いた。尻や太腿についていた黒い砂が、ようやく乾きはじめていた。





# 女性乗馬に

雑

感

ついで

文と写真

佐野

寿

洋の東西を問わず、最近では若い御婦人の間や女子学生の間には、乗馬が最も恰好よい格調高いスポーツとして認められるようになり、あこがれの的になった事実是否定できません。従来、指適された如く、我国では特に女子大生や女子高校生を中心とした学園の馬術部への入部は、美しい彼女等のあこがれと期待に満ちたものとして、学園生活に一種の刺激と甘美な夢を与えるに違いありません。更に英国やドイツ、北欧等々の影響も手伝ってか、このごろは特に若いママの間にも次第に乗馬ブームが波及し、余暇を最も有効に楽

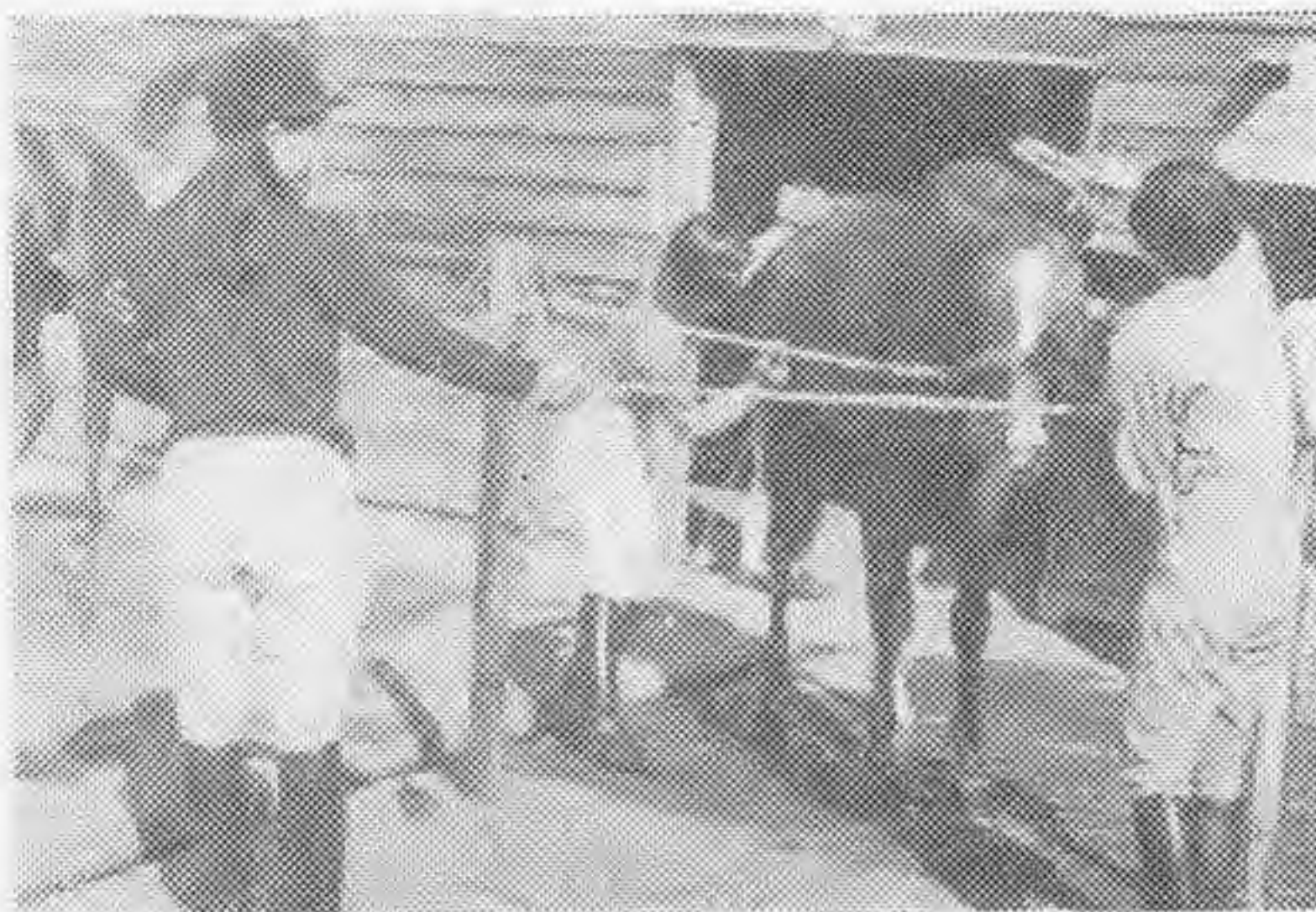
しく、活気あふれる高級なムードで満たすようになりました。

嬉しいことには、近頃めっきり、サラブレッド系の座高の高いスタイルのよい俊馬が、乗馬クラブや女子大の馬術部に段々ふえ、それに加うるに騎乗する若い女性の方々も、すらりと背の高い、足のよくしまったアマゾンがふえてきたことです。また最近の情報によりますと、近々プロの女流騎手が復活し、皇后杯には女性だけのレースが、おめにかかれ

いますのは、欧米ですら女性だけのレースがあったという事実は、私の知る限りでは、かつてありませんし、常に男女混合のレースしかなかったからです。

一度、オーストラリアのシドニーあたりで女性ばかりの競馬があったとか。或いは昭和二十四年頃、山口県で女子競馬があったのうわさは確かにありましたが、それらは正式のものとは公認されはしなかったのです。山口県での話は、私が中学二年の時に英字でかかれたニュース・ウィークリにフォト入りで出てましたから、間違いはないと信じます。





当時のことでしたから、女流競馬がストリップ・ショーや女子プロレス並みに、おかしな目で見られたことと思います。

昭和二十三、四年は今から考えますと殺ばつとして寒々した、また人心のすさんだ時代でしたから、色々な変わった興業が現われては消え、また現われては消えるという時代で

した。

女子プロ野球の出現、消滅も当時のことでした。柴田サーカス、木下サーカスで女流調教師による象や馬の曲芸が盛んだったのも、昭和二十六、七年頃からだったでしょう。当時からマゾ気のある私は、女流調教師のブーツ・スタイル（当時としては誠に珍しかった）による、馬やその他の動物の烈しい調教に、激しく興味をそそられました。

一昔前はサーカスのことを曲馬と申

しまして、やはり馬が中心でしたが、今日では淋しいことに段々馬の活躍する舞台が減少しているようで、大きなサーカス団でも二、三頭しかいないようです。別に女流調教師がサデイスチンであるとか、その傾向が強いというわけではないのですが、私が海外で見たスコット・サーカスでの女調教師（ブロードの長身に厚化粧をした）による猛獣の乱打の烈しさには、びっくりし強烈な印象を受けました。それにしても、年々サーカスの盛華が色あせて行く世界的傾向は、さびしい限りでしょう。

前から、婦人の乗馬が健康美に与える影響



について、時々婦人雑誌に、その方の専門医による意見が述べられたものですが、私に云わせていただければ、乗馬されても、そう急速にスタイルが良くなるというのは間違いですが、長期にわたって馬術をたしなまれば特にバトックス（ヒップという表現より間接的で、しゃれており、フランス語から由来した合成語です）が下方に垂れ下るのを防ぎ、丸味をもたせるのには必ず有効である、と信じる根拠はありましよう。他のスポーツや健康美容法と同じように、これもそう性急な速効性を期待するのは無理でしょうが、レゲール・メイスイヒ（規則正しく）に行なえば、



疑いもなく肉体や皮膚の老化を防ぎ、細胞を若々しく保つ、とドイツの医学者は指適し、また心理学者は、女性乗馬の精神衛生にポジティブに作用することを強調しています。

従来、とかく我国の女性は外国婦人と比較して、やや膝が直立した時に出っ張り、ヒップの位置が少し低いため、下に下がり勝ちでたまに猫背になる傾向があり、姿勢が悪いとどうしても内臓諸器官を圧迫しますので、それを直すにも、かなり長期にわたる乗馬、或いはサイクリングが良いといわれていますが疑いのない事実と考えられます。

我国でも特に若い婦人の間では、段々と乗馬に対するスポーツとしての理解と関心が高まりつつあり、昔と違い「大衆のスポーツ」とまでは行きませんが次第にやろうと思えば割に楽にできるようになったことは否定出来ません。

職場のサークル、特にデパートのO・L嬢がクラブを作り、遠乗りをされた、ほほえましいフォトを数年前に、すでに私は拝見しました。特に馬上豊かなお嬢さんの、りりしい姿は、一瞬、はっとさせられる程でしたし、生来、美しい顔は益々美しく、たくましく見えたのでした。じわじわと切ないまでに心地

良い乗馬感覚は二、三度、味あわれた女性を魅力のとりこにしてしまう位、強い良い意味での刺激と快感を与えるものなのです。

生来リズムミカルなムードに強い女性のスポーツとして最適なものの一つであり、特に平均台上での体操と同様

バランスとタクトと女性らしい柔軟性とリズムは、男子の腕力一点張りのそれとは異り、いささかも男に比べて不利な点はないばかりか、特に馬上のような高い所での平衡感覚とカリズムの躍動と調和美に関しては、女性の方が一枚上で、この事実が洋の東西を通じていえるのではないだろうか。

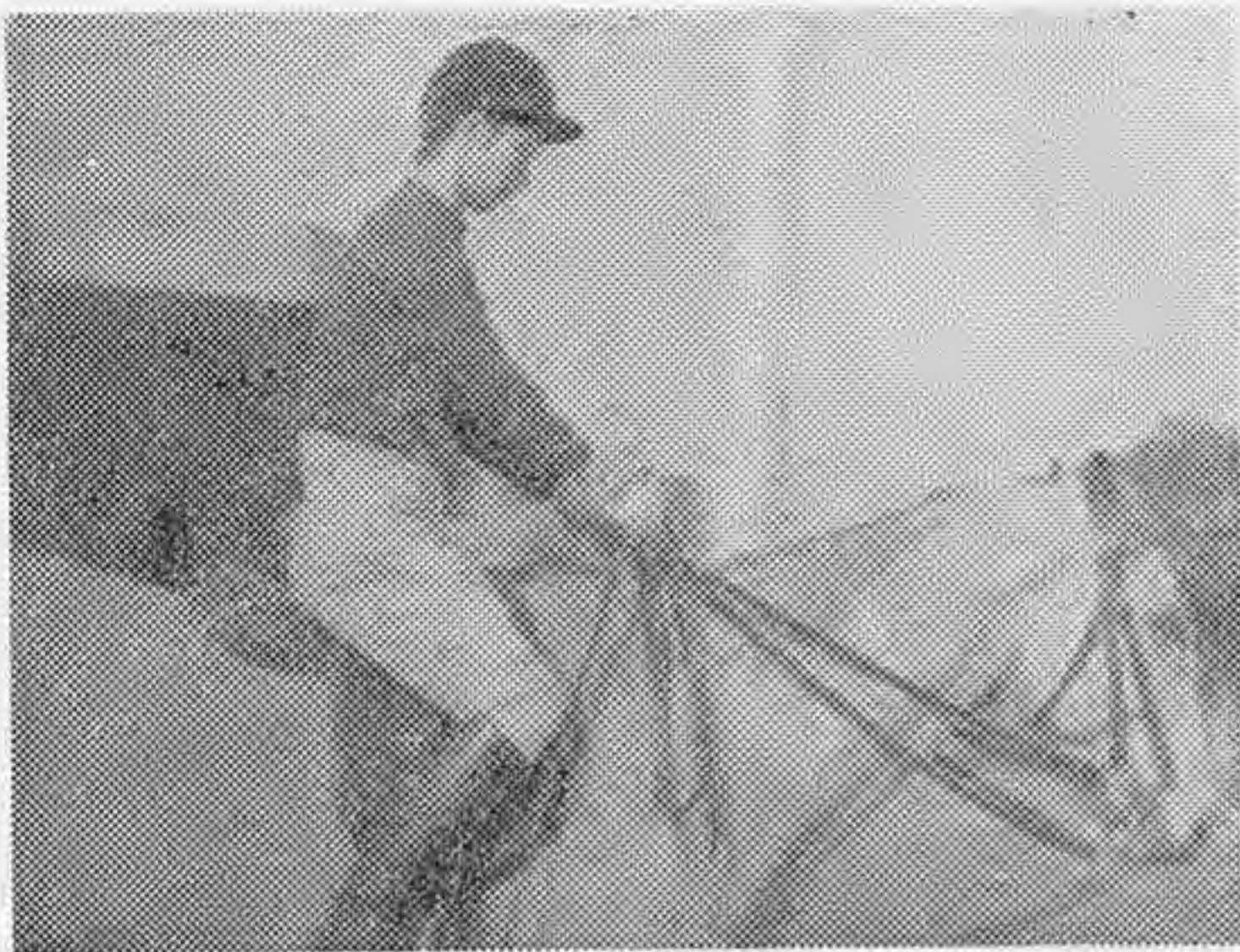
一般に馬を動かすには、拍車とか長靴による扶助とか、鞭の使用を直ぐ思い起こすのですが、馬は非常に心理的感情的な動物です。で、女性の母性的本能による、馬に対する熱いまでの「ささやき」や、はげまし、場合によっては熱っぽい「会話」は、馬にとって非常に有効な刺激になり、それについて私は何



回となく、その事実を西欧や北欧で、かいま見てきたのでした。どんな素敵なスポーツカーを運転するより、生きた感情を持つ馬に騎る方が、どれ程、女性にとっては似つかわしく、心理的にも肉体的にも、適応したものかわかりません。

欧米の馬好きなお嬢さんは、一日の内、非常に長時間をマネージや馬術学校、乗馬クラブで過ごすのですが、彼女等は実にあざやかで、しかもたくみに馬に対する「はげまし」と「懲戒」を交互に使いわけ、徹底的に馬を愛し、それ故にこそ外面上、サジスチンと思われる程の激しさで馬に接するのを、私はまじまじと観察したのですが、そこにも何か母





性愛にミックスした光景を体験したのです。勿論、しばしば指適されるようにホースウーマン（女性乗馬者）とS・M・Fとは何等直接的な関連性はないと考えられますが、それにもかかわらず、強烈な母性本能から由来されると思われる弱者（この場合、馬であるが）に対する「いたわり」か「支配欲」の二者択一というのではなく、この両方を含めた

ものを所有する故、多少とも馬術の上達には女性ながら「馬を虐める」という積極的な、或いは攻撃的な面が皆無とはいえず、そればかりか、婦人は心には馬を可愛いと思いつつも、つい虐めてしまうのですが、反ってその方が、練達度が早いと考えられます。昔からよく時代劇等で「馬を一責めした……」という表現がありますが、これが若い女性アマゾンの口から聞かれる時こそ、我々マゾヒストにとって、最大のショックに違いありません。

かつて、私の「新女性乗馬考」の短文の中に、完全馬装した女性の乗馬、或いはサジスチックなアマゾンの馬術シーンは十分、条件でこそあれ、決して必須条件ではないと主張したその内容は、正にアマゾンがS性を持つことは絶対、必須条件ではないというようにしたものと一致しています。マゾヒストの一部が強い関心をしめす所のアマゾンは、特にSである必要はなく、女が偶然Sであれば、それに越したことはありませんが、いつもそうだと断定するのは非現実的で、且、論理的、正当性をも欠如したものでしょう。

現に私が時々配給を受けていますエクマン・ルンデイン版の、はたして何パーセントの女

性が本来のSであるかは知るよしもありませんが、多分一〇二割もないのではないでしょう。又、仮に彼女らが馬に対してのみ完全に支配欲を維持し、認め得る程度のSであったとしても、男性に対して、はたしてS気があるのでしょうか？ 恐らくNOに違いなく男性には如何にも淑女らしい女性でしょう。その良い実例は、英国の女流馬術士パット・スミス女史です。

彼女は御存知のように女流障害の超ベテランで、彼女の生涯の内、馬を少なくとも数頭は乗り潰しています。（勿論、直接、馬場で乗り潰してしまうのではなく、きわめて激しい練習のために多くが肺炎とか、脚の腱がだめになって、射殺されるとか、間接的にである）彼女の著書を見ても、いかに女性ながら馬を征服する意欲が強烈かを知らされ、驚きに耐えません。又、各馬の走り方、とび方の特徴や、乗り心地の特長を、きわめて克明に記述しています。特に、汗かきの馬には調教に手加減を加え、その反対に、頑固なタフな馬は「へど」がでるまでスミス女史により、虐められていたのですが、他方、パット女史は英国の社交界の花形で、典型的な女らしいレディーで、何らSMと無縁なのですから再度



恐れ入る次第です。

パット女史は30才以上の方ですが、未だ顔には小じわ一つなく、美しさと知性にあふれた婦人です。自分の愛馬の各々に女史の体でじかに調教を体得させ、服従を教え込んでしまわれるので、誠に勇婦そのものという感じを受けるのでした。

女史は過去に乗り廻した俊馬のクリスタルガラスで作らせた等身大の胸像を自分の部屋にかざらせ、彼女のしゃれた戸棚には、大小無数のトロフィーや金、銀、白金製の杯が並べてあり、又、優勝時に使用された笞や拍車付きの長靴と皮革製の手綱等も、ワセリン処

理をほどこしたものが無数にならべてあり、各愛馬のフォトもかざられています。

女史は全欧州と北南米、オーストラリヤを限なく馬術修業の旅をされ、特に南米（アルゼンチンやチリ、ウルグワイ）産の、やや小形の白い俊馬が大変、気に入られ、小さい割にタフで、砂漠地帯のような乾燥地でも長時間、人をのせて耐えられる種類の馬に魅せられ、南米旅行のときは毎日、その南米産の白馬を賣めたてられ、じかに体で馬に教え込まれ、その正に火の出るような猛調教を常とされたのでした。

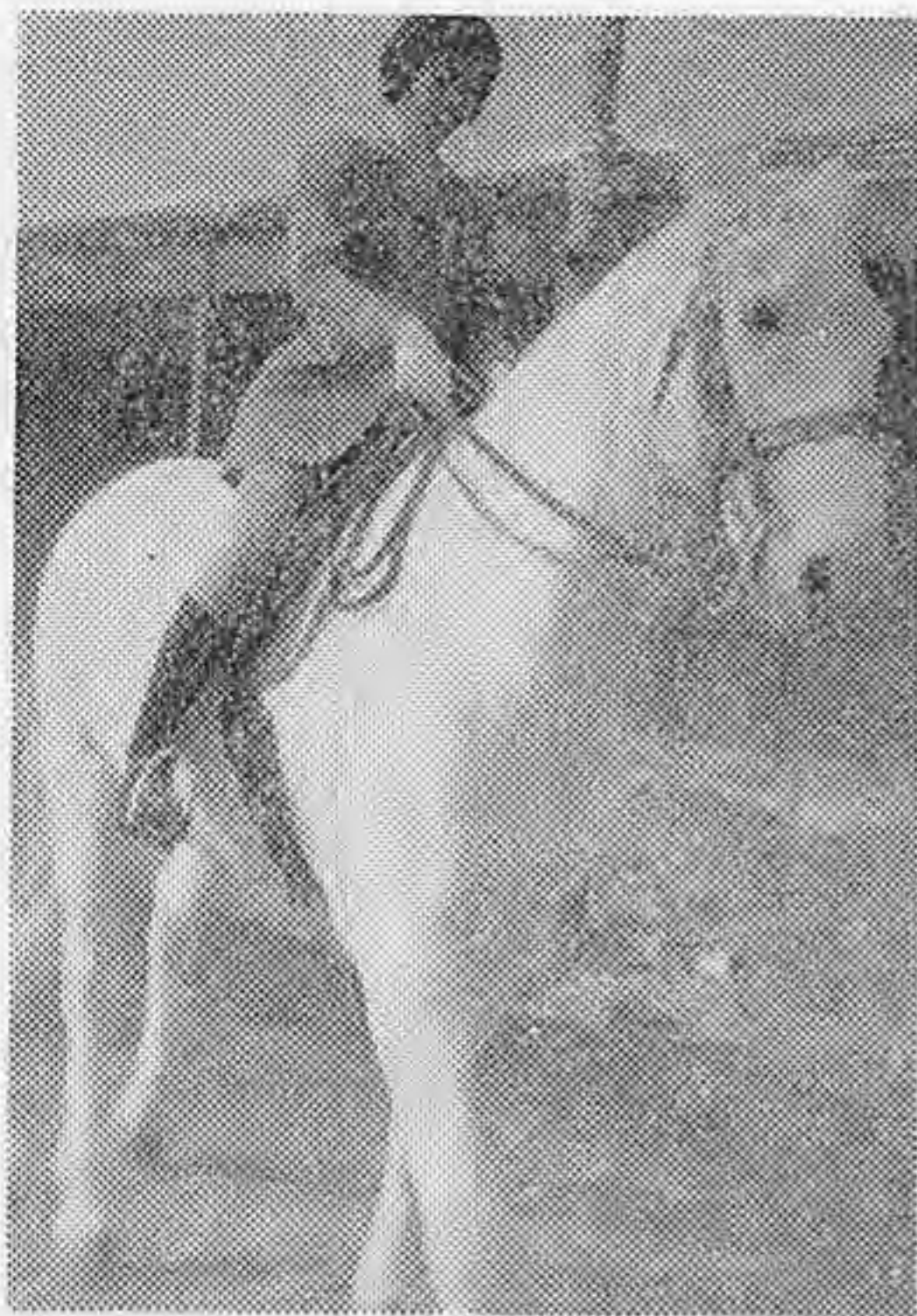
三、四才の未だ柔軟でリズムカルなギャロ

ップ運動の特長を、きわめてくわしく著書の中に書いておられるのです。特に愛馬の手綱感覚に細心の注意を払われまわがってても他人には（男であれ、又別の女性であれ）許可なしで絶対に自分の馬に乗らせなかったのですが、むしろ本格的なプロの女流選手としては当然のことかも知れません。

パット女史は教養が深く、

貴族の血を引いている割には、決して高慢な所はなく、むしろつましやかで、上流社会の淑女の御手本でさえあります。「馬に乗る女」が、とかく偏見と、おかしい目で見られ割に簡単に肉体を男に許す等という昔のサーカスの女性調教師とは全く異った世界なのかも知れません。それ所か、パット女史は「馬に乗れる」ということにより、逆にねたみやひがみを買わないようにも心掛けておられる立派な方の方です。

以前から、確かに一部のピュリタニズムの男性や、ねたみ深い御婦人（自身は殆ど乗馬ができない）にとっては女流乗馬家は、プロであれ、アマチュアであれ、又は、女子学生乗馬部員であれ、ひんしゅくとねたみの対象にされたものでした。それは単に財政経済的なものばかりでなく「女のくせに馬に乗って……」という、古い、がん固な思想による偏見によるからでしたし、日本でも大正初期に一時的ではありますが、華族の婦人のおおびらな乗馬に、一部のひんしゅくがあったと聞いています。終戦直後に一時、映画や宝塚の女優さんの間でブームがわき起こりましたが、その時の反響も、一面ではマゾヒストには強烈な憧けいの対象でしたが、他面では、





「成り上り者の馬術……」という風に、そしてを受けたのでした。

しかし、それはジャーナリストに対する女優の態度に、かかっていたのではないかと思

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

います。当時、大抵の日本人は、食うや食わすの最低生活の最中に「女のくせに馬を楽しむ成金娘……」という反感を、一部の記者に与えたからではないかと想像されます。

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになれる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

私は子供の頃の東京で、音楽学院で美しいおねえ様方が、森の多い今日より空気のきれいな地帯で、時々楽しそうに、りりしく馬にまたがっておられたことが未だに忘れられません。一度、私は彼女の一人が落馬したのを見て、大変ショックを受けたのですが、その声楽家のおねえ様の馬は、女主人を振り落として、さっさと厩舎へ一人で帰ってしまったことがわかり、後で皆で大笑いしたことがあります。子供心にも女子の乗馬が、どれ程楽しく妖しいまでに秀逸なものであるかを、心に深く刻み込まれたのでした。

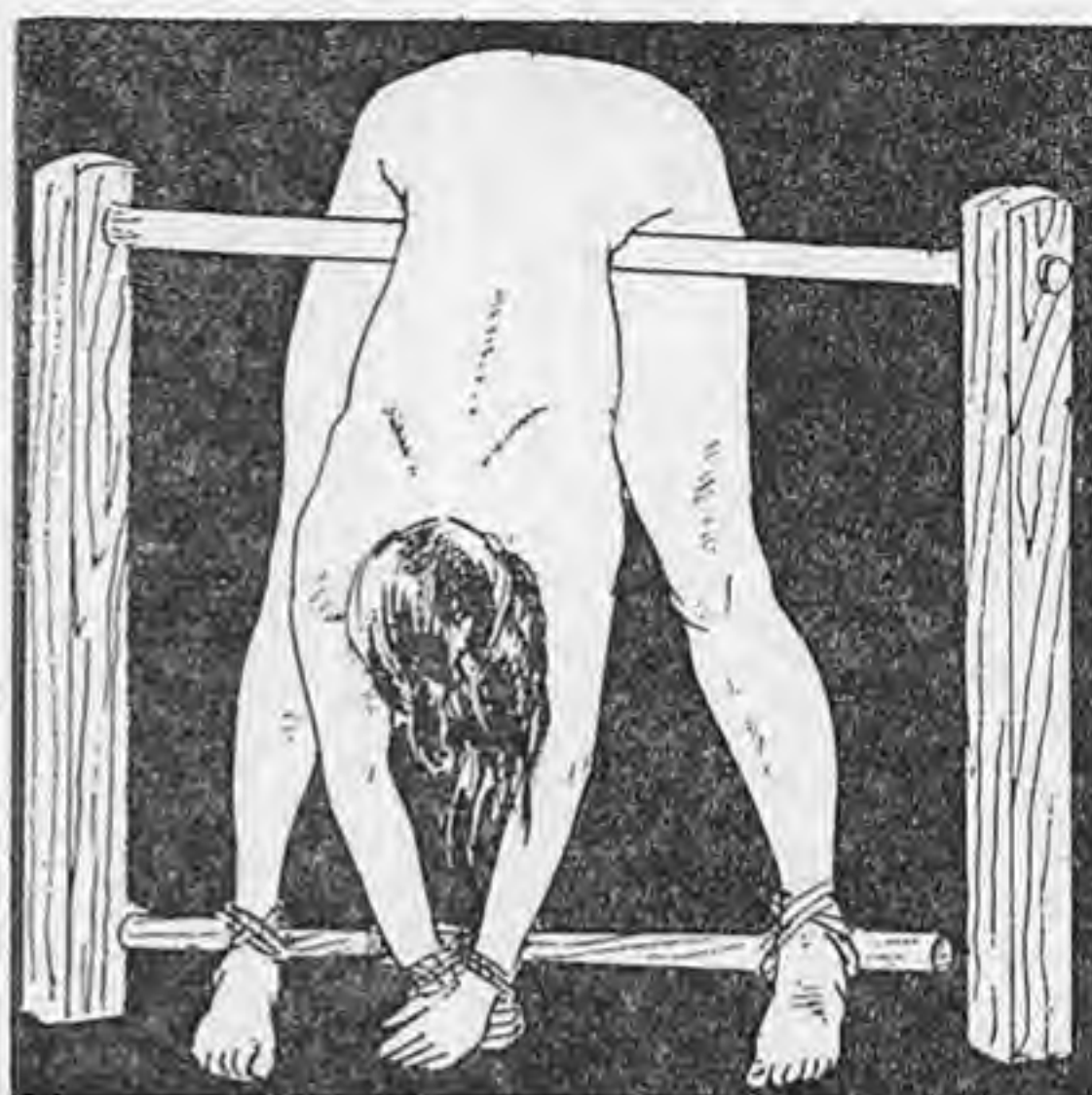
その為かどうか知りませんが、私は当時から、おてんば娘の上級生に無限のあこがれを持ち続け、今日に至っても馬乗なさる美しい女性には無条件で降参してしまい、全く頭が上がりません。どうしても神々しい女神が乗っておられるとしか考えられない、圧倒された気分になせられてしまうのです。

特に、それが外国女性の場合は一層、その迫力が強烈で、ただ、ぼーっとなり、立ちつくしてしまう、おろかなマゾヒストです。実に他愛なく、アマゾンに降参してしまうのです。

—以上—



カット・須坂 旭



新しい市域にある公務員アパートは、どれもが日本軍兵士に占領されていた。日本軍が住民を追いたてたのではなく、まるで軍兵のために設けられた新築の宿舍のように空屋にされていたのだ、という。地下室には暖房用の石炭まであり、電気こそ発電所が動いていないため通じていないが、水道からは新鮮な水がいくらかでも出るといふ薄気味悪いありさまで、はじめ日本軍も野外に陣どり、空屋も爆発物処理班に命じて徹底的に調べたが、なんの異状もないということで、恐る恐る宿舍

創 作

幻

想

帝

国

花

影

叢

にあて、交代でだが、ブラゴヴェシチェンスク占拠以来の激戦で疲弊した二個師団も完全な休養がとれた、ということである。

憲兵隊は一日おくれで到着したので、まだそんな事情がわかっていなかったが、軍司令部から倉庫事務所をわりあてられた手際の上さといひ、電灯のないため暗いのは当然としても、妙に静まった、秩序だった街路の警備状態など、満洲の基地にいても、これほどのものは作りだせまいと思うくらいの理想的な占領状態で、はじめに入市した軍兵のようにやはり薄気味悪さをおぼえていた。

いどころはなく、計画して来た占領時の混乱の鎮圧、協力住民の獲得、共産党組織の摘発など、息ごみがはずされて空振り、さて何から手をつけていいものか途方にくれ、幹部将校は占領軍司令部との連絡、打ちあわせ、新方針のうちだしに慌ててとびまわり、仕事にもならないところであった。

多くは二階建てレンガ積み造りの旧市の家には住民が多く残っているらしく、息を秘そめて軍の行動をうかがっている気配がある。あるいはこうした住民がある合図でいっせいに日本軍をとりかこみ激越な市街戦がいつどこの街路で突発するかも知れず、うかつに住

(二)



民の家には踏みこめない感じがあった。

路の辻々には歩哨というより、いつ戦闘に入ってもいい臨戦体制の警備隊がたてられ、大きな焚火の炎が暗天に沖して燃えさかったのだ。

イワノフの鼻がものをいい、イワノフ自身日本軍に射たれそうな危ない目にあったが、捕え得た獲物、今の状態が何を語っているのか、吐かせることは多い。イワノフ等の直接上司原口憲兵曹長もそれをさと、自分で尋問の手を下す、という。それはいいとして、聞きだした住所地の調査へさっそく追い出されたのにはイワノフも、いささか頭にきた。

アパートへ来てみれば、捕える目当ての住民などはいもせず、折り返し報告すれば、それはどういふ事なのか調べて報告せよ、といってくる。

中ッ腹で電話を切ってもそこは雇われ密偵のつらいところ、命令どうりに調べていかなければ帰れない。

軍分屯所ではそんなことは憲兵隊から直接いってこなければ答えられん、という。イワノフには上等兵と一等兵二人がついているが彼らに才覚はない。持ってきた地図に、日本軍占領地と住民区を分けて色ぬりし、ようや

く報告しうる資料ができた。

官公署、工場、倉庫など大きな建物すべては日本軍の手にあり、旧市街に住民がつまっているらしいことがそれで明らかになった。

「どういふことだ、これは？」

と問われてもイワノフにはわからない。

「ヨシ、この件は軍司令部に問いあわせてみよう。しかし、変だな。女は自分の住所地にゆうべから住んでいないという事になるな」

その女のからだは、手足をまとめてくられてブラ下げられていた。尻が、責め手の胸のあたりにデンと据えられ、責められていた余韻であろうか、少しゆるくゆれている。

肉塊は肉塊そのものだ。石油ランプと蠟燭の灯りが、ゆるる固体を異った角度からうつしだし、肉塊の影の部分にうつり変わるしみをつけていた。

「かわるか」

と原口曹長はいった。手にした皮鞭をイワノフに渡した。

「おれはしばらく上へ行ってる。その間にこの女が昨夜いたところを吐かせておけ。それ以上のことをしぼりだすのもお前の腕しだいだ。うまい情報がとれたらボーナスを出してやろう」

「ボーナスは、何をいただけですか？」

「うむ。とりあえずこの女の最終的処分をまかせよう。ボロにしまつては貰い甲斐がないからな、そのつもりで適当にやれ。それからウォッカがあったな。十カートンばかり廻してやろう」

「はい。ごちそう様ですね」

「まだ礼は早い。怪しいところはあるが、ただのオッチョコチョイのチンピラ娘かもしれないからな」

高い笑い声が四囲の厚いレンガ壁に反響して、ワンワンひびいた。

その時、電灯がついた。

○

単純な男だ、とイワノフは思った。日本人には総じて陰がない。1は1で、1.5でも1.8でもない。妙な窮屈な心の片隅に自尊心がありこれに触れると針鼠のように怒りたつが、下手に出ておだてておけば、このくらい御しやすい主人はいない。得手勝手なところは充分にあるが、どこで勝手な行動をとるかは影にふくむところがないから一目瞭然である。ただやはり鼠に似て臆病だから、とっつきは引っこみ思案だ。東洋の神秘的表情、とか意味不明の微笑とかいうのがそれだ。ことを運ぶ



段になるとやたらにせっかちで、時間ばかり気にしている。こんな人間達に複雑な大陸心を制圧できるはずがない、とイワノフは思っている。今は主人だから気嫌をとりつつやっているが、いずれはどこかで鼻柱を折られてペシャンコになってひっこむ。その点、食えないのは、やはり支那人だ。

憲兵隊に連れこんで鞭をとれば、だらしないほどの悲鳴をあげる。それで本音を吐くかと思うと、どうして強たかな根性ぶりを見せて、こちらを逆に利用しにかかる。

營口や大連港に巣喰っている苦力たちを見るとイワノフでも無気味になる。満人、蒙古人も、恐ろしい冷たい血の流れている無表情な肌をもっている。東洋の神秘というのは彼らの外面をいうのだろう。

日本人の肌は薄い。血も水のように薄い。ガラス容器に入れられて沸騰を待っている。こんな手あいロシア女が相手になるわけがない。多少いためつけられたところで、顔のまわりに蛇が飛び廻るぐらいのことだろう。

まだ充分にうら若い、固い脂肪を充分にまとい、頑丈な筋肉を保護している同種人の肌を、イワノフは夜が明けたような電光のもとで、しばらくはなめ廻すように見つめた。

(今まで、おれが餓えていたものは、果たしてこいつだろうか)

たしかにハルピンのキタイスカヤなどではめったにお目にかかれない、初物の栗のような、ほかほかした感じが目をたのしませる。白系露人の娘は十五ですでに墮落している。処女の香りなどは気もない。

考えてみれば赤に熱をあげるなどということも若いうちで、こちらに飛びかかってくるようなところも可愛気がある。

(小学校の教師だ、とかいったな)

ちょっと鼻先のそつとがった、理知的な表情をもったディネーラ・スローヴィンである。ニコラエフスクの小学校の音楽教師に似ている、とイワノフは思った。竹のタクトを持っている、時々生徒の指をたたき、冷たいノールな女だったが、少年のイワノフは妙にその教師が気になった。生徒が手に負えなくなる、と他の教師(たぶん偽善者面の教頭であつたろうが)の立ち会いのもとで、いたずら者を鞭で打つという事だった。四ツ這になり自分でズボンを押さげさせられるのだという噂だった。噂だけで事実には知らない。一度、何でだったか忘れたが、頬を強く叩いてひらで張られて呆然とした。満座のなかであ

ったが屈辱をおぼえる先に、あつけにとられた。怒った教師の、いつもは血の色もささない白蠟の皮膚が紅潮していたのが後々まで印象に残った。多分教師の誤解であつたろうがイワノフ少年が卑猥な意味にとれる言葉を口にしたのだ。

それからヨーロッパの戦争。革命。ボリシエヴィキのロシア。ニコラエフスクを占領した日本軍のしおたれた貧弱な軍装。コサック騎兵の祖父をもつ父は日本の援助で騎兵隊を作った。極めて優美な姿の騎兵隊だったが、パルチザンの無愛想なライフルに追われて、逃げなければならなくなった。母と家族は船でウラジオストクを目ざした。ところが上陸できず、朝鮮の元山へ入った。それから汽車で満州へ入り營口へ落ちついた。財産をほとんどなくしていた。父の消息があつたとかでハルピンへ行った。牡丹江へまわり、聞き伝えに佳木斯、北安、黒河まで行った。対岸のロシアの街ブラゴヴェシチェンスクの灯が黒い河面に亡霊の集団のように浮かんでいるのが恐ろしくもあり、なつかしく涙の出てきそうな切実な感情が写っても見えた。けっきょくハルピンへ引き返し母の知人だという人の世話してくれた部屋で、母が寝こ



んでしまった。急性肺炎で、ベッドのなかで織いからだが火のようにもえて、母の命が尽きた。営口に帰ると家が消えていた。外見の構えはかわらないが支那人の商人が住んでいる。祖母と弟妹の三人は、ひと月ほど前に張作霖の軍人が来て連れて行ってしまった、という。軍屯所へ行って聞くと、そんな事実はないとそっけなくあしらわれた。呆然とする他はない。近所の者の話では、後で考えてみると、張軍の將校にしてはおかしかった、という。日本人の人買いが幼い兄妹に目をつけてひと芝居うったのか知れないという噂もあった。黒幕だときいた日本人をさがして大連へ行った。荒っぽい造りの道が走っている新興の港町でイワノフは、けっきょく十年過ぐす羽目になった。苦力もした。人力車も引いた。トラックの上乗りにもなった。しかし満人や支那人にはどうしても馴染めなかった。肉体労働がつらく、いやでたまらなかった。満鉄調査部ロシア課に出入りしている木野という日本人に拾われて、彼の秘書になった。ハルピン辺りへくるロシアの出版物などで面白そうなところを見つけたら、意識解説して秘密めかした書類を作る。ノワノフの労作を木野は満鉄へ売って、酒をくらい、姑娘のと

くに織い子をみつめて抱く、大言壮語だけの大陸浪人が木野であった。

イワノフは幸いかなりな雑学家だった。小學校時代から地理歴史は得意だ。日稼ぎ人夫になっても暇さえあれば拾った新聞、雑誌を手あたりしだいに読み耽る癖があった。世界情勢の推移には興味以上のものをもって、少ない資料をあれやこれや頭のなかでこねくり廻す作業をした。満鉄へ出す資料も、したがって、なかなかうがった事象の解析を附していて、注目された。

こうしてまた十年、イワノフはヴェテランの密偵として母の故地へ戻ってきたのだ。

女に關しては、イワノフは誇れるほどの内容のある経験はもっていない。かつて恋愛感情をもってひとりの女に執着したこともなかった。情熱が薄いのかと思うが、多分現実を新聞紙によって避けた本能が女との交渉の場合も、まず働くのかも知れない。

しろうと女にはめったに手を出さなかったが娼婦を抱く機会はいくらでもあった。知らない土地へ行けば、酒場の話をきき、娼婦のぐちを、まず聞くのも密偵の仕事のうちだ。

憲兵隊につき、日本憲兵の取り調べに立ちあうようになって女体のあらわなところを見

ることなど何とも思わないようになった。尋問がすらすら行けばよいが、ちょっとでも引つかかるようなことや、何か報復の理由があると取り調べはたちまち拷問に進む。男でも女でも簡単に鳥のケバでもむしるように裸にむいてしまう。日本人のせっかちさだ。

捕縄でくくりあげる。その手際と仕あがりにはイワノフも感嘆してしまう。支那人も器用だが、日本人のような芸術的とさえいえる巧緻さには及ばない。人間の手足を完璧な構図のなかにくるくると包みこんでいく、魔術的な手腕だ。ほとんど時間もかからない、と思うのだが、日本人にはそれもまだるっこいらしく薄汚ない男や、触手をそそらない女にはそんな手間はかけない。乱暴になぐりつけて張り倒し、足で蹴っていらだたし気にわめくだけだ。

「吐いちまえ、チャンコロ」

とかロシア人なら露助、だ。めったにない獲物がかかると舌なめずりをして、おもむろに芸術的手腕を発揮する、というわけだ。

女なら、その好奇心がみごとにむきだしにされ、鳴きを入られることになる。シナイという人をたたくにはもってこいの棒で尻をたたいているうちにはいいが、尖端を攻撃具に



使いだすと、女の喉の奥から鳴きもれる。

巨大な腰のロシア女が縄のくびきで荷物にされ、突っつかれはじめると、したたかな赤い唇から柄にもない繊い媚びたような音がもれてくるところなどは悲惨というよりユーモラスだ。纏足女の妙にヌルリと丸く発達した腰部ぐらい卑猥なものはない。支那三千年の歴史がみがきあげた逸品だ。もっとも華北系の女は、そうでもしなければ色気もない。

それが序の口だ。

毛を焼くいやな匂いが鼻をつきだすと、拷問も本格的だ。色気をなぶる余裕もなくなり彼我、あぶら汗をしぼりはじめる地獄図である。繊い鳴きのかわり、動物の断末魔の絶叫そのものが、濃密によどみはじめる空気を時にひき裂く。

しかし日本人のやり方は、拷問としては下手だ。職人的でたくみだが、自分の方法に自己満足して、けっきょく事の根本である相手を屈伏させ、支配し、反抗を封じ、君臨する段になると効果は疑わしい。直線的で折れやすい日本人の心が相手なら丁度いいかも知れないが、二重三重構造の大陸人には通じそうにない。その点は、話にきくスターリンの方が、はるかに凄腕だ。ゲーペーウー、強制収

容所。道具だてひとつにしろ日本人製のようなチャチな代物ではない。

農奴のロシア。シベリア流刑。鉦山労働。虐待される側が千枚革なら、する側も根気がいい。支那三千年には及ばないとしても、ぶあつい氷風が厚味を作っている。

その見るからに南方系の日本が、羊皮一枚の軍隊を出して冬のシベリアを征服しようというのだから、イワノフにとっては見ものという他はなかった。イワノフは日本人のあわてくさった突撃のあとでおこぼれを拾って歩く役だから気が楽だ。日本軍がヘマをやると逃げるのにおっくうだが、その時はその時、何も主人は日本人ばかりではない、とイワノフは思っている。

○

部屋の隅にあるテーブルを持って来て、ぶらさがっている女体の腰の下に押しこんだ。やがて四肢を上に向けて白いかたまりがテーブルの上にチョココンと乗った。支那式の宴会席にそなえられた豪華版の豚のまる焼きのような恰好である。顔があがって、人相がはっきりした。ロシア娘の頬はたいいてい肉厚で、口を閉じると鈍重な印象になったが、この娘の頬はちょうどよくひきしまっている。ひた

いが高いので、少しノーブルな感じがするのだった。体つきはおせじにも繊細とはいえない。ロシア女そのものだ。肉厚の、はち切れそうな乳房、腰、頑丈な手足。何をしても、ちよつとやそつとではへこたれそうにない。

小学校の体操教師というだけあって、筋肉はよく伸びてしまっている。ハルピン辺りのじだらく女と大いに違う点はその点だ。肌のひきしまりも格段に違う。色艶も。

若いロシア娘を折檻する時は、よく小学校時代の音楽教師とイメージを重ねあわせて昂ぶった。音楽教師をよく想いだすようになったのは、この十年來だ。前の十年ではまったく忘れていた。だからいくら考えても名前もおもい出さない。

突然に、頬をうたれた時の教師のてのひらの感じを思いだした。

それから美化したのかも知れないが、田舎街にはめずらしいくらいの貴族的な雰囲気をもった人だった。手足も血管が透けて見えそうに青くスラリとしていた。ドイツ人か、もしかするとユダヤ人であったかもしれない。

その彼女を捕えて、日本人の手で芸術的に縛りあげてやる。青い手足をそばだてて、ふるわし、羞恥をさらけ出されて絶えいるばかり



## 僕のイメージ画集『萩の遊び』 室井亜砂路



りに泣く。救いを目で、すがってくるのを無視して、イワノフは冷然と煙草でもふかしている。

日本人が犠牲をつかまえた蛮人のようにキヤーキヤー騒ぎながら竹刀をふるって、少しとがって突きでた臀部をぴしゃぴしゃ、たたく。尻がプルプルふるえながら哀しみの涙を

しぼりだす。濡れた目。容赦なく襲いかかる竹刀。

しかし、この辺で日本人には退場して貰わなければならない。

赤く、ぼっくりとふくれたようになった双丘をイワノフは手でつかみながら、「どうかね、ネーラ。気分は？」

「赦して、どうぞ赦して、ユーリー・トルゴノヴィッチ、どうぞ」

「だめだね、まだ赦すわけにはいかない。それにしてもなかなかいい姿だね、ネーラ。僕の頬を張った元氣はどうしたかね？ 頬のお返しにお尻をたたいてやろうかね、この二つの丸い、おいたな、ふくらみを」

言葉でなぶりながら、イワノフは丸みにそってなでさする。白蠟のなめらかな感触だ。田舎娘の頬みたいに紅潮しても、やたらに赤くはならない。赤みがすぐ沈み、底の方に、ほんのり残る。ノーブルそのもののなめらかさは、手を気持よく滑らせる。

「赦して」

と、ふたたび哀願する息は、ふと甘い。冷たい丘の峽間に、熱湯をたたえたカルデラ湖が姿を現わす。豊かな黒土に囲まれ、噴火を予感させて胎動している。

「おお、ネーラ」

イワノフの脳のなかで征服欲が頭をふりたて、突進にかかる。突進する。抵抗の手ごたえがある。かまわずにぐいぐい攻める。達する。敵を寸断し、追走し、追いつき、殺す。殺す！

われにかえると、熟柿くさい、いやな匂い



が立ちのぼる妙な空間にイワノフはたたずみ  
杲然としている。手には気持わるいほどの柔  
らかいものがある。ちょっと力を入れるだけ  
で、指の先が、埋まってしまいそうな腐肉の  
塊り。ノーブルの気もない靡爛したケツだ。

イワノフは顔をしかめて離れる。

嫌悪感が汗のあとの脂のように、肌にやき  
ついて残る。ハルピン、あるいは北安、佳木  
斯の憲兵隊屯所の地下室で、イワノフはこう  
してただれた夢を、現実のロシア女に見たの  
である。

またよく、とつかえひつかえロシア女が捕  
まってきた。

ノモンハン以来、ソ満国境は臨戦体制であ  
った。それでも独ソ開戦までは彼我の戦力が  
ほぼ釣りあっていて、日本軍が支那に足をと  
られている事もあり、睨みあいから小ぜりあ  
いになることはあっても、全面戦争には発展  
しない相方の理由があった。

独ソ開戦、山下奏文らの訪独伊軍事視察団  
はドイツ軍の圧迫的進撃を伝えた。

時に日本軍参謀本部は関東軍特別演習（関  
特演）を計画した。満州に集結した兵数、実  
に七〇万。支那派遣軍とあわせると百二〇万  
の空前の大軍が大陸に蟠踞した。

支那情勢の急転。北京、張家口、大同に十  
万の兵を残して、新疆へ第一次から第三次に  
わたり二十万派遣。

東京ではゾルゲ事件に象徴されるソ連諜報  
部の活動は必死の形相を示した。白露系を装  
ったスパイが大陸に横行した。

捕えられたロシア女は、たいていがスパイ  
に利用されたくずだった。イワノフも応接  
にいとまない日々であった。

こんな生きのいい手ごたえの娘スパイが相  
手なら、そう反吐にまみれた思いをしなくて  
済んだはずである。ネーラという娘なら、ノ  
ーブルとまではいえなくとも、腐った軟体動  
物のようなどことはない。

（髪が生え際辺りは似ているな）

ネーラの髪はほそく、密生した豊かな栗色  
の毛である。

髪をつかんで少し引き、頬をびしゃびしゃ  
たたいてみた。

（コラ、目を覚ませ。まだ参るには早いぞ）

ネーラの目がひらいた。髪と同じ色の瞳が  
イワノフをしばらく、じっと見あげた。

○

「あなたは誰？」

うつつの意識の間にまだ漂いながら、その

奥から迫ってくる者にディネーラ・ソロービ  
ンは、たずねた。

ここはどこなのだろうか？

わたしはどうしたのだろうか？

考えようすると頭がキリリと痛んだ。寒  
気にあたって、肌の神経がとがり、ツンと痛  
くなってくる、そんな痛みだ。耳鳴りがとも  
なう。

ネーラは顔をしかめた。

無意識にからだを動かした。が、地面にピ  
ンでとめられたように動かない。また、意識  
がのめりこんで行く。固い地面。重い、から  
だ。バシリ！

目から火花がとびでた。はっと意識がはっ  
きり戻った。暗い路地の舗道へたたきつけら  
れたのだ。いや、自分でころんでしまったの  
である。イザという時に何という間抜け！

ドサツと重いものがかぶさって、咄嗟に飛  
びおきようとしたネーラを押さえこみ、抵抗  
を封じられた。手錠をかけられていたのが運  
のつきだった。普通なら、力ではかなわない  
が、男の一人や二人の手から逃げるくらい造  
作もない自信があったのだが、手錠のおかげ  
で自信が裏目にはたらき、相手をよく見るよ  
り、まず動こうと無駄にあがいた。



乱れた日本兵の靴音が舗道にひびき、たちまち取り囲まれてしまった。手錠をつかんだ男といっしょに立たされた。男は、ロシア人だが日本軍の雇われスパイのようだった。それに気づくのも少しおくれた。ロシア人と見て、やはりはじめに油断したのだ。難なく後ろ手錠をかけられてしまった。

日本語だろう。やたらにカン高いそがしい発音のやりとりが日本兵と男の間にかわされた。日本兵は威している。男は身ぶりをまじえて弁明している恰好だった。ネーラは、じっと呼吸をはかりながら隙をねらった。しかし男の手が手錠をしっかりと握っていて、引いたぐらいでは離しそうにない。

ライフルの先の銃剣がニューと出て来てネーラの横腹を突いた。男がネーラの腕をとって歩くことをうながした。今は無駄な抵抗はやめ、観念したように見せかけて男の油断をかちとるほかはない。そう思いきめて、歩きだした。しかし、とうとう最後の機会はやってこず、男の手で日本軍の屯所の地下室へ入れられてしまったのだ。

屈辱的な身体検査。丸裸にされて髪、耳、口唇、腋、手、指のまた、乳、臍窩、背、腰腹、臀部、股、膝、足の裏、それから最後に

四ツ這いを強制し、えぐるように、調べられた。

裸にされた時から当然感じるはずの恥ずかしさは不思議な事になかった。一箇の物として扱われ、物になったつもりにも早くなっていた。捕われた切実感が薄く、何か馬鹿げた遊びをやっているような気がしてくるのだ。

子供のころそんなふうな心理で、鬚そりナイフで腕を自分で切ってしまったことがある。スウツと不思議な力で、まったく簡単に切れてしまった。糸のようにほそい傷から赤い血がポツポツ湧いてきて、はじめて驚いてさわると、肉が割れていて切口から物凄い血があふれ、恐ろしくなり、あわてて泣きだした。恐ろしくもあったが、自分の肉が気味わるかった。

やはり子供のころの記憶だが「赤軍白軍」というのがあった。白軍の悪漢が赤軍兵を捕えて縄で縛り、虐めるのだ。ネーラも捕まえられて「お前は政治委員だろう」と責めたてられた。だれが考えだしたのか、ひとのスカートをすっかりまくりあげてびしゃびしゃたたいたり木の棒で突っついたりするのだ。物すごく恥ずかしく、ネーラは真っ紅になってもじもじしたのだが、不思議に体が痺れたよ

うになって、男のこ達のいたずらを避けることができないのだった。そのうち、異物感がお尻に定着して、ネーラのカーとなった神経のどこかをツンツン刺戟するのだ。

しゃがまされると異物感がずっと消えた。「やった、やった。糞をひりやがった、こいつ。汚ねェ」

男のこのひとりが天才的な悔蔑の言葉でネーラをたたきのめすと、ドツと皆ではやしたてた。ガラス玉がネーラの足もとに落ちていた。それがネーラの涙の玉のようであった。遊びではない。ゾツとする恐ろしさがネーラを現実に戻した。

あの時迫ってきた男の顔が、今またネーラを傲然と見おろしている。男がどういう感情でいるかは伝わってこないが、その顔の意志するものが、簡単にネーラを離さず、なぶりにかかってくることは悟らざるをえない。

ネーラは単純な恐怖感にとらえられた。絶望のなかに引きずりこまれた。

「よし、もうよしして」

遊びなら叫ぶと相手もたじろぐだろう。だが今は遊びではない。現実の男の厚味が立ちあがっている。

「どうだいアマツちょ。何とかいったら、ど



うだい」

下司ないい方で男はニヤリとした。

イワノフは焦らない。冷静な自分がたしかに岩のような存在に感じられて心地よい。

（待ってろよ。ネエちゃん。今、この山のよ  
うな岩石をぶち当ててやるからナ。もっとも  
お岩さんってのは、日本じゃ女の化け物らし  
いが。可愛いカチューシャは、岩に叩きのめ  
された青ぶくれの幽霊に化けるわけだ）

拷問に張れあがった、青ぶくれの肢態のイ  
メージが、一瞬、パツとイワノフの脳裏を横  
ぎっていった。

○

「裏切者。ロシア人がソヴェートを売るなん  
て、恥しらずだわ」

「ロシア。祖国。そいつは何かね。おいらに  
何をくれようってんだね。まア何でもいい。

今のおれはお前の主人だ。赤いソヴェートが  
お前のお気にいりらしいが、もうそいつはお  
前に何もしてくれやしないぜ。呼んでみな。  
助けて下さいってな。ソヴェートさんに聞こ  
えるものか、どうか。ためしてみるんだな」

短くなった煙草の火を、ネーラの顔に近づ  
けた。鼻先へ、赤い小さな火がくつきそう  
になった。ネーラは顔を振ろうとしたが、髪

をしっかりつかまれていて、ピクとも動きよ  
うがない。

「アウ、ア」

口を思わずパクパクさせた。が、叫びには  
ならない。

チ！

と鼻先がこげた。喚き声が爆発した。

「呼べ。呼んでみる。もとの主人をよッ。こ  
のメス犬め！」

鼻をなぞってすべらせた。眉間の短い毛が  
チリッと燃えて一瞬の煙をたてた。

「今日からは俺様が主人だ。お前の方がいや  
だといっても通らないぜ。そのことはこれか  
らゆっくり思い知るんだ。お前のからだで知  
るんだ。俺がたたきこんでやる。ハラワタに  
俺の名を刻みこんでやる。イワノフ様所有、  
メス犬。ロシア・シベリア産。栗毛ソヴェー  
ト種、とでもな」

煙草を床に捨ててもみ消した。女は白眼を  
むいて、まだ喚きそうに口を喘がせていた。  
ひたいに汗をかいている。頬がポツと赤くな  
っている。底の方から紅くなる性質らしく、  
表面は白い粉をつけたような薄桃色である。

（上玉だ）

とイワノフはあらためて舌なめずりした。

ネーラは何をされても、もはや声を出さな  
い決心をした。この男は満洲育ちの悪質なユ  
ダなのだ。生まれた時から獣のように育っ  
てきて良心などは持ちあわせていないのだ。ま  
して階級観などは持っていない。日本人のお  
こぼれを恥ずかしくもなく拾ってあるく、祖  
国のない国際ルンペンなのだ。普段なら同情  
しなければならぬ哀れな存在だが、今は敵  
だ。敵以外の何者でもない。もっとも悪質な  
攪乱者だ。

敵意を燃やすことで、ネーラはいまの絶望  
的な状態のなかでなんとか心を持していこう  
としていた。女が無防備に肌をむき出され、  
しかも手足を獣のように縛られているなんて  
耐えがたいことだが、客観的情勢があつてこ  
うなったのだから仕方がない。恥ずかしがっ  
ているより、まずこの当面の事態と闘うこと  
だ。たたかうことだ……。

気持の悪い、ぶよぶよした手が、首から胸  
へ滑っていった。なぜられたあとがカァと  
熱くなった。肌が熱病にかかり、どうしやう  
もなく震える。手足がふるふる。腰のつがい  
が駄目になったようにふるふる。

（二十才そこそこというところかな）

教師ということで、もっと年上に見ていた



が肌を近くで見ると余計に若い。女学生にしてもまだ似合うだろう、と思える。こんな若い女が、ロシアでは教師が勤まるものだろうか？ と疑いがおこった。が、職業などはどうでもいいことだ。

乳暈と乳首はまだ小さく、肌のうしろに隠れている。全身の筋肉が負けん気で緊張していても、内心の恐怖はかくせず、ひ弱な部分が臆病に脂肪のかげにひっこみ、おびえあがって震えている。穴に逃げこんだ小動物を容

赦なく押し出すように、周囲をつまんでこね廻す。胸のうえに乗っている丘がゆさぶられて形がひしゃげ、キュウキュウとなきだすようだ。全体に赤らむ。血が満ち、血管をふくらまし、ある部分ではとどまり、ある部分では激しく流れる。たまりかねた小動物がとびだす。待伏せていた触手が押さえつける。逃げるのをことさら追い廻しながら、ゆっくり往生まで追いつめる。舌端から小動物にとつての戦慄が電流となって放射され、電圧――

## 新発足 懸賞入告白、手記、体験▽原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

ボルテージがみるみる高まる。ふいに狩人の手がはなれる。

イワノフは平手でたたき。何度もたたきめす。

「アウ、アウ」

声がもれて、地下室の無機質的な匂いのかに溶けていく。

「メス犬め。裏切り者はお前だ。お前の体の奥には犬の根性がある。そいつが喘ぎだし、よだれをたらし、そのうち餌をねだりだす。

餌のためにだったら、どんな芸当でもやらかすようになるチンチンをして主人に媚びる。

それが、犬だ。お前は犬の牝だ」

奇怪な呪文のようにきこえてくる声にネーラは耳を閉ざそうとした。声をうけとめる脳の部分を麻痺させようとしたが、声は水のように隙間からもれてきて、やがて脳をひたし満ち、その重さでネーラを浸した。

「お前はメス犬だ」

抗議しようとする、ピシリと打撃が落ちてきてネーラを混乱させる。

「メス犬め！」

ピシリ！

「メス犬ネーラ」

ピシリ！



女帝エカチェリーナ晩年の宮廷を壟断した怪僧ラスプーチンの映画を、ハヴロフスクの学生時代にネーラは見たことがあった。

絶対專制的啓蒙主義の頂天にあったこの女帝は、フランス革命のロシアへの波及を予感して震えあがり、啓蒙をかなざり捨てて恐怖政治へはしった。ロシアで最初の革命的な本といわれる「旅」の著者ラジシチェフを捕えてシベリアに流した。

ラスプーチンはロシア教会の異端派ラスコリーニク（分離派教徒）弾圧のとき、シベリアへ流された下級貴族の子として教会の奴隸的な作男に売られた。当時の地主貴族は、農奴を無条件で懲役に出すことができる特権をもつ、小絶対君主だった。教会も領主として農奴をかかえていた。

ラスコリーニクに同情的であったある僧の庇護をうけて、ラスプーチンは正教の僧となった。少年時代から怜悧であった彼は青年僧として著実に位階をのぼり、やがてモスクワ遊学の機会をつかんだ。

彼の恐れを知らない胆力、疲れることのない精力の源泉は、実におのれに加えられた侮辱、農奴としての少年時代の困苦によって鍛

えられた、強烈な復讐心であった。ロシア的に船晦し、晦渋化された炎の心は、彼の瞳に異様な呪術的な光りを与え、パトロンの貴族夫人を捕えて足もとにひれ伏させずにはおかなかった。心の火を燃やすことで得た能力をもって、彼は催眠術にかかった女を支配し、衣裳をはぎとり、彼女の奥に眠っているグロテスクな欲望をむきだしにし、もだえさせ、鞭で懲罰を加えた。

「メス豚め、泣け」

ピシリ！

催眠がとけても女はもはや腑抜けのようになっけし、彼の支配と君臨を教した。こうして彼自身の宮廷を作っていた。彼のもとに集まった名流夫人、実は権力に飼われた牝豚のひとりとして女帝がまぎれこんで来た時、ラスプーチンの呪術はモスクワをおおった。彼の復讐心はこうして満足したが、権力構造を知らない彼にはそれ以上のことはできなかった。高みには登ったが、そこで彼は目標を見失った。

女帝のフランス趣味、西欧崇拜につけこんで、もっともらしい文化紹介者の顔をしたドイツ人の一派があった。田舎貴族をおだてながら彼らは長い間女帝の側近を固めていた。

ラスプーチンがそこへ割りこみ女帝を横からさらっていったしまった。彼らはうろたえながら陰謀を用意した。正面から分離教徒——妖僧として攻撃しながら、側面で王朝の危機をあふりたて保守派の貴族を集めた。

こうして、史上に謎を秘めた女帝急死が突発する。暗殺団がラスプーチンを襲い、ピストルをうちこみ、氷結しかけたネグリンナヤ河にはうりこんだ。断末魔の彼が、氷のわれ目から手を空にあがかせて沈んで行き、彼の物語は終わる。

彼を生かしめ行動をとらせたものは階級の怒りであった。しかし彼はそれをまったく個人的な方法で処理した。女帝没後二十年にしておこるデカブリストの弾圧に象徴される知識人の覚醒の波も彼は知らず、農奴の子として一瞬の火花的な人生を生きて了った。

○

映画後の批判会でそんな分析をしたものだが、それとは別に役者の演じるラスプーチンの呪術は、やはり何かしら人を捕える暗い魅力を持っていた。

「メス犬め、泣け！」

声がネーラの錯乱しかけた頭脳を寸断してくる。

（未完）





## 臨時増刊号

の

## 感想

羽鳥水江

臨時増刊号は、本屋の店頭にあまり見られなかったもので、特別注文しなくてはならないかと思っていましたら、思いがけなく、三月号と一緒に一冊並んでいましたので、早速買い求めました。表紙こそ同じ紙ですが、ずっしりした重みのある手ざわりで、久しぶりに豪華なグラビアのつまった別冊をたのしく眺めました。

庄巻は何といっても前田真知子さんの天然色写真緊縛姿態で、身に縄以外の糸をもつけず、顔も堂々と晒した見事な被写体としての撮影されぶりで、完璧なものです。感心するより外はありません。美しい色のまことに素敵な写真です。かえって、いかがわしい感じが少しもないのが、惜しまれる位のもので

す。あっぱれと言う外ありません。

その他のグラビア、緊縛一色で統一して、それぞれ面白味があります。まったく、他社の売らんかな主義の、もの欲しそうなところのぶんぶんした同様の写真集に比べて値段も段違いに安く、流石は奇クだと思いました。長年にわたる歴史の積み上げの重みが、ページごとに感じられるような、クリーン・ヒットだと言えましょう。

辻村さんと塚本さんの文章も面白く読ませていただきました。このお二人の奇クにまつわる二十余年の歴史が、ここに凝縮されています。私をはじめ知る事実が赤裸々に何げない調子で淡々と書かれ、なるほどそうだったのか、と思い当ることもしばしばでした。

ことに辻村さんについて、その感を強くしました。惜しまれるのは話が物語の前半で紙数を超えてしまったらしく、もっと知りたい最近の部分が、ほんの走り書きになっていることです。

しかし、やはり長い時間というものは争われないもので、十分な蓄積とそれに基づく余裕が十二分に感じられます。それも、この号の重量感を一そう増していると思います。類書には望むべくもないことでしょう。

さて、いつも勝手ながら、あえて私の好みから一言つけ加えさせていただきます。

この増刊号は「女体緊縛写真集」と銘打っているように、女体緊縛一色に統一されています。それはそれなりに立派な一つの見識です。しかし、見事に成功していると思いますが、そこからはみ出る部分、独特のもやもやした、雑多な、妖しい魅力を発散する部分が一応きれいに切り捨てられて、まとめられているような気がします。私が奇クに求めているもの言いかえれば、奇クにだけしか求め得ないで渴望しているところのものが、意識的に切り落とされて余りにもきれいにまとめられていることです。このような増刊号は年に一・二冊ぐらいが適当でしょうから、私のこれから述べる希望を、是非次の号で実現して下さい。次の号が、なまぐさいパラエティを持ったものになること



を希望するものです。

もちろん、これはこれで立派だ。奇クならではの充実感を示していることを否定しているのではないのです。さらに次のステップでは、前と違った目のさめるような斬新さを期



## 『写真集』に

ついでに

たわごと

三原 葉

待したいと言っているのです。

辻村さんの楽我記、と塚本さんの文章は、かなりの程度まで、この渴きをいやしてくれと言っているようにしょう。でももう少し立ち入って、たとえば、毎号のカメラ・ハントの

値段のほうに張るのでは？ と思った。オーバーにいつて怖わごわ裏を見、オーバーにいつてホッと安堵した。千円はイタクはないといえないが、手が出ない程の額ではないからだ。

千円の楽しみみの泉を小脇にして、足を宙に浮かして帰る時の気持……。

さて、家に着くや否や、とるものもとてあえずの御対面とあいなった次第ながら、正直いつて一覽後には「食い足りない」思いに駆られた。というのは、私の頭の中に自然と描き出されていたような「襲われる女」の写真がないからだ。

女性美が天然のすぐれた芸術品であり、

地の文くらいに、あるいはその半分くらいにでも書きこんであつたら、と思います。つまり私の言いたいことは次のようなことです。縛りだけでなしに、鞭打ち、吊りなどはまだ平凡としても、これさえも控えて除かれているようです。鞭打ち、吊りは、むしろ映画や他誌などでどぎつく取り扱われ過ぎている感がありますが、猪吊り、逆さ吊りなどの本格的なものは、十分他誌の追隨を許さぬ独自のものを示しうるはずではないでしょうか。その点が、まず第一です。

次に、本当に私の言いたいところですが、切腹、流腸、妊婦などの特殊な領域に関するものが、文章での二、三行の言及以外に、写真では、ごく稀なアクセサリーとしての流腸器具を除いて、すべてオミットされていることです。この点は全く期待外れで、正直言つて、本当に失望しました。以下は、切腹、流腸にくらべて、より特殊な領域である妊婦について少し書いてみたいと思います。

辻村さんの楽我記の最後のところに（56ページ）増田みゆきさんを、「双生児を孕んだ妊婦フォトは圧巻。こんなポンポンみたことないという、すごさである」と評せられ、金原奈加子さんを「童女のおどけなさ、淋しさを秘めた十八才の少女の、妊娠九カ月の逆吊りフォトは、二度と見られぬ圧巻で国宝的なものである」と絶讃しておられます。木戸悦



縛られた女性が人工美を加えて更に美を抽出したものならば、他者の襲撃に遭遇している女性は一層美しいものであり、被虐に悶える姿こそ最高の女性美であるはずである……というふうに私は思っている。そして、いつの間にか、奇クの写真集ならそんな情景の集積に違いないものと決めこんでいたのだ。

私の、一見しての「喰い足りなさ」は、そんなところから来ていた。

奇クともあろうものが……という気持ちで投げ出しては眺め直し、パタンと閉じては又開く、というようなことを、繰り返すこと数回。私の思っていたような被襲中の女は居ないが、被縛の女性はワンサと居るんだから、やはり未練は十二分にあって投げ出しきれはしない。

そのうち、ふと思いついたのは「丸く、角張ったところがない写真集」であるということだった。へんな言い方だが、本当にそんな気がしたのである。時間をおいて、頁を繰り直してじっくり見入るほど、その感が強くなってきた。これはこれで、マニアに問うだけの価値を持っているのだという編集態度が、なんとなく分かって来たように思え出してきたから不思議といえはいえる。

辻村氏の文で、私の知らなかった頃のこととも窺えたし、塚本氏の文で、モデル嬢の気持などが伝わってくる思いがした。そうやってくると妙なもので、最初に感じた物足りなさとは別個に、静かに、そして穏やかに縛られている美体にも、なみなみならぬ魅力が、秘められているのに気がついたのだ。

この形態に依る増刊号は、今後もある予定とかで、もはや次号を待たれる気持は充分に湧き始めている私である。常々の妄想的SMとは別個の雰囲気も、また捨て難い味のあることを教えられた思いがするからだ。私の首が、また鶴や象の鼻になることだろう。

しかし、私の描いていた妄想もまた捨て難いのも事実で、もし次刊のものに注文が許されるならば、次の事項を希望したい。まず、初号に載らなかったモデル嬢を起用してほしいという事。次に、動きのあるものも収録してほしいという事。すなわちモデル嬢の柔肌が、何らかの攻撃にあって悶えている情景も少しは見せて貰いたいということである。

ともあれ、亜流のものを避けて待っていただけの価値はある「写真集」であった、ということとは間違いないと思うのである。

子さん、飯田カオルさんについては、ただ一度のハントですし、木戸さんの写真の分譲は打ち切られたようですから致し方ない事情があるのかも知れません。しかし、増田さんはハント三回、分譲写真は当時約二百枚もあり流石の私も全部買い切れませんでした。少なくとも、七、八カ月の、高野さんのいわゆる、七分咲の妊婦腹以外は全部手に入れました。その増田さんの写真が妊娠以前のものも含めて、一枚も写真になっていないのです。分譲フォトの方が、一部臨月天然色のものをいれて、未だに分譲中であるだけに、理解に苦しみます。また金原さんは、この写真集に登場し、分譲品ももとのままであるのに、すべて妊娠していない写真だけが採用されているのは、残念きわまりないことです。せめて一、二枚でもこの中に、というのは無理なことであったのでしょうか。塚本さんも本文の中で、「……いつとはなしに妊娠した女性の姿態の中に異常美を覚えるようになった。……妊娠した女性の裸身にも妊孕美といったものがあると感じた……」と言っているらしいというのに。(117ページ)

勝手なことを書きましたが、今後のご参考になればと思います。すばらしい企画だけに惜しまれると思って卒直に書いたまでです。次の機会にご考慮いただければ、私のよろこびはこれに過ぎるものではありません。





## 切腹研究夜話

## 女腹切雑話

中 康 弘 通

もう三十年近い昔になる。

筆者の家の近所に働いている少女と知り合  
って、時折の立ち話のなかで、もしこの大戦  
に敗けたら、という話題が出たとき、桜いろ  
の頬を紅潮させた少女は、  
「あたし、切腹するワ」  
と云い切った。その言葉は、年ごろを同じ  
くする筆者には、きびしくひびいた。

幼いころから、乃木將軍の伝記、赤穂義士  
の仇討物語、白虎隊の悲痛な最期、また南北  
朝の壮烈な軍記を、好んで読みふけた。

たとえ少年といえども、事あらば切腹して  
最期を飾らねばならない、武士の悲壮な心事  
と行動に思いをいたして、感動は深かった。

又、たまたま、一つには父の怨念をはらし  
一つには君側の奸を除こうと、刃傷をとげ、  
最後に女の身では稀な切腹の場に坐した、吉  
村礼津の伝記小説「女腹切」(前田曙山作)  
を読んでは、助命を受けてのち仏門に入る結  
末ではあるけれども、一旦は覚悟して腹切刀

を手にした、妙齡の女性の存在したことに、  
一層ふかい感動を覚えたこともあった。

しかしそれらはもちろん武家時代の話であ  
る。切腹の風の靡れた現代に、ましてや年少  
の身で、切腹しようと決心する少女があらう  
とは、夢にも思っていなかった。

少年の脳裡では、あくまで切腹は武士の特  
権であり、また、たとえ少年でも、武士なれ  
ばこそ可能な行為であった。

そうした常識を、少女の言葉は完全に打ち  
破った。筆者の幼いころから、「ジャック大  
福帳」「野菊の兵士」など、日活映画に活躍  
していた美川勝美さん、いまは伊沢一郎氏夫  
人と聞く、その人によく似た、頬の豊かな、  
愛くるしい少女であったから、なおさら少年  
の胸を強く縛ったのであろうか。

戦争が終わったとき、焼け出されての疎開  
先で、真ッ先に胸に浮かんだのは、彼女がそ  
の言葉どおり切腹してしまわないか、という  
ことであった。しかし、戦災と戦後の混乱は

彼女の踪跡を辿るすべもなくさせ、少年が追  
憶にふける余裕さえうばってしまった。

世の中が一変した。

何もかも古いものは打ちこわそう、という  
動きがはげしく渦巻いていた。忠臣蔵が禁演  
になった。アダウチとハラキリの故に……。

病後の体に鞭打って筆者は、長い大戦に失  
われた学友を思い、生きのびた命を思い、せ  
めて生きのびた証しになるような仕事をした  
いと思った。病勢の波のまにまに、図書館の  
ある市まで、碌に窓もない汽車で通う日が時  
折あった。武士道の二大支柱、仇討と切腹の  
うち、まとまった本の少ない切腹を、少女の  
思い出の故もあって、選んだのである。

そんなある日、とうとう筆者は吉村礼津の  
典拠を探しあてた。初見から二十年近い才月  
を経ていた。前田曙山の小説では助命された  
礼津だが、江戸時代の文献には、恩命は謝し  
ながらも、あくまで、一旦仰せ出されたから  
は家中の思わく如何かと存じますと、初志  
を貫いて立派に腹一文字にかき切って果てる  
さまが、記されているのであった。

やがて、溝口与之、武内禅秀の妻、奈良義  
成の妹、浅野吉長夫人節子と、切腹して世を  
短こうした烈女の伝記が蒐集された。

昭和二十七年の秋、こうした烈女達の小伝  
を記した末に、芸能における女腹切の美的表  
現にも触れる文章を発表したことがあった。



その前後から女剣劇やヌードショウで、素材としての女腹切は、あるいは烈女ものの形であるいはヌード忠臣蔵などの諷刺をおびた艶美さで表現されて来ている。

ここ数年のうちでは、映画で、あるいは舞台で、女腹切が使われて来ているのも、ヒロインの男まさりな行動が、一種のすがすがしさを呼ぶからであろう。

たとえば対立する組の出入りを描いた映画で、仇同士になった男の致死期を見て、みずからも乱闘の末、悲恋の立ち腹を切る娘。また、辱かしめられて自害した母の仇敵である一族の者を一堂に集め、互いに欲ゆえに謀殺し合うよう仕向けたのち、事おわれりと心みちて十文字腹を切る娘。という具合に――。

文芸の方面でも、大衆文芸で女腹切は戦前戦時同様に使われ出したし、風俗誌のジャンルでは、きわめて盛んに使われている。

風俗誌ではまた、ある時期、モデルを使つての切腹擬態写真も掲載したことがあった。しかし縛りや責めほどには受けなかったとみえ、今では小説のみにとどまっている。

何故だろうか――小説では切腹するヒロインの主体性が描かれる。しかしモデルを使つての擬態写真に、モデルに精神的な余裕というか、抛りどころがないようである。それが責めや縛りの写真との大きな違いであろう。

ただ縛られて小荷物かなんぞのように転が

されている縛りのモデルは、あくまで受動的に撮られるだけで観者を満足させるらしい。それはいわゆるサディズム、マゾヒズムの世界に住む人々の幻想と合致するのだろう。

しかし切腹の擬態写真となるとそうは行かない。悲劇のヒロインたる純粹さが内面の理解と演技で裏付けられなくては、演技以前で終わってしまう。それは切腹の擬態が、演ずる側からも観る側からも、ヒロイズムの象徴的行動として理解されねばならないからであろう。

新渡戸稲造博士の「武士道」にも明記されているように、日本には切腹を、立派な崇高な行動と見る伝統がある。サディズムやマゾヒズムではない。そこに大きな差異がある。

高橋鉄氏の分析によれば、切腹願望という奇異な欲望をもつ人々がある。男女を問わず切腹の擬態をみずから試みて心足る人々である。この少数者にはナルシズムがある。

この種の女性が女性の切腹擬態写真を見る場合は、撮られているモデルに身代りのな喜びを感じる。つまりナルシズムにもとづく自己同一化である。だから、心情の純粹さの裏打ちもなく、モデルがただ露出した腹部に自分で擬刀を向けているからといって、その写真を見て感動する願望者はいない。

ただ奇譚クラブが二十八年十一月号かに、被写体自身が切腹願望者である、という写真

を載せたことがある。その女性は原桐咲代の変名を使っていた。

とび切り美しいという人でもなければ、露出度が高いというのでもない。十人並の器量で、愛くるしい丸顔の若い女性であった。

いずれも正座で、和服の胸をひらいてわずかに腹部をあらわし、西洋剃刀を当てがったものと、シャツにスカート下ばき姿で、辛うじて見えるか見えないかの腹部に擬刀の切先をおしあてたものであったが、その表情の真剣さと姿態の端正さが眼を引いた。

それらを見てサディズムを満足させる男性がいたとしたら、それは日本人であることのみずから潰すものである。筆者はその真剣さのなかにかつての少女の倂を見出していた。

もし敗けたら、の仮説に対し、「あたし切腹するワ」と云い切った少女の、ひたむきな表情と姿勢が、うかんで来るのだった。

また、筆者の手もとには、今を去る二十五年前、終戦のとき、殉国の素志を一口の剣に托して、女ながらも切腹をとげた女性の記録が、未知の人々から寄せられたとき、そうした烈女の悲しくも美しい殉国の姿を、筆者はこの写真のイメージに見出だしてもいた。

更にはこの女性が、何かの機縁があつてよほど深い切腹願望を抱いているのであろうかと、傷ましいものを、その真剣な表情と端正な姿態を思い出す度に感じたことであつた。



## S M カメラ・ハント

富田由美子の巻

## あどけなきニンフ

辻村 隆



昨年の二月に結婚した二女が、一年目の今月、妊娠五カ月になるといので、家内に頼まれて重い腰を挙げ、奈良市郊外の帯解の子安地藏尊に安産祈願に出掛けたのが二月六日、いぬの日の大安の朝である。大きな木彫の地藏尊の安置する、天平時代建造の古い本堂で、住職が三十分以上も、鐘と太鼓で派手に長々と祭文を唱え、果ては有難い経文を、さながら手品師の様にパラパラと繰り広げて拝んでくれる。妊娠五カ月の腹帯の祈禱であるが、仲々立派な演出で、皇族方もここで祈願して貰うらしく、

ニンフ——外来語で妖精という語意なるも、S M 語録では妊婦の意、誤伝されてニンプと呼称されているが、婦人(フジン)夫婦(フウフ)主婦(シユフ)という風に、婦に対して「プ」という発音は稀である。妊婦は正しくニンフである。妊婦が妖しい精を胎内に秘めたるが故に妖精という意になしたという説もある。

幔幕や祭壇の飾りに、菊の紋をあしらってある。帯解という、奇妙な地名が、古から伝わる腹帯授与の有名な寺から由来したらしく、腹帯をしめるために帯を解くのかと、あらぬ想像をしながら、家内と二人、シンシンと冷える本堂に、神妙に並んで、そこは親馬鹿、二人目の外孫の安産を矢張り希っていたのである。

その足で二女の嫁ぎ先を訪れ、祝いの品と嫁ぎ先の土地のしきたりに慣って、赤飯を届け、帰りの道すがら、この二女を産んだ昭和二十三年頃は、物資も乏しく、それどころで



はなかったのに、今頃の娘はトクなことだと話しながら、家へ帰って小一時間もした時、数日振りに箕田氏から電話がかかる。

「早速だけど、妊婦を撮ってみないか？」

「えッ、妊婦！」

思わず鸚鵡返しの声になった。折も折だっただけに、この奇妙な符合に驚かざるを得ない。

「妊娠七カ月のハタチの初産婦なんだけど、夫婦プレイの経験はありそうなのだ。夫にいわれて簡単な妊婦の手記を送ってきた。今月号（四月号）にのせたが、早く撮らないと二月からは、八カ月にかかるそうさ。なんだかいやにビックリしているね。どうしたの？」

「いやね、二女が妊娠五カ月で、今日がたまたま、いぬの日の大安だから、縁起をかつぐわけでもないが、腹帯の祈願をしてもらってほんのさっき、戻ってきた処なんです。そこへ妊娠のハナシだから、不思議な偶然の符合に実の処、呆氣にとられていたってわけ」「そうか、そいつは知らなかった。これも何かの縁だろう。彼女は奈良市の郊外の、学園前の団地住まいだ。何しろ妊婦だから気の変わらぬうちにも思ってたね。それに辻村さん、あんたを、お名指しなんだよ」

「ハタチか。嫁いだ二人の娘より若い、今流行りのおさな妻って感じだね。金原奈加子以来、久し振りだもの、大いに意欲は湧きますね。私から連絡してもいいの？」

「そうして呉れ給え。いちいち、あんたと連絡する手間が省けるからね」

「箕田さんは行かないの？」

「どうやら、あんたと同病相憐れむさ。血糖は平常に下ったが一念発起して、糖尿の発病以来、全然メシを喰わないので、この処、どうも意欲が湧かない。よろしく頼むよ」

私の糖尿病を他人事に思っていた彼も、私とよく似た肥満体質の上、株の暴落で、かなり神経を使ったのが原因で、同病相憐れむ仲間になった。私には彼ほどの斗病根性がないので、病いに狙われてしまって、近頃はよく食いよく飲み、人並以上にカロリーをとっている始末で、その癖、ハルンに判っきり糖を発見しながら、一生不治のこの病い、今更どうなるものでもない、図々しく腹をきめて、正月以来の餅のたべ過ぎで、すっかり糖尿くさくなった便所の匂いに、幾分は気にしながらも、案外呑気に毎日を過ごしていた。

彼は私にその妊婦——富田由美子さんの住所を告げてくれる。

「いい、おさな妻だったら分譲用も頼むよ。あんたは奇巧の代表選手だ」

「おや、えらくオダテルね。しかし有難い。来月は、渡部好美か、谷山久美子の続篇で、お茶を濁すつもりだったのが、若いピチピチした妊婦さんの登場で助かりましたよ」

「喜ぶのは、まだ早いよ。まあ会って撮ってプレイしての上のことだがね。しかし一篇きりのハントで、その傍、ハント女性を消してしまうのは惜しいという声もあるよ。渡部夫人、三浦夫人、村上夫人などを今一度、登場させよ。二度三度プレイのあとの、円熟したSMプレイ振りに期待しているという、読者の声も案外、多いんだよ」

「先日、谷山久美子と渡部好美のWプレイをあわただしく敢行しましたよ。谷山久美子に奸言を弄して引き寄せたMが、ついに身の破壊を来し、彼も細君と別居。谷山も遂に離婚し、そして短い歳月でカタストロフを招いて傷心の胸を抱いて岡山西大寺へと帰郷するところになってしまった。帰郷の前夜、迎えに来た彼女の妹を大阪見物に出した短い間、私は谷山と、そして谷山が同性の思慕を私に洩らした渡部好美を急拠、大阪に招いて、僅か数時間だったけれど、Wプレイしたんですよ。」



これといったフォトも撮れなかったから、い  
ずれ再会を期して別れたけど、彼女、流石に  
ショックで淋しそうだった」

「いろいろあったんだね。塚本君が、もう  
一度撮りたいってたが、それじゃ谷山君  
の体は反って自由になったね」

「速達でも出せば、いつでも、飛んできます  
よ。M女性、一堂に会しての混合プレイも夢  
じゃなさそうですよ」

「機会があれば、呀っというようなのを撮っ  
てみたいね」

「元気を出して下さいよ」

「いや、元気はあり過ぎて、困っている始末  
だ。あんたも、いつか楽我記に書いていた通  
り、糖尿でセックス不能になるなんて、あの  
定説は、確かにウソだね。いつもそんな機会  
に恵まれている人間にとっては、あんたのい  
う通り、一向にダウンしない」

「体験済みですからね。唯、思う時、思うよ  
うにゆかない」

「それは年のせいだよ」

あとは、つい曝露的なセックス談義にオチ  
て、箕田氏は、妊婦富田由美子の、手記の概  
要を説明すると電話をきった。

いぬの日の大安に、子安地蔵尊へ詣ったお

かげかどうか、兎も角、私はこうして、若々  
しい幼い妊婦を撮る機会に恵まれたのであっ  
た。

× × ×

観光都市奈良は今、人口二十万になんなん  
として、郊外に、公害のない居住地として伸  
びている。

戦後、近鉄沿線のあやめ池と富雄の間に、  
ポツンと建った帝塚山学園が、近鉄への懸命  
の働きかけで学園前駅を設置してから二十数  
年、この一帯は奈良市屈指の住宅街として発  
展し、鶴舞、登美ヶ丘、ネオポリス、鳥見と  
大きい団地、住宅が櫛比して、伸展して行く  
一方で、判っきり西奈良は大阪のベッド・タ  
ウンになっていた。

富田由美子は鶴舞団地の二DKの一室で夫  
と二人きりの念願の甘い生活をしている。箕  
田氏に聞いた日、善は急げと、早速、速達で  
ハントの件、日時、希望事項など訊ねる手紙  
を出したら、折返し次の様な返事が届いた。

（原文の終）

（前文御免下さいませ。お寒い折柄、お元気  
な御活躍を誌上で、いつも楽しく読ませてい  
ただいております。

貴男様から思いがけぬお便りいただき、由

美子は、嬉しいやら、恥ずかしいやらで困り  
ました。その日、夫に貴男様のお便りを見せ  
ましたら、夢物語がいよいよ現実になったこ  
とに夫はスゴく興奮いたしました。是非ハン  
トされてこいと申します。わたくしも今は妊  
娠八カ月ですし、もしハントされるのなら、  
妊娠していなかった時のわたくしを撮ってい  
ただきたいと、その時つくづく思いました。  
でも妊娠のチャンスはそうたびたびありませ  
んし、わたくしも覚悟をきめて、貴男様とお  
目にかかる気持になりました。こんな体です  
ので、御無理でしょうが、わたくしの部屋ま  
で迎いに来ていただけたら嬉しく存じます。  
簡単な団地内の地図を入れておきますが、す  
ぐ分かります。ほとんど部屋におりま  
すから、貴男のごつごうのいい日に、何時で  
も結構です。でも毎日、今日か今日かと待つ  
気持が大変ですので、どうせお目にかかるの  
でしたら、早い方が嬉しく思います。

夫は大阪の薬品会社に勤めておりますので  
日曜か祭日でしたら御一緒にできますが、今の  
処、新製品の売込みなどでいそがしく、普段  
の日は休めません。なまじ夫にじっとそばで  
見ていられるより、貴男と二人だけの方が、  
わたくしも大胆になれると思います。いろいろ





ろとお話したいこともあります。すべてはおめもじの上になります。寒さきびしき折柄、お体を大切になさって下さい。かしこ

富田由美子より

まるで高校生の答案のような、薄みどりの便箋をよみかえし乍ら、私の心は仄々とあたたまる思いであった。たどたどしい文面の中に、SMのプレイに対する、そこはかとなき願望が感じられ、ハタチのおさな妻の、未知への憧憬とアバンチュールと不安が、二枚の色模様のペーパーに渦巻いているようであった。私にとっても、夫不在の方がやり易かった。それは彼女にしても同じ思いらしく、緊

縛の痴態や、その場の成行で、どう崩れゆくかも知れない自分の心に、自信がもてなかった故為でもあろうか。

二月の十二日を訪問の日ときめる。彼女の手紙の返事の到着が十日の朝だから、中一日おいて、早速行動に移るわけである。

その日、私の車は快適に阪奈道路を飛ばしていた。

紀元節の昨日、かねて連絡のあった、週刊サンケイの記者が、ルポライターの田中陽造氏を帯同して、週刊誌の異能人間シリーズで東京から取材にきて、テナヤワンの一幕を演じたのが、脳裡に浮かんでくる。

私の正体、私の職業、私のプライバシーetc、そのうしたものを無責任にあばかれはしまいだらうかという不安にかられる。

私は度々念を押したが、辻村隆という人間は、彼等のペンによって思う存分、書いてもらってもいいが、ジェキル博士の、もう一人の私は、SMの異能人間とは、何ら関係のない事をく

どい程、強調した。大丈夫ですと云われても週刊サンケイの発行まで、懼らく私の不安は解消しないであろう。

団鬼六氏の、私という人間の紹介は誠に有難いが、所詮は本職は別にちゃんとある、趣味の筆のすさびのアングラ作家――。

SMブームの近頃、どうしてもっと書きまくらないのですときかれても、フィクションや小説なら書けるが、ナマの女性を次々ハントしてきて、それをペンにするとなると、そうそうおいそれとはキャッチも出来ない。狭く深く、SMのカメラ・ハント一本に絞ってそれに生甲斐を感じる私にとって所詮、時代に便乗した乱作文士諸氏の真似は出来なかったと返事するより仕方がなかった。数時間喋ったSMの真理を、うまく表現してもらえたらと、それが偽らざる私の気持である。

阪奈道路を、国際ゴルフ場近くの、学園前への路へ折れて、近鉄学園前駅のガードをくぐると、目指す鶴舞団地が、忽ちに大きくのしかかってきて、道路を隔てて左右に林立している。徐行させて団地群の番号を目で追ってゆくと、彼女の住む号館は直ぐ分かった。

現代の長屋、そして近隣との疎外隔絶。私は傲然と聳える号館の中に、何十世帯と住む



画一化された生活に、何故ともなく味気ない  
思いを覚え、車をその前の広場で止めて、高  
々と振り仰いだ。

虚勢と虚栄——見栄と体裁、そんなものが  
何千世帯という、若い夫婦世代の中で渦を巻  
いている感じであった。その、画一化された  
一室に、これから会う富田由美子も、ひっそ  
りと息づいているのである。

プレイ用具を車に置いた俥にしてキイをか  
け、振り仰いだ号館の階段を昇ってゆく。

遠くからみれば、整然と立ち並んだ号館も  
中に一步入れば生活の匂いがにじんでいた。  
子供の三輪車、使い古しの歩行器、段ボール  
箱の点在、薄汚れた階段、小便臭い匂いなど  
すべては若い夫婦暮しが、やがて子供をうみ  
狭い部屋に往生し世帯道具をはみ出させてい  
る、憧れの団地住まいの現実の姿であった。  
四階まで辿りつくのに、私の肥満体は息を  
はずませている。妊婦の昇降は、嘸かし大変  
だろうと察しながら、目指す彼女の部屋の、  
鉄扉にとりつけたブザーを押す。

人の気配がして

「誰方ですか？」

と、鉄扉が五、六センチ開く。押売りや、  
不意の闖入者を防ぐために、鎖錠がとりつけ

られてあった。

「辻村です。突然お伺いしましたが、構わな  
かったでしょうか」

「あッ」

とびっくりした声だけで、あとは言葉もな  
く、ガチャガチャと鎖錠を外して、富田由美  
子が全貌をあらわした。

オカッパ姿の、少女めいた容貌に、口紅も  
なく素顔の俥であった。刹那、誰かに似てい  
る顔だなと、目まぐるしく芸能界の人々を頭  
に描いたら、岸田今日子のイメージが、ピッ  
タリと彼女とダブった。そうだ、岸田今日子  
を一まわりぐらい若くしたら、そっくりさん  
である。いわずもがな、その相似には、理智  
的なひらめきを感じた  
のである。

彼女は日頃の常着ら  
しく、濃茶のハイネッ  
クセーターの上から  
粗いジャンボ編みのロ  
ングベストを引っ掛け  
ミニスカートの腰に色  
模様のエプロンを巻い  
ていた。

「あのう、狭くてちら

かっておりますが、どうぞお入りになって下  
さい」

ナマの生活をのぞかれる気羞かしさを、ま  
ざまざと表情に泛かべて、由美子は顔を強ば  
らせ、困惑気味で私を招じ入れた。日時の約  
束がないという事は、たしかに不意の来訪に  
困惑するものである。心の準備が出来ていな  
いからであった。

無意識のうちに私の眼は、彼女の腹部にお  
ちた。色模様のエプロンで隠された腹部は、  
確かにかなりの膨らみを、ありありと示して  
いた。既に乳房も相当に張っているのである  
う。濃茶のセーターの胸が、私の心を疼かせ  
るように、ポツテリと大きく双つふくらんで





いる。

先に立って部屋へ入ると座布団をすすめ、今まで編んでいたらしい毛糸の編みものを、籠に入れて、手早くあたりを片付け、改めてキッチンと坐り直し、

「富田由美子でございます。羞かしいことをお願いしたりして御免なさい」

と頭を下げる。

「いやいや、それこそ突然、飛び込んで来てさぞかし御迷惑じゃあ」

「いいんです。一寸、お待ち下さい」

彼女はそそくさと立ち上るとダイニングへ消えた。後姿の臀部の厚みに眼を奪われ、私の嗜虐の血は激しく燃え上っていった。

夫婦二人暮らしだけに、調度品も今様のもので新しく、通された奥の間で、私は不躰けにならぬ程度に、団地の生活を物珍しげに眺めていた。

由美子は、キッチンの方でガタガタいわせていたが、やがて盆に、二杯の紅茶と到来ものらしいカステラの切身の皿をのせて部屋に入ってきた。

始めて訪問する礼儀で、私も一応、型通りの菓子箱を机上にのせ膝を崩して正対した。午下りで、独りで軽く食事を済ませたあと

のようで、どうやらテレビをみていたらしかった。スイッチをきって、富田由美子は唯、言葉もなく、じっとうつむいて押し黙っていた。かねて、いつかこの日を予想していたとはいえ、やはり来るべき日が、今こうして突然に前触れもなくやってくると、若いおさな

妻の胸は、未知の不安と危惧に打ち震えていたのであろう。何とかこの心の強ばり、緊張をゆるめてやるのが、当面の課題であった。親子ほども年令の違う未知の男女が、密室に近い団地の一室で相對していることに、彼女は軽い不安と、世代の違う私に對して、とまどいと心の重荷を感じている様である。

さりげなく私は切り出す。先ず身近のことからでもいい、相手は逃げ隠れはしないのだから――。

「いいねえ、こんな処で二人きりで生活するなんて……。今の人は羨ましいなあ」

「そうでしょうかしら。これで案外、御近所がうるさいんですよ」

「もう何年になるの、ここへ来て」

「未だ、やっと一年ばかりです。仲々住宅公団のくじが当たらなくて、あちこち手を廻して頼んでおきましたら、ここに前に住んでた方が、子供さんが二人になったので、手狭に

なって出られて、やっと入れ換りに入れたのです」

「でも案外、綺麗だね」

「入る時、すっかり塗り換え、タタミや建具も新しく換えました。落書きだらけでしたもの」

「それまでは、旦那さんの家の方にいたんだってね」

手記にそう書いてあったそうである。

「ハイ、結婚しても家がないものですから」

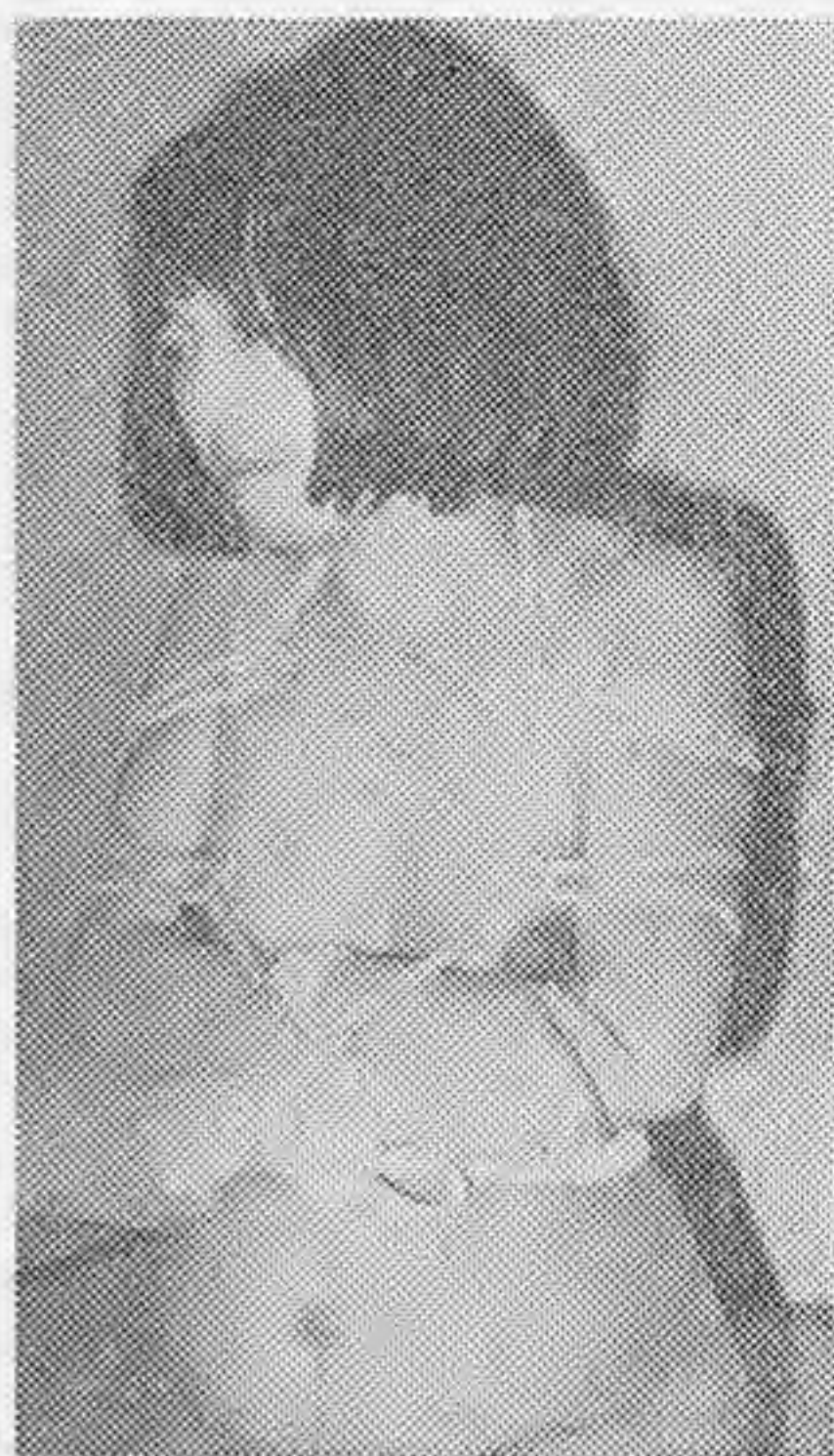
「恋愛結婚？」

「でしょうね。職場結婚といってもいいのですが――」

「早い結婚だったんだね」

「あたくし、主人と七才、年令が開いているんです。高校を卒業して就職した会社で、彼はもう係長クラスでした。エライさんが二人、年をとっているだけで、あとは比較的皆若いのです。主人はプロパーといって、新薬などのコマーシャルや効果を、病院や薬局に説明にゆく仕事なのです。私は事務でしたが、会社に勤めて、二カ月ぐらいで、彼と交際するようになりました。彼はもう、そろそろ結婚を考えていたのですが、私は未だ未だ早いと思っていました。でもデートするうち





早くても結婚して、二人で暮したくなかったのです」

喋り始めると、彼女是要領よく、過去を手短かに物語っていった。

頻繁なデートの挙句、燃える男女の落着く先は軌を一にしている。結婚を前提として、彼女はホテルの一室で処女を捧げた。婚前交渉が続く間、賢明な二人はバスコントロールしてきた。住居がないのを口実に、男の方は結婚を伸ばしたがっていたが、性の甘い果実の味を知ると、若くても女の方が強い。遂々彼女の情熱に負けて結婚——。新婚旅行は九州一周だったそう。結婚しても家の悩みは解決しない。彼は時折、奇クを買って読んでいたことも知っていたが、その頃は、プレイ

にまでは到らなかったそうである。

この団地の一室がうまく空いた時、誰よりも一番喜んだのは彼女であったことはいう迄もない。夢にまでみた二人きりの生活が実現出来るからであった。

勿論そんな二人だから、鶴舞団地へ移住してから共働きで仲よく朝一緒に家を出て、夕方は待ち合わせて帰る日が続いた。結婚を契機に、彼女は勤め先を変えて、その会社では、どうやら結婚を秘めていたらしかった。やはり若い娘にとって、その方が何かにつけて都合よかったに違いない。

そんなことを富田由美子は、間わず語りに次第にリラックスして、喋ってゆくのであった。フーム、フンフンと、私は専ら聞き役である。彼女は、まるで父親か、話の分かるオジサンにでも話しているような素振りであった。そろそろ私はプレイに話の核心をもってゆくべく、銚先をその方へ向けた。

「所詮SMの夫婦プレイなんてものは、気分的にリラックスしないと、その気にならないものだからね。その方はここへ移って、早速

始まったということかね」

「前々から、彼はその事をいっていました。二人きりの家を持ったら、プレイするんだって——。でも本当は、ホテルでデートしている時、二回ばかり、ネクタイか、ホテルの紐で、縛る真似事をしたことがあります。その時は、そんなことする人キライ、といったらすぐ止めました。新婚旅行では、指宿のホテルで、いろいろと告白し、結婚したら、そんなプレイをさして欲しいといいました。エッチな人だなあと考えましたけど、好きでしたからうなずいたら、その夜、始めて私を後手に縛って、長い間、愛撫しました。」

彼の家での生活は、離れ家でしたけど、彼の弟が試験勉強で遅くまで起きていますのでそれが気掛かりで拒みました。

ここへ移って、夫の趣味を受け入れる気になったのです。そんな時の夫は、スゴく私を欲ばせてくれるからです。性についていろいろ本をよみましたけど、実際は自分の体で理解出来なかったことばかりでした。ここへ移って、どうやら欲びの意味が分かりました。

私達は協議の上、わずらわしいコントロールをやめました。忽ちその成果はごらんの通りです。でも、今は、夫の愛の結晶がほしい気



持で一杯です。仕事は六カ月になってやめました。少し苦しくなりましたけど……」

「二人の愛のフォト撮ってるのじゃない？」

「DPEを勉強する間がなくて、伸び伸びになっただけですが、どうやら出来るようになり、DPEの時はこの机の上へ持ち出して、私も手伝います」

「大分いいのが溜まったのじゃない？」

「週刊誌でみかけたのですが、何処かの夫婦が、妊娠のヌードの記録を克明に撮って、自費出版するとか書いてありました。時代がその様になったのですね。妊娠五カ月ぐらいから、夫は話の度毎に、私に妊婦のハントのモデルになるよう奨めるのです。勿論、最初はその様な体を曝すのがイヤだからと、断わりつづけました。夫は四カ月ぐらいから、記録的に、私の縛った裸を撮りつづけています。そして根よく、拗つてくすすめるのです。遂々根負けし、果ては、あんな羞かしい手記まで書かされて、出すようになったのです」

「そのことで後悔している？」

「私、あなたのハントを何篇か読みまして、本当はロマンチストの優しいオジサマじゃないかと思うようになりました。夫も欲び、私自身もこんな体でアバンチュールが味わえる

のならと、いつしか自分でも、そう思うようになったと思っています」

「じゃあいいんだね」

「本当はスゴく愧かしいのですけど」

「その初々しい羞恥が私の心を乱すなあ」

富田由美子は始めて

薄くはにかみ笑いを泛かべた。岸田今日子そ

つくりの、やや厚目の唇が、ニツと綻ぶと健康そうな皓い歯が、真珠貝のように美しく覗けた。

その微笑みに、妖精めいた蠱惑の昂ぶりを感じて、私は思わず息を嚥んだ。ニンフは今耳朶を染め、頸筋を赧らめて、心憚るMの願望を、羞恥のオブラードで包み乍ら、男心をくすぐるように、アルカイックに媚笑を泛かべているのだった。

「この部屋でもいいんだよ」

妊婦の、しかも親子と間違われそうな若い人妻とホテルをくぐるより、いっその場でと思つての提案であつたが、由美子はきっぱ



りと、

「イエ、ここでは困るのです。近所の方がどんなことで表を叩かれるかもしれません。その時、開かないでいるとヘンに思われますから——」

「じゃあ、出よう。最初からそのつもりでいたんだけど、あんたはその方がラクでいいんじゃないかと思つていったままだよ」

「私のような身重な者と一緒が、おイヤなのじゃあ……」

「いやとんでもない。嬉しくてワクワクしてるんだよ」

「フフ、御冗談ばっかし。じゃあ着換えます



から、すみませんが、ダイニングの方へ行って、待っていただけます」

「いいとも」

珠のれんを潜って、二人用の可愛い食卓の椅子を引き出して坐ると、私はあらぬ妄想を次々浮かべては、愉しい思索に耽っていた。

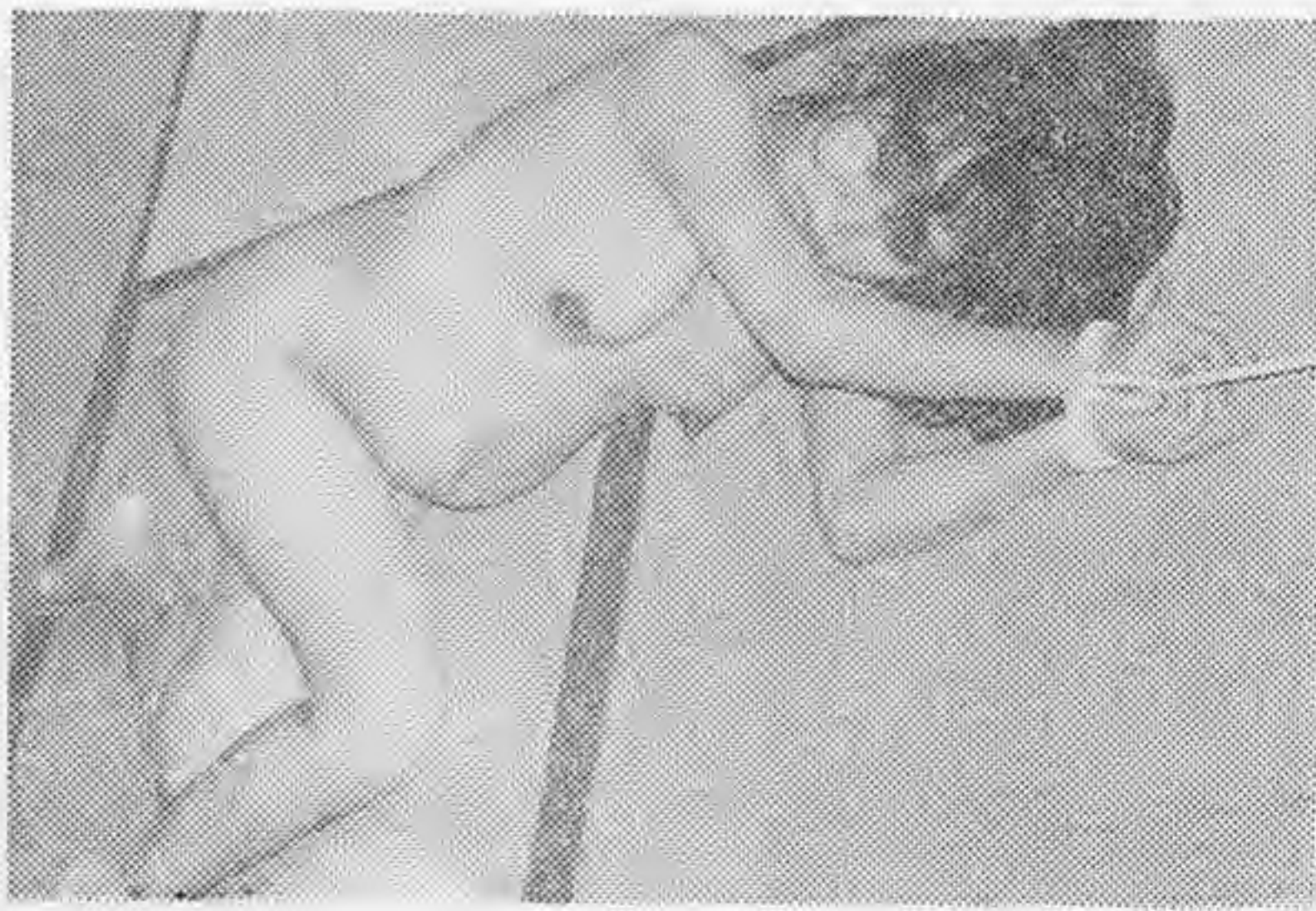
支度が出来たらしい。気配を感じて振り向くと、富田由美子は鮮かに変身して微笑んでいた。真紅のフード帽をかぶり、白いハイネックの上から洒落た杉織のオーバーを着て、パンタロンを穿いて、ハンドバッグを提げている。心なし腹部は膨れているものの、指摘しない限り、厚目のオーバーに隠されて、殆ど目立たなかった。それにもまして、この少女の如きあどけないスタイルに、私の心は否応なく弾んだ。

「あのう、余り乱暴になさらないでね。若し変調を来たすと困りますから」

「心得ていますよ」

「主人が申していたのですが、金原さんという妊婦の方になさった様な、逆さに吊ったりすることはなさらないでね」

彼女は出発に際して、ひどく真剣な表情であれこれとダメを押してきた。どんな緊縛をされるかが、いざとなって不安だったようである。



ある。

「あんたのいやがること、拒否することは、決してしませんよ。初産前だし、大切な体ですものね」

「その代わり、おなかに関係のないことでしたら、少々ぐらいきついても我慢します」

私は富田由美子の、この真剣な口吻がよい

らしかった。未知への不安と期待は、余りにも大きく激しかったに違いなかった。

私は、夫とこの稚な妻の、SMプレイの模様を具体的には聞いてはいない。SM感度がどの程度か、由美子のM性が将又、どの程度なのか、それについては全然、未踏である。その私の観念を裏書きするように、由美子は呟くようにいった。

「あたくし、夫以外の人に、あんなことされるの、今日が生まれて始めてなんです。すぐく愧かしくて、怖いんです。本当は——」

「私を信じてほしいといっても、口だけで、それを証明する何もないのは残念だけど、信じて貰うより仕方なさそうだね——。じゃあ行きましょうか」

「先に出て、車の中で待ってて下さい。さりげなく乗せていただきますから」

年令の差はあっても人妻である。流石に近隣を慮んばかりか、細心の注意を払っている。うなずいて鉄扉を開くと、軽い足どりで下へ降りる。車にのり込み、エンジンをふかせて徐行させつつ広場から通路へと出る。

数分して、ころもち急ぎ足でくると、彼女はチラッと辺りを窺い、素早く開けた助手席に坐り込んで、スマして正面を向いた。



「大阪、奈良、どちらへ走ります」

「奈良方面がいいですわ」

うなずいて、もと来た道を引返し、阪奈道路へと出ると、数分で視野が開け、山焼きで赤茶けた若草山が、前方に展開してきた。

阪奈道路がYの字に別れて、新しく出来た大宮通りを十分も走ると、忽ちに奈良公園へ入ってしまう。公園内は駐車禁止ばかりで降りられそうもなく、私達は若草山の麓をぐるりと一廻りして、モーターを指して、ドリームランドの方角へ車を向けていた。

フト、このおさな妻と記念撮影をする気になって、折から便意を訴えたのを幸いに、とある喫茶の傍で車をとめると、コーヒーをのみに入る。妊娠八カ月ともなると、膀胱が、拡大してゆく子宮に圧迫されて、すぐ尿意を催すのは通弊である。

今更ここで喋る時間も惜しく、時計をみると、既に二時半を廻っている。

車にのる前に、カメラを車のボンネットにおき、ハンカチで滑り止めて、大体の目測で距離をきめ、セルフタイマーをかけて、私達は並ぶ。冬の陽射しは弱々しくかげついで、どうせ満足なフォトはとれていなかったと考えたが、二枚ばかり撮って、車中に戻る

と、ドリームランドへ遊びに来た時、見覚えでおいたモーターへ、私は一気に車を走らせていった。身重の体に、長時間の乗車はよくなかったし、私はまるでわが娘みたいな彼女に、フェミニストめいた、いたわりをヒタヒタと感じていたのであった。



狭いバスから湯を使う音が、この部屋にまで、手にとるように聞こえる。硝子張り越しに、湯気に煙る、おさな妻の裸身の動きが、みるともなく眼をやる視線の彼方にチラついていった。

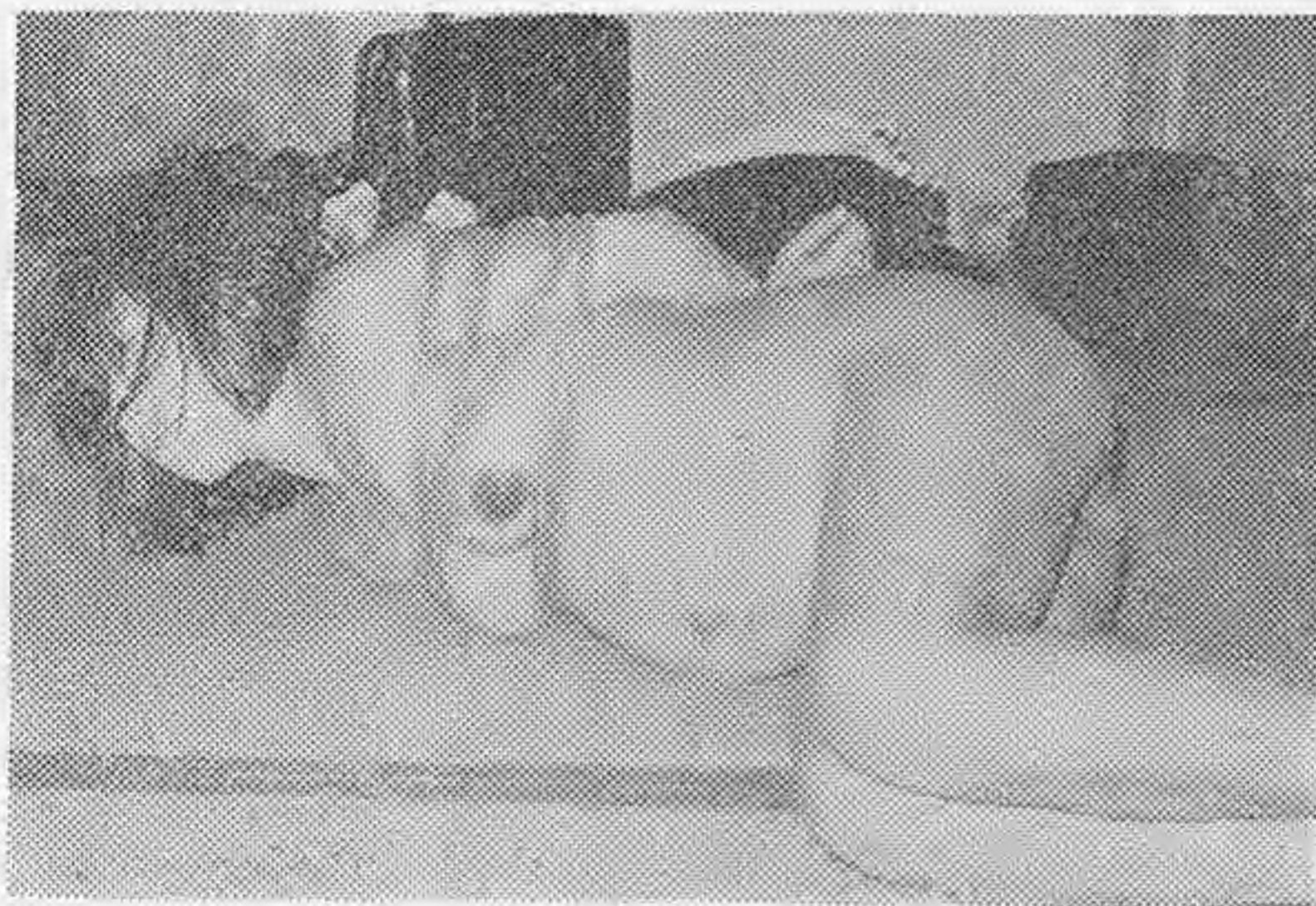
隣で結婚式場も経営するこのホテルは、和室づくりで部屋の間取りも、ゆったりとしていて、撮影には都合よかった。

障子を開くと、アルミサッシの硝子戸越しに、奈良の古い街並みの屋根の上に、大仏殿の重厚偉大な甍が、冬の陽を浴びて、黒々と光ってみえた。

承知のうえとはいえ、いきなり由美子を刺激しても悪いと、黒革袋の縄やプレイの用具はその俤にしておいて私はもう一つのラッシュユバッグを開き、カメラの準備を、ゆっくりと進めていた。

単なる緊縛の羅列に終わるか、若しくは、いつもの様にSMのプレイまで伸展するか、すべては未知である。緊縛フォトのみに専念してもいい様な、いたわりの気持すら抱きながら、も一つのエゴの心は、このあどけなき少女妻に、恍惚の悦楽を喚起させるような行為にも、しきりに熱い血を疼かせて走りたがっているのも本音であった。





そっとしておきたい気持ちと、蹂躪してみたい野望が折半する複雑な感情で、私は由美子がバスから出てくるのを、じりじりと待ちつづけていた。

惘然と煙草をふかせていると、かたい浴衣を身につけた由美子が、楚々とした足どりでやっと部屋に現われる。

心の動揺を鎮めるかのように、机を隔てて私の前に坐り、じっと膝に手を組んで神妙にうつむいている。その姿は生贄になる寸前の哀れな乙女のように、私の臉に灼きついた。ここここに到った、観念した諦めに似たしおらしさに、私の心は妙に感傷的にいじらしくなってくる。

微かに震える頬に、濡れた髪の毛が二筋三筋ほつれかかり、淡い悔痕に、心をしめつけられるかのように、由美子は確かに怯えていたが、何を思い出したのかキツとした様に顔を挙げると、

「そうです、忘れていました。主人に今日のことを伝えておきます。ここから大阪へ掛かるでしょうね」

「それがいい。早速かけなさいよ」  
何がなしホッとして、

「ついでに、私も一言お礼をいっておくよ」  
由美子は受話器をとり上げると、口早やに大阪の会社名を告げた。

「あのう、富田おりますでしょうか。わたくし、家内でございますが」

受話器を持った俤、しばらくじっとしてしたが、由美子の顔はパツと安堵に輝く。

「ああ、あなたあ？ あたしよ。外廻りじゃ

なくてホッとしたわ。驚かないでね、今、辻村さんと御一緒に、奈良のホテルから電話しているの。例のことで、急にお見えになったのよ。許して下さい？」

何か向こうで言っている。由美子は、しきりにうなずいて、ええとか、そうよとか、大丈夫とかいっている。一しきり話の区切りがついたのか、

「辻村さんに一寸、代わって欲しいんですけど」

と私に受話器を手渡す。

「由美子がお世話かけます。是非一度、お目にかかりたいんですが」

「ああ、結構です、いつでも。突然に大切な奥様、拝借して恐縮です」

「いいんです、よろしくお願いします。傑作を期待しています」

電話口では余り他人目もあって喋れないのか、それでも精一杯に柔らかな富田秀一氏の声が響いて、私は尚も安心するように告げたあと、再び彼女と交替した。

鼻を鳴らし、甘えてみせ、チラッと拗ねてみたりして、この稚な妻は、かなりの時間、夫との会話を愉しんだあと、やっと名残り惜しげに電話を切った。



この会話によって、確かに彼女の心はなごみ、夫から今日の行為を許された気分のほぐれが、硬さと緊張のやわらいだ爾後の態度になって現われていた。

「じゃあ、そろそろ」

と、私は促す。カメラ二台の一つはいうまでもなくカラーフィルムが装填されてある。

私の言葉に、ハッとしたように、彼女はみるみる頬を染めたが、やがて観念したように浴衣をぬいだ。身につけているのは白いパンティ一枚きりである。

薄黒く色づいた乳暈、豊かに盛り上った乳房――、ぐんと臍窩を盛り上げて膨満している腹部――、微かな痕跡を止どめる盲腸手術のあとなど、素早く瞥見して胸は逸り立つ。

ハタチのおさな妻の肉体は、汚れもたるみもみせず、艶やかに張り切っていた。羽村京子の名言「メロンのヴィナス」そんな形容がピッタリと嵌まり、いみじくも私がなづけたニンフの赤裸々の姿がそこに在った。

十数枚、さまざまなポーズに閃光は光る。

タタミに伏し、仰臥して振り仰ぐ若き女体の見事さに、私はしばし緊縛を忘れて、この若々しい妊婦の裸身を、あきもせず撮りまくっていた。

「脱いでくれる？」

若き日の岸田今日子に再び極度の羞恥が走った。しばらくはたじろいでいたが背を向けると潔ぎよくパンティを脱いだ。その代りに、私は彼女が先程、脱ぎ捨てておいた衣類の、一番上にのっかる、腹帯代りの晒布を、そっと背後から手渡してやった。

唯一の隠蔽物を手にして愧らいを泛かべて、ペソをかけた様な表情で、由美子は向きをかえる。臍窩の殆ど見当たらずに膨満した腹部の奥深く、すすくと胎児はすこやかに息づいていることであろう。

黒革のバッグから、ドサリと縄束を取り出すと、ギクツとしたように彼女は、あわてて視線を外らせて眼を伏せた。緊縛のときは刻一刻、迫っている。

「壁に面して、坐ってごらん」

「ハイ」と素直に応えて、ニンフは潔ぎよく覚悟をきめたのか、私の命ずる通り壁際へ歩み、羞恥を隠蔽すべく、両腿にぐっと力をこ



めて正座した。丸々と盛り上った腹部が、座位によって大きくはみ出していた。この見事に突き出した、ニンフのシンボルに焦点をあてるべく、私は珍しく前手縛りを試みることにした。二本の縄を使って腕で絡みよせ、まるで編物を拡大したような縛り方を終わってじりじりと胴を締めゆく。妊娠八カ月の、膨満した腹部は、否が上にもふくらみをみせ可愛い臍窩の底辺を覗かせて、見事にふくれ上っている。

私の手が、彼女の肌にじかに触れた時、由





た田中美佐子。双生児を胎内に宿し、その圧倒的な偉大さに命ふくらむ記録をとった増田みゆき。山本リンダに似た、木戸悦子。東京の一夜、新劇女優の卵の飯田カオル。童女のあどけなさを残す金原奈加子。

そして今、六人目のニンフとして、おさな妻の富田由美子が、私の膝下で裸身を曝しているのだ

あった。

「どこか痛い？」

縛り終わって訊ねると、ハッキリと首を振って、

「いいえ、大丈夫です」

前手縛りのこのポーズは、余り緊縛といえた強さでもない。しかし富田由美子にかける縄の第一歩であれば、こうしたことから、徐々に導入してゆくのも一つの手段であった。縛り乍ら、私の脳裡には、ヒタヒタと、過去の妊婦の緊縛のシーンが、走馬灯のように去

来した。

妊婦第一号でありながら、遂に書きそびれ

る。安心して私の二台のカメラは、前後左右から、彼女に閃光の放列を敷いて、次々と光った。

いつしか由美子の顔から強ばりがとれ、心なしかカメラに向かって、さりげないポーズを自然のうちにとっているようであった。少女に近い無垢の、若々しい女体に、彼女は誇りすら持っている様に感じられた。どうせうつされるなら、よりよく撮って欲しいという女性本来の願望が、彼女の緊縛のポーズに現われていた。

一しきり撮り終わって、次の縛り方を考えながら縄をといてゆき、私は気軽に声をかけてみた。

「近頃も縛られたりしているの？ 彼に」

「ハイ、気が向けば、時々縛ります」

「どんな縛り方をするの？ ダンナは」

「いろいろです」

「吊ったりしない？」

金原奈加子の妊娠九カ月の逆さ吊りを、フト思い浮かべて、きいてみる。

「しません。第一、団地のあの部屋では、吊るところもないし……」

「そうだね、私はいつか、あんたより未だ若い妊婦の、九カ月の人を逆さに吊った経験が



あるんだよ」

「私、読みました。童女何とかって」

「そう、金原奈加子って、可愛い童女みたいな人妻だった。しかしあの人は、生活に困っての、何か切羽詰まった、やつれがあった。

あなたには、おさな妻としてのイメージが強いし、それに……」

それに、奈加子にくらべ、世帯やつれもなく教養もあり、肌も荒れていないというおうとしたが、お世辞めくようでもあるし、奈加子を悪くいうことになるので、言葉をのみ込んだが、由美子は、過去のどの妊婦よりも肌が美しかったことは確かである。臨月が近づくと、体にむくみが出たり、しみや血瘤痕が現われ、容貌も変化し、何処となく薄汚なくなるのが普通である。又、それが妊婦特有の象徴でもあったが、このおさな妻は、そうした特有の徴候もなく、腹部だけがすべすべと盛り上った感じで、肉体は若々しく、つややいでいた。

解いた縄で、私はいつしか由美子の両手を弄ぶようにしながら、ぐるぐると巻いて、縛っていた。そっと背後から抱くようにしてタミへ転がすと、両手を縛った縄のはじを、床の間の柱に引っ張って結びつける。横倒し

になった姿で、由美子は私の為すがままになっていた。

遠慮がちに体を仰向かせて、両足を引っ張る。このおさな妻に、何故ともなく、あざとい行為は憚られたものの、私の男の欲求が矢張りオンナを探索してみたい意欲にかられていた。引っ張った両足を、ぐいと開こうとしたが、無言の力の抵抗を両腿に感じて、私はその行為を中止してしまった。大粒の黒葡萄のように膨む乳首が、鼓動で喘いでいるのに眼を落として、フトその行為に愧じると、恰好のつかぬ俚、両腿を合わせて強く縛る。私の試みは未遂に終わり、深々と彎曲している、かたちよい双丘に眼を落として、無言の抵抗に負けて、カメラをとり上げるのであ



た。オカッパの髪を乱して彼女はチラリと私に視線を投げ、ツトあらぬ方に眼を外らせた。私という、男の卑猥めいた行為に対する、冷たい顰蹙を感じて、我知らず戸惑う気持で、これは迂濶にプレイは出来ぬと、心でいましめながら、私は努めてカメラに逃避しようと、計っていたのである。今更私らしくもないと、照れた苦笑で、カメラは一しきり、女体の十数ポーズを捉えていった。

妊婦の緊縛フォトは、尚も数々撮れそうである。しかし、SMのプレイとなると、どうにも勝手が悪く、ましてや妊娠八カ月の女体の、しかも初産婦だけに、闇雲な激しい行為は憚られたのである。富田夫妻のSMプレイがどの程度なのか、私は未だ何一つ聞いていないだけに、何とはなく扱い難い気持になりつつあった。

素早く解いて、麻縄でキリキリと上体を縛り上げ、正座させ、直立させ、仰臥させて、如何にも分譲フォト向きのポーズを、次々に



撮りまくっていった。それも亦、SMのプレイ導入の一過程なのだろう。堅い麻縄であっさり縛った縄目に、むしろ緊縛があった。

フォトを撮るため、一心にカメラに没入している私に、富田由美子は快く協力してくれた。これはプレイではない。謂わば、カメラ・ハント初期の、専ら、裸身の緊縛フォトを撮ることに専念していた頃の、私の在りし日の姿であった。カメラが主で、SMのプレイはそれに従属する、あわよくばの可能性を求めているあの頃に比べて、最近の私は紛れもなく変貌している筈である。M女性と遭遇して、SMのプレイに開眼させ、プレイへと導入し、果ては耽溺して行く過程を、カメラで追うに過ぎなくなっていたからである。

だから、私のカメラは近頃はスナップである。カメラ芸術的に見れば、味も素気もなく矢鱈にストロボでパチパチと大量にとりまくり、ルポの説明の一部として、氷山の一角的なフォトを十数枚、発表するといった経過に流れていたのである。

縛りが続ければ続けるほど、私はプレイへの開眼の欲求が激しくなってくる。それは過去二十数年に亘って、只管に女体を追いつづけた究極の目的に外ならない。

今私は、眼前に、もぎたての果実の如き、若く発刺としたニンフを縛りながらプレイへと導入出来ぬもどかしさが、次第に私の心を焦立たせ、徒らにカメラを構えて、閃光を走らせている空しさに、何故ともなくやり切れなくなってきた。

彼女のM性は極く最近の未熟なものであって、夫がSなるが故、それに迎合しようとする稚な妻の、健気で慕情溢れる発露に外ならない。言い換えれば彼女はほんの一年前ぐらゐまで、M気など持ち合わせぬ、ごく正常な可愛い、おさな妻に過ぎなかったのである。

夫に愛される妻になりたいと希うの余り、努めてSM的な観念を理解しようとしても、真性のMでない彼女にしてみれば、今日のこのひとときも、正直いって苦痛なのではなからうか――。

と、そうした思索を走らせ乍らも、私にとって、この与えられたチャンスに、何とか、このおさな妻を、プレイに開眼させてみたい野望にかられていた。



下手をすれば私に対する評価は、屈辱と顰蹙以外の何ものでもなくなるかも知れない。それでいて尚一片の希望は、このニンフが、裸身を一対一の密室でさらけ出している、羞恥をかなぐり捨てた一連の行動に対してであった。如何に夫の要求とはいえ、自からにM性がなければ、ここまで大胆にはなれぬ筈である。とすれば、私は後者に希望を托して、一寸した心の間隙につけいって、一挙にプレイの行動に移ったとしても、羞恥と不安のベールを剥がした彼女は、案外、思いもかけず欲喜の涙を垂れ、陶酔の悦楽に酔い痴れる可能性も考えられるのであった。

堅い麻縄を解くと、ホッとしたように、由美子は二本のかいなを交互に揉んでいた。



「次々続けたので、少し草臥れた様だね。一服しようか」

優しく、いたわりを籠めて声をかけると、かげらいのある笑みを泛かべて、

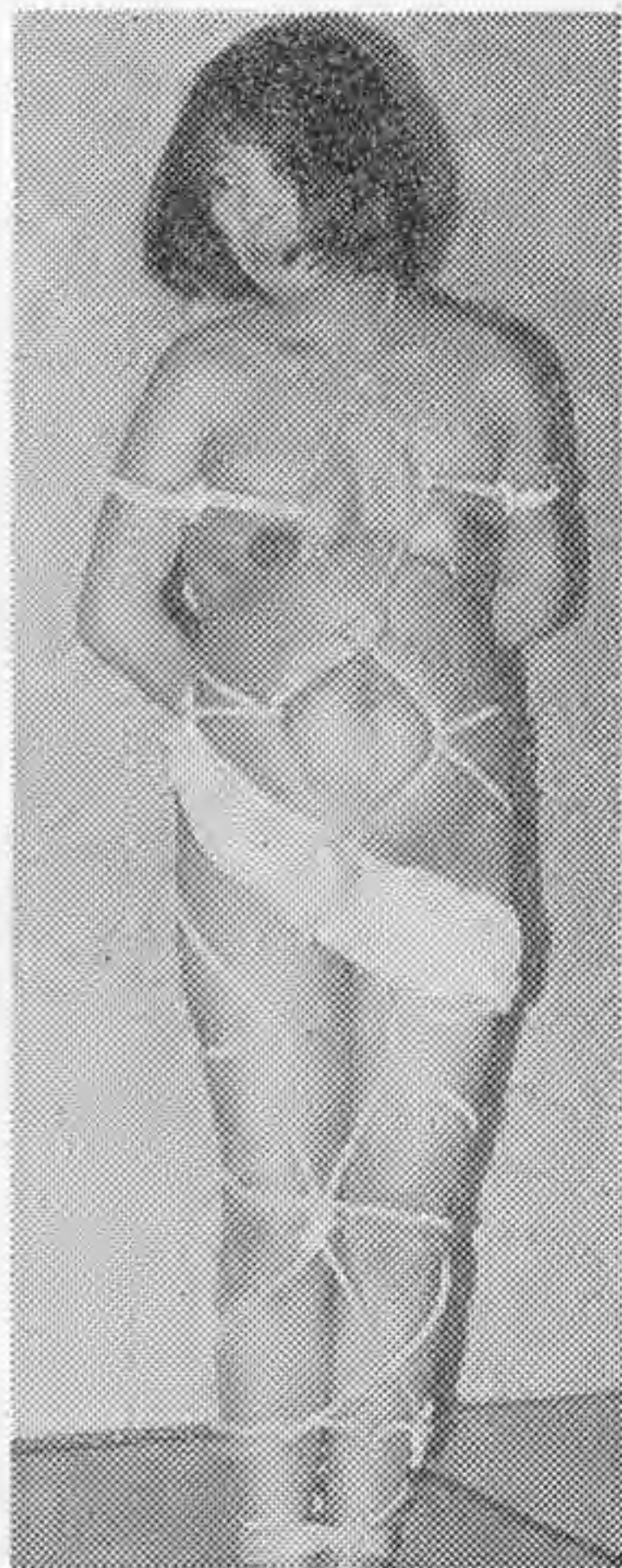
「そうでもありませんわ、

案外ラクでした。おなかに気を使っていच्छやるのが分かります。でも少し寒くなりました」

「よかったら、もう一度、つかってくる？」

「ええ」

素直にうなずいて、バスに消えてゆく。私は先程の自らの敗退が、フト私の思い過ぎしの様に思えたのであった。ハタチのニンフは無意識に、羞恥にかられて腿を堅くしたのに過ぎなかったのではなからうか。始めて会う私と、一対一の密室に於いての行為で、それは当然、彼女に限らず、誰しもが試みる、本能的な拒否のポーズのように思えるのであった。それは今の由美子のあの表情からは、私をヒンシュクした気振りは毫も窺えなかったからである。ハツとした気持が、本能の支配で眉をしかめたとすれば、私の軽挙に過ぎずゆっくりと時間をかければ、十分にプレイの



可能性があるように思えてくるのであった。

× × ×

律気にも私は、未だにネクタイをしめた僕の自分であることに気付いて何がなし可笑しくなってきた。私自身の心にゆとりもなく、リラックスしていないのは、むしろ私の方だった様に思えたからである。

身体を温めただけで、由美子は数分経たずして部屋に戻ってきた。

「よかったら、冷蔵庫からコーラでも出してのみなさいよ」

「有難う、恰度ノドが渴いていたのです」

浴衣の胸を合わせて、彼女はコーラをとり出すと、

「あのう、いりますか？」

辻村さんとも、オジサンとも言いかねて、

私の顔をみつめた。  
「そう、私も貰おう」

確かにこうした行動はノドが渴く。裸体に接して、緊縛を始め、心のうちに野心を秘め始めると、想像が先走って、カラカラに、唾液の乾上ることがあった。今の私はその状態まではゆかなかったが、確かにノドの渴

きはあった。

机上に二つのコップを並べ、彼女はファンタを注ぎ、私のコップにコーラをついで、さもおいしそうにのんでいた。異様な初体験が知らず知らず彼女を昂奮させ、きっと口腔をカラカラにさせていたのであろう。

「夫婦プレイなら、もっと激しくやってるんじゃないの？」

カマをかけるように問うと、彼女は何かいかけたが、フト口をつぐんで、ポツと頬を染めた。

「縛られてパイプなど使われたことある？」  
微かにうなずく。羞恥を全身にみなぎらせている。

「どう、感じるの？」

「恥かしいですわ、そんなこと」





やっと小声で応える。私は愉しくなって、尚も言葉のプレイを続ける気になった。

「妊娠中のセックスは、体位を考えると臨月の出産ギリギリまで大丈夫なんだよ。私は経験済みだからね。そんなこと知ってるの？」

「大丈夫でしょうか？」

真剣なまなざしが、じっと私をみつめる。

「ああ、大丈夫だとも。妊娠したからといって夫婦の生活を中止すると、反って難産になるそうだよ。むしろ日常の仕事もホドホドにやり、夜の営みも腹部を圧迫せず清潔に行なえば、産道が開いて、軽く産めるんだって——」

「それが本当なら安心しました。わたくし、

そのことが気がかりだったので。夫の要求で、縛られた時など、そのあとはどうしてもなり勝ちでした。夫も十分考えていたようですが、矢張り始めてだから心配でした」

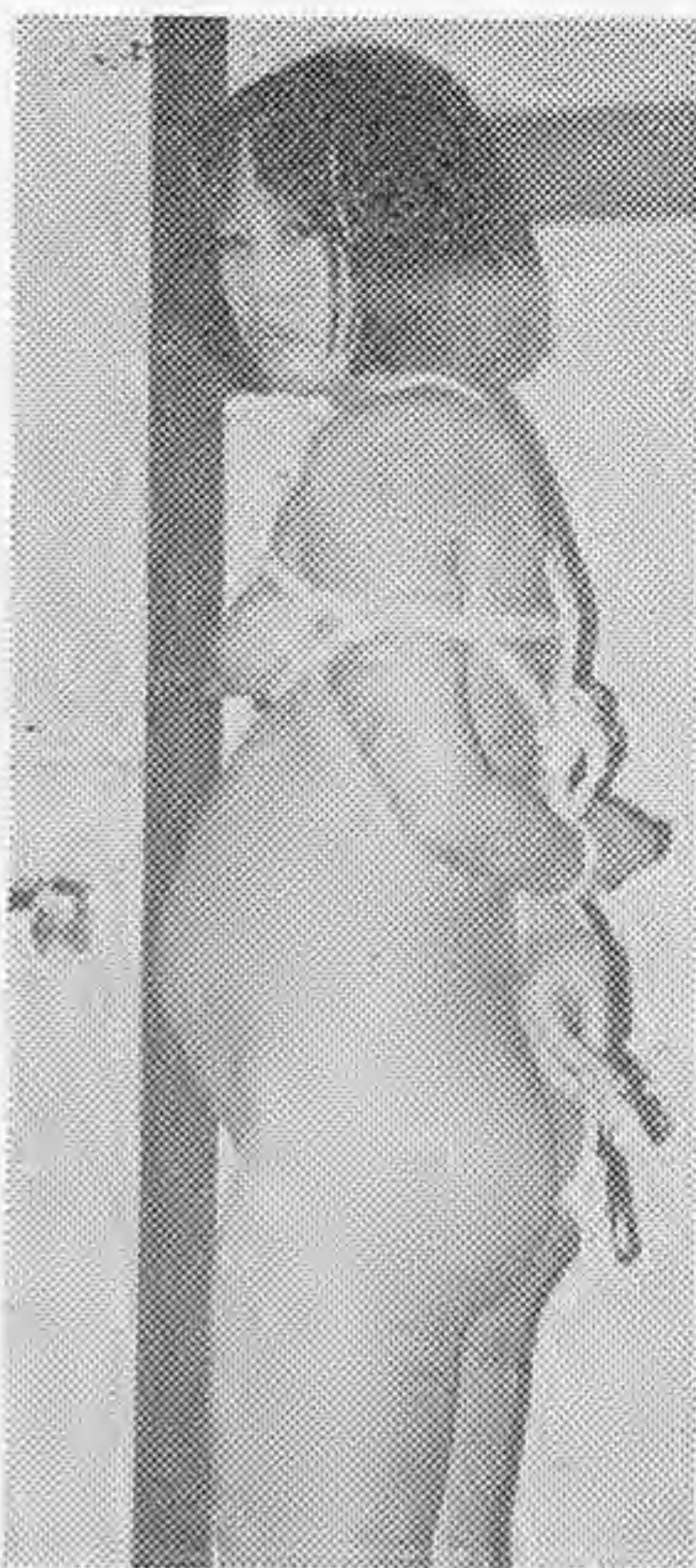
「白状するけど、私の長女が生まれた時は、何日ぶり目かの夜明けのいとなみの後、すぐ陣痛が起こってね。さては悪かったのかとハッとしたが、急いで産婆を呼びにいったら、もう出来ていたんだよ。僅か一時間足らずの間にね。勿論、産婆は間に合わず、家内は独りで、軽々と産んでいた。だから私の体験からいえることなんだよ」

これは事実である。現在の産婦人科では、出産前、あらかじめ膣の下部をメスで切って分娩の苦痛をやわらげ、出産と同時にすぐ縫合する方法をとっているが、私は合理的であると考える。助産婦に世話になっていた往時は、自然分娩だから、それだけ陣痛の時間も長く、妊婦はかなり激しく苦しんだものである。数百年来、その手段によってきたのだからそれはいいとしても、初産分娩の場合、極

度な衝撃で、会陰部や小陰唇が亀裂するが、それを何ら縫合せず、パウダーか、ホルム散ぐらいを散布しただけで済ませてしまっていた。それが爾後の夫婦生活にどれだけ支障をきたしていたか計り知れないものがあることは、助産婦の世話になった過去の人妻は人知れず経験し、悩んでいる筈である。数度の出産で、子孫の増殖を果したあとは顧みられなかった時代は過ぎ、今は、生殖を果したあとは夫婦の快楽の根源になっている時代である。それが恥部といわれ、隠しどころといわれても、いつまでも形よく、美しくありたいと願うのは女の本能ではなからうか。生殖の器は醜い残骸となり果てるべきものではなく美の根源として、終生、賞でるべきはずのものである。

授乳し尽したあとの、乳房の垂れの醜さ、中年の女性の腹部の醜悪さ、それに繋がる魅力を失った器——。それは最早、過去の遺物でなければならぬ。今の女性は年令と共に爛熟の美しさを、増しつつある。その弊害をさとしたからであろう。懼らく何十年のち五十代、六十代の女性でも尚且、女の美しさを誇り、ヌードになっても何ら羞かしくない肉体を保持し得る時代がくるのではなからう





か。

私はそうしたことを要約して、熱心に富田由美子に説いていた。百人近い、既婚未婚の女性の裸身に接し、肉体の美しさを探究した私にとっては、それは確固としていえることであつた。二十年前の、三十才代の人妻にくらべ、現在の三十才代の人妻の体の、すべてがみずみずしく、若々しい。それは永遠に男女相半ばするこの世の男達にとっての、この上もない福音であることだろう。

私は自分の娘達や、家内の妊娠の経験などから、この初産のニンフに、まるで親心のよきな気持で、教えてやっていた。まるで密室のプレイには、ふさわしくない会話である。初産婦にとって、追々迫る出産の不安、知識の欠如も、こと性に密接な事柄だけに、判

っきりときけないもどかしさがある。

由美子の顔は、いつしか真剣そのものであつた。出産心得の育児本は読んでいても、すべてがすべて、本通りには行かないのは当然である。本は所詮、標

準的な集約を述べてあるに過ぎない。

——陣痛はどの程度、痛むの？

——赤ちゃんの、あの大きな頭がどうして出てくるのか、想像もつかない。

——胎教に対するSMプレイの弊害の有無。

——出産後のセックス忌避の日数。

——満潮時に出産するって本当なの？

と、掘り葉掘り、訊ねられ、果てはタジタジになり乍らも、私は知っている限り、真剣に教えてやっていた。男だから、自身の腹は痛めなくても、やがて孫二人になろうという今、年令的の経験は豊富であり、それに対する知識欲も人一倍強いだけに、懇々と説く適切な言葉に、由美はいつしか、私に尊敬の念すら抱いたようであつた。未熟のおさな妻に、性知識の話をするのは、中年男の秘かな

愉しみの一つであろうか。私は彼女の反応を心で確かめつつ、やおら袋から小型のバイブをとり出して、わざとひけらかすようにしてみせ、

「こんなのを使っているの？」

と真面目顔にきいてみた。

「少し型は違うけど、よく似た、かたちですわ。夫は器具をいろいろに取り替えられる、電気のマッサージ器を買ってきました、使ったりします。最初は飛び上りましたが、段々と馴れてきました」

と、顔も赧らめずいうのは、その行為も、プレイとしてではなく、夫婦生活の当然のあり方としてとっているようであつた。

「使ってあげようか」

「いいえ結構です。そんなこと、夫だけでいいですわ」

ケロリと応えられて、肩すかしを喰わされた思いで私は苦笑を洩らし、しまいこんだ。思い出したように縄をとり上げると、

「さあ、じゃあ、もう少し続けようか」

と促す。先程からの対話で私に対する一抹の警戒心を、すっかり払拭した彼女は、大きくうなずいて、浴衣をかなぐり捨て、蹲踞の姿勢で私を待った。



三脚に電動カメラを据え、長尺レリーズをとりつけると、今度はかなりの緊縛にかかってゆく。首縄をかけて二の腕をしめ上げ、大きく飛び出した腹部を避けるようにして、次第に縛ってゆく構成のさまを、膝や足で、レリーズ球を圧迫し乍ら、次々カメラに納めてゆく。突出するたわわな乳房、隆起する張切った腹部に、私はさりげなく手を触れ、女体のもつ妖しい不思議さを眼の辺りに眺めつつ坐位、立位、正面からと、幾度となくシャッターをきっていた。腹部の下を這う縄は、立居振舞と共に、いつしかゆるみ始めていた。

潔ぎよく解くと、すぐさま全身緊縛にかかる。腹をいたわる気持から、どうも締める縄の手がゆるみ勝ちである。

一本の縄に、結びめを次々とつくり、足許まで降りて、足首で止めておき、別の縄で、菱形に結びめを拡げて全身くまなく、締め始める。従容として由美子は、この煩雑な縄の手をみつめていた。

一つの結びめに、敏感な位置を占められて直立する彼女の前に腰を落とし、縄をくぐらせる私の嗜虐の血は、いつしか熱く、たぎり始めていた。

クローズアップはいいが、正面から全身を

とる時、又ぞろ蔽い焼きせねばならぬ煩らわしさを考慮し、由美子の腹帯で隠蔽したもののファインダーからのぞくその構図は、斜線を入れたポーズと、何ら変わらぬ拙劣さに、やはり邪魔物はないに限ると、一枚撮って直ちに剥ぎとってしまふ。

あっても、無くても由美子の表情は変わらず、やや憂いを含んだ瞳で、私の指示する辺りに眼線をおとしていた。

正面から撮ると、腹部の膨みは目立たず、その代わり、ウエストからヒップにかけて、殆ど並行に、逞しく発達していた。

いつしか暖房の熱気が部屋に充満し、ネクタイを外しカッターを脱いでも、熱いくらいだった。懸命に縛りに専念していたのか、ひたいが、じっとりと汗ばんでいる。

「あのう……」

「どうしたの？」

「オシッコしたいんです」

無理もない。最初にこの部屋へ入ってトイ

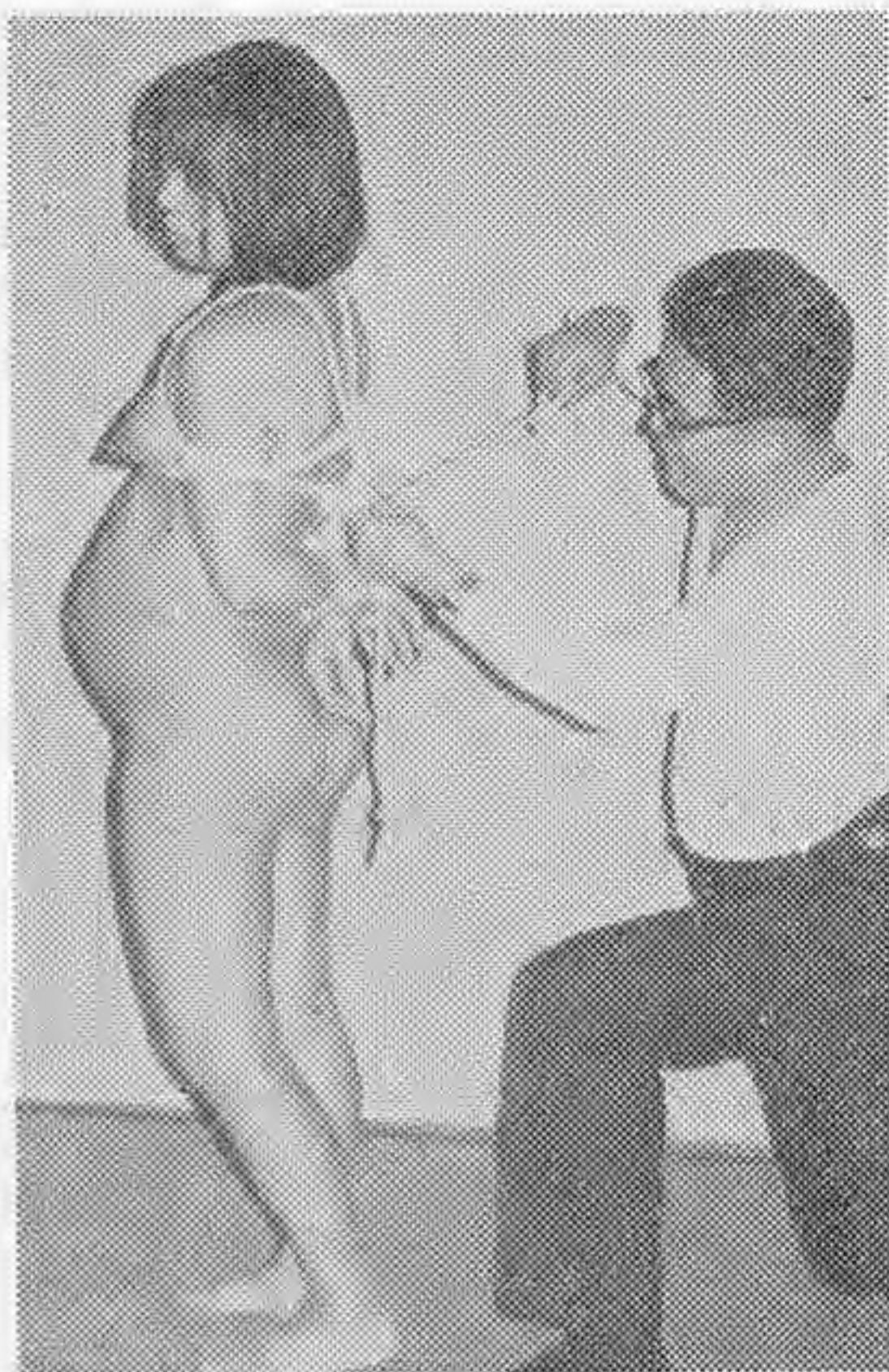


レに立って以来、行っていない。頻尿はニンフ特有の現象である。子宮の膨脹に反比例して、膀胱は圧縮されつつあるからだ。

「一寸、我慢してね。また、そんな時に限って、丁寧に縛ったもんだね」

慌てて解こうとすると反って縄が纏れて、仲々体から抜けれない。やっと解き終わった時私の心にハッと泛かんだことがあった。いいチャンスだ。縛ってオシッコさせてみよう。SMプレイによく使う手を、咄嗟に彼女に試みてる気になった私は、解放されて歩きかけるうしろから、パツと二の腕を掴み、素早く早縄をかけた。映画「沈黙」で、捕吏諸君





ハッとしてこちらをみたが  
あきらめたように、洋  
式便所に腰を降ろそう  
としたが、縛られた両  
手が邪魔になって半腰  
でモゾモゾしている。  
それを目掛けて、再度  
閃光が走る。由美子は  
怨めしげな表情が崩れ  
て、情けなそうな顔付  
になった。

「お願い、閉めて下さ  
い」

に伝授した手段である。縄の中心で蝶の輪結  
びの輪をつくり、両手に通してぐいと引っ張  
ると、自然に手首がしまる。肩へかけて一ね  
じりして胸で背後に回して手首の上で、とど  
めをさす。

「あもう、辛抱出来ないのです」

「その儘で、オシッコに行くんだよ」

由美子は、じっと私の顔をみつめた。

「縛られた儘でして欲しい……」

強引に押切ると、カメラを握って、手洗い  
へ通ずるドアを開く。トイレの扉を開き、正  
に足をかけようとした時、パッと一枚撮る。

ニヤツと笑って、ドアをしめてやる。と、  
束の間もなく、溜まり水を打つ音が、判っき  
りと私の耳をついたが、短く消えて、私は尚  
もドアの外で耳を澄ませていた。

「あもう、済みました……」

泣くような小声が聞こえる。ドアを開く。

「縄をといて下さらないと、ペーパーが使え  
ないんです」

「その儘、出ておいで」

「でも……」

「いいんだよ」

ヒョロヒョロと由美子はやや蒼ざめた顔で

出てくる。突発的な羞恥の行為に、どうしよ  
うもなく途惑っているらしかった。

長々とペーパーを引き出して千切る。

「呀ッ、いけませんわ」

驚愕の表情を尻目に、私は払拭のプレイを  
続けていた。あきらめたのか、彼女の腿の力  
はゆるんでいった。

「ひどいことなさるのネ」

「プレイだよ、これも一つの……」

「すぐく羞かしいわ」

「その羞かしさを掻き立てるべくね」

「イヤ、そんなの」

頬を火照らせて部屋に戻ると、私は急いで  
電動カメラのピントを由美子に合わせ、解縄  
の一コマをリリースで踏んでいた。

突然の私の行為に、由美子はすっかり度胆  
をぬかれ、縄をとくと、何と思っただか、慌し  
く、今一度トイレへと消えていった。

× × ×

あどけなきおさな妻は、床柱を背にして、  
しっかりと縛りつけられていた。胸から始め  
て腹部を縦断した縄は、その儘、背後の柱に  
繋がっていた。高々と掲げた両手は、柱を挟  
んで縛ってある。腋にあるかなきかの一、二  
本の腋毛が、由美子の若さを物語っていた。



それに比例して体毛も少ない方である。縄が締め過ぎたのか彼女は腰をゆすっていたが左程の羞恥をみせず、私のいうが尽に片脚をかかげ、カメラに協力していた。臀部から柱にからまった縄を軽く引くと、あどけない表情に怯えが走り、慥かに反応をみせて、おさな妻は駭きの色を泛かべていた。いつしか私の指先の一方が、みずみずしい黒葡萄の一粒をつまんでいた。

「いけません、よして……ああ、あたくし」

否定とはウラハラに、押し殺した、遠慮がちな溜息が熱く洩れ始める。片手で縄を引き、片手が一粒を愛撫する行為が続く。

徐々にではあったが、由美子の幼い吐息は熱くなりつつあった。縄を引く手をやめて、柱ごと体を抱きかかえる。私の唇が耐えようもなく彼女の肌を這って、そむけた頬に、唾液のしたたりを残して、激しく吸いついてゆく。

「ああ、もうやめてエ……あたし、叱られるわ、叱られるわ」

夫に叱られるというのか。可愛い途切れ途切れの言葉が、私の嗜虐の心に拍車をかけ、執拗なくちづけは続いていた。そのくせ、叱られるという言葉に、甘い恍惚と陶酔の響き

を感じて、ともすればよろめきかかる心と必死に斗っているように思えるのであった。

私は跪いて、由美子の両脚をしっかりと抱えこんだ。

「ああ、やめてえ、もうやめてえ」

うわ言のように唇を震わせつつ、若い肉体は歓喜にピクピクと慄え、豊かな腰をくねらせていた。

何か口走らずには居られない焦燥と、ひたむきな陶酔に没入してゆく肉体の相剋に、富田由美子は、泣く様に喘いでいた。

頃合を見計らって、縄を解くと、魂を失った忘我の姿で、ドサリと私の胸に倒れかかる。羞恥が唐突に蘇ったのか、シクシクと私の胸を熱い涙で濡らして、わけもなく忍び泣くのであった。

「いけなかったかい、御免ね——」

優しく撫でながら、耳許に口をよせて囁くと、激しくかぶりを振る。

「どうして泣いてるの？」

「きかないで、自分でも分からない……」



「可愛い子ちゃんだもの、もっと苛めてあげたい」

おさな妻は、駄々をこねる様に、身を揉みしだいて、顔を見られるのを恐れるかのように、激しく私の胸にぐいぐい押しつけてくるのであった。次々と変化する、緊縛のポーズに、いじらしくも耐えに耐えていたものがドツと堰をきったように溢れ、今はもう耐え性もなく、乙女心に似た感傷の甘さにひたっているのではなかったか。

胸に絡みつ়裸身を、そっと引き離すと、素早く後手に捻じ上げ、蝶々輪の早縄で、手の甲を合わせてぐっと引き絞り、乳房を挟んで胸縄をかけ、手首でさっと縛り上げてしまう。

昂奮のさめやらぬ、模糊とした表情で、由



美子は私にされるが俤になっていた。

縛った裸身を膝に抱き上げる。それだけで心の疼きを覚えるのか、由美子は、熱い吐息を、そっと洩らしていた。おさな妻でも、妊娠という厳肅な事実によってかちえた女の欲びは、既にその肉体が知っていた。初めて出会った私という人間の前で、崩れまいと必死に斗っていた心も、一旦プレイに突入して脆くも崩れ去った今、再びもとの冷静さに返ることはむづかしかった。いや、むしろ彼女は私のこのプレイを快く受け入れているかのようには思えるのであった。唇をよせてゆくと、未知の男臭さに困惑するように、顔をそ

むけるのであったが、あえて口に出さず、頬にくちづけにしても、彼女はそれを許容していた。

そっと正座させて、私はローソクをとり立ち上る。

点火したローソクを手に持って戻ると、固く合わせた腿に挟んで立てる。盛り上った腹部から五センチばかり離れていても、立ち昇る炎の、仄かな熱が、微かに肌に伝わるのか由美子は身じろぎして息を吸い、出張った腹を引っこめようとしていた。

そっとローソクを抜きとると、傾斜させてつやつやしい太腿に、ポトリ、ポトリと涙

訴える。

「熱くなんかない、こんなに高くから、垂らしているんだもの」

「イヤーン、それでも熱いわ」

「よしよし、じゃあ止めておこう。さあ足を投げ出して」

そういつて、私はぐいと、由美子を仰向かせると、矢庭に手にしていたローソクを歯の間に押し込む。ウッウッと悲鳴に近い声をあげたが、既に点火したローソクは、由美子の口腔を燭台として燃えていた。

投げ出した両足の前に回って、しっかり閉じて伸ばした両脚を握む。

イヤイヤという風に、激しくかぶりを振り炎がゆらめく。頑なに力をこめた腿を、私はガムシヤラに押し開こうとする。

「ほらほら、もがくと軋のしずくが顔にかかるよ。力をぬくんだよ、足の力を」

そうしようと努力する私自身、判っきりとした目的もなく、唯そうすることによって、この若々しい新妻の羞恥を剝奪しようとしていた。ともすれば、上体がうしろに倒れそうになる。それを必死にこらえて、由美子はあきらめたように、スッと腿の力を抜いた。

汗ばんだ私の手に従って、右足が壁に届き





左足はねじれて膝で折れ曲った。

唾えたローソクで口腔の奥が圧迫されるのか、垂直に伸びた咽喉が、時々ぐびりとふくられた。この可憐な肉体が、やがてもう二カ月経過すると、まぎれもなく一つの生命に呱呱の声をあげしめるのかと思うと、私の灼けつく様な直視は、神秘の根源を究明しようとするかのように、いつまでも続いていた。

由美子が何かくぐもり声で叫んだ。ハッと我れに還って声を追うと、からくも保っていた上体のバランスが崩れ、縛り合わされた両手の指先が、懸命にタタミに突きささって、

背後に倒れるのを防いでいたのであった。慌てて、背中を抱きかかえて上体を起こし、唾液に濡れそぼったローソクを、ぬきとってやる。

「ああ、苦しい。ほんまに苦しかったわ」

眼尻に涙すら泛かべて、由美子は喘ぎ声でさも苦しげに呟くのであった。

「どうして、こんな非道いめに合せるの？」

それは、なじる様な詰問の鋭さがあった。

「プレイだよ」

「でもプレイでも、もっと楽しいことだってあるでしょ。苦しいだけで、ちっとも愉しく

なんかない」

私は返答に困って、黙ってマジマジと由美子の顔をみつめる。

縛った両手を解いてやり赤く二重、くっきりと手首を染めた縄跡を、私は無心に撫でてやった。

「うちへ帰ったら、今日の事みんな、うちの人にいいますわよ」

「いいよ、構わない」

「本当に？」

「ああ、それで気が済むならね。私はこんな事を考えていた。この可愛い子ちゃんのうんだ赤ちゃんに何をプレゼントしようかなって。男かな、それとも女の子だろうか。あなたに似て、囁かし可愛いんじゃないかな。そんなことを考えていたんだよ」

「夫もよくそんなこといいますわ。でも分からないから、いいんでしょう」

「夫の精力が妻より強ければ女の子、その反対の場合は男の子だなんてよくいわれるけど当てにならない。オナカがぐんと前に突き出た妊娠は男、腰から脇腹にかけて、あんたのように、腰の辺り全体が大きくなると女だっという人もあるけど、これも当たらないらしい。兎に角、生命の誕生は神秘なものだよ。私はその神秘を冒瀆したような気持ちに、今、かられているんだ」

由美子の眸は、いつしか優しくなり、そっと私に体を凭せかけていた。

「私は女の子が欲しいの。でも夫は男がいいっていうし、困ってるの」

「無事に誕生すれば、どちらだっていいさ」

感傷的に崩れた、若い女の心は樂し易い。私はあやすように由美子の背を撫でさすってやり、その尽ぐいぐいと床の間へ押しつけて





いった。最後のプレイをやる気で――。

ベソを掻いた表情が、拗ねているようにも見えて、そのあどけなさが愛らしい。

黙々と床を背にして、大の字に両手足を上げさせて結んでゆく。易々として由美子は私の為すが尽になっている。それは自己を見失ったような忘我の境地に陥没する、妖しい媚すら泛かべたニンフの赤裸々な姿であった。

大の字に向かって、小型のバイブが始めて振動を開始する。

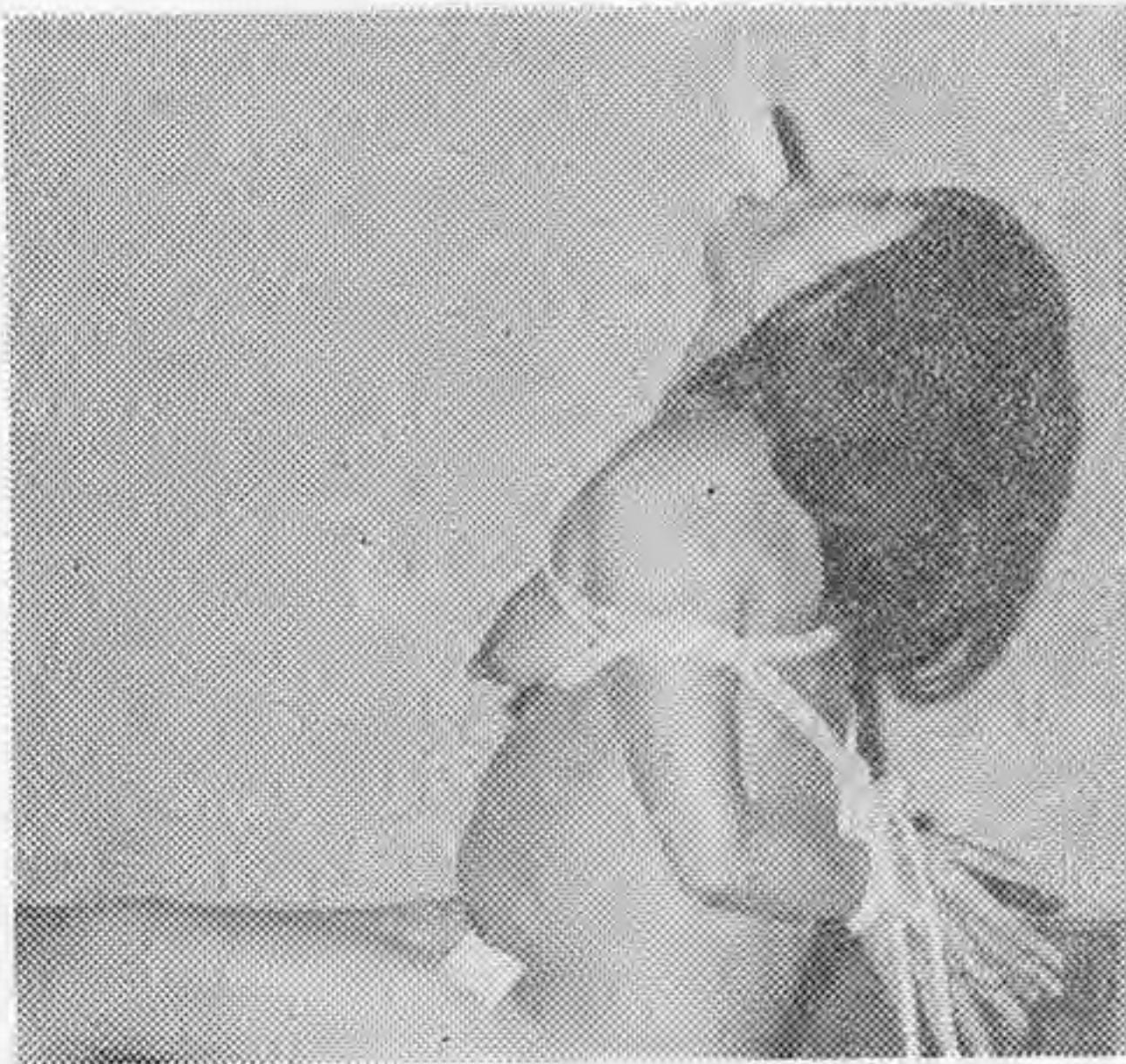
ククククと押し殺した嗚咽が洩れ、蓄めいた未熟の悦虐は、私の操縦によって、次第に絢爛と開花してゆくようであった。

嗚咽の昂まりにつれて、胸のふくらみは振幅の度合を増し、撓たう円腹は激しく俱に動揺していた。

吊り上げた両手が、激情を訴えるように、虚空にのけぞる。ニンフのピチピチ張りつめた球形は、こよなく私の視覚を刺激する。跪いて俄破と球形を掻き抱き、その豊かな膨みに私の唇は唾液を撒き散らしていた。

唇は徐々に移動する。あどけなく喜悦の呻きを洩らして由美子は、尽ならぬ五体をのたうたせた。

「やめて……」



という熱い途切れ途切れの言葉も声にならず、執拗な私の唇に、腿を憐れませて、彼女ははしたなく乱れようとする五感の疼きを耐えようとする。それを求めて、唇とバイブはあなくなろうとめく。まもなく由美子はダラリと大の字の尽、垂れ下った。

口辺を粘らせて、私も亦、課せられた義務を果たし終わったと等しい感懐で、ガクリと顎を落として、熱い吐息をはきつづける由美子を、いつまでも凝っと見上げていた。

ノロノロと立ち上って、四肢を縛った簡単な縄を解く。

抱きかかえてタタミに坐らせると、その尽私に倒れかかってきて顔を埋めると、不覚にも喜悦に悶えたわが身を愧じるかのように、

「いや、いや。いやよ、いやよ」

と、矢鱈に胸に顔をこすりつけてくるのであった。

囁くように耳許で、

「これがプレイというものだよ。彼に話してごらん、分かってくれるはずだよ」

「イヤイヤ。いくら彼にでも、こんなことというの羞かしいわ」

「いやなら、云わなくてもいいさ。さあ私の好きな可愛い子ちゃん、プレイはこれでおしまい。あたたかいお湯につかっておいで」

チュッと頬ぺたにキスして、やつらさと立たせてやった。

由美子がバスに消えたあと、私は素早く裸になると、何の躊躇も覚えずに、彼女のあとを追っていた。

× × ×

奈良から阪奈道路に入ったかかりに、洒落たドライブインレストランがある。



レストラン「フラミンゴ」の、眺望のいい場所に席を占めて、私達は仲良く椅子を並べている。既に陽のかげった若草山は暮色にそまり、背後に春日の山々が黒く続いていく。

「あと、もう二回、九カ月と臨月と、撮ってみたいなあ」

「もう怖いですわ」

「私が？」

「夢中になってなさることが……」

「そんなに怖かったの？」

「ローソクで体を灼かれるのかと思って、ド



キドキしました」

「でもあの程度なら、ダンナさんとでもやっているんだらう」

「でも気心が分かっていきますから、恐ろしくありません」

「今でも私が怖い？」

富田由美子はチョッと首をすくめ、ペロツと舌を出した。真紅のフードが、由美子を、ひとしお、あどけなく見せる。こうして坐っておれば、誰一人、妊娠八カ月のニンフとは気付かないに違いない。親子か、話の分かる

オジサンと娘といったカップルで、

私達はやっと注文のランチが机上に並んだのをシオにしばらくは食事に話が途切れる。彼女の食欲は旺盛であった。

ランチを、殆ど残さず綺麗に平らげケロッとしていた。

「ダンナさん、い

つも何時頃、帰るの？」

「七時過ぎ」

「じゃあ、もう少し時間があるね、ここからなら走って十分もかからないよ」

「でも……」

「早く帰りたい？」

「……」

「もう、縛るとはいわないよ」

「そんなこと……」

「私と早く別れて、ノンビリしたい？」

「そんなつもりじゃありませんわ」

「ダンナさんが恋しくて仕方がない、というところかな」

「意地わるですのね」

「一人でポツンと待つのがいいの？」

「でも、食事の支度しなくちゃ」

「未だ喰べるつもり？」

「ウウン、私はいいの、でも……。フッフ、今晩はあの人にラーメンでもたべてもらっちゃおかしら」

明るく笑って、富田由美子は立ち上った。あどけなきニンフは、明日の幸福を夢みて、力強く逞しく生きぬいてゆくことであろう。



アメリカのあるSM雑誌のグラビアに、鼻責めの好きな小生をゾクツとさせてくれた素晴らしい写真があった。

それは、マル裸の妙令な女性が柱に対向に結えつけられ、嵌口具を咬まされて、鎖と連結した鼻輪で鼻を上吊り上げられている凄艶なものである。その女は、もちろん後手に縛られており、太りじしの仲々の美人でもある。

その美女を責めているのはハゲ頭の男で、いやらしい笑みを浮かべ、鼻輪に直結した鎖を右手に握って、女の鼻の頭が目線の届くぐらゐに鼻孔を吊り上げている。そして左手で、女の頬に喰い込んで、嵌口具の鎖をいじっているのだ。

この嵌口具は円筒形になっていて、口いっぱいにはうばるように装着するものらしい。事実、写真の婦人はほうばるようになってその嵌口具を咬ませられ、鼻の穴は極限と思われるほど、完全に吊り上げられているのであった。

鼻責めにもいろいろあって、鼻をめくり上げたり、開孔器で横に拡げたり、鼻孔にタバコを差し込んだり等の、種々のプレイ方法が考えられるのであるが、小生はやは

り、鼻輪のような器具で吊り上げるのが、最も美しく無残な「責めのフォーム」であるように思う。

嵌口具も、鼻吊りに匹敵する感興を覚えるのであるが、なにか嵌口具というと欧米流であって、日本の伝統的「嵌口プレイ」はサルグツワということになる。しかし、小生は、布で簡単に鼻まで隠す日本式猿轡はどうもいだけないのだ。それは、責められる女の表情を隠蔽することになり、SMプレイの醍醐

## 鼻吊りと嵌口具

### わが緊縛理想像

花見鬼郎

味を半減させるように思うからだ。

嵌口とは、口を閉ざさせてものを言えなくさせることであるが、緊縛プレイにおける嵌口具装着は、単に、縛った女の口を封じるだけはその目的ではないと思う。封じるだけなら、セロテープなどでも目的が達せられる。しかし、わざわざ円筒形の器具を咬ませるプレイは、猿轡にはない性的な快感がそこにあるからといえると思う。

ある好事家の説によると、嵌口具によってM女はエキサイトするそうであるが、そうい

えば、かつてのモデル大塚啓子嬢も、布を口いっぱい詰められると、下半身が充血したと告白していたようだ。

鼻責めにおいても然りで、鼻の穴を吊り上げられた女を見ると、性的欲求を覚えるのは小生のみではないと思うのだ。顔の真中にある鼻にも快感がある、といってもいいように思えて仕方がない。

SMプレイの目的とするところは、女を完全に「緊縛」して内心の羞恥的欲求を引出すことにありそうだが、この「緊縛」というのは、首から下だけを縛ることを意味するのであるまい。後手縛りのみで満足出来るのは初歩の間だけで、

少しプレイ慣れすれば、首縄、菱縄、腰縄と、いろいろ趣向をこらしたくなるのが当然であろう。

更に、鼻責めマニアの小生としては、いくら強烈な本縄後手股間縛りを施しても、鼻や顔を責めないでは完全な「緊縛」とはいえない、といいたのである。

高い鼻筋と、ほどよく大きい鼻孔を備えた女性が嵌口具を咬み、鼻輪によって鼻孔を吊り上げられ、後手でギリギリに縛られた美体の悶えこそ最高の緊縛と思うのだ。





身も心も湿っぽくなってしまふ天の水を毎日毎日根気よく降らしていた灰色の雲もどうやら飽きがきたとみえて久しぶりの晴れ間。まぶしい太陽——。でもまだお預け。私たちには、辛い学期末の試験が終わっていないのです。

aとかbとかxとかyなんかが無情に並んで、見れば見るほどだんだんこんがらがって

続・花の女斗美たち

熱

い

肌

奮斗士 好太 (カットも)

くる。明日は最もニガテとする数学です。

「大体あの先生は教え方が下手だから……」

ぼんやり眺める窓の外を燕がかすめて飛び過ぎます。あの燕もスモッグで苦勞するだろうなあ、あたしの頭もスモッグかしら……。

頭の中がだんだん数学から離れかけている時、後ろの襖があきました。

「テルちゃん、こんにちわ」

「あら、いらっしゃい」

入ってきたのは愛子ねえさんでした。ねえさんと云ってもこの人は本当の姉ではなく、五歳年上の従姉なのです。

岡田愛子——高校バレーボール部の名アタ

ッカーとして、その強烈なスパイクとすばらしいジャンプカとで鳴らしたひとです。バレーばかりでなく、短距離選手としても一流で陸上競技部からもちよいちよい借りられたり水泳だって監督さんが「なんでうちの方へ来なかったのかなア」と嘆いたという話があるほどの河童ぶり。要するに万能のスポーツウーマンなのでした。それだけでなくて、このひとの驚くべきことは、おツムの方も一流で生徒会長を勤めるほどの行動力もありつまりスーパースーパーマン。いまに代議士くらいになるかもしれないなどと、これは母の言葉でした。おねえさんのお父さんが他県勤務の二年



間ばかりを私のところで暮らしていたことなどから、私とは本当の姉妹みたいな気持ちになっているのでした。もっとも、そのために私を叱る材料になって私をクサらせたこともあったのでしたが……。

ある点では理想のひとつであり、また、ある時は少々ケムった存在であり、要するに、こちらのその時その時の都合によって、その価値はクルクルと変化してはいたのですけれど、こうしたスーパーウーマンを身近に持っていたことに私はひそかに、そして時には大っぴらに誇りに思い、うらやましがられたのでした。もっとも、おねえさんの方では、そんな私を子供扱いするだけで、さっぱりその存在を認めてはくれなかったのです。

とにかく試験勉強に飽きていた私は、いそいそと、おねえさんを迎えました。

「アラ、お邪魔だったかしら、勉強中……」

「ううん、いいのヨ、ちょうど一段落したところだったから」

「そう、じゃあ……」

ニッコリしたおねえさんは、

「テルちゃん、あんた、すごいじゃないの」

と、いきなり大仰な、ほめ言葉です。

「ホラ、高体ヨ、こないだの……」

「ああ、あのこと……」

「あのことじゃないわヨ。あたしすっかり見直しちゃった。テルちゃんって、落ちついてるのはいいんだけど、もうすこしファイトがあったらなんて思ってたのヨ。でも、すごいファイトだったって云うんじゃないの。」右山、斗志の勝利“なんて、あたし、あの新聞記事の文句すっかり覚えてるワ」

おねえさんは、私に口をはさませず喋り続けます。

「あの相手のひと、誰にも負けたことなかったんでしょ。えらいわネ」

「まぐれだったんですわ」

「まぐれだっていいのヨ。そんな経験が知らず知らず自信をつくり上げてゆくヨ」

じっと見つめる、おねえさんの目。

「でもねエ、テルちゃんが相撲の選手になるとは思わなかったワ。あれ、ふんどしひとつで取り組むんでしょ」

「ふんどしじゃないワ。マワシって云ってください」

「あら失礼。でも、おとなしいテルちゃんがよく相撲部へ入る決心がついたわネ」

「ともだちに誘われて……、そのまま、なんとなく続けちゃったみたいなんです」

「でも、今は好きになっちゃったんでしょ」

改めてそんなことを考えてもみなかったのですけれど、おねえさんに云われてみますと練習のない日は何となく忘れものをしたような気持ちになったりするのですから、やっぱり好きということになるのでしょうか。

「ズルズルでも続けたってことは、やはり相撲というものに、あんたをひきつける何かがあったってわけよ」

おねえさんは、ちょっと考える目つきで、  
「素っ裸のスポーツなんてイカスじゃない。考えてみれば、これ以上の健康なものはないんじゃないかしら……」

そして改めてまた私を眺めながら

「それにテルちゃん、ずいぶんたくましくなったじゃないの。いまどのくらいあるの？」

「ええと、一七六の六四、六五かな」

「わア、スゴイ。あたしは一七一の六〇だから、ひとまわりずつ大きいってわけね」

おねえさんは大きな目をくるくるさせて、大仰な驚きぶりをみせていましたが、

「どう？ おもしろい、相撲って？」

「おもしろくなんかないワ。苦しいだけ。何回、止めようかと思ったかわからない」

「そうね。そんなもんよ。でも、それをがま



んしたから「栄光の座」についたわけヨ」

おねえさんは、しみじみとした口調になりました。おねえさん自身のことを思い出していたのでしょうか。

「あたしも相撲、やってみようかしら」

突然、おねえさんが云い出しました。

「ええ？ おねえさんが？」

「うん。テルちゃん、教えてくれない？」

「そりゃ……でも、ほんとに？」

私は、びっくりして聞き返しました。

「本気ヨ。テルちゃんと取り組んでみたい。

あんたが、どんなに強くなったか」

おねえさんは、おしまいの方を冗談みたいな云い方をしましたが、相撲を試みたいというのは本気のようにでした。

「どうして急にそんなこと……？」

「うん、なんとなくヨ」

おねえさんはそう云って、ちょっとテレク、さそうな笑いをみせました。

次の日曜日、もう試験の終わった私は、ほんとにやってきたおねえさんと二人、ガランとした練習場に入りました。

どうやら本気らしいと思ってはいいても、気が変わって止めにするんじゃないかしらと思っただけに、おねえさんの物好きには、

少々驚きなのでした。

人気のない、練習場の板壁にぶらさがった練習道具が人待ち顔で、誰かのタオルが一枚干されたままになっていました。

おねえさんは珍しそうな顔でキョロキョロと見まわしたり

「土俵って案外せまいのね」

などと云いながら、素足の裏で俵をそっと踏んでみたりしています。あれこれと道具をいじっているおねえさんを促して控室へ戻りともかく仕度にかかります。

ロッカーをあけてちょっと考えましたが、わざわざ来てくれたおねえさんに敬意を表して、今日は選手用の青いマワシを使うことにしました。

この部屋で裸になるのは馴れているとは云っても、じっと見ているおねえさんの目を意識して、ホックをはずす手に、ためらいを感じます。思い切って脱いで分厚い布地を前に当て、股をくぐらして腰へ一回、巻いてから「端っこを床に引きずらないように、持っていくください」

と、おねえさんに手渡しました。

「ワァ、こんな厚い、ふんどしをするの？」  
マワシを手にしたおねえさんは、とんきょ

うな声をあげました。

「こんなの締めたりして、大丈夫かしら？」

「なにが？」

「なにがって、大切なおとめのやわ肌がすりむけて、お嫁にいけないっちゃ大変だワ」

おねえさんはケロッとした顔つきで、そんなことを云うのです。

なるほどマワシは分厚い生地で出来ていますから、馴れないうちは内腿や腰のあたりがスレて痛いこともありますけど、皮がむけたら、お嫁に行けなくなるなんてオーバーもいいところ。どうもヒロちゃんと云い、津野さんと云い、そしてこのおねえさんまで、オーバー屋さんが多いようです。私は顔の赤くなるのを感じながら反撃しました。

「大丈夫です。あたしたちの先輩、みんなお嫁に行ってます。だいいち、おねえさん、お嫁になんか行かないって云っていたんじゃないかっかしら……」

私の逆襲におねえさんは、しまったと云った顔。いつまでも素っ裸で話をしているわけにもいかないので

「そいじゃ、お願いします」

おねえさんに端を持たせて、私はグイグイと締め込んでいきました。



久しぶりのマワシの肌ざわりが、あの高体の時の感激を思い起こさせてくれます。私の全身の力をこめた突っ張りがさく裂した浅見さんの胸の重かった手ごたえ……のど輪をはずされて、お互いにくずれた体勢から立ち直ったあたりのことが高速写真のスローモーションのようにゆっくりとだったようでもあり、また電光のように一瞬の間の出来ごとのようであつたりします。ものはずみみたいな勝ち方だったけれど、それが相撲のおもしろさ……「実力は実力として、あの相撲に関しては、あたしの方が強かったということになるわけだワ」

そんなことを考えていた私は、一瞬おねえさんの存在を忘れていました。もっともおねえさんの存在は、ただマワシの端がひきずらないように持っていてもらえばよかっただけなのでしたけれど――。

マワシをつけ終わった私は、これがくせになつて力足を軽く踏みながら、チラリとおねえさんの様子をうかがいました。

おねえさんは、別に驚いた表情も見せず、真面目な顔でマジマジと私のマワシ姿を見つめていましたが、

「テルちゃんって、裸になったら、何だか別

人みたいにリッパだワ」

ほめられて悪い気をする人はいないでしょうけど、いままではめられたことのない私がおねえさんの口から、この前以来、たて続けにえらいとかリッパだなどと云われ通しなものですから、感激を通り越して薄気味悪くさえ、そして、くすぐったくなってきました。

「ウワァ、あたしがおねえさんにほめられるなんて……どうしたらいいのかしら……」

「アラ、あたしだって、ほめる時はほめるわヨ。テルちゃん、ホントにリッパよ。やっぱりスポーツで鍛えた体って美しいわネ。肌なんかピカピカしてるじゃないの、うらやましいワ。あたし、こんなの見るの大好き……」

おねえさんはそう云いながら、私の背中にそっと手を触れ、そして、今度は両方の手で私のおしりをギュッとつかむのです。

「キヤア、くすぐったい！」

私が大げさに飛び上がりますと

「固いおシリしてるわ。調子のいい証拠ヨ。体の調子はおシリの形を見ればいちばんよくわかるのヨ。テルちゃんのは、ちょっと小型だけど、ピヨコンと飛び出したような形をしていて、筋肉が締まってるから、こんなのがいちばんいいのヨ。あんた、腰のパネには自

信があるでしょ？」

「まあ……ないことはないけど……」

「テルちゃんは、まだ自分の体をよく知らないのヨ。こんなこと、コーチがもっとよく指導すればいいのに……」

バレーボールのスターだったキャリアが出てきたところで、今度はこっちの番。

「じゃ、今度は、おねえさんのマワシよ」と、おねえさんを促しました。

「ウェー、裸になるの？」

「あたりまえでしょ」

「そう簡単に云うけど、おとめの素肌はそうたやすく人目にさらすもんじゃないのヨ」

おねえさんは急にそんな古風なことを云ったりするのです。

「裸と裸の真剣勝負なんです。裸を見せびらかすんじゃないの」

「裸と裸の真剣勝負ねエ……」

おねえさんは神妙な顔になって

「なかなか、いいことを云うようになったじゃないの、テルちゃんも」

「サ、よけいなこと云ってないで、さっさと仕度してくださいな」

「ハイハイ、わかりました」

おねえさんは、私の持っているマワシにチ



ラリと目を走らせ、どういう意味か、ちょっと口をとがらせ、そして、スカートのホックをはずし、スルスルと脱いでいったおねえさんは、ブラとパンティだけになったところでもた、ちょっと手が止まりました。

「ねエ、これも脱がなきゃいけないの？」

きまり悪そうな顔をしたおねえさんは、私の方をうかがうように見ながら尋ねます。

「マワシのほか何もつけてちゃいけないの」

「ヌードか、わア羞かしい」

「さア、早くして……」

私に、せき立てられて、おねえさんは

「仕方ないや、見てるのはテルちゃんだけ」

と、今度はためらいなく、上と下を脱ぎ去りました。

それは見事な裸身でした。もちろんお風呂などで見たことは何回もあったのですけれどこんな所で、改めて見るそれは、ほんとうに魅力的なプロポーションだと思いました。

スポーツで鍛え上げた、スツキリと引き締まった全体の線の上に、ふっくらとした肉づきが美しい曲線を描いていて、いかにも女性的な豊かさにあふれた裸身でした。とくに、腰からおしりのあたりにかけての円み、そしてそのデリケートな表情などは、私たちの仲

間——松田さんや津野さんたち、誰もが持たない、それは、おとなの女の人の持つ美しさだと思ふのでした。

「処女を失うと、体つきが変わるっていうけれど……」そんなことをフツと思ったりした私は、ひとりで顔を赤くしましたが、『もしかしたら……』などと考えると、私のあこがれであり、理想のひとつでもあった、このおねえさんの存在が、急に私の傍から離れてしまったような、スゴク淋しい気持ちに襲われるのでした。

そして、このおねえさんの美しい裸身までが憎らしい様な感情が湧いてくるのでした。

「ちょっといじめてやろうかしら……」

「何をそんなにジロジロ眺めてるのヨ、ひとを素っ裸にむいちゃってサ」

ていさい悪そうな顔が振り向きます。

抗議を受けた私は、そんなことを考えていたのを少しもさとられないように、神妙な顔でおねえさんの素肌にマワシを当てるのでした。ポリウームのあるおねえさんの腰に、分厚い布地が埋まり込むように小気味よく締まります。グイグイと遠慮なく締め込んで、おねえさんの悲鳴を期待したのですけれど、さすがにしぶとい、この、元スポーツウーマン

は、なかなか音を上げません。「よし、それでは……」と縦みつに引っかけた端をウンと引き上げます。

「アッ、痛いワ、痛いワ」

と、この強情やさんも、とうとう音をあげました。

「痛いワテルちゃん、もっとゆるくしてよ」うらめしそうな目で睨まれて、少しやりすぎたかなと、心の中で舌を出しながら

「アラ、ごめんなさい」

ここところは素直にあやまって

「ハイ、出来ました。立派なスタイルだわ」

と、ほめ上げます。

「アラ、ひやかさないでヨ。イヤだワ。ワア羞かしい」

おねえさんは、上気した頬を両手で押さえながら肩をすくめました。両ひじがすばんで豊かなふくらみがわずかに隠れます。大柄なおねえさんのマワシ姿は、お世辞ぬきに、なかなか見事なものでした。肉乗りのいい円みのある体に締め込まれたマワシがゆったりとした感じで、なんだか向こうの方が先輩みたいに見えます。

「ひとのふんどしで相撲をとるって、まさしくこのことネ」



落ちつきを取り戻したおねえさんは、そんなことを云いながら両手を横みつに当て、足を開き加減にした堂々たる立ち姿です。少し上気した顔が裸身を更に引き立てています。

「でも、案外悪くないわネ、この気分。なんか、こう気持が、キリッとして、ファイトをそそられるわネ」

おねえさんはそう云いながら、今度は前みつのあたりを軽くポンポンとたたきながら、ニッコリ笑ってみせるのでした。脂肪の乗り始めた、やわらかそうなおなか、おねえさんの前みつをたたくたびにプルンと軽く波を打ちます。滑らかな、ほんとにきれいなおねえさんの肌です。スッキリと整えられた前袋をはさんだ太腿も、かつての名アタッカーのおもかげを止どめて、まだ充分なたくましさを残していました。

「いい気になってるけど…」

私は舌なめずりをするような気持で、おねえさんの美しいマワシ姿を眺めながら「しごき」の手順を考えるのでした。

「みてらっしゃい。きっと悲鳴をあげてもらいますから」

そして、まず四股ふみから伸脚、屈身……とまず準備運動から取りかかったのですけど

最初のうちこそ思うように体の動かなかったおねえさんは、さすがに体がほぐれてくると昔の鍛えがモノを云うのか思ったよりずっとタフで一向に悲鳴をあげないのです。縦みつが気になるのか、時々後ろへ手をやったり、前みつを押し下げたりしていますが、案外と楽しそうな顔で、体の動きもなかなかスムーズです。上気した肌がポツと赤味がさして、一層、魅力が加わるようなのです。

「チエツ、おもしろくないワ」

少々当てのはずれた私は、次のしごきに移ることにしました。

「じゃ、今度は股割りってのを教えるワ」

「マタワリ…?」

げげんそうなおねえさんの顔をしり目に、私は、まず手本を示します。

おしりについてそのまま両足を伸ばし、左右に百八十度、一直線になるまで開きます。横みつがずり上がって、縦みつの締まり込むのがちょっと苦しいのですけど、我慢して、上体を前に倒します。背筋をまっすぐにしてオッパイの先で砂にチョイチョイとキスします。顔を上げると、おねえさんの自信なさそうな表情が目に入りました。

「さア、おねえさんの番ヨ」

「そんなの、できるかしら。以前ならねエ」

「さア、早く早く」

おねえさんの肩を押すようにおしりをつかせて、

「ハイ、足を開いて」「ワア、辛いワ」

このへんが現役とOGのちがいです。

それでも、おねえさんの体はまだかなり柔軟さを残していて、百八十度、一直線とまではいきませんが、かなりのところまで開きました。

痛そうに眉を寄せているおねえさんにかまわず、私はうしろへまわって、背中を押して体を前に倒させます。

「ヨイショ、ヨイショ」

とわざと掛け声をかけて、押します。なめらかな肌の下、筋肉の動きがてのひらに伝わって、久しぶりに触れ合う素肌の感じが私の相撲心呼び覚ましてくれるようでした。

「痛い痛い、もうかんにんして……」

とうとう泣き声をあげたおねえさんが、うらめしそうな顔で私を振り返りました。

立ち上がったおねえさんは、痛そうに中腰になったまま、

「ああ痛かった。股が裂けちゃうんじゃないかと思ったワ」



と、一生懸命、縦みつをゆるめたりしていただきます。その格好に吹き出しそうになって、『ここで笑ったりして、止められちゃ、あとの楽しみがなくなっちゃウワ』

と、我慢して

「ごめんなさいね。おねえさんならこのくらいのこと平気だと思ったもんだから……」

「あたしも体が堅くなっちゃったわネ。それにこんな窮屈なものをつけてるから……」

おねえさんは、汗ばんだ額を手でぬぐいながら云いました。別に気嫌をこわしてはいないようなので、ひと安心。

「じゃ、ひと休みしてから、ぶつかりげいこをしましょうか」

「そうね、ひと休みしましょう」

腰を下ろしたおねえさんの汗ばんだ背を、私はいがいがしくぬぐってあげたり、水を持ってきたり、この間まではしてもらった方だったのですけど、今日は又、久しぶりの付け人役です。

ひと休みして元気を取り戻したおねえさんと私は、いよいよ、土俵の中でにらみ合いました。

まず、攻めの型の指導。

足を踏み開いて、腰をぐっと落とし、両ひ

じで胸のふくらみをはさみつけるようなつもりで……と、ほんとに手をとっての指導です。

元スポーツウーマンは、なかなかのみこみがよく、たいてい一度でそれらしい姿勢をとるので指導する側としても嬉しいのでした。

でも、おねえさんの型はなんとなくバレーボールのレシーブみたいな感じがするのです。

「なんだか、バレーやってるみたいだワ」

「アラ、やっぱり。あたしもそう思ったとこなのヨ」

ふたりで顔を見合わせて吹き出したり、和気あいあいはいいいのですけれど、どうも締まりません。

「ダメダメ、まじめになんきゃ」

笑いをかみ殺して、キビシイ？ 指導。どうやらサマになってきたようでした。

「サアッ！」

待ち構えた私が、横みつをポンとたたいておねえさんのぶつかりを促します。同じように横みつをポンと叩いてファイトを燃やしたおねえさんが、激しくぶつかってきました。

なかなか鋭い踏み込み——。でもぶつかる時に一瞬ためらいが出るのか、当たり方が物足りません。押し返しながら、

「ダメダメ、もっと強くぶつからんきゃ……」

おねえさんの頬に血がのぼって、今度は激しい当たりです。大好きなおねえさんと、肌をふれ合ってスポーツできる嬉しさにちょっと興奮を感じる私でした。

土俵際まで押し込んで転がされ、クルリと

起き上がってまたぶつかる、激しいけいこ。

おねえさんの息づかいが荒くなると共に動作の方もだんだんと荒っぽくなってきました。

前髪が汗でべっとりと額に張りついて、その下から険しい目がにらみます。両わきを強く

締めて、背を丸めてぶつかるという基本も初めのうち、ぶつかっては転がされているうち

におねえさんはしゃくにさわってきたらしくそしてそれが疲れといっしょになって、型も

なにもなく、ただガムシヤラに体当たりをし

てくるという感じになってきたのでした。もう腰の備えも足の運びもすっかり忘れていま

すから、そんなのを扱うのは簡単です。適当に押させてポイ。おねえさんはひとたまりも

なく転がります。汗まみれの背中から腰のあたり、そして、ふっくりしたおしりのふたつ

の丸味に砂が塗りつけたようにくっついて、ちよっとかわいそう。でも、日頃何をやって

もかなわないおねえさんをこんなにも見事にやっつけてしまうことは、やはり悪くない気



分でした。

何回、そうやって激しい動作を繰り返した  
ことでしょうか。

投げ転がされたおねえさんは、とうとう起  
きあがれなくなってしまいました。

べったりと坐り込んで、両手をついたまま  
激しい息づかい。肩から砂だらけの背中まで  
大きく波をうつように上下しています。

しばらくは声も出ない様子。

私も、おねえさんのスゴいファイトによ  
うやく疲れを感じ出していました。最初からこ  
んな激しい練習になるなんて思っていなかつ  
たのです。転がされても転がされても、なお  
立ち向かってくるおねえさんのあのファイト  
は、さすがにバレーボール界のスター選手と  
して記録に残る活躍をしただけのことはある  
んだなあ、と私は、また改めておねえさんの  
すばらしさに胸を打たれたのでした。

「ああ、完全にのびちゃったワ。しばらくや  
ってなかったら、体がすっかりナマっちゃっ  
て……」

ようやく顔を上げた、おねえさん。

「これくらいなんか、遊びみたいなもんだっ  
ただけ……」

相変わらず強気なおねえさん。そして、

「でも、裸で取り組むなんて、なかなかイカ  
すワ。あたし、相撲が好きになっちゃった」

おねえさんの言葉に、少々あきれながらも  
一安心。あれだけ投げ転がされても、まだ止  
めないつもりだったからです。

「いきなりで、ちょっとキツかった？」

念のため、たしかめてみますと、

「ううん、こんなの大したことないワ。バレ  
ーの練習なんか、目の前が真っ暗になっちゃ  
うくらいシゴかれたもんヨ。あれにくらべた  
ら……」

と、案の定の意地っ張りな返事です。

「じゃ、まだ止めないの？」

「やめるもんですか。一休みしたら今度は本  
格的な取り組みヨ。あたしばかり転がされ  
てるなんてシヤクだから……」

「取り組んだって、転がされるのは、そっち  
だけじゃないかしら」

「なに云ってんの。テルちゃんなんか、そ  
うおめおめと敗けてばかりいないわヨ」

「アラ、そうかしら」

「生意気云うんじゃないの。テル子の、その  
鼻へし折ってやるから」

おねえさんの鼻息は荒くなります。

汗をふき、ひと息入れたあと、再び練習開

始。乱れかかったおねえさんのマワシを締め  
直します。すっかりマワシになじんだとみえ  
て、おねえさんは

「もっとキツクしてヨ」

などと注文します。上気した肌をマワシが  
小気味よく締め上げて、おねえさんの表情も  
緊張します。

型ばかりの仕切りからおねえさんがパツと  
突進してきました。パンパンと二、三発、押  
すような突くような半端な突っぱり。ゆとり  
を持って受け止め、わざと両脇をあけて差し  
手を誘い込みます。抱きつくように組みつい  
てきたおねえさんは、差し手を深く、ほとん  
ど縦みつに近いあたりを握りました。両上手  
を浅くひいた私の方がうんと有利で、せっか  
く双差しになったおねえさんの方が身動きで  
きません。それでもおねえさんは強引に吊り  
をきかせながら寄ってきます。ファイトだけ  
は立派ですけど、腕の方にばかり力が入って  
腰の備えはすっかりおろすです。寄るにまか  
せて土俵ぎわ、そこでぐっと腰を落としてこ  
らえます。おねえさんの寄り立てるのに呼吸  
を合わせてぐっと吊り身をみせますと、フワ  
リと体が浮いて、おねえさんは、ちょうど、  
しがみつくような格好でのしかかってきまし



た。おねえさんの柔らかいふくらみが、私の胸の上で弾みます。吊り上げておいて、うっちゃんのように体を入れ替えますと、おねえさんの体は簡単に土俵の外へ——。おねえさんが口惜しそうに口をとがらしました。

おねえさんに寄らせておいて、土俵ぎわで体を入れ替えて……という同じような勝負が二、三回、続いて

「あのねエ」

と私が忠告します。

「マワシをもっと浅くとした方がいいのヨ」

「マワシを……浅く？……」

「ウン、そう。浅くってのは、つまり、両わきとか、前の方を握った方が自分が自由に動けるでしょ。おねえさんのように抱きつくような格好になったんじゃ、相手にかかえこまれたみたいで動けないでしょ」

「なるほどネ」

おねえさんは神妙な顔でうなずきました。

「体が深入りしすぎたってわけネ。もっとオープンから攻撃した方がいいってわけか」

いちいちバレーボールの出てくるのが少しばかり気に障りますが、おねえさんの呑みこみの早いのは、いつもながら感心します。

次の立ち合い。おねえさんは、パッと両手

突きをみせたあと、今度はがっちり両横みつを引き、腰の構えも充分に型どおりの四つ相撲に持ち込みました。こうなっては私の方もうっかりできません。両上手を引きつけ、胸と胸をびったり合わせて、おねえさんの出方をうかがいます。例によって吊りぎみの寄り——今度は横みつをひかれていますので、なかなか強力です。わざとではなくて、今度はほんとうに追いつめられて、土俵ぎわ。強い足のバネを利かせたおねえさんの吊りぎみの寄りは、型を覚えると相当な威力を持っています。俵に足がかかって、辛うじて残しながら、両上手を引きつけてこられます。このあたりは、足を踏み開いて腰を落とした体勢なので、縦みつが割り込むのが辛いところ。とくに、マワシに馴れていないおねえさんにはかわいそうなのですけど、そんなことを云ってはいられません。

お互いの体勢が次第に高くなって、ついにはほとんど棒立ち——。なおも強引に攻め立てるおねえさんの腰が浮いたのにつけ入って私は、両マワシをさらに引きつけ、体ごと押しつけるようにしながら足をとばしました。重ねもちで転がった、私の体の下に、おねえさんのやわらかい弾みと体温が生々しく感じ

られました。

私が起き上ってもおねえさんは、そのままの姿勢で倒れていました。どこかを打ったのか、閉じた目尻のあたりに涙のようなものが光ったようでした。

私に両手を引いて起き上がらせて貰ったあと、おねえさんは、ようやく目をあけて笑顔を見せましたが、何かギコチないところのある笑いみたいなのでした。

次の勝負——。ぐっと腰を落とし、手をおろしてにらみ合った時、視線を合わせたおねえさんの目に、それまでになかった強い輝きを見て私はギクリとしたものを感じました。

おねえさんの眸の底に現われた燃え上がる様な激しいもの——。それが何であるのかわからないながら、私は身のすくむ思いがして初めて、おねえさんに対して恐怖を感じました。向かい合っているおねえさんの体がジワジワと大きくなって、のしかかってくるようなこわさです。胸の奥に冷たいものが生まれて、私は鳥肌立つ思いでした。でも、それはほんの一時の短い時間だったのです。

パッと踏み込んできたおねえさん、そしてそれをがっちり受け止めたはずでしたのに一瞬の気おくれからか、私は危く腰がくだけ



そうになって、やっと右四つに組み止めることができました。右四つは私のとくいなのですけど、おねえさんのさっきの鋭い視線がチラついて、私の動きはすっかり変テコになっているのでした。土俵ぎわまであと二、三步というところまで追いつめられている有様なのです。両マワシを引きつけようと思ってもなにか腕がコワバツてるようで力が入りません。突然、おねえさんは、せっかく引いていた両横みつをはなし、双差しに変わった差し手を深々と、私の縦みつを握ってぐいぐいと体を密着させてくるのでした。縦みつを引くことは反則です。

「おねえさん、それは反則なのよ」

と、云おうとするのですが、ふしぎなことに私の声が出ないのです。

おねえさんの柔らかい豊かなふくらみが、私の胸をぐんぐんと圧迫してきます。すっかりコチコチになった私は、棒立ちのまま、おねえさんのなすがままに、ヨタヨタとぶざまに後退しました。すると、おねえさんは、今度はからみつくような外がけ。こらえるというほどのものでもないのに、自由を失った私は、そのままどっと倒れました。さっきとは全く逆に、上になったおねえさんは、マワシ

をひきつけ、足をかけた、そのままの姿勢でしばらくじっとしていました。火照ってるような熱っぽいおねえさんの肌——。その肌を透して激しい動悸が私の胸に響いてきます。熱い息が私の首筋を流れます。なぜか、私は体を動かすのが悪いような気がして、そのままの姿勢を続けていました。

長い時間のようでもあり、秒針がひとまわりするほどの間だったようでもありました。やがて、おねえさんが、ほっとひとつ息をついて、ゆっくりと体を起こしました。

私は黙って後ろからおねえさんの肩のあたりの汗をふいてあげました。窓からの逆光に柔らかい毛先が光って、本当にきれいな肌。そして、まだおさまり切らぬ動悸に、肩口もゆっくりと上下していました。おねえさんは「ありがとう」

と振りむいて、ようやく私と視線を合わせました。ピンクに染まった頬に目がキラキラと輝いて、でも、さっきのこわかった光はどこにもなくなっていて、私は、こんな魅力的なおねえさんの目は初めてだと思いました。明るく澄んだきれいな目の人だとは思っていませんでしたが、こんなうるおいのある目は今まで見たことはなかったからです。

急に静けさが戻ってきたこの練習場が、殺風景なものに見え出しました。

「もう、そろそろ止めましょうか」

私の声に、おねえさんもうなずいて、急にクルリと私の方へ向き直って、ポツリと云いました。

「テルちゃん、ごめんね」

あやまるというよりも、ひとりごとみたいな淋しそうな、ひびきでもありました。

私は黙って、うなずきました。急には言葉がみつかりませんでしたし、何を云っても、ふさわしくないように思われたからでした。

おねえさんのあんな態度を見せられたのは確かにショックでしたけれど、そのショックのあとに残ったものは、おねえさんが一層身近なものになったという喜びなのでした。もうおねえさんはあたしを離さない——私はしびれるような嬉しさを味わっていました。

私は代わりの言葉を口にしました。

「また、ここへ来て練習しましょうよ」

「そうね。またおねがいするわ」

おねえさんの頬にまた紅がさして、和らいだ笑いが浮かびました。私はすがりつくように、その胸へ顔を埋めてゆきました。





カット・豪 城二

## 被 虐 の 旅 シ リ ー ズ

# 梅 咲 い て

由 利 美 千 子

アパートの電話は伯母ぐらいしか、知らなかった。

私は、それを葉山に教えたいと思った。

しかし、教えれば、いつかかるか、いつかかるかと、毎日待つようになる。いっそ教えない方が気がラクだった。

それにしても、私がこれほど恋しく思っていることを葉山は知っているのだろうか。

二人の間に愛を貫く道はない。

年も環境も違う。だから彼は私を愛すまいとしている。愛してはいけないと思っているようだ。

けれど、彼に縛られて、いじめられて、切ない声をあげる時、私たちはそれが私たちの愛の語らいであることを知っていた。

それなのに、いじめぬいていても、最後の線をいまだに守ろうとする葉山の愛情は、ひどく分別臭く思えた。

やっぱり私と同年輩ではなく、彼が十以上も上だからだろうか。

それとも彼は本当にアブノーマルで、女をいじめることだけで満足してしまうのだろうか。

何か他のことを考えていても、すぐ彼のことで頭が一杯になるのは、私が本当に彼に傾倒してしまったことの証拠だろう。

「リーン」

と遠くで電話が鳴っている。

何もすることのない日曜日の朝だった。伯母の店へくる客は美しいと云ってくれる。

私自身、自分が醜いとは思っていない。

そんな娘が日曜日の朝の寝床で、もう目が覚めているのに、ぐずぐずと起き上れずにいるなんて、シケた話である。

誰でもいいならドライブに誘ってくれる客もいるし、映画をみに行こうと言ってくれる人もいる。けれど、彼以外の男とただ空虚に



時をすごすなら、自分の部屋の寢床の中で彼のことでも考えている方がましである。

遠くの電話は、まだ鳴っている。

多分、管理人が留守なのだろう。

折角、誰かにデートの誘いの電話でもかけているのだろうに気の毒なことである。

そう思いながらトイレへ起きたついでに私はガウンを引つけて階下へおりていった。

日曜日の朝の鉄筋アパートの廊下は冷え冷えとして静かだった。

ただ、管理人の部屋の電話だけが、けたたましく鳴っていた。

「もし、もし」

私は受話器をとった。

「もし、もし」

男の声がひびいた。

私の体の中がドキンと音をたてた。

私は相手の名をきくのが恐いように思われた。それは葉山そっくりだったからだ。

あまりにもその人のことを思っていたのでそっくりにきこえたのだろうが、耳よりも体の奥が高鳴っていた。

「もし、もし、管理人さん、お留守なんですけど……」

私は自分の声を相手にきかせるためにわざ

と言った。彼なら当然わかるはずだった。

「美千子さん？」

半ば疑うように、その声はきいた。

「ええ」

私の胸は、もう割れそうに高鳴っていた。

「僕……わかる？」

「ええ」

「熱海にいるんだ。梅がきれいだよ。こないか」

「これから？」

「うん、飛行機だと、かえって面倒だから、新幹線でくればいい。三時間でこられるよ」

「ええ」

私は、すぐに承諾するのがいまいまいしかったが、体中が喜びにおどっていた。

「梅園のすぐ上のホテルだ」

と、彼はホテルの名を上げて

「待ってるよ」

と電話を切った。

(ああ、神さま……)

と、私は思う。

それにしても、アパートの電話を何でしらべたのだろう。

人のデートの誘いの電話かと思い、出てあげようと思ったのは善いことだったのだ。

その善いことに、神さまが喜びを与えて下さった。

宗教家なら、そういうだろう。

しかし、ああ、よかった、出てよかった、

という思いには偶然への感謝があった。

恋をすると女は宗教家になれるのかもしれない。

○

梅園は白い梅が盛りだった。

白というより薄汚れて感じられるのは真白ではなく多少黄味がかったのだろうか。

紅梅は少なかった。

売店で造花の小枝を売っていた。

彼は、それを四、五本、買って包ませた。

日曜日の梅園は彼がいくら私を縛りたくても、場所がなかった。

もし、人出が少なかったとしても、縛られてみたいような場所もなかった。

私たちは梅園をひとまわりすると、宿へ帰った。

このホテルもトイレはついているがバスはなかった。

「家族風呂へおはいりになるのなら、フロントへ、お電話下さい」

と云って女中は去ったが、私たちは先ず、



別々に一と風呂あびることにした。

お湯は熱くて、こんこんと湧き出ていた。泉のようにまわりに岩をあしらった風呂は一人で入るには大きかったが、大きすぎるというのでもなかった。

(さあ、今日は何をされるのだろう)

私はお湯を透して自分の裸体を見ながら、期待にふるえる思いがした。

傷一つない白い肌……。

キスマークも、シミもない。

この肌に、今日は何が描かれるのか……。縄……。

それは、いつでもなくてはならない私の愛の小道具なのだ。

鎖でもいい。

チャラチャラとなる鎖の音は、その音が聴覚を刺激する一種の効果をもっていた。

部屋へ戻ると、彼はもう湯上りの体を浴衣に包んでいた。

暖房がよくきいていて、丹前を着るのにには暑かった。

私は湯殿できかえてきた浴衣を、サラッと脱いだ。

部屋の温度が裸体になることを躊躇させなかった。

私はパンティもとった。

湯気の上っているような私の全裸が自分自身、美しく思われるという自信があった。

「さあ」

私は彼のそばへよると、手をうしろに回した。それが

(会えて嬉しいの)

という言葉にかえる私の媚態だった。

「よし」

彼はスーツケースから茶色い細引をとり出した。

棕櫚縄だった。

彼は私の手をうしろにくくると、縄尻を長くたらしたまま、私を抱いた。

そして私の肩にガブツと歯を立てた。

「あ……」

と、私はその痛さをこらえた。これが私達の愛の挨拶なのだ。

久し振りに会った恋人同志が、抱き合っ

て、肉までむさぼり食うケモノのようにするどい歯で傷付いた私の肌の血をなめるのだ。

「ああ……ああ……」

私はあえいで、その痛さをこらえた。

彼が唇をはなした時、私の肩にはギザギザの歯型が赤く血をにじませて残っていた。

彼はいつもなら、その棕櫚縄の縄尻を引いて、首にも、腕にも、胸にも、ところきらわ

ずぎゅうぎゅうとしめ上げるのが常なのに、私を後手に縛ったまま、畳の上に転がした。

私は、仰向いて倒れながら、そのポーズにハッとした。

(もしかしたら……?)

彼が今まで私にできなかったことを、今日こそしてくれるのかと、体がしびれた。

しかし彼は上からのしかかると、片方の肩へも歯を立てた。

「ああ……」

私は身をよじらせた。私は彼の歯が肌にくいこむのを、じっと耐

えた。痛かったが、快くもあった。私の肩は片方も又、瓶の栓をおしあてたよ

うな赤い歯型がついた。彼は、にじんだ血に唇をつけて、なめてく

れた。

それから乳の上を、はげしく吸った。両手で乳をつかみ、まるでぎとるように

かたく握られると、

「痛……」



と思わず、おしつぶしたような声が出る。

それにかまわず乳の上を吸い、乳の下を吸い、胸中にいっぱい赤い野バラをおしつぶしたような痕をつけた。

「体中、噛んでやる」

彼は言った。

室内の温度が、春がまだ浅いというのに、初夏のように暑かったので、私の肌は、しつとりとしていた。

寒い時にふるえ上っていた皮膚と違って、彼に齧りたいという、食欲に似たものを感じさせたのかもしれない。

後手に縛っただけの私にのしかかって彼は胸からおなかへと噛んでは吸った。

痛さと陶酔の入り混った快感に、私は呻いた。

それは愛の前戯のようだった。

しかし、愛撫にしては痛かった。

おなかを噛まれた時、

「ああっ……」

と、私は思わず大きな声を出したほどだった。

彼は猿ぐつわを好まなかった。

声をきかなければ、つまらないと思っ

もし、厭がる者に暴行しているなら、叫び

声も大きくて、猿ぐつわの必要があるだろうけれど、私たちみたいに、合意でそれが行なわれていれば、私は叫びたくても、他の部屋に聞こえないように押し殺す。

のどの奥で押し殺した声が、時には

「ギャア……」

というような、変な声になることもある。

それが彼にとってたのしいのではないだろうか。

彼は、回転焼を引っくりかえすように私をひっくりかえすと、私の尻にまでガブツと噛みついた。

「痛ッ……ああ……」

私はノドを鳴らした。

背中中、そんなに痛くなかった。

お尻が痛い。

体中がヒリヒリする。

「もうダメ……」

私は甘えた。

彼の歯が当たっている間が長いと、私も

「痛ア……」

と、長い間、息をとめた。

彼の口がはなれて、ホッと息をすると、又次の所へガブツと歯が立つ。

そして又、

「ううっ……」

と、私は息をつめる。

時には大きく口をひらいて、ノドチンコを上へおしあげ、ノドにフタをして声を殺し、息をとめ、時にはおなかに力をいれてグッと歯をくいしばる。

そして、私の裸体はイレズミでもしたように、体中、小さな花をおしつぶしたような痕が、赤や紫色につけられた。

そして、そうされていると、私の乳首はキユウと固くなってくるのだった。

○

夕飯前の遊びは、夕飯に何かビールかお酒をつけるかという電話でやめになった。

「今日は、ちゃんと食事をしよう」

彼は私の縄をといてくれた。

「わざわざ熱海まで出て来てくれたんだ。夕飯ぐらい御馳走しないと悪いもんね」

という彼に、私も浴衣を着て、食事の運びこまれるのを待った。

体が、まだピリピリしていた。

夕食は寄せ鍋だった。

山のように皿に盛られた魚や貝や野菜をみた時、こんなに食べられるのかしらと思った



が、結構その山を平にしてしまった。

ビールもお酒もおいしかった。

食事が済んで、それが片付けられ、寝床がとられた。

「風呂は、いつでも沸いてるの？」

彼が女中にきいた。

「はい、一晩中、沸いております。いつでもどうぞ……」

そう云って女中が去ると、

「さあ……」

と、彼は促した。

私は今度裸体になるのは、少し羞かしかった。

多分、体中につけられた痕のためだろう。

たとえ彼がつけたものにしても、シミ一つない裸体は清潔だが、痕のある裸体は情事のあとのように、みだらに思えた。

彼は、さっきの棕櫚縄で私を後手に縛ると胸へも二の腕へも、首へも回した。

手首だけの時はそう思わなかったが、胸や二の腕にまわされた棕櫚縄はチクチクと肌を刺戟した。

けれど、白い肌に、そのこげ茶色の縄は、よく似合うようだった。

まして、縄の間から出ている肌には、所き

らわず痕がつけられているのだ。私はひどい拷問をうけたあとのようにみえた。

彼は食事の間からテレビをつけ放しにしていたが、私の上半身を動けなくしてしまうとテレビの見える位置へ坐りこんで、私の縄尻を急に引っ張った。

私は両脚を、敷かれたふとんの上にのばしたまま、彼の脇へ引きすえられた。

彼は右手で私の縄尻をもって、私が起き上れないように引いておきながら、左手で私の乳首をいじった。

私は、だんだんに切なくなってきた。

彼はテレビを見て、時々、声に出して笑ったりしているのに、乳首をいじられている私は体の中の血がさざめいて、テレビどころではない。

のがれようとする、

「静かにしといて」

と、叱る。

彼自身、指の先から何か感じるとしても、私の感じ方とは違うから、五分でも十分でも私の乳をいじってられる。ましてテレビで気をそらしているのだ。

「意地悪……」

私は泣き声をあげながら、僅かに体を動か

すが、彼の指をそらすことは出来なかった。右の乳をいじったと思うと左を攻撃する。

そのうち、右手でもっていた縄尻を、自分の膝にかけておさえると、両手で両方の乳首をつまんだ。

「ああ……ああ……」

私は切ない声をあげる。

子供が手にさわるものを無意識にいじるのと同じように、彼はテレビに気をとられているようなのに、私の乳首をコリコリと、もむのだ。

「ああ……」

私は、もうたまらなくなった。

私は脚をおよがせた。

「打ってもいい、痛くして……もう……たまらない……オッパイはかんにん……もうダメ……お願い……」

私は言った。

やっとテレビがコマーシャルになった。

彼は棕櫚縄を私の脚に、ふんどしのようにかけて、ぐっと引いた。

「ああ……」

ザラザラした縄は私の大切な所へくいこんで、一瞬、体を走る刺戟があった。

私は思わず両脚をとじて、自分で縄をしっ



かりおさえていた。

乳首をいじられて、燃え立っていた私の体は、ひとりでにそれを静めようとしたのだ。

しかし一瞬の刺戟は終わっていた。

「棕櫚縄を部屋の中に張ってやろうか」

彼は云った。

「その上をまたいでこすりつけろ」

「厭……厭……」

私は首を振った。

彼の前で、自慰に似た行為をさせるなんて

あんまり残酷だと思った。

彼は立ち上って部屋を見廻していたが、適当な支えの柱が、見つからないようだった。

「立て」

と、彼は命令した。

私は座敷とテラスの間に立たされた。

後手に縛った手首へかけられた縄は、私の脚の中心を渡って、前にまわり、鴨居へかけて下へぶら下げられた。

彼は、そのさきを、ぐんと引いた。

私は爪先立った。

後手を上へ高く吊られるのではなく、一たん股間へ回った縄で吊られることになる。

彼はそうしておいて、縄尻を私の首に結びつけた。

爪先がついているとはいえ、私は鴨居から吊られているような姿になった。

「いい恰好だ」

彼は私を見た。

「しかし、こっちが立って責めなければいけないのは面倒だな」という。

「何か長い棒があると、坐っていて突っついてやれるのに……」

彼は部屋を見廻した。

床の間の隅に、掛軸をかける長い棒があった。

「ああ、いいものがある」

彼は又、テレビを見出した。

スリラーの洋画の結末が気になるらしかった。

彼はその棒で私の乳首を又いじりだした。

「ああ……」

と、私は体を泳がす。

すると、ふんどしのようにかけられた縄が



S・コレクション

『女体アラベスク』

豪

城二



私を刺戟した。

私は汗びっしょりになって、達せられそう  
で達せられない、体の中の波打つものと戦っ  
た。

「やめて……お願い……」

ただ、哀願した。

彼の棒は時々乳房からはずれる。

ほっとする間もなく、又、攻める。

「もうダメ……かんにん……」

私は身をよじった。

ひどい……。

女の体が乳首を長くいじられたらどうなる  
か知っているくせに……。

思わせぶりの棕櫚縄がどう刺戟するか知っ  
ているくせに……。

ひどい……。

私はうらめしそうに彼のあやつる棒によっ  
て、もだえていた。

○

やっとテレビが終わった。

「大分、まいったようですね」

彼は、わざと丁寧な言葉づかいをして、か  
らかった。

「さっき梅の枝を買ってきたんだが、何に使  
おうか。キミのハダカを飾ってやろうか。い

いアクセサリーになるぜ」

彼は紅梅の造花をとり出すと、その枝の方  
で私の乳の下を突いた。

「痛い！」

思わず私は悲鳴をあげた。

「いい声だね、ホーホケキョと、鳴いてごら  
ん」

「痛い……そんなに強く突っついてたら、声  
が出ない」

「鳴くんだ」

彼は邪慳に突き立てた。

「痛い……」

「痛いと鳴く、うぐいすがあるか。ホーホケ  
キョというんだ」

「ふん、それじゃあ、うぐいすらしくない。  
ちゃんと鳴かないと、こうするよ」

彼は枝のさきで、グリグリと乳の下を、こ  
づいた。

「痛い……」

私は体を、よじった。

体がゆれると、棕櫚縄がグリーンと張って私  
を刺戟した。

「さあ、鳴いてみる」

「ホーホケキョ」

「よし」

と、彼は梅の小枝を、縄の間に、はさんで  
飾った。

そして又、別の小枝を手にすると、

「さあ、もう一度、鳴け」

というなり、片方の乳房の下をぎゅうっと  
突いた。

「ううっ……」

私は鳴くところではない。痛さをこらえて  
体をよじるのが精一杯だ。

「さあ、鳴け」

「ううっ……ああ……」

彼は、私の悲鳴にはかまわず、グリグリと  
枝のさきを突き立てる。

「かんにん……痛い……」

「鳴けばいいんだ」

「ホーホケキョ」

「もっと、ちゃんと、うぐいすらしく鳴くん  
だ」

「ホーホケキョ」

「まあ、いいだろう」

そして、その花も縄の間に飾った。  
梅の造花も、まだあった。

「さあ、今度は突いたらホーホケキョと鳴く  
んだよ。いいね」

いいね、といわれても、グリグリと突き立



てられて、どうしてすぐにホーホケキョなんていえるだろう。

「痛い……」

というのが、さきだった。

「いうことを、きかないね」

彼は小枝のさきを所きらず、グリグリと突き立てた。

やっと爪先立っている私の体は、その度にゆれた。

体がゆれると、縄の間に、はさんだ造花の

梅の花びらが、私の乳首にふれた。

それは又、別の戦慄となった。

私はもう崩れそうだった。

そして私の体は花で飾られた。

しかし、ぎゅうぎゅうに縛った縄の間へ、

梅の小枝をさしこむのは、それだけ縄がしま

ることになる。

私の胸は大きく波打った。

苦しかった。

それなのに、彼は自分のアイデアをたのしむように私の姿を見あげ見おろした。

「花びらを、かきたしてやろうか」

そういうと、スーツケースの中から、絵具をとり出して、小皿でといた。

「先ず、今日は大分乳首がいじめられたね、マークしてやろう」

と、乳首を赤く塗った。

筆の穂先でなでられた時、又、私は体の中の血を波立たせた。

どうして不甲斐なく、こうも感じるのだろう。

「本当はね、風呂場へ行って、キミの体中に

## 天星社刊 ▲限定版グラビア写真集▼ 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

血をしたたらせるみたいに紅でいろどってやろうと思ってもってきたんだ。しかし、バス付でなくて残念だったよ」

「はじめから、私に電話するつもりで、熱海まで来たの？」

「うん」

紅でいろどられるのは痛くないから、そんな会話も出来る。

「いつでも縄と、そういうものを、入れてるの？」

「キミに会うつもりだったからさ」

「どうだか……」

「その言い方は何だ？ まだいじめられたいのか。よし」

と、彼は私の足首をつかむと下に引いた。

「ああ……」

私は、のどがしまって死ぬかと思った。

「苦しい……やめて……」

私は又しても彼の手の中で、悲鳴をあげるのだった。

そして、やっと、深夜の風呂につかって、いろどられた紅を流した時、私の体には、お湯ではおちない赤や紫の痣が一杯に残っていたのだった。





女

(めがみ)

神

浅羽 やすし

女

神

(1)

ひさしぶりに落ちついたわが家のシャワーを浴びたあと、素肌にバスタオルを羽織ってサンルームに入ると重田はもう、私が八美智子のナイト・ポットVと名づけた、便器に使っている耐熱ガラスの透明な大ザラをテーブルに据えて首を長くして待っていました。

「じゃ直ぐショッピングに行くわ。ハイヤーが、そろそろ来るわ。待たせたら悪いから、早いとこやっ飛ばしておうね」  
ソファのスプリングの反動を利用してピョ

ンピョンと二段飛びにテーブルの上にとびあがった私は羽織っていたバスタオルを無造作に投げすてて八美智子のナイト・ポットVをからだの下にかくします。

「たまっちゃってるから、溢れるかもしれないよ。あとのご用のほうは、帰ってからゆっくりするわ。それまでオアズケ」

重田も無言。美智子、つまり私も無言。静まりかえったサンルームのなかに、私のからだの下で、ちっちゃな滝の音がひびきだしたのが、とても気持ちよく、朝のしたくのなかで気に入っているひとときです。

「デビスさんが来るのは、こんや十時だったわね。あたし、午前中いっぱいTショッピングにいます。重田が来ないと、トイレへゆかれないんだから、午後でできるだけ早く、ここへもういちど来てね」

どうやら、滝の音も終わったらしく、かすかにポトン、ポトンという雨だれの音が、そそがれ、ルームいっぱい、特有のツンとした刺激をともなった香気が流れますが、そんなことは私にはカンケイのないこと。

ちょうど玄関に、ハイヤーの到着を告げるチャイムの音といっしょに私は、テーブルか



ら、とびおります。

「ゆうべ、少しのみすぎちゃったから、色が濃いね。アルコール分ものこってるかもしれないわ。そうそう、ビタミン剤のんだから、こっちにも栄養がまざってるかもね。ゆっくり召しあがれ」

いたずらっぽく彼をからかいながら、これから私は外出です。

彼といっしょになってから私はトイレというものを忘れました。はじめは、いやでたまらなかった、サンルームでのトイレも、いまは、すっかり慣れ、私の生活は快適そのものです。重田は、あわてて八美智子のナイト・ポットVをひきよせるのでした。

(2)

乗ってきたハイヤーを帰さずに、パーキングに回させ、運転手の土田くんをお供に従えてショッピングセンターのエスカレーターに立った私は、あらためて今日の買い物の予定を胸に浮かべました。

「肉とハム、ベーコンとバーボンウィスキーああ、そうだわ、フランクフルトソーセージを忘れたら、だめだわ」

七階までのエスカレーターを降り、階段づ

たいに屋上へあがるのは、いつものように、

「愛犬コーナー」を、のぞくためです。

「いらっしゃいませ、木戸さま。あの、御注文の首輪ができております。職人をえらびましたから、すばらしい出来あがりでございますよ」

売場主任は、私のことをよく知っており、深々と、あたまをさげます。

この売場では、今までにクサリ、手綱、戒具、鞭、犬グツワと、たくさんのお買物をしていきますから、上客扱いは当たり前なのでしょう。だされた首輪は上出来でした。

しかしペットは小鳥以外、飼ってはいけないう私のマンションですから、ふつうなら、こんな愛犬用品なんか必要ないわけです。

「イヌは何びきくらい、お飼いですか。いちど、ベンキょうのために拝見したいですね」主任は、まえにいちど、こう問いかけたことがあります。

「いいえ、専門家におみせできるほどのワンちゃんなんかいませんわ」

思わず顔に血がのぼるのを意識しながら、私は答えたものです。

しかし八専門家におみせできるようなイヌはいないけれど、ちゃんとセビロを着た、こ

とばのわかるイヌやブタなら飼ってますわ」と答えたなら、四十七くらい、頭のうすくった実直そうなこの主任さんは、どんな表情をみせるでしょうか。

いま出来あがって渡されたこの首輪だって重田とのたわむれのムードをだすために、長いクサリをつけ、彼の首にはめて、室中はもちろん、気が向いてトイレへゆくとき、入浴のときのお供に、ひっぱり廻すための買物です。

私の重田。

彼は、人間であって人間でない。私のペット。マンションの生活費を一元の不足もなく出してくれる私の忠僕です。

いつも私の足もとに這いつくばり、入浴やトイレの用事はもちろん、身の回りの世話から、口ぶえを吹けばスグその意味を解して、ジュータンに四つに這い、私のためのソファになったり、足台、たんつぼ、室内馬と、なんでもやってくれるべりなイヌ。

イヌといっても、もと私が働いていた会社の社長さんなのですから、おもしろいでしょう。これが一々トイレへゆかなくてもすむ便器の役目だって、命令すればやってくれるのですから、私の日常は、とても快適です。



私、木戸美智子。二十三歳。昨年のいまごろまでは二流どころの貿易会社の販売管理課のキーパンチャーでした。

独力で、年三〇〇億の商品を販売する会社を築き上げたワンマン社長の重田秋之助は四十八歳。惚れ惚れするような、たくましい行動力の持主です。ライバルをけとばし、かなりあくどいことを重ねながらも、着々と事業を伸ばし、現在、欧米に直接、口座を開いた取引商社が二十八社。ビルの屋上に、外人接待用の、しゃれた日本庭園までつくった、豪壮なオフィスを構え、東京本社神戸支社で合わせて百五十人のうでさきの社員を抱えるスーパーマンで、業界では一びきオーカミと、おそれられている人間です。

入社当時は、恐ろしくて、面とむかって口もきけなかったこの社長が、いまでは、私の専用便器。それも、ベッドの下にうずくまる最低の仕事に喜々として従うのだから、まったく私の現在は、幸福そのものといえるでしょう。

いま私がショッピングにやってきた、多摩川畔の国道一号線に面したこのTショッピングセンターは、一流デパートのT屋が、モーターリゼーションの将来を讀んで本格的にア

メリカ方式のショッピングセンターとして設計したというだけあって、実に豪華です。

私のいま住んでいるマンションも、このTショッピングセンターの近くにあるのですがこの店がオープンしてからは、車で混み合う都心のデパートまで一時間もかけ出かける必要のなくなったことは、とてもつごうのよいことでした。こんな郊外みたいなところにあるながら、本店と直結していますから、売場へ取りよせを命じると、商品によってはその日のうちに、家具類でも翌日には入荷し、注文者の私は、このショッピングセンターの売場に出むいて、ゆっくり品えらびができるというシステムです。

このまえ、BG時代の友だちの結婚式に招かれたときなど、招待の前日に、急に指輪とネックレスがほしくなり、

「あした、どうしてもほしいのよ。おねがいするわ」

と電話をかけたなら、たった三時間のうちに三点ずつ余分に商品が売場に送られ、その場で気に入った買い物ができたのは、まったくおどろきでした。

「お嬢さま。これが、私ども機能の生きているデパートのサービスなんですよ」

百八十万円という買い物でもあったせいか売場では主任以下が私に最敬礼で、

「お嬢さま、お嬢さま」

と、まるで上流階級の貴婦人でも扱うみたい。いいかげん、こちらも、そのような、なみの人間とはちがうのだな、なんてサツカクをおこされてしまうのでした。

それにひきかえ、きょうの買い物はお鍋とか、食料品だけですから何か物たりません。でも、あまりパツとしない買い物ではあるけれど、今夜は、わが家に大切なお客さまがあるのです。

いつもは、やってくると私の足もとに平伏する重田ですが、今夜だけは、私のマンションは、本来の正しいすがた、つまり会社の接待用の分室であり、私はホステス。そして、優雅な笑みを浮かべながら、終始ホストである重田社長のアシスタントとして、来日中のヨーロッパの貿易会社の社長、デビスさんの接待をするわけです。

そう、おわかりの通り、私が私のマンションVなんてカッコいい表現をしています。実は重田がポケットマネーで買ってくれた分譲マンションで、私は正確には、二号さん。むかし流にいうなら、おめかけです。



重田は、だいたいなお客があると、△分室▽と呼ぶマンションへ招待し、相手の好みを見きわめると、私にその好みに合った奉仕をさせて、相手の歓心を買うというやりかたで、この私を、一種のオトリ、つまり商品として利用するという、彼一流のずるかしこいやりかたなのです。

屋上の愛犬コーナーをひやかし、ふと気がむいて、冬のスーツをあつらえ、ついでにクツとネックレスなど、つごう十万円を越す買い物をした私は、そのあと地下の食料品売場に回り、この店へ今日やってきた、いちばんの目的であるデビスさんを接待するための食料品を買いととのえると、お供に連れ歩いたハイヤー運転手の顔なじみの土田くに、その食料品のバッグを抱えさせ、一とまずパーキングで待つように命じたあと、まだものたりないきもちで、あてもなく売場をブラつくうち、私は、たいへんなことに気がつきました。たいへんなこととは、トイレへ行きたくなったことです。

トイレくらい、ゆけばいいじゃないか、とどなたもお考えになるでしょうが、実は秋之助と私は、いくつかの契約で結ばれているのです。

契約。思えば、奇妙な雇用条件もあったものですが、契約をとくべつに重視する貿易の世界を泳ぐ重田社長は、口約束では信用できないと、日常すべてのことに細大洩らさず、契約書を取り交すので有名でした。

たとえば、社に出入するラーメン屋とでもちゃんと、権利、義務を明確にした取引契約を交し、一杯一〇〇円のラーメンだって契約通りに注文し、定められた方法で支払うシステムで、やくそくのオーダーは絶対、認めません。

だから、重田社長の発案で、経費節約のねらいで分室を設け（社用のバーや料亭を使うより、このほうが経済的ですから）ホステスとして、キーパンチャーから所属変えさせた私を起用するときも、ちゃんと腹心の弁護士に命じて作成させた、雇用ならびにマンション居住に関する契約書という物々しい書類にサインを求めてきたのは、当然の行為でしょう。

そして、表面的にはすんだものの、この契約書のほかに実はもう一種、私と彼だけが、こっそり取り交わした契約書がありますのでそれをみていただきたいと思います。

## 契約書

重田秋之助（以下Aと呼ぶ）ハ、木戸美智子（以下Bと呼ぶ）トノ間ニ次ノ契約ヲ結ブコトニ合意シタ。

(1) AハBニ最高ノ△ゼイタク▽ナ生活ヲ約束スル。

(2) Bハソノ代償トシテ、Aノ求メルスベテノ要求ニ応ジナケレバナラナイ。

但シ、Aノ要求範囲ハ、Bニ肉体的、精神的ニ不快マタハ苦痛ヲ与エルモノデアッテハイケナイ。

(3) Aノ権利範囲ハ大要ツギノ通り。

Bノプライバシー、スナワチ入浴、便所使用ナド第三者ニ見ラレタクナイ行為デモ、Aガ求メルトキハ自由ニ見サセルコト。

(4) Bハ便所使用ノサイソノ排泄スル汚物ノ処理ハスベテAノ管理下ニ置クコトヲ認メルモノトスル。

ヨッテAハ、イツイカナルトキニモBノ子供ヲシテトイレニ入り、マタハ室内デ便器ヲ使用スル手助けヲシ、ソノ最終処理マデ忠実ニツトメナケレバナラナイ。

Bハ入浴、便所ノサイイカナル行為デモAニ命ジ、実行サセル権利ヲ有スル。



Aハタトエソノ命令ガ、醜悪カツ汚穢、羞恥、嫌悪、不倫感ヲトモナウ性質ノモノデアツテモ、Bノ命令スルモノデアル限り拒否スルコトハデキナイ。

(5) Bノ下着処理モ前項ニ同ジトスル。スナワチ汚レタ下着、同ジク汚レタ生理的使用品ノ処理ハAノ義務トスル。

(6) AB兩者ノカンケイハ、マンションニアリテハBガ主人デアリ、AハBノ奴隷デアリ、愛犬デアリ、生体家具デアリ、時ニハ汚物入レデアリ、イッサイノ人権ハ認メラレナイモノトスル。

(7) Aノ立場カラ見レバBハ女王様デアリ女神デアル。ヨツテAハ常ニ心カラノ崇敬ヲ捧ゲ、クダサレル命令ハ神ノ声トシテコレニ従ワネバナライ。

(8) マンションハBヲ女王トスル君主国デアルカラ世間並ミノ常識ハイッサイ通用シナイ。従ツテ、ココニハ羞恥や不潔ハ有り得ナイ。有ルノハタダ女王の命令権ノミデアル。

(9) Bノ守ラネバナラヌ義務ハツギノ通りデアル。

BハAノ指定スルマンションニ住ムコト。日常Aノ許可ナクシテハ、トイレニ行ツテ

ハナラヌコト。トイレ不使用ノ証明ノタメAノ不在中ハカナラズ生ゴムノパンティヲ着用スルコト。ソシテパンティノ結び目ニハ鍵ヲカケ、ソノ鍵ハAガ所有スル。

ツマリBハ、Aノ許可ナシニハ何時間デモトイレハ使用シナイ。Aノ不在ノトキ用ヲタシタイトキハ、パンティ着用ノママ行ナワナケレバナラズ、モチロン事後ノアト始末イッサイハ絶対ニミズカラノ手で行ナツテハイケナイ。ナゼナラバ、ソノアト始末ハAノ権利ニ所属スルモノダカラデアル。サラニ、用ヲ足ストキノ場所、体位、方法ハスベテAノ指定ヲ守ルコト。当分ハトイレノ使用ヲ認メルガ、本契約成立一カ月後ニハ、室内便器以外使用デキナイ。

以上

.....

タイプでぎっしり打った契約書にサインすると、私の手に、二〇〇万円の約束手形が渡されました。

ただし、その支払い満期日は、一年後の本日。つまり、この手形は、ちょうど一年待たなければ現金化できない、正確には一片の紙きれにすぎないものですが、重田は、この紙きれをだしながら、

「これは、キミとボクの契約の担保として取っといってくれ。万一、向こう一年のうちに、キミの気持が変わってボクから逃げたり、逃げないまでも契約の条文のどれ一つにでも反することがあったら、気の毒だが、この手形は落ちない。逆に、一年間ボクに協力してくれたら、銀行へ振り込めばゴホービに無条件に金になるようにしておいてやるよ」

なんと、巧妙な条件でしようか。重田のやりかたは、いつも、この式なのですが、しかし、割りきって考えれば、こんなビジネスライクで合理的な方法はないでしょう。

契約書の中の二、三の個所には、なんとも奇妙な引っかけものがあります。たとえばトイレのくだりや、不用になった生理用品をなぜ彼の管理下におかなければならないのかなどという点でした。

でも、肉体的にも精神的にもまだ異性をしらない、きれいなからだの私にとって、ひきつづきそのままいられることが保証された以上、反対する理由はないでしょうし、最高のゼイタクと、二〇〇万円の約束手形は、やはり魅力です。軽いきもちで、この契約書を私は、手箱の奥ふかくへ、しまいこんだのでした。



## (3)

ところで、いま私はTシャツ、ピンクセンターの売場の一角で、つき上げるようにおそう便意と尿意を必死におさえています。

重田は、契約を結んだ、二た月前の日いらい、しつこく私にも契約を守るよう求めており、その条文にある、

「パンティ着用」

を、きびしく守るよういいます。

だからいまも、こうして外見からはシャツ、ピンクを楽しむ若い女性にしか見えない私が素肌にピッタリ食い込む生ゴムのパンティをはき、おなかに、ちいさな南京錠をブラさげているなど誰が想像できるでしょうか。

はじめは、この契約を守ることが、ただ苦痛でしかありませんでした。

重田は、夜でも日中でも、みずから愛車のキャデラックを走らせて、私のもとへやってきます。私が彼を待ちかねるのは、べつに愛しているからではありません。ただ、便意や尿意を解決するには、彼の手を借りなければならぬからです。

たまりにたまったものをだすために、彼の顔をみると、私は待ちかねて焦りながら、

「待ってたのよ。すぐやって」

玄関からトイレへ直行させ、パンティを締める細いクサリ錠前を外してもらったことのもどかしさ。

解放された私は、半ばむちゅうで、一段高い便座に、よじのぼり、彼の目もかまわず、解禁の想いにふける気持よき！ それだけの理由で、私は彼の出現を待ちわびるのです。

彼は彼で、

「契約だから」

とか、つごうのいいことをいいながら、目をギラつかせているのです。

でも、慣れたこのごろでは、便意も尿意もあるていどコントロールできるようになりました。

彼の顔をひと目みれば、とたんに、便意や尿意が、あたたまをもたげる反面、彼がいなくなると、何時間でも、トイレなんか、忘れてしまえるのは、われながらふしぎでした。

彼に、そのことを話したら、

「それは、条件反射といって、生理学的には正しいことなのだよ。実は、いまだから言うけど」

彼は、奇妙な告白をはじめました。

小学校二年生のときから、女子の便所をの

ぞくことに、すごく興味を抱いて、と彼は告白をつづけます。

なんのために、そんな妙なことをおぼえたのかは、自分にもわからないけれど、とにかく、女子の便所をのぞき見することに生甲斐を感じた彼は、やがて、とてもシャツキングな場面に、ぶつかったのだそうです。

「三年生のとき、担任になった久保先生は、まだ少女みたいに若くキレイな先生だった。

近よると、香料のすばらしい香りがプーンとただようんだ。この久保先生にはボクだけでなく、クラスの男子、二十九人が、全員憧れたものだった——」

ある日の午後、そっと忍びよった女子便所のひそかにあけておいた羽目板の穴に、いきなりうつったのは、クラスのあこがれのまとの久保先生でした……。

そのときのおそれと感激！ かすかにわかる特有の香気をかいだとき、もうこれで死んでもよいと思ったそうです。

そのころ、はやったミドリ色のハカマは、まだきのうのことのように目に灼きつき、そのときから彼の性癖は、いっそう根のふかいものになったのでした。

「あれから、何十年経ったことやら。実は、



キミが、あの久保先生にそっくりなのだ」

入社面接のとき、なにも知らない私が、社長席の前に立つと、ろくに質問もしないでいっぺんに採用ときめたのは、そうした理由からだったそうで、そう言われれば、私も、同時に面接した志願の人々とちがって一と言も質問されないのに、社長から直接に

「キミ、健康状態はどうかね？ わが社では忙しいから弱い人は使えないのだ。とりあえず検尿してみよう。いまはいい薬品があるから、検尿すれば、使いものになるかならないかは即座にわかる。このコップに尿をとってきたまえ」

社長室のとなりに、清潔なトイレがあり、大型のコップを持たされて、無理にそこへ押しこめられました。

うろろしながら、でも、反抗してはいけないと思い、羞かしいことですが、私はそのコップに、お小水を採ったのでした。

羞かしさと、上気していたため、コップの底にたまったのは、たった三センチほど。

「採尿を終わったら、コップはこのボックスへ入れてください」

目の前に、ちょうど牛乳の受け箱くらいの大きさのボックスがあり、そのような文面の

貼り紙が目につきます。

指示の通りに、おそろおそろ、コップをそこへ入れたとたん、ああ、おどろきます。そのコップは、スーッとむこうへ消えました。

「木戸くんといったね。びっくりせんでよろしい。検尿は、出たてのほど正確にできる」

どこかで、このトイレのなかをのぞいているのでしょうか。スピーカーから、社長さんの声がながれ、立ちすくむ思いでした。

羞かしさをこらえて、もういちど社長のデスクの前にすわりまると、

「検尿の結果、キミは健康体とわかったよ。即決だ、採用しよう。わしの秘書になってくれるね」

念を押され、うれしいのやら、おそろしいのやら、とまどったことを思いだします。

「だから、あんな契約を結んだのだよ。ボクはキミの便器の前にひれ伏すとき、きまってる久保先生をのぞきみたときの感激を思いだすのだ。だから、いいね」

そこまで言われれば、逃げることもできず条件反射とやらのおかげもあって、トイレに入っても、彼がみていてくれないと、用をたせなくなっていたのでした。

でも、今日は不覚でした。

私はTショップセンターで出合った思いがけない便意と尿意……しかし、生ゴムパンティにガッチリ錠をかけられ、かりに、彼との契約を破ってトイレへかけこんだとしても、ふつうの人のように、用をたすことはできないのです。

万一、排泄したら、それらはみんな、ブルーマースのように太ももでくられた、袋の中にたまってしまうだけでしょう。

便意はどうやらおさまったものの、尿意は相変わらずです。

ああ、くるしい！

いまは、苦痛に打ちひしがれ、しかし立っただけでは、ますますつのる尿意をまぎらすために、私は下腹に力を入れ、仕方なく売場を行ったりきたり。水曜日の午後の閑散とした売場から階段へ下りると五階でした。

あえぎながら、五階の特選売場へ踏みこんだ私は、片すみにすばらしい品物をみつけてすいよせられました。そこはスポーツ用品売場で、

「乗馬用品特選シリーズ」

とポスターのかけてあるところに、黒く、ピカピカに輝く女性用の乗馬グッズが陣列されています。



イタリヤ製の、七万円の正札つきのこのクツは、サイズは、私にピッタリのようなです。キラキラ輝く拍車は、実用品というより工芸品といったらよいでしょうか。

七万円は、問題ではありません。私がサインすれば、月末に重田の口座から引き落とされるだけですから。

それより私は、そのクツをみたとたんに、ふと、ちよっとしたことを、思いついたのです。

半ば夢中で店員さんに声をかけ、そのクツをペーパーバックに入れさせ、パーキングへかけつけたその道中のくるしさは、当分、忘れられようありません。

いまは一刻も早く土田くんが待っているであろうハイヤーにもどり、灼きつくような尿意を始末しなくてはなりません。

「ナンバー××九七、さくら交通の土田さまお客さまがお出ましです」

スピーカーが、私のコールを告げ、それから二分ほどしますと、スーッと音もなく、土田くんの運転するクルマが私の前に横づけされました。

「ねえ、ゴムのパイプないかしら。なるべく細いやツ」

ようやくの思いで、客席のシートにすわった私は、土田くんに言いました。

「これでよろしいでしょうか」

彼は、車のうしろに回り、トランクから、直径二センチ、長さ一メートルばかりのビニールのパイプをとってきてくれました。

「タンクの手入れに使ったんで、ガソリンくさいですよ」

ガソリンだろうが、アルコールだろうが、そんなことに、かまってはられません。

「ねえ、なるべく人通りの少ない道へ入ってちょうだい。あなたも、うしろを向いては、だめよ」

私は、あわててショッピングバッグの中から、乗馬グツの片方を取り出し、土田くんからうけとったビニールパイプの一端をゴムパントリーに、別の一端を、クツの中へつつ込みました。

私が、なにをしようとするのか、おそらくご推察いただけると思います。

そう。私は、はかない努力で、たまりにたまった尿を、このパイプを使って、クツの中に流してむことを考えついたのです。

もちろん、パントリーの中いちめんに、洩れたものがひろがり、うす気味わるく、肌を濡

らすことでしょうが、でも、その大部分を、クツの中へ流し込むことに成功すれば、まあまあ、我慢できるでしょう。

そして、その、なかみを一杯に満たしたクツをそのまま、そっと持って帰ったら、例の契約の第(4)条の、重田の管理権を犯したことはならないはず、と、思いついたからでした。

ゆるるハイヤーの中で、床においたクツの中へ放尿するのは、生まれてはじめてのこととて、なかなか思ったようにはゆきませんでした。したが、しかし、たまりにたまったそれは、じょじょに流れはじめます。

あとは、もう一瀉千里の形容、そのままでした。

生まぬるい液体が腰に回るのは気持のよいものではありません。しかし私の尿意は、もうリミットです。こうでもしなかったら、それこそ、膀胱をいためてしまうでしょう。

軽いきもちの契約が、こんなにつらい結果を招こうとはユメにも思いませんでした。

と申しますのは、契約を結んだあとの重田は、私の排出するものに、たいへんな執着をみせ、たとえ一滴でも、彼の承認なしにすて去ることを、絶対にゆるさないのです。



「いいか、美智子。おまえのからだでつくられたものは、ぜんぶのこらず、おれのものなのだぞ。勝手に始末することは許さんから」と、口ぐせにいうのです。

私が出したものを、どうやって処理するかは、いまさら言うまでもないでしょう。

のこらず、自分のものにしてしまわなければ気がすまないという、ものすごい欲ばり。

でも、女として、そうまで求められることは、ときには、うるさく感ずることはありますもの、そう悪い気のするものでもありません。

だから私は、彼の前では思いきり、でたらめに、

「ネエ、ご用よ！」

平然と、大きく口をあけさせたり、彼の食事ちゅうでも、いっさいおかまいなく、わざとスプ皿やジョッキを使ってやるのですが、そうすれば満足しておとなしくなるのだからかわいいものです。

せめて長グツにみたして、持って帰るのも、そうした彼の熱心さに負けたためです。

同時に私は、いくら出先とはいえ、生ゴムのブルーマースの外に流してしまうという勝手な行為は、彼と交わした契約にそむくこと

になる、と黙っていたのです。

それはそうでしょう。

契約まで結んで、手に入れようという彼の執着を拒否することは、一年後の二〇〇万円の約手を不渡りにすることになってしまいうのですもの。

運転手の土田くんは、忠実な番犬のように前方をみつめたまま、ふり返ろうとも、しません。車室内には、それとわかる香気がだんだんひろがり、長グツにそそぐ温かい水音も高まるけはいで、察しがつかないわけはないのに、さすがは運転手教育の徹底した、さくら交通の、しかもナンバーワンの彼は、いつものばあいも、客席で何がはじまろうとも、身じろぎもしないのがまるで習性になっているみたい。

その毅然とした土田くんの、うしろすがたをみていると、主人を守るシェパードを思わせるのです。

「ねえ、あたし、いまでもないことやってるのよ。みたくないかしら」

私は、なんて変わってしまったのでしょうか。わざわざ放尿するところを、それも車の中でクツの中へという、とんでもない行儀のわるさを、彼にみせたくなったのです。でも

土田くんは、

「なにをなさっても、お客さまのご自由ですよ。私は、安全運転で、せい一杯です」

「いいわよ、無理しないでも。ちょっとスピードを落として、ふり返ってごらんなさい」

「会社では、そんな差し出がましい態度を許していません。万一、会社の指導車にでもみつかったら、私はクビなんです」

「あなた、客である私の命令にそむくの？　いいわよ、それならそれで。車とめてよ。私タクシーで帰るから。そのかわり、会社へ電話して、あなたの無礼をいつけてやるからね」

「お嬢さま。それは、かまいませんよ。しかし、そんな長グツを抱いてタクシーをひろえますか。乱暴運転をやられて、なかみを座席にプチまけるのがオチですよ。いいから、今日はおとなしく、お家へお帰りなさい」

ああ、この人は、みないフリをしながら、そのじつ、私の行動を完全に知っていたのでした。ポチャポチャと、水のゆれるクツを手で抱え、ビニールパイプもそのままに、いまさらのように、私は羞かしい思いに、座席にすくんでしまったのでした。



読者ギャラリー『腰 掛 け』春川 ナミオ



(4)

「ハハハ、それはケツサクだ。しかし美智子よくこぼさずに持って帰ってくれたね。契約を守ったのは、えらい」

やっとドアをあけ、まだ室へ上りこまない私を、一と足先にきた重田はやさしく迎え、しどろもどろにわけを話す私のことばなんかきこうともせず、そういうながら、ずっしり

重い長グツを私の手から、もぎとるように取り上げると、

「さ、では、権利を行使しようか」

ああ、玄関の廊下につっ立ち、長グツを捧げるように両手で押しいたadaki、目をギラつかせながら、まるでビールのジョッキをかたむけるみたいにするのです。

「革の匂いつきで、酔っちゃうみたいだ」  
そのまま、ゴクゴクと、流しこみます。

なれたこととは言え、こうまでされては、なんだか私自身が吸いこまれてしまうみたいで、気色が悪く、すくんでしまします。

「もうひとつの方はまだかな。オレは会議で三十分しかいられないのだ」

たいへんです。というのは、条件反射で、彼の顔をみたたん、いつものように私ははげしい便意を感じていたからです。三十分しかいてくれない、と思うと、もうがまんはできません。

「出したいんだろう。いいものがある」

彼は、ゆかいそうにショッピングバッグから、のこりのクツの片方をひっぱりだして、その場に立てました。

「生ゴムの、おまけに濡れたままのはいてたんじゃ、カゼを引く。スグ脱ぎなさい。そしてついでに……」

いくら契約とは言いながら、不安定にジュータンの上に立つクツに向かって、これを使器のかわりに使えとは、あまりです。

しかし、ためらっているばあいではありません。おさえにおさえた便意が、スグそこまで迫っているのです。

へどうにでもなれ、そんなヤケ半分のきもちで、私は心を決めたのでした。



「ああ、あの頃の久保先生を思いだすなあ。これだけがボクの生甲斐なんだ。ごめんよ、美智子。へんな趣味のギセイにしてしまったなあ」

「いいのよ、社長さん。こんなことで、ビジネスのファイトがわくのなら、美智子、しあわせよ」

私は、なんだか酔ったみたいない気持になりそう答えながらポーズを、くずしません。

彼は、どっかと坐りこみ、目をすえて、じっとしています。

おそらく、あの久保先生とやらの神々しい姿体を、遠くに思い浮かべているのでしょうか。

二人だけのプライバシーという一種の連帯感のかもしれないに、私もうつとりしてしまいます。せまい玄関いっばいに、本人の私でさえハナをつまみたくなるような悪息がただよい、目をそむけたいのに、彼は、

「ウム。すばらしい！」

まるで、すばらしい芳香のなかを泳ぐ一匹の魚のようにハナをうごめかせ、さらに顔を近づけるのには、たまらない気持におそわれます。

「ペーパーはないのか」

彼は、むしろペーパーなんかないほうが、いい筈なのですの。というのには、そのほうが、いや応なく、公然と、彼の好む方法で、あと始末ができるからです。

「そんなもの、玄関にあるわけがないわ」

「そうかあ……」

「からだが冷えるわ、足もしびれるわ。なんとかしてよ」

「といっても、オレ、いまは、気がのらないんだが……」

「なに言ってるのよ。△あと始末は、Aの権利であり、義務▽でしょ。ペーパーの代りを考えるべきよ！」

そのとき、私の心中に、フト悪魔がささやきかけました。と、申しますのは、いつぞや取り交わした契約書の第七条、(私は)女王であり、女神である。重田は私から下された命令は神の声として、これに従わねばならぬ……という条件を、思いだしたからなのです。

私は、おごそかに命令しました。

「ドレイのくせに、なに寝ごといつてるの。」

女神さまの命令。秋之助は、ペーパーなんか使わずに、あと始末すること！」

とたんに重田が、のろのろと、さらに一歩

近づきました。

なにをしているのやら、私にはわかりませんし、わかる必要もないでしょう。要は△AがBのあと始末▽の権利と義務を守ることには忠実であれば、それですむのですから。

「ああ、すばらしい、美智子。命令でやるのは、とてもムードがあるな」

そのとき、私の心の中の、もうひとつの悪魔が、私をけしかけたみたいです。

「おまち、秋之助。命令はまだ終わってないんだよ。クツの中のものを、処理しておしまい」

△アツ▽と、重田は、叫びだしそんな表情を押しこそうとしました。

私は、自分ながら、そのようなおそろしい命令が、わが口から飛びだしたのには、びっくりしてしまいました。

ここ二カ月のあいだ、こうした用は、すべて、彼の面前で、くり返しやってみせてきましたが、いくら契約にあったとはいえ、その△あと始末▽や△処理▽まで私のくちから強要したことは、いちどもありません。すべては重田の一方的リードできたのです。それがいま、こうしてスラスラとだせるのは、どうしたことでしょう。



それはきつと、さきほど、私の眼前で、長グツを捧げもち、うまそうにのどを鳴らした彼の、なんともいえない苦しそうなみにくい表情をチラとのぞかせた、そのことが、逆に私の心を刺激したのにちがいありません。「いいよ。処理しやすいように女王様がサービスしてやる」

半ば夢中にとりみだした私のあたまたに、チラリと、ひらめくものがありました。

私は、そのひらめきに、そのかされ、おぞましいものを、たっぷり含んだ、その汚れたクツに、さっくりと片足をつっ込み、いきおいよく、はいてしまいました。予期したことはいいえ、その瞬間の気色のわるさ。

とはいえ、いま私がクツの中に踏みつけているのは、私自身のもの。そして、この世の中で、たった一人、重田だけが、それを管理する権利をもつ、彼にとっては、このうえなく、とおとしいものなのです！

二度、三度、私は、心の中にかげ声をかけながら、おそいかかる不潔感を追い払うように足をあげて踏みつけました。そう、まるでナマコを踏んづけたような不快感！

ヌカルミに素足で踏みこんだようなタッチは、すぐく気色が変わるく、そのくせ、なにか

痛快な感じさえするのはどうしたことでしょうか。

私は、こどものころ、赤土の原っぱにたった水たまりに素足ではいり、友だちとキャッキャッと暴れ回って、服をどろんこにしたことがあり、あとで母から、こっぴどく叱られたことを、おぼえています。いまの私がちょうど駄々っ子のそれでした。

下半身をむき出しにした若いおんなが片足だけクツをはき、床を踏みつけるところを他人がみたら、おどろくでしょう。

「秋之助。クツを脱がせるんだ」

気のせいか、足の裏や指の股がムズがゆくなり、そう毛立ってしまいます。

早く、この気味わるさから逃げだしたいという気持ちにおそわれ、私は、じれったさに身もだえました。

プラスチックの床にひざまずき、そのクツに両手をあてて、脱がせようとする秋之助の顔に、理由もなく私はプツと、つばを吐きかけてやりました。彼が改めてクツに手をかけそれがぬけ、もういちど、あたりには特有の異臭が、たちこめます。

足首から、ふくらはぎまで、自分ながら目をそむけなくなるようなひどい足を、彼につ

きつけ、さすがにためらうその顔をねらって力一杯、こすりつけてやりました。

「コラ、女王様の命令にそむくのか！」

彼の趣味で、玄関に、ルームアクセサリーのつもりの犬鞭が三本ほど飾ってあります。これは、たんなるデコレーションで、べつに使用することはなかったのですが、

「秋之助、あの鞭をもってこい！」

彼は、私の心を読んだのでしょうか。さつと身をひるがえしてその鞭をとってきます。

その中の一本を手にとった私は、

「命令が聞けないのなら」

力まかせに、彼のせなかめがけて、振りおろしてやりました。

二つ：三つ：五つ。

おんなの力とは言え、鞭の痛さはさぞかしひどかったろうと思います。

奇妙なのは、そのときの重田の変わりようです。といいますのは、クツを脱いだとたんとび出した私の素足に、さすがにためらいをみせた彼でしたが、私が力一杯、鞭の雨をふらせ、その足をつきつけますと、彼は反射的にもうためらいをやめてしまったのです。

それは、痛さのためか、それとも、自らきめた契約は、絶対に守らなければいけないと



いう信念によるものか、そのどちらであったかは、わかりませんが、日常のビジネスの面でもどんな困難につき当たっても絶対に、あとへは引かないという、彼の習性みたいなものが、そうさせたのかもしれない。

しかし、いさぎよく、私の鞭の下に屈し、忠実に清拭につとめる重田を、むしろ私は、尊敬したくなりました。

しかし、こんな遊びはもうたくさんです。便器ごっこなどというプレイは、けっして自慢にはなりません。

これを機会に、私は、彼がこれ以上、こんなつまらないことに熱中しないようにブレーキをかけてやろうと思うのです。

でなかったら、彼の社長としての品位はゼロになり百五十人の社員がかわいそうです。「やめようよ、社長。もういいでしょ。これで、おしまい」

私は、われにかえり、その足でバスルームにゆき、のろわれた片足を、ジャブジャブと水で洗いました。

さすがに、人の心のヨミのはやい彼です。どうやら私の変心を悟ったらしく、

「ウム。それもそうだな。しかし美智子。オレが、たんなる好奇心なんかで、こんなこと

に熱中するのではないことは、じきわかるよ。今夜だ。今夜、デビスさんの前で、オレは、このことをハッキリさせてみせるよ」

めずらしく、例の生ゴムのパンティに錠前をかけようともせず、彼はシャンとしてオフイスにゆくため、マンションを出てゆきました。

# (5)

「デビスさんをお連れしたよ」

予定通り、夜の十時すぎに重田は、もういちど、やってきました。

バリッとしたビジネスのためディレクター・スーツを着こなし、しゃれたシマのシャツとタイ。剃りたてのヒゲあとの青々とした、一分のスキもないスタイルです。

私は、このようにサッソーとした重田社長が、いちばん好きです。

それなのに、なぜ私のトイレや入浴に、あんなに執着をみせるのでしょうか。

その言葉のはしからは、なにか秘密があるように思われるので、いっぺん調べてみたいと思っています。

しかし、人の趣味は、さまざまですから、私はただ彼の言いなりに行動していればよい

のでしょうか。彼が、自ら丁重にデビスさんを案内したのには、わけがあるのです。

というのは、デビスさんは、わが重田トレーディングにとっては、神さまといってよいほどの人物だからです。

いまから四年まえ、どこが気に入ったのやら、彼の経営する、デビス・カンパニーは、当時まだ二流の下あたりを、まごまごしていた、そのわが社に、強力なバックアップを惜しまず投入し、全力を注いで、育ててくれたのです。

日本雑貨の買い付けに、むらがる一流商社を素通りして、吹けば飛ぶような、重田トレーディングに、目のさめるような、すばらしい条件でオーダーをくれ、今日の重田トレーディングを、専門商社として業界一流のところに押し上げてくれたのが、デビスさんなのです。ですから、重田が、たいせつにするのは、あたりまえでしょう。

何回も来日しているのに、私のような下級店員は、もちろんお顔を拝めるチャンスもなく、ただ私は、デビスという名を、耳から聞くだけでした。

そのデビス社長と言えば、きっと六十ちかい大男で、下腹はせりだし油ぎった絶倫タイ



プで、ウイスキー灼けで、ハナのあたまを赤くテカテカさせた、太いシガールの似合うおっさんだろう、などと漠然と想像してきた私に重田は

「デビス社長だよ、ご挨拶しなさい」

まじめくさって紹介してくれたのは、意外にも、すごく美しい、まだ若いブロンドの女性でした。

としては、まだ三十歳前後でしょうか、背が一七〇センチの重田より五センチは高く、目に陰があり、ハナが、わしバナなのが難ですが、肌のすき通るような、ハデな感じの美女タイプのひと。

けれど、彼女は、室内に入っても、うで組みで、つつ立ったまま、ただ私の顔をじっとみつめ、ニコリともしないのです。

ずいぶん無礼なひと、と私は、第一印象をわるくしてしまいました。

「お世話になった初代社長のミスター・デビスは半年前、なくなられた。そのあとを引きつがれたのが、このミセス・デビスだ。気の毒にご主人は、交通事故で、もうこの世にはおいでにならんそうだが……」

日本語は、読みもし、書きも、会話も一人前というミセス・デビスは、しかし、はじめ

の緊張を、しだいにときだしたようすです。

「ようこそ」

「ミチ、デスネ。アイタカッタワ」

まったく、すばらしい、みごとな発音で、私の手を固く握りながら、親しみをこめて、ほったたにチュッと唇をよせました。

「ミスター・シゲタカラ、オハナシ、キイテイマシタ。コレ、スゴク、オモシロイネ」

あっ、と思いました。

というのは、私が重田と、ひそかに取引交わした例の契約書というより、奴隷と女王の誓約書ともいうべき、あのコピーを、彼女は私の前にとりだしたからです。

「美智子。すんまへん。わけがあるんや。こんやのとは、ボクにまかしといてんか」

重田は、ふだんでも、こみ入った取引の場におつかりますと、あやしげな関西ことばまがいのことばで、ユーモラスに、商談をマイペースにのせる、巧みなやりかたをしますが、いまも、そうでした。

「デビス・カンパニーから十萬ドルのオーダーが出るか出ないかの正念場や。なあ、たのむ。ワシをオトコにしてくれ！」

恥も外聞もなくガバと床に正座して、この私を拝みます。

「仕方ない社長さんねえ。拝まれたって、そうカンタンに、なにかもオーケーはできないわ。だいいち、こんなヘンな外人はなにごとよ！」

「アタシ、ヘンナガイジンデハナイデス。デビス・シャチヨ。アンタハ、シゲタノシヨニンデス。シヨニンハ、シャチヨノメイレイニシタガイマス」

なんて憎いことを平気で言うのでしょうか。

「デビスさんに、つい契約書を取り上げられたのが失敗だった。△重田に、そんな羞かしいことを平気でさせる女性なら、ゼヒ会わせろ▽って、しつこいんだ」

「いやだわ。あれほど、他人にみせるなんてあなた自身で念をおしたくせに、それをムザムザ取り上げられるなんて許せないわ。デビスもデビスよ。早く帰ってもらってよ」

「オウ。アナタ、キガハヤイネ。コンヤハ、アタシ、ココヘトマルヨ。テツヤハ、ヘイキシゲタハ、オーケイ、シタカラ」

重田が、三日も前から、だいいじなお客だから、食事の用意には念入りに念を押し、きょうは早々と私をショッピングに行かせたのはこのミセス・デビスのためだったことがわかってきました。



しかし、どうでもいいけど、デビスの、妙に人を小バカにした態度は許せません。

「たのむ。今夜、商談に成功したら、あと五十万の約手をやるから」

と、重田から耳うちされ、

「仕方ないわねえ。でも、五十万円じゃ、いやよ。十万ドルのオーダーなら、別にボーナス五十万円ね」

足もとをみて念を押すことを忘れませんでした。

「ヨシ、わかった。カネさえ出せば、文句はないんだね」

重田は、とっぜん表情を固くして坐り直しますと、まったく予期もしなかったことを告白しました。

「実は、デビスさんは、本格的な女王さま趣味のかたなんだ。オレはいままで取引をうまくやりたい一心で、彼女が来日するたびに呼びつけられると、喜んでごきげんをとりてホテルへいったものだった」

たしかに、デビスという社長が、年に最低六回は来日していたことは、私も会社で働いていたころ、知らされていました。

「デビスさんが、大して用もないのに、二カ月に一回のわりで来日した、その目的は、こ

うなんだよ」

ホテルにかけつけた重田に、イヌの奉仕を強要したり、室内乗馬を楽しんだり、さんざん、したいほうだいの命令をくだし、苦しむさまをみて、手をたたいた。

「それだけじゃないのだ。オレが室にいる間じゅう、彼女はトイレへ行かないのだ」

なぜ、トイレへ行こうとしなかったのか、その理由は、くどく、つけ加えなくても、おわかりいただけると思います。そうです、彼女は、この重田社長の口を無理にこじあげ、平然と、命令をくだしたのだそうです。

「オレが、目を白黒させたり、嘔吐を催したりするのを見ながら、オウゴメンナサイネ。トイレノバショガワカラナカタノヨ」と、平然として笑うのだよ」

ことに、夜ふけ、ねむくてトイレへ立ちたくないときは、重田は、なくてはならない生体家具。

「トイレハサムクテイヤ。ココヘキナサイ」まるで、ほんものの便器を使うみたいに重田を追いつかい

「アア、サッパリシタネエ」

と、平気だったそうです。

白人女性プライドがたかく、男性をドレ

イ扱いにして楽しむ、いわゆるサディスティックが多いとは聞いていましたが、聞けば聞くほど、このデビスは、典型的なそれだと思えます。

「オレが、きみと契約書を取り交わしてまで便器ごっこなんか求めたのは、じつは……」

大口のオーダーをエサにホテルに呼びつけられ、スリッパで叩かれたり、頭髮につばをかけられたり、足の裏を清めさせられたり顔を踏んづけられたりと、肉体的に苦しめられるうちは、まだよかった。

「その、トイレのお供には、まいったよ。あと始末にペーパーを使っちゃ、いけないというのだ。それじゃどうしたらいいのだろう」私を相手に、そんなことを試みたのは、デビスから、ひどい目に合わされることに慣れるための苦肉の策。いうならば私は、デビスの代用品となるわけでしょう。

しかし、こどものころ、美人教師のプライバシーをのぞいたり、下地はあったのでしうか。彼が、デビスから与えられる、さまざまな残酷な仕打ちに耐えられたのも、そうした過去の経験と、私の協力があったからと言ってもよいと思います。

「魔がさした、というのだろうか、キミと、



とり交わした契約書のことを、ちょっと洩らしたら、彼女、どうしても美智子に会わせろと言いだしたのだ。会わせれば、どんなことになるか見当がつく。なにしろデビスは、相手が男でも女でも見さかいのつかないタチなんだからね」

私の肩を抱き、酒をのむデビスのほうを、うかがいながら、かきくどく重田の言葉の意味が、わかるのやら、半分しかわからないのやら。一人きげんよくデビスはウイスキーをストレートでのどに流しこみ、ムシャムシャとハムをたிரらげ、まるでメスのライオンと

いった感じです。

「ヘイ、シゲタ」

彼女は、ブロンドをゆさゆささせながら、まっ赤な顔をして、太い声で吠えました。

重田が求めに従って、あわてて彼女のかたわらに、にじりより、その口もとに耳をよせました。ざんねんながら、語学力はゼロにちかい私には、ことばの意味はまったくわかりませんが、重田が、さっと青ざめ、表情を固くしたことから、デビスが、なにか無理難題をいつけているらしいのが、わかるような気がします。

「美智子。きいてくれ」

青い顔を、重田はこちらへむけました。

「きいてくれ」というなにげない、そのことばは、しかし、容易でない意味を秘めたものであることを、まもなく私は、いやというほど、知らされることになるのです。

「美智子に、いつもシゲタにやらせる、トイレ代わりの行為をさせたい。彼女がオーケーしたら、今夜この場で、十万ドルのオーダーを出す。そのかわり、彼女がノウと言ったら十万ドルはキャンセルだし、これからの取引は、いっさいやめると言ってるのだよ」

なんと、ものすごい交換条件もあったものでしょう。そしてまた、なんてひどいことを私にさせようと、たくらむ二人でしょう。

「たのむ。デビスに見すてられたら、会社は倒産だ。オレは、いいとしても、この寒空に百五十人の社員と、その家族は、路頭にまようことになる。なんとしても、美智子、デビスさんの命令をきいてあげてくれ」

プライドをかなぐりすて、その場に土下座する社長は、まったく真剣な表情です。

「ミチ。コレヲミナサイ。ユウガノウトイツタラ、コレガモノライウヨ」

ああ！ デビスは、いつのまに手にとった

## ☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対ししても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。



のやら、例のカベ飾り用のイヌ鞭をきつく握りしめ、私の眼前に振り廻すのです。

デビスが、えらいいきおいで、私にとびかかってきたのは、その直後でした。

からだにしみこんだ、葉巻たばこの香りとウイスキーのアルコールと、香料と、かなりつよいワキガの、ミックスした彼女の、ぼつてりした、あたたかい重量に、顔面をはさみこまれて息のつまりそうな私は、とっぜんおそってきた生温かいものの流れに、キングヨのように、ただ口をパクパクさせて、あえぐだけでした。

どうやら私は、巧妙なデビスのリードに巻きこまれ、いやいやながら、彼女の暴力の下に屈したのでしょうか。

いままで、さんざん重田に向かって強要してきたことを、逆にこんどは私が受け身で、させられるとは皮肉です。

でも私は耐えました。

重田社長のために？

いいえ。

百五十人の社員と、その家族のために？

いいえ。

私は私自身のために、美女の鞭の下に屈したのです。トイレへのお供と、その後始末を

命ぜられたのには、抵抗を感じましたがしかし耐えました。鞭が痛かったからではありません。はじめは不快でたまらなかったトイレのお供が、実はすばらしく、おもしろいものであることが、わかってきたからです。

重田が、ひごろ執念のように私に求めたのは、やはり、そのスリルに魅入られたからにちがいありません。こうして私は、三日間、デビスのドレイになりつづけたのでした。

# (6)

あれから半年たちました。

本国へ帰ったミセス・デビスから、正式の招請状をうけ取った私は、喜んで彼女の国へ渡る決心をしました。

というのは、デビスはすっかり私がお気に召したとかで、本国へ呼びよせ、シスターとして、めんどろをみるからと、重田に二十万ドルのオーダーを無条件でよこし、その純益から一千万円を、渡航の支度金として、私にくれる指示をしてくれたのです。

重田にはかわいそうですが、実は私自身もミセス・デビスの徹底した女王ぶりと、ドレイの調教に魅入られ、はじめて会ったあの日から三日間にわたる滞在の中に、そのドレイと

しての感覚と、喜びを骨に叩きこまれ、いまではもう一日も早く、女神さまの足の下に踏みつけにされたい気持で一杯の私です。

家財や衣料は、すっかり整理し、いまの私の持物はスーツケースが、ただ一つ。パスポートが下りしだい、ミセス・デビスの待つ国へ向かいます。英会話は、ぜんぜんダメですが、ハドレイにことばは不用だから、絶対に英会話のレッスンなんかやってはいけないというミセス・デビスの指示で、おそらく私は永久にむこうでは口をきくこともなく、そして永久に日本へ帰ることもないでしょう。

今夜、重田と会って、さいごのわかれをすることにしています。日本の思い出に、今夜だけは、ミセス・デビスに負けない女神と化して、一と晩じゅう重田を責め、さいなみぬいてやるつもりです。それが、せめてもの、彼へのプレゼントでしょう。

いまとなつては、一刻もはやくミセス・デビスの国へ飛んでゆきたい。そして、あの、残酷とも、不潔とも、狂気とも表現のしようもない女神さまの足もとに、ひれ伏して、思いきり聖なるものを、この顔に、からだに、浴びせかけてもらいたい……。そんなきもちだけに私は生きているのです。

(完)



## 残酷シヨート・シヨート



## 首 吊 り 綺 譚

小 倉 幸 男

森へ通じる町はずれの小径を、とぼとぼと歩いて行く、みすばらしい姿の女がひとり。まだ十九の娘、アイ子だった。

ある事情で職を失い、下宿からも追いだされ、しばらく続いた売り喰い生活で身の廻り品はすべてなくなり、唯一の財産ともなったハンドバッグすら、ひったくりに強奪され、今夜のねぐらはおろか、ペコペコの水腹をどうするアテもない。美しかった顔は蒼くやつれて、まさに死神につかれた姿である。

そよ風にすら吹きとばされそうな傷心の足どりで歩むアイ子の手には、どこで拾ったのか荒縄が一本にぎられていた。

森には、太い横枝を持った木が何本もあった。アイ子はその内から手頃の一本を選んで台座にする石をその下に運んだ。

「まだ生まれてから二十年にもなんないのにちよっぴり惜しい気もするけど。まあ、少しは面白いめもしたし、もういいじゃん」

石の上にあがって高さを測ってみる。

「ちようど良さそうね」

横枝に、拾ってきた荒縄を掛けて輪を作って、ちよっとひっぱってみる。これなら自分の体重ぐらいでは切れそうにないと思うと、アイ子は、その荒縄の輪にちよっとキスをして、本心から願った。

「ウマク締めてよ、ネ」

両手で輪を拡げて頭を入れ、首にかかる縄

を調節した。

「オッケイ、これで石を蹴って、手を離しさえすりゃあ一巻の終わり。じゃあネ」

誰にともなく、内心でバイバイをしたアイ子の足先に力がこもった。

「ジャスト、まって、モーメント」

突然に後ろから声がかかって思わずアイ子は蹴りかけた足の力を抜いた。

せつかくやりかけた事を邪魔されて、プツとふくれた顔を振り向けたアイ子の眼に、同年ぐらいの女の姿が映った。みなりも粗末でアイ子と似たようなもの。

「止めないでよッ」

吐き捨てるように云ったアイ子の言葉に、その女は静かに首を振った。

「ウウン、誤解しないで。止めるんじゃないわ。ただちよっとお願いがあるのよ」

「お願い？……あのネ、わたしネ。これから死ぬので、ちよっといそがしいんだけど……」

アイ子は顎でずれ掛かった縄の輪をおさえて、鼻の下を指の背でちよっとこすった。彼女が困った時に出るクセである。

「じゃ手短かに話すけど……」後ろの女は傍へ寄ってきた。「あなたはもう要らないでしょうから、その着ているオンボロ服や靴、私にちようだいよ」

「な、なんですって？」

アイ子は思わず首を荒縄の輪から抜いて、



平然と見上げている女を凝視した。

「ボロッチイけど、全部売ればパンの三つや四つぐらいにはなりそうだもん」

女はアイ子のスカートの端をつまんでみながら云った。アイ子は頭にきた。

「呆れた。いいわ、欲しけりゃあげるわよ。」

「わたしがバイバイして剥ぎとれば……」

「だめよ、下着が汚れるおそれがあるもん」

「えッ。下着まで？……じゃあんた、あたしにマルハダカで死ねと……」

「ちょっとの間だから、寒くはないと思うんだけど、どう？ 駄目かしら？」

カッカとなったアイ子は、いきなり、とび降りて、無言で、さっさと着ているもの一切を脱いで一つにまとめ、女に向かい合った。

「サ、あげるワッ。持って行きなさいよ。でも、こんなヒドイことさせられる訳を聞くぐらいの権利は、わたしにあつてよ」

女はペロツと舌を出して肯いた。

「じつは私、死ぬつもりでここへ来たの。でも、あなたが先客でいたでしょう。だから首吊りってどのくらい苦しむものか参考に見せて貰うつもりだったんだけど、お腹の虫がぐうぐういい出して……。で、どうせなら、せめてパンぐらい喰べてからと思ひなしたってわけなのよ。ネ、わかってよ」

女は少し済まなさそうにした。

「そう。なるほどね」

アイ子には、女の気持がわかるような気がした。自分も最後のラーメンぐらいは喰べてから死にたい。……そうだ、とアイ子は咄嗟にひらめいた考えに笑みが浮かんだ。

「わかったわ」

「じゃあ、いいのネ。素裸でも同じよ。着てたって、すぐに素裸にされて解剖されちゃうんだから。ネ」

女は、まるでパンにありついたように、ひとまとめにされたアイ子の着ていたものに手を差し伸べてきた。

「ちょっと待ってよ。あんたとわたしとは全く同じ状況にあるらしいわネ。だったらあんたとわたしが入れ替わったっていいわけよ」

「なんですって？」

今度は女のほうが、びっくりする番だ。

「ねえ。賭けましょうよ、最後のパンを」

「それ、どういうことなの？」

「つまりね、ここで死ぬつもりで二人が戦うの。どちらか相手を締め殺したほうが、その身ぐるみ一切イタダキっていうわけよ」

アイ子の提案に、女はしばらく考えこんでいたようだったが、やがてキッパリ云った。

「やりましょう？」

○

上衣はもとより、シュミーズ、パンティ、ブラジャー、ストッキング、靴まで、相当にくたびれた着衣一切がまとめられて、アイ子

が首吊り用の台にしていた石の上に、二ツの山にして並べられていた。

その前のちよつとした空地で、二つの若い裸身が、くんずほぐれつの激しい争いを展開していた。たった今さっきの初対面同士、お互いに名も知らぬままに、粗末な相手の衣服を賭けて、一食を目指しての殺し合いだ。

むしゃぶりつかれて倒れたアイ子の乳房がドシンと腰を落した女の尻に押しひしがれて悲鳴をあげる。めちゃくちゃに締め上げてくる女の太腿の力は、空腹のアイ子の腹を余計に細く絞り上げる。夢中で体をよじって倒れ掛かる女の脇腹に噛みつく。悲鳴と共にゆるんだ太腿から逃れながら、その脛を抱えてネジ上げる。とたんに女の手で髪の毛がぐいぐい引っぱられる。痛さの中にハズミをつけて髪を握られたまま突き上げる。その拍子に逆に組み敷く形になったのを幸い、女の乳房を力まかせに掴んでヒネル。グツとそり返った女のノドが見えた。髪はひっぱられたままだが、乳房を攻めた手をずり上げてノドを掴む。しめた！ アイ子は夢中の中でそう思った。ありったけの力をその手に集めた。とたんに下腹に激しい一撃を感じて、自分が何をしているのか分からなくなった。女の必死の反撃が、膝蹴りとなって炸裂したらしい。

荒縄の輪をブラ下げた横枝を持つ木のちよつと前辺りで、組み合い、掴み合ったままの



二人の若い女の裸身が、しばらくの間は動かなかった。

やがてノロノロと動き出したのはアイ子のほうだった。

ボーツとなった頭を振り、掴まれたままの髪の毛を、むりやり女の指を押し開いて抜け出し、ホツとして見直す女は、眼を見開いたままだがビクともしなかった。

「勝った！ ああ、ラーメン」

アイ子のノドがゴクリと鳴った。目の前にラーメンの湯気が見えたようだった。

「あんたが、あんなこといわなきゃあ、こんなに喰べたく思わなかったのに……」

アイ子は無意識で敗者のノドに足をかけ、全体重をかけて立ってみた。まだ柔らかな足裏の感触が、グリグリと奇妙な変化をアイ子に伝えた。

「アラ、首の骨が折れたらしいわ」

そう思いながら、アイ子は尚も降りなかった。少しも恐い感じがなかった。

「戦国時代だったらクビを斬り落とすところだわねえ。悪く思わないでよ、約束だから」

アイ子は、一城を攻め落とした武将の気持であつた。

「さあ、ラーメン、ラーメン。もし高く売れたらチャーシューメンも……」

うまそうな匂いまで思い出しながら、よろける足を賭け物に向けたアイ子は、石の前ま

できて大いに慌てねばならなかった。  
「無いッ！ ああ、ラーメンが無い！」

○

思いきって蹴った。グリーンと頰に強いショック。コキッというような音がした。目から耳から、鼻から、パツと一度に火花が咲いたかと思うと、勿ち息苦しさが襲ってきた。

「自殺、人殺し、首吊り、ラーメン」

苦しみの中でアイ子はそんなことを考えていたようであつた。

「バンザイ、とうとうゴリンジュウね」

アイ子はそんな声を聞いたようだったが、もう確かめることも出来ず暗黒の闇にのめりこんで行った。

「オールヌードの首吊りさんか。フッフ」

ブラリと吊り下ったアイ子の裸身の横に近づいたのは、十七、八の第三の美女だった。

両手で抱えているのは二人分の衣服類だ。

ブランと下ったアイ子の裸身を、ジロジロ観察しながら第三の美女は、まるで生きている者に話しかけるように喋り出した。

「あたいネ、始めからすっかり見てたんよ。あたいだってアンタ達と同じサ。もう逃げる

ともなくなつてサ、死ぬつもりで来たんだけどサ、首吊りは鼻汁やヨダレを垂らしちゃってサ、舌もペロンとなっちゃってサ、そのうえに失禁とかでババッチイもん垂れ流しちゃってサ、あたいみたいな美人でもサ、みら

れたもんじゃなくなるっていうことだからサあたいどうしようかなって迷ってたんよ。そこへアンタが来て始めかけたもんだからサ、見学させてもらおうと思ったのにあの騒ぎでしよう。オナカ減つてんのに待ち兼ねてたんよ。ネエ、ちょっとアンタ聞いてる？」

第三の美女は、アイ子のへのの辺りをちょっと突いた。アイ子の裸身がフラリと少しばかり揺れた。

「あらアンタもうくたばっちゃったの？ 首吊りって簡単にいっちゃうのネ。チイとも騒ぎもしないでサ、顔もきれいなままじゃないのサ。ババッチイもんは？……おや、なんにも流れてないしサ、あれ、嘘かしらね。まあこれから出るんかも知ないけどサ、こんなに簡単なら絞首刑なんてヘツチャラね。だったら、自分で絞るか、サツのおっちゃんに絞ってもらうか、もう一度、ゆっくり考えるとしようかねえ。とにかくこの服を売ってラーメンにでもありつかなきゃ。ペコペコだもんネエ。じゃね、ゴチソウサマ」

○

森で発見された二人のうら若いオールヌード死体は、謎のままに種々の話題のネタになったが、一年後、十九才で絞首台に昇ったあの女が、受刑直前に打ち開けた告白により、その不可解な謎が解けたのであつた。

(おわり)





## 第六景 代役者

淑は姿見に向かって最後の点検をすませると、ブラジャー、ガードル、ストッキング、そしてスキャンティを着け、さらにフリルの飾りも仰々しいイブニング・ドレスを着け、踵の高いヒールを履いた。そして再び姿見を見た。

「大変に、お美しゅうございます」

部屋の隅で控え待ち構えていた小間使いはいった。

「ありがとう」

―― 歎びの育つ館

紳士たちのための

人間浄瑠璃

宇 光 仙

(下)

カット・ユミヒコ N

淑は、姿見の中に映る小間使いに向かって答えた。

淑は自分の肉体に自信を持っていた。淑が初めて男を知ったのは一年程前のことだったが、男は淑を離さなかった。その男は現在『歎びの育つ館』で調教師を勤めているが、以前は小説を書いていたのである。

端的に申すなら、淑は金で自分の肉体を男に与えたのであった。

そのことは、淑にとって何の抵抗も覚えないうことであった。

そもそも淑は中学校を卒業するなり、正田

みな子という評論家の家へお手伝いとして上京してきたのであったし、そんなことから、これといった才能も資産も何もない身分の自分を、将来においても守るためには、金を貯えることが一番だと淑は思ったのであった。

淑は、評論家の家へ居候した評論家と縁のある幸子という女性が、家の雰囲気や塗

りかえ出した時にも、びくともしなかった。淑にとって、他人の秘密をつげ口することは性に合わないことであつたし、秘密を守ることによって報酬をえることは、好ましいことであつたと、いわなければならなかった。ま



た淑は自ら進んで彼女らの性戯に加わった。そして、そのことによって、報酬を受けた。

淑は、他人のすべてを信頼してはいなかったし、また信頼するよう、努力するつもりもなかった。そのことの苦渋は、父がいい例であったと思う。父はお人好しであったがゆえに、心悪い者の口車に乗せられ、一家破産におい込まれたのである。

淑は絶対に人を信頼しようとは思わなかった。淑は相手を充分に調べ、間違いなく報酬が手に入ることを見きわめてから、すべてに応じた。例えば今夜の一件にしても、そうである。もっとも今夜は調教師の口添えがあり、彼をいくばくか思慕している淑にとっては、断われないことであった。そのことは、淑の他人を信頼しないという主義と、実に矛盾することであった。しかし淑は、つきつめて考えることをしなかった。自分の強い意志が、くだけそうになったからである。たとえ嘘にせよ、自分で自分を暗示にかけ、その暗示によって自分が行動し、そのとばかりを自分が受ける分には、他人に対して迷惑はおよばないはずである。

ところで、小間使いの先導で今、淑が通された部屋は、だだっ広い感じのする一室であ

ったが、そこで淑はどうしたものかと、うろたえ気味の黒衣夫妻とKと、Kに背後から抱き止められている理加と、さらに理加の足元にチャーリーを見た。

四人と一匹の相方は、淑が部屋の中に入る少し前に沈黙を始め、それは淑が入ってから三分程、続いた。

「さあ奥様。お部屋にお帰りになるのです」

小間使いは、理加にいった。Kは理加を解いた。理加は倒れるように小間使いに抱きとめられた。

「これはすべて、ご主人様の奥様への愛がそうさせたのです」

小間使いは理加を説得した。理加は嗚咽しながら、小間使いと共に歩行を続け、そして部屋から消えていった。

「これはお見苦しいところをお見せいたしました」

Kは淑にいった。

「その心に思うところを露にする<sup>あらわ</sup>ことは、陰にこもること以上に快いことですわ」

淑は微笑みながら答えた。

「そのような関係においてのみ、人間同志の心の触れ合いによる強い絆が生まれるものとわたくしは思います」

「ありがたいお心です」

Kは淑に一礼した。Kの頭が上がらない内に、

「お時間がございません」

と黒衣の男がKに催促した。

Kは黒衣の男を見た。しかしKは黒衣の男の目を見入ることはできない。網目の蔽い<sup>かき</sup>がそのことをさまたげるせいであった。でもKは、黒衣夫妻に対する初対面の時に、悪い印象を持っていなかった。その理由で、黒衣夫妻が悪企みをしているとは考えなかった。

「彼から、今夜のあなたに要求される行為について、お聞きしているとは思いますが」

とKは調教師を、よそよそしく『彼』として扱いながら、淑に尋ねた。

「恥知らずな行為である、という以外のことは何も存じていません」

淑は嘘をついた。でもKは、そのことを見抜いていた。そして、淑は理加と同類の女であると思った。ところが、そのことはKに対して勇気を与えた。相手が仕事とわりきって「恥知らずな行為」を、平静を装ってなしてくれるなら、これ以上の嬉しいことはない<sup>こと</sup>とKは思う。

「何も存じておられなくても、あなたにその



ことを耐えられるという気力だけでございますなら、結構この上ないことです」

Kは淡々と伝えた。

「わたしには気力が充分あります。しかし身体の方が耐えられるかどうかは、わたしの知ることのできないことです」

淑は悪怯れることなく答えた。

「身体は充分に耐えられます」

とKはいうなり、黒衣夫妻を見た。

「そろそろ、手短かに事を運んでいただきたい。何しろ紳士たちは、気が苛立っていますんでね」

「はい、ご主人様」

黒衣の男は、かしこまった。

「でも、いかなる手筈にしてよいものやら、手前どもには、とんと見当もつきません」

「これは弱音を吐かれる」

とKは意外な顔になった。

「先程の理加と同じ手順でよろしいのです。その手順を積み重ねて行く内に、次になすべき手順が頭に浮かぶことになるのです」

「はい、ご主人様」

と黒衣の男は一層、かしこまった。

「では、すぐにそのようにいたします」

淑の内心は、おだやかではなかった。チャ

ーリーの存在によって自分が求められる行為が何であるかは明らかであった。もっとも、そのことについては調教師より端的に説明されていた。

だが淑は、半ばそのようなことは現実に取りえまいと、たかをくくっていたのである。ところが、これがどうも本当のことであるらしいのである。淑はチャーリーよりは人間の方がましであると思った。中でも調教師が好ましいと思う。しかし淑は、そのような期待をいだくことは、いたずらに自分を悲しくさせることに気づいた。金のために煩い、金を得て、人の愛に煩うことになりそうだと思った。金への執念が衰えるのを淑は感じた。そこで慌てて無理矢理に貪欲さをかきたてる。「わたしは金にとりつかれているんだ」と思い込む。

「君の相方は、チャーリーという可愛い奴である。君はその相方と愛を成立させなくてはいかん。そして、その成立の一部始終を、四人あるいは五人の紳士たちのために、余すところなく明らかにしなくてはいかん」

調教師は、淑の心の内の思慕の情を、ねじ伏せるかのように説明したものであった。

それは、つい三時間程前のことであった。

それゆえに今でも淑は、その様を鮮明に思い出すことができる。淑はここで、自分が思慕の情を積もらせることになったきっかけは、調教師の自分をはねつけようとする冷たい仕草ゆえではないかと思う。

「君はその際に、実に手慣れている風にあう必要がある、いかなる時にも冷たさを失ってはならない。その冷たさが、紳士たちに救いようのない芝居の一かけらの明るさとなり、紳士たちを、はっとさせることになるのである。紳士たちは君とチャーリーの愛を見たいのではなく、君とチャーリーという恥知らずな組み合わせが見たいのであって、それは権力の抑圧に対する、はかなくむなしい、うさ晴らしでもある」

淑は調教師に触れてもらいたいと思った。しかし調教師は淑の目だけを見つめ、淑を悲しくさせた。

「トルストイは、唯一の正常な性は、はっきりと子供を生むことに向けられた性であるという。しかしこの世は、きれいごとだけでは生きてはいけぬ。人間は、かすみを食って生きていくことはできない。そのことを、まづ肯定すべきである。君とチャーリーの愛は大局的には不自然な愛ではないのだ。まして



君は、この世を率いる知能にはめぐまれていず、したがって君が生きて行くために必要な金は自らの生命をさいなんで捻出しなければいけないことは明白である。そのために、君が君の優れた肉体に手をつけることになっても、誰が非難できよう。それは知能と対等である。知能の低い者の、唯一の武器であるのだ」

「あなたは日本人離れた素晴らしい肢体をお持ちになっておられます」

淑は、調教師とは異なる声に驚いて、目を開いた。

黒衣の女が淑の前に立って、しげしげと、あたかも色男を見つめるような濃やかさで、見入っているものであった。

「ついに始まったか」

と淑は呟いた。

「チャーリー、またやり直しである。でも気を鎮めよう。お嬢様の顔をよく見つめながら気を鎮めよう」

黒衣の男がいうと、女の方は淑の背後に回り事務的にイブニングの裾に手をかけた。

「お嬢さんは理加奥様より、まだお一つ年下と聞いています。そうです、チャーリー、お嬢さんは十六歳なのよ」

淑は女の手の水際立った動きに、女がこのようなことに慣れているなと思った。五分とたたない内に淑のスクランティはカーペットの上にほうり出された。淑は、タキシードで身を固めたKが苛立たしげにタバコを喫う様子を、正面に見た。Kは淑が演じ始めた田舎芝居が、気に入っていないようであった。しかし淑は、芝居の出来には全く関与できず、その理由から残念であった。すべては黒衣夫妻が、とり行なうのである。淑は二人にすべてをまかした人形にも等しかった。もっとも淑は口を封じられているわけではなかったから拒絶の意志を告げることは許されていた。でも淑は啞のように唇を噛み、二人のなすことに、すべて同意した。その理由は明らかでなかったが、そのことによって報酬をふいにするということが頭にあった。でも淑は根底にあるものは、もっと外のことであるような気がした。

黒衣の男が部屋を出て行った。すべては女一人が行なった。女は淑を膝立ちにさせた。

唾液のしたたる舌が、共演者の匂いを記憶し始めた。

「慌てずになさい。チャーリー」

と女は相方に命令した。しかし相方の舌の

動きは間をおかなかった。

「いけません」

と女は片手で相方を制した。すると相方は悲しそうに頭を左右に振った。

淑の意識は全く、めくるめくものとなっていた。虫の息に近くさえあった。淑の感動は高まり始めた。目がくらみ出した。

ところが突如、その頬が音を立て、淑のくらみ出した目を明瞭に引き戻された。

「勝手なことは許されません、お嬢さん」

女の声が冷たく響いた。

淑は、ぶたれたことが腹立たしかった。しかし、そのことを言葉にしなかった。

「自ら酔うことなど邪道です。あなたの相方が、あなたを天国へでも地獄へでもお連れしてくれるのです。その時は、もう一時間とたたない未来なのです」

と女は、淑の耳元でいった。

淑はチャーリーを見た。チャーリーは淑を見ていなかった。黒衣の女の網目の裏にある目の光を見ていた。

## 第七景 演技者たち

三味線の音が物悲しく陰にこもり出した時に、黒衣は頭を上げた。しかし四人の紳士た



ちからは黒衣が男か女か、また何を企んでい  
るのかも知ることができなかった。

黒衣は唄った。それは男の張り延びのあ  
る美声であった。紳士たちは目を細めるよう  
にして黒衣を注目した。

「人の世は泡抹にも等しく候」

黒衣が、まずそこまで唄うと、一息を入れ  
るかのよう三味線が強くなり、その音の上  
に黒衣は滑り込むように乗った。

「ならば一夜といえども

すべてを忘れたや

その酔いなしには

いかほどの心の落ち着きも

得られはいたしませぬ候 えい！

ことごとくうせてしまえ 光め

欲しいのはそちではない

求めるのはそちではない

そちの顔を垣間見ただけで

嘔気を覚えるぞ」

黒衣を照らし出していたスポットが部屋の  
入口の方に移動し、そして、そこに一人の目  
にマスクをかけた若い女性を明らかにした。  
四人の紳士たちは彼女がKの妻であると思  
いはしたが、一方では違うようであるという疑  
問も残った。いずれにせよ、紳士たちにとっ

て、そのことは重要なことではなかった。な  
ぜなら、紳士たちが求めていることは、めく  
るめく一時を生み出すことであつたからであ  
る。

「静けさが、闇が漂いし候

失われたはずの生命が目を開き

身体をもたげ候

蘇り出す過ぎ去りし日々

その腕の中で今一人

おなごが息を吹き返し候

その名を人は悦楽と呼びし候」

黒衣は、闇の中にうずくまった状態で唄っ  
た。スポットの中の女は、努めて表情をなく  
しているかのように、あたかも人形のように  
じっとしている。紳士たちは、女の背後に人  
影を認めた。その人影は、更に新しい黒衣と  
なった。闇の中の黒衣は、つつつと女の  
背後に近づき、つまり二人の黒衣は、女の背  
後に群れをなした。三味線がやみ、部屋の中  
には沈黙が完成した。

女の脇をかためた二人は、互いに調子をと  
るようにながら、女を歩かせた。女は二人  
の指示した時のみに歩を運んだ。表情はなか  
ったが、マスクの中の目だけが輝いていて、  
そのことは紳士たちに異様な想いを与えた。

自由を束縛されているな、と紳士たちは思  
った。スポットは他の一つのスポットに近づ  
いた。その時になって紳士たちは、女がKの  
妻でないことに気づいた。しかし、そのこと  
は紳士たちにとって好ましいことであつたし  
何かしら自由なふるまいを約束されたような  
嬉しさでもあり、何一つの手加減を必要とし  
ないだろうと思つた。

赤い円形の台の上に女は上がった。むしろ  
上がられたというべきであろうか。女は、  
すぐに身体を屈めさせられ、右手はイブニン  
グの裾をたくし上げさせられた。赤いガード  
ルと黄色のストッキングが純白を主体とした  
イブニングの下から露わになった。紳士たち  
は一樣に気を引きしめ、眼は一樣にスキャン  
ティをつけていない婦人に集中した。

紳士たちは女を、かなり年若いと思つた。  
もしかしたらKの妻以上に年若く、十五、六  
歳かも知れないと思つた。そのことは紳士た  
ちを非常に気分よくさせた。

黒衣たちは、女に台の上に腰を落とさせ、  
半ば足を投げ出させ、右ひじについて寝そべ  
るような形にした。

その時に、完成していた沈黙が破れた。三  
味線が弦を強くはじき、音は湿りを帯び始め



た。そこで最初からの黒衣が唄を続けた。

「どなたもこなたも目を閉じては  
決してなりませぬ候

悦楽の女神が女神の名誉にかけて

行なう仕草は 生娘の着換え時と違い

目をそらす必要はつゆありません候」

他の黒衣は、腰に吊り下げた袋の中から小冊子を取り出し、女に与えた。その小冊子は北欧のポルノ・グラフィであった。紳士たちにとって、その手の小冊子は初めて目にするものであった。だから紳士たちは女の仕草と同様に、女の手にした小冊子にも目を回す必要が生じ、その点から紳士たちは、きわめて忙しくなった。

小冊子は『宝石箱から進った宝石第三号』

であって、その表紙絵は、渡された女のみならず、紳士たちかなりの衝動を与えたことはまぬがれない。簡単にまとめるなら、その絵は宝石箱にとって異性であるところの女性の、最も女性的な緻密さの大写しである。

女は照れたようにすぐに表紙をめくった。

すると第一ページには、絵の具がなぐりつけられただけで、何かしら抽象的な雰囲気をもし出したキャンバスに絵筆を走らせている画家が登場する第二ページにはモデル二人が

着衣の恰好で、一人は腰を落とし、一人は立ってポーズをとっている。第三ページになると、雲行きがあやしくなってくる。第四ページになると、二人の女は画家によって上着をとらされていることになる。そして以下のページを重ねる都度、単的な行為を明快に表現する絵の連続となった。

小冊子を与えた黒衣は、そのことを見越して、女の左手を導いた。黒衣の動作も事務的であるなら、それを求められた女も事務的であり、それらのことは、紳士たちが、本来であるなら息のつまるような状況へ追い込まれることを、まぬがれることになった。

「女神は濁りきった宝石から生命を形成し

その酔いの中で、

懐胎することをもくろんでいし候

かといえ、女神を罵倒してはなりません

女神を娼家のベッドに

くくりつけてはなりません

と先程からの黒衣は慎重な咽を紳士たちに伝えた。しかし紳士たちは唄を聞いてはいなかった。三味線の音すら、かすかなものであった。それでも黒衣は唄うことをやめなかったし、三味線も響きをとめなかった。

「女神は美しくその肢体は

着衣においてそこなわれ候

絹のように美しい肢体は

衣装をかなぐり捨てて初めて知らされ候

それを卑猥と決めつける者は

かたくなな者だけです

美は欲し することに人は酔い

時の流れの速さを忘れるのです」

女は身体を起こした。小冊子は素早く黒衣が袋の中にしまい込んだ。女は肢をひきつけた。その肢を黒衣が押えた。黒衣は続いて女のドレスに手をからめ、女から剥ぎ取った。女は赤いブラジャーとガードルに、黄色いストッキングだけの無防備な状態で、赤い台の上に固定されたのであった。黒衣は女の演ずるべき次の動作を導いた。すると女は、全く機械じかけの人形のように小さく動作を演じ始めた。紳士たちは注意を払った。

「中世のフランス騎士たちが帰城した際には

王妃が自ら上半身の露なヴィナス

となられる 王妃にならう貴婦人たちは

打ち揃い ドレスの裾をからげる

騎士たちはその計らいを満足する

裾をからげた六百十人の貴婦人は

騎士たちの餓えをえぐる」

唄う黒衣の声は候調を欠き艶を持ち出す。



“ここに煩う女神は

その貴婦人の生まれ変わり

その美は六百十人の貴婦人より

かき集めたものゆえ

男の目を奪わずにおかない 女神よ

すべての宝物を

隠そうとしてはなりません

そのことにより男たちの

戦さ疲れをはじけ飛ばさせるのです”

女の演技は見栄も外聞もなく自由にふるまい始めた。そのことを認めた黒衣は、女に、例の袋から直径四センチで長さは三十センチ程もある、真新しい蠟燭を与えた。女は求められた演技をためらいなくしとげる必要があった。

紳士たちのある者は、女の不法さを見習ったのか、台に這いずり寄る者までが現われる仕末であった。一人がいわば一つの紳士的暗黙の協定を破ると、それに続く者が現われついには、四人共に台に這いずり寄ることになった。

女の演技は、そのことによって影響を受けることは全くなかった。紳士たちは、生唾を飲み込んだ。

“女神の悲しみは男の悲しみとなり

欲びは欲びとなる それゆえ女神は  
微笑み続け 男を元気づけなければ  
なりません”

唄う黒衣は冷静、かつ沈着でもあった。

それにしても三味線と黒衣の呼吸は、実に一致していた。それゆえ三味線を弾く者は、この部屋のどこから、演技者、とりわけ唄う黒衣の口の動きなり、息の荒さを、観察しているのかも知れなかった。しかし紳士たちにとって、そのことは、とんとわからぬことであつた。しかも紳士たちにとって、どうであつてもよいことでもあつた。紳士たちは黒衣が唄うところの「女神」にすべてを奪われつつを抜かされていた。

“しかし女神とて神の子 人の子

女神のご機嫌をうかがい立てることも

時としては必要となる

今宵はそのことに最も適した夜と見る

されば声を高くして

女神のお気に入り招かねばなるまい

その名は数多く 選択は困難をきわめる

それでも選択せねばならない

女神はそのことを求められている”

三味線は激しく高まりを見せた後に、下降を始め、その後うねうねと上昇を開始し、

“チャーリー

チャーリー”

と黒衣の声は、その三味の上に乘った。三味は上昇を重ね、黒衣の声も裏声まで上昇した。その時に突如として、犬の鳴き声が外から近づいてきた。新しいスポットは部屋のドアに流れた。そこに眼を誘導された紳士たちは思わず尻ごみをした。

「Kが発狂したのではあるまいか」

と紳士たちは思う。

「度が過ぎたことである」

と思う。そのことは、また演技者たちについて、いえることであつた。しかし、どうしたとか、演技者たちは一向に平静であつて、それゆえに紳士たちを震え上がらせた。

新しい役者は尾を振って女神に近づいた。

そのことのために紳士たちは台から後退しなくてはならなかった。なぜなら、相方は相方にふさわしく、女神を正面に見る位置に移動してきたためである。

“女神の様を見て お気に入り悲しむ

お気に入り女神に両手を上に

かかげ上げることを求める”

黒衣の唄に合わせて女神は、両手を上にかかげた。



「お気に入りは

煩わしき物を女神から取り除く」

と黒衣が唄い、事実、相方は蠟燭を口に咥わえ、それは直ぐに、側にいる黒衣に渡された。

「女神は相方を手招く」

と黒衣が唄い、その唄通りに手招かれた相方は、両前足を台の上にあげた。

「女神は さあ おいで

と相方を導く」

と黒衣が唄う。相方は後ろ足まで台の上にあげ、ことを認められた。

「女神のご機嫌はこの上なくなごむ」

と黒衣が唄い、女神はブラジャーを取る。

「さて さて と女神は相方に命じる

女神はくるりと身体を回転させる」

と黒衣が唄い、唄通りが現出した。

紳士たちは舌を巻く。この眼前の状況の醜悪さを別として、よくもここまで手なづけたものだと思心する。人間顔負けであった。

その時に女神の側に控えていた黒衣が紳士たちに近づき、

「タキシードを脱ぎ捨てなさい」

と命令した。

その声は女の声であって、そのことは命令

の内容と同様に紳士たちを驚かしたが、今紳士たちはこの場の雰囲気に乗っていたし、そのことから女黒衣の命令に応ずることに、たいた抵抗を感じなかった。

紳士たちは女黒衣によって、一列に整列させられた。女神は紳士たちの感情の変化を余すところなく見つめることができた。その時悲しげな相方の、長く尾をひく悲鳴に似た唸りが部屋に流れた。

## 第八景 慈みの心

相方が黒衣の男にうながされて部屋を出て行くのを、淑は依然として台の上にあって見送った。

淑は、相方の演技が首尾よくなかったことを、今にして思えば幸運に思う。また、顔面にマスクをしていることも淑を、ほっとさせた。たとえ眼前の紳士たちと街で出会っても彼らは自分に気づきはしないだろうという確信があった。

「それにしても」

と淑は思う。

「相方が首尾よく演技できなかったのは、わたしのせいであろうか」

と淑は思う。淑は相方のことを余り知って

はいなかった。先程はその故をもって不首尾に終わらしてしまい、それは淑を残念に思わせた。とはいえ、それはいわば少女的好奇心というべきものである。

その時に紳士たちは、トレプリンカの皆殺し収容所で母親たちが子供たちを連れて死のガス室へ向かう放列に似せて、部屋から出ていった。そうである。紳士たちの心は重かった。紳士たちはKを憎しんでさえた。なぜなら今自分たちが見せつけられた田舎芝居は度を越したものであった。それでも紳士たちにとっての救いは、相方が不首尾に苛立ち、結局は思わぬ時に幕がおろされることになったことである。だからといって、紳士たちの心の中に傷跡が残らないことにはならなかった。紳士たちは、一様に得体の知れない雰囲気、シミを洗い去るべく、浴室へ向かっていった。

「ああ、いやなものを見せつけられた」

と紳士たちは思う。

一方、暗い部屋であることを利用し、特種ガラスを利用して、事の一部始終を伺っていた者がいた。その彼らは、Kと理加と小間使である。

「わたしだったら、きっと首尾よく演技でき



たはずだわ」

と理加は思う。理加にとってKの企みは理解できないこともなかったが、それならば初めから代役者を立てて、芝居の半ばで突如中止させるなどという不自然さを作って欲しくないと思う。だが理加はここで、その理由からKとの間がうまく行かなくなるとは考えなかった。それは、すべて理加自身の心の持ち方一つに左右されることであった。Kは離婚したいと申し出されても、顔色一つ変えず快く受け入れるに違いなかった。

その理由の一つとして、小間使いの存在があげられた。Kは、むしろそうなることを望んでいるかも知れないとさえ、理加には思え出した。すると、

「絶対に離婚などしてやるものか」

という考えがこみ上げてくる。それは理加の女としての執念でもあった。正直に告白するなら、常日頃において理加は、小間使いが多少けむたい存在であると思っていた。心なしかKと小間使い、いやKと先妻は、自分をダシにして弄んでいるようにさえ、思えないこともなかった。

理加は、顔面に汗を浮かべ、銅像のようにじっとしている淑を見入りながら考えた。

「タキシードを着込んでいたって」

と理加は心の中で呟く。

「心の中では何を考えているのか、わかったものではないわ」

と吐き出す。それはKのことであった。

三人はKを中心にして立ちつくしているのであるが、その間隔は五十センチ位ずつはあった。その間隔は初めから正しく保たれていたが、今、小間使いがKに近づくことにより崩れた。

小間使いは自分が下着をつけずに、黒色のワンピースのみであることを利用して、Kに契約以外の愛を希望させるべく、挑発してやろうと心していた。第一に小間使いは、Kの目が異常に燃えていることを闇の中で見抜いていた。彼女はKの前に立ちふさがるようにしながら、背面の一部で軽く触れた。その試みは、予想通りのKの反応を得ることができた。

「あの娘のために、何かをしなくてもよろしいのですか」

小間使いは何気なくいいながら、もたれかかるようにKに体を預けた。

「手筈は打ってあります」

とKは答えながら、倒れかからんばかりの

重量ある物体をむしろ歓迎する気持ちに動かされた。

理加は横目でそのことを確認した時に、小間使いへの怒りにも似た嫉妬を覚えた。

「どんな手筈か教えていただけますか」

と小間使いは、理加を意識しつつ、Kの反応に自信を持って、挑発に輪をかけることに意を注いだ。

「ほら、ドアの方をご覧ください」

とKは答えた。

ドアが開いた。そこに一人の青年が現われた。理加は、

「調教師だわ」

と小さな驚きにも似た呟き声をあげた。

「あの青年はどなたですか」

小間使いは尋ねた。

「娘にとっての恋人です」

とKは答えた。理加の目は、ミラー・グラス越しの調教師に注がれた。理加は無意識のまま、右手の人差し指を唇にはさみ、それを噛んだ。

淑は調教師をスポットの中に認めた時に、何かの間違ひではないかと思った。調教師とはつい四時間程前に会ったのであるが、その時は彼は今夜の夜会に出席するとはいつてい



なかった。だが、それはまさしく調教師であった。いや、恋しい人であった。恋しい人は黒づくめのタイツを着けている。それは館に在る時の恋しい人の制服でもあった。淑は恋しい人、その人だと思った。

「それにしても」

と淑は、自分の何かしら不作法な恰好が気になった。身体をすくめてしまおうかと思うが、いまさら意識の上で身づくろって、恋しい人の気分をこわしはせぬかと心配になる。

恋しい人は、スポットの中で両手を上にあげ、その両手の間を鞭で結んだ。淑は打たれると心を、ときめかせた。そのことは、今夜の何かしら、すっきりしない可笑しな倒錯性の世界に一片の清涼材となるような気がする。淑は、恋しい人がやさしい笑みを見せるのをしかと目にし、心のうずくのを押さえることができなくなった。

「シャワーは熱すぎはしませんか」

とKは、小間使いを受止め、支えとなることに主力を置きつつ尋ねた。シャワーは、調教師が笑みを見せた間もなしに、女神の頭上に降り出した。

「いいえ。完全なる電子技術を信頼すべきですわ」

と小間使いは目を細めながら答えた。

「それはよかった」

とKは軽うなずいた。

小間使いとKとは身長が五センチ程しか違わなかった。とはいっても、小間使いは百七十センチと大柄であった。しかしそのことは、彼女の女としての魅力を衰えさせる原因とはならなかった。彼女は小間使いとなつてから、知的魅力に加えて性的魅力を持ち、そのことはKを欲ばさずにおかなかった。

「素晴らしい心遣いを、あの娘に対してお与えになりましたね」

と小間使いは、Kを陥落せしめたことを手ごたえとして感じつつ、答えた。

「女は一人の男を知るだけで、それ以上のことは望みませんか」

Kは、小間使いとの間に完璧な絆を築いた後に尋ねた。

「わたくしの場合は、そうです」

と小間使いは「わたくし」という言葉を強調して答えた。

「どうしてですか」

Kの両手は空き、跳躍を開始した。

「理由はありません」

と小間使いは、Kの両手の跳躍に応えつつ

答えた。

気を鎮めようと理加は思った。ここに至って騒ぎ立てても、もう二人を傷つけ、その傷は自分にもふりかかってきそうに思えるのである。そんな風に心を決めてシャワーの中、女神を見た時、理加は女神の立場にありつきたいと思え出した。

第一に闇の中のスポット・ライトの明りのみに照らし出されたシャワーは雨の粒子となつて輝き、感嘆せずにはいられないものであった。シャワーは五分程激しく続いて止った。

淑はマスクをとろうとした。右手でそれはずすべく、耳にかけてあるゴムに手をかけた。その時に調教師は依然として両手を上にかかげ、その間を鞭で結ぶという仕草のまま「あなたは人形であつて、何一つ自由にふるまつてはなりません」と叫んだ。

調教師はその後になつて活気を見せ、まず三つの鞭を、淑の背と臀と脇腹に浴びせた。淑の身体に熱気が走り、それは調教師の目を快くした。

「あなたは人形ゆえに、相方との気が合わず演技がうまくできなかった。しかしわしは人形を扱いなれているから、そのようなことは



させはしない。人形はただ主人のいいなりに身体をあずけていさえしたらよい」

調教師は淑の眼前に立ちつくしてから、タイツの布切れを自ら取り去った。人形は調教師の言葉を素直に受け入れようと思った。

一方、紳士たちは身ぎれいにして再びタキシードで胸を張った。そんな紳士たちに戻すための世話は、黒衣の女が受け持った。その仕事は黒衣の男が命じた。黒衣の女はシャワーを浴びた紳士たちの一人一人を世話する仕事のために骨折った。それは、もっとも、きわめて機械的であったことはまぬがれない。タキシードの紳士たちは黒衣の男によって再び先程の会場へと導かれ出した。

その頃、調教師は再び鞭に興味を示し出し形良く舞わせながら淑を打ちつけ出した。淑が悲鳴をあげると、

「人形が声を出すものか」

とののしり、身体を締めようとする、  
「人形に痛さがどうして感じる。それは可笑しいぞ」

と一層の強い鞭を降らす仕末であった。

だから淑は一体どうなるか全く予想もつかないままに、つとめて人形らしくしている必要があった。でも淑には、調教師が手加減を

していることが最初からわかっていた。鞭は実は革でできているというよりは、布でできているようなものであって、痛みはいつもの鞭打ちに比較するなら、ほとんど感じないというのが正確であった。この心遣いは調教師の自分へのやさしさであると、淑は嬉しく思った。

二人の黒衣が部屋の中に、まず入り込んできた。黒衣の男は調教師から鞭を取り上げ、黒衣の女は、セパードの縫いぐるみを調教師に着るようにと強いた。

「残念ながら視界は全く効きません。でも心配には及びません。手前どもが、すべてをお導きします。これは人間人形と申しますか、人間浄瑠璃のごときものです。でも今回は、前回のよう、もはや三味線も唄もありません。すべては手前どもの日常会話による言葉によって、とり行なわれます」

と黒衣の男は、新しく相方に収まった調教師にいった。返事は帰ってこなかった。黒衣の女は椅子を四脚、運び入れた。黒衣の女はその後、女神に対して蛙の縫いぐるみを着せた。つまり固定スポットの中の台の上に蛙が、その下の他のスポットの中にセパードが浮き出るというものであった。

小間使いは、Kが更に強い反応を示すようにするべく努力した。

「これから何が始まるのですか」

と小間使いは尋ねた。Kは彼女の肩に顔を埋めたまま、

「今の私とあなたとのような心の慈み、慈みの心が蛙とセパードにも成立するのです。ただ蛙とセパードにとって不幸なことは、視界が効かないことから、そのために黒衣の手をわずらわさせなくてはならない点です」

と答えた。

「あの四脚の椅子に紳士たちが席をしめるのですか」

小間使いは尋ねた。

「紳士たちは別室で酒をくみかわし、軽い雑談をしています。紳士たちは露骨なラブシーンに興味と関心を持っていないが、それにふさわしい演技を見た時、自らがそのことに熱中して廃人同様になるのではないかと心配なのです」

Kは小間使いの耳朶を軽く噛みながら答えた。

「あなたは廃人になることはありませんか」

「可能性は充分にあります」

「心配ではないのですか」



Kは、すぐには答えなかった。すると小間使いは、再び同じ質問をした。

「つま足立ちになってみて下さい」

Kは質問には答えずに別のことをいった。

理加は蛙の縫いぐるみの腹に当たる部分が好色なデザイナーの手にかかったように、大きく抉りとられていることに気づき、そのことは、きつとセパードについてもいえることだと思った。

四つん這いの蛙に黒衣の男が指示を与え、セパードには女が指示を与えた。セパードは女の指示と誘導により、台の上に這い上がった。黒衣夫婦は、それから誘導に辛抱強い労をとった。

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会は一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

理加は、黒衣の女が調教師につききりであることから、彼女を呪い殺してやりたい、と思ったが、Kの手が自分にのびてきているのに気づいた時、理加は拒絶することはしなかった。

「一人ではつまらないでしょう」

とKは理加の耳もとでいった。

淑は今、自分に注意を集中してくれる者が調教師であることを身体で確かめた。黒衣夫妻、しいてはKに感謝したいと思った。

甘い時は、こよなく甘い流れを作り、黒衣夫妻は満足げにうなずきあった。

やがて、首尾よい一幕の終演が告げられ、二人は黒衣夫妻に連れられて部屋を出て行った。

その部屋に四人の紳士たちが入ってきた。タキシードの乱れもなく、紳士たちはこれからコンサートでも始まるかのような、くつろいだ気分に見えた。

ところが四人の紳士たちが椅子に腰をおろしてから、誰一人、中に入ってくるものはない、いわば紳士たちは何も起こらず何もなしとくつろぎ続けたのである。

それは三十分も続いた。四人の紳士たちは互いに何かを話し合いながら、それでも退屈

であるそぶりを見せなかった。

ドアが開いた。紳士たちの目は、そこに集まった。

闇の中で黒衣の男は、

「お車が玄関でお待ちいたしております」

とだけ伝えた。

それは夜会の終了を告げる闇の声でもあった。事実、時計は三時を過ぎていた。今少しもたつくなら、夜があけることは明らかであった。

朝靄が立ちこめる中を帰宅することは紳士たちの好みではなかった。紳士たちは闇が深くなると共に目覚め、闇が浅くなると共に眠ることを日課としていて、今夜に限って破ることは、できない相談であった。

豪壮な車体がヘッド・ライトの明りをたよりに闇の中に突進を開始した。闇は牙を剥き出しにして車体を迎え、飲み込んだ。

それは紳士たちのための『人間浄瑠璃』を結び上げるための、三味線の糸をはじく撥の最後の一振りが張りつめた音を響かせて完結を告げた時にも相当していた。

——(完)——

×

×

×

×

×

×



## □ 水田真紀子習作シリーズ □

## 縛り雛人形

しば

ひな

にん

ぎょう

水田真紀子



カット・名古屋S生

「明日の桃の節句、是非、うちへ来てほしいねん」

と云われて、当日、悦子の家へ集まってきたのは、同年頃の娘たちが五人でした。

シンナー遊びとまではいきませんが、自ら不良を以て行動している連中でしたから神妙にお話しているというのではありません。白酒は勿論のこと、ブランデーまで飲んで

キヤーキヤー騒ぎ出すという始末でした。

そのパーティの準備に、てんてこまいをさせられたのは小間使いのしのぶです。当年とって十八才、丸顔のふっくらした、あどけない顔立ちでしたが、体のスラリと整った、いいプロポーションをしています。

「まあ、あんたんちのねえやちゃん、ちよつといかすやないの」

「ええ感じのこやないの」

始めて訪れた娘たちは、そういつてほめるのです。ほめる反面には、ちよつとばかり同性への嫉妬も混っているかも知れません。

女ってものは、相手が自分よりちよつとでも綺麗だと直ぐそんなことを思うものです。

その小間使いが、何度か足を運んで、もうすっかりごちそうも出つくしたと思われるころ、このパーティのホステス役、この家の娘悦子が

「じゃあ、もうこれでええから、そろそろ準備するのよ」

と小間使いに言いました。その声に、ハッとなったように体を固くさせましたが、

「ハイ」

小間使いのしのぶは、小さな声で返事をし顔色を赤くしながら去っていくのでした。



もう、みんなアルコールに、はしゃいでステレオに合わせてゴーゴーを踊ったりしてるときでした。

「悦ちん、こんな大きな家に住んでて、お父さんやお母さん、いてはらへんの？　こんなに騒いでて、おこられたら困るわ」

悦子は笑いながら

「かめへんのよ。今日は、うちとしのぶだけや。うんと、はでに遊ば」

と手を振るのです。

「しのぶって誰やねん」

「今の子や。小間使いのしのぶと二人きりやいうてんね」

「へえ、あの子しのぶちゃん言うの？　えらい上品な名やないの」

しかし、それで安心したのか、みんな遠慮のないふるまいで騒ぎ続けるのでした。

「ああ、うち、もうグロッキーや。お酒のみゴーゴー踊ったら、しんどうなってきたわ」

「なんや、あんた、もう酔うたの」

暑くなってきたのか、ブラウスのホックを二つ三つ、はずしたりする者までいて、セーターなんか脱いで、まるめて放り出してあります。ひとしきり騒いでから

「あら、ひなまつりに呼ばれて、まだ、おひ

なさまをみせてもろてえへんわ。悦子、おひなさまは何処に飾ってあるねん」

「そや、そういえば、うちかて、おひなさま見たいわ。悦ちんのことやから、さぞ豪華なもんがあるのやろ？」

悦子はニタニタしながら

「今に見せ上げるわよ。そないにあわてんかて、まだ陽は高いわ。もっと飲も」

窓から真正面に見える生駒山のアンテナ群は、暖かそうな春の陽を浴びてキラキラ輝いています。

「そんなら、飲もや」

「あら、ええ飲みっぷりやわ」

「何いうてんの。あたいの口うつしに飲ましたるか」

「うわー、女同志のキスカいな」

また、一しきり騒ぐのです。女でもアルコールが入ると、だんだん大胆になります。ましてここに集まっている連中は普断からいけずな女ばかりですから、おとなしくしている道理がありません。エッチな話題も平気で遠慮することなく、しゃべってくるまでになっ

ていました。

「悦ちん、うち、水ほしいわ」

とが危くなっている身で、コップに水を入れてきてやりますと、

「おおきに。けど、水くらい、せっかく小間使いがいるのに、何もわざわざ持ってきてもらうこともあらへんのに」

それは、そう思うのも無理はありません。

しかしそれができなくなっているのです。

悦子は、頃はよしと思ったのでしょうか、おもむろに

「ほんならこれから、うちのおひなさま見せ上げるさかい、二階へ行こ」

そう言ってみんなを誘うのです。二階に悦子の部屋があるのですが、みんなは、きっとそこに豪華なひなだんがあって綺麗な、おひなさまが飾ってあることだろうと、ついていきますと、

「あら！」

「まあ！」

入るなり驚きの声をあげました。皆が驚くのも無理はありません。おひなさまは何も飾ってないのです。その代わり、もっともらしく平安時代の衣裳のような布切れをまとった大きな人形がただ一つ、部屋の中央に坐っているだけなのでした。

よくみると、それは人形ではありません。



さっきまで、まめまめしく動いていた、あの小間使いのしのぶなのです。冠をつけてうつむいたまま、ただ一人あぐらをかいたようにじっと坐っているのです。

「まあ、生きた、おひなさま？」

好奇心にかられ、ぞろぞろ入ってきます。

「ええ、そうやねン。可愛い、うちのおひなさまよ」

悦子は得意気に笑いながら

「めっさと他にない、おひなさまやさかい、よう見ててや」

いきなり、その布ぎれを剥いでしまいました。

「アッ！」

しのぶは何と、その下には何も、まともていないのです。

「く、くくられてン？」

さっきから動かないで坐っていると思ったのは無理ありません。しのぶは全裸にされて、後ろ手にくくられていたのです。そして足首も、あぐらをかいたように組まされ、同じようにくくられているのです。

「うわー、すごいポーズやわ」

ほんとうに、すごいポーズでした。若い娘が、一糸まとわぬ裸に剥かれて坐らされてい

る姿を正面から眺められるのです。

胸のふくらみも、後ろ手にされていてはかくしようもなく、しのぶのふくよかな乳房の中心には、小ぢな乳首が桜色にふるえているのが見られるのです。

「すごいわ」

「これは見事や」

こんな場所で、普断は見られない裸体を、

まのあたり見せられて一同は驚くのです。しかし、当のしのぶこそ、みじめでした。いくら同性だけとはいえ、こんな姿をじろじろと見られては、たまりません。耳のつけ根まで真っ赤に染めて小さくなっていました。

「どう？ よく見て。何なら、さわったりしてもええわ。これこの通り足も動けないし、手もこうやってくくりつけてあるさかい」

しのぶの背をぐっと前へまげて、後ろ側の手首のところを見せるのです。手首のところを持たれて、もちあげられると、それだけでしのぶの上半体は前に倒れていきます。

手首は無残に、腰ひものようなものでしっかりとくくられていました。手首をくくられているという姿は、ほんとうに哀れなものでした。自由がきかないのです。

同性のものでも他人の裸身というものは、

そうめっさと見られるものではありませんから、もの珍しいのと、相手が動けないようにくくられているというのが皆の好奇心をそそります。しのぶのまわりをとり囲むように集まってきて

「綺麗な肌してるやないの」

「どれ？ 後ろ手にくくられてるところ見せて——」

「ほら、こんなにひもが、喰いこんでるねンよ」

自由を奪われた、しのぶの指先がみじめです。そのうちに、だんだん馴れてきて

「この子のポイン、大きいわア」

掌で、そのやわらかみを試したり

「可愛い乳首やわ」

乳首まで、つまんでくるのです。

「いやッ！」

しのぶが思わず声をあげようとするのを、悦子が、後ろからお尻をぎゅッとひねりあげますと、

「うう……」

それつきり声もあげられない、しのぶなのでした。揺げられたままの太腿のつけ根も、まじまじと眺められる視線をさけることもできないのです。



「悦ちんって、しあわせやわ」

そんなことを言う娘がいました。

「何でやの」

「そやかて、こんな若い子のピチピチした裸いつも見られて」

「しょうむない。今日は特別サービスやで。」

それに、しのぶが若い子で何やのン。うちかてまだ嫁入り前の娘やないの」

「この子、いつもくられて悦ちんにさわらせるの」

「今日は特別やていうてるやないの」

「そやかて」

みんなは珍しいものでも見るように、しのぶの裸身に改めて見とれるのでした。

「ああ、こないに裸でくられてる子みてたら、よけい酔いがまわってくるようやわ」

実際それほどアブノーマルで刺戟的なムードになってくるのは仕方のないことです。

いくら同性とはいいいながら昼の日中に、まる裸にされている若い女体を、こうやって、つぶさに見られるものではありません。それに、その裸の女体は自由を奪われてくくられているのです。どんなに扱っても思いのままにできるのです。

「そこで皆に相談があるねんけど」

悦子が、しばらくして言います。

「これから面白いこととして、遊びたいねん」

ニヤニヤ笑っています。

「何やの、面白いことって？」

「皆、きいて」

一同の視線を戻してから、改めて悦子は

「今日は、ひなまつりでしょ。こうやっておひなさま一人じゃおかしいわ。内裏さまならもう一人、お姫さまがいるでしょ。その女役を一人、作りたいと、こない思うんやけど」

「なるほど、それに遠くないわ」

皆も感心したように呟くのですが、

「ほなら、その相手役の一人をどないするっていうの？」

悦子は、皆の気をしずめるように

「どないするってここにはこれだけしか、いやへんやないの。この中から一人、お姫さまを作るねん」

言われると、皆は「あッ」と思うのでしよう。顔を見合わせて、その中の一人が

「なら、誰が？」

思いきって問います。誰だって、自分が当たるのではないかと尻ごみする気持でした。

「そのお姫さまも裸になるの？」

「そらそや」

「くくられるの？」

「くくってもええんなら、そうするわ。そやけど相手役の男びなが、こうやってくくられてるんやったら、同じようになるのが、ほんまやと思うけど」

悦子が、たたみかけるように言うのを、皆は改めて、顔を見合わせて、ちょっと会話が途断えましたが、

「面白いわ、この子かて裸にされてるやないの。それに女ばっかりの中や、今更、羞かしいていうてられへんわ。どう？ 皆」

結局、じゃんけんで選ぶことにして、否応なしと話がきまり、キャアキャア言いながらじゃんけんをして、みゆきという子がきまったのです。

「いやア、かなわんわア」

みゆきと呼ばれる子は、このグループの中では一番おとなしい可愛い顔立ちの娘でしたが、みんなは

「みゆきちゃんなら、最高や」

「一番、お姫さまらしいわ」

みゆきは真っ赤になって、もじもじしていましたが、みんなによってたかって裸にされてゆきます。ブラジャーもとられました。

「パンティだけは、かんにんしてえ」



ナイロンのショーツだけにされたみゆきは手をうしろへねじあげられて

「あッ！ 痛ッ！ きついわア」顔をゆがめます。

「しごきで締めてるさかい、痛くないやろ」

「そやかて、痛いわ」

くくり終えられると、そのまま崩れるようにうずくまるみゆきでした。

「みゆきちゃんの肌も、すてきやわ」

「ええ体やないの」

今は、くくられてうずくまっている友達の裸体に、みんなは新しい好奇の目をみはるのです。みゆきは、こうして同じようにくくられてしのぶの傍へ坐らされました。

しのぶは、まる裸にされてあぐらをかかされていますが、みゆきはまだパンティだけは脱がされずに、その横でしっかりと膝を揃えたまま、横坐りに並べられているのです。

パンティは許されているといっても、ナイロンの薄い布地はみゆきの肉体の起伏をそのまま見せて、息ぶくように波うっているのをそのまま晒されて、一同の視線を集めているのでした。

「いやア、そんなに見んといて。うち、羞かしいやないの」

みゆきが赤くなります。

「何いうてんの。あんたはまだ大事なところかくしてるやないの、この子みてみいな。まる裸にされてるんよ」

「そうよ。それに、こうやってあぐらかかされてるやないの。それくらいが何やの」

みんながいうのを

「そやかて、ひどいわ。うちだけ、こんな目に遭うやなんて」

うしろ手にくくられて、かくしもできない肌を眺めながらみゆきはうつむくのでした。

「こうして比べてみると同じような体でも、ちがうものね」

「あら、どこが？」

「そやかて、ホラ」

みゆきの裸身は均整のとれた、いいプロポーションをしています。如何にも磨きかけたという感じの女体でしたが、小間使いのしのぶの方は、まだどこことなく未成熟の面影が体の線にも現われているのです。

しかし、それだけにピチピチした素肌であり、二つの乳房のふくらみの中央でのぞいている突起も、まだ桜色でコリコリしているようにでした。

みゆきの乳房は、柔らかそうにふくらみき

っついて乳首も大きく、ちよつとでも触れるとピリツとなるように見えるのです。肌のきめも、なめらかですべすべしています。

しのぶの方は、無理にあぐらをかかされているので仕方ありませんが、自然のままに坐らされたみゆきの、くねらせた下半身の線はさすがに女びなの色気がありました。

「男びなが、こうして裸にされても、女じゃちよつとおかしいわア」

一人が異議を申し立てます。

「そやかてレスビアンびならええやんか」という者もいましたが、

「やっぱり感じ、出えへん」

ということになって、悦子が、こけしを持ってきてしのぶにはさませたのです。しのぶは真赤になって顔をそむけるのを、みんなは「うわあ、可愛いわ」

と、はやしたてるのでした。それから、みんなしてこの男びなと女びなに白酒をのませました。

「もう、かんにん」

みゆきが顔をふります。しのぶも眉をひそめてもがくのを、むりやりのませてゆくのです。この珍しい内裏さまの出現に、みんなは一層はしゃいでキャアキャア言っ、その前



で騒ぐのです。

みゆきの女びなの方は、今までに大分アルコールが入っていたので、すぐに酔いつぶれてしまいました。

「フウッ！」

苦しそうな息も荒くなり、フラフラになっているのです。

「ね、この女びな、もうグロッキーやわ。どないしよう」

「ほっといたらええわ」

そのままにして、まだ元気な男びなの方にみんなが寄ってゆくのでした。そして、後ろから裸身を抱きかかえるようにして無理に白酒をのませるのでした。口には出しませんが、いぶはいやということ態度で見せているのに、無理にどうしても飲まされるのですがその半分以上がこぼれます。

「この男びな、すてきやわ。悦子に叱られるよって、いやとも言わずにおとなしいわ」

「いじらしいくらいや。よっぽど、悦ちゃんに仕込まれてんのやわ」

「そやね。うち、口うつしで飲ませたいわ」  
いぶの胸もとから、お腹へかけて白酒が筋になって、こぼれているのです。

「もうええよ。その辺でやめといてんか」

悦子がとめました。

「あら、女びながつぶれてんのに、もっと飲ましたりいな。ええやんか」

どうしても、このいぶにもっと飲ませてやりたそうに言うのを、

「それくらいで、やめといったってんか。男びなにつぶれられたら、このあと、工合悪いさかい」

悦子は釘をさすのです。

「へえ、どないすんの？」

みんなは、二人とも寝かして並べて見たいと思っっているのでしょうか、

「ま、ええから、みゆきをちょっと、こっちへ移してよ」

悦子に言われると、みんなしてもう完全に伸びてしまっている女びなの裸身を抱きあげて、悦子の指図通り、窓ぎわのソファに寝かせるのでした。

「どないすんの？ これから」

みゆきは正体なく、ソファにもたれるように仰向けに寝かされます。後ろの、もたれのところを頭のせられますと、ソファの前面に、ちょっとお尻が、のっかるだけになってすらりと伸びた長い足は真ッすぐ床の上に投げだされるような恰好になって長々と寝かさ

れました。

頭とお尻だけで体をのせて寝かされると、みゆきは大きなため息をつきましたが、そのままぐったりと伸びているのです。後ろ手にくぐられた手首で、それでも無意識に、背後の空間を支えて、その姿は殆ど一直線に伸びたまま、ソファにたてかけられたようになりました。

両足を揃えて、お尻の部分だけが支えられますと、腰が少しもち上るようになったのでみゆきのふくらみが一層もり上っているのです。みゆきのそのふくらみは人一倍、高いようでした。スベスベしたおなかの線が、その辺にきて、大きく彎曲してよりあがっています。薄いパンティを通して、そのふくらみの柔らかそうなスロープが、同性たちの目をなやましく射るのでした。

女同志でも他人の体には興味があります。

それに、豊かそうなみゆきのふくらみは、つねりたいほどの興味をそそるのです。

「パンティ、脱がそやないの」

悦子が声をかけます。

「うち、見たかったんよ。早よとろ」  
「これで、男びなと一しょになるわ」  
待ちかねたように、手をかけます。



「うわあ、ドキドキするわ。うち」

ショーツは、たぐられるとすぐまるまって素肌をすべるのでした。そんなにされても、みゆきは身動きもできず、苦しそうな息を吐いてぐったりしているばかりです。

「見えてきよった」

「あんたばかりそんなに見てんと、はよ脱がせてえな。じらさんと。いけずしたら、あかんがな」

「そやかて、みゆきの、すてきやねん」

脱がせている女は、手ざわりを楽しんでいるようでした。

「そないに、正面からおろしたら、あかんやないの。両側持って脱がさんと」

「はよせんかいな。ニヤニヤせん」と

そのスリルにキャアキャア言っ、その瞬間を楽しんでいるのです。

「ポチャポチャしてるンよ」

横で見えていた一人がたまりかねて

「どきいな。うちがやるさかい」

のけようとするのを、

「待ってエな。今、脱がしたげるさかい」

その特権を譲ろうとしません。みゆきの裸のおながが波うっているのが、よけい皆をいららさせるのでした。結局、みゆきのお尻

をちょっともちあげて、後ろ側をクルリと巻きよせるとナイロンのパンティは、玉のような素肌の上をすべるようにたぐられて、

「うわあ、とうとう見せよった」

「ホウ——」

太腿の中ほどまで隠されて一本の紐のようにまるめられると、もうみゆきの体は明るい窓ぎわの光の中に、あからさまにむき出しにされて、皆が息をのむように見つめる前に完全に晒されているのでした。

綺麗な、ほんとうに惚れられするほどの整った体でした。ふくらみの曲線に、しばらくは声もなく、みんなはのぞきこむのでした。

「ほんまに、もみ込んでみたいようなふくらみや」

「うち、ギョツとつねってみとなったわ」

「ほんまやなあ」

ため息まじりで言い合います。

「女のうちかて、ふるいつきたいような感じやわ」

そおと、一人が指先で触れてみると

「柔らかいわア」

ふくらみは、それほど美しい眺めでした。

「みんな、えらい執心やねんなあ」

悦子が言う

「あら、悦ちん、感じへんの？」

「フフフ、そんなにみんなが賞めるんやったら、よけい面白いわ。これから、ええもん見せたげるよって辛抱しいや」

悦子は何かたくらんでいる様子です。

「辛抱するって、何をやねん」

「みゆきちゃんを可愛がったげるねん。これからみゆきちゃんが、うんうん言わはって嬉しがるよって見せたげるよって、辛抱してみんなは横から、それを見るだけにしときと云うてるねん」

「へえ？ どないすんねやろ」

「まあ、見てて」

悦子は、それからしのぶの傍へ寄って行き足首の紐だけをほどいたのです。しのぶは足が自由になると、あわてて両足をくねらせて今まで拡げっ放しになっていた股間をかくすように身を縮めましたが、悦子はその耳へ何か囁きますと、パアッと耳もとから赤くなつてゆくしのぶなのでした。

「さあ、おいで」

後ろ手のまま、ひきたててきます。

「この二人は内裏さまや。まあいわば、めおとってわけや。男びなが女びなを可愛がるんやから当たり前でっしゃろ。ほれ、このごろ



読者ギャラリー『肌の彩り』須板 旭



は女上位時代よってに、まず女びなをよろこばしてあげるんよ」

一糸まとわず歩かされるのは、とても羞かしいのでしょうか、しのぶはそう言われながら前かがみに歩かされてきたのです。

「その女びなのパンティ、そんなとこで置いとかなと、抜きとってエな。そしたら両足を左右に拡げて」

悦子は命令するのです。

みゆきは、下半身を大きく左右に拡げられて、さきほどのしのぶのようにされました。

しのぶはその拡げられた両足の間にひざまずかされるように連れてこられたのでした。

「みゆきのひざをたてて、誰か両側へひっぱってエな。その方が、足を伸ばしてるンよりよけいに股が拡がるさかい」

思いきり拡げられたところへしのぶが顔を真っ赤にして首を伸ばしていかされます。

「あッ！」

みんなは、その意図を知って思わず声をあげました。

「どうやら分かったらしいのね。この男びなは舌の先で奉仕するねん」

悦子は得意そうに言うのです。くくられたまま大きく股を拡げられたみゆき。その前にしのぶが後ろ手にくくられたまま不自由な体で、ひざまずかされているのです。

「まあ！」

どうすれば女体が燃えてくるかは、みんな百も承知なのですから、たまりません。

「両側から、しっかりみゆきちゃんのひざをひっぱっててや」

悦子は、こともなげに言います。

「パンティだけは、かんにんしてエ」

と羞かしがっていたみゆきは、無理に白酒を飲まされて正体もなく寝かされ、こうして晒し者にされました。

「いい？ これから内裏さま同志のプレイが始まるわ」

悦子が改めて言います。そして、みゆきの両の乳房に手をかけると静かにそのふくらみ



をもみ始めたのです。

「ウウン」

みゆきの声もれて、体の線が波うち始めます。

「駄目やんか。両ひざをしっかり押さえてないとアカンやないの」

ともすれば動いていく下半身を、そう言っ  
て押さえさせます。

「いやん、やめてエ」

意識をとり戻してみゆきが悶え、身をくねらせるのですが、くくられていては我が身が自由になりません。まして左右から押さえられているのでから、されるままです。

「女びなはん。おとなしくしててよ」

悦子は尚も押さえこむようにして、乳房をもんでゆくのでした。

「あ、あッ、そんな」

乳首まで指先でクリクリとつままれ始めますと、みゆきは肌一面を紅潮させながら、それでも女体の哀しさ、いつの間にか乳首が石のように固くなってゆくのでした。

「ええ感じやわ、この手ざわり」

悦子がニッコリすると、

「いやあ、うちにも触らせて」

きゃあきゃあ騒ぎ立てるのです。いい加減

乳房がもてあそばれて、みゆきが燃え始めてきたのを見てとると、悦子は、みゆきのひざの間で、くくられた裸身をひざまずかされていゝのぶに合図を送るのでした。しのぶは目を閉じると、そのままの姿勢で静かに首を伸ばしてゆきました。

「あッ！」

「うわアッ！」

期せずして一同が息をのみます。

「あ、あ、あーッ！」

みゆきの体が、電気に触れたようにピクリと動いて眉間をキュウツと寄せた顔が、ぐうツと後ろに反ってゆくのでした。

「う、うッ！」

見ている一人が、胸を抱くようにして呻きました。その有様を見て、思わず皆が顔を見合わせてニヤリとします。

しのぶが実に器用にみゆきをまるめてゆくのでした。まるで、そうさせられることを求めてでもゆくように、一心にのどを動かさせているのです。

乳房は悦子に、されるままにもてあそばれ  
いのぶには、こうして柔らかくまさぐられま  
すと、いくら羞かしさが理性を支配しても女  
体の本能が承知しません。もう身も世もなく

身をくねらせてゆく、みゆきでした。

玉のようにすべすべしたみゆきのおなかの筋肉がぐぐつと波うち始めます。鼻口をひろげて荒い息でした。

「うわー、たまらんやないの」

感きわまって声をあげるのがあります。みゆきの、このしびれが痛いように身につまされ  
てくるのです。ともすれば、足に、ぐうつと  
力が入ってくるのを、

「しっかり持ってんとあかんよ」

その都度、むりに抗げられます。

そのうちにしのぶがピタリと動作を止めた  
ではありませんか。

「？」

思わず、のぞきこみます。悦子も休んでい  
るのです。

「あら、どないしやはったん？」

いぶかるように問うのを悦子は、  
「ちょっと一休みや。どう？ みゆきの、こ  
の姿、見て」

今すこしで燃えつきる寸前に、水をかけら  
れてはたまりません。

「う、うーん」

腰をくねらせて悶えているのが、妖しくみ  
んなを一層、興奮の渦中へ、かきたてます。



「どう？ すてきやろ」

悦子が、また静かに乳房のふくらみを、ゆさぶっていきます。すると、しのぶも再び唇をつけていくのです。

「う、うつ！」

みゆきの裸身が、またくねり始め、ぐうツとのけぞっていきます。そして寸前に、また放されるのです。そうしたことが三、四回もくりかえされますと、もうみゆきは羞かしさも忘れて、

「うち、もうたまらへんのに」

訴えるように哀願するのです。

「悦子はん、殺生や」

という子も出てくる始末。

「ほんなら、トコトンいきまひよか。みゆきちゃん、思いきり声たててや。それ、聞きたいねん」

「声？ そやかて、そんな羞かしい」

みゆきは、これ以上の羞恥を強要されることを、うらめしそうに見上げていました。

うしろ手にされた女体を、やはり、うしろ手にされた女が、口づけで奉仕している有様は同性であるとはいえ、強い刺激でした。みんなの目は、固唾<sup>かたず</sup>をのんで女体の変化を、じっと見守っているのです。

その注視の中で、みゆきは羞かしさも忘れて、全身につきあげてくるような気の遠くなるようなしびれに、せつない呻きをあげ始めてくるのです。大きくのけぞりながら体を硬直させたのです。

「いやあ、ショックやわ」

「たまらんわア」

見ている者までが、うずいてくるような、一瞬です。しかし、これでみゆきは解放されたではありません。

「みんなも見てるだけじゃ、せつないやろから、交代で乳房を可愛がったげたら、ええやろ。しのぶにもやらせるさかい」

悦子に言われると、先を争って希望者が出る始末です。

「うわあ、みゆきちゃんの肌って、柔らかいわア」

「乳首が、こないに固うなっではるわ」

「お餅、もんでるみたいや」

入れかわり立ちかわり、むき出しのみゆきの乳房を責めるのです。みゆきの悶える時間が長くなるほど、乳房も長いこといじられるものですから、みんな心ゆくまで堪能できるのです。

こう続けさまに、責められては、たまりま

せん。むりやりに火をつけられて、そっとしていた状態になっても、すぐやり起こされるようにして何回も責め続けられたのです。

「あッ！ あああ——」

みゆきのやるせない、なやましい声のみがまぶしい陽光の中に拡がってゆくのです。そのあげく、ぐったりと疲れ果てた裸身を放り出されたのです。

「どう、おもしろかった？」

悦子は、この趣向がみんなの興味をそそったことに満足したかのような笑いをうかべて「今度は、ひとつ変わった責め方をやって見えへん？」

問いかけるのです。

「いやあ、こちらが？」

興味は確かにあるのです。自分が与えてみたいという気があります。好奇心も人一倍あります。そして、ぐったりなったみゆきの姿に改めて目を移すのです。

「ハハハ、そやないねん。あんたら、女びなの方は、もうええねん。今度は男びなよ」

「え？ この子」

しのぶに目を移すのです。くくられて坐ったままのしのぶは、うなだれてみんなの視線をあびて身をくねらせます。



「そらそや。一生懸命みゆきちゃんをよろこばせてきたんよ。このままやと片手落ちやないの」

悦子は、しのぶの肩をうしろへ押すのでした。くくられたままですから支えることもできず、どうと後ろへ倒れます。

「これ、見てみいな」

倒れたしのぶの足首をつかむと、悦子はぐいと上へもちあげるのです。

「あッ！ いや」

小さな悲鳴がきこえるのですが、おかまいなしに、

「ほら、ね」

「いやあ、この子にキスせなあかんの？」

唇をつけるとなると、ちよっとたじろぐのです。

「皆、殺生やなあ。この子は、あないに一生懸命になって、みゆきちゃんにサービスしたやないの。いやならしょうないわ」

笑っているのです。

「ええもんがあるわ。まあとにかく準備しようやないの」

しのぶは、悦子の三面鏡の背の低い腰かけを持ってきて、その上にお尻をのっけて仰向けにねかされたのです。ひざをまげられると

足首を左右に腰かけの両側にまわされて、後ろ手にくくられている手首と一しょに結ばれます。

これでもう身動きもできず、おなかをもちあげて太鼓橋のように反りかえらされて固定されてしまいました。小さな腰かけにお尻をのっけられて、頭とひざで床を支えるようにのけぞらされたまま、手首と足首を結ばれますと、しのぶは皆の視線の中で、弓のように曲線を描いて仰向けに固定されたのです。

みゆきとはまた違った感じの、それでいてやはり、ぶりぶりと弾力のある同性の体を、まるで珍しいものでも見るように、みんなしでのぞきこむのでした。明るい陽ざしの中でいくら同性のものとはいいながら、このように、はつきりと二人の体を観察できるということは、ほんとうに珍しいことかも知れません。

「そないにのぞいたら羞かしいやないの。しのぶはこないされて、うち以外の人に見せたの初めてやさかい、みてみいな、真ッ赤になっはる」

悦子が後ろから言いますと

「あら、悦ちゃんはいつも、この子の見てんの？」

「ほんま？ それ」

ガヤガヤとさわぎたてるのです。

「そや、しのぶはうちの小間使いやもん」

「いくら使用人でも、そんなないわ。この子、いつでも見せたりすんの？」

驚くのでした。

「うち一人だけなら、そっと見せるけど、こないにして、みんなに見せるのは今日が最初や。あんまり見せとうなかつたんやけどな、なにしろ、うちの室やさかい」

悦子は得意そうに、しのぶの裸を自慢するのです。

「こうなったら、みんなにも貸したげるけどすぐく敏感やよって驚かんといてや」

悦子は何かをとり出しました。

「あ、筆」

習字に使う太筆でした。それに口の先でしめりを与えながら

「ほんまに何べんもじらして、よう辛抱してくれたわ」

その筆の先をしのぶに近づけるのです。下からなぜあげるように動かせると

「う、う、う」

しのぶが悶えるのでした。穂先はしのぶのキャンバスに、きれいな画を描いてゆくので



す。その筆の動きにつれて、次第にキャンパスが赤く染まって耐えきれぬようにくねってゆくのです。

「これは、きつい刺戟やわ」

見ているだけで、この雰囲気呑まれそうでした。悦子の扱いがまた上手でした。しのぶのくねりに合わせて器用に穂先を動かしてゆくのです。ぐうッと息をつめて、悲鳴に近い呻き声をあげ始めたしのぶを感じると、

「誰か、胸をもんでやってよ」

反りかえった乳房が、掌でまわされ出すと

「あ、あ、あー」

しのぶは、羞かしいような声をあげます。

「まだコリコリしてる手ざわりやわ」

その感触を楽しむように、

「それでも、つぼみが固うなって、はじけそうや」

強い刺戟を与えられますと、しのぶのおなかの筋肉は、くくくと波を打って「うーん」と四肢を突っぱったのでした。

そのあと、悦子は鏡台の抽出しから、また何かをとり出してくると、

「今度は、これやねん」

それは、パイプレーターのようなものでした。

「あら、そんなものであるのん？」

「アホやなあ、ほんとは、これに使うものやないねんよ」

振動部へフェルトのようなものをかぶせると、電源をコンセントへつなぎます。

「ほら、こんな感じや」

ひとりの体に触れさせますと、その女性がとびあがります。

「しびれるみたいや。すごい震動やないの」

「そうよ。これが、ええねん」

ブーンと小さな音がしている、そのパイプレーターをのばして悦子が再びしのぶに近づくのです。

「乳房を押さえてて」

ブーンと唸る音が次第に近づいて、やがてその震動が、筆の先でもてあそばれた部分に触れたか触れないかの瞬間、

「うううッ！」

しのぶの全身がうねるのでした。しのぶの反りかえった体は、そのまま連続的に波うって手首と足首をくくったひもを、ちぎれるばかり引っぱってのけぞっていくのです。

乳首がキーンと固くなっていきます。

「ううッ！ ああッ！」

せつない呻きと共に、ふくらみは波うちながら、くねります。

「まあ、すごいねえ」

「うち、こんな、初めてみたわ」

「ショックやわ、全く」

ほんとうに、みんなには刺戟の強いショックであった。それでも、その刺戟が強いものであればあるほど、好奇心が湧くのも無理はありません。

みゆきが、何度も何度も、じらされて呻きをあげさせられたのとちがって、しのぶはこれのあと、太鼓橋のように反りかえらせられてくくられた裸身を代わる代わる、みんなから玩具のようにもてあそばれ何回も呻き声をあげさせられて、全身を硬直させたのでした。

「あああ、ううう、う、うッ——」

しのぶの呻き声が、身も世もなく部屋中に何度も、あがって、みんなはその声に酔ったように、互いにしのぶを責めたてて行ったのです。ぐったりになったみゆきまでが再びパイプレーターをあてられ、ひなまつりの男びなと女びなは、さんざんみんなを楽しませて、後ろ手にくくられたまま、のたうっていったのでした。



青春の陥穽——(15)

穴

の

上

芳野眉美

A

初詣でをするのなら、生きた観音様のほうがいい。

元日に、薄化粧した童女のような観音様に接吻を許された経験があるので、つい、正月になると、初詣でがしたくなる。

生きた観音様は、おがんでいても楽しい。

オサイセンも生きてくる。

大晦日を徹夜麻雀で通過して、ゼンコクテキガントンを迎え、パイをかたづけから寝るのがおいしいから、そのまま初詣で行っ

てしまった。

オサイセンは、正月料金で千二百円、普通は八百円。

金髪レスビアンショーが、かなりうわさになっていたのである。

金髪といっても、外人の美女ではない。御丁寧に金色に染めたメイド・イン・ジャパンの女性である。

レスビアンショーといっても、劇場でどの程度やれるものか、その限界が知りたかったのである。

全ストの最近の流行はベッドショーで、金



カット・春川ナミオ

髪ベッド、芸者ベッド、尼僧ベッド、花嫁ベッドなど、とにかく、ベッドがつくことになっている。

ステージに布団が敷かれて、女のオナニーの真似が始まるわけだが、いずれもおとなしい。演技力がないから、むしろ白々しくなることが多いのである。

レスビアンショーも、ステージに布団が敷かれるから、ベッドショーには違いない。

真紅の透明なネグリジェを着た金髪の女が布団に寝る。布地と名のつくものは、そのネグリジェだけである。純白のネグリジェの女



が、真紅のネグリジェの女を抱く。

唇が合わさったが、舌は使っていない。

唇と唇の触れ合いは、意外にさけるものなのである。唇の感触は、唇が最高に逃手なのだから面白い。水商売の女と遊んで、接吻の好きな女だったら、スケベと思って間違いない。それにひきかえ、シロオトは、やたらに接吻が好きだから、あてにならない。

純白の女の指が、真紅の女のどこかをじわじわと責める。

場内がシーンとなる。

客に向かって真紅の女が御開帳になる。

金色に染めてあるから、手入れは大変だろうと思うのである。

誰が染めるのか知らないが、彼女たちの彼氏が、せっせと染めているのかもしれない。

純白の女の指が、真紅の女のふところ深く埋没する。

真似事ではなかった。

舞台の上で、レスビアンがホントに行なわれているのである。満員の観客が息をのんで舞台を見守っている。

純白の女が男役で、舞台の上で、金髪の女の肢体が脈動する。

秘密ショーではないのである。

全裸の二人の女が妖しい甘美な空気を漂わす。

豊満な四つの乳房が密着するの、見ていようを異様なムードでポーズとさせる雰囲気をかもしだす。二人の女の肌は、汗ばんでいるのに違いない。

女のせつない嘆息が洩れる。男役の純白の女の乳房を、真紅の女の唇が襲う。女の唇の動きは、遠くからでもよくわかる。

純白のネグリジェの女が、すくっと舞台の中央に立ち、両脚を開き、客席を艶然と見下ろす。

真紅の女がまつわりつく。

まるでロダンの彫刻のようであった。

全ストもエスカレートしたものである。

ただの観音様の御開帳だけでは、客は来なくなつたのかもしれない。

二人の女が、全裸のまま、エプロンステージに散った。

レスビアンショーだけでも客は来ないのである。最終的には、やはり、人気とりをしなければならぬ。

純白のネグリジェの女は、客に尻を向け、  
「ここが処女マク」

「——」

「ここがオシッコするところ」  
解説つきである。とことんまで客を食っている。

「ねえ、見えた？」

振り返って問いかけても、客は返事のしようがない。

この種の舞台には、露骨すぎるということはないのである。

「いつもキレイにしているから、ちっともキタナくないわよ」

そのとおりだったのであろう。

## B

浅草に住んでいたせいか、レスビアン夫婦が意外に多いことは知っていた。

常連だったバーにも、夫がバーテンで、妻がホステスという、レスビアン夫婦がいて、面白いから、よくからかったものである。

夫が男ではないから夫婦生活は、どこを限界にするのか、興味があつたのである。終着点がないとすると、二人がぐったりと疲れきるまで、終わらないのかもしれない。

このバーテンレスビアン夫婦は、バーからバーへ渡り歩いていた。

レスビアンも、女が男の恰好をしているの



は、美的感覚からすると、ただけないうな気がする。

レスビアンでも、女性そのままのほうが好きである。男のカッコをしているのを見てみると、どうもサマにならない。

レスビアンだといわれている女同志二人のアパートに、男が一人こるがりこんでいるのを見ると、わけがわからなくなる。

本格派からすれば、男と寝ることなど絶対に許せないことなのだろうが、両刀使いはレスビアンの中にもいるのである。

レスビアンの魅力と、男の魅力と、両方とも忘れられないのだから、本格派より、精神的に享楽派なのかもしれない。こんなのは、女役に多いらしく、受身はすべてを受け入れるだけ、SEXにも貪欲なのだろう。

レスビアン夫婦に男が一人まじった場合、女役の方が妊娠しても、相手がはつきりわかっているからいいけれど、こんな奇妙なこともある。

ゲイバーの女だからいつも女装している。けれども彼女には、れっきとした本物の女の妻がいた。

彼女、いや彼は（ややこしい）両刀使いなのである。

彼の家族は、彼の愛人の男と、妻と、三人の子供たちである。

彼の膝に、彼の愛人の男が膝枕し、彼が朝食をとっていると、彼の妻は、夫である彼と彼の愛人の男に、つつましく御飯を盛っているのである。

彼は、彼の愛人の男の布団に寝ることもあるし、本物の女である妻の布団に寝ることもある。

彼の愛人の布団では、すっかり女らしくなり、妻の布団の中では、女装していれば、変型のレスビアンともなりかねない、珍妙な夫婦生活になる。

彼の愛人は、繰り返して書いているが、男である。だから、彼が女装してかせぎにゲイバーにでかけたあと、彼の愛人の男が、彼の妻の布団に寝ていることもある。

一人の男を、夫婦で共有していることになるし、一人の男に、夫婦して、妻のつとめをしていることにもなる。

だから、彼の三人の子供の父が、誰だか母親もよくわからないらしい。

現代のSEXは、まことにややこしい。

ロングブーツの底を平気で客に舐めさせたリ、トイレのバケツにオシッコをして、客に

飲ませたりする、いきつけのバーのママは、レスビアンの女の子と、女装の可愛い男の子をホステスにしている。

ママの様子からすると、女装の男の子を女としてあつかい、レスビアンを楽しんでいるかのようだし、時には、男としてあつかって青い芽をさっさとつみとってしまったようなフシもある。

二役をこなして、男と女に交互に変身し、サディスティックのママに奉仕するところなど優雅な現代の一面を象徴していて面白い。

この三人が集ると、男一対女二のたわむれになるのか、三人の女のレスビアンになるのか、お互いによくわからないのじゃないかと思われる。

まったく、ややこしい。そこへ、のこのことM男が現われると、どうなるのか。

男一対女二のほうが優雅でいい。

M男と女装の男の子のSEXは、ホモになるのか、普通の男と女のSEXと見ていいのか、よくわからない。

M男対三人の女となると、三人の美女にたった一人のM男が徹底的に責められることになる。



ママは、男に、男のを飲ませるのが大好きだから、M男はかっこの餌食になる。

「ママのオシッコは、いやというほど飲まされたから……」

と私（芳野）が女の子にいった。

「いや、とは、なによ」

とママがロングブーツで、ストールに腰かけた私の尻を、けとばした。

「いえ、いや、じゃありません。たくさん飲ませていただいて感謝しております」

「そう、感謝しながら、お飲みなさい」

「だから」

と私は、女の子に話を続けた。

「あなたのを飲ませてよ」

「いいわよ」

とレスビアンの子がいった。

「ママはSだし、わたしはMだから、どうやって飲ませたら、いいのかしら」

「ああ、そうか」

サディスティンは、男に放尿すればいいかもしれないが、Mの彼女としては、男に、そんなことは、とてもできそうにない。

「じゃ、強奪しますよ」

「どうやって」

「あなたを縄で縛って、無理に」

「それなら、いいわ」

縛った女から、カテーテルで放尿させているのは、神酒拝受とはいいいながら、サディスティックである。

女の尿を飲む——という行為は、それだけ考えれば、すこぶるM的行為だが、どうしても、攻撃的な、S的行為になることさえ、あるのである。

スカトロジョーも優雅でよくわからない。

女装の若者がトイレに立った。

「バケツにしておいで」

とママがいった。

「芳野さんに飲ませておやり」

「許してくれ」

私は、あわててバーから逃げ出した。

いくら女装している美少年かしらないが、男には違いない。男のなんて飲めるものか。

——と思うでしょう。

ところが、である。誌友の中には、ママの命令なら、喜々として、飲むM男がいるのだから、つきあいにくい。

これは十二月の話である。

# C

めでたく元日の初詣でを終わり、次のコー

スへ足を向けた。

劇場の前のトルコに飛び込んだのである。

せっかくの初詣でなのだから、生きた観音様から神酒を拝受しないことには、どうにもならない。

レジーにいた金髪の（この頃は染めている女性が多いから、金髪でもおかしくなくなつた）子が、レジーをボーイにあずけて、さつさと変身してくれたのには驚いた。

「元日でしょう。女の子が少ないのよ」

三階まで階段を上がっても、しんと静まり返っていた。

「それは、けっこうで」

と、にこにこしながらトンチンカンな返事をした。

女の子が少ないから、レジーの子を釣れたわけで、こんなこともあるのだろう。

「元日だから」

と美女がいった。

「わかっています」

少々高くても、覚悟の上であった。

前に坐って、洗うべきところはねんいりにネ、ねんいりに洗ってくれたが、あとは簡単であった。

洗うために来たのではないから、それでか



まわない。

「どうするの」

「さあ、どうしましょう」

そこで、持参していた△二月号▽をとりだした。

△青春の陥穽▽の頁の中に、春川ナミオ画伯の「欲しけりゃあげる」という絵があるのである。背中にまたがった女が、男の顔にパンティをかぶせているものである。

「これ、どんなものでしょう」

「フフ」

と美女が鼻で笑った。

「おかしいですか」

「だって」

「おかしくないですよ。美女のパンティに憧れるのは、男の共通の願望ですから」

「だって、顔にかぶるのでしょう」

「かぶらなければ意味がない」

「ヘンタイね」

「そこまではいきません」

「ヘンな男」

「ぼくは水原弘じゃありませんよ」

「いいわ」

と彼女が笑いながらいった。

「ヘンタイじゃなさそうだから」

「パンティをほしがるのは、正常も正常、男の心理としては当然です」

「寝なさい」

と彼女が命令した。

「後ろに手をまわして」

床に腹這いになると、手を後ろにまわして背中にくんだ。

お手本を見ながらすればいいのだから、こんな世話のかからないこともない。

縄のかわりに、小包の紐を代用したのが、かえって手首に喰いこんで痛かった。

パンティだけを脱いで、

「いやだなあ」

ちよっと、ためらった。

「女王さまが羞かしがるなんておかしいですよ」

「女王さま？」

「そうです。女王さま」

パンティを持って立っている彼女を上眼使いにしながら、私はいった。

「面白い人ね」

彼女が背中にまたがった。

中腰になり、意を決したように、脱いだばかりのパンティを、私の顔にかぶせた。

「いやだなあ」

と、もう一度いった。

「ああ、女王さま」

彼女の香を潜めた、あたたかいパンティは私の顔をすっぽり包んだのである。

春川ナミオ画伯の絵のように、彼女はパンティを、馬の手綱のように引っ張った。

死にたいほどのやわらかなパンティの感触が、口を割って引っ張られた。

「背中に坐って下さい」

うわごとのように私は、いった。

「あっ」

縛った手に、お尻がふれて、彼女は飛び上った。

彼女はバッグから、男専用の小さな薄いものを取り出すと、私の片手の指二本をつかみ一緒にしてはめたのである。

彼女は、あらためて私の背中をまたいだ。

パンティの手綱を引っ張りながら、腰をかめてきた。

「ああっ」

と彼女は呻いた。

脱いだパンティを、客とはいいいながら、男の顔にかぶせた興奮が、彼女を思わず呻かせたのかもしれない。

「女王さま」



パンティで顔を引っぱられ、死にたい思いで私は叫んだ。

「女王さまのオシッコをおめぐみ下さい」

「えっ」

彼女は驚いて腰を浮かせた。

「なんですって」

「飲みたいんです」

「と、あえぎあえぎ私はいった。」

「ヘンな男」

「そう、ヘンな男です」

「ヘンタイ」

と彼女は、ののしった。

「おお、女王さま、おめぐみを」

芝居がかっているから彼女が嘔き出した。

「負けたわ」

「しめた。くれるの」

「いいわ」

後ろ手に縛られたまま、私は寝返りを打った。

「パンティをとって下さい」

そうときまれば、今度は顔にかぶされたパンティが、じゃまである。

「だめよ」

と彼女がいった。

「パンティはかぶったままよ」

彼女が私の顔をまたいだ。

「いいわね」

私の口をおおっていたパンティが、すっと濡れてきて、じわじわと重みを増した。

## D

閑話休題。

レスビアンショーを観て、葉子と絵里子をレスビアンにしようと思っていたのが、脱線してしまった。

私の青春の陥穽Vはこのくらいにして、話を奇妙な同居者の勇に、もどそう。

三田夫妻のところに居候している勇の位置に多少の変化が見られたのは、朝になると、夫の三田のかわりに、勇を布団の中に呼んでしまうことを、葉子が平気でするようになってからである。

八畳の夫婦の寝室に、三田夫妻がやすみ、隣の四畳半に勇が寝ていたのが、いつのまにか、三田と勇が逆になった。

即ち、葉子と勇が一緒に寝て、葉子の夫の三田が、馬鹿みたいに、一人で隣室に寝るようになってしまったのである。

食事の仕度から、家の掃除、洗濯と、妻の仕事は全部、三田がやるのだから、三田が女

中みtainなものであった。

その上、車の掃除をして、かせぎにでかけていくのだから、どこまで人が良いのか、わからない。

このように三田と勇が逆になったのは、朝になって三田が起きだすと、きまって葉子が三田のかわりに、勇を呼んだのに始まった。

「勇なら、いつまでも寝ていられるわ」

と妻は夫にいったのである。

「だから、あんた、一人で寝なさいよ」

「――」

「勇だって、朝になって、いちいち引っ越してくるなんて、めんどろだわ」

「そんなこと」

と勇が驚いて葉子にいった。

「御主人に悪くてできませんよ」

「おだまり」

と葉子が勇にいった。

「この家の主人は、葉子です」

「はい」

勇は、すぐごと、しりぞいた。

三田を怒らせても追い出される心配はなさそうだが、葉子を怒らせたら、一巻の終わりなのである。

隣家の大崎夫人と関係を持った今となって



は、勇は何が起こっても、葉子の家から、はなれたくはなかった。

新婚まもない絵里子夫人に、勇はどうやら惚れているようであった。それは、葉子に対する感情と、だいぶ違っていた。

葉子に対する感情は、年上の女に憧れる少年的な感傷と、サディスティン葉子の妖しげな魅力に、勇の受身の感情が合ったところにあるので、年もそう違わない絵里子夫人に対する勇の感情を同一視することは出来ない。

大崎夫人に対する感情が、人妻であることを忘れさせて、ひたむきな感情だと葉子が知ったら、どういう態度にでるだろう。いくら絵里子夫人に恋をしたとしても、勇は上手に立ちまわらなくてはならないのである。

「きいているの、あんた」

と、はすっぱな調子で葉子は夫にいった。

「今夜から、あんたは、一人で寝てちょうだい」

「――」

「いいわね」

「葉子さえよければ、俺はいいよ」

ぼそぼそと三田はいった。

それで決まった。

勇のかわりに、三田は、妻と若い愛人の痴

語を、いやでも聞かなければならなかった。

「ねえ、勇」

と葉子は甘い声を出すのである。

「まだ、だめですよ」

隣室の三田を気にして、勇はそれどころではない。

「ねえ、勇ったら」

葉子の声が一段と高くなる。

勇は頭をかかえて、身体を縮めた。

勇の口に、無理やり、葉子の乳首がふくまされる。

「ああ、可愛い赤ちゃんね」

勇と夫を換えてから、葉子は三田が仕事から帰っても、あまりかまわなくなった。

三田は夕食の仕度をし、葉子と勇にたべさせる、掃除をし、四畳半に布団を敷いて寝てしまうのである。

葉子を勇にあずけて、ようやく夜の奉仕から解放されて、三田はかえって喜んでいるのかもしれない。

夫がもどってくると、葉子は意識的に勇に甘え、また、サディスティックにいどみかけるのである。わざと、いやらしいことを隣の夫に聞こえるようにいってふざけながら、

「あんた、淋しいでしょう」

と隣室の夫に話しかけ、

「いいから、唐紙を開けておきなさいよ」

と、わざと唐紙を開けさせ、これみよがしに夫の眼の前で勇に戯れかかるだけでなく、勇にあと始末をさせた紙をひったくると、三田のほうに投げてよこし、

「ほら、ごちそうをやるよ、早く、たべておしまい！」

と、怒声を浴びせるのであった。

「たべないんなら、たべさせてあげようか」  
葉子が立ち上って来そうな気配に、三田はあわてて枕もとに散らばった、いやらしい紙くずを集め、口に入れる真似をして、処分するのであった。

妻と勇のミックスなんて、たべられるものではない。

葉子は、勇を放すと久し振りに、夫の枕もとに立った。

「フフ、一人で寝るのに慣れたでしょう」

「ああ」

三田は呻くようにいった。

「身体が休まって、いいでしょう」

「ああ」

「勇は、あんたの代役なんだから、勇に感謝しなければだめよ」



読者ギャラリー『M氏の日課』岡 たかし



「ああ」

おかしい話であった。妻を寝取った男に、感謝しろというのである。

「あんたは、この女中なんだからね。いいわね」

「ああ」

何をいわれても、三田の返事は決まっていた。

「勇のことを、これから、御主人様とか、勇さまとか呼ぶのよ」

「ああ」

葉子は、

「ペッ」

と唾液を三田の顔に吐いた。

「このウスノロ。ああ、しか返事ができないのかよ」

「――」

「返事はどうしたの、返事は」

「わかってるよ、葉子」

おそろおそろ三田がいった。

「呼びつけにしないで」

と葉子は、わめいた。

ああ、としか返事をしない夫に、むしうに腹が立ったらしい。

「葉子さま、といってごらん」

「はい、葉子さま」

葉子は夫の顔を、足の裏でぐいぐいと踏みつぶした。

「よし。じゃあ葉子さまが、これから徹底的にいじめてやる」

夫の鼻を足の指でつまみ、鼻の穴に足の指を突っ込んだ。

葉子は、夫の顔の上で、勢いよくジャンプした。三田の鼻から、鼻血が噴き出した。

E

葉子の顔は、いやらしいほど夫を軽蔑していた。

「勇」

と年下の若い愛人を呼んだ。

「庭に行つて、荒縄を持って来てよ」



真夜中であつた。

布団の中で、勇は躊躇した。

葉子の顔が、いつもと違って、あまりにも血の氣を失っていたからである。

葉子は、何か知らないが、ものすごく怒っていた。いらいらしているといつてもいい。

布団にもぐったままの勇に、葉子は短氣を起こしたらしかった。

つかつかと勇に近づくと、夫の顔を足で踏み潰したように、勇の顔も、足の裏で、思い切り踏んづけたのである。

「この野郎、葉子さまのいいつけが、きけないのか」

二度、三度、顔を乱暴に踏んづけられて、勇は、あわてて葉子の足をつかんで難をさけた。

「さ、さがしてきますから、足で踏むのだけはやめて下さい」

「わかればいいんだよ。ウスノロ」

葉子は、ペツ、と勇の顔に唾液を吐いた。

夫も勇も、この二人の男は、どっちみち葉子にとっては、雄犬にすぎないのである。

布団から起き上った勇が、庭から荒縄を持ってきた。

「よし」

と葉子は満足そうに、うなずいた。

「後手に縛っておしまい」

夫の三田の布団をまくりあげ、葉子は勇にむかつて命令した。

荒縄を持ったものの、勇はもじもじしていて動けない。

「馬鹿、早く縛るんだよ」

葉子の声だけが、はずんで響く。

「――」

それでも勇は動けない。

「こっちへ、およこし」

いらいらした葉子が、勇から荒縄を、ひったくった。

「よく見えているんだよ」

勇にいうなり、寝ている三田の頭を蹴飛ばした。

「うつ伏せになるんだよ、この馬鹿野郎」

葉子の言葉は、もう目茶苦茶であつた。

三田がおそるおそる、うつ伏せになった。

「両手を背中にねじりあげな」

と、これまた馬鹿のように、つつ立っている勇に葉子はいった。

「はやくっ」

勇は一瞬、飛び上ってから、三田に脱兎の如く襲いかかった。葉子のすさまじい顔が、

こわくなったのである。

三田が、おとなしいのが、かえって妙であつた。SMプレイでなく、三田が本気で怒りだしたら、妻の葉子を寝取っている引け目があるから、勇は抵抗する氣力を失ってしまうことだろう。

葉子もこわいが、男の三田もこわい。だがこの場合は葉子のいいなりに、三田の両手を縛ってしまったほうが、三田が怒ったとしても安心していられるというものだ。

三田は勇に両腕をとられても、なんら抵抗せず、あっさりと勇に縛られてしまった。

勇は拍子抜けした。

妻に喧嘩を売られたとしても、三田は、それをSMプレイとして、甘んじて妻の暴力と侮蔑を受けてしまふのだろうか。

「足首も縛って」

と葉子が勇に命じた。

何をされても、三田は無言であつた。ただ勇の縛り方が少々荒っぽいので、

「うん、うん」

と唸ってはいえるようであつた。

「犬が布団に寝ていることないわよ」と葉子は勇にいった。

「布団をはがしておしまい」



勇は三田の身体に手をかけて、布団から下ろそうとした。

「敷布団をはがせば、いいんだよ」

葉子は、夫が寝ている敷布団の端に手をかけて、勇を促した。

「それ」

二人は力を合わせて勢いよく敷布団を、ひっぺがえした。

「畳をはがして、勇」

勇は葉子を、ちらっと見た。

勇が床下にほうりこまれたように、葉子は夫の三田を地下の防空壕にほうりこむつもりだった。

勇は畳を一枚はずし、床板を取った。

「やめてくれ、葉子」

と三田が呻くようにいった。

うしろ手に荒縄で縛られ、あぐら縛りにされた上、犬の首輪をはめられて、首輪の鎖を足首にかけられ、上体を折られたまま、炭俵詰めにされ、地下に転がされていた勇のことを、三田は、寝物語に妻に聞かされていたからであった。

その結果が、勇の発熱であり、勇が居候する原因になった。

勇でさえ、炭俵に詰められ、頭から葉子に

放尿されたのである。夫の三田が、このサディスティンの妻の葉子に、どんなことをされるかわかったものではない。SMプレイと割り切ってはいるものの、恐怖や不安が、まったく無いとはいえないのである。

「なんですって」

葉子は、また足の裏で、夫の顔をぎゅっと踏み潰した。

「お願いだ。防空壕だけは、かんべんしてくれ、葉子」

「葉子さま、だろう」

「葉子さま」

三田は、うらめしそうな声をだした。

「だめだよ」

「身体をこわしたら、働きにいけなくなる」

「たまには、いいでしょう」

「葉子の、いや、葉子さまのお店を早くつくるのでしょ」

三田は、防空壕に閉じ込められるのが、よほど、おそろしいらしかった。

「フフ、こわいの」

葉子は、三田の口に、足の指を突っ込みながら笑った。

防空壕の中には、勇が閉じ込められた炭俵や、形ばかりのむしろが、そのままになっており、勇に残飯を食わせた洗面器がころがっていた。

「勇、パンティをとってよ」

と葉子は、部屋の隅に丸められて、ほうり投げられているパンティを指さした。

勇が居候するようになって、三田が、妻の葉子に、やいやいってパンティを穿かせるようにしていたのである。

パンティなど、あまり穿いたことのない葉子だが、とにかく、だらしないから、穿けば穿いたで、三田が脱がせないかぎり、いつまでも穿いているから、いつでも、しつとりと濡れている。だから、葉子のパンティは、つまんだだけで、葉子の体臭が鼻をつく。

勇の手から、汚れたパンティを、ひったくると、

「ちよっと荒っぽいことをするからね、舌でも噛まれたら大変だ」

と、夫の口の中に葉子は、そのパンティを押し込んだ。

「よくしみこんでいるから、噛みしめていれば、味がでくるよ」

三田がパンティを吐き出さないように、葉



子は荒縄で、三田の顔を、がんにがらめに縛ってしまった。

足首に縄を巻き、綱引きのように、勇に引っ張らせておき、葉子は夫の髪と、襟首をつかんで、ずるずると穴のほうに引きずった。

「ううう」

と三田は呻いた。あまり力一杯、髪を握られて毛が脱けそうな激痛を感じたのだらう。

三田の頭が、畳から、穴にたれた。

「いいかい、引っ張っているんだよ」

勇にそういうと、葉子は更に力をこめて、夫の上半身を穴の中に落ち込ませた。

三田の頭が逆に穴の中にたれて、たちまち顔色が変わった。

「フフ、こわいのかい」

折れ曲がって盛り上った腹の上に、葉子はのっかった。

「げっ」

という悲鳴が、パンティの猿ぐつわから洩れたようであった。

「いつまで縄を持っているんだい」

必死に縄をにぎって、三田が逆さまに穴の中に、ずり落ちないように力んでいる勇に葉子は、いった。

「土台の足に縛っておしまい」

夫に対して妻の葉子が、あまりにも残酷なことを平気でするので、勇は頭の切りかえがなかなか出来ないようであった。

「土台」

「ぼやぼやしていないで早くおし」

荒縄をのばして、八畳をつきぬけ、縁側の下の土台に縄尻を固定した。

家が小さいから、縄をのばせば、すぐ家をつきぬけてしまう。

葉子は、三田の折れまがった腰のあたりに立って、踏みつけていた。

「見てごらん」

と葉子は勇にいった。

「こんなことまでされて、悦んでいる」

葉子の足の下に眼をはしらせた勇は、フーンと感心した。葉子の言葉は嘘ではないのである。

「こいつは、本当に雄犬なんだねえ」

雄犬という言葉に、M男というものを侮辱した響きが、こめられている。

長襦袢の裾をまくって、葉子は、三田の胸のあたりに、またがった。

「勇」

と手まねきして、

「ちょっと」

と、乱れた長襦袢の胸許を更にはだけた。とにかく、葉子は舐めさせるのが好きなのである。

勇は、三田を気にした。

頭を穴に下げているのがつらいのか、三田は、なるべく頭をもたげようとしてもがき、三田と勇の視線が合い、勇はあわてて三田の顔から眼をそらすのであった。

葉子は、ぐっと尻を落とした。

「――」

三田の呻き声が、葉子のパンティの猿ぐつわに消え、三田が、いたずらに首を振って、もがくのを、勇はぼんやり見つめていた。

葉子の三田に対する攻撃は、それこそすさまじかったのである。荒れ狂う葉子に、勇は呆然とした。

葉子の吐く息が荒くなった。

「勇、おいで」

両手をひろげて、葉子は勇を呼んだ。かたく凝り固まった乳房の先端が、勇の舌に突きささった。

「ううう」

苦しそうな呻き声が三田ののどから湧きあがり、齒ぎしりしているようであった。

「うるさいわね」



葉子の足の裏が三田の顔を踏みつけた。

三田の頭が、がくつと下に垂れた。

「縄を切って」

と葉子は勇にいった。

勇は台所から庖丁を持ち出すと、足のあたりから縄を切った。

ずるずると三田の身体が穴の底に、すべり落ちた。

「そこで寝ておいで」

と穴の中を見下ろしながら葉子が、おもしろそうにいった。

「明日は、特別に許してやるから、休んでもいいよ」

三田が何かいいたげに、顔を動かした。

「そのかわり、一日中、その穴の中に閉じ込めておいてやるからね」

穴のふちにしゃがむと、葉子は長襦袢の裾をはしよった。

「オシッコをひっかけておいてやるから、安心して、おねむり」

葉子の放尿音が、やけに鮮明に響き、穴の中に湯気が立った。

「床板をはめて」

と葉子は勇にいった。

穴が閉じられた。

「畳」

葉子は、夫が暗黒の中で何を考えているのか、何を思っているのかを、想像するだけで

興奮してくるらしいのである。

「ここへ布団を敷いて」

と葉子は勇にいった。

夫を閉じ込めた穴の上に、葉子は布団を敷かせようとするのである。

「この上にですか」

勇は呆れたようにいったが、

「いいから、敷いて」

「は、はい」

おそろしいけんまくにおされて、勇はあわてて、三田の布団を持ってきた。

葉子は、長襦袢をひき剥ぐように脱ぎすてもうれつな勢いで勇に抱きついて布団にころがりこんだ。

上の気配は、布団から畳に、畳から床板に床板から穴の底にと、ようしゃなくつたわって、縛られて穴の中に閉じ込められている三田の耳に聞こえることだろう。

「噛んで。勇、強く噛んで」

葉子が叫んだ。

強烈な何かが、葉子の体内に湧き上ったようであった。

「噛んで」

と葉子は、また叫んだ。

### 【伝言板】

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。今暫くお待ち下さい。願います。

尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。

○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。

○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。

○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。



# SM写真構成家としての辻村隆②



## 辻村隆研究

「伊藤晴雨の後継者こそ、この道一筋に生きて来た辻村さんですよ」

「藤本義一「サロン楽我記第五十四回」昭和四十三年 十二月号

夫 紀 悠 吹 絹

昭和二十九年 一月号

○屈伏への過程

——女が女を責めるポーズ——

発表作品は全部で四枚。表題に過程とあるが、必ずしも厳格に守られていないようである。責める女も責められる女も、すべて裸身である。一枚目は目下、縛り中といった構図で、後手にした女を膝で押えつけて縄をしごいている所。二枚目は完全に縛り上げ、うつ伏した女を更に逆海老にしようと、責め手の女が足首を縛った縄を後手の方に引っ張っている所。三枚目は縛り終わって猿轡をはめて

いる所。最後は、女を四つばいにして、それにまたがった責め手が女にくわえさせた縄を手綱がわりに、これから乗り廻そうという図である。

結局、辻村イズムで完全に縛った写真は、

二、三枚目だけである。全体として、女性が女性を責めるといってもSMの烈しさはなく又、それだけに、この可愛らしい女が可愛い女を縛ったり、猿轡をはめる時、一体どんな気持ちになるのかと、種々観る者をして、楽しくも妖しい連想をさせられる作品である。特に三枚目の、縛られて今、猿轡をはめられつ

つある女の、哀しそうな表情が、よくとらえられている。さて、この美少女は、お姉さまから如何なる悦虐的責めを受けようとするのか——。

○台上的殉教者

一枚の細い板に一人の美人が縛られ、それを二人の裸女が持っている。女奴隷が主人の前に捕えて来た女を引き出した所か？

二枚ある作品中、一枚は台上的殉教者がかさまに頭を地に、裸女達は縛られた女の足の方を、ぐいと高く持ち上げている。二枚とも、縛られた女の恍惚としたM的な喜びをか



みしめている表情が実によく、そこはかたない哀愁さえ、たまたま美しい写真である。

この作品は、辻村氏にしては珍しく、縄を沢山、使って、女の胸から足首まで、がんじがらめに縛ってあるが、その縄の多量さが少しも邪魔にならない。かえって腰巻の上を、締めつける幾筋かの白い縄が、強烈な興奮的アクセントとなって、S的效果を、あげている。

このような美しい殉教者を捧げられた男は如何なる魔王か、いや、これこそ最上の幸運者にちがいない(註)

昭和二十九年 二月号

○猿轡をするまで

一人のシュミーズ一枚の女が、着物姿の女を捕えて縛り上げ猿轡をはめて、完全に自分の支配下に置くまでの六枚の写真集である。

これは、極めて象徴的な作品である。即ち昭和二十六年に講和条約が締結されたとはいえ、まだまだアメリカの精神的、物質的支配下にあった日本の姿を、表現していると言えるからだ。

①日本子は押し倒されると、アメリカ嬢に左手を後ろにねじ上げられた。早くも、その手首にはロープが固く結びつけられている。②

アメリカ嬢は、ゆうゆうとロープを口にくわえて、しごきつつ日本子を縛りにかかる。日本子は、ただオドオドとしてもうすっかりアメリカ嬢の意のままである。③やがて日本子を、うつ伏せにし、シュミーズのすその乱れもかまわず、日本子の尻のあたりに馬乗りになったアメリカ嬢は、完全に日本子の両手首を縛り上げてしまった。④そして邪険に日本子を起こし、首縄をかける。日本子の腰巻の乱れが哀しい。⑤アメリカ嬢は日本子の黒髪をつかむと、ズルズル柱の所へ引っ張って行く。痛そうな日本子……。⑥日本子は、もうすっかり着物を脱がされ上半身は裸である。アメリカ嬢は角張った柱に日本子を縛りつけると、顔をぐいと仰向かせ、口にハンカチをつめこむ。やがて本格的な猿轡をはめようというのである。アメリカ嬢の足元には手拭いが置いてある。日本子は豊かな乳房の上を二筋、下を一筋、縛られて、足を曲げて坐っている。もがくうちに解けたのか、ゆるい腰巻が、僅かに、日本子の股のあたりを掩うのみ――。

この写真集で一番の傑作は最後の六枚目。柱に縛られた腰巻一枚の女が、無理やりにシュミーズ一枚の女から、口につめ物をされて

いる写真であろう。女が観念して、責め手のなすがままになっている哀しさがよく出ている。なお、この写真集の説明で、辻村氏は、「次号では三女の闘争」を発表すると予告されたが、これは何故か果たされなかった。

昭和二十九年 三月号

○縛り写真のアルバム

両手吊り(モデル杉美美)

逆さ吊り(モデル川端多奈子)

先ず二枚の吊り写真が注目される。

「吊り」は辻村氏の最も好む縛り方の一つである。それは氏が、昭和四十一年九月号のS Mカメラハント『黒髪長き柔肌』において、「私は大体吊ることが好きなタチでしてネ」と発言されている事からも分かる。

強烈なのは『逆さ吊り』の方である。川端嬢は黒布の猿轡をはめられ、手足を厳しく縛られて天井から吊るされている。トリックでない証拠に火のついたローソクが傍に置かれている。

伊藤晴雨の有名な写真に、妊婦の逆さ吊りがある。それとこの辻村氏の作品を比較すると、晴雨の作品にみられる先駆者的な、すさまじさはないが、晴雨の作品には全くなかった女臭さ、リリズムが満ちあふれている。



それは晴雨が、芳年の浮世絵の『孤っ屋』の構図が果して可能であるか否かを調べるために妊婦を（しかも出産間近であったそうだ）吊るした、全く晴雨個人の実験的作業でありそのため、吊るされた女の歯を喰いしばった隠せない恐怖の表情（そこには少しも女の優しさなどなかった）が、観る者の目をひき、全体がグロテスクのトーンで統一されていたのに対し、辻村氏のは、構成者の氏のフェミニズムと、モデルの川端嬢のマゾヒズムが渾然一体となって、氏の緊縛美の一つの可能性を追求する姿勢が、鮮明に打ち出されているからである。故に、それはグロテスクでなくロマンティックである。猿轡を通して、川端嬢の悦虐のくぐもり声が聞こえて来そうな写真である。

『両手吊り』は、素晴らしい『逆さ吊り』と同じ頁にあるため、面白い意図を持っているものの、かなり損をしている作品である。

裸体の杉嬢が、説明によると「胴を縛った縄をお尻へ廻して、その縄尻で両手を揃えて縛り、丸太に通して吊ったもので、爪先だけで立っている」ものであり、一見、ただそれだけという写真であるが、実は縄は女の前から股間を通して背中へ、そして上へ伸びて女

を吊る作業をしている所に、注目すべきである。しかも女は爪先だけで立っているのだ。疲れて体が少しでも下がると、一体、縄は女の何処に喰い込もうとしているのか――。

辻村氏の構成上の意図も、そこにあったのだろう。

#### 海老縛り（モデル坂口利子）

辻村イズムの一極致といえる、名写真である。発表作品は二枚で、海老縛りを横からみたものと、それを後ろへ倒したポーズのものである。モデルは腰巻一枚の裸体で、その腰巻の濃い襷のエロティックな味わいが、なかなか効果的である。

女は高手小手に、そのため、水平に組み合わせられた両腕は腰紐で固く縛られている。縛られた両手首が美しい。軽く揚がった両手が可憐である。腰紐は、ふくよかな腕を、ぐいと締めつけて三筋、乳房を上下から、はさみ込むようにして縛っている。ぶくんと突き出た丸い大きな乳房が、観る者の官能を刺戟する。深くあぐらを組まれた女は、首と足首を二筋の腰紐で短く連結されたため、体を折り曲げて、顔をカメラの方に見せ加減に、うつ向く。そして勿論、辻村イズムの鼻を掩う白布の猿轡！ 女の、腰から背中、首筋まで

の、ゆるやかな曲線が極めて美しい。実に心憎いばかりの構成である。

倒したポーズの写真は、腰巻を通した尻の円みと、腕に喰い込む腰紐の厳しさ、恍惚とした女の表情がよく捕えられた迫力ある作品であるが、辻村イズムの完成度からいえば、横向きポーズの作品の方が優れていると言える。何時まで観ていてもあきず、まさに傑作とは、こういう作品をいうのであろう。

#### ○半吊り二態

一態は、二人の裸女が肩を並べて、半吊りの状態になっているポーズである。二人とも完全なる高手小手、手首や両腕を締めつける縄は固く、辻村イズムに少しの遊びもない、極めて迫力に富む作品である。が欲を言えば典型的な日本人の体格を示す、この裸女の胴長は、なくもがなのものであった。背中半分位で下をカットし、高手小手の後手のみを強調したら、更に迫力ある作品を作り出すことが出来たのではなからうか。その時、この写真の持つ緊縛美に、観る者は必ずや感動させられるに違いない。

思うに、辻村氏は『奇ク』ファンの読者へのサービスを考慮し、ヌードを、そえ物にしたので、このポーズをとらせることになった



川端多奈子



瑾に過ぎない。

地に引いて長く乱れた黒髪、女の顔の輪郭、喉から乳房、そして腹部への、ゆるやかな曲線、縛られてくびれたため一層、円く突き出た尻の線等女の優しさ、柔らかさ、美しさを、見事に描いた作品である。秀作。

昭和二十九年 四月号

本号の目次には、口絵写真の欄に辻村隆、杉原虹児構成として『高手小手二態』『さるぐつわの掛け方』『柱しぼり・引廻し』等の作品が記載されている。しかし、本文中には『高手小手二態』にのみ杉原虹児構成とあるので、それ以外の写真——無署名であるが——を全部、辻村氏のものとして考察する。

○さるぐつわの掛け方（モデル中富綾子、村田那美子）

これは紛れもなく辻村氏の作品である。というのは二十九年一月号の『屈伏への過程』の時の一場面と思われるからだ。猿轡の模様も同じである。

後手高手小手に縛られた手は揚るともなしに力なく、すでにこの女が、責め手にすっかり身を任せてしまったことを表わしている。女に猿轡をはめようとしているのも裸女で、その横向きの可憐な顔が優しいだけに、これから如何なる甘美な責めが行なわれるのか、思わず想像をほしきままにさせられる写真である。責め手の女は、縛った女の口に今一杯の布を押しこんで、猿轡を、はめようという所。布は、ぐいぐい女の口に押し込まれて行く——。

縛り方は典型的な辻村イズムである。

○『柱しぼり』（モデル坂口利子）

手足を黒紐で厳しく縛られた女が柱につながれている。この写真は、取り立てて言う程のポーズをとっていない。しかし構成上、ある一つのことによって、極めて迫真性に富んだ捨て難い傑作となっている。

それは女の両方の乳房を真中から二つに縛ることによって出来た見事なくびれである。しっかりと閉じている女の目が、そのくびれの固さと悦虐の心情を語っている。

ただ、女がはめられている猿轡は、辻村氏がとらない、外国式の布をくわえさせる型であるのは、そこに実験的な意味を持たせたの

のだろう。辻村氏の温かな人間性を示す作品で、この写真の欠点は微笑ましい。

もう一態は、仰向いて後手に縛られた裸女が、体の三カ所——腕と胸を縛った箇所、腹部を縛った箇所、腰と股を縛った箇所——で上から吊られている写真である。両足は足首を縛られ折り曲げられて、しかも後手に縛った所に結んである。

この作品の欠点は、辻村イズムから少しずれて、縄のゴテつき気味の所であるが、全体の素晴らしさの前には、それは僅かの瑕



であろう。もしこれが、鼻から下を掩った辻村イズムの完全なものであるならば、閉じられた目が更に強調され、妖しい雰囲気は、いやが上にも高まったであろうと思われる。

#### ○引廻し（モデル杉美美）

黒紐で縛られた裸女が、歩こうとするのを後ろから縄尻を引っ張って、押しとどめていくポーズである。女は、厭がって逃げようとするのであろうか？

裸女を斜め背面から撮ったため、表情は分からない。しかし、乳房の大きくびれが、縛り方の固さを示している。両手は高手小手でなく尻の方で合わせて縛った形式である。思うに辻村氏は、この動的なポーズに興味を持たれ、掲載されたのであろう。

#### 昭和二十九年 六月号

#### ○白衣の女

四枚の作品が発表されている。（モデル萩千恵子）

全部、白衣をまとった女を縛ったもので、縛り方で優れているのは、二枚目のものである。完全な高手小手、肘は水平に持ち上げられている。両足首を縛った縄は、海老縛り式に女の肩口に回り、後手の方とつながっている。

総体的に、全体の表情が優れているのは四枚目の作品で、ただ三筋の縄が女の胸と腹部を縛るのみ。じっと観る者の方を見つめている女の美しい目差しは、百万言をもって我々に語りかける。清らかな美しい写真である。辻村イズムにおけるロマンティズムの一表現である。

#### ○縄の四十八手（前後共、荒縄、一文字縄、後ろのみの菱縄、前後共、十字縄）

モデル名は書いていないが、このグラマーな体、肉感的な美貌は、まさに伊吹真佐子である。

それぞれの項目が背面、前面、横面と三枚ずつ発表されている。

すべて、縛り方についての実験的な意味を持つ作品であるが、総じてよいのは『前後共十字縄』である。豊かな乳房を締めつける縄少しも動かすことの出来ぬ両手首等、緊縛感を充分、感じる、女のM性をかきたてずにはおかないような縛り方である。次が『前後共菱縄』で、これは『後ろのみの菱縄』とともに、辻村氏の好んで用いられる方法である。二十七年十月号、二十八年四月号の川端嬢はしばしばこの方式で緊縛されていた。背面の菱型がシンメトリカルで美しく、この縛り方

に愛好者の多いのもうなずける作品である。

全体的にみて、いずれも両腕は水平に厳しく縛られている。こういうのが、辻村イズムの縛り方であり、氏の大いに主張される方式であった。それが如何に、緊縛美あふれるものであるか、本号の写真が、見事に実証している。

#### 昭和二十九年 五月号

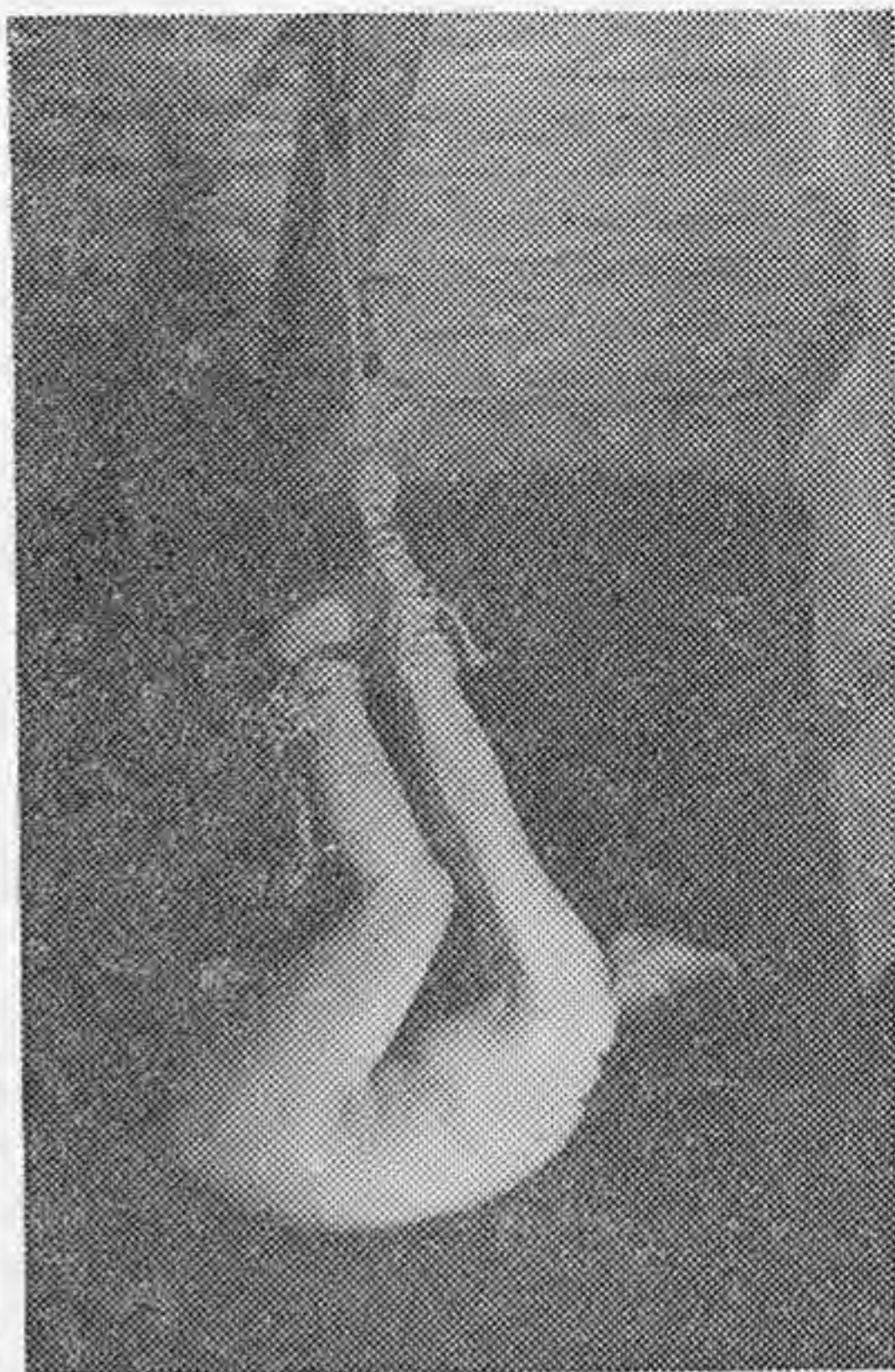
目次には口絵写真として『後手足首縛りと一本縄』『床柱、後手縛りの二態』辻村隆、杉原虹児構成としてある。しかし、本文では『後手足吊り』（目次の『後手足首縛り』がこれであろう）と『一本の縄』の頁にのみ杉原虹児構成とあるので、残りは全部、辻村氏の作品と判断する。即ち『後手縛りの二態』（モデル伊吹真佐子）『床柱』（モデル同）である。

先ず『後手縛りの二態』であるが、それは『後手首縄』『後手首縄足首縛り』の二枚から成っている。

『後手首縄』は、華やかな腰巻一枚の裸女を高手小手式に両腕を、ぐっと持ち上げ、ただし両手首は重ねずに手の甲を合わせ、両手首を縛るといふ変形縛りにしてある。そして両手首の縄は、そのまま首にかかり、女は別に



川端多奈子



ように通っている一本の縄に、注目すべきであろう。極めてエロティックな味を持っている。

『床柱』は、完全なる着衣の写真である。セーターにスカート、靴下をはいた姿の伊吹嬢が、白い腰紐で二筋、オーソドックスに縛られている。必ずしも、

されている。伊吹嬢は黒いパンティ一枚の裸体で正坐し、縛り終わった最後の一枚を除いて全部、背面である。パンティの濃い襷がエロティックである。

さて、最初に伊吹嬢は「左手首に縄を二重に巻いて」縛られる。それから「両方の縄を手首際で結び、縄尻を腋の下へ」廻す。廻した縄は「両方の二の腕に二巻きして締めつける」。もうこの辺まで来ると、伊吹嬢は充分縛られた形になっている。あとは余った縄の処理である。つまり「胸で交又さして背中の方へ戻し」「背中の縄に通して締め上げる」

「縄尻を二の腕へ廻して腋のところで一ひねり」して「お腹の前で結び目を作り両膝を揃えて」縛り終わるのである。

この一連の写真中、七枚目の縄尻を腋のところ、ひねっているものは、黒いパンティ一枚の伊吹嬢が、高手小手に両手首、腕、背とも厳しく縛られているのがよくわかり、特に伊吹嬢の顔近く、縛りつつある辻村氏の下半身が写っている構図は、かなりのSM的効果をあげるのに役立っている。まさに好写真で、この連作中、第一の作品であろう。

昭和二十九年 八月号

○セルロイド輪利用の乳枷

腕も胸も縛られてはいないのだが、それ以上うつ向くことも、もがくことも出来ない。首が締まるからである。猿轡は白布で、ただ口を掩うだけのもの。辻村イズムではない。これも、或いは実験的なものか、又はモデルの希望によるものであろうか。

『後手首縄足首縛り』は、先のポーズの女を更に、それぞれの足首と首を一本の縄で結んだものである。故に先のポーズよりは動くことが一層、不可能である。

黒一色の背景に白い裸女、伊吹嬢の髪のリボンが可憐で、美しい表情に有効的なアクセントをつけている。豊かな尻の下を喰い込む

辻村イズムというわけでもない。スカートは乱れ、靴下のガーターと、ものの一部がエロティックに覗いている。白い布で、これは辻村式猿轡をされた女は、目を閉じて猿轡一杯の顔を仰向いている。女は無理やり旅館へ連れこまれたのか、或いは床柱のある日本間でボーイフレンドによってSMプレイを開始されようとしているのか――。

しかし、それにしても猿轡は何と素敵な緊縛美のためのアクセサリなのであろう。

昭和二十九年 七月号

○写真図解 縛り終わるまで

モデルは伊吹真佐子で、八枚の写真が発表



二十八年十二月号のビニール紐と鎖の応用は、かなり好評だった模様で、辻村氏は、その撮影の時、準備したセルロイドの輪を今度は乳枷に使用して、この作品を発表された。モデルは伊吹真佐子。

写真は、腰に一枚の布を巻いた裸体で横坐り正面の伊吹嬢が、乳房に丸いセルロイド製の輪をはめられて、後手に縛られているポーズである。乳枷による乳房の強調が、この作品の主眼であるから、同女を縛る縄、及び乳枷をつなぐ紐は緊縛感はなく、あっさりとしている。しかしこの作品は、全体的なトーンを見るべきで、その点、伊吹嬢のあきらめの表情、これから来るべき愛撫的責めへの期待の表出等、彼女のグラマーな肉体と相まって素晴らしい好写真となっている。欲をいえば、腰にゆるく巻いた布は、なくもがなの感を与えている。むしろ、取り去ってパンティ一枚にするか、布を巻くならば腰巻式に、ぴったりと肉体の線を出すようにすべきであつたろう。

### ○片足吊り

モデルは萩千恵子。

これは辻村氏の一種の遊戯的、実験的作品であろうか。モデルは裸身でなく、ただ片足

を上から吊られているだけである。しかし、強制的に女の股が広げられている形になっているため、観る者をして或る種の空想にふけらせることは確実である。

### ○くさり

モデルは伊吹真佐子。

裸体の伊吹嬢が、両手を高々と上げ、手首を鎖で縛られ吊られている構図である。これも『片足吊り』と同様、遊戯的、実験的なもので、辻村イズムによる緊縛美から、程遠い作品である。

ただ、この作品が大いに鑑賞に耐え得るのは、グラマーな伊吹嬢の肉体の美しい線であろう。彼女は両手を上に、ぐんと伸ばしているため、手の指から手首、腕、肩、胸、腰の柔らかな曲線が素晴しく強調されているのである。その意味で、辻村氏は緊縛美とは違った女の美しさを、伊吹嬢を使用することによって見事に引き出すことに成功されている。

伊吹嬢が十字架のペンダントをつけているのに、或いは注目すべきかもしれない。即ち辻村氏は、外国風のムードを狙われたとも考えられるのだ。

いずれにせよ、これは緊縛感はないが、まさに一枚の芸術写真とも言うべき、美しい作

品である。

### ○後手

モデルは村田那美子。

本号中、一番辻村イズムにのっとった作品である。

裸身背面で、モデルは前面に股を広げ、両足は、それぞれ一本の棒に縛りつけられているのが分かる。腕は、きっちり水平に厳しく縛られ、縄は更に両肩口から胸部へと廻っている。完全に縛者に屈伏した女の写真でありやはり辻村イズムというものは、SM写真構成上、あらゆる主張を超越して、一つの極点を指し示すものであることが理解できる傑作である。

### ○連縛

村田那美子、杉美美、坂口利子の三人を縛っている。『連縛』と題しているが、どのように三女が連縛されているのかは、はっきりしていない。いずれの女も高手小手に、辻村方式によって縛られているが、この作品には極めて致命的な欠陥がある。それは杉嬢を縛った縄が一本、大きくゆるんでいること、そして坂口嬢の後手に縛った縄が、少しゴテついている点である。これは、いずれも辻村イズムに反することである。辻村イズムに反す



るSM写真は、いかに観る者の感興をさまたげるか、氏はここに好見本を提供されてしまった感がある。極めて残念であった。

辻村氏は昭和二十八年九月号にも二女の連縛を発表されたことがあった。緊縛感においてロマンティックな感じにおいて、その九月号の方が、辻村氏の味がよく発揮されていたと思う。

#### ○後手（腰紐）

モデルは中富綾子。

腰紐で後手高手小手に縛られた斜背面からの写真である。モデルの体は強烈にくびれていかに緊縛されているかがよくわかる。丸い肩口から後手に組み合わせた両手の指の先までの曲線、縛られたくびれ、円い乳房等のかもし出す雰囲気極めてエロティックである。両手首を縛った腰紐は、更に尻の方へ伸びている。そして腰を縛った紐が、それを支えて、結局、この女の何処を責めつけているかが解るのである。モデル嬢の羞かしげな伏し目がそれを物語っている。佳品である。

#### ○鞭撻（革帯）

モデルは杉芙美。

二十八年十二月号のビニール紐と鎖の利用でみせたと同じ方式で縛ってある。

しかし緊縛感、さしてなく、ただ変わった縛り方という点が珍重されるであろう。手拭で猿轡がはめてあるが、これは辻村方式でなく、ただ口を掩うものである。しかし一寸顔を横向けに倒した様に構成したため、モデルの表情がよく、猿轡の持つSM的な味というものは、かなり色濃く出ている。猿轡とは不思議なものだ。写真左下方に一寸、革帯が見えるが、それでモデル嬢が鞭撻されている状態を示している。当時としては注目に値する作品である。

#### ○ACTIVEとPASSIVEの美しいPOSE

モデルは責め手を春日ルミ、縛られた女を伊吹真佐子が演じている。

発表作品は二枚で、一枚は、黒色パンティ一枚の伊吹嬢が、豊かな乳房の上と下を二筋はつきりとくびれの様子が解る程、厳しく縛られ、坐らされている。その背後に立つ春日嬢は、白のブラジャーとパンティ、黒色ハイヒール姿。きつい表情で伊吹嬢の口に縄をかませ、後ろで締め上げているポーズである。伊吹嬢は口を半開きにし、頬が二つに割れる程である。春日嬢の締め上げ方が、いかに烈しいかが解る。伊吹嬢の白い裸身に黒色パンティが効果的で、かなり強烈な官能的印象を

与える名作品である。

もう一枚は、手拭いをくわえる外国式の猿轡をかまされた伊吹嬢が、春日嬢から髪を握られ、ぐいと上から前へ押しつけられたポーズである。乳房の上に喰い入る縄目が、身動き出来ぬ伊吹嬢の縛られ方を示して余す所がない。伊吹嬢の両手は水平に持ち上げて縛られ、すっかりあきらめの目を閉じる彼女は、ただ春日嬢の女特有のネチネチした責め方に身をゆだねるのみである。

以上、二枚の作品は緊縛感申し分なく、本号における辻村氏の作品中、まさに第一位の写真であろう。

○縄を用いない責め遊戯 お姉様、熱くな

いかしら？

モデル伊吹真佐子、春日ルミ。

表題の如く伊吹嬢は責められる役だが少しも縛られていない。二枚、発表された写真中一枚は、伊吹嬢が春日嬢から蠟涙を腿に落とされている所。もう一枚は、春日嬢から、腿を抓られている所。ただ、それだけの写真である。

昭和二十九年 九月号

#### ○野外縛りの記録

『岩を噛む溪流へ流そうとする』『松の幹の



晒し』の三枚で、モデルは、伊吹真佐子である。

辻村氏は過去において二回程、野外縛りを発表されている。例えば、昭和二十八年十月号の、村田那美子を使ったものであり、又同年十一月号の『溪流に縛られて』である。それらと本号との作品を比較すると、本号の方が十月号より数等、上位であり、十一月号などとは比べることが出来ない程。勿論、本号の方が優れている。

辻村氏は、かねがね「川の中での水に濡れての撮影や、樹木を利用しての強度の縛り」に意欲を燃やされていた模様である。（昭二八・十『野外の責場撮影にて』）それが十月号の時はモデルの突然の生理的変調によって中止を余儀なくされてしまった。又、十一月号に発表された作品も、必ずしも辻村氏の美意識を反映しているとは、言えないものである。しかし、外的条件によるとはいえ、これらの作品の持つ低調さを、打破して余りあるものが、実に本号発表の写真なのである。

三枚とも、いずれも素晴らしいが、先ず『岩を噛む溪流へ流そうとする』から観ると、奇岩に砕けて白いしぶきをあげている急流に伊吹嬢がつけられ、まさに下流へと流れて行く

うという構図である。

この作品は二点で、画期的なものであり、

第一は、その縛り方の卓絶さにある。

伊吹嬢は仰向けに寝かされ一筋の縄で厳しく縛られている。まさに、一点非の打ち所のない辻村方式である。そして更に加うるに、後手から肩口へ回し、腹部で結びあわされた二筋の縄は、そのまま一本となって固く伊吹嬢の股間を通っているのである。これは従来ただ股間縛りを匂わせた写真の多かった辻村氏には、飛躍的な意味を持つものである。それにしても、何とこの写真の股間縛りの無駄なく美しいことであろう。

伊吹嬢の両足を少し曲げさせた氏の構成は可憐さを出す上に成功している。

第二は、彼女の身にまとうているナイロン製コートの光沢が、極めてエロティックであること。

即ち伊吹嬢は、白色地に花模様のブラジャーとショーツの上に、透明のナイロン製コートを、ぴったりと身につけているのである。

そして縄で、その上から縛ってあるのだが、そのため、ナイロンが各所で引き吊って皺を生じ、特にものの付け根のあたり、腹の中心を通る二筋の縄に、ぐいとたぐられて、その

皺が股のふくらみを強調し実にエロティックで、観る者をして飽かしめない。

そもそも、この写真は、奇岩と清流、もし伊吹嬢がいなくても、一枚の立派な芸術写真なのである。その美しい背景に、一人の縛り美人を横たえた構成は、実に心憎いばかりと言うべきではないか。

伊吹嬢が黒布で、しっかり猿轡をはめられていることも、さらにこの写真の価値を増大せしめているよう。

『溪流へかけられた木に仰向けに縛る』

写真中央を左上方から右下方に一本の太い木が、溪流をまたいで、かかっている。伊吹嬢は、その木の上にショーツ一枚の体を長々と横たえ、三筋の縄で縛りつけられている。三筋の中、二筋は、ふくよかな彼女の乳房をはさむようにしており、両手は高手小手でなく、太い木を背負うようにして、縛られている。手首に巻きついた幾筋かの縄は、見るからに固い。伊吹嬢は目を閉じ、すっかりあきらめて、ただ縛る者のなすがままだになっている。その雰囲気が強くと出ており極めてよい。

『松の幹の晒し』

写真の、ほぼ中央を真っ直ぐに、一本の太い松の木が立っている。伊吹嬢は、その木を





けた松の木は、中央にいかめしく、そそり立っているのだが、その背後の木々は皆一様に、ぼかされて美しいトーンを形成しており、これが裸美人の緊縛美の構成に効果的な役割を果たしている。

以上、三枚の写真は、S M写真構成家としての辻村氏が、合わせて並々ならぬ芸術的感覚を示してくれた

背負うようにした立ち姿で縛られている。そのため彼女の両手は、ぐっと後ろに引っ張られ、必然的に胸が強調されて乳房が、より円くなり、全体的に健康なエロティシズムを放散している。伊吹嬢は黒布猿轡を、しっかりとめられ、斜下方に悦虐の視線を投げかけている。

縄は三筋で、無造作な掛け方が、かえって技巧をこころさぬ中にも、遊びのない緊縛感を充実させており、そのため、女体の柔らかさが、よく出ている好写真である。

この作品も、また背景が好く、勿論、焦点が伊吹嬢に合わせてあるため、彼女を縛りつ

点に、我々は深い感興と、その成功の原因を探ることが出来るのである。辻村氏の美意識の充分なる駆使は、緊縛美を、より美しいものとし、そもそも緊縛美というものは、ただいたずらに縄を締めつけることによってのみ生じるものではないという、好見本を示している。

私は本号の作品の傑作ぶりに感動して、思わず贅言を費やしたが、考えてみれば、辻村氏にこの傑作のあることは至極当然なのである。我々は、ここで改めて想起しよう。辻村氏の追求するものは、より高度な美的感覚の持主によってのみ、はじめて理解し得る、あ

の頽廢的緊縛美であることを。――

昭和二十九年 十月号

○猿ぐつわ遊戯

伊吹真佐子嬢と春日ルミ嬢が演じている。

この写真が氏の従来の作品と異なる所は、伊吹嬢を縛ったのは春日嬢であるということだ。辻村氏が記された説明によると春日嬢は「一度、私に縛らせてごらんさい。変わった縛り方をしてみせるから」と云って、伊吹嬢を縛り上げたという。二人とも長襦袢一枚の姿で、肩肌脱がされた伊吹嬢の両腕に袖がたぐり寄せられているため、縄のかけ方は、あまり判然としない。ただ、伊吹嬢は後手を高手小手でなく尻の方へ下げて両手首、及び腕を縛られ、首縄に結ばれていることは分かる。

故に、この場合、辻村氏がされたことは、二人の女が演ずる猿轡の遊戯のポーズ指導とみるべきであろう。

写真は四枚あり、一枚目は伊吹嬢を「縛り終わってルミ嬢がその具合を見ている所」である。伊吹嬢の、あきらめの表情がいい。二枚目は「ルミ嬢愛用」の「ハンカチーフを真佐子嬢の口へ詰めているところ」である。春日ルミ嬢は伊吹真佐子嬢を、ぐっと自分の胸



に引き寄せ、左手で伊吹嬢の頭をかかえて無理やりに仰向けさせ、その口にハンカチを押し込んでいた。伊吹嬢は目を閉じて、もうなすがままだ。三枚目は押し込んだハンカチを吐き出させぬためだろう。「ルミ嬢は首へかけていた真新しいタオルをとると、真佐子嬢の口へ手早くかまして、ぐいと引きしぼった」ポーズである。伊吹嬢は首を突き出し気味にしているの、かけられた首縄の状態がよく分かる。四枚目は「猿ぐつわをされた真佐子嬢が、お姉さまに甘えて抱かれているところ」で、これで完全に伊吹嬢は春日嬢のとりこになってしまった。可憐な趣きのある佳品である。以上、総べて辻村氏にして、はじめて可能な、女臭さにあふれ、且、ロマンティックな作品である。

### ○組写真 水際散花

モデルは萩千恵子である。

発表された全六枚の写真は、縛った縄により、二つに分類することが出来る。

一つは一、二、三、五、六枚目のもので、モデルは木の葉模様で統一されたブラジャーとパンツ、それに猿轡姿である。すべて萩嬢が準備したものであった。縄は黒ビニールを編んだもの。もう一つは黒色の水着で、猿轡

はなく、縄は白の絹紐を使用している。

前者は第一番目の作品において、最もはっきりと、その縛り方が分かる。

両手は後手に水平に組み合わされて縛られ腕と胸は三筋の紐がかかっている。完全なる辻村イズムである。萩嬢は水際に坐って右足を少しずらし、体を前に倒したため、彼女の尻の線は薄いパンツによって、くっきりと現われ、特に尻のくぼみから太ももの付け根のあたりの曲線は、実にエロティックである。乱れた髪、猿轡、縛り方、女体の曲線等、この組写真中一番の、そして、また辻村氏の全作品中でも忘れ難い傑作である。

次に、注目すべきは五、六枚目のものである。五枚目の写真は、一枚目のモデルの体を起こして斜前方からとったものである。モデルの水平に縛られた両手の状態は、ここでもよく分かり、無造作に開かれた指手首を縛る黒紐、腹部のゆるやかな線等が、捨て難い情緒をかもしている。六枚目は水際に横臥したものの。胸と腕を縛る黒紐、股にびったりはいたパンツとその襞、水中に没してぼんやりと写る足等、実に幻想的な作品である。

後者は、水際の大らかな岩に身をもたれかけて、足を投げ出して坐ったポーズである。白

の絹紐は女の乳をはさむように固く縛っており、後ろに回した腕からのぞいている指の位置で、いかに上に組んで縛ってあるかが分かる。水中にゆらぐイソギンチャクのように乱れた女の髪、きれいな鼻筋、完全なる緊縛感等、観る者をして飽かしめない写真である。

なお、この組写真は、実際に浜寺海水浴場羽衣海岸で撮影されたもので、辻村氏は説明文で興味深い楽屋話をされている。それによると、「萩嬢と事前の打ち合わせでは、群集の中でもかまわないということであったが、いざ現地へきてみると、やはり初めの中は人目のないところを選んでほしいという注文」であった。そして「最初のうちは、どこからともなく集まってくる弥次馬の見物で、萩嬢が羞かしがって一時中止。流石に見物も、カメラの中へ入るのを恐れて近寄って来ない。その中、萩嬢も次第に慣れてきて、見物人が集まってきたり、悠々とポーズをとるようになった」とのことである。

この『水際散花』は献身的なモデル嬢の協力を得たとはいえ、辻村氏の緊縛美探求の真摯なる努力の結晶であり、我々は深い敬意を表せずにはいられないのである。

私は、ここで辻村氏の論文『緊縛の構成と



坂口利子



責めのアイデア』の一節を思わず想起する。即ち、室内と野外での撮影を比較されて、氏は次の如く言われていた。

○ 室内であると、配光が思うままになるし、ゆっくりと落ちていて撮れるが、野外となると、どうしても一抹の慌しい焦りを感じずにはおられない。だから、どうしてもポーズでも一応、お座なりのものしか出来ない。(略) 完全な緊縛、技巧を凝らした責めは、何といっても室内でなければ実行出来ない。

全くその通りであろう。しかし氏の場合はどうであろうか。氏は野外の不利を充分、承知されつつも、その悪条件下で本号の如き、又あの忘れ難い先月号の野外縛りの如き傑作を、次々と発表されているのだ。

一体、これはどうした現象であろう。

思考するに、すべては辻村氏の緊縛美に対する態度に、その原因があるのである。氏は緊縛美というものに、全身的な帰依をされている。それが氏の真摯、情熱、努力を生み出す。故に、いかなる悪条件も氏の前にあっても何程のこともない。そこにあるのは、緊縛美、ただ緊縛美のみである。氏は、ひたすらに、それを追求される。その時、氏の脳裡に展開される絢爛たる緊縛美は、決して尋常のSM写真構成家の、うかがい知れぬものである。その美を観た瞬間、辻村氏の胸中には無意識的に、緊縛美の極致の構成が組み立てられていく。そして氏は、静かにシャッターを

きるのである。

昭和三十年 一月号

○萩千恵子嬢姿態美二態

狭山競艇場での野外縛りである。

この写真は二つの点で従来の辻村イズムのものとは異なり、多分に実験的な意味をもつものとなっている。故に、その点を考察の対象にすべきであろう。即ち、一つは鎖で縛ったこと、もう一つは高手小手でなく、両手は尻の方へ垂らした型であることである。

モデルをつなぎ止めて置くものに、見物席の金網を利用したため、くさりを使用したものであろうが、前年度に氏が発表された、あの優秀な野外縛りの方を、私はとりたいた。

○手袋

モデルは川辺砂登子。

女は裸身だが、腹部から上のみの写真である。女は三筋の縄で乳房の下を、きっちり縛られ、後手にされているため、曲った右肘の下にのぞいている指から、更にこの女の手は水平に組み合わされて縛られていることが分かる。まさに辻村イズムのそれである。女は鼻の上から顔一杯の、あの辻村型の猿轡をはめられ、正面に向いた顔を少し傾けて、視線だけ斜上方を見ている。ひさびさの猿轡で



ある。

この作品の構成において特筆すべきは、女の背後に立つ男（辻村氏実演）が、黒革の手袋をはめて、女を抱き寄せると、柔らかく豊かな乳房を、ぐいと握っている点である。

静的な中にも動的な所のあるこの写真は、たしかに説明文にある通り、黒手袋が女の白肌に素晴らしいアクセントをつけ、しかも柔肌に喰いこむように乳房を握る手袋の指は、さながらシコシコと動いているようで、全体的に実にエロティックであり、また興奮的な名写真である。女の眼差しは、妖しい濃艶な被虐美を浮かべていて、申し分ない。先の『萩千恵子嬢姿態美二態』の弱さをカバーして余りある傑作である。

### ○足首に鎖のある風景

モデルは同じである。

辻村氏は、かつて伊吹嬢にこの様な乳枷を装着させた作品を発表されたことがあった。

川辺嬢は先の『手袋』と同様、白布の辻村イズムによる猿轡、輪の乳枷をかけられて更に肩口から後手に、そして腹部へと縛ってある。彼女の片足首には鎖がつけられ、ずっと長く胸を縛った縄に結ばれている。

この写真の最大の欠点は、胸を縛った縄が

ゆるんでいることと、鎖がこれまた、ゆるいことである。故に緊縛感は大分、そがれてしまった。全体的に、なかなか面白いポーズなのであるが、二頁の右左（この作品は左頁）に、あの優れた『手袋』と並んでいるため、迫力が少しも感じられないでしまっている。繰り返すが、本号の第一位は『手袋』である。実にいい。

### ○鼻いじめ

モデル川辺砂登子。

これは目次にも発表頁にも辻村氏の名前は記していないが、氏のエッセイ『緊縛モデルの素顔その二』（昭三十・四）によると、まさしく氏の作品である。しかも、撮影場所まで辻村邸であった。

『足首に鎖のある風景』と同様の縛り方である。砂登子嬢は鼻に鎖のついた輪をはめられて、顔は横向きだが正面の方に視線を投げている。その眼差しに注目すべきだ。

彼女をつなぐ鎖が、たるんでいるが、SMプレイの立場上、少しも欠点にはなっていない。むしろ、そのたるみが『鼻いじめ』というプレイの感じを強くし、構成は成功している。

この撮影行を書かれた上述のエッセイによ

ると、結髪用の部分品に鎖を通して鼻にはめたのであったが、モデル嬢は「この時は恐ろしくて、いやな怒った顔をした」とのことである。確かに、その表情が、よくキャッチされている。

### 昭和三十年 二月号

#### ○伊吹真佐子嬢緊縛集 鼻つまみ

本号の目次にも作品掲載頁にも、辻村氏の名前は記されていないが『緊縛モデルの素顔その二』により、これも氏の作品であることが分かった。

全部で三枚あり、伊吹嬢は長襦袢一枚の姿である。黒と白のだんだらの紐で無造作に四筋、首と胸と腕を縛られ、後手は水平に近く上げられている。

表題の『鼻つまみ』は一頁大の写真で、それだけに迫力も大きい。縛られた伊吹嬢は黒手袋の指で白い鼻を強くつままれ、息苦しいのか顔は上を向いている。

伊吹嬢の半眼に開いた目は悦虐の色をたたえて、彼女を一種凄艶の気で包んでいる。はだけた長襦袢からこぼれる乳房、その乳首の近くをぐいと締めつける紐、仰向いたあごから、のど、そして胸へと下がる美しい曲線、極めてSM的な作品である。本号の作品中、



第一の傑作である。

あとの二枚で共通する所は、いずれも木刀を小道具として使用している点である。

一枚は縛り上げた伊吹嬢の長襦袢の襟を掴み、木刀を背と後手に縛った間に入れ、こじっているポーズである。長襦袢を通して分かる伊吹嬢の丸い肩、その下を縛る縄、伊吹嬢のあきらめの表情等が、観る者の胸中に迫りS的興奮を覚えせしめる。

もう一枚は仰向けに寝た伊吹嬢で、縛り方は前の二枚と同型であるが、彼女のふくよかな胸の上にはこれは又、無惨にも男の足がのり、横向きの顔に、はつきりとへこむ程、木刀が押しつけられている。伊吹嬢は観念の目を閉じ、痛々しくも美しいポーズである。

本号における辻村氏の構成は、一つの部分的な条件を設定して、その中にモデルを合致させ、それらの総合から緊縛美を引き出すという手法をとっている。更に深化した氏の構力を観るべきである。

#### ○クリップ責め

モデル川辺砂登子。

これも、『緊縛モデルの素顔其の二』により、辻村氏の作品であることが判明した写真である。

モデルは裸身。豊かな乳の下を二筋の縄で縛ってある。腕のくびれが、その固さを示している。両肩口から降ろされた縄は両乳の間で結ばれ、乳の下をくぐって胸を縛った縄につながれている。白布の鼻から上を掩う辻村イズムの猿轡が、極めて印象的である。

さてモデルの女は、それだけでは許してもらえなかったのだ。

大きな乳房は、その下をぐいと縛られているため、より強調されて垂れ下がらんばかりである。その乳首を、紙をはさむのに使うクリップで両方とも、つまんである。更に肩口から前へ結んだ縄に一本の棒をさしこんで、乳房の上を押えるように通してある。こうして女の乳房は、いやが上にもいじめられているのである。辻村氏は、この時の撮影行を回想されて、「偉大なるオッパイにクリップを挟んだ時の彼女のウーンといった表情は実によかった」と言われている。（『緊縛モデルの素顔其の二』）

#### ○女体の荷造り

（サディストの夢を実現した）とサブタイトルがついている。モデルは、やはり川辺砂登子で、これも辻村氏の上述のエッセイから氏の作品であることが分かったものである。

モデルは首を一筋、大きな乳の上を一筋、すぐ下を一筋、腹部を三筋、ももを三筋、足首を一筋、縛られている。そして後手を縛った縄は肩口から前へ回り、胸を縛った縄と腹部の縄、さらに、ももの縄から足首の縄と、つながり合わせてあり、そのため、女は両足をくの字に曲げて坐らなければならなかった。

そのポーズだけでも充分、一見に価するものであるが、辻村氏はその上に、この女を麻の白蚊帳で包んだのである。いや、荷造りしたのである。白麻の布は、女の体の曲線をくっきりと描き出し、その上、ベールを通して女体を観るような効果を持ったため、女はその体から幻想的な美しさまで発揮し出して、極めて美しい作品となっている。辻村氏の構成上の意図は充分、成功したというべきである。

このモデルは、どちらかといえば、きつい表情をしているのであるが『女体の荷造り』では同一人とは思えぬ程、女の優しさ、柔らかさ、美しさが出ている。

私たちは有史以来、女性以上に女性の美しさを知り、描いた幾人かの画家や詩人たちを知っている。同一人物を、かくまで美しく変貌させる辻村氏に、私はそれと同じ感激を覚



えるのだ。それは氏のロマンティズムが如何に香気あるものであるか、また氏の追求する緊縛美が如何に素晴らしいものであるかの、一証拠でもある。

#### 昭和三十年 三月号

昭和二十九年代から、三十年代にかけては『奇譚クラブ』の黄金時代であったから、本号にも沢山のSM写真が掲載されている。しかし、いずれも無署名なのだ。二月号でも同様な状態であったが、幸いに氏のエッセイにより、氏の作品であることを確認し得たものが三、四枚あった。

本号では直感的に辻村氏の作品と思いつつも、残念ながら今度は、それを証明する資料はなく、遂に僅か一枚しか取り上げることが出来なかった。

#### ○押えつけ

モデル伊吹真佐子。

何故、無署名のこの写真を、辻村氏の作品と断定したかといえば、モデルの着ている長襦袢、縛ってある縄、縛り方等が、すべて前号の『伊吹真佐子嬢緊縛集』の、それと同一であるからだ。

説明文にある如く「後手に足をかけて押えつけ、前に倒れたところをヘップバーンの髪

を掴んで引き起こした」ポーズである。

伊吹嬢は正坐をし、体は胸がももに密着している程、前へ倒して押えつけられている。そして、髪をぐいと掴まれているため、あごを突き出すようにして顔を上げています。

伊吹嬢の尻の丸味、高手小手にきっちり縛られた後手の状態等が前号よりよくわかり、何故もっと大きく発表しなかったのかと、編集部が無能ぶりを齒がゆくような良い作品である。

#### 昭和三十年 四月号

本号には一頁大の傑作が、ずらりと並んでいる。『奇譚クラブ』の黄金時代がその極に達した観がある。『奇譚クラブ』の進展ぶりは全く日進月歩で、次号の豪華さは前号からは少しも予想できず、読者は、まさに新しい雑誌を手にする度に瞠目したものであった。

しかし本号も、辻村氏の作品はそれを証すべき資料が少なく、またしても僅か二枚を取り上げるのみであった。

#### ○縄と女体の幻想四態

この中の高瀬忍嬢をモデルにした作品がそれである。

何故ならば、辻村氏が昭和二十八年七月号に発表された『猿ぐつわ五態』の時の高瀬嬢

だからである。それは、彼女の髪の乱れ方、辻村方式による黒布猿轡、縄の太さ、後手高手小手の辻村イズムによる縛り方等から断定し得るのである。

高瀬嬢は右足を前へ伸ばし、左足を少し曲げて立て、顔は膝につく位、上体を前へ倒している。閉じた目、黒布猿轡等が極めて印象的、かつ、興奮的である。真横から撮ったため、女の高手小手の状態がよくわかり、両手首はぐいと上へ持ちあげられている。腕を縛った二筋の縄は、きれいな腕を三等分して締めつけ、そのくびれ方が非常にS的である。柔らかい乳房、大きな腰等、女臭さのムンムンする、しかし一種、詩的な感じも起こさせる傑作である。

女を縛るとはこうやるものなのであろう。もう一枚は、Ligatior photo albumの最初の写真である。

モデル名は記していないが、氏のエッセイ『緊縛モデルの素顔(其の三)』(昭三十・五)から、坂口利子であることが分かる。

一頁大の強烈なS的写真である。

坂口嬢は裸身を黒紐で縛られている。それは、あくまで緊い。二筋の紐で締めつけられて、ぷくっと、くびれた腕。腹部を縛った紐



は肩口から前へ回った紐と、大きな乳房の下をくぐって胸を縛った紐とに両乳の間で縛られ、あたかも胸に黒い蝶をとまらせたかのようになり、結び目を、ぴんとさせている。腹部をくびらせて縛った紐は、また腰から、そしてそれは多分、股へかかっているであろう紐に繋がりが、この女に悦虐のうめきを立てさせておかない。……と、これは私の空想

であって、事実はどうでなく、このモデルに辻村氏は、かなり手こずったと、そのエッセイに書かれている。が、氏の作品を観る場合、真実は必要でない。我々は、そのような不利なモデルを使用しても、これ程のSM的效果、充分の傑作をうむ、氏の力量に注目すべきである。

また、この作品の価値を倍加しているもの

に、久々の辻村イズムの猿轡がある。わざと鼻から下のみを掩っているのだが、この場合猿轡の轢や女の鼻孔が非常に官能的な雰囲気をかもし起している。実に傑作である。

昭和三十年 五月号

本号も度々述べた理由により、次の作品のみを取り上げる。

○桃源境

モデルは伊吹真佐子。

辻村氏が三十年二月号に発表された『伊吹真佐子嬢緊縛集』と同系の作品である。

辻村氏がそのエッセイで言われた、伊吹嬢の着物シリーズの一枚であろう。伊吹嬢は例の長襦袢一枚の姿、二月号の『鼻つまみ』と同じポーズである。ただ、二月号で彼女の鼻をつまんでいた黒手袋の指が、今度は鼻輪の鎖を引いているのである。即ち伊吹嬢は後手高手小手に紐で縛られ、男の右手で髪をぐいと後ろに引っ張られて、顔を仰向かされている。彼女の鼻には、大きな輪が牛のようにはめられ、その鎖を男の左手が上へ引いているのである。

しかも、伊吹嬢の水平に高く縛られた後手は、かなりはつきりと写り、力なく握った両手、夢見る如く閉じた目は、この女が、既に

<b>△強烈な被虐女性△</b> <b>川路むら子子の狂態</b> 本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあつた驚いた典型的なM女。性川路むら子さんの欲望によって、彼女があらゆる被虐の狂態を再び元提供することにします。	<b>股間縛りにうめく</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 一条もまたわめ裸身に只腰のわじわと痛めつけてやまぬ。	<b>羞恥責めに泣く女</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 如何に被虐を求めて泣くのか、ええ余りの泣き声に泣き声のか？	<b>妖気溢れる開股責</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 ねっとうと脂肪を浮かした素足に妖気溢れる。左右に引き開け、妖気が充満してくる。	<b>全裸縛りの引廻し</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>臀部晒し洗腸責め</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 後手に縛られたまま、臀部を洗腸器で洗う。洗腸器が近々と迫ってくる。	<b>露出した全裸肢体</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>両足挙げ羞恥責め</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>壮絶臀部責の妙技</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>悶絶海老縛り地獄</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>片足吊りの全裸像</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円
<b>再びむら子子の狂態</b> 本誌五月号で本誌三のペンで川路むら子さんのマリヤVで再登場した。川路むら子さんの狂態の再登場。その狂態の再登場。その狂態の再登場。	<b>開股責と強烈縛り</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>緊縛と鼻責め悦楽</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>トイレの排泄縛り</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>逆エビ責にあえぐ</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>椅子責でいためる</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>柱に縛る全裸女体</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>後手縛り顔面玩弄</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>両手挙げ縛り媚態</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>悦楽責めアップ集</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円	<b>棒責めの全裸女体</b> 大手札三枚一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円 川路むら子 一組 四〇〇円



桃源境をさまよい歩いていることを示している。佳品である。

だが、その時、桃源境を逍遙していた者は一人伊吹真佐子嬢のみではなかった。豊かな天分に加えて真摯なる努力をされる構成者辻村氏と、卓絶なる名編集者箕田氏に自分の分身を見つけて全幅の信頼をおいた『奇譚クラブ』ファンの読者が、それであった。確かに現在の『奇譚クラブ』が充実していることは私も認める。心から認める。不当なる社会の圧力という極悪条件下で、よくここまでと涙ぐましい思いがする。しかし昭和二十九年代、三十年代は『奇譚クラブ』の文字通りの黄金時代で、当時の『奇ク』は、まさに素晴らしいの一語につきるといふことも否定できないのである。

それは現在の『奇ク』よりも優れていたといっても過言ではない。このことは、実は編集者自身、心中ひそかに認めていることではなかろうか。

ああ、黄金時代の『奇ク』——今、当時を回想すると、まさに夢のような感じがするのである。

しかし、桃源境に遊ぶ『奇譚クラブ』を、

やがて悪魔の黒旋風が吹きすさぶうとは、その時、何人が予想したであろう。

さて、ここでSM写真構成家としての辻村氏の黎明期が終わる。

以上を要約するに、この時期は、辻村氏がその確立した緊縛美理論を写真構成によって確認実証され、また、それによって緊縛美理論の優秀性を深化せしめて行くという時代であった。

故に当然のことであるが、氏の理論はこの期の写真を観ずして語ることは出来ないのである。我々は、辻村氏の主張される緊縛美理論が、如何に優れたものであり、完成されたものであるか、その辻村イズムの猿轡——即ち、鼻の上から顔一杯に掩う猿轡に観た。また辻村方式の縛り方——即ち、後手の高手小手で、ゴテゴテ縄を使わず緊縛感を出すもので知った。

辻村氏は、その緊縛美追求のために、常にあらゆる可能性を探究されていた。故に、常人ならば喜んで安住してしまうであろう境地に、早くも達しつつも、更に千里の眺めを極めんとして一層楼にのぼる氏は、号を追うごとに、その理論を鋭くして行ったのである。

それで、この期の氏からは、あたかも真先に立って鉤をふるい荒地を開墾していく勇姿を見る思いを我々は持ち、先を突き進んで行く辻村氏の後姿から、読者をぐいぐい引きつける不思議な男性的な魅力さえ、感じる事が出来た。

芸術は小手先の技巧では、決して人を感動させはしない。或いは一時の見せかけの感動があったとしても、すぐ飽きられてしまう。『奇ク』に辻村氏さえ、いるならば——こういう安心感を、この期の氏は我々読者に与えた。

それは既に辻村氏の緊縛美理論を構成する写真が、我々読者の胸中深く突きささって、人間と人間を結ぶ絆とさえ、なったことを意味し、氏が如何に全力を投じて、それに努力されているかが、わかるのである。

なお、黎明期をモデルから考えれば、最も辻村氏の構成の意図を察して協力し、多くの名写真を見せてくれたのは、伊吹真佐子嬢であった。

それを賞揚する意味で辻村氏の黎明期を、敢て伊吹真佐子時代とした所以である。

——(この項おわり)——



作六鬼団



決定版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

昭和三十七年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

● 客号「花決定版」 定価一、〇〇〇円(送200円)

△内容主要見出し一覧▽

第一章 発端 第二章 人を探し 第三章 麗人を探し 第四章 麗人を探し 第五章 麗人を探し 第六章 麗人を探し 第七章 麗人を探し 第八章 麗人を探し 第九章 麗人を探し 第十章 麗人を探し 第十一章 麗人を探し 第十二章 麗人を探し 第十三章 麗人を探し 第十四章 麗人を探し 第十五章 麗人を探し 第十六章 麗人を探し 第十七章 麗人を探し 第十八章 麗人を探し 第十九章 麗人を探し 第二十章 麗人を探し 第二十一章 麗人を探し 第二十二章 麗人を探し 第二十三章 麗人を探し 第二十四章 麗人を探し 第二十五章 麗人を探し 第二十六章 麗人を探し 第二十七章 麗人を探し 第二十八章 麗人を探し 第二十九章 麗人を探し 第三十章 麗人を探し 第三十一章 麗人を探し 第三十二章 麗人を探し 第三十三章 麗人を探し 第三十四章 麗人を探し 第三十五章 麗人を探し 第三十六章 麗人を探し 第三十七章 麗人を探し 第三十八章 麗人を探し 第三十九章 麗人を探し 第四十章 麗人を探し 第四十一章 麗人を探し 第四十二章 麗人を探し 第四十三章 麗人を探し 第四十四章 麗人を探し 第四十五章 麗人を探し 第四十六章 麗人を探し 第四十七章 麗人を探し 第四十八章 麗人を探し 第四十九章 麗人を探し 第五十章 麗人を探し 第五十一章 麗人を探し 第五十二章 麗人を探し 第五十三章 麗人を探し 第五十四章 麗人を探し 第五十五章 麗人を探し 第五十六章 麗人を探し 第五十七章 麗人を探し 第五十八章 麗人を探し 第五十九章 麗人を探し 第六十章 麗人を探し 第六十一章 麗人を探し 第六十二章 麗人を探し 第六十三章 麗人を探し 第六十四章 麗人を探し 第六十五章 麗人を探し 第六十六章 麗人を探し 第六十七章 麗人を探し 第六十八章 麗人を探し 第六十九章 麗人を探し 第七十章 麗人を探し 第七十一章 麗人を探し 第七十二章 麗人を探し 第七十三章 麗人を探し 第七十四章 麗人を探し 第七十五章 麗人を探し 第七十六章 麗人を探し 第七十七章 麗人を探し 第七十八章 麗人を探し 第七十九章 麗人を探し 第八十章 麗人を探し 第八十一章 麗人を探し 第八十二章 麗人を探し 第八十三章 麗人を探し 第八十四章 麗人を探し 第八十五章 麗人を探し 第八十六章 麗人を探し 第八十七章 麗人を探し 第八十八章 麗人を探し 第八十九章 麗人を探し 第九十章 麗人を探し 第九十一章 麗人を探し 第九十二章 麗人を探し 第九十三章 麗人を探し 第九十四章 麗人を探し 第九十五章 麗人を探し 第九十六章 麗人を探し 第九十七章 麗人を探し 第九十八章 麗人を探し 第九十九章 麗人を探し 第一百章 麗人を探し

身代金奪取の失敗 第二章 涙の宣誓 第三章 奇妙な三々九度 第四章 飼育される白い動物 第五章 悪魔と悪女の悪業 第六章 屈辱の地獄図 第七章 逃走の恐怖と失敗の結末 第八章 悪鬼達の残忍な所業 第九章 落花無残の修羅場 第十章 淫らな美女の調教 第十一章 すすまじいシヨ一の展開 第十二章 汚水にまみれた宝石 第十三章 華々しき美女の屈伏 第十四章 対峙する美女と美女 第十五章 あくどい陥穽 第十六章 羞恥図絵の展開 第十七章 清純な令嬢の屈辱 第十八章 人身御供の令夫人 第十九章 深窓の美少女とズベ公 第二十章 小夜子への執拗な調教 第二十一章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇シヨ一 第五十三章 華々しきシヨ一の展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい犠牲の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号。 558 暁出版株式会社宛



はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

## 連載小説

花

はな

と

蛇

へび

## 団 鬼 六

### 続篇（第七十四回）

#### ガラスの拷問

「あわてる事はねえよ。ゆっくり仕事にかかろうじゃねえか」

清次は、春太郎達に酒の爛をさせ、ベッドに仰臥し、二肢を高々と吊り上げられている京子の横に添寝する。

「へへへ。おい、京子。今度という今度は、本当に改心したんだろうな」

と、静かに瞑目している京子の白い頬を指で、くすぐった。

京子は、そっと眼を開くと、清次の方へ気弱な視線を向けて、

「まだ信じて頂けないの」

と、すねるように口元に媚の色さえ浮かべて云うのだ。

「だけど、お前みたいな別嬪に、どうして男三人を蹴倒すような力があるのか、俺は不思議で仕方がねえよ」

「もうそんな話はやめて。二度と空手なんか使わないと、今、京子は誓ったじゃありませんか」

京子は黒眼勝ちの美しい瞳を気弱にしばたかせて云うのだ。

もう先程、見せたような反撥と敵意の色など、そこには微塵も見当たらない。

「お前がそう素直な態度に出るっていうのな

ら、本当に美津子の方にゃ指一本、触れやしねえよ」

「本当ね、清次さん」

京子は、黒い瞳にキラッと涙を光らせて、すがりつくように清次の顔をじっと見つめるのだ。

「それさえ、約束して下さるのなら、京子はどんな羞かしい目に合わされたって、がまんするわ。どうか気のすむまで京子をなぶって恨みを返して頂戴」

ハラハラと頬に涙の滴をしたたらせて京子は云うのであった。

「よし、気に入ったぜ」

清次は、春太郎が盆に載せて持って来た銚



子の酒をコップに注ぎ、それを一息に飲むと五郎達に云った。

「さ、そろそろお仕置の続きを始めようじゃねえか」

よし来た、と五郎と三郎は、今はもう逃げも隠れもならず、観念しきったような京子の菊の個所に、再び攻撃を開始しようとするのである。

「兄貴、すまねえが、ちょっと、その酒を少しくれよ」

五郎は、ほらよと差し出す清次から酒の銚子を受けとり、

「この酒で、こいつを少し、酔わせてみようと思うんだ」

と、その銚子を振ってみながら、三郎と顔を見合わせて笑い合うのだ。

コールドなどを使って充分にマッサージをし、凝り固まりは完全に溶けて、綿のように柔らかくなったのに、更に酒の滴をたらして刺戟を加えようというのだ。

二滴、三滴、と酒がゆっくりこぼされると京子は、むずかるように豊かな双臀をなよなよとくねらせる。

「ねえ、もう、もう充分よ。おねがい、早く浣腸を——」

京子は美しい眉根を寄せて、むずかるようにうめくのだ。

「駄目々々。まだ駄目だよ、もっと柔らかくしなくちゃあ——」

春太郎と夏次郎も面白がって、ぬるま酒を更に二滴三滴と流し、指先で柔らかい刺戟を加えるのだ。

「ほんとは、とてもいい気分なんですよ。ねえ、京子」

春太郎は隠微な刺戟を執拗に加えながら、眉を寄せてシクシクすすり泣く京子の顔を見て笑った。

「どうなんだよ、京子」

その攻撃を春太郎達に任せて、五郎と三郎は上気した頬をフルフルと慄わせている京子の左右へにじり寄った。

「手前に蹴倒された俺達がこうまで優しくしてやってるんだ。女である事の嬉しさがよくわかったろう」

そんなことをいいながら五郎と三郎は、再び、麻縄をきびしく巻きつかせている形のいい柔らかい京子の乳房を左右より優しさをこめて愛撫し始める。

春太郎の攻撃と呼応するようにして男二人に乳房を揺さぶられる京子は、ブルブルと全

身を慄わせて、一きわ激しい甘い呻きを、もらし始めた。

「よし、もういいだろう。始めな」

清次は、五郎に眼くばせした。

五郎は、ニヤリとして嬉しそうに浣腸器を取り上げる。

春太郎の巧みな技巧で、彼等の目標は溶けるような柔らかさに変貌している。

五郎は、春太郎と入れ代わって

「京子、さ、始めてやるぜ」

と嘴管を、そっと差し出した。

今まで、真っ赤に上気した顔を横に伏せて細い声ですすり上げていた京子だったが、冷たいガラスが触れた途端、ムチムチした豊かな双臀をピクと痙攣させ、美しい眉根を八字にしかめるのである。

「へへへ、どうだい京子、いよいよだぜ。口惜しいか」

五郎は一気に攻略せず、嘴管で軽くたたいたり、くすぐったりする。

京子は、吊られた両肢を、さも切なげに悶えさせ、ひきつったような涕泣を洩らすのだった。

「ねえっ、お願いっ。早く、早くすまして頂戴」



京子は、上ずった声で、五郎と三郎に哀願するのだ。

「よくも男三人を、こけにしやがったな。うんと思ひ知るがいいや」

一気に、五郎が押し立てる。不思議なくらい熱いねばっこの吸引力というものを、五郎は、浣腸器を通じて知り、舌を巻く想いになった。

男達の乱暴な行為に京子は思わず絹を裂くような悲鳴を上げた。

「そら、もう一度だ」

矛先を急に引揚げて、また押して出るなど男達は、残忍な悪戯をくり返し、京子をいたぶり抜く。

京子が悶え、苦しみ、泣きじゃくると、五郎も三郎も、ようやく溜飲を下げたように顔を見合せて笑い合った。

「どう。京子姐さん、少しは反省する気になった？」

今度は春太郎と夏次郎が、懊悩の極にある京子の乳房を優しく撫ぜさすりながら、ささやくように云うのだ。

「——もう、もう充分、京子は反省していますわ。ああ——もう、許して」

嘴管でくすぐられる京子は、髪を左右に揺

さぶり、唇をわなわな慄わせて、哀泣する。

「これだけ、じらしや、充分だ。五郎、注ぎこんでやんな」

清次は、京子の片頬に煙のように垂れかかっている柔らかい黒髪をかきわけて、ねっとりと脂汗を滲ませている京子の顔を楽しそうに眺めるのである。

「ううっ」

京子は、恨みをこめて力まかせに攻撃してくる五郎の手のガラス嘴管の非情さに、大きく首をのけぞらせた。くっきりと浮かび出た艶々というなじのあたりにも、ねっとり脂汗が滲んで、さも口惜しげに唇を噛みしめる京子の表情は凄惨なくらいに美しい。

「女だてらに男を振り廻しやがって。どうだい。少しは、こたえたか」

五郎は、ゆっくりとポンプを押しながら勝誇ったように笑い出した。

「ああ——」

京子は、涙に濡れた美しい黒い瞳をひっそりと開き、さも切なげにうなじをくねらせるのだ。

「少し、俺に代わらせろ」

と、五郎が半分ばかり注ぎこんだところで三郎が乗り出して来る。

「さっき、蹴飛ばされた仕返しだ。いくぜ」

三郎もガラスのポンプを、ゆっくりと押し始める。

奥深く、注ぎこまれていく生温い石鹼水の感触を、京子は知覚が麻痺していくような気分の中で、ぼんやりと感じとっている。

なやかな肩を慄わせながら、シクシクとすすり上げる京子の繊細な横顔は涙に濡れて滴るような美しさに見えた。

もう京子は、抵抗のそぶりなど微塵も見せず、無意識、無感動のまま、男達の手で次々と溶液を送りこまれていく。

「どう、お腹に入っていくのが、よくわかって？」

春太郎は、横にねじっている京子の頬に手をかけて正面に据えさせた。

京子は赤らんだ顔を羞恥に歪めて眼を固く閉じ合わせている。

五十CCを一滴残らず送りこんだ男達は、脱脂綿を使って、攻撃のあとを柔らかく揉みほぐすのだ。

京子は、濡れた瞳をとろりと潤ませて、熱っぽく喘ぎつづけている。

「へへへ、とうとう注ぎこまれちゃったな、京子。ざまあみろ」



五郎と三郎は空になった浣腸器で、京子の臍のあたりをたたき、笑い合った。

「までまで。俺はまだ、恨みを返しちやいな  
いぜ」

今度は清次が浣腸器を取り上げ、春太郎に熱した酒を注ぎこむように命じた。

「いい気持に酔わしてやろうというんだ」

燗をした銚子一本の酒を春太郎がガラス器にゆっくり注ぎこむと、清次は楽しそうに口を歪めて、それを受け取り、上気している京子の熱っぽい頬を突つついた。

「うんと京子をいじめて——」

清次に顎をとられた京子は、狼狽すれば一層自分がみじめになると覚ったのか、潤んだ黒眼勝ちの瞳を、そっと清次に向け、溶けるような媚びを含んだ声音で云った。

「でも、これで京子の事は許して下さいます  
わね、清次さん」

清次はそれに答えず、体を移向させて嘴管を構える。

「ねえ、待って」

京子は鼻にかかった甘い声ですねるように云うと、なよなよと枕の上の双臀を揺さぶり甘い拒否を示すのだ。

「ねえ、はっきりおっしゃって。京子を許し

てやると、はっきりおっしゃって頂戴」

上に吊り上げられた肉づきのいい二つの太腿まで、くなくと艶めかしく揺さぶりながら、すねて見せる京子の仕草に、清次はモソモソ悦び出して、

「へっへへ、大分、女っぽくなってきたよ  
うだな、京子。よし、それに免じて、空手を使  
って俺達に楯をついたことは、さっぱりと  
忘れてやろうじゃねえか」

「ほんとね、清次さん」

京子は、潤みを帯びた美しい瞳で甘えるように清次の方を見つめ、やがて、静かに眼を閉じ合わせていった。

静止した京子の双臀に、第二の攻撃が始まったが、京子はむしろ自分から、それを待ち受けていたように、弧を描くように双臀をくねらせ、清次の仕事に大胆にも協調を示したのである。

再び、冷たいガラス管を受けとめた京子は煽られた形で激しくポンプを押し始める清次を甘くたしなめるのだ。

「うん、嫌、清次さん。もっと優しく注いで  
ほしいわ」

そうした京子の媚態に、清次も五郎達も有頂天になっていく。

「こりゃ悪かったな。おめえがすっかり女っぽくなったんで、俺はつい夢中になってしまったよ」

清次は苦笑して、たっぷりと時間をかけて注ぎこむのだ。

熱っぽい頬を伏せてすすり泣いたり、艶々したうなじを大きく見せて荒い息を吐いたりして、京子は遂にその浣腸器に一杯だった酒も体内に注ぎこまれてしまったのだ。

「これで百CCだ」

空になったガラス管を持ち上げて男達は大はしゃぎする。

「やっ、これで胸のつかえが下りたような気分だ」

五郎と三郎は、ベッドに仰臥する京子のまわりをグルグル廻るようにして、小躍りせんばかりの喜びようである。

全身に脂汗をキラキラ浮かべて、固く眼を閉ざし、京子は、半開きになった口から熱っぽい息を吐きつづけている。

「どうだい京子。たっぷり二回、腹の中へ注ぎこまれた気分は——」

清次は、落ちていた脱脂綿を拾って柔らかに揉みほぐすようにしながら京子に云った。  
そんな清次の面白そうなかからかいを受けて



京子は一層、熱っぽく喘ぎ出す。

春太郎と夏次郎は悪戯っぽい微笑を口元に浮かべて京子に近づくと、その便意を高めさせる心算からか、胸のくらみから鳩尾、柔らかい腹部のあたりまで、ゆっくりとマッサージするのである。

京子は、つぼを心得たようなシスターボーイの手管に次第に巻きこまれていき、忽ち、生理的な苦痛が全身を襲い始めた。

滑らかな腹部を幾度も掌で撫でさすり、優美な腰部に指圧を加え、露骨な洗礼を何度も受けてもう羞恥など忘れたように、はつきりと開花した菊のあたりまで、隠微な指圧を彼等は加えようとするのだった。

京子が耐え切れず、齒をカチカチ噛み鳴らして、さも苦しげな呻きをもらし始めると、

春太郎は夏次郎に声をかけた。

「お夏、おまるの仕度を頼むわよ。もうそろそろだと思ふから」

あいよ、と夏次郎は外へ出て行ったが、子供用のものしか見当たらなかった、と花模様のついたブルーの便器を持ち込んで来た。

「男三人を蹴り飛ばすような鉄火姐さんなのよ。そんな小さなもので間に合うかしら」

春太郎は、京子を柔らかく揉みほぐしながら

ら笑って云った。

「お京姐さんに聞いてみな」

と、男達は笑った。

夏次郎もクスクス笑いながら、その幼児用の便器を京子の目の前に近づけるのだ。

「ねえ、京子姐さん、子供用のおまるしかないんだけど、これに入りきるかしら」

春太郎の指圧に誘導されて生理的苦痛がますます高まって来た京子は、ふと凄艶な表情にさえなっていてくる。夏次郎に耳たぶをつねられて、ふと熱っぽい瞳を開いた京子は、その便器を見て、さも羞かしげに視線をそらした。

何ともいえずその羞かしげな京子の赤らんだ顔を、男達は酒を飲みながら心も浮き立って思いで眺めているのだ。

「こんな小さなおまるなんかじゃ、物足らないそうね」

と夏次郎は、真っ赤な顔をそらしている京

子を楽しそうに見つめていたが、

「でも、これしかないんだから我慢して頂くわ。派手に垂れ流しちゃ駄目よ」

夏次郎は京子の枕に乗った双臀の下へビニールの布を敷き、チリ紙や濡れタオルなど女の子のような神経で細かく気を使い、京子の双臀

の周囲へ配置していくのだ。

京子の悶えが次第に露わなものになり、いよいよ限界に近づいた事を覚った春太郎は、ようやく指圧の手を止めた。

「どう、京子。もう我慢が出来ないようね」

春太郎は美しい眉根を寄せて激しく息づく京子の熱い頬を指でくすぐるのだ。

「そろそろ始める？ ええ、京子姐さん」

春太郎に耳元でささやかれた京子は、そつと濡れた瞳を開き、何ともいえず哀しげな表情で小さくうなずくと、さっと赤らんだ顔を横へねじって、シクシクとすすり泣くのだ。

「それじゃ、清次さん達に手伝ってもらいましょうよ。さ、京子姐さんの口から三人にお願いしてごらん」

その言葉を聞いた京子は、上気した頬を固く凍りつかせて、いやいやと首を左右に振るのだ。

その卑劣さに我慢出来ず、先程、こらしめた三人の男達——その連中の手で、排泄を強制されるなど、もう限界に達し、眼もくらむような状態の京子であったが、毛穴から血が出るばかりの屈辱が突風のようにこみ上って来るのだ。



「どうしたのさ。今更、羞かしがる事はないじゃないか。女っぽく、うんと甘えかかって排泄の始末まで清次さん達にさせてごらん。そうすりゃ、清次さん達の恨みも完全に消えるってものだよ」

春太郎は京子の泣き濡れた美しい瞳を、のぞきこむようにして云った。

「ああー」

と、京子は再びこみ上って来た生理の苦しさに大きく首をのけぞらせ、吊り上げられている優美な二肢をブルブル痙攣させた。

「そら、ぐずぐずすると洩らしちまうじゃないか。早く清次さん達に助けを求めなきゃ駄目じゃないの」

春太郎と夏次郎は面白がって、そんな京子を左右から揺さぶるのだ。

### 四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありまので、未入手の向はお早いに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。略号『花』 定価五〇〇円

遂に京子は最後の屈伏を清次達に向かって申し出たのである。

もう限界を通り過ぎ、意志の力ではどうしようもなくなったのだ。

「清次さん、お、お願い——」

京子は、上ずった声で清次を呼んだ。

「どうしたい、お京姐さん」

清次は五郎達と京子のまわりを取囲んだ。

京子は火のように熱くなった頬をマットへすりつけるようにしながら

「もう、もう我慢が出来ないの。ですから、ねえっ」

京子は、もう備えも構えも、かなぐり捨て火のような一心さで、清次に哀願するのだ。

「だから何だって聞いてるんだよ」

清次は五郎達と顔を見合わせてニヤニヤしながら京子の懊悩ぶりを凝視するのだ。

「意地悪な事云わないでっ。ねえ、もうこれ以上、我慢出来ないのです」

京子は、戦慄したように、吊られた二肢を震わせ、泣きわめくようにして云った。

「早く、ああ早く、おまるを当てて頂戴っ」途端に清次も五郎も大声で哄笑する。

「空手で蹴り倒した男三人に、垂れ流しの始末をしてもらいてえだ」とよ

五郎と三郎は笑い続ける。

しかし、京子は、そんな男達の図に乗ったからかいも、もう耳に入らぬのか全身を火のように燃え立たせて激しい涕泣を口から洩らしている。

「ベッドを汚されちゃ、まずいぜ。手を貸してやろうじゃねえか」

清次達は、ようやくブルーの便器を取り上げ、そっと京子の双臀の下に当てがった。

肌にそれが触れた途端、京子は一瞬、ビクッと全身を慄わせた。

憎みてもあまりある三人の男達の前に、これから落花無残のみじめな姿をさらけ出すのだと思うと、京子の微塵に打ち砕かれた意志に、ふと最後の抵抗が蘇った。

「どうしたい京子姐さん。こうびったり当てがったからにや大丈夫だ。大舟に乗った気分ですやらかしな」

「空手二段の京子姐さんは、どんな色合いのものをお出しになるか、鼻をつまんで拝見させてもらうぜ」

男達は盛んに京子を揶揄しつつ、片手で便器を押し当て、片手で鼻をつまむのだった。





カット・岡 たかし

新連載

M 小説

則

天

武

后

①

真砂十四郎

〔筆者註〕唐の高宗帝の妃、武媚は并州文水の商人の娘。はじめ先帝太宗の「才人」として後宮の侍女となり、のち「昭儀」として高宗に迎えられ、数年後には王皇后を廃して皇后となりました。後年高宗帝在位中も天后と称して政治をとりしきり、帝没後、唐朝を廃して周朝を設立、自ら聖神皇帝として君臨しましたがこれは、中国の歴史上、ただ一人の「女帝」でした。しかし後年の歴史家は武媚の皇帝を認めず、唐朝の則天武后として今日その名を残しています。武后の活躍期間は長く、六五〇年から七〇〇年におよび、日本の歴史と並べますと、斉明、天智、弘文、天武、持統、文武の六帝にわたっています。

1

女御様によごがご入浴あそばすときの使役は毎日私が勤めさせていただいております。以前は侍女の者のお役だったのですが、一度、私がご奉仕いたしましたから

「これから、毎日、お前がやるのだよ」

と仰有って、屋敷の者にもそうお告げになりました。侍女が女御様のおからだをお洗いのするのと、私が女御様のおからだをお洗いのするのでは、おそらく比較にならぬほど私の方が万事ゆきとどいているだろうことは、私自身にもよくわかっております。お勤めで、しかたなくお洗いしている侍女と、真底、心をこめて女御様のおからだのおかがやきを願って励む私とは、侍女たちのお洗いの仕方を見ていない私でも、その違いは、ほぼ推察できます。

その日以後、女御様のお洗い役は、私一人の仕事になりました。

女御様が、湯をなみなみとたたえた大きな浴槽にお入りになって、お手、お足をのびのびとおのびし遊ばしている間に、私は女御様がおかけになる腰台をお洗い場に据え、湯を



かけてお温めしておき、三個の手桶に一ぱい湯を満たしてお待ちしております。

やがて女御様は湯を勢いよくはねかえして浴槽からお立ち上り遊ばします。私はその前にかがんで手を差出しますと、その手にお手を支えて浴槽からお出ましになって、ゆっくりと腰台におかけになります。

私はお背中の方にまわって、手桶の湯をおかけし、絹の布に洗い粉をたっぷりつけて、まずお背中をお流しします。お背中からお腰を洗い終わりましたら、前にまわってお手、お胸、おなかと、軟らかからず、硬からず、心をくばってお洗いし、次いで右、左と、おしげなくお投げ出し遊ばしてられるおみ足を上から下へ丁寧にお洗いしてゆきます。

女御様は私がお洗いしている間、私が前もって鶏卵五個を器に割り入れてよく攪拌しておいた卵白液をお手のひらにおとりになり、お顔の額から頬、お鼻のまわり、お口のまわり、おあごから首へと粘液の幕をはるようにおぬりつけ遊ばします。これはお顔の皮膚に張りをもたせ、いつまでも若々しいお肌を保つ美容法だと女御様からうかがいました。その他の他は全然、私には無関心で、おからだを私にまかせられたまま小さなお声で歌をくちず

さんだりしていられますが、たまにはお屋敷内での出来ごとや、ご身辺のことなど、私に話しかけて下さるときもございます。

おみ足がすんだあと

「女御様、お腰をおあげ下さいませ」

と私が申し上げますと、女御様はお腰台からお腰を浮かせられ、浴槽のふちにお手をかけられておかがみになります。そのお前、おうしろを一生懸命お洗いしている私の姿をごらん遊ばして

「まあ、お前は丁寧だね」

と、初めおほめのお言葉を賜りました。

「おそれいます。ご下命下さいましたら、なんでもいたしますから……」

と申し上げますと女御様は、にっこりと微笑んで下さいました。

女御様のおつかいになる洗い粉は、毎日私が心をこめておつくりしている品で、材料は米の糠を用います。その糠に少量の陳皮をまぜ合わせ、更に石臼にかけて何度も何度も碾き加えたもので、手でつまんでも溶けてしまうほど滑らかにした粉でございます。湯に浸したやわらかい絹の布にこれをぬりつけて、女御様のおからだをお洗いするのですが、女御様がお上りになったあと、私は

その布を口に含んで、ぬるぬるになった粉を舌で吸いとりながら飲みこみます。女御様はご存知ありませんが、いわばこれが私の余禄であり、何にもまさる女御様のおめぐみの品ともいえましよう。余禄といえば、器に残った美肌料の卵白汁もその一つで、いつもたっぷり二個分は残っていますが、あとで私が戴いて飲みこんでしまいます。

女御様は、姓は武、名は照。高宗帝後宮の妃嬪の一人で、お位は「昭儀」でございます。唐帝の後宮には、皇帝につかえる妃嬪がたくさんいられますが、その数は皇令で決められており、皇后様がお一人、貴妃、淑妃、德妃、賢妃の妃四人、その下に九嬪と申しまして昭儀、昭容、昭媛、脩儀、脩容、脩媛、充儀、充容、充媛と九人、さらに婕妤、美人、才人がそれぞれ九人、そのほか宝林、御女、侍女がいずれも二十七人ずつと定められているのですが、武昭様はその九嬪の中の昭儀にあたるお方でございます。

ですから、武昭儀様の上には王皇后様はもとより、四夫人のうち殊にご寵愛の深かったといわれる蕭淑妃様もいられたのですが、私が女御様のお下にご奉公いたしました頃には高宗帝はことのほか武昭儀様がお氣にいら



ご様子で、ほとんど毎夜のように武昭儀様のお許にお成り遊ばしておりました。

私が女御様のお許に召使われるようになった機縁を申し上げますと、元来、私はしがなゝい雑役夫でしたが、長安の都で植木職人の許に奉公していましたとき、親方が武昭儀様お屋敷のお庭の手入れを命じられ、七、八人の下方をつれて、小枝の剪定、樹葉の刈込みなどに参上したとき、私も草とり人夫の一人として一行に加えられたのです。大たい私ごとき者が参上するほど私に腕があつたわけではありませんが、人数が足らなかつたのでしょうか、結構なお屋敷やお庭の構えに吃驚しながらも私はお庭の雑草をむしりとりながら、仕事に精を出しておりました。

そのとき、昭儀様がお庭にお出ましになりました、しばらくの間、職人たちの仕事を眺めていられたましたが、そのお姿をおそば近く拝んだ私は思わずぶるぶるとふるえてしまいました。なんとという美しいお方であろうか。お胸のふくらみ、お腰のお豊かさ……。なんという素晴らしいおからだだろうか。まことに天人、天女とはこういうお方にこそ捧げるお名だろう……。と、私は心のうちに思いましたが、私のような卑賤人の思いなど武昭儀様

にとつては、なんのおかわりもないことです。やがて昭儀様はお屋敷にお上りになってしまいました。私の雑草をつんでいる目の前に、いま御殿の奥にお姿を消された昭儀様のお沓が、お履きすてになつたままおかれてあるのです。桃色の絹のお沓。色系で花模様刺繍がちりばめられ、おみ足をおいれになつたあとが温かく匂う内側のおふくらみ……。私は、雑草をとるようなふりをして、お沓のそばまでにじりよつて、横目でじつとそのお沓を拝みました。ああ、このお沓を宝物として私の家に、いや、御神体として祭壇の中に……。と願う心が、むくむくと頭をもたげて消すことが出来ませんでした。私は無我夢中になつて、そのお沓を手にとつて押し戴き、自分のふところの中へ入れてしまいました。

附近には人がいなくても、お庭は広いのです。私の行為は侍女の一人に見られてしまいました。三、四人の侍女に引立てられて裏庭へまわされた私は、侍女の手でうしろ手に縛られてしまいました。宮廷の中の出来ごとです。斬首だと裁かれたら、明日をも待たず首をはねられてしまうのです。

ところが私にとってまことに幸運だったことは、昭儀様のお沓を盗んだという、事が事

だけに、侍女の口を通じて、このことが昭儀様のお耳に入つたのでした。「そんなものをなぜ……。？」というご不審があつたのでしよう、侍女を通じて盗みの理由をきかれましたので、私は勇気を出してお沓を盗んだ本当の私の心を申し上げました。侍女は奥へ入りましたが、やがて昭儀様が、ご自身でお出ましになり、私の前にお立ち遊ばしたのでした。

「わたしの沓を盗んだ者というのは、お前かい？」

「はい……」

私は土下座して頭を地にすりつけました。

「あんなものをなぜ盗んだりしたのか、言つてごらん……」

「はい……」

再び武昭儀様ご自身からの、ご下問です。

「はい……。お方様のお姿があまりにも美しく、天女様というのは、こういうお方のこととをいうのだらうと思ひました。その天女様のお履き遊ばしたお沓、と思ひましたら、つい前後の見さかひもつかなくなつてしまいました」

「それで、その沓を盗つて、お前はとうしようと思つたの？」

「私の家の祭壇に飾つて、毎日毎晩、礼拝し



たいと存じまして……」

「ふーん……」

武昭儀様は、しばらく考えておられました  
が、お口許に微笑みをおうかべになって

「お前、わたしのこの館で働きたいと思っ  
たら、使ってやってもいいよ」

と仰有るのです。

「えッ……」

私は思わず顔をあげ、目をみはりました。

「昭儀様、それは本当でございますか……」

私の罪もおとがめにならず……」

「本当だよ。お前が、わたしにつかえる気が  
あったらね」

「あ、ありがとうございます。有難うござい  
ます」

私は申し上げる言葉も出ず、目の前に神々  
しくお立ち遊ばしていられる武昭儀様のお姿  
を拝んで、ただ、ぺこぺこと三度も四度も地  
に頭をすりつけて拝礼いたしました。

昭儀様はあとを侍女にまかせて奥へお入り  
になりましたが、それから私はこの御殿の中  
の奴仕の一人としておつかえするようになり  
ました。それが半年ほど前の出来事でした。

私が陰日向なくおつかえする態度が女御様  
のお気に召したのでしょうか、次第に奥向き

の御用事も私にお命じになるようになり、今  
では皇帝陛下と共におやすみになる御寢室の  
お蒲団やお枕のご用意、お部屋やお厠のお掃  
除など、女御様のお側近<sup>そば</sup>くの御用をも、いろ  
いろとお勤めするようになりました。

私の名は張定恵と申しますが、女御様は、  
「お前はあたしの沓を盗<sup>と</sup>ってここへくるよう  
になったのだから、これからお前の名を沓氏<sup>と</sup>  
と改めよう。これから「沓」と呼んだらお前  
のことなんだよ」と仰有いました。私は有難  
くその名をいただいて、沓氏の名に恥じぬよ  
う、女御様の御用に日夜はげんだのです。

武昭儀様づきの仕人としておつかえしてい  
る私ですから、皇帝陛下のお姿もいつも近  
に拝しているわけですが、私が最初想像して  
いた大唐朝の皇帝としての御態度、おふるま  
い……とはまったく違って大違いで、武昭儀  
様の前にいられるときの高宗皇帝は、まこと  
に意外な皇帝でございました。高宗様と武昭  
儀様のお仲は、しばしば（どっちが皇帝で、  
どっちが昭儀か？）と頭をひねるような場面  
に接するのです。女御様の方がすべてご自分  
の気儘勝手におふるまいになって、高宗様は  
女御様の仰有るとおり、なんでも「うん、う  
ん」と女御様に従っておられるのです。

高宗様は、どちらかというと気のお細そう  
な、おふるまいもやさしいお方ですが、しき  
し大唐帝国の皇帝ともあろうものが、こんな  
お弱い態度でいいものか……。なぜ、こんな  
お方が皇帝になられたのだろうか……。時  
折、私でさえも不審の念を抱くことがあるの  
ですが、御殿におつとめしているせいで、あ  
やふやながらも聞きかじった消息を綜合して  
みますと……。

高宗帝の父君は、名帝と称された太宗皇帝  
です。太宗帝には長孫皇后ご正腹の皇太子た  
る皇子が三人おりましたが、一ばん上のお兄  
上が承乾様で、この方は勇猛果敢、武勇にす  
ぐれたお方でした。しかし太宗帝は、二番目  
の皇子泰様がお可愛かったとみえて、この第  
二皇子を皇太子の位につけようと思いいな  
っていたのです。泰様は才能のすぐれたお方  
で、皇太子として決して恥かしくない人物で  
したが、しかしこれには皇后の兄にあたる長  
老の長孫無忌が反対して

「泰様を皇太子にすれば、長男の承乾様がお  
怒りになって、泰様のもとへ兵をさし向ける  
にちがいありません。遂には、ご兄弟同士で  
殺し合う骨肉の戦いが生じるおそれがありま  
す。といって承乾様はお気性が荒く、なにか



と粗暴なふるまいが多く、今日のように平和の世には皇帝として適當でない点が数々ございます。お二人のどちらを皇太子にしても悪い結果が出ます。いっそう第三皇子の治様、治様は兄のお二方よりはるかに劣っていられますが、しかし気がやさしい点では誰もこのお方を憎む者がございません。太宗帝のご仁政で世の中が太平に治まっておりますから、むしろこの治様を次代の皇帝にされた方が政道の上にも、また承乾様、泰様の対立を避ける上にも最善の道ではないかと思ひます」

という意見をのべられ、他の重臣たちもそれに賛成したのでした。皇帝も結局その意見を用いられて、遂に治様が皇太子に即位されたのでした。

これが只今の高宗皇帝ですが、しかし、ただお気がやさしいというだけで、皇帝は何故かくも武昭儀様に頭があがらないのか……というのもおかしい話です。しかし現実には御寝室内のお二人のおふるまいなど、まったく主従転倒で、そっと、うかがい拝する私の目から見ましても、まさしく皇帝は武昭儀様で、高宗様は、その臣以外のなにものでもありません。

こういう御態度は、昼間の宮廷内において

も、ある程度はあらわれるもので、高宗帝の女御様に対するおふるまいは、重臣たちも内心、にがにがしく思っているようです。

「こともあろうに、以前、太宗帝の後宮の女だった女性、それが今また、ぬけぬけと高宗帝と夜の衾でたわむれる。許さるべきことではない」

という陰口も、随所でささやかれているのです。

女御様は、二年前までは太宗帝の侍女「才人」でした。といっても百十数人もいた宮女の中のほんの末席で、御寝室に召されたことがあったか、なかったか。あっても、ほんの一夜か二夜か……といった程度で、太宗帝は武昭儀様に殆どご関心はありませんでした。

女御様は気性のすぐれた方ですから、同じく気性のすぐれた太宗帝から見ると、お好みの対象にならなかったのでしょうか。ところが、気性のやさしい高宗様から見ますと、女御様の気性の強さが、俄然大きな魅力となつてうつるのではないのでしょうか。その点、今の王皇后様など、しとやかで、やさしすぎて、高宗様とは同じおやさしさが相殺して火花が散らないのです。

侍女の一人からきいた話ですが、女御様が

まだ、太宗帝の後宮にいられたときのことです。お庭で師子聡という駿馬を家臣が太宗帝にお目にかけたとき、馭者が扱いかねているのをごらんになって、従っている侍女たちに「誰かあの馬を制御することが出来る者はいないか……。気の強いお前といえども、とても出来ないだろう」と、ふと女御様を見て仰有ったそうです。女御様は「まあ、女の私などに出来ることではございません」と引き下ると思いきや、にっこりお笑いになって

女御様は

「まず、鞭で馬の背を思う存分、打ってやります。それで服さなければ、撻で首のところを叩きすえます。それでも服さなければあいくち匕首を咽喉へ突き刺してやります」

と仰有ったそうです。

これなど、女御様のご気性の強さをよく物語っている話で、私も（なるほど、女御様なればこそ……）と感心しましたが、そのときの高宗帝は（女のくせに可愛いげもなく、ただけしい者よ）とお思ひになったのでしょ



う。そのまま聞きすごしてしまわれたのですが、こういう女御様こそ、高宗帝はお好きなのです。

高宗帝が女御様をご自分の後宮にいて、昭儀とされた事情を、女御様のおみ足やお腰をお揉みしているときなど、女御様が笑いながらおもらしになった話と、私の想像とをつづり合わせて申しあげてみましょう。

## 2

貞観二十三年（六四九年）の春、先帝太宗皇帝がおなくなりになりました。そのとき現帝はまだ二十二才のお若さでしたが、皇帝崩御と同時に新帝即位の布告が流布され、若き新皇帝としてお位につかれました。治皇太子から高宗皇帝になられたのです。

新皇帝の、まず最初のおつとめは「護暗の儀」でした。護暗の儀というのは、密室に亡帝の御遺棺を安置して、七日間のあいだ新帝お一人だけが御棺のそばでお護りする儀式です。その室内には皇帝以外の者は一さい入室が禁じられ、余人はうかがいのぞくことも許されないのですが、しかし皇帝とて生きた人間ですから、飲まず食わずで七日間をすごす

わけにはいきません。そこで、その食事やお茶の持ち運び、おやすみになるときの寝具の処理など、皇帝の身のまわりのお世話をする役が一人必要となるわけですが、この役目は、先帝の後宮の女性のうちの「才人」の中から抽籤で選ばれるのだそうで、その抽籤に女御様がお当たりになったのです。

服喪第一日目、お役目の女性として喪室の中にあらわれた女御様を、高宗様はどうから知っておられたのでした。そして第二日目、第三日目……。

「いけませんわ、そんなことをなさっては」「武照よ。わしは、前からそなたが好きだった。その好きなそなたが、今ここに選ばれて出仕するとは、わしはなんとという幸せ者だろう。わしの目を見てくれ。嘘や冗談で言っているのと、真面目に、心から告白しているのと……目はものを言うという……そなたにもわかるだろう」

「告白なさる……って、何を告白なさるのです」

「お前が好きだということを……だ」

「まあ……。お心のほどはありがとうございませう。でも、わたしは先帝の才人として、数日後には尼寺へ行かなければならない身で

すのよ。あなたがわたしをお好きになってもどうにもならないことじゃありませんか」

「どうにもならないことはない。昨日までの私はともかく、今日の私は皇帝なのだ」

「いくら皇帝でも、お国のしきたりは破れませんわ。たとえ破ったとしても、私が嫌だと申しあげたら、その私の心を捕えることは、皇帝のあなたでも出来ないことよ」

一夜、二夜はこんな言葉がお二人の間にかわされました。手を握られて引きよせられても、ポンと撥ねかえす女御様の度胸のよさが若い新皇帝をますます夢中にさせたのです。

「武照よ、わしは命ずるのではなく、そなたに頼むのだ。わしが手について、そなたの前に懇願しているのだ。どうか私の妃になつてくれ。私に仕えると思ってくれなくともよい。私こそ、そなたを天女人と仰いで、私の方からそなたに仕えよう」

「まあ、ご冗談のうまいこと……」

「冗談ではない。私の心の底をうちあけているのだ。そなたが私を馭そうと思えば、そなたならたやすく出来ることを、私は知っています。私は聞いて知っているぞ。あの荒れ馬の師子聡でも、鞭と槌と匕首を貸してくれたら馭しておめにかける……と、そなたはことも



なげに言ったそう。そういうお前なら、たとえ私が皇帝でも、皇帝の私をたやすく取せる。鉄の鞭をかりるまでもない。今この場でそなたに取られる私を、お目にかけよう。ほれ、私はこうしてそなたの前に匍いつくばった。さあ、武照よ、私の上に乘ってくれ。そうだ、この革紐を鞭にしよう。そなたは私の背の上にまたがって、私の尻を遠慮なく鞭うてくれ。私はそなたの命令で、そなたを背中に乗せたまま、この部屋中を匍いまわってみせようから……」

「まあ、ホホホホ。そんなこと出来ますかしら……」

「出来るとも。ためしに乗ってごらん。さあ早く……。私の心のほどを、そなたに試してもらおうのだ」

ほかの女では到底できない仕業です。それでも女御様はできるのです。仕人として女御様のおそば近くお仕えし、女御様のおひとりをよく心得た私には（女御様ならば、かくもあらん）と、そのときの御様子を見も聞きもしなくとも、充分に推察することができました。

女御様は皇帝高宗様の背中の上に、おみ足を開いてどっかとおまたがりになりました。

「さあ、これでいいの？ そんなら鞭でたたくわよ」

女御様は陛下の腰に、ピシリとひと鞭くわえました。高宗帝は、ぶるっと身をふるわしました。

「さあ、歩け——」

高宗様はおからだのたくましい女御様を上に乗せて、よたよたと匍いまわりはじめました。女御様がお腰で押しつけるように調子をおつけになるたびに、高宗帝の細い身体は今にも折れるかと思うようにしなうのです。それでも帝は齒をくいしばって我慢され、女御様の御命令のまま、右へ、左へと匍いまわるのでした。

どのくらい続いたのでしょうか、遂に皇帝は女御様を乗せたまま、くずれ伏して、額から汗がにじみ、ハア、ハアと荒い息をおはきになって、降服してしまわれました。

「ホホホホ、弱虫ね。このくらいのことでは崩れてしまうなんて……」

「うーむ、そなたは重い。わしよりずっと上だろう」

「そうね、あたしの方が背も高いもの……」

「な、わかったであろう。私の心情が……。からだは苦しくとも、私の胸の中は歓喜に満ちている」

「お馬にされて、嬉しいの……？」

「嬉しいとも。そなたの馬にされたから嬉しいのだ。そなたなればこそだ、私を馬にすることが出来るのは。もちろん、この世にそなた一人のみだ。これで、私の心がわかってくれたな」

「わかりましたわ。……でも、他のお部屋ならともかく、先帝様の棺の前で、いくら遠慮のない私でも、気がさしましたわ」

「先帝といえども、もう魂はここにはない。気にすることもない。遺骸は、ただの土と交わりないのだ。通夜の儀もしきたりだからして、いるまでで、私の心は護暗にない。そなたを思う心だけで一ぱいなのだ」

「まあ、うまいことを仰有るのね」

女御様は朗らかにお笑いになりました。もちろん人の出入りを禁じた密室であり、お笑いになる女御様のお声も何処に聞こえるわけでもありません。

そうして、高宗帝と女御様は、すっかり仲がおよろしくなったのです。

七夜の喪があけてから、女御様は感業寺へお入りになりました。皇帝の崩御のあとの妃嬪は、一人のこらず尼寺へ入って、一生を終



えなければならぬ、しきたりになっているからです。

尼といっても、もちろん有髪（ありかみ）の尼で、ただお寺の一室に終世起居して世俗人との交渉を断った暮らしを送るのですが、女御様にかぎって、尼寺の生活は半年と続きませんでした。ふたたび宮廷へ迎えられたからなのです。

先帝の才人が再び妃嬪として後帝に迎えられ、高宗帝一人がいかにも熱心に事をはかっても、周囲の手前、そう簡単には出来ないことを、女御様にとってはご幸運にも、思わぬ味方が出現して、事の進行を早めてくれたのです。

それは思いもかけず、王皇后様が女御様の味方になって、女御様を妃嬪に迎えることをうながして下さったからなのです。

王皇后は何故、そんなことをはかったのでしょうか……？ 王皇后の真の目当ては、蕭淑妃にあったのです。王皇后も、蕭淑妃もいずれも高宗帝の皇太子時代からの妃でしたが、高宗帝は……そのときは治皇太子ですが、このほか蕭淑妃がお気に召して、蕭妃だけ特別に寵愛されており、王夫人は少なからず心配されていたのです。蕭妃一人に寵愛が加たよりすぎることは、ご自分の身があぶない

とお思いになったのでしよう。侍女の話から高宗帝が感業寺の武照に逢いに行かれることや、その武照という女を帝がお気に召したらしいことなど、おききになって「毒には毒」のたとえのように、この武照をもって、蕭淑妃に対抗させようとお思いになったのです。武照を寵愛されたら、それだけ蕭淑妃に対する愛情が薄らぐものと計算されて、「その武照とやらを、後宮においれになったらいかがですか」と高宗帝にもちかけたのでした。

帝にとっては渡りに舟でした。一ばん都合のわるい者が一ばん先に賛成してくれたのですから、帝は大いに仕事がしよくなったのです。遂に宮廷内の反対を押しきって、女御様が迎え入れられることになりました。女御様は九嬪の第一位、昭儀の位をたまわり、お名前も「媚」と改め、昭儀武媚様としてふたたびそのお美しいお姿を後宮におあらわしになって光り輝いたのです。

このとき高宗帝は二十二才、女御様は二十三才でした。

## 3

女御様が宮廷にお入りになってからは、王

皇后のお考えになっていたとおり、高宗帝の女御様へのご寵愛は、とびはなれておりました。蕭淑妃の影はまったくひそんでしまいました。三日にあげず蕭淑妃様の許にお通いになっていた帝が、今度は三日といわず毎夜のように女御様の許へお通いになるのです。

私が女御様のもとに仕人としておつかえはじめたのも、これから間もなくのことでしたが、しばらくするうちに高宗帝、女御様お二人の間がら、私にも少しずつのみこめて参りました。

高宗様は女御様に頭があがらないのです。女御様はお伶俐なお方ですから、昼間、多くの者のいるところでは、高宗様に対して皇帝として接しておられました。女御様のご寝室に入ってからガラリとお態度が変わるのです。これは女御様のお身のまわりをつとめる私が一ばんよく知っていることで、女御様はもとより、高宗様も、卑しい奴仕の私などご念頭にありませんから、お二人の間の遠慮のないおふるまいが自然に私の目に入ってしまうのです。

女御様が皇帝で、高宗様はその臣にかわります。女御様が何か昼間のことを仰有って高宗様をお叱りになっていらっしやいます。そ



れに対して皇帝は頭を敷物にすりつけて、あやまっているのです。どうかすると、寝台の下へおとされた高宗様の頭の上へ、寝台の上からおみ足をおのばしになって踏みつけ、ぐいぐいと押しつけたりなさいます。高宗様は「うん、わるかった、わるかった。これから氣をつける。勘忍してくれ……」などと、とぎれとぎれに仰有っているのです。おとりかえの敷布を持ってあがった私も、思わず陰にかくれて、お二人がお放れになるのを待っていることも、まま、あったような次第でした。

「昭儀なんて、いやよ、あたし……。皇后はもとより、貴妃、淑妃よりもっと下じゃないの。先帝の喪室の中で、あんた、なんて言ったのよ。あたしがあなたに仕えるのでなく、あなたの方があたしに仕える、って仰有ったじゃないの。そのあたしが『昭儀』とは、あんた、おかしいとは思わない？ すくなくともあたしは蕭淑妃より上でなければ我慢できないわ」

「もちろん、そうしたいのは山々だ。しかし皇令で妃夫人は四人ときまっているのだ。その四人を、とって殺すわけにもいかないじゃないか」

「殺すことぐらいわけないわよ。……ほほ、ほほ、それは冗談だけどさ。妃は四人といったって、もう一人制定して、五人にすることも出来ない相談じゃないわ。あんた、皇帝なんでしょ。皇帝なら、なんでも出来るって言ったじゃないの」

高宗帝も女御様に責められて、しかたなく「妃」をもう一人加えることを考えました。皇帝から中書省に「四妃に加えて新たに宸妃を設ける件」の、案件が提出されたのです。宸とは天子御自身という意味ですから、この「宸妃」が成立すると、当然他の四妃より位が上になります。「宸妃」が制定されたら、その宸妃には誰になる？ そのときにはもう（武昭儀様が宸妃になられる）ことを中書省の大部分の者が知っておりました。中書省から門下省にまわって審議がありました。もちろん結果は反対とでたのです。「御先祖以来、きちんと儀定されている皇令をみだりに改めてはいけません」という答申が、日ならずして高宗帝の許へかえってきました。

これは重臣にはかったところで、とても駄目だ。高宗帝は、はてどうしたものか、どう武昭儀にこたえたものか……手を拱いて思いまどいました。

皇帝が思いまどっている間に、女御様ご自身の計画は着々と進行していたのです。

王皇后は蕭淑妃の対抗策に武昭儀を招いたものの、日時の経過とともに、思ってもいなかった不吉なことが起きそうな予感が感じられて、次第に心配になってきました。宮廷内には王皇后派の重臣が多く、ご自分の地位が崩れ落ちるとまではお思いにならなかったかもしれませんが、しかし奸智にたけた武昭儀のことだから、帝をたぶらかして何をすかかわからない。さて、どうしたらいいものか……。皇后は皇后で思いまどう日がこのごろ続いたのでした。その結果、かつては蕭淑妃をおとしいれようと謀って武媚様を宮廷へ入れた皇后様が、思いもよらぬ女御様のお力に驚いて、今度はあべこべに皇后様と蕭淑妃様が手を組んで、なんとかして武昭儀をおとしいれようと謀るようになったのです。

これに対する女御様は女御様で、この氣配はすぐわかります。あんな連中に負けるものかという反撥心がお胸にわいて、反対に王皇后と蕭淑妃を失墜させるにはどうしたらいいか、ひそかにお考えになるようになったのは当然でしょう。



読切  
創作

# 半男半女菩薩

麒麟田 欧二

江戸から十二里、中仙道川越の宿はずれに「生神様」が現われて評判となった。

神様というのは本来男女の性別を超越したものだそうだが、この生神様は、美しい娘の姿を籍<sup>か</sup>り、しかも男女両性を具有しているということで、忽ち噂がひろまった。男の信者は、御神体の女性部分に触れることによって、もろもろの煩惱、苦艱<sup>くげん</sup>から救われるというありがたい御託宣が、付近の住民はもとより街道筋を往来する旅人の口から口へ伝えられると、遠国からの参詣人も含めて、賽銭、喜捨が日々山をなした。

が、やがて、愚民を惑わす邪教ということとで、厳しい詮議を受け、神官を装った一味と

もども生神様も捕えられた。調べると、

神官と称していたのは、いずれも一癖も二癖もある前科者<sup>いれずみ</sup>ばかりだったので、これは有無をいわずに処刑された。だが、御神体である若い女

(あるいは男というべきか)は、焦点のない虚<sup>うつろ</sup>な眼を見開いたまま、一切の言葉を失った狂者で、むろん身の上や名を知るよしもなくただその異常な肉体(愕<sup>おどろ</sup>くべきことに、こればかりは真正銘の事実だった)を、無頼漢<sup>ならざるもの</sup>どもに利用されていたことがわかった。で、そのまま釈放されたが、それっきり、この狂



カツト・岡 たかし

女を宿場で見たものはいない。

ところが、その噂がまだ消えないうち、旅役者の一座が川越の城下へ来たが、話を聞いたこの中の一人が、「その女なら、おいらが知ってるよ——」と言った。

一座の立女形を勤めるこの役者も、また変わっていた。外見は紛れもなく男でありなが



らたった一カ所、最も端的に男女を区別すべき部分だけが歴とした女であった。「女の性を持った男」というか「男の性を持った女」というか、ともかく芝居よりは見世物の方が性に合いそうなこの女形が、「きっと、あれに違いない」と確信に満ちた口調で、もう一度言ったのである。

## 二

泥田を捏ねるような眠りから醒めた時、千世のおぼろな視界に映ったのは、見も知らぬ白髯の老人だった。

「気がついたようじゃな。可愛い顔をして、よう眠って居ったわ」

毛皮の袖無羽織に裁着袴を穿いた小柄な老人の傍には、筒袖の着物から逞しい腕をむき出した若者が、行儀よく坐っている。

丸太を組んで板を打ちつけただけの粗末な小屋の荒庭の上に、千世は寝かされていた。

（私は、どうしたんだらう？ 此処はいったい何処？）

千世は起き上ろうとしたが、全身が鉛を詰められたように重く、くの字なりに曲げた膝を、伸ばすことも縮めることも出来ない。

（私は……私は……そうだ、乳母と一緒に、

お寺詣りに行ったんだわ……）

まだ醒めきらぬ頭の隅で、千世は懸命に思い出そうとした。

（……お詣りをすませて、お寺の門を出た時……向こうから駕籠が一挺……その脇に遊び人風の男が一人……私たちと駕籠が、ちょうどすれ違おうとした時だったわ……あの男がいきなり乳母に突き当たって……私が急いで乳母に駆け寄ろうと……いえ、そうしようとして、まだ一足も動かないうち、私は背後から誰かに羽搔い絞めにされて……鼻と口に手拭いみたいな布切れを押しつけられたんだわ。ほんとに、アッという間の出来事だった……驚きと苦しさから、叫び声を上げようと、私が思わず大きく息を吸い込んだ瞬間……とても不快なおいが……今まで嗅いだこともない強いにおいだったわ……すると、私の眼の前が不意に真っ暗になって……そうだ、あのにおい……あれっきり、何もわからなくなっってしまったんだわ……）

「娘御、しばらく見ぬ間に一段と美しくなったのう——」

老人は、窪んだ眼窩の底から突き刺すような視線で、横たわったままの千世を見おろしている。

「其方は僕を知るまいが、僕は、よう憶えておるぞ。中門前の駿河屋の一人娘、界限では知らぬ者のない小町娘じゃからな」

（あ、あなたは誰？ どうして、私を……）

千世は言おうとしたが、舌が膠で固めたように動かず、言葉にならなかった。

「そのように恐い顔をせずともよい。僕は、

半井伯庵じゃ」

半井伯庵——その名には覚えがあった。名医として噂が高く、しかも一風変わった町医者で、嘗て駿河屋とは目と鼻の近くに住んでいたからだ。

世評によれば、長崎のオランダ医者から直接外科医術を学び取った伯庵の技倆は、当時名のある典医をもってしても及ぶまいということだった。伯庵自身、各地の諸侯から典医の招きを受けたが、首を縦に振らず、遂には幕府御典医というこの上ない栄達の道さえ固辞して、一介の町医者に自ら甘んじた。この権威に諛わぬ氣骨が評判となり、一層その名を高めたが、ふとしたことから公儀の詮議を受ける羽目となった。

ある夜、密かに墓地を掘り返し、埋葬されただけの屍体を盗んで腑分け（解剖）したという事で、召し捕りの役人が中門前へ差し



向けられた。だが、その時にはすでに伯庵の姿はなく、使用人はもちろん、医療器具などもそっくり持ち出されて、空き家になっていたという。それ以来、伯庵の消息は杳としてわからず、数年の歳月が経っていた。

千世は、伯庵の顔を見たことはなかったが往診の途次など、供を連れて店の前を通る駕籠を指さして、「あれが、伯庵先生ですよ」と、家族や店の者から教えられたことを憶えている。

その伯庵が、いま眼前に居る。なぜ？ いったい自分に何が起こり、自分は何処に居るのだろう。

「はてさて美しいものよ。あの頃より、また一段と肉がのり、みずみずしい色艶を増したようじゃ」

千世の肢体を穴のあくほど凝視（みつ）めていた伯庵が、感に堪えたように吐息を洩らし、

「では、直接（じか）に見せてもらおうかの。——仙造」

と、傍の若者に眼を遣った。

### 三

「脱ぐのだ」

仙造と呼ばれた若者は、千世の半身を抱き

起こすと、抑揚のない声で言った。その外見からは想像もつかない、刃物のように冷たい声だった。

「待て待て」伯庵が言葉をはさんだ。「その娘は、まだ動けないはずじゃ。薬の効目が全て消え去るまでは五体が麻痺しておるでの。」

——脱がせてやるがよい」

「はい」

仙造は即座に、表情ひとつ変えず作業を始めた。

至極あたり前のことを、あたり前の手順でするといった調子で、仙造の手は感情を持たぬ機械のように動き、千世のからだから帯を取り、何本ものしごきを抜き去り、最後に皮でも剥ぐように、鹿子絞りの着物を肌着ごとくると引き剥いた。その間、全身の自由を全く失った千世は、仙造の動作とともに、右に左に上体を傾け、手足をぶらんぶらんと振り回すだけだった。

神秘的とさえいえる清らかな処女の裸像が淡い灯影の中に、惜し気もなく露（あらわ）れた。やや小さいが丸々と締まった可憐な隆起が、白光を放って息づき、羞（はづ）れを含んで心持ち上を向いた淡紅色（うすべに）の乳首が、微かに顫えている。

「立たせてみよ」

伯庵が命じると、仙造は千世の背後から両手を腋の下に差し入れ、そのままぐいと引き上げた。文楽の人形よろしく、千世の両脚は力なく伸びたままズルズルと床（ゆか）を擦って、直立の姿勢となる。たった一枚身に纏った緋色の湯文字（はのお）が、炎のように揺れた。

「それも、取るのじゃ」

仙造の手が苦もなく、最後のものを足許へ滑り落とした。

「フーム、見事じゃ。僕の推量どおり、まさに生ける菩薩じゃ。これで、わしの一生の念願も果たせるというものじゃ」

満月のように白く輝く腹部と、それに連なる、ふくよかな腰部、すんなりと伸びやかな両脚が密着した頂（いた）の煙（たき）るような淡い翳（かげ）り。

伯庵のキラキラ光る眼が、余すところない千世の裸身を、甜め尽すように這い回す。

だが、こんな羞かしい姿にされ、おどましい視線の前に曝（さら）されながら、千世はそれを恰（まる）で他人事のように感じていた。自分の姿を自分の視覚ではっきりと捉えながら、不思議なことに、現実感というものが全く身内に湧いて来ないのだ。

「もう、よい。御苦労だった」

伯庵は立ち上りながら、



「仙造。いよいよお前にも、一世一代の大手術を見せてやれようぞ」

そう言い残して、小屋を出て行った。

そのあと仙造は、千世に再び衣服を着せようとはしないで、そのまま逞しい腕に抱き上げると、小屋の地下に通じる階段を降り、得体の知れない不快な臭気と陰湿な冷気が漂う闇の中に立っていた。

## 四

牢というより檻と呼んだ方がよさそうな狭い囲いの中に、押し入れられたままの姿勢で千世は蹲っていた。

粗木造りの格子が、一糸も纏わぬ素肌のあちこちに触れて痛々しい擦り傷を作っていたが、千世はむろん気づいていない。

地下へ降りる揚げ蓋と思われる辺りから洩れて来る微かな光のほかは、全くの暗闇だった。

どのくらい経ったろうか。天井からサツと光が射し、揚げ蓋を降りて来る足音と人声があった。

「ともかく、他人とは思えない相手を、一目見ておきたいんでね」

と言ったのは、地下へ降り立った一人で、

どうやら若い男の声だ。

「こんな時刻に酔狂なもんだ。先生に知れたら、うるさかろうて。早いとこな」

と応えたもう一人は老人らしく、手に燭台を持っている。

「俺の大事なものの持ち主になろうってのは何時もの跋扈や畸形じゃあるめえな」

「昼間、駕籠から引き出す時チラリと見たがあれだけの美女は、ちよっとなかろうよ」

「いや満足、満足。じゃあ、爺さん。手燭を貸してくんな」

「はい。左側の隅の檻だ。足許に気をつけてな」

手燭の光が千世の檻に近づいて、格子の間から内部を照らした。荒庭の上に、背を丸めて蹲っている千世は、しかし身動きも、しなかった。

「御機嫌よくお寝みのようだ。それにしてもふるいつきたいような白さだぜ」

檻を覗いた若い男の声が弾む。

「明日ゆっくり対面したらいいやな」

「うん」若い方は、檻を離れながら、

「これでどうやら、俺の願いも叶いそうだ。こんな秩父の山奥の、それも化物屋敷みたいな処に、半月も寝起きしてたんじゃ、いい加減うんざりするといふものさ」

「といって、お前さんは元来、自分の好きで来なすったんだらうに。わしなんぞは先生が江戸にござる時分からお供をして来たが、何とも此処ばかりは恐ろしゅうて——」

「もう馴れっこじゃねえのか」

「どうして、どうして。それどころか、気が変になりそうだ。お前さんだって知ってるだろう。現在でこそ死んだみてえに静かなこの穴倉だって、つい十日前までは恰で地獄の情景だった。男や女や年寄や子供までが、毎日毎晩、恐ろしさに狂い叫ぶ声——あれを聞いただけで、お前……」

「だがよ、あの連中だって今時分は、いっぱしの花形になってるだらうぜ」

「女の肌に蛇の鱗を植えつけたり、子供の背中を二つ、くつつけたり……ああ、いやだ、いやだ」

「可哀そうなのは、この子でござい、とか、親の因果が子に酬い——なんてのが実は、みんな伯庵大先生のお手作りとは、御見物衆もご存じあるまいからな」

「ブルブル……生きながらの地獄とは、こんな処をいうんだらうな。此処へ連れて来られる人間にとっちゃ死んだ方が、よっぽどまし



というもんだ」

老人が恐ろしそうに身震いするのが、その声でわかった。

「さあて、わしはもう一度、戸外の家畜小屋の見回りをせにやらねえ。お前さんも出てくんな」

若い方を急ぎ立てると、兩人は再び揚げ蓋から姿を消した。同時に、地下牢はもとの闇に戻った。

躰の自由は利かなかったが、千世は去った兩人のやりとりを逐一、聞いていた。しかしそれが自分にどんな関係があるのか、その時は考えもしなかった。

## 五

生身の、しかも若い娘である千世が、世にも恐ろしい自分の境遇を実感として受け止めたのは、一夜明けて二度目の眠りから醒め、狭い檻の不潔な荒庭の上に、生まれたままの姿で蹲っている自分を発見した時だった。

強烈な麻酔薬の効きめがすっかり去って、日頃の健康な目覚めを迎えたことが、千世にとっては最大の不幸だった。しかも悪いことには、昨夜からの出来事や、耳にした事柄ははっきり記憶に残って居り、それが自分との

理性と肉体を取り戻した現在、現実の恐怖として心を引き裂き、全身の血を狂気に駆り立てたのである。

「助けてえッ」

千世は、前後も忘れて、格子を揺さぶり、咽喉が裂けんばかりに絶叫した。

その声を聞きつけたのか、揚げ蓋から、男が一人降りて来た。

齡は二十四、五か、色白の垢抜けした顔立に、ぞろりとした着流し姿。どう見ても伯庵や仙造とは違った人種で、陰惨な地下の穴倉には場違いな風態をしている。

男は、千世の檻に近づき、白い獣のような若い娘の狂態を、暫時呆れたように熟視していた。男なら誰にとっても、それは刺戟的な情景であつたに違いない。

だが、もはや千世の瞳には、自分のあさましい姿も含めて、何も入らなかつた。力の限り身を揉み、声の限り叫び続けた。

「無駄だよ」

男が、声をかけた。

「伯庵先生と仙造は、現在、鳥と獣の交配中だし、爺やばい出しに出かけた。誰も来ないよ」

格子の粗木に手足が擦り剥け、押しつけた

乳房からも血が流れている千世の裸身は凄惨だった。格子の間から突き出した両腕が、虚しく空を掻きむしる。

が、突然、千世の五体から力が脱け、同時に狂気の絶叫もはたと歇んだ。それまで烈しく宙に躍っていた白い両腕がガツクリ垂れたかと思うと、前のめりに崩折れたまま動かなくなつた。乱れた呼吸に肩が波うち、かすれた笛のような音が、その咽喉を洩れるばかりだ。

男は、自分の言葉の効果に満足した。

「わかつたかね。でも、無理はねえと思うわさ。こんな処へ連れて来られて、とんと静かなのは啞ぐらいなものだからな」

のっぺりした顔を格子へ押しつけるようにして、男は、檻の中の無慙な犠牲者に眼を注いだ。

「それにしても、お前さんみたいな綺麗な娘が来たのは初めてだ。何しろ今までは、チンバやらメツカチやら兎唇やら、多かれ少なかれ日つきばかりで五体揃った人間様にはお目にかかつたこともないが、そんな連中でさえギャアギャア絞め殺されるように騒ぎやがるんだからな」

男は、つと檻の中へ手を差し入れ、生々し



く血が滲んでいる千代の丸い肩に触れた。

「お前さんの場合は、この美しい躰がいわば不運だったというわけだが、俺にしたって同じことなら、持って生れた自分の一部を、お前さんみたいな女の役に立ててもらえれば、冥利というものさ」

男の手は、身動きもしない千世の肌の上を次第に大胆に這い始めた。

「といただけじゃ解るまいが、此処は新しい生き物を作る処なんだ。人間ばかりじゃねえ、鳥や獣まで含めて凡ゆる生き物を組み合せて、今まで誰ひとり見たことも聞いたこともないゲテ物——じゃねえ、生き物に生まれ変らせるのが伯庵先生の仕事というわけさ。かく言う俺もその一人だが、これは自分から願ひ出たって酔狂者、お見知りおきをということで参上……」

と言いかけて、急に男は身を退いた。

揚げ蓋の開く音がして、老爺が食事を運んで来た。

「何だ。お前さん、また来ていなすったのかい。娘御にあんまり余計なことを吹っ込まねえ方が、あととのためだと思ふがね」

苦い表情で、老爺は飯椀と菜を千世の檻に差し入れた。

この時、だしぬけに千世が身を起こした。かと思うと、再び絶叫が爆発した。

「出してッ。助けてッ。いやッ、いやッ。助けてえッ」

髪を振り乱し、両眼を裂けるほど見開き、必死の両腕が、檻の格子越しに、老爺に武者ぶりつこうとする。

「いいとも、いいとも」

老爺は軽く身を躲し、幼児でもあやすように物慣れた笑顔で応えたが、それ以上は取り合おうとせず、出て行った。

## 六

其処は、全体が板敷きのかなり広い部屋だった。中央に、人間ひとりが寝そべれるぐらいの長方形をした白木の台が、二つ並べて据えてある。それは恰度、巨大な姐まなと考えればよい。その表面は拭い清められてはいたが、明らかに動物の血と思われる生々しい汚点しみがあちこちに染み込んで、たださえ無気味なそれを一層、陰惨な感じにしていた。

二つの白木の台の中央に、腰の高さほどの卓があり、その上に、様々な形状をした刃物や、長短とり混ぜた針が、鈍い光を放って整然と並んでいる。壁の一角に造られた棚には

大小、色とりどりの硝子瓶が並べられ、それ以外の壁面は外国文字を書き入れた人体の腑分け図や骨格図などで、びっしり埋まっている。半井伯庵の奇怪な仕事部屋である。

筒袖、裁着袴たつかけの上に白衣を纏った伯庵と、これも同じ装束をした仙造によって準備のすっきり整った手術室には、すでに生まれたまの姿になった例の若い男と千世が居た。

男は、どちらかというとき浮き浮きと、しかし落ちつかない態度で、周囲をキョロキョロ見回している。一方、千世は、余すところない裸身を幾重にも緊縛され、猿轡を噛まされて、立ったまま柱に括られていた。

最前、檻から引き出されるや、猛り立つ牝獣のように暴れ、叫び、さすがの仙造もいささかもて余した隙に、舌を噛み切って死のうとさえた千世を見かねて、伯庵が縄がけを命じ、さらに自殺をおそれて嚴重に猿轡さるわまでかけさせたのである。ふくよかな頬が無慙に歪み、ほとんど縄目の見えないほど食い込んだいましめに、今や身動きひとつ出来ない立縛りの千世は、咽喉の奥から声にならない呻きを洩らし、瞼が裂けるまで見開いた両眼は底知れぬ恐怖に、血を噴くかと思われた。

「では、始めようか」



沈黙を破って、伯庵の眼が裸の男を見返り  
白木の台を指さした。

「お前は、此方だ」

すると、男はいそいそと大姐の上へ乗り、  
仰向けに軀を伸ばした。

「ウヘーッ、冷てえ。あんまり、いい気持の  
もんじゃありませんね」

「無駄口をたたくな」

伯庵の声は、ゾツとするほど冷たく、厳し  
かった。

男の姿勢が定まると、仙造は、台の両側に  
装備された鞆し革の帯で、男の全身を手早く  
固定してゆく。まず最初の一本が首にかかり  
以下、胸と腹にそれぞれ二本、下腹部は間隔  
を置いて腿に二本、胫にも二本、それに足首  
と、都合十本の革帯が十力所の急所を引き締  
め、犇々と肉に食い入る。仙造の容赦ない力  
が、強靱な革帯を一本一本締め上げる度に、  
「ウッ、ウッ」と呻き、顔を歪めて耐えてい  
た男は、遂に貼り着いたように長方形の台上  
に固定されてしまった。

## 七

千世が立縛りされた柱の前に、伯庵がゆっ  
くり歩み寄った。

「これから行なうのは、わしが五十年間念願  
として来た畢生の大事業じゃ。お前に些か説  
明しておかねばなるまい」

「いったい、どんな恐ろしいことが起るの  
か——千世の裸身に、鋭い痙攣が走る。

「お前に此処へ来てもらったのは、いま言っ  
た大事業には是非ともお前が必要だったから  
だ。というより、僕の理想を成就させる素材  
は、お前以外にないと確信したのじゃ」

「ムッ、ムッ」

猿轡に押し殺された空しい悲鳴が、千世の  
細い咽喉を震わせる。

「僕はこれまでに、ありと凡ゆる実験を試み  
多種多様、数えきれぬほどの新しい生き物を  
創り出して来た。それもこれも、たった一つ  
の理想を実現するための謂わば小手調べに過  
ぎん。僕は今や、それを成就せしめる術を会  
得し最上の素材を手に入れることも出来た。  
待ちに待った時が来たのだ。これから、僕  
の一生を賭けた最後の仕事なのじゃ」

伯庵の口調は、次第に熱を帯び、双眸が爛  
々と輝きを増す。

「僕の言う理想とは、この世の中に二人と居  
らぬ、完璧無比の人間を創り出すことじゃ。  
一般に男と言ひ女と言ひが、それだけでは互

いに人間の半分、謂わば半円に過ぎないのじ  
ゃ。その証拠には、男は女を、女は男を、死  
ぬまで需め合う。これは天地の自然、半円同  
志、片輪同志一体となって、完き全体円、理  
想の姿を得ようとする神の摂理に他ならぬ。  
しかし悲しいことに、この一体化、完璧化も  
瞬時を出ない。つまり、一瞬にして、もとの  
不完全な半円に還ってしまうのじゃ。そこで  
僕が考えたのは、時間、空間を超越した完全  
さ——言い換えれば、在るがままの姿で、永  
久に完璧な人間を創り出すということ。解る  
かな。簡単に言うなら、男女両性の一体化と  
いうことじゃ」

千世にはまだ、伯庵の言う総てが理解でき  
たわけではない。が、何か想像もつかない空  
恐ろしいことが起ころうとしていることだけ  
はわかった。

「一個の肉体が、同時に男女両性を具有する  
——それも、いかがわしい見世物や因果物師  
が使うような見せかけの半陰陽ではない。男  
女いずれの性も、同じ力で機能する——これ  
こそ、人間として極限の理想の姿なのじゃ。  
これ以上に美しいものが、またとあろうか。  
それを、お前の軀によって実現しようという  
のじゃ」



何ということだろう。この老人は、生身の人間を鉛細工のように切り離したり接ぎ合わせたり、そんなことを本当にしようと考えているのだろうか。ひょっとすると、自分は永い悪夢を見ているのではあるまいか。それが現実とは、とても信じられない。夢なら早く醒めて。この上、恐ろしいことが起こらないうちに。早く醒めて……ああ、神様……。

「喜ぶがよい。お前は、この世でたった一人の選ばれた人間になるのじゃ。男として情を感じれば、男の方が機能し、女として情を感じれば、女の方が機能するという完璧な肉体——男として女を抱き、女として男に抱かれる至福を体験できる人間を創り出せるのは、世界広しといえども、この半井伯庵ただ一人なのじゃ」

満悦げな伯庵の低い笑い声が、無気味に響き渡った。

(この男は狂人だ。悪魔だ。鬼だ。私は、私は、この男に、滅茶滅茶にされてしまう。殺して。いっそ殺して……)

千世の視界に、絶望の霞がかかる。

## 八

「幸いなことに……」

と、伯庵の視線が、手術台に固定された男に向けられた。

「もう一つの素材として、僕はこの男を手に入れた」

恰度その時、手術台の脇に腰を屈めた仙造が、男の下腹部に黙々と剃刀を当てていた。鋭い刃先が皮膚を滑る度に、男は「クッ、クッ」と声を立てたが、むろん身動きは出来ない。

「僕の知る限りでは、これほど見事な素材を二人と探すことは不可能じゃろう。世にも稀と言おうか、元来の逸物と言おうか、それが僕の理想のために授けられたのだ。何故ならこの男は、自分からそれを放棄したいと願い出て来た。誰よりも男らしい男の証を生まれながらに持ちながら、皮肉なことに、それを憎み、忌避したのじゃ。自らの肉体からそれを切り離し、女になりたいという欲望が、永い間この男を苦しめて来たと言う。僕は、この男の望みを叶えてやることにした。手術によつて女の肉体を与えてやる代りに、取り去った一部は、貴重な素材として僕が再生させることにしたのじゃ」

そこまで言う、伯庵は自分の手で千世を柱から解き離し、男の台の傍に立たせた。

「どうじゃ、娘御。とくと見るがよい。何と見事な男であろうが。これが僅かの後には、お前のものになるのじゃ。その美しく柔らかな肌を飾り、新しい生命を持つものじゃ」

すでに仙造の作業が終わった男の裸形は、奇妙な生々しさを呈していた。

千世は、あさましい男の姿を見まいとしたが、それより早く、伯庵の叱咤が飛んだ。

「眼を外らすでない。これは、すでにお前のものなのだ。これからの一生、お前の肉体で生き続けるのじゃ。男としても、女としても欠けるところのない、たった一人の人間——いや、神の一部となるのじゃ」

伯庵は、宝物でもないといふように、眺めやりながら、静かな声で言った。

「さ、覚悟はよいか」

同時に、千世の裸身は仙造に抱き上げられていた。

## 九

非情な革帯が深々と柔肌に食い込み、背骨がメリメリと音を立てるほど緊縛された千世は、仰臥した姿勢のまま、もはやびくとも動けなかった。身動きしようとすればするだけ革帯が肌を噛み、堅く冷たい手術台の表面が



背骨を砕くかと思われた。

生々しく血のにおいを吸い込んで、じっとりと黒ずんだ革帯に、上下を締め上げられて異常にふくらんだ二つの隆起だけが、千世の呼吸の苦しさを物語るように、僅かに息づいている。

「よいか、氣を楽に持つのじゃ。長崎で学びとり、さらに研鑽を積んだ儂の医術に失敗ということはない。信ずるのじゃ」

(た、助けて……)

徒勞と知りつつ、必死に哀願するつぶらな瞳が、しかし次第に光を失ってゆく。

「よいよい。怕がることはない。儂が一生かかって手に入れた美しい軀をむざむざ台無しにしてなるものか」

伯庵が喋っている間に、千世は、ある種の行為が自分に加えられ始めたのを意識した。

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作(イメーヅ画も)毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

(ああッ。いや……いやッ……)

猿轡の息で絶望的な叫びを上げる千世。自分の肉体に、いま何が行なわれているか、そのおぞましく冷んやりとした感触が的確に教えてくれる。

一種の儀式のような峻厳ささえ感じさせる静寂の中で、柔らかい肌と研ぎ澄まされた刃物が触れ合う微かな音だけが続いた。

「よかろう」

伯庵の声とともに、生ぬるい湯が何度もかけられ、仕事の跡を確かめるように、掌が這うのを千世は感じた。

(うッ、うッ……)

「見れば見るほど美しい肌じゃ——」

肌を這い廻る掌が、つと停まった。

「この美しい肉体に、もう一つの美しい生命が再生するのじゃ。そして、お前は神に生まれ変わる——」

(ああ……お父さま……お母さま……)

千世の真っ暗な視界に、家族の顔や、平和だった生活の情景が、浮かんでは消えた。やさしかった父や母とも、もう再び会うことはないのだ。私は、生まれもつかぬ浅ましい姿にされて……

その時、千世の耳は、恰で夢の中のように

遠く、しかしはっきりと伯庵の声を聞いた。

「麻醉——」

続いて、硝子瓶の触れ合う冷たい音。

(とうとう、最後の時が来てしまった……)

千世の閉ざした瞼から、とめどもなく涙が流れた。それは最早、安らかにさえ見える可憐な殉教者の表情だった。

仙造が手にした布で、千世の鼻と口が覆われた。

その瞬間、千世は、

(あの匂いだ……)

と思った。その強烈な、嘔吐したくなるような匂いが、たった一度の経験、路上で誘拐された日の記憶を甦らせたが、それもほんの瞬時、千世の意識は忽ち加速度をつけて、暗黒の底へ真逆様に落ちて行った。

○

「いわば、その女——じゃない、生神様は、だ——」

と、女形は最後に言った。

「おいらとは、血肉を分けた兄弟というわけさ」

むろん、だれ一人、信じる者は居なかったが……。

——(完)——





## 昭和元禄SM時代 備後周一郎

私は満州からの引揚者である。

今の若い人には、満州とか引揚者とか言っても、何のことか、さっぱりわからないことと思う。

あの生地獄の敗戦から二十五年以上も経っているのだから、日本人の頭の中から忘れ去ってしまうのも当然であろう。当時十五才の子供だった私が、もう四十を越す年齢になっているのだから、その頃の事件を語り継ぐ人も次第に少なくなつて、やがて死にたえてしまふのではないかと思う。

昭和二十年八月、大東亜戦争に敗けた日本はアメリカ軍によって内地を占領されてしまったが、私達のように満州に住んでおった日本人は進撃してきたソ連軍と蜂起して暴徒と化した土民によって、それこそ虫ケラのように男はなぶ

り殺しにあい、若い女は強姦や輪姦を受けたのである。

当時満州を準備していた関東軍はいち早く山奥へ退却してしまいその前に根こそぎ動員によって足腰の立つ男は全部軍隊に徴収されてしまつていたので、後に残った女子供や老人は、羊に襲いかかる餓狼のように、持っている物をすべて奪われて丸裸にされたばかりでなく、幾万という日本人がむざむざと惨殺されてしまった。

物置小屋の中で日本人の団が難を避けてかくれている時、尿意を催した十九才の娘が、皆がここのでするように言うのに羞かしがつて戸外で小便をしようと出ていったが、暫くして布を裂くような悲鳴がしたので見に行つたところ、衣服を剥がれた娘さんがソ連兵数

人によって輪姦されているところであつた。そんなことがあつてから若い女も羞かしさをこらえて洗面器の中なんかへ放尿していたがその時の白い太股や臀部がめくつた衣類のすき間から見えかくれしていたのを今でも覚えていふ。

現在でもベトナム戦争ではソンの虐殺事件とか、カムボジア進撃ではメコン河に後手に縛つて惨殺した屍体が無数に流れてきたとか、血腥い事件が耳新しく報道されている。最近でも2月19日号の週刊読売にはカムボジア政府軍のパトロール隊員がベトナム人の生首を手にはさげている写真と、死体から肝臓を取り出して手にのせている写真とが載つていた。

現在の日本は昭和元禄といわれる位、本当に平和であり経済的には繁栄を極めていふといつてよいが、その日本は二十数年以前は戦争という殺戮の場で、魔性に憑かれたように惨虐の限りを尽し、また幾万、幾十万という同胞を異国の地で散らしたとか。私はその事実を、この昭和元禄を叫ばれる平和な時代にこそ、よく知つて貰いたいと思う。

北欧に端を発したセックス文化がアメリカはじめ欧州の文明国の

間で次第にエスカレートしているとのことであるが、戦争の空しさや悲惨さを身をもって痛感している私は、平和時代の象徴ともいふべきセックス文化の自由化を心から歓迎している。

戦争という殺し合いの場面でSMを実践するよりも、現在の日本のようにセックス文化の一断面としてSMを昇華している方が、いくら無難であり平和的であるかもしれない。私も終戦当時、もう二つ三つ年齢が上であつたら召集されてシベリヤに抑留された挙句、重労働でこき使われた果て、營養失調でたれ死にしていたことと思う。祖国の上に想いを馳せながら空しく自決し或いは惨殺された幾万の人達の瞑福を私は心から祈りたいと思う。

かく言う私も満州の地に於いて両親と幼かつた弟妹とを失ひ天涯孤独の身一つを涙と共に引揚げてきた者であるが、「この仇だけはきつと討つておくれ」と言い残して死んでいった母の言葉だけは耳について離れない。

私は本誌の愛読者であるがSMを実行しようとは、いささかも思わない。SMはあくまでも鑑賞し味読するものであるからだ。



# 「縛られる」ということ

若山 伊都子

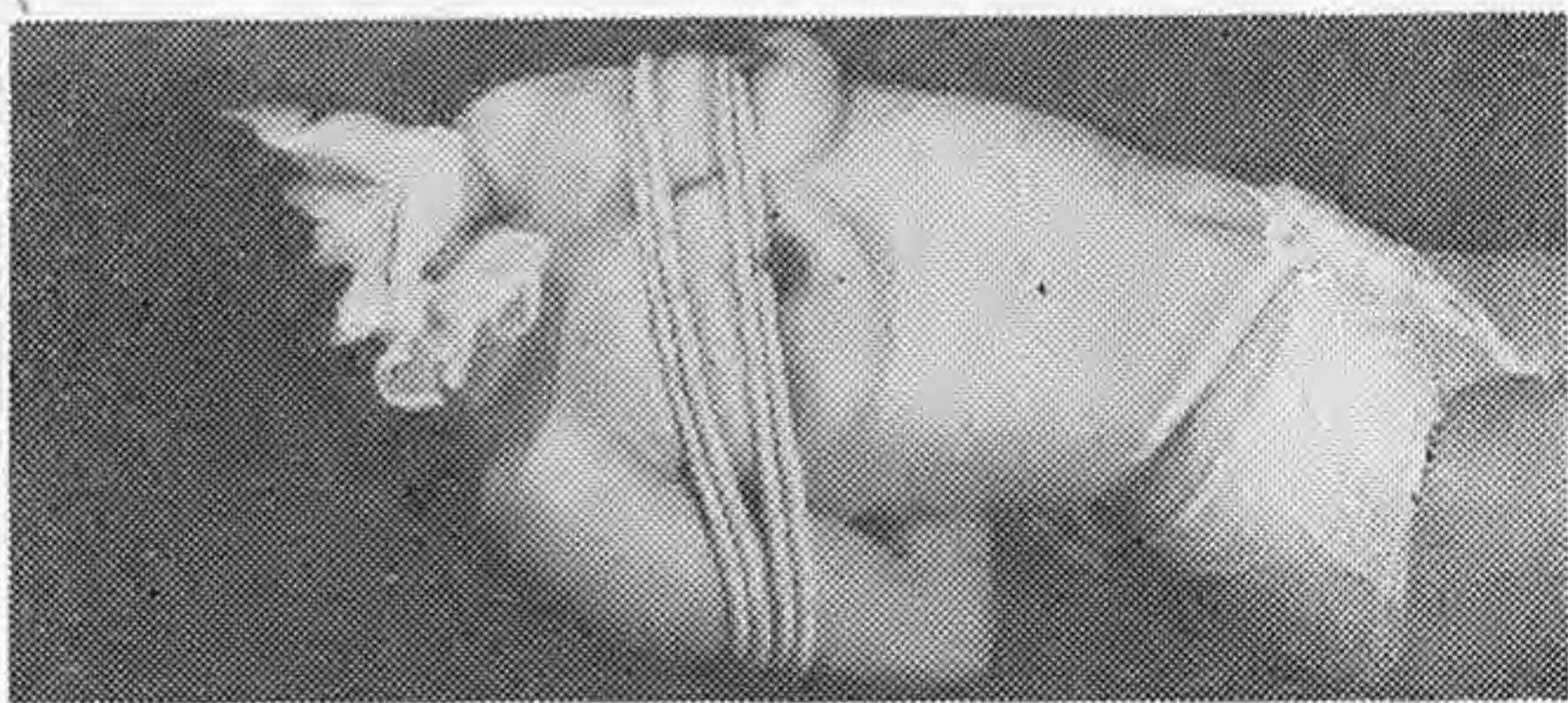
この頃、私は自分自身がわからなくなってきました。

あれほどきらっていた奇巧に、こともあろうに、私の一番羞かしい姿を発表してしまいました。

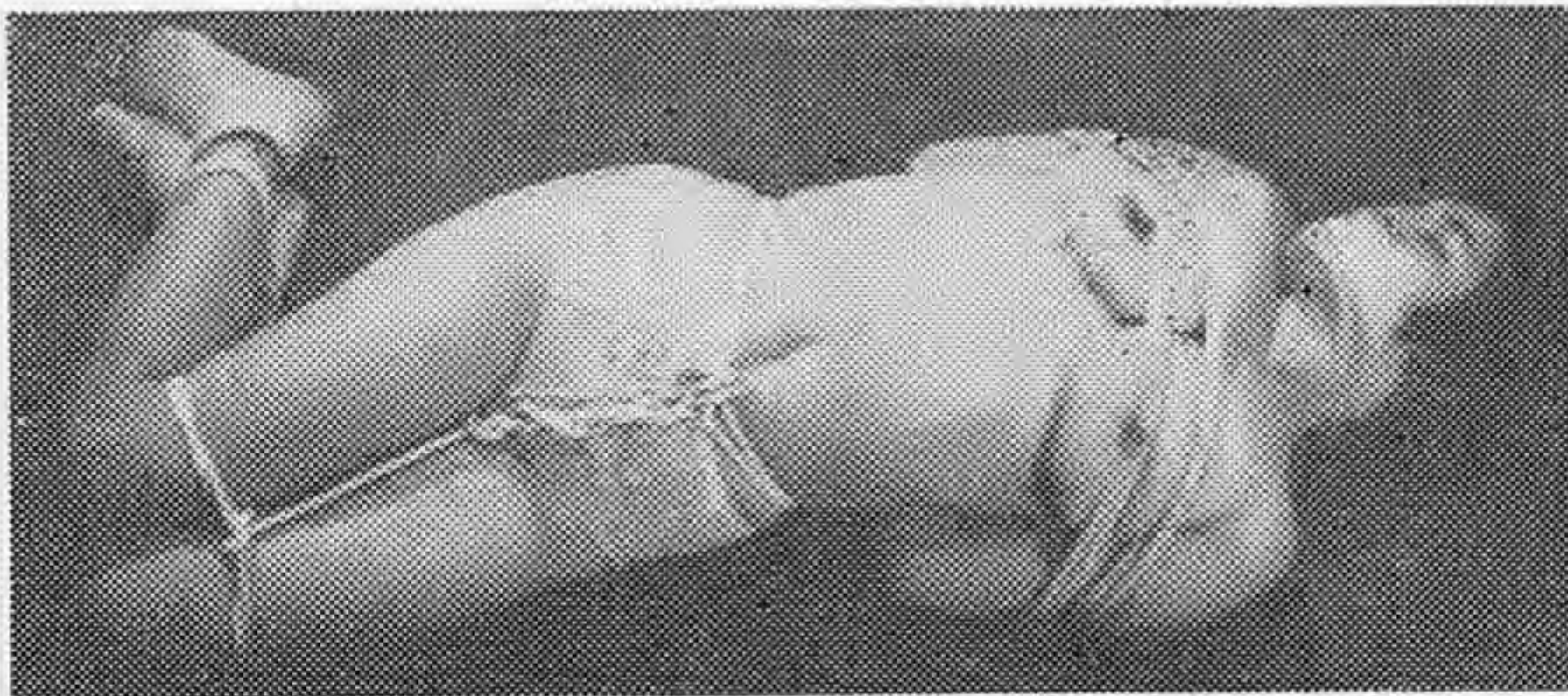
ほんの半年程前までは、裸だけは絶対にいやと言っていた私が、十月号に主人からの投稿で「愛妻の緊縛写真」（主人はK生として投稿したそうです）誌上に掲載されてから、こうも心の中が変わってしまったのでしょうか。

以前はプレイ写真を投稿される方や、まして交換プレイを求められる方、またカメラハントで辻村様に縛られる奥様方の心を理解しかねておりましたが、最近では私も、縛られることに興味を感じるばかりでなく同好の方々とプレイなども空想するようになってまいりました。

ほんとうに、このような私の心の変化と申しますのは、どのように考えればよいのでしょうか。良い同好者が現わ



れて激しい交換プレイを経験して一層縛りそのものに関心や執着を抱く女性に変化してゆくのか、又は一生空想だけで、このまま夫とのプレイのみに終わるのかわかりませんが、でも今はこれで幸せな



毎日です。これからも夫とのプレイは続けてまいりますので、プレイ写真は時々ごらんにいれたいと思っています。よろしく、御指導下さいませ。





## —＜第八十三回＞—

辻 村 隆

PORNOGRAPHY (ポ  
ノグラフィ、ポルノグラフィ、ポ  
リノグラフィ)の原書が、いよいよ  
大手を振って、日本にも罷り通  
り始めた。訳すと、わいせつ文学  
春画、春本、猥本、エロ本、エロ  
写真、ブルーフィルムなど、所謂  
かつての御禁制品のことである。  
それがポルノグラフィなどという  
北欧を発端とした、新しい言葉で  
呼び慣わされ始めると、何となく  
スンナリとして、抵抗も少ないの  
は、言葉の持つ、新鮮な魅力であ  
ろうか。

既に原語の俚の単行本、雑誌が  
どんどん日本に流れ込んで来て、  
洋書店や、新刊書肆の店頭を飾っ  
ているが、原語となると、日本は  
いたって大らかで、それが一部の  
人々によって訳され、好事家の間  
に秘かに出廻っていることにも、

一向に寛容なようである。その癖  
フォトは未だに禁制であるという  
偏見である。

デンマーク、スエーデンに端を  
発した、このポルノグラフィ解禁  
が、西ドイツに波及し、アメリカ  
も遂に与論に負けて解禁し、英国  
も時間の問題だそうであるし、伊  
太利、仏蘭西もやがて解禁になる  
らしい。自由国家は漸次、解禁に  
なるといふが、日本はどうであろ  
うか——。明治、大正初期生まれ  
の、頭の硬いお偉方は(劣情を刺  
激する故、罷りならぬ)という方  
針らしいが、最近では、中学生すら  
セックスに関心をもち、ヌードで  
蔽われた部分、削除された部分を  
何故隠蔽し、何故あるべき処にな  
いのかと疑問を持つ様になってい  
る。しかも、住宅事情の悪い日本  
で、中学生達は、しばしば、その

劣情を刺激するといわれる行為を  
自分の両親等に発見しているのだ  
ある。三段論法でゆけば、劣情を  
刺激する行為が悪いのであれば、  
両親の営みは悪い行為ということ  
になる。そのせいでもあるまいが  
近頃の子供は、親に対して不信感  
を覚えていく者が多い。同じ自由  
国家群に於いて、或る国は許容し  
或る国は厳禁するとなると、青少  
年ならずとも、一片の疑念を覚え  
ざるを得ない。解禁が進めば、禁  
制が低開発か、これはむづかしい  
問題であるが、かくいう私、さて  
いざ解禁となると、大正生まれの  
幾分の、古めかしさで、子供の手  
前、矢張り途迷うのではなからう  
か——。

× × ×  
西ドイツの映画「陰獣の森」と  
なると、これは凄惨なポルノグラフィ  
映画である。勿論、日本での封  
切りは、露出箇所は全部カットさ  
れているが、原フィルムは、オー  
ル露出で、しかもSM趣向が横溢  
しているのだから、垂涎ものであ  
るが、西ドイツの三流ピンク映画  
プロも、最近はいよいよエスカレ  
ートの一途を辿っているようであ  
る。若い女性を全裸で、大の字吊  
りにし、いろいろに責めるが、そ

の大の字吊りは、両手両足をそれ  
ぞれ革手錠で天井より吊り下げ、  
それでは女体が持たないから、胴  
体に幅広のバンドを装着し、鎖で  
上から吊ってある。水平の大の字  
吊りは圧巻であるが、更に加えて  
全裸のS女性、その被虐女性に  
乳房を吸わせ打擲し、果ては淫靡  
なSMのレス行為を続けるとあっ  
ては、是非とも見たいシロモノで  
ある。最近のデンマーク、スエー  
デン、西ドイツの映画は、全裸は  
日常茶飯事であって、先日一寸  
覗いてみた、双児が互いにアク  
メを感じる「感じる」、二人の女  
囚脱獄の「牝の肌」麻薬を扱った  
「恍惚地獄」など、すべて露出で  
ズタズタにカットされてあった。  
カットの多いということは、原画  
がそれだけスゴイという裏返しに  
もなっていて、見終わってガッカリし  
乍ら、やがてこの種の映画が、ノ  
ーカットで輸入される日の、一日  
も早からんことを希うのは、私な  
らずとも世の好事家一般の、秘め  
たる願望ではなからうか。

× × ×  
最近の外来語の氾濫は、実にめ  
まぐるしいの一語につきる。テレ  
ビ、雑誌をみても、意味の分から  
ぬ外来語にぶつかり、しばしば当



## 『やめてったらッ!』緑JOE!



惑することがある。流行の服飾、美粧等に特に顕著であるが、息子が先日、当用新語辞典なる、日常生活に欠かせない外来の新語、略語の辞典を買ってきて、しきりに調べている。日教出版社のものでマスコミの中から、八五〇〇語を集録して、殆どの最近の外来語は収められている。パラパラと繰って、私も一応、新知識をつけるにふさわしい辞典と、大いに便利に思ったが、何気なく末尾の略語に目を通すうち、果たして「SM」なる語は収録されているかなと繰ってみた。あるある、確かに「SM」はあったが、何と意味は、サビス・モデュール(SERVIER)

CE-MODULE)の略、訳して、アポロ衛星船の月機械船のことだそうである。  
静かなブームを呼ぶ「SM」に  
関し、それを知りたい読者は、月機械船に、懼らくは目をシロクロさせるに違いない。  
「SM」について、月機械船という様な、稀小の略語を掲載するのなら、何故、今一歩つけ加えて、サド、マゾの略語なり。ぐらゐの第二義的な説明をつけなかったのであろう。それは現在の世相を知ること上についての、豈に私だけの独りよがりでもない筈である。当用新語辞典といっても、所詮はこんなもの。仲々に「SM」の深奥を

究めるのは、むつかしいことのようにである。

× × ×

団鬼六氏からの紹介で、先日、「週刊サンケイ」の記者と、ルポライターの中陽造氏が拙宅を訪問され、現在同誌に連載中の「異能人間シリーズ」に、私という人間に登場してもらいたいと仰有るのであった。無責任に、何もかも曝露されても困るので、私の本職や現住所など伏せていただくという約束で、現在のSMの風潮について、私の持論を大いに弁じ、参考資料なども開陳して、種々語り合ったが、それというのも、ルポライターの中陽氏が、私もかつて東映で世話になったことのある、石井輝男監督と親しいというような事から、急速に話が開けたのであった。東映での私の最後の協力作品「責め地獄」が、何処かの団体で、ベストテン入りしたなどということは、私も初耳であったが東映三作品の、いろいろの内輪話からカメラ・ハントに話は移り、サンケイとヨミウリは競争紙だから、イレブンPMの方の話は余り出さず、専ら、急激に変貌しつつある、現代女性や夫婦の、SMプレイへの関心などを、時間を忘

れて話したのであった。ほかの異能人間の方々は、話を幾分ふくらませて書くが、私の話を縮小せねば、原稿用紙十二枚制約のルポは書けませんよと、田中ルポライター氏は、まるで同好者気取りで愉しそうに語っていた。彼は、週刊サンケイに私のことを書く。私はこの欄で、彼の事に触れる。書いたり書かれたり、考えてみれば面白い世の中である。

嘗て、第一回のイレブンPMで同席した犯罪学の権威、阪大の大野先生が、犯罪者とSMの関係について、近々助手を連れて御訪問の予定である。こうなってくると、SMの道ひとすじに、今も我々営々と続けている私のテーマもあながち、無駄でもなさそうである。思えば世の中も変わったものだ――。

× × ×

四月号、絹吹悠紀夫氏の「辻村隆研究」を拝読すると、近頃の、トンと投げやりな緊縛や、ストロボ一点張りのスナップ式フォトが気愧かしくなってきた。

実に綿密に彼は、過去のモデル嬢を、一人一人分析し、徹に入り細に亘って検討していらっしゃるが、撮った当の本人が、既に過去



の、古い緊縛モデルのあれこれをすっかり忘れていたのだから、全く申訳ないの一語に尽きる。

昭和二十七年の夏、緊縛第一号の川端多奈子の縛りを皮切りに、私はまるで憑かれたように、箕田氏と二人で、次々と新たな女性を物色しては撮りまくっていた。モデル女性に、強いマゾヒズムを感じた時は、矢張りハッスルし、弥が上にもエスカレートしていったが、モデル料が目的の、M気のない女性には、昔も今も、さして関心が残っていない。絹吹氏から精密なデーターをつきつけられ、私は十八、九年前の過去を、しきりに想い出そうとするが、川端、絹川、伊吹、坂口、愛川、大塚、川辺等の、よく撮ったモデル嬢は、すぐ面影が泛かんでくるが、その他の女性の顔は咄嗟には浮かび上がってこない。当時の緊縛女性は、片っ端から、箕田氏と私で撮りまくったのを覚えていたが、それもある。二十九年の警察の家宅搜索の時、殆ど押収された尽で、戻ってはこない。膨大な量だった、川端、伊吹のフォトも、今は辛うじて押収をまぬがれたものが数枚、残るだけである。フォトのない私にとって所詮二十九年以前のモデル嬢に

対する私のイメージは、それだけ薄れているといつてよかろう。唯いえることは、あの当時、五〇〇Wのスポット、フラッドのランプの数個を持ち込み、しばしば旅館のヒューズを切っては叱られながらも二眼レフの六×六判で一枚一枚丹念に撮っていたことだけは、確かである。それだけに、今のうちに、36枚撮り一本、忽ちに撮り終わるような粗雑さはなかった。絹吹氏も謂う通り、二十七、八年頃は、SMの黎明期である。世間には、SMの正体を公表出来る筈もなかったし、若し正体が分かったとすれば、それこそ、変態的なアブ人間として、人々の指弾を浴びたに違いなかったであろう。緊縛という行為そのものに、激しい情熱を燃やしていたあの頃と、緊縛はSMプレイの一種の手段に過ぎないという、今の私の観念の違いが、最近の私のフォトに顕著に現われていることは、紛れもない事実である。然し、今一つ云えることは、嘗々と、二十数年、女体緊縛に憂身をやつしておれば、もう殆ど、ありと凡ゆる緊縛はし尽したという、飽和の念が起さるのも亦、己むを得ないのではなからうか。グラビヤフォトの全廃も、私

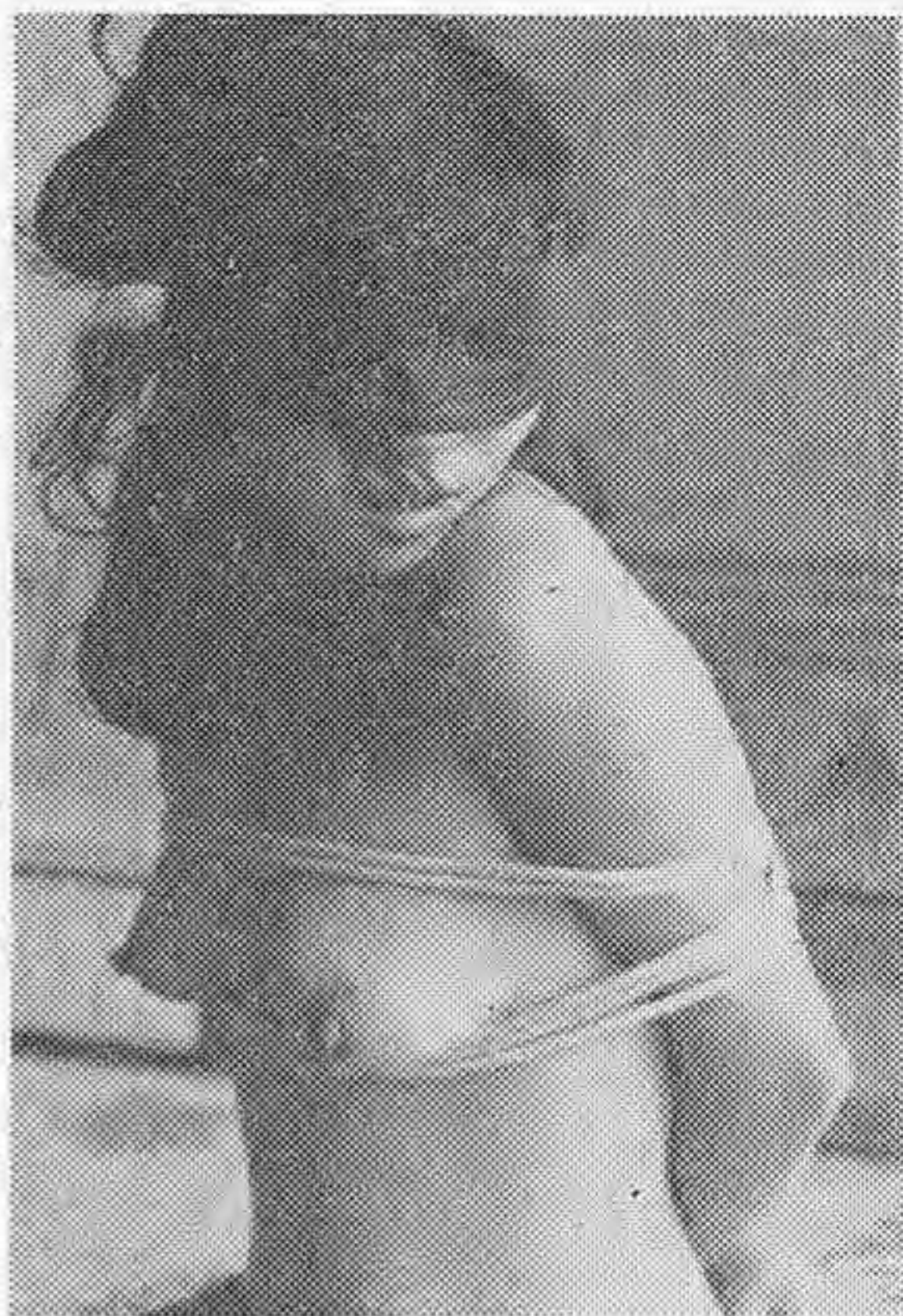
に大きな転機をもたらした事は、忌めない事実である。誌上に掲載されるフォトの不鮮明さ——。如何にモデルに精根を傾けて撮っても、あのカメラ・ハン ト挿入のフォトでは、どうしようもないという諦観の念が、いつしか、私をスナップ式に、走らせる一因ともなっていた。

絹吹氏のフォト論には、つくづく改めて敬意を表し、機会あれば是非一度、拝眉を願いたいものである。最近のハント・フォトの中にも、十枚に一枚、いや、百枚に一枚ぐらいは、お気に召すものがある事を自負し、筐底を傾け、胸襟を開き、SM談義に一夜を語り明かしてみたい気持ちにかられるのである。



美少女無惨画秘帖『双方突き』桐原紫門





ある願望……東京・Y Y……  
 フォト羞恥プレイ

何回か奇クのページをお借りして皆様の仲間入りをさせて頂いた上、鼻責めプレイに関して、いろいろの方から貴重な体験談や参考になる御意見を発表して戴き有難く思っています。

充実の一途を歩む奇クの中でも夫婦プレイの写真投稿の増加が目をはき、とても楽しみです。まあ呼びかけなどもあるでしょうが夫婦プレイ・レボを投稿される方々は妻に対して心のどこかで羞恥責

クに出たりしますと、その記事を見た夜の妻の燃え上りかたは異常なほどなのです。

そこで考えたのですが、プレイをする、フォトを撮る、見せたい、投稿する、というエスカレートぶりは、次には複数プレイ、交換プレイ願望へと進んでゆくのではないかと思います。

ですが、複数、もしくは交換プレイとなりますと、いくら他人介在の羞恥責め希望といっても、そう簡単に出来るものではないように思います。心理的にも衛生的にも、かなり問題があるのではないのでしょうか、たとえセックスを伴わないとしても……。

そこで私が最近よく考えることは、夫婦二組が集まって、お互いに妻の前で妻のプレイ写真を見せ合う、ということなのです。

本人の居る前で鑑賞する、かずかずのプレイフォームに被写体の当人は、どんな想いをするのでしょうか。場所も、有名デパートの食堂の片隅とか、明るい喫茶店の一隅、もしくは公園の芝生の上などで、はた目には二夫婦揃っての旅行などの写真を見ているかのようには映るでしょうが……。

もし、そんなことが出来たら、

妻に下着をつけさせないで、普段は着ないような超ミニなどで連れて行きたい、などと思いつながら妻に話すと、複数プレイなどは絶対にいやだが、その程度のことなら面白そうだから行なってもいいと申しました。

実際のプレイは、まだ、よほど信頼出来そうな方とでも難しいのではないかと思います。フォトだけの交換プレイなら、そう問題はなく、ある程度の効果が得られるような気がして、夢だけではないかなんとか実行してみたいと考えている近頃です。どなたか、お相手して下さる御夫婦はいられないでしょうか。

SMプレイというと、どうもじめじめしたものを考えがちのようですが、たしかにムードも大切でしょうが、夫婦の夜のプレイとはまたガラリと変わった明るい雰囲気の中、SMムードも面白いだろうと妻と話し合い、二人のモットーを「明るく楽しく」ということになりました。共鳴して下さる同好御夫婦がありましたら、どうかよろしくお願い致します。

同封のフォトは、妻をモデルにして、私が写した、プレイ写真です。お笑い下さい。



東山映史

洋画の「女刑罰史」や「陰獣の森」等で、日本人には一寸、正視できないような「魔女狩」や「魔女裁判」で拷問シーンを見せてもらった。

邦画では、大蔵映画の「金髪的女王蜂」で金髪のリサー・バトラと美矢かほるの東西女優が、久し振りに美しい緊縛シーンを見せてくれた。美矢かほる扮する女優が主演女優として自己の映画批評をよく書いてもらうために、二階堂浩扮する映画評論家が美女を縛るサジステイックな性格を持っている

日活映画の「夜の最前線―東京マル秘地帯」で、東映の桑原幸子がリンチにあう。着衣を破られ、剝がれ、毛髪吊るしで、真冬というのに氷の上に立たされる。一寸すさまじかった。

以前にもピンク映画で、氷の上で吊るし責めにあう場面があったが、女優さんも、演技であるとはいうものの、色々変わった責め方をされるので、なかなか大変なところだろう。

責め絵を描いて

## 市原幸三郎

思い出すなあ、子供のころを。  
近所の可愛い女の子を、お姫さ  
まに仕立てあげ、悪者役のこの僕  
が、お姫さまを誘拐し、紐や帯で  
縛り上げ、部屋の一つに閉じこめ  
て、襖のスキ間から覗いたつけ。  
ああ、あの時のあの氣持、なん

ともいえぬ甘酢っぱい、夢見る如きあのムード。

じつとうなだれ、悲しげに、不安の臉しばたたき、静かにゆるしの刻を待つ、そのいじらしさ美しさ。僕の心は宙にとぶ。

夢から醒めたこの僕は正義の騎士に早変わり、手向かう悪人斬り倒し、救いの手をば差しのべる。強く縛った帯を解き、手首の紐あと撫でてやり、やさしくいたわる僕の手に、安緒したよう背を預け、ニッコリ笑ってくれたっけ。





『栄先への特訓?』あらい・かず

## 鼻責めマニアの雑感

三 浦 喜 八

私が初めてこの種の雑誌を手にしたのは、かれこれ二十年近くも昔のこと、それが奇クであったのか他誌であったのかも判然としないながら、その時の気持だけは今でもはっきりと覚えています。

以来、ずいぶん買い漁っては処分してきたのですが、現在、それらが一冊数千円の価がつけられているのを知って、びっくり。

今でこそ、SMの言葉はだれでも知っているようですが、ひと昔も前までは、まるで隠語のよう

であったのを想うと世の中ずいぶん変わったものです。アメリカ辺りではホモなどかなり多いようですが、多分SMの風潮も相当に広がっていることでしょうし、北欧など性意識先進国では、SMはセックスとして当然の行為とみなされているのではないのでしょうか。既に数年前の週刊誌で、そんな記事を読んだこともありました。

私もマニアの一人として、縛りシーンを求めて映画のハシゴをした時代もありましたが、鼻責めマニアの私が満足出来るシーンに出合ったことがないのです。これだけピンク映画も氾濫しているのに残酷や露出度を狙っているとは思えないものばかりで、ねっとりとした鼻責めのある映画が出来ないのが不思議に思います。

その点で私が惹かれるのは、やはり小説で、「花と蛇」など永年愛読しているのですが、鼻責めマニアとしてはもう一步もの足りなく感じるのです。カメラ・ハントのように現実の記録では、鼻責めを望むのは無理かもしれませんがハンターの先生の中には鼻責めを

なんとセンチメンタルな、ロマンスの思い出なんだろう。大人になんかならないで、あのままだったらよかったに……。

あの清々しさに引きくらべ、同じ緊縛恋うるにも、今の想いはどうだろう。ギラギラ不気味な色放ち、噴き出すような欲望に、混ざる汚濁をなんとする。その汚れこそ本来の、生けるしと思えども、なめずり回す想念で、絵筆によつて描き出す、女の苦悶の肢体こそわが性欲の贅ならん。

心のどこかで声がする。おまえは忌むべきヘンタイだ！ 救いようなき性獣だ！ あわれなるかな悪魔の下僕！

心のどこかで声がする。ぶつぶ理解して下さる方は居られないものでしょうか。

本年二月号の辻村氏の谷山久美子に対するプレイ中、足指による鼻のいたぶりが僅か一、二行ありましたが、渴望する私には楽しい宝石の価値がありました。かといって、S・F系のフィクションはどうも私には親しめません。この系統のものには、よく鼻輪などが出てくるのですが……。

沼正三氏はすっかり有名になり

つづく声がする。そこまでのことアないだろう。いいじゃあないか描くぐらい、他人に迷惑かけやせぬ、これで自ら慰めて、黒い血汐の奔流を、なだめて明日の活力に、変える効果があるんだよ。

騒ぐ血汐のあるうちが、わが人生の甲斐なのさ。老いたる血汐の淀みなら、奔流などもありやすまい、絵筆とる気も起るまい。行いすました顔の裏、消えゆく時を待つものの、無気力極まるわびしさと、少しはチクチク痛むけど、猛り流れるこの気力、較べてみるとき想うとき、握る絵筆が奮いたつ。さわあれ巷に競い咲く、SMムードの花盛り、ああ世の中も変わったナア。

最近、評論集を出したとか。奇ク連載中に三島由紀夫氏が注目されていたそうですが、なるほどだと思います。三島氏の死は「純粋に性的な動機から」と指摘したのは沢氏ですが、私にもこの言葉が、すなおに肯けます。

ポルノグラフィの解禁は、日本ではまだ未明の段階ですが、西欧諸国では既に白日の下で公開されているようです。羨ましい限りだと思います。



＜女囚詩＞

寒夜の責め

北川 まりこ

寒風に曝して責むとわが身より  
着衣一切剥がし給いぬ

包まれし冷氣に慄うわが素肌  
まず凍水の洗礼を受く

荒縄を濡れ身に受けて寒風の  
物干台に追い上げらるる

霜白き干場の板ぞ仕置の場  
裸身に給う鞭のおと冴ゆ

踏みしめし素足に滲みる霜痛く  
素肌を照らす月光もまた

北風を切りて捌かる縄の束  
夫の施縄わが肌を噛む

拘束のわれを据え置き夫去り  
雨戸を閉ざすその高き音

羞かしや雁字搦目に縛られし  
わが身を眺むる寒の満月

吹き抜ける冷たき風に颯られて  
いつしか燃ゆる肌の不思議さ

愛妻ゆう子——新田英雄——



美しき緊縛妻女を羨む

国川 栄一

紀川正信、今田雄三、渡辺光雄  
の各氏、みなさん申し合わせたか  
のように美しい奥さまというばか  
りでなく、御主人のためには縄目  
の羞恥を晒すのを厭わぬ貞女ぶり  
で、羨ましく限りです。

紀川氏はフォートの贈呈を謝して  
おられたようで、当然、住居を明  
らかにされていられるのでしう  
が、秘密めかないおらかさから

将来のエスカレートぶりが予期出  
来る想いで、愉しみです。

今田氏の美しい奥さまも堂々と  
お顔まで撮影されていますが、そ  
の勇氣あるご態度には拍手の他あ  
りません。おそらくSMの真のあ  
り方を理解し、愛するお気持ちがさ  
せたワザでしょうが、期待させら  
れるところ大です。

渡部氏の、愛する妻女を他人に

差し出すS性には感嘆します。そのこと自体は正しくSでしょうが送り出した瞬間からは、他の男の手に依って悶えを引き出される愛妻の姿を想って共に被虐を味わっていられたことでしょう。

辻村隆氏のカメラでは、白い陶器にまつわる耽美Mフォートが既に何葉か捕捉されていますが、惜しむらく、夫婦プレイのこの種フォートには未だお目に掛かっていません。プロにあらざる趣味のための奥さま羞恥フォートを、お三方にお願い出来たらと思います。

さらに、今田氏も独言なされたように、夫婦プレイは、交換、複数プレイに進むのが自然であり、よき昇華法だろうと私も考えています。同好者同志の深い信義と理解に基づいて交換SMプレイの実現レポートは拝見出来ないものでしょうか。今田氏が語る好美夫人、渡辺氏の観察になる今田夫人……正に幻想の耽美さだと思ふのですが、これもヤジ馬根性なのでしょう。

交換プレイが無理ならば、せめて三女が一堂に会し、辻村氏あたりの指導のもとに、女性同志のSMプレイだけでも望みたいと思うのですが、いかがでしょう。



## S M の 市 民 権

佐 渡 好 夫

「ノーマル」であるか「アブノーマル」であるかは、いったい何によって決まるのであろうか。

世間一般の概念からいえば、絶対的に少数のものがアブノーマルだということになりそうだが、ミニスカートが日本に上陸したての頃は、ごく限られた女性のみが穿いていた。この段階に於いてはミニはスカート界の「アブ」的存在であったのだが、またたく間に広まって、あまねく女性の露出欲を満たし始めると、立派に市民権を持った「ノーマル」スカートに変わってしまった。少なくとも、異端視されることはなくなったのだ。

この事実を、SM界にてらしてみても不思議に思うことは、人間は誰しも多かれ少なかれSMの心理を持ちながら、なぜに具体的SMが市民権を与えられないのだろうかということである。

人類の本能にして特権的な「セックス享楽」の能力は、既に当然のこととして市民権の有無を疑う者は居ないであろう。その性行動の中に、意識するしないに拘らずSM要素が含まれているというこ

とも、もはや疑う無智者も居ないだろうと思うのだ。

にも拘らず、SMを「アブ」として異端視しようとするのは、人間本能をネジ曲げて作り上げた社会的規範や、常識と名付ける不当な羞恥心、もしくは嫉妬的批判を恐れる臆病心のために、本心を偽っている人のあまりにも多いためではなからうか。SMに対してわざと無関心を装ってみたり、オーバーな蔑視や嫌悪の表情を演出する裏には、本心の願望を見透かされたウロタエ、つまりテレ隠しがないとはいえないと思うのは、私の持論主張のための勇み足だろうか？ しかし、悪人ほど正義漢ぶるというのも事実の一つなのだ。

いずれにせよ、SMはアブノーマルであるとされているのは動かせない現状である。しかし私は、異常なまでに発達しつつある機械文明社会の中で疎外された人間が必ずや反撃に出ることは間違いないと思っている。すなわち、人間が、人間の住むための社会を作り出す以上、人間本位なることをあくまでも主張し、人間本能を閉鎖

することを打破して行くのが当然で、かつ、絶対に必要なことである筈なのだからである……と、ヘンにややこしい云い廻しで理論家ぶって見たが、つまるところは、誰しも嫌いじゃないだろうと思う「性行動」の中に潜むSM性に気付き、認識し、分解し、吸収し、

## 肥満女体バンザイ

赤 畑 修 造

「問題小説」誌2月号の中の「デブ女ほど味がいい」は、そのものズバリでドキリ。

同3月号に戸川昌子の筆になる

そして少なくとも異端視扱いに同意するかのような装いは捨てる人が増えてくるに違いないと思うということなのだ。

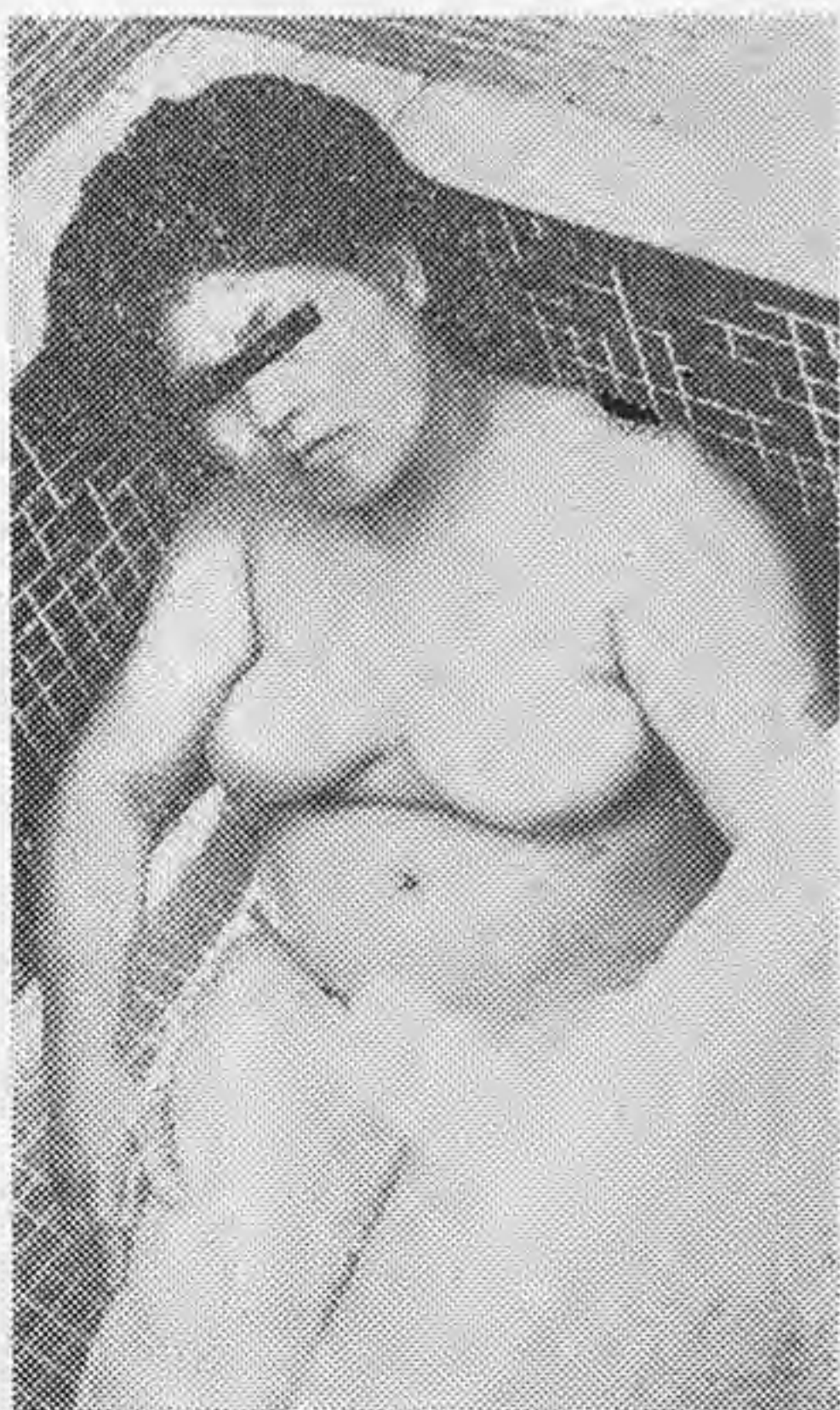
その時こそ、SMは市民権を獲得し、アブの冠詞を消滅せしめることになるのだろう。——アア、シンドカッタ。ゴクロハン。

超肥満黒人歌手が登場、わが為の設定？ と独り決めてゾクリ。

期待した杉浦幸雄の「女性美ケツ作戦」は、たいした収穫が得られずしてションボリ。

「漫画エース」誌に毎号活躍の若山ひろしは素晴しくゾクゾク。

同封写真は八肥妻湯浴みの図▽







## 雪江の縛り

(その2)

伊達一也

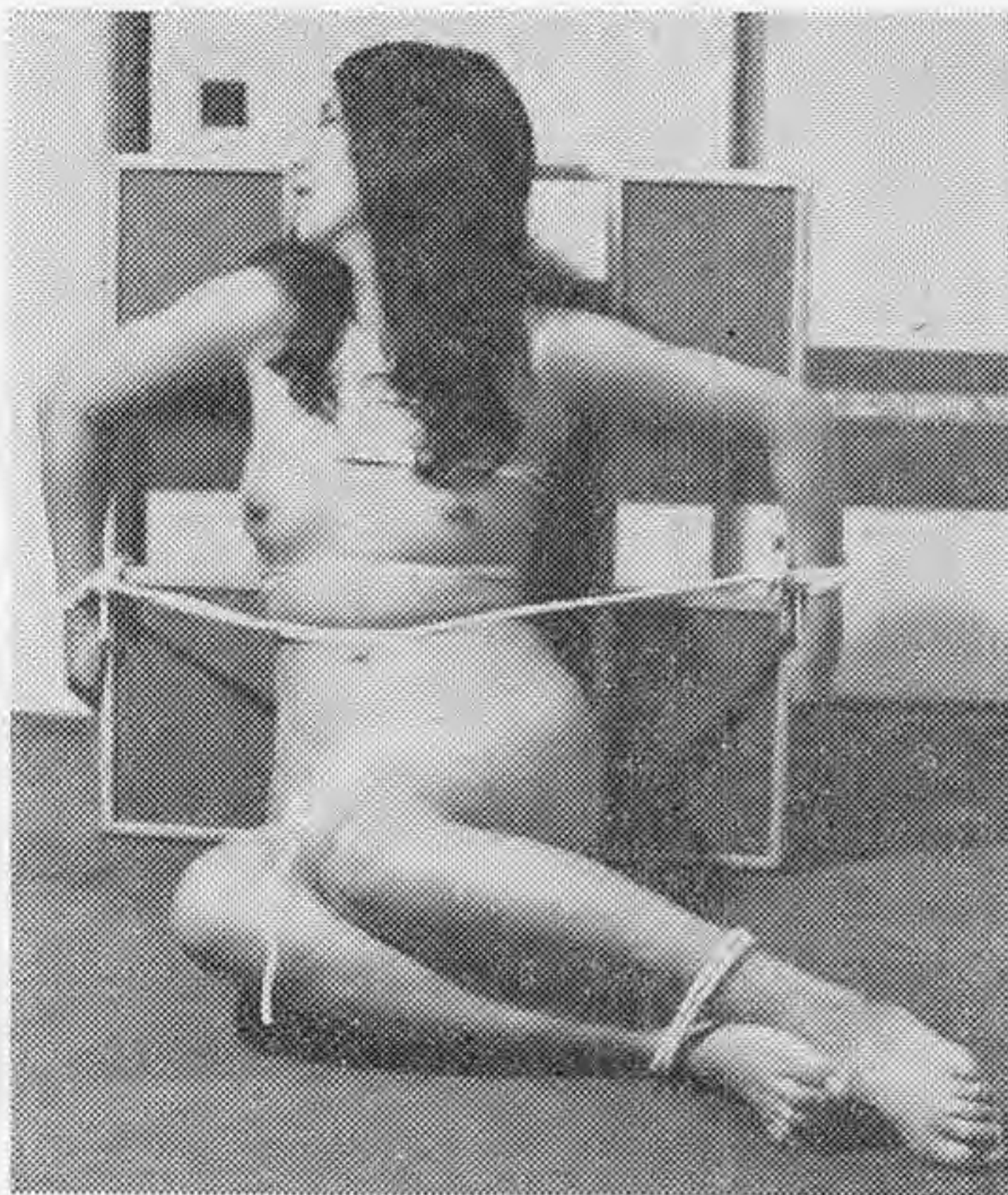
約半年前に、初めて私のプレイ写真が掲載された時の感激は、今でも忘れられません。その時は、よし、これからは毎月投稿しようと思ひ乍ら途絶えていました。

しかし最近、先輩諸兄の活躍を拝見して、また投稿意欲がわきました。拙い写真ですが、御意見御

助言を戴ければ幸いです。

今回はやぐらこたつを使い、妻は二十三才という若さのため比較的、乳房のプロポーションが良く、いと思われたので、その強調を狙ってみました。しかし縛りが未熟なせいか、思ったより迫力が出ていない気がします。今後の課題の一つと思っています。

三月号の朝野氏の写真には魅せられました。とくに見事なライテ



イングに、すばらしい「緊縛美」を感じ、四つばいのポーズは、そのライティングにちょっぴり氣を使っただけですが、今後大いに参考にさせていただきます。

朝野氏の文、作品でした。今後共、張り切ってやりたいと思っています。また同好諸氏との作品交換を希望します。

福井様、三浦様、よろしくお願ひします。

## 編集部だより

○嘗て本誌の連載小説団鬼六作の『花と蛇』に魅了されて緊縛モデルを志願してきた中河恵子さんの例もあるが、彼女は幸福な結婚生活の上、既に二児の母親となっている。今回、やはり『花と蛇』に傾倒してモデルを志願してくるというお嬢さんが現われた。

○幸いにして彼女高村浩子さんは文章を書くのが大好きだというので今月号の巻頭に掲載した告白を早速書いて貰った。東京の女子大生前田真知子さんは一月号で告白「白い陣痛」を書いて以来、学業が忙しくて中々来阪出来なかったのが、やっと暇が出来て京見物を兼ねて再び本誌写真部のカメラの前に立って呉れることになった。

○由利美千子さんの『被虐の旅シリーズ』早いもので掲載しだしてから一年近く経った。近々アメリカ本土を中心に外国旅行の途につかれるので多分来月号は休載になるかもしれない。そのかわり異国情緒たっぷりの『被虐の旅』を執筆して下さるだろう。

○読者の方々のファンから取材を



憧れのメス犬、花村次郎

谷山久美子讃歌

糞にまみれてブラウブラ、私はメスでござります。世間も見得も外聞も、捨てて行くのは犬の道。いちずな女の悦びを、肌を感じるマゾ根性。見向きもしません世間のことは、すべてを注ぐMの道。うずき求める縄の味、信じられな

SM指導記事  
の充実を

玉出一郎

貴誌一月号、二月号及び三月号拝見しましたが、時折しか、読んでいませんので、私如きが貴誌に対して注文を付ける資格はないかもしれません。しかし、今までの乏しい読書からの感想は、同好者いわゆるアマチュア向きの指導記事の少ない事です。何故でしょう。か。「SMカメラハント」は我々アマチュアにとって正に驚異的であります。辻村大人なる御方はプロかセミプロと思います。そこで下記の如き提案を致します。

○アマチュア向け初心者指導の記事を図解入りでお願いします。

い超弩級。M女の中のマゾ女、それが谷山久美子さん。

日本一とのかけがえが、富士のお山の鍾にも、マダダまだだと首を振り、エベレストさえヨイコラシヨ、世界一だと思得をきる。

頑張れ久美子クミコさん、どこ

一、縄の掛け方、縄の種類にしても初心者は何もわからないものです。どうか御指導を。

二、SMカメラハントがいわゆるプロの世界であれば、これに對し家庭料理的なものがある筈です。三、モデル使用では、その性質上（公刊誌である以上）自ら制限を受けるので、モデルに人形を使用するのも一考でしょう。

四、責めだ、道具だといったところで専門店があるわけでもないの、この点大いにSMアマチュアファンの困る点です。家庭のSMごっこでは、家庭内どこでもある物を最も効果的に小道具として用いられる利用法を教えてほしい。

以上、思いつくまま並べてみました。が、指導的立場にある貴誌に是非とも望みたいと思います。

に居るやら居ますやら。私が待つてたそのヒトは、何処かできっと悶えてる。責めて欲しいと身を揉んで、声忍ばせて悶えてる。おがむ気持の浣腸に、うめいてのたうつ柔き肌、ガマン我慢と頑張つて作る耐苦の新記録。みせて下さいあなたの苦悦。聖母マリアのなれの果。どんなに厳しい試練でも、じっとこらえて噛みしめて、顔で泣いても心では、もっともっととせがんでる。おんな谷山久美子さん。メス犬、谷山クミコさん。

たった一人の飼い主に、すべてを任すはケシカラン。オマエはS族全員の、奴隷であってマスコット。縄でゆわかれ責め抜かれ、姿かたちは悲惨でも、甘く咲きますマゾの花。おんな谷山久美子さんファンの希い、肌に受け、被虐の女王と咲き誇れ！

私は二回にわたる谷山久美子のハント記事に、我れを忘れるほど惹かれたものでした。このような女性（メス犬？）が実在すると知っただけでも、目の前が明るくなった想いです。せめて彼女の足もとに及ぶぐらいの女性が、私の目の前に現われてくれることを祈り願わずにはいられません。

予定されていた関五郎忍耐子の残酷ショーが二月上旬に京都大宮劇場で、二月中旬に大阪木川劇場で上演されているとのことだったので辻村隆のハカメラハントVで紹介したいと申込んだ。しかし関五郎氏の回答では、自分の性格上、特別に写真撮影されることは好まないということだったので残念ながら果さなかった。取材だけだったから快く応ずるということなので、いづれ機会を改めて紹介したい。

○いよいよ売れっことなり人気者と化した団鬼六氏は、一日に三時間位しか眠る暇がないという繁忙ぶりで連載力作八花と蛇Vも、このところ極めて難航である。しかし、団鬼六氏畢生のライフワークとして連載に意欲を燃やしておられるので、今後一層のご声援をファンにお願いする次第である。

○四月号の奇クサロンで『初産の記』を寄せられた稚妻富田由美子さんを早速辻村隆氏にカメラハントして貰った。妊娠八カ月の新妻ぶりは、きつと妊婦マニアは勿論のこと緊縛ファンにとっても興味深いことと思う。投稿者に対する緊縛フォトの贈呈は続けているので、未着の方は題名明記下さればお送りする。



# 浣腸マニアのノート

赤井

茂

久振りにのんびりして、いろいろと集めた、スクラップ・ノートを開いて見た。雑誌や新聞の切り抜きのコレクション、良くもこんな集めたものだ、自分ながら感心するのです。

幼い頃、体が弱く良く施術され恐怖と苦痛におののいた、あのいやな浣腸を今は一種の慰みであり楽しみなのは、矢張りマニアなのでしょう。

スクラップ・ノートに貼り付けた一枚一枚の切り抜きには、それぞれの思い出があるのです。戦前から今日までの浣腸について、記事や切り抜きを二、三、御紹介しよう。

一番古いのは、昭和十四、五年頃の婦人雑誌の切り抜きで、グラフィアに依る解説だ。「浣腸と大便の気持の良させ方」として、菱格子柄の愛らしい着物をきて、ガラガラを持ち、両足を支えられて柄模様のおむつをしき込まれ、20ccのリスリン浣腸をされてるポーズです。シリンドーの内筒に黒いゴム輪が嵌まっているのが、なつかしい。その説明が面白い。「消

毒した浣腸器にグリセリンと温湯を等分に混ぜたものを五グラムから十五グラム位入れて左手で赤ちゃんの両足を持ち上げ右手に浣腸器を挟んで、徐々に挿入します。日に一回づつお通じのない時はこうして便通をつけてやりませう」とあるのです。

その二、子供用ブトンに赤ん坊を横臥させ、後方からリスリン浣腸をしているのです「浣腹器にはこの外、ゴムで出来たもの、又一回分、液が入って居て、使い捨ての出来る、いちじく軽便浣腸器などもあります」とある、いちじく浣腸がまだ発売されて間もない頃を感じさせるのも、なつかしさをおぼえるのです。

その三、婦人雑誌の別冊附録で「小児病百五十種の応急手当法」というのには浣腸の仕方図が三枚、出てるのです。一枚は浣腸の仕方の説明で、二枚目はエキリの手当の第一手段としての浣腸だ。三枚目は発熱とヒキツケの応急手当としての浣腸である。浣腸器が内筒が棒状になったピストン式なのが楽しい。この外にも楽しい戦



『川路叢子恥態の図』志羽利也

前の物もあります。

こうした一枚の小さな切り抜きを手に入れるためには高価な代金も払った事もあった。又、古い雑誌があると聞けば、遠くまでも行って探したものです。それだけに小さな切り抜きであつても、思ひ出はあるのです。こうした切り抜きは、もう三冊のノートに一杯なのです。良くもあつめたものだと思ひます。しかし、この頃は、浣腸が余りにも生活に密着しすぎて昔のように解説図が殆どないのが残念に思ふのです。

私は、先に書いたように何度も

浣腸を経験した割に、イチジク浣腸は殆どといってよい程、された事がないのです。それは家にグリセリンのポンドびんと20ccの硝子製の浣腸器が、常備されて居たからですが、こんな記憶があるので。小学校に入学する少々前の事です。

発熱して浣腸される事になり、母が救急箱からスリガラスに黒い輪の嵌まった20ccの浣腸器を取り出して浣腸の準備にかかったのです。処がグリセリンが切れてるのです。私は助かったと思つたのですが、近所に薬局があるので母は



姉に「すぐ、リスリンを買って来て」といい、姉は直ぐ飛んで行ったのです。しかし、姉は「リスリンは切れてるので、浣腸するんだら、これをもって……」と、いちじく浣腸を買って来たのです。ピンクのセルロイドのいちじく型の浣腸です。私は必死になって反抗したのですが所詮、無駄でした。姉は云われる通りに私の両足を支え、ついに私は妹のおむつをあてがわれて、浣腸の恐怖と苦痛に悶えたのでした。

これが母の手で受けた、いちじく浣腸の記憶です。私ばかりでなく姉も時々浣腸をされたようです。が、年頃でもあり、私の知らない時ばかりでした。翌朝、緑側に尿管がネットリと濡れたまま置いてあるのを見て「ハハアン、夕、浣腸されたナ」と知ったのみです。家に常備してある浣腸器は、私達ばかりでなく両隣の同級生や向かいのお姉さん達にも使われたのです。「エキリを防いだ浣腸」といった話題もこの頃、聞いたり又

見たりしたものでした。よく新聞広告に「アイデル浣腸」の広告でシルエットで母親が子供に浣腸をして居る絵が出ていたのを、おぼえて居るのです。あの頃が無性になつかしく思われるのです。

四、五才から小学校一年生位までは、昔はエキリ年令と云われたものです。小学校に入学してウツトウしい梅雨も明けた七月初旬でした。同級生の愛らしい女生徒が居ました。彼女は不幸にもエキリになり、手当がおくれて他界したのです。その時、担任の女の先生が、私達に「この病気は急に高い熱が出て、手当がおくれると松永さんの様になってしまいます。こうした時お医者さんや、お母さんは、すぐ皆さんに、おしりから浣腸と云うのをなさるでしょう」と、話してくれた事を思い出します。子供心にもカッカッとして来るのを、おぼえたものです。あの頃から、浣腸の持つ、あの苦しい様な、奇妙な快感が私の心をとらえていたのかもしれない。

## 映画「組長くずれ」を見て

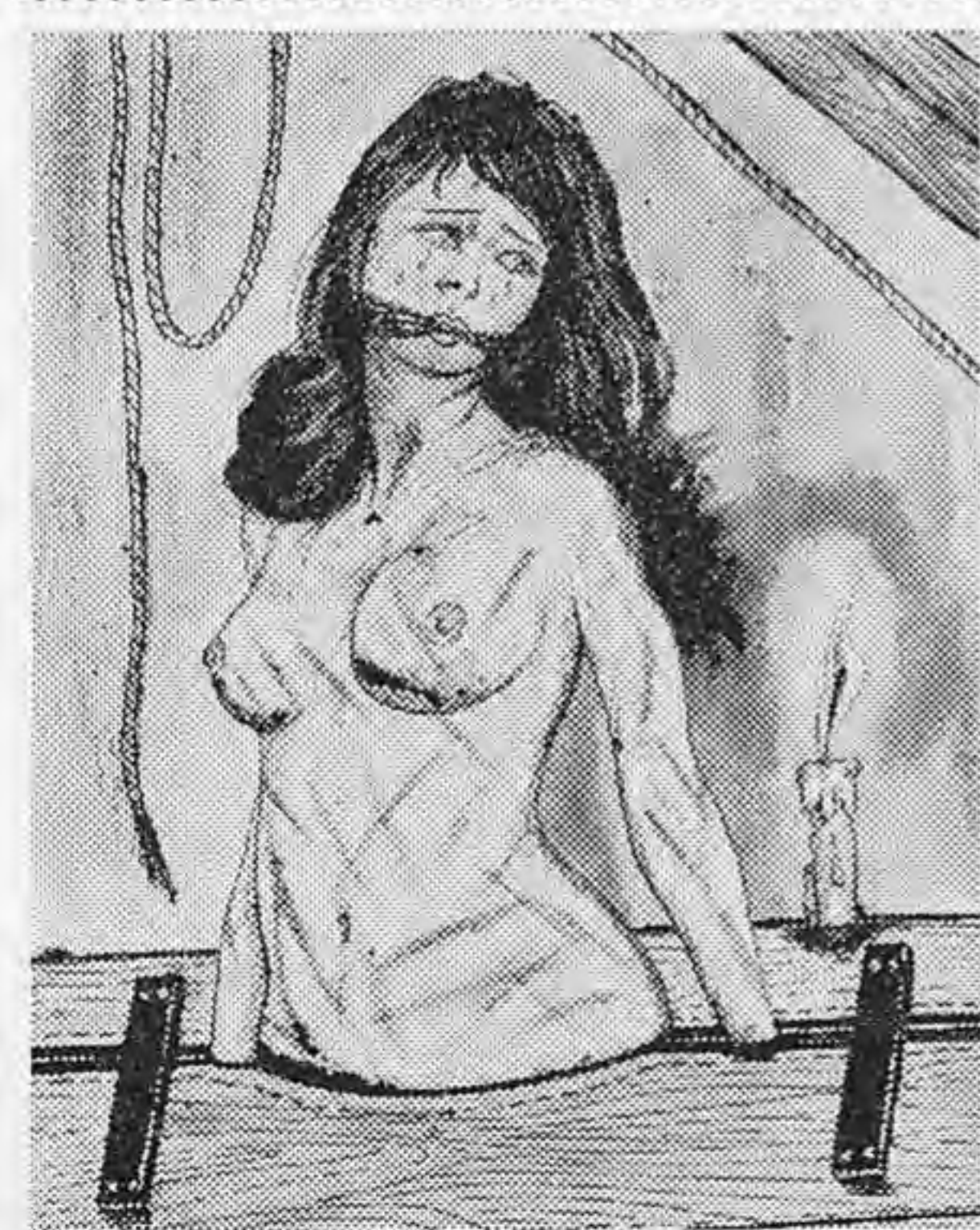
吉沢光利

ただ、暇つぶしにブラッとどび込んだ映画館だった。三本立て二百円の映画なら、時間待ちにちょうど手頃だったからである。

居眠りでもするつもりで眼が、タイトル前に写し出されたダンスの女にギクッとなった。貞操帯をはめ、鎖で後ろ手になんじがらめにされているのだ。ピンク映画で見慣れている図なのだが、思いがけなかっただけに坐り直した。

鶴田浩二扮する元ヤクザの経営するクラブで唄う女、工藤明子が見応えある縛られ姿を見せてくれ

た。ブラジャー、パンティが透けて見えるスリッパ一枚にむかれ、後手に胸を縛られて吊られ、ムチ打ちの後で縄の痕ぐつわまで噛まされて、美しい被虐女を現出してくれたのだ。他にも人妻役の女優が口にパンソーコーを貼られて棒縛りにされるシーンが、オマケに附いていたのだから、とんだモウケものだったわけである。



イメージ画『鞭打ち台』小川茂正



# 粘膜被虐症の女

長谷良子

奇ク45年11月号の「涙のランウェイ」を読ませて戴き、私のイメージにぴったりでしたので大変嬉しく思いました。只、創作のため少しオーバーな点も見受けられますが、私が実際に（本当です）受けるアヌス責めに殆ど近く実感がこめられております。

直径5糞は可能ですが、長さ18糞は無理のようです。私が現実を受けているアヌス責めについて少し述べてみましょう。

私の場合、腔鏡を使って拡張される時、最初は挿入されただけで物凄い苦痛を感じましたが、今では全開されても、まだ余裕がある程に訓練されております。

勿論アヌスの拡張作業を始める前に必ず徹底的に高圧浣腸をされます。内部を清潔にすることと拡張作業中の粗相を防ぐためです。

高く吊り下げられている二千cc入りのイルリガートルで最初は食塩液、次は石鹼液そして温水と私の腸内に一片の残滓も残さないよう徹底的に洗滌されるのです。臥伏位にきつく固定されて思いきり突き出している双臀から、さながら

噴水のように弧を描いて液が排泄されます。次に仰向けにされ両脚を左右に開かれると膝が頭の両側につく程強く二つにたたまれ、極度の屈曲位の姿勢にされて固定されます。

アヌスに力が入らないように鼻からの呼吸を止めるため、私の鼻の穴に鼻鏡が挿し込まれ上下に拡張してピンセットで綿をギュウギュウと奥の方まで詰め込まれ、その上、入口を唾液を流して密閉されます。私は口を開けてハァハァ息をするより仕方ありません。

ワセリンがタツプリとまんべんなく塗り込まれますが、指一本でも受付けられない様に固く締まっているアヌスが果して大きな器具を受けるでしようか。それがギリッギリッとネジが回され先方から拡張されますと奥の方から無理矢理に拡張され始め、締めつけようとする肛門括約筋の抵抗もむなしく空洞が次第に大きくなり、今にも裂けそうな激痛に私は悶え、呻き体中、汗ビッシヨリになります。始めは全開どころか、半分位で物凄い激痛と排泄感とで気を失い

イメージ画『黒い革手套の怪』黒田 縛



かけます。でも訓練とは恐ろしいものです。それが回を重ねるに従って、七分目、八分目とだんだん大きく拡張されるようになり、今では全開にしても、さほどの苦痛がなく、なお余裕を残す程になったのです。

やがて綿棒が直腸の奥まで挿し込まれて徹底的にアヌス掃除をされるのです。これが又、刺戟が強くて私は汗と涙を流して悶えるのです。以上のことは空想ではありません。実際、私が体験していることなのです。若し疑う人があれ

ば、どなたでも、実際に私のアヌスを責めてみて下さい。私は喜んで応じます。又奇抜なアヌス責めの方法等同好者の皆さんにどしどし発表して貰いたいと思います。

私は又、鼻をいじめられることにも興味があり快感を覚えるのです。私の鼻は自分で言うのは何ですが、形といい高さといい、鼻の穴の形も理想的だと自負しています。耳鼻科医が用いる器具を総動員して私の鼻の穴の奥まで、いじめて貰いたいのです。きっと私は体内の粘膜に刺戟を



## あるアナス狂の独白

佐 渡 黄 門

日本人には痔疾の者が多いようである。それは恐らく、日本の生活様式から、痔にならないようにするための手だてが守りにくいことによるのかも知れない。痔のほとんどは、肛門の周囲のよく発達した網の目のような静脈がうっ血してコブ状となったもので、激しい痛み、かゆみ、出血等を伴い、ひどくなると、細菌の感染によって炎症や化膿などの多岐に亘る症状を呈するものらしい。

もっとも、私はここで痔の治療法について語る意志などまるっきりないわけで、私の興味は、そうした痔のけのある女性の患部にあるのだ。ひそかに痔で苦しんでいる可憐なる乙女のイメージが、私の心を羞恥の想像絵巻でいっぱいにするのである。

私は好みの女性をパンティ一枚にまで追いつめ、いざそれを剥がした時、即座に彼女を、うつぶせにして、その患部を点検するだろう。……私は驚きとともに、少しばかり愛しい気持ちになって優しく、に、いたわるだろう。……しかしながら、私の心に次の瞬間ムラム

ラと悪魔的な衝動が走って、容赦なく浣腸を施術するだろう。……するどい痛み、可憐なるその顔を苦痛でゆがめるうちに、別の苦悶が、彼女をやがて地獄の苦しみで喘がせることになるだろう。

私の想像絵巻はこのくらいにしておき、肛門について少しばかり真面目に考えてみようと思う。

私は以前、三歳の女のこのような可愛い男のこの排便後の後始末をさせられるという好運？ にめぐまれたことがあったが、その時が、はつきりとアナスなるものを見た最初であったと思う。何となくユーモラスなちっちな部分。……私はその時、肛門とは何と魅力あふれる部分だろうと感動したと言え、おおげさかも知れないが、その時以来、私の女性のアナスに対する憧憬は、つのる一方となったのだ。

およそV感覚なるものは、A感覚の派生にしかすぎないものであって、V感覚は子宮によって限界づけられるゆえ、私にとってはそれほどどの関心はないものであるがその点A感覚は無限であることに

求めているのかも知れません。鼻の奥までギュウギュウと綿棒を入れられたり又これ以上拡がらない程穴を拡張され、さんざんにいじめられることを望んでいます。鼻の穴、ワギナ、アナスを同時に責められるとき、私はきつと最高の喜びにふるえるでしょう。私のような同好者の皆さんから

よって曉方を待っているような、胸のわくわくする可能性があると思われるのである。A感覚こそセックスの源泉であり、V感覚は、腸管における排尿時の快感の変形にすぎないのではないかと思うのだ。よって私は、VよりもAにより深い愛着をもち、互いの現実存在状況をより緊密に、つまり互いの実存を確かめるために、Aの強烈な虐げを、無限に願望するのである。

しかしながら、私はここで一つの疑問につきあたる。それは、果して女性にA感覚なるものをもち得るか、ということである。大部分の女性は月のものを見た時以来A感覚はV感覚にとってかわられアナスは排便時の羞恥とともにかすかに思い起こされるものでしかなくなっているのではないか？

の便りをお待ちしております。私を今よりもっと、いじめ喜ばせてくれる人はいないでしょうかしら。どのような苦しいこともきつと我慢し、どんなきつい飼育にも耐えることが出来ると思えます。そのうち、今までの私の体験告白を詳しく奇ク誌上に発表したと思います。

もしそうだとしたら、私のサディズムの性向は、この忘れ去られゆくA感覚を、好ましい女性の中に、虐げることによって再発見したいという欲望に燃え上るようになるのである。

私はアナスというものに、何か人間存在のもっとも原始的なる本質が隠されているような気がしてならない。私が女性のアナスを愛すれば、すなわちそれは、その女性のすべてを愛しつくすことになるというような何かがある。

これは私の悲しき妄想に終わる事になるかも知れないが、一人の女性のアナスをつうじて、その女性の存在の奥底にまで、私自身の強力なるムチの洗礼をおよぼすことと地獄的な快楽を夢見つつ、ペンを置くことにする。



最新撮影総天然色  
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てきV

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てかV

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てくV

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てこV

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てまV

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとみ 略号八てみV

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとみ 略号八てむV

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとみ 略号八てめV

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとみ 略号八てもV

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとみ 略号八てんV

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとみ 略号八てるV

真紅の腰巻着崩し姿

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
大塚 啓子 略号八うおV

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
東浦・大塚 略号八うてV

真紅の腰巻着崩し縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八うこV

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るむV

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るのV

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るおV

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るまV

羞らしいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るけV

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るふV

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るやV

股間縛りの開股姿

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れよV

羞らしいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れにV

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村 洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村 洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村 洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
中河 恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らしい

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
中河 恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しわVお申込みは大阪阿倍野局私書箱  
第14号天星社宛へ願います。



# 「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)  
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)  
3 襲う影に慄く (佐々木真弓)  
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)  
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)  
6 縛られて困るわ (金原奈加子)  
7 私を襲わないで (左近麻里子)  
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)  
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)  
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)  
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)  
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)  
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)  
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)  
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)  
17 何故私を縛るの (金原奈加子)  
18 感泣する胴縛り (ローズ秋山)  
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)  
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)  
21 足指はく字に (佐々木真弓)  
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)  
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)  
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)  
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)  
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)  
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)  
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)  
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)  
30 出臍を晒す縛り (佐々木真弓)  
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)  
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)  
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)  
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)  
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)  
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)  
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)  
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)  
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)  
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)  
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)  
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)  
44 私は縛りが好き (金原奈加子)  
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)  
46 麗身を横たえて (左近麻里子)  
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)  
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)  
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)  
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)  
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)  
52 突き出した尻 (中河 恵子)  
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)  
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)  
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)  
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)  
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)  
58 脇に隠れる緊縛女 (長井葉津子)  
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)  
60 もう虐めないで (金原奈加子)  
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)  
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)  
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)  
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)  
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)  
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)  
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)  
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)  
70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)  
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)  
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)  
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)  
74 捧げられる女体 (中河 恵子)  
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)  
76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)  
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)  
78 開股の股間縛り (大島 照代)  
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)  
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)  
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)  
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)  
83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)  
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)  
85 投げ出された裸 (金原奈加子)  
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)  
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)  
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)  
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)  
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)  
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)  
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)  
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)  
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)  
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)  
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)  
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)  
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)  
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)  
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)



## 〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

## 緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号 (むら) 五〇〇円

## 足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号 (あけ) 四〇〇円

## 猪 吊り三態

梨花悠紀子 略号 (いの) 四〇〇円

## 責め衣縛り

大手札三枚一組 略号 (せめ) 四〇〇円

## 強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (ねむ) 四〇〇円

## 後手首の高縛り

玉田美佐子 略号 (ねへ) 四〇〇円

## 椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 (ねと) 四〇〇円

## 全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号 (てい) 四〇〇円

## 全裸アグラ縛り

長野 良子 略号 (てへ) 四〇〇円

## 全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号 (てほ) 四〇〇円

## 強烈エビ責め

松本アサ子 略号 (まと) 四〇〇円

## 吊り打ち

大手札三枚一組 略号 (やり) 四〇〇円

## 股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号 (ぬこ) 四〇〇円

## 踊り子緊縛

絹川 文子 略号 (りこ) 四〇〇円

## 月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号 (ゆす) 四〇〇円

## 縄目に悶える夫人

関谷富佐子 略号 (ほく) 四〇〇円

## 髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号 (ほむ) 四〇〇円

## 膨満正面縛り

長野 良子 略号 (へな) 四〇〇円

## マニヤ全裸緊縛フオート

栗本ミチ子 略号 (いな) 四〇〇円

## 強烈エビ縛り

関谷富佐子 略号 (もい) 四〇〇円

## 乳房責めの苦悶

関谷富佐子 略号 (もろ) 三〇〇円

## 全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号 (もた) 五〇〇円

## 強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号 (むち) 五〇〇円

## 裸身の晒し

関谷富佐子 略号 (わあ) 四〇〇円

## 全裸股間縛

関谷富佐子 略号 (せら) 五〇〇円

## 双胸の強調縛り

長野 良子 略号 (そう) 四〇〇円

## 動感海老責地獄

一塚 啓子 略号 (とう) 四〇〇円

## 色禪の開股縛り

長野 良子 略号 (いふ) 四〇〇円

## 鼻責めのアップ

大塚 啓子 略号 (はす) 四〇〇円

## 乳房しばり

長野 良子 略号 (うは) 四〇〇円

## 鼻責めと緊縛

大塚 啓子 略号 (うい) 六〇〇円

## 木馬責三態

大塚 啓子 略号 (もく) 四〇〇円

## 椅子責めの果て

大塚 啓子 略号 (いす) 四〇〇円

## 檻に入れられた女

山原 清子 略号 (もの) 三〇〇円

## 浴室の全裸刺青

山原 清子 略号 (よな) 六〇〇円

## 鼻いじめ三態

山原 清子 略号 (はね) 四〇〇円

## 鼻責め万華鏡

山原 鈴木 略号 (はた) 二〇〇円

## 碧玉裸身緊縛

刑部 典子 略号 (のん) 四〇〇円

## くすくす責め地獄

大塚 啓子 略号 (きす) 四〇〇円

## 灼熱の蠟涙責め

大塚 啓子 略号 (きせ) 五〇〇円

## 豊満な乳房を責める

大塚 啓子 略号 (きそ) 七〇〇円

## 女奴隷を飼育する

大塚 啓子 略号 (きて) 七〇〇円

## 凌辱されるマゾ女

大塚 啓子 略号 (きと) 七〇〇円

## 鼻責め悦楽

大塚 啓子 略号 (きな) 三〇〇円

## 全裸強烈羞恥縛り

大塚 啓子 略号 (なの) 四〇〇円

## 猿ぐつわにあえぐ裸女

東浦 ひかる 略号 (なむ) 四〇〇円

## 全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号 (ゆり) 五〇〇円



## 大手札印画紙焼付

## 〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はひ▽

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はわ▽

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はふ▽

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はほ▽

悦唐に身もだえる美女

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はあ▽

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はう▽

柱に立縛りてさらす

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はさ▽

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はめ▽

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はし▽

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はも▽

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△へむ▽

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△へめ▽

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△へも▽

ムチ打ちの陶醉境

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△へさ▽

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△へし▽

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△へす▽

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島 照代 略号△へせ▽

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△へゆ▽

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島 照代 略号△へた▽

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△へち▽

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△へつ▽

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△へて▽

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△へと▽





初めてお便り致します。私は、今二十才になります。私は最近貴誌を知りました。初めて貴誌を読んだ時、正直言って嬉しく思いました。それは、以前から私が少し異常なと思われる性癖に悩んでいたところで偶然貴誌に出合ったからです。私と同じような性癖の人が案外いるのに、少し安心、致しました。私の性癖には、いろいろな種類のものがあるように思っていました。結局はサディズム、マゾヒズムの二つに集約されるよ

うです。(これは私の考えですがあらゆる異常性癖はこのサディズムとマゾヒズムの二つに分類されるものだと思います)今、私は女装に一番興味をもっています。最近テレビなどで女装の人をよく見かけますが、中にはビックリするくらい綺麗な人がいるのでうらやましくなります。私は思うのですが女装趣味は同性愛にも通ずるものだと思います。女装趣味の人は同性愛においては女役になるのだと思います。従って、私は同性愛にも興味があります。といっても今のところは、同性愛と同じくらいに女性(異性愛)にも興味があります。私は女のような美少年に興味があります。やさ顔で、髪は房々と黒く、からだは細っそりとしてなめらかで無毛とい

うです。(これは私の考えですがあらゆる異常性癖はこのサディズムとマゾヒズムの二つに分類されるものだと思います)今、私は女装に一番興味をもっています。最近テレビなどで女装の人をよく見かけますが、中にはビックリするくらい綺麗な人がいるのでうらやましくなります。私は思うのですが女装趣味は同性愛にも通ずるものだと思います。女装趣味の人は同性愛においては女役になるのだと思います。従って、私は同性愛にも興味があります。といっても今のところは、同性愛と同じくらいに女性(異性愛)にも興味があります。私は女のような美少年に興味があります。やさ顔で、髪は房々と黒く、からだは細っそりとしてなめらかで無毛とい

装に興味のある方などと話し、または文通などしたいと思えます。どうぞよろしくお願い致します。(東京都杉並区・錦成人)

四月号のカメラハント「魔子の甘く泣く夜」で辻村氏が文中でSクラブのことに言及していられるが私も大賛成である。といっても私は金の方からはからきし駄目なので、一千万なんて夢のような話だが、顔さえ出なければモデルとして、この身体を提供してもよいと考えている。もう三十代だがボディビルできた一七〇の身体はいじめ甲斐があると思う。女性の縛られた写真も私はそれを自分に置きかえて見るので心理的には興味があるが、やはりMの写真やMの小説がほしいと思う。悶々として眠れられぬ夜、私は奇クを取り出して朝方まで読むことが多い。くり返し読んで心の憂さを晴らしてくれる、私にとってのバイブルが奇クである。

(奈良県・高取育夫)

S Mファンの読者、マニア中心の貴誌にして出来る美しい奥様方の緊縛プレイの数々の写真や告白が相変らず多いが私達独身の男性

にとって大いに参考になります。四月号では渡部光雄氏が「夫婦SMプレイ雑感」で今の美しい奥さんとのなれそめから書いているのに私は非常に感動しました。飼育の過程もくわしく書いてほしいと思います。私も結婚するんだったら、渡部好美夫人のような女性をと望んでいます。読者から投稿される縛絵も最近はいいものが増えてきましたね。須坂旭さんの「柔軟度測定吊り」は思わずぞくぞくしました。しっかりした線で描かれたこの絵は素人ばなれした絵の出来ばえばかりでなく、縛りとして、私をドキッとさせるものがありました。これからこんな立派な絵をどんどん発表して下さい。(福井市・北井弥八)

土井悠子様、自分と同年輩の貴女のような人を知る事が出来て幸せです。僕と奇クとの出会いは、もう七年余り前になります。まだ物心ついたばかりの僕は驚きと困惑に打たれ、時には自己嫌悪に陥ったりしたのですが、次第に、その魅力に取りつかれていったのは、もって生れた性のせいでしょう。そして、いつの日か現実にくの手で果たせるのかと緊縛プレイ







白かったそうです。もっとも、こういうジョー的なものは迫力も何もある筈がありませんから、正統派のメトミマニヤの方々には、関係がないかもしれません。つぎに「エロチカ」二月号には蘭光生氏の連載第二回の「禪」に女禪と女相撲があり、イラストレーションも女禪が二枚、相撲が一枚、入っています。これは殆ど本誌の抜き書きのようなもので、或は本誌の読者か寄稿家の執筆かと思えます。イラストレーションも昔の土俵四股平氏の作「女斗美考現」の四馬孝氏の絵の転写されたものと思われまます。同好の方、他にありませんか。

(京都市・高島大井子)

○ 三月号に久しぶりで赤畑修造氏夫人のすばらしい写真が掲載され、楽しく拝見しました。昨年七月号の写真は、やや鮮明さに欠け、残念でした。今回の側面からの写真は腹部のたるみが、とてもはつきりと、とらえられており、肥満女性の最大の特長を出された赤畑氏に敬意を表します。昨年六月二十七日号の週刊「図書新聞」に掲載されたレスリー・クリムス作の「ソファに腰を下ろしている

乳房の垂れた中年ぶとりの裸の婦人」の写真には、大きなショックを受けました。私自身、肥満女性への強い興味があります。公刊紙上の一面トップの写真として、このように大きく取り上げられていることは嬉しいことです。半年以上たった現在でも、この号だけでは大切に保存してあります。本誌でも赤畑氏をはじめ二、三の諸氏によって肥満女性について熱心に語られています。昨年は、辻村氏のカメラハントでも村上喜美夫人の大ヒットがあり、嬉しいのですが、まだまだ、少数派の感じがしてなりません。それは分譲写真にも現われていることですが、いつまでもたっても肥満女性の写真が出ないことは残念でなりません。ぜひ分譲写真にも肥満女性を加えることをお願いします。中年以上の読者諸氏も赤畑氏にならって、御自分の奥さまの肥満ぶりを誌上に発表なさって下さい。サロンが若妻たちの展示場にはかりにならないよう中老年氏の奮起を期待します。(埼玉県秩久市・安達宜孝)

○ 三月号のカメラハントを読んで、こういう夫婦もあるのかなあと、小生は驚き且、恐れさえ感じたの

安井・中川・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しう

髪吊りで強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八した

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しち

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しつ

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八して

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しと

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しや

痛打にもかく美女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しゆ

あぐら縛りの羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しよ

片脚挙げて晒す裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とは

強烈エビ縛りて苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とに

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とは

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とへ

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とち

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とり

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とぬ

菱縄縛りて床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とる

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とか

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とま

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とみ

浣腸責め的美態開陳

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とめ

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とも



である。妻を殴ったり蹴とばしたりの乱暴を働くということは、昔は聞いたことがあるけれど、女上位といわれて女房の御機嫌とりに汲々としている現代にも、こういう凄惨夫婦があったのかと、奇異な感じさえした。カメラハントは妻を信じられず暴虐の限りをつくす夫と、ややもすれば蒸発し兼ねない妻との葛藤を如実に描いているが、その通りであるとすれば、何ともやり切れない欲望の渦を感じないわけにはいかない。なかなか夫の暴虐は凄まじい。いれずみはまだしも、生きた蛙を押し込むとあっては、小生如きフェミニストは恐れおののき、それがSMの本能だとしたら逃げ出さないではいられない。そこまでになるとお芝居でなくて、可愛さ余って憎さが百倍、正真正銘の虐待と相成る。如何に妻を愛すればとて、虐待は領域を異にする世界である。我々の求めるSMプレイは、そのようなものではない。例え豊かな臀部に鞭を振るおうとも、その心理の底には、SとMの共通の快感追求の姿勢がある。そして、その一致こそが求められるものであって、一方的行為に偏することは、快楽を減ずるものでさえ、あるの

だ。夫婦プレイの流行は単にパートナーを求めやすいということではなくて、この共通する快楽を求めやすいからだと思う。悲しいかな和泉氏のSMプレイは、その出发点において、すでにプレイの本質とは異っているのではないだろうか。大体がプレイとは、天プラの衣みないなものであり、また似て非なるものである。真のSMが加虐被虐の中からのみ愉悦を見出すものであるとしたら、SMの流行なんてあり得ない。小生自身もそうだが、苦しみもがく女の表情や、姿にのみ性的快感を覚えるとしたら、それは異常という他はない。SMプレイは、一種のお芝居であって、芝居であるから安心して行なえ、離婚騒ぎも起こらないのだ。たとえば切腹プレイにしても、本当に腹掻き切ったら一巻の終わりだ。三島由紀夫氏は本当に腹を切ったが、我々凡人には、そういうことは出来ない。命あつての物種で、凡人は凡人なりに、それでよい。ともあれ、和泉氏夫妻のSMは、多くの読者にプレイのあり方について衝撃を与えたものと推測する。

(東京都・葛飾区・今 二郎)

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆめ	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆえ	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆひ	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆあ	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆも	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆに	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆほ	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆみ	股間縛り悶える 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆろ	全裸縛りに羞らう 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆへ	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆわ	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆよ
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆぬ	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆる	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よれ	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よそ	全裸高手小手の麗身 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よの	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よや	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よい	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よふ	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よえ	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よぬ	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よあ	イルリの浣腸責め 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よた



最近の奇ク誌上は夫婦プレイの花ざかりで、うれしい限りです。しかし、女装プレイのないのが淋しいことです。文才もなく、みずからの体験すら文章にできない、もどかしさは口惜しい限りです。私は、この頃では女装の拷問、処刑プレイに心をひかれます。こんなとき、三月号で拝見した、大橋美代子さまの「ハリツケ残酷記」に深く魅せられてしまいました。私もこのようなプレイを味わいたいと思います。しかしハリツケ柱もなく、拷問部屋もないだけに残念なことです。「十字架に縛りつけられた自分自身の姿を想像しただけで、私は身体中が熱くなり、じーんと背中を走るマゾの血が抑えようもなく燃え上って、心は、はやくも被虐の世界をさまよっているのです」という一節は、女装マゾの私としても全く同じといえます。また「ギッチリ縛りつけられて身動きできない身体をさんざん責められ、さいなまれて……一糸もまとわれない裸身を手足を左右一ぱいに引きのばされて、ハリツケ柱にきびしく縛りつけられている姿。文字どおり大の字なりのあられもない姿」は実に心にくいばかりの表現です。女体の最高の

美しさである「十字架ハリツケ」と「大の字ハリツケ」を堪能できる大橋さまは本当にしあわせで、うらやましいと思います。フォトも奇ク誌上ではこれまでに見られなかった画期的なものでしょう。私の好みとしては、目隠しされた十字架ハリツケと逆さハリツケの三葉ですが、欲をいえば、大の字ハリツケも掲載してほしいかなと思います。奇クサロンで短歌を発表されている高村初子さま。いつも作品を拝見しています。SMの世界を客観的に詠みあげられていることに感じ入っています。私も短歌は多少、心得ており、以前この欄で掲載していただきました。どちらかといえば直観的です。女装SMを詠むことは、非常にむづかしいことですね。できればお逢いしてプレイをし合い、そして短歌にするのも楽しい試みだと思いますが、いかがですか。私は40代のサラリーマンで年甲斐もなく一方的ですが、ご返事をお待ちしています。失礼は、おゆるし下さい。

（大阪・中村 純）

毎月、最初に目を通すのが「花と蛇」である。今回は久しぶりに京子が登場した。前からのファン

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 六〇〇円  
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大塚 啓子 略号 (ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 六〇〇円  
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 六〇〇円  
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
山原 清子 略号 (かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 一三〇〇円  
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 一二〇〇円  
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 一五〇〇円  
山原・東浦 略号 (かも)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円  
山原・東浦 略号 (かて)



の要望に答えてくれたのかもしれぬ。「花と蛇」は最近、マンネリの傾向があるのではないかと思われる。珠江夫人と美佐江を登場させ、新しいヒロインとして更に小説を盛り上げんとする意図は察しできるが、静子夫人と珠江夫人は体質は違うが共通するところがあり、美佐江も良家の子女というところが小夜子と類似しているため、もう一つ盛り上りにならない。だが今回京子を登場させたのでファンの期待しているようなストーリーが展開するものと思う。つぎにカメラ・ハントは、あいも変わらずぬ辻村先生の筆捌きには感服している。よくもこれだけの女性が、つぎからつぎへと出てくるものだと感心する。今後も頑張ってもらいたい。「水田真紀子シリーズ」と「被虐の旅」は女性らしい繊細な、それでいて大胆な文章でファンを楽しませてくれる。鶴田氏の「調教」は、もう少し個々の調教に対する内容を詳しく、主人公のM化に傾く気持を表わしても良かったらと思う。大橋さんの「ハリツケ残酷記」は、夫婦プレイとはいえ、よくここまでのプレイをするものだ、夫婦の信頼と大橋美代子さんのM性に感服する。特

に逆さハリツケの写真などマニアには、こたえられないものだと思う。今後もM性を誌上に暴露することを望む。千葉青鬼先生の「大噴火」は、ますます円熟したSF的な面白さを加味して、毎回、変わったアイデアの拷問といってよいのか奴隷調教状況を詳しく書いているが、その豊富なアイデアと華麗な文章は、長く続けて「花と蛇」に負けない長編小説となることを願う。藤見先生の「パノラマ島秘譚」は、リバイバル作品であり、小生も前に読んだことがあるが、なつかしく思った。後半は書き下ろし作品とのこと楽しみだ。

(画竜点睛)

最近、原稿の応募が急増していると編集部だよりにて拝見し、心からお喜び致しております。それだけSMの真面目な同好者がふえたと考えてよいと思うからです。私は投書は初めてですけれども、三年間、一回も欠かさずに奇クを愛読して参りました。読んでしまっても捨て去るのが惜しくてタンスの一番奥に、紙に包んで奇クを隠してきましたが、もう相当のかさになってしまいましたが、それでも捨てる気がしない程、奇

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円  
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円  
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かね)

シリンドラーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かち)

ア・ヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇円  
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 六〇〇円  
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 六〇〇円  
美木乃々子 略号(ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(るど)

クに憑かれております。ほんとうに奇クは素敵で、たとえば三月号をみましても、生のエネルギーの

充実感で一杯でした。冒頭からSM水平思考というべきでしょうか。セト・ヨシヤ様の機関銃のように



連射する気持の良い論文に始まりいつも同性の名文ゆえに羨望すら感じる、水田真紀子様の甘美小説「スチュワデイス」に魂を奪われ告白「闇に咲く花」で雉子田美夫様の哀しい悦び、たのしみに何か底知れぬ生命を感じ、宇光仙様の人間浄瑠璃にて最高にたかめられていく私を意識します。また、同様に新しい感覚を伊沢弁護士に露わに、剥き出されてしまう「花と蛇」の静子夫人の甘美な姿態が目に見えるように感じます。つぎに絵に託した告白も多いとか、極端な書き込みで収録不適なものが多いのを知って、残念でたまりません。ぜひ発表可能な新人のSM名画を鑑賞したいと思います。また春川ナミオ様の絵は、いつも素晴らしいと思います。「準備OK」を見て私もあのような、お手洗を利用してみたいなどと、恥かしいことを想像してしまいました。私は今、一生懸命に告白文を書き綴っております。文章の力はどうかあれ私の誠意で読めるものを書きあげると決心です。先輩のみなさま、どうか私を指導して下さい。

○(大阪市・曾根初美)

M的情绪を尊ぶ33才の男性です

が、ぜひS女王様のお役にたいたいと願っております。やや女性的な性格のため鞭打ちは好まず、恥かしめを主体とする責めを好みませんが、数人の女性グループによる責めや、いたぶりを甘受いたしたいと思えます。ぜひ、おぼしめしのお手紙をお待ちいたします。

(乃美対三)

初めてお便りします。私は二十才の男性です。今までは、どんな親しい友達にも話さずに隠してききましたが、今回、思いきって投稿させてもらいました。私は今までSだとばかり思ってきましたが、ある中年の男の人を知ってから、自分分はMだったのではないかと思つたのです。いつもSM小説を読んで想像することは、自分が女性を縛り責めている姿です。でも、現実には自分も小説の中の女の人のようにされることを、望んでいるのです。自分自身、SかMかわかっておりません。でも、一度でもプレーしてみれば分かると思います。どなたか三十五才ぐらいまでの女性の方で私の相手になって下さる人がおられましたら、お便り下さい。

○(兵庫県・木原和夫)

〔異色緊縛 女性フオト集〕

△光沢印画紙極鮮明焼付▽

首縄高手小手全裸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いき▽

縄の痛さに耐える表情

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いめ▽

股間縛りは凄く締まる

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いあ▽

卓上の緊縛裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いて▽

両手吊りの全裸体縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いた▽

投げだした被縛女体

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いま▽

麻縄は白人の女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いゆ▽

縛られるのいや!

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いせ▽

私の裸をシロシロ見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いし▽

日本式後手縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いそ▽

白人女性をいたぶる魔

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いや▽

金髪美女も縛られて台なし

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いも▽

異国女性の被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いむ▽

美しき白人緊縛の姿態

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いけ▽

逆エビ責めの外人女性

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いひ▽

雁字搦目で椅子に縛る

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いえ▽

落花狼藉のしとねの上で

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いう▽

妖艶な縛られぶりの沖縄美人

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほけ▽

股間縛りの痛さに開股か

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほへ▽

悶える厳しい縛りの明子

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほて▽

椅子で演ずる明子の痴態

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほと▽

観念して縄に身を任す

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほあ▽

縄は豊満な柔肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほさ▽



休日、映画を見ての帰り途、ふと大道の古本屋にて本誌が目にとまりました。「ヘイーなんて珍しい本があるなあ」と、手にとって見ましたが、大分、古いものでした。でもその横を見ると新しいものがありました。それが三月号でした。実をいうと奇クを買ったのは初めてではないのです。そう、私が福島田舎にいた時分、約十年ぐらい前です。ある本屋で、表紙が奇抜だったので手にとって見て、びっくりしました。女性が縛られ、責められている写真が載っていたのです。その時分には確かに喜多玲子さんが挿画を描いておられ、私は大のファンでした。それから毎月、購読していました。当時、本誌を買ってくると、布団の中でそっと読みふけり、自分なりに女性を責めている模様を頭の中で想像していました。それから私は東京へ……。そして現在、大阪住まいです。しかし、今でもSMの気が高まり、ただ写真を見ていられるだけでは満足できず、何とか本当に女性を縛って見たいと思っています。最近、書店にもSM雑誌が出まわっている現状ですので、きつとSMの趣味の方が多数おられる筈だと思っています。どなた

か女性の方で私の願いを実現させて下さる人がおられましたら、お便り頂ければ幸いと存じます。

(大阪市・渡辺忠義)

大牟田市にお住まいの野村麻子様にお便りします。突然、筆をとることをお許し下さい。私は現在博多と北海道に営業所を持つ名古屋の或る商事会社の課長の職にある者です。私は過去に東京の或るSMクラブで支配人をしておりましたが、自分の将来を考えて現在の会社に十年前に入りました。しかし、やはりSMの妙味は忘れられず、現在の会社に入ってから何人かの女性とプレイを楽しんできました。鞭打ちはもとより、浣腸、剃毛、羞恥責めなど高度の吊り責め以外は何でもやりました。私は月に二回ぐらいは博多へ出張いたします。貴女の羞恥に悶える姿態をカラーで撮影して永久に保存いたしたいと思っています。

(名古屋・松本保一)

愛読者の皆様、ご無沙汰いたしました。千恵は昨春秋に結婚して名字も大西にかわりました。一度結婚というテーマで告白を書きたいと思ひながら、時間のないまま

美しき抜群の正面を晒す

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほゆ▽

悦虐にむせぶ美貌のひと

大手札三枚一組 四〇〇円  
渡部 好美 略号△ほし▽

責められて恍惚境をさまよう

大手札三枚一組 四〇〇円  
渡部 好美 略号△ほひ▽

足挙げ縛りと開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
渡部 好美 略号△ほも▽

超羞恥責めの極致

大手札三枚一組 四〇〇円  
渡部 好美 略号△ほせ▽

股縄は何んでも知っている

大手札三枚一組 四〇〇円  
渡部 好美 略号△ほす▽

鼻責めの悦楽境地

大手札三枚一組 四〇〇円  
渡部 好美 略号△ほめ▽

鼻を愛撫する責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
渡部 好美 略号△ほみ▽

蠟燭責めと臀部打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
渡部 好美 略号△ほに▽

喰い込む股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
渡部 好美 略号△ほん▽

に奇ク誌ともしばらくの間、遠ざかった生活を送っておりました。でも、やはり千恵は恥ずかしいことを望む女でございました。鞭打たれることは嫌いですが、本当の意味のM女性といえないかも知れませんが、この心のたかまりを思うに素敵なリーダーに恵まれさえすれば真のM女性になれるのではないかと、考えたりします。大きく上げた両足を高々と吊り上げられた恥かしい状態を、さんざん鑑賞されたら、どんなに素敵なおもいででしょう。鈍重な程、正常で千恵を理解してくれない夫に代わって快美な責めを施し、本当のM女性に千恵を調教して下さい方は

いらっしやらないのでしょうか。千恵は美女ではありません。でも少なくとも十人並み？ の顔と百六十一センチの身長と、大きい目のバストとヒップは持ち合わせております。千恵は本当に恥かしい目に合いたいと願っています。

(小杉千恵)

初めておたよりを出します。私は以前より不思議に思うのですがなぜ本誌の読者は天涯孤獨でいるのでしょうか。ここらあたりで全国的主要都市にサロンを作り、お互いの意見の交換、読者会などを開いたらどうでしょうか。七十年代は行動の時代であり、一人で欲



求不満で悩んでいても前進しないのではないのでしょうか。これから現在の状態では、一般の人々から完全に精神異常者扱いにされることは間違いないでしょう。少なくとも我々は特殊であっても、精神異常ではないはずで。また本誌で、ロープ、下着類、ゴム、浣腸器具など通販していただけないものでしょうか。

(東京・田中太郎)

長野県大町市の吉沢頼子様。貴女のお便り、三月号の誌上で拝見しました。ぼくは二十四才になる平凡な会社員です。もちろん独身です。ぜひ、吉沢様御夫婦との複数プレイを实行してみたいと願っています。プレイの経験は、前に一度だけ複数プレイをしたことがあります。(横浜・平山昭一)

多分、編集部では全国からの投稿が多くて悲鳴をあげているだろう。それは「Sの女王魔子のSクラブ」設立に大賛成のM男性からの手紙が殺到するからです。私もその一人です。編集後記にあるように、別世界なのだから、それらしくメンバーだけの世界をつくらうたら、どうだろう。M男性は大

賛成だと思ふよ。渡辺光雄氏の告白は面白い。ジェラシーをかきたてられるのなら、帰ってきた好美さんを、もっと責めれば良いと思う。糖尿病はSMにつながる病気なのかな。阪東太郎さん。いよいよ妊婦責め、がんばって。しかし期待してあります。

(群馬・高崎エネマ)

私達は中年の子無し夫婦ですが、大の奇クファンで、主人と二人で楽しく拝読しております。私は過去、女学校時代に同性愛の経験もあり、今も若い女の子に憧れの念を抱いております。私達二人の念願は、可愛い女の子を、やさしく責めてあげたいのです。緊縛はりつけなどで、心ゆくまで責めてあげます。いや、責めさせて欲しいのです。責める小道具も用意しております。未知のS・Mの世界に心ひそかに憧れる、あなた。勇気を出して下さい。懇切丁寧にSMの世界にお導き致します。主人も理解があり、優しい人です。安心して、あなたの体を委せていただけます。(滋賀・文子)

永らく御無沙汰いたしました。

編集部特写緊縛女体資料

さ吊りの臨月妊婦	大手札三枚一組	略号△さめ	五〇〇円
両手吊りの臨月妊婦	大手札三枚一組	略号△さめ	五〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さめ	五〇〇円
若妻初妊婦の哀歎	大手札三枚一組	略号△さめ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さめ	四〇〇円
妊婦の全裸縛り全身	大手札三枚一組	略号△さい	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さい	四〇〇円
妊婦腹の緊縛側面	大手札三枚一組	略号△さい	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さい	四〇〇円
強烈縛り妊婦責め	大手札三枚一組	略号△さみ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さみ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さみ	四〇〇円
若妻の緊縛妊孕美	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
膨満の妊婦乳房責め	大手札三枚一組	略号△さま	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さま	四〇〇円
臨月腹の全裸晒し	大手札三枚一組	略号△さむ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さむ	四〇〇円
躍動する妊婦の裸像	大手札三枚一組	略号△さち	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さち	四〇〇円
妊娠という異常美の女体	大手札三枚一組	略号△さほ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さほ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さへ	四〇〇円
見てほしい臨月腹	大手札三枚一組	略号△さと	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さと	四〇〇円
妊婦全裸の全身肢体	大手札三枚一組	略号△ささ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△ささ	四〇〇円
全裸正面の縄掛け	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
柔肌の高手小手縛り	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
後手首を縛られた少女	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
飼育された美少女縛り	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
縛られた美女二人	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
小池・松山二嬢	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
全裸の美女を連縛する	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
小池・松山二嬢	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
白肌に喰い込む縄目	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
一糸まとわぬ柔肌縛り	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
開陳した華麗縛り肢体	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
縄に喘ぐ諦観の相	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円



皆様、お元気ですか。奇くは毎月楽しく愛読させていただいております。私が一番、先に目を通すところは、何といても夫婦プレイのフォト部分です。何故かといいますと、プロのモデルとちがって喜びと恥かしさの表情が嘘もなく、しかもなくM性を発揮されている点や独身女性と違った縛り美があるのではないかと思います。私自身人妻に好意を持っております。特に夫婦プレイなどは無我夢中でむさぼり読みます。時々サロンで夫婦プレイのお手伝いや一緒にプレイを楽しもうという、お便りを見ると、ああ自分にも妻がいたら、真先に名乗り出るのにと、一人身が残念に思えてなりません。どうか、このような男を可哀想と思つて、お手伝いをさして下さい。可愛い奥様を御主人と一緒に、私にも責めさせて下さい。東京の大橋様。御夫婦のプレイは、なかなか立派でしたね。美しい奥様を持たれて羨ましいかぎりです。

(東京・岩尾盛男)

○ 佐野みさ子様。女兒出産、おめでとうございます。四月号の貴女の手記、拝読いたしました。私は長年にわたる奇クファンの一人と

して、読者諸氏のプレイ活動を誌上で拝見し、羨ましくてなりません。私は皮、ゴム、クサリ、ビニール、ロープ等の責具を集めて、ああも責めたい、こうも責めたいと空想しては無限の喜びに浸っております。佐野様。どれほどの悦びを味わっていただけか分かりませんが、三十五才の飲食営業、小心者の私が、初めてお便りしました。

(名古屋・責 大造)

○ 初めてお便りいたします。二月号に投稿の南巷三様。貴方様は結婚を前提としてM女性をお探しのことですね。私は結婚歴は一度ありますが、今度また結婚するならば性百パーセントの方を望んでおります。貴方様は年を取り過ぎたと、お書きになつていらっしゃるようですが、おいくつぐらいなのでございますか？ 私は三十才でございます。またSとMと申しまして、好も、色々と性向もありますし、好みもあると存じます。私は奇くに登場してくる色々な責め、たとえば鞭打ち、浣腸、その他に、心が躍り、自分も責められたいと、いつも夢見ております。ただ私は、やはり精神的に信じ、安心して身も心もまかせられる方ではなくては

SとMの甘い一瞬	抱擁する美女二人
大手札三枚一組 略号△とさ▽	大手札三枚一組 略号△とや▽
松山・小池二嬢	ミキとマキ
縄に通う愛情の焰	柔肌と柔肌のレス狂態
大手札三枚一組 略号△とけ▽	大手札三枚一組 略号△とよ▽
マキとミキ	ミキとマキ
相愛の極致を描く二女	緊縛麗姿に映えるライト
大手札三枚一組 略号△とな▽	大手札三枚一組 略号△こほ▽
マキとミキ	佐々木真弓
鞭に狂う悦虐表情	臀部強調後手縛り
大手札三枚一組 略号△らて▽	佐々木真弓
関谷富佐子	羞恥に悶える全裸緊縛
鞭打ちにうねる肢体	大手札三枚一組 略号△こに▽
関谷富佐子	佐々木真弓
足吊りの被虐肢体	ホステスの緊縛姿態
大手札三枚一組 略号△らえ▽	大手札三枚一組 略号△こち▽
関谷富佐子	二つ折りて責める女体
美しきマゾの境地	大手札三枚一組 略号△こへ▽
関谷富佐子	佐々木真弓
裸後手柔肌縛り	脈打つ全裸の臨月腹
大手札三枚一組 略号△こよ▽	大手札三枚一組 略号△こふ▽
佐々木真弓	中河恵子
乳房強烈膨隆責め	臨月腹の革紐股間縛り
大手札三枚一組 略号△こわ▽	大手札三枚一組 略号△こや▽
佐々木真弓	中河恵子
海老責めに苦悶する	猿轡の臨月妊婦腹縛り
大手札三枚一組 略号△こお▽	大手札三枚一組 略号△この▽
佐々木真弓	卓上の股間縛り狂態
全裸の緊縛全身晒し	大手札三枚一組 略号△こそ▽
佐々木真弓	長井葉津子
煙草責めに喘ぐ女	羞恥の足挙げ責め
大手札三枚一組 略号△こぬ▽	大手札三枚一組 略号△これ▽
佐々木真弓	長井葉津子



# 次号(六月号)は四月二十五日に発売いたします

ならないと考えております。

(東京・折原千鶴子)

○ 大町市の吉沢頼子様。三月号のお呼びかけ、嬉しく拝見いたしました。私は三十五才になる松本市の商店主です。安曇平にも同好の方がおられるのを心強く思いました。お会いしてSM談を語りたと思います。また種々のコレクションをお見せしたいと思います。

(松本市・野田 進)

SとMの割合は、8・2ぐらいです。もし、よろしかったらM性の方を貴女によって目覚めさせて下さいませんか。

(大阪・荒井 一)

○ 大阪の中川堯子様。私は二十二才のSMマニアです。自慢じやないけど小柄ですし、貴女の近辺に住んでおりますので機会があればぜひ一度お会いしたく思います。貴女のような、すばらしい女性に私のような青二才が呼びかけても答えていただけないと思い、今日まで、とまどっておりましたが、ガマンできず、お便りした次第です。貴女は確か二十八才とか、私は二十二才です。今流行している「愛があるなら年の差なんて」のタイトル同様、愛を持ってプレイをしようではありませんか。私は

○ 魔子の肌を守る心構えが計らずも着衣下半身露出のエロチシズムを現出したことは、辻村氏の意図の有無にかかわらず僕を楽しませてくれました。あされる程よく続く「花と蛇」には最早や多くを望むものではありません。これは永い読者なら筆者をいたわる意味で休憩が必要と言わざるを得ないことがお判りのことという背景から述べるのです。何年もの間、地下牢で同じことを強制されたのでは絶世の美女も羞恥が消えるのは必定。不自然な物語展開が快楽の桎梏にあります。「花と蛇論」の寄生虫すら繁殖します。元教員という筆者の良識により「花と蛇」の終熄的發展を期してやまないのは僕一人ではないと思います。ところで港区の後藤さん、2月号4月号の通信楽しく、拝読しました。看護婦さんに浣腸レズの洗礼を受

け、そしていま後輩の彼女にお姉さまから教わったことを一生懸命彼女の身体に施し、彼女は貴女の責めを受けて泣いて悦びを表わしているようですが、完璧なまでに女性的な貴女に手記の発表を要請します。写真技術をもしお持ちなら僕は一層うれしくなります。貴女の通信記事から判断して僕を満足させてくれるものと考え、御迷惑とは存じましたが筆をとりました。僕は年令職業住所が貴女と同様同程度で趣味が一致(これは未確認)していることに親近感を覚えたものです。水田真紀子習作シリーズの健筆に敬意を表します。梨花という素敵な名のお嬢さんがおかっぱの少女に奉仕されるのは僕の理想の一つであり、その一層の進歩を望むものです。

(東京都田谷区・君田 徹)

○ 四月号の「花と蛇」では小生の最負スター京子が久しぶりに登場し、大いに喜んでる次第です。いくら待ってもお目当ての彼女が登場しないので小生はしびれを切らし、苦情まじりの駄文を草して投稿したところ、思いもかけず三月号に掲載され、その甲斐あってというわけでもないでしょうが、

いよいよ本格的なじゃじゃ馬ならしの責め場面が始まりそうな気配です。今後の新局面を楽しみにして待っています。しかも、まず浣腸を、というかねてよりの念願が実現されるとあっては、全く云う所なし。どうかこれを機会に鉄火娘京子をもっともっと活躍させて、静子夫人と対等にはりあえるだけの重鎮スターに昇格させてやってほしいものです。又、京子にしても、この折角のチャンスに逃すことなく、精一杯ハッスルし責め手の連中をきりきり舞いさせるくらいにじゃじゃ馬ぶりを発揮して、我々京子ファンの期待に応えてほしいと思います。団先生並びに京子嬢に重ねて切望して止みません。

(横浜・中山二郎)

○ 渡辺光雄・好美御夫妻様。奇ク四月号を開くと早速、夫婦SMプレイ雑感の記事が眼に飛び込んできました。貴兄並びに奥様の体験的日記は、私はどうしてこんな女に? 以来、辻村氏のSMカメラハント、奇クサロンなどで拝見、資料として製本するつもりで保管しております。奇ク誌中、どうしてもカメラハントやサロン、読者通信に眼が移るのはSM体験の真



実やマニア諸兄の赤裸々な声を聞くことが出来るからではないでしょうか。その中でも、貴兄の卒直な告白には常に心ひかれるものがあります。私も創作の中で、渡辺氏お得意の注射針による加虐を借用させて載いたこともあります。緊縛、流腸、蠟涙など閉鎖した嗜虐の世界について、御夫婦と胸衿を開いて語り合うことが出来れば幸いです。ぜひ一度、面談の機会を得た上で、終生のSM交友をお願いしたく、便りする次第です。

(睦月笛一郎)

私は二十三才、身長一七三センチ、体重六六キロ、青山の宣伝会社で写真助手をしているサド、マゾ両方をかねた男性です。早いもので、初めて書店で奇クを胸ふるわせて買った時から四年も経ってしまいました。手にしてから一番強く心を魅かれたのは、流腸責めについての体験記でした。この四年間にサド、マゾの女性とのプレイも数多く経験してきましたが、マゾ的な女性が多かったのが、サドの方の快樂が強く、マゾ的なプ

レイの快樂を体験したいと思えます。サド女性、または御夫婦の方で、マゾの快樂をお教え下さる人でしたら、年令、美醜は一切、問いません。勇気をお出しになってお呼びかけ下さい。

(東京・杉山武志)

私は二十六才になります独身の公務員であります。今回はじめて旅先で、本誌を買い求めました。そして、表紙より緊縛フォートの広告に至るまで、何度も何度も、読み返しました。特に「花と蛇」を

読んでいるときには、一人一人の女性に私の知るかぎりの女性をダブらせて、今まで経験したことのない感激の内に読ませていただきました。また大町市の吉沢様御夫妻のお便りを拝見して、胸がワクワクし、動悸を押さえることができませんでした。そして今までの何か後ろめたい気持が洗い流されるようでした。御夫妻には私の気持が御理解できないかも知れませんが、御夫妻の御友達として、また良き理解者になって頂きたいと思います。

(桑田保彦)

# 本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際はハ小包Vにて発送申し上げます。

昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----



△編集後記▽

○「SM小説など真に奇妙な」もので以てファンを桃源境に遊ばせしめる「SM作家というレッテルをはられた」団鬼六先生が、小説現代新春号に随筆風一文を発表されたかと思ふと、「アブニスト、ツジムラ・タカシ」が週刊サンケイ3・15号に「縛りの完成者」として「極めて名調子」の興に揺られて登場。○本誌ファンがいわれるところの「誌上の双壁」が、東西相競うように再び三たびとマスコミにひっぱり出されるといふことは、SMムード氾濫といわれる世相の反映といえはいるでしょうが、「SMなる性戯」が、こと新しく産み出されたものであるかのような錯覚に陥ったのは筆者だけでしょうか。

○いうまでもなく、古今東西を問わずアブ嗜好者の少なからぬ存在は事実のようですし、いつの世にあつてもそれが性に関連している事も動かせない事実でしょうし。それらの内の一部重症者に忌み嫌われて然るべき暴走があつたにしろ、SM愛好者が極端に罪惡視する風潮に圧せられ仮面に隠れようとしているのも、また事実なのでしょう。もし実際にSM人口が増したとしたら、それらの人々が仮面から顔を覗かせたに過ぎないのではないのでしょうか。いくら怠惰感・淫・世相だからといって好奇心だけで真似てみても、その性向のない者が陶酔出来ないだろうことは、何もSMに限った事ではありませんまい。ことさらな“流行”“急増”という語は、本末を顛倒しているように思うのですが……。

## 〔懸賞原稿募集〕

△體驗、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これは  
 と思う作品は必ず誌上に取り  
 上げます。腕試しの意味で奮  
 って御投稿願います。採用篇  
 には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、  
単行本或はその他見聞などで  
特に興味をお持ちになった事  
項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採  
 用篇には本誌三月分以上又は  
 二千円以上の賞金贈呈。  
 ◎御送付下さいました原稿は  
 原則として返却の求めに応じ  
 ないことになっております故  
 悪しからず御諒承願います。  
 ◎本文記事中に各種の「懸賞  
 原稿募集」を致しております  
 故、御応募の方は項目を御明  
 記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿▽

卷末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の葉 ☆

予約に限り

一月分(1冊)	三五〇円	送20円	▽
三月分(3冊)	一〇五〇円	送共	▽
半年分(6冊)	二一〇〇円	送共	▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

五月号  
(第二十五卷第五号)  
(通刊第二百七十九号)

昭和四十六年四月二十日印刷  
昭和四十六年五月一日発行

印刷發行

編集人 杉原 弘  
発行人 村田 俊  
印刷人 北原 稔夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番  
（昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可）  
（昭和四十二年四月二一日）  
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号）

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されないうち、充分に注意して編集したてており、ますが、本来成人向として発行を企図しており、り、関係上、十八才未満の方には絶対販売さらないよう、特にくれぐれも、お願ひ申し上げます。